SAKURA WINDS

Asker

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ＳＡＫＵＲＡ　ＷＩＮＤＳ

【Ｎコード】
Ｎ４８５９Ｅ

【作者名】
Ａｓｋｅｒ

【あらすじ】
島根県桜田市。合併によって人口が増え、２００７年４月、新しく高校が新設されることになった。その新設校の吹奏楽部での物語。部員たちはその活動の中で何を感じ、何を学ぶのだろうか。

プロローグ

「じゃ、最後にもう一回チューニングB♭お願いします！」
「はい！」
「3，4」
合図とともに一斉にB♭の音が鳴る。
チューニングはぴったり。全員がきれいに合った。
「OK！それじゃあ行きます！」
「はい！」
全員のさわやかな声がチューニング室に響く。
（これで最後か…）
彼はいつものようにステージから会場を見渡す。
ここから見るこの景色が好きだった。だから三年間部活を続けてきた。
ブザーが鳴る。
薄暗かったステージをライトが照らした……。

1話　入学式の朝

少し肌寒い朝だったが玄関のドアを開けると家の前の公園の桜の花が開いていた。
「晴れてよかった……」
西掛（にしかけ）　先斗（さきと）は、真新しい制服に身を包み家を出た。
先斗は今日から島根県立桜田中央高校の一年生なのだ。

「おはよ～！」
後ろから追いかけてきたのは幼馴染の中島唯（なかじまゆい）だ。
先斗と唯は幼稚園からずっとクラスが一緒で、今年もしクラスが同じだったら12年目となる。
「おはようさん。朝から元気だな～」
いつものように先斗は挨拶を交わす。
「だって入学式だよ？　高校生だよ！？　テンションあがるじゃん！！！」
「そうか？　俺はお前と組がかぶらないか不安だよ」
「それ毎年言ってない？」
「……かもな」

「よっ、おはよう！」
そこにやってきたのは中学からの友人の三上（みかみ）　庄吾（しょうご）。
庄吾と先斗達は中学からの仲で、彼もふたりと同じ高校に通う。
いつもは眠そうにしているが今日はさすがにすっきりとした表情だ。
3人は中学時代、同じ吹奏楽部に所属しており、先斗がチューバ、唯がアルトサックス、庄吾がトランペットを担当していた。3人とも高校でも続けたいと思っている。
「おはよ～。でも庄吾受かってよかったね～」

歩きながら話す3人。
「ああ」
庄吾は無理して桜田中央高校を受け、何とかぎりぎりで受かったのだ。後で先生に聞いたら２４０人中２３９番目の成績だったらしい。
「ついていけるのか？」
先斗がそう言ってからかう。
「大丈夫。進級できるようにするから」
「おい！」
さすがにその返しは想像していなかったようだ。先斗は思わずツッコむ。
「入学式の朝に言うセリフとは思えないね……」
唯も頭を抱えている。
唯も数学が苦手で受験前は相当勉強していたが、庄吾はそれに加えて英語も苦手。そのため受験直前はかなり精神的にヘビーな状態だったが、合格してそれは解消されたようだ。
先斗達の住んでいるあたりには高校がないため、電車通学となる。最寄り駅の東桜田駅から桜田中央高校のある桜田中央駅までは二駅だ。
「朝ってけっこう混むんだね……」
電車内で人に押されながら呟く唯。
東桜田駅はまだ人が少ないが、電車はもう満席だ。島根の私鉄でこれなのだから東京の山手線のラッシュ時はどうなるのだろうなどと先斗は考えていた。
「先斗。降りるよ」
「あ、ああ」

唯の声で我に返る。
いつの間にか桜田中央駅に着いていたので、先斗はあわてて電車から降りた。
桜田中央駅はターミナル駅でＪＲと私鉄の桜田線の二つの路線が通っているため、かなりの人が乗り降りする。
桜田中央駅から出て東に進むと商店街がある。朝だから開いている店はコンビニくらいしかない。
その商店街を抜け、少し先の公園の角を曲がり、桜が舞い散る少し長い坂を登れば桜田中央高校だ。

「やっと着いたな」
「結構遠いね～」
所要時間３５分。中学のときは家から学校まで１０分以内だったため、３人にはかなり長く感じた。

校門から向かって左右に校舎が見える。
「あれ？校舎二つあるぞ。受付ってどっちでやるんだ？」
庄吾があわてた様子で唯に聞く。
「え～っと、あ、あったあった」
唯が鞄からプリントを取り出した。
「校門から向かって右の新館で受付だって」
「新館？　新設校だよな、ここ」
「だよね？」
でも確かに右の校舎のほうが新しく見える。右の校舎は二階建てで横に広く、少し近代的な作りとなっているが、左の校舎は少し古ぼけている。築十数年は経っていそうだ。

「もうすぐクラス発表なので中庭で待っていてください」
新校舎の前で受付を済ませ、受付の人の指示で二つの校舎の間にある中庭に向かう。

そこには既にたくさんの新入生が集まっていた。
「早く張ってくれないかな……あ！　張り出された！」
唯がそう言ってすぐに先生らしき人がクラス表を張り出した。
「先斗！　クラス張り出されたよ！　見に行こ！」
「そんなに慌てるなよ。掲示なんて最初は混んでいてろくに見えないんだから」
「そっか～……。あ、そうだ。庄吾見てきて」
「あ、そうか」
先斗も納得したようにうなずく。
「わかった」
庄吾も言われることは分かっていたようでそのまま人混みに入っていった。

実は庄吾、身長１８８ｃｍとかなりの高さを持つ。
先斗も１７３ｃｍとそこまで低くはないのだが二人並ぶと、あの男性デュオのように見えるといわれる。

「しかし、庄吾は背～高いな。俺低くてへこむわ」
「先斗はまだいいじゃない。あたしなんか３０ｃｍぐらい差があるのよ？」
それを聞いて唯が呆れた様子で先斗をみる。
「お前は女だからいいだろ？」
「何よその言い方。それって男女差別じゃないの」
唯は眉を吊り上げて怒りだした。
「なんだよ？」
「なによ！？」
「ま、ま、落ち着けって」
そこに戻ってきた庄吾は慌てて二人を諭す。
「……そうね。クラスどうだった？」
唯が気を取り直したように庄吾に聞く。

「二人とも１－Ｂ。つまりお前ら、１２年目」
「マジかよ……。おまえは？」
「同じくＢ組」
「……まあ知り合いがいないよりはいいか。じゃあ教室行こう」
三人は新館に向かって歩き出した。

新館は二階建てで、昇降口は横開きのガラス戸だ。中の廊下はフローリング。もちろん床には傷ひとつない。
「やっぱり校舎きれいだね」
「そうだな。中学とは大違いだ」
先斗達が卒業した中学校は築２５年でもういろいろガタがきていた。そのため二人はピカピカな校舎をポカンとして見つめている。
「……感慨に浸っているのはいいけどな。そこ、邪魔みたいだぞ」
「「え？」」
気づけば廊下の真ん中に立っている二人。道を塞いでしまっている。
「……行こうか」
「……ああ」
三人は人の流れに乗って１－Ｂの教室に向かった。

2話　入学式、そしてフリーズ

午前１０時。
先斗たちは体育館の入り口で並んでいた。今から入学式が始まるのだ。
ドアが開き、新入生の入場が始まる。先斗たちもその流れに乗って体育館の中に入っていく。
この高校は新設校だからもちろん吹奏楽部はない。入場の音楽もＣＤのＢＧＭだ。
「なんか物足りないね。部活ってできるの？」
入場後、なぜか先斗の横にいる（ナとニだから当たり前だが）唯が聞いてきた。
「後で説明があるだろ」
そう返して先斗はまた前を向く。

式が始まった。
校長の話、来賓の話、新入生代表の挨拶。退屈な時間が過ぎる。
校歌斉唱もピアノ伴奏、退場もＣＤのＢＧＭ。
なんとも物足りない気持ちになりつつ、先斗たちは退場した。

退場してすぐに一年ホールに誘導される。
新校舎は二階建てだが、床面積が広い。
各学年ごとに教室は円形に固まっていてその真ん中はホールになっている。ここで学年ごとの集会などを行うらしい。
「静かに」
前方中央に年配の女性教師が立った。
「皆さん、入学おめでとうございます。学年主任の梶原（かじはら）　静香（しずか）といいます。私たちは皆さんの入学を心待ちにしていました……」
話が続くが、先斗はボーっとしていて半分聞き流していた。

しかしそれは周りも同じようで、中には船をこいでいる者までいる。

「では担任、副担任の紹介に移ります」

ここでやっと先斗は意識を前に向けた。先生たちが前に十数人並ぶ。

「A組担任、池田（いけだ）　内人（ないと）。担当教科は保健体育です」

大柄の男性教師がお辞儀をする。がっしりとしていて、まさにスポーツマンといった感じだ。

「副担任、仲里（なかざと）　紗香（さえか）。担当教科は数学」

若い女性教師が同じくお辞儀した。

つぎはいよいよB組だ。

「担任は私、梶原　静香です。担当教科は科学。理科総合Aを担当します」

先斗は何気なく視線を右に向ける。

（……え！？）

するとそこには見覚えのある顔があった。

「副担任は、西村（にしむら）　京（たかし）。担当教科は現代社会です」

なんと目の前に立っていたのは、桜田第一中学校吹奏楽部のOB、西村　京だった。

先斗たちとは七つ年が違うため接点はあまり多くなかったが、先斗達の家の近所に住んでいたので会うことは多かった。

「ちょ、西村先輩じゃない？……先斗？」

唯が先斗に声をかけるが、先斗は唖然としていて返事ができない。

「それでは最後に部活について説明します」

そこで先斗はやっと意識を取り戻した。

高校でも吹奏楽を続ける気でいるため、しっか聞いておかないといけない。

「現在創部が決定しているのは、野球部、サッカー部、卓球部、バスケ部、剣道部、柔道部、合唱部、美術部です。もし創部したい部活があれば、私のところまで来てください。なお、希望調査は明後日取ります」
「え？」
二度目の驚き。吹奏楽部の名前がない。
「ちょ、どういうこと？……先斗？」
唯が横を向くと、また反応できなくなっている先斗がそこにはいた。

3話　職員室、突入

今日は入学式だけなので、午前中で学校は終わる。
ＳＨＲ（ショートホームルーム）が終わるや否や、生徒たちは教室から出ていった。
先斗たちも本来はその波に乗って帰る予定だったのだが、少し都合が変わってしまったので、教室に残っていた。
「行くか？」
先斗が二人に問う。
「行こうか」
「そうだな」
唯と庄吾が返事を返し、三人は新館の一階にある職員室に向かった。

「「失礼します！」」
職員室はお昼時というのもあり、がらんとしていた。
高校には学食もあるらしいからそっちに行っているのだろう。
静香は弁当派らしく、ちょうど弁当箱を片付けているところだった。

「梶原先生。今よろしいですか？」
唯が代表して声をかける。
「なんですか？西掛君。中島さん。三上君」
静香が椅子ごと体を向けて答える。
「あれ？何で名前を？」
「梶原先生は担任だろ？知ってて当たり前だよ」
きょとんとした唯につっこむ先斗。
「あ、そっか」
「それもあるんだけどね。西村先生からさっき話を聞いていたのよ。たぶん相談に来るだろうからってね」

「西村先輩が？」

「西村先生だろ？」

後ろから声がした。

「「！？」」

声に驚き振り返ると、後ろに京が立っていた。

「先生。お久しぶりです。でも先生が教育学部に行っていたとは思いませんでした」

唯が代表で挨拶する。

「いや、高校の免許は教育学部に行かなくても取れるんだぞ」

「へ～。そうなんですか。先生って確か東京の大学行ったんでしたっけ？」

「ああ」

「で、何で吹奏楽部がないんですか？」

庄吾が軽く世間話に変わりそうな雰囲気から本題に戻す。

「それは私から話すわ。吹奏楽部を創部しなかったことに関しては二つ理由があるの」

静香が間に入って話し始めた。

「まず一つ目は生徒数の問題。この学校は新設校だから生徒数が少ないのはわかるわね？」

「「はい」」

桜田中央高校は現在６学級、つまり今日入学した２４０人しか生徒がいない。

「部活の数が多すぎると、各部の人数が少なくなって、活発な活動ができなくなる恐れがある。これが一つ目の理由。そして二つ目は、指導者の問題。本校の音楽教諭、朝倉（あさくら）　智子（ともこ）先生は大学では声楽とピアノを専攻されていたから今までの学校でも合唱部の顧問をやってこられた。だから吹奏楽の経験がないの。だから正式に器楽について勉強した先生がこの学校にはいないのよ」

「というわけで吹奏楽部の創部は見送られたわけだ」
京がしめる。
「あれ？楽器もないんじゃ？」
庄吾がふとつぶやく。
庄吾と唯はそれぞれＭｙ楽器を持っているが、先斗が中学時代に吹いていたチューバのような大型楽器はたいてい学校から借りることになるのだ。
「ああ、それか。……梶原先生。あれ、見せていいですか？」
「いいわよ。はい、鍵」
「ありがとうございます。じゃあ行くぞ」
静香から鍵を受け取り、先に進んでいく京に三人は慌ててついて行った。

4話　旧館の秘密

三人は京の後をひたすら着いていった。
新館から渡り廊下を渡り少し古い旧館に入る。

「せ、先生ぇ～」
唯が旧館の入り口で京に声をかけた。
「ん？なんだ？」

歩きながら答える京。
「何で旧館があるんですか？ここ、新設校ですよね？」
そこで京は振り返って足を止めた。

「お前ら知らなかったのか？」
「「はい」」

「何だ知らなかったのか。まあ結構前になるからな」
三人が口をそろえて答えるのを聞いて、京は頭をかきかき話しはじめた。

「そこの記念碑見てみな」
そこで始めて記念碑の存在に気づく三人。

「えっと。１９９４年８月、桜田西高等学校新校舎完成記念……。桜田西？」
庄吾が読み上げる。
「桜田西なんてあったっけ？」

桜田市内には高校が８校ある。私立は２校で、青南高校（せいなんこうこう）、彩稜高（さいりょうこうこう）

校。公立が桜田東高校、桜田女子高校、桜田商業高校、桜田農林高校、桜田工業高校、そして桜田中央高校だ。
桜田東はあるが、桜田西という学校はなかったはずだ。
「昔ここには私立校の桜田西高等学校があったんだが、２００１年の3月に閉校になったんだ。
でもその土地を桜田市が建物ごと買い取って、今年桜田中央高校として開校させることになった。立地がいいし、もとからあったこの旧校舎も比較的新しかったからな」
「どうして閉校になったんですか？」

唯が聞く。
「理事長が自殺したんだ」
「自殺……」
「ちょうど俺も志望校を決める時期でな。最初は桜田西に決めていたんだが、親に言われて仕方なく桜田東に志望校を変えることになった。その年の入学者は定員を大きく割って、その年の夏、桜田西は閉校が決まった」
「そうだったんですか……」
「まあ、お前たちが気にすることじゃないさ。じゃあ行くぞ」
そういって京は旧館の中に入って行った。

旧館は五年近く放っておかれた割にはきれいだった。三階建ての校舎全体を徹底的に大掃除をしたのだろう、リノリウムの床にはワックスがかけられていた。
階段を上がり、二階の奥にそれはあった。
「一応新館に新しい音楽室があるからこっちは第二になるんだ。」

京が説明する。
目の前には三つの扉があった。

前には音楽準備室、右には第二音楽室のプレートがかけられている。
そして左に何もプレートがついていないドアがある。
「先生、左は？」
「開けてみな」
そういって京は唯に鍵を渡した。
「じゃあ、開けるよ？」
「いいから早くしろよ」
庄吾に怒られた唯は、頬を膨らませながら、鍵を開けた。

5話　先生同士

「うわ、真っ暗……」
ドアを開くと、室内はカーテンが閉められて真っ暗だった。
「確か、スイッチは……。これか」
京が電気のスイッチを押す。
「うわぁ～！　すっご～い！！」
電気がついて楽器庫の全体が見えた途端、唯は歓声をあげた。
「ホントだ……」
「楽器が一杯だ……」
男子2人もついため息をついてしまう。

埃をかぶってはいるが、トランペットやチューバ、コントラバスなどがケースに入れられ、整頓されておいてあった。ティンパニやマリンバ、大太鼓などの打楽器にもクロスをかけてあるのが先斗の視界に入る。
「先生、どうしてこんなに？」
唯が振り向いて京に問いかける。
「どうやらあちらさん……理事長の奥さんは建物を早く売り払いたかったみたいでな。建物だけじゃなくて中のものまでほとんど市に売りつけたんだ。しかもかなりの格安で」
「もったいない。けっこういい楽器なのに」
ケースを見て庄吾がつぶやく。
サックスはヤナギサワやセルマー、トランペットはバックなど、結構有名なメーカーのものが揃っている。
「あちらさんは成金のお嬢さんだったらしいから金銭感覚がなかったんだろうな。一度も校舎に来たことがなかったらしいし」
「なるほど……」

「で、先生」
先斗はさっきからずっと気になっていたことを京に聞くことにした。
「なんだ？」
「先生も吹奏楽部創りたいんじゃないですか？」
「……なんでだ？」
「もし吹奏楽部創ることに反対なら、わざわざ楽器庫なんか見せたりしませんよね？」
「……分かっていたか。驚かせようと思っていたのに。」
「じゃあ」
唯が目を輝かせる。

「実はな、梶原先生と相談して１０人以上、お前らがいるからあと７人入部希望者を集めることができたら創部を認めようということになったんだ」
「でも顧問は？」
「俺がやる」
「ほんとですか！？」
庄吾が叫ぶ。
「最初は梶原先生がやると言っておられたんだが、思っていたより学年主任の仕事が忙しいらしくてな」
「梶原先生も吹奏楽経験があるんですか？」

京が桜田一中時代はトランペットを、東高ではバスクラリネットを担当し、さらに学年指揮を経験していたことを先斗は聞いていた。
「経験も何も、赴任して三年で弱小高だった東高を全国大会まで連れて行ったのはあの人だぞ？」
「マジですか！？」
「しかも三年間俺の担任だったし」

「「マジですか！！？」」

３人がハモった。静香が京の担任だったことにも驚いたが、そのふたりが先生同士、同僚になってしまうとは。なんという偶然だろう？

「先生わざとここに来たんですか？」

「違うよ。ちょうどこの学校ができて今年は採用数が増えるって言われて、地元に戻ったらちょうどここに回されただけだ。顔合わせで驚いたよ」

「へぇ～。そんなこともあるんですね……」

「まあそういう訳だから頑張れ。１０人集まったら俺の所来いよ」

「「はい」」

「じゃあ明日から勧誘だねっ！！！」

唯はテンションが上がりっぱなしで天まで飛んでいきそうだった。

「落ち着けよ」

「だってこれで部活できるじゃん！テンション上がるのはしょうがないよ～！！！！」

「お～い。閉めるから外出ろよ。」

京が声をかける。

「おい。出るぞ」

「ハァイ！！！！！」

楽器庫を出ても唯のテンションは下がらないようで京と別れても高いままだった。むしろ上がり続けているようで、スキップして歩いている。

先斗と庄吾は恥ずかしくて、少し離れて歩いていた。

唯が一足先に角を曲がった。

「ドン！！」
「きゃあ！？」
「どうした！！？」
ぶつかる音と悲鳴に驚き、先斗たちが急いで角を曲がると、唯と一人の女子生徒がひっくり返っていた。

6話　方向音痴

「だから言わんこっちゃない！ふたりとも大丈夫か？」
「あいたたた……。ごめんなさ……。弥生！？」
謝りかけた唯が叫ぶ。
「唯！　久しぶり～！　元気だった？」
「うん！　元気だったよ～！！！」
そして2人で勝手に盛り上がっている。
「盛り上がっているところ悪いんだが、その子誰だ？」
「あ、そっか。先斗知らなかったんだっけ。塾で一緒だった弥生よ」
「あ、思い出した！」
弥生の顔を見て、庄吾が手を打つ。
「一度塾の休憩時間に会ったな」
「そうだっけ？」
弥生のほうは庄吾のことを覚えていないようだ。
「ああ。話に夢中になっていて俺に気づいてはなかったみたいだけどな。ところでこんな所でどうしたんだ？入学式はとっくに終わってるのに」
「私食堂に行こうと思ってたんだけど……」
「思ってたんだけど？」
「迷っちゃって……」
「……」
「……そういえば初めて塾に行ったときにもトイレに行くって言ってからなかなか帰ってこなかったよね？もしかしてあれも迷ってたの？」
沈黙を破ったのは唯だった。
「……うん」
弥生はコクンと首を縦に振った。
「と、ところで唯達は何をしていたの？」

弥生が取り繕うように聞く。
「部活を創りたくて先生に相談してたの」
「へ～っ。何部？」
「吹奏楽部。あたしたち三人とも中学のとき吹奏楽部だったの。弥生は何部に入るの？」
「まだ決めてないの。中学校では合唱部だったけど高校では別のことやってみたいし」
「そうなんだ……」
「ねぇ、唯」
「なに？」
「吹奏楽部って初心者でも入れる？」
「うん。誰でも大歓迎だよ」
「じゃあ、私も入っていいかな？楽器、一回やってみたかったの」
「ほんと！？　やった！　四人目だ～！！！」
唯は喜びのあまり飛び跳ねた。
「「落ち着けって」」
先斗と庄吾が同時に唯につっこむ。
先斗は普通、庄吾は低めの声なので、綺麗にハモった。
「ハモらなくてもいいじゃない……」
それに唯は頬を膨らませるのだった。

「じゃあ改めて自己紹介だな。西掛　先斗です」
「三上　庄吾です」
「中島　唯です！よろしくね！」
「じゃあ私も！　中原中学校出身の有吉（ありよし）　弥生（やよい）です。よろしくお願いします！」
弥生がそう言った直後、なにやらグ～ッという音が聞こえた。先斗がそっと音のした方を見ると弥生が顔を赤くしている。
近くにある時計を見ると、一時を大きく回っていた。
「腹減ったな。ファミレスでも行こうか。弥生も行くか？」

聞かなかった振りをして話の流れを変える先斗。
「うん。行こうか」
弥生が賛同したので四人は食事に向かった。

7話　ファミレスにて

四人は学校を出て駅前のファミレスに入った。
「ご注文お決まりですか？」
店員が注文を取りに来る。
「俺は日替わりハンバーグランチで」
先斗は日替わりランチ（ハンバーグ、ライス、ドリンク＆スープバーで￥５２５）にした。
小遣い日までまだ日があるし、高校生になったから急な出費等もあるかもしれないからだ。
「じゃあ私はドリアにサラダセットを」
と、弥生。
これもドリア、サラダ、スープ＆ドリンクバーで￥６３０と安め。
それに対して、
「じゃあ俺はダブルハンバーグと大盛りライスとスープ＆ドリンクバーで」
と、高いメニュー（計￥１２４８）で攻める庄吾に、
「あたしはスパゲッティランチとドリンクバー」
あ、意外と普通…（スパゲッティとサラダ、スープ＆ドリンクバーで計￥７５０）
「あと、食後にケーキセットとチョコレートパフェね」
いや、普通じゃないぞと突っ込みたくなるようなデザートを頼む唯。
「か、かしこまりました」
少し驚いた様子で店員は去っていく。
「食えるのか？」
「デザートは別腹よ」
いつものことながら、呆れている先斗に、唯はベタな言い訳で返したのだった。

「あ～。満足満足」
「あんなに食ったんだ。当たり前だ」
庄吾の呟きに先斗がツッコミを入れる。
食後、ドリンクバーを飲みつつ、いろいろな話をした。それぞれの出身校の事、好きなものの事、家族の話など、話題は尽きない。
「そういえばなんでみんな中央に入ろうと思ったの？」
不意に弥生が尋ねた。
「弥生ストップ！」
唯が慌てて止める。
「え？なんで？」
「なんでも！」
慌てた様子で先斗のほうを見る唯。
「いいよ。もう吹っ切れたから。そんなに気を使わなくていいよ」
それを見て先斗はやんわりと返した。
「だって……」
「じゃあ俺からな。俺、本当は彩稜高校（さいりょうこうこう）に入ろうと思ってたんだ」
「彩稜？結構吹奏楽で有名よね？」

彩稜高校は十年ほど前から支部大会に出るようになり、一昨年、去年と全国大会に駒を進めている高校だ。
ただし、勉強のレベルも高く、倍率は2～3倍。
今年は例年よりも高い3，48倍だったという。

「うちの部からも何人か受けたんだけどな。俺だけ落ちちゃったんだ」
「そう……」
「もう気にしてないから。それより有吉は？」
沈んだ表情をする弥生に、先斗は微笑んで話題を振った。
「家から近いの。それに見学に行ったとき設備がよかったから」

弥生の出身校である中原中学校は桜田中央高校から１０分ぐらいの位置にある、各学年４クラスずつの中規模の中学校だ。吹奏楽部はあるが、小編成の部に出場している。
「ああ、全館クーラーついてるしな。パソコンも新しいの入ってたし」
「庄吾くんは？」
弥生に聞かれた瞬間、庄吾は言うのが嫌そうな顔をする。
「ほら、言いなさいよ」
唯があきれた様子で庄吾を見た。
「俺は普通高校で入れそうなのが中央しかないって言われて……」
庄吾の受験は正直博打（バクチ）のようなものだった。
何しろ主要教科の数学と英語が苦手ときている。
桜田市の私立は両方レベルが高いし、桜田東もレベルが高い。
桜田商業に普通科があるものの、女子ばっかりで肩身が狭い。
さらに、親は市内の高校にしろと言うため、新設校の桜田中央高校しか行くところがなかったのだ。

「そ、そう。唯は？」
「私は……ヒミツ！」
「え～っ。教えてよ」
「ヒミツったらヒミツ。さて、そろそろ帰ろっか」
「はぐらかされた…」
弥生が小さく呟いていじけていた。

その後、会計を済ませて弥生と別れた。中央駅から東桜田駅へ。
そこで庄吾と別れ、先斗と唯は二人で歩いた。
これまで十一年間、帰りはこうやって二人で帰って来た。
でも今日はなぜか落ち着かない。先斗の隣を歩く唯もなぜか話しかけてこない。

ただ、高校になってセーラー服から変わったブレザーを着て歩く唯が妙に新鮮に見えて、先斗はそれを横目で見ることしかできなかった。

唯の家の前に着いた。

「じゃあまた明日ね」

「ああ」

いつものように歩き出す先斗。

「先斗！」

呼び止める声に振り向く。

「勧誘頑張ろうね！」

「……ああ。頑張ろうな」

「じゃあね！」

「おう！」

手を振る唯に先斗は前を向いたまま手を軽く振り、帰路についた。

8話　我が家にて

「ただいま」
先斗は玄関のドアを開ける。
先斗の家は築十数年で５ＬＤＫの一軒屋だ。
地方だから土地も結構安かったらしい。
玄関を入って左にはトイレがあり、廊下は右に折れている。曲がって右手に客間、左手には洗面所と風呂。そして正面にリビングへのドアがあった。
リビングのドアを開けると、母親がエプロンで手を拭きふき出てきた。
「おかえり。遅かったわね。お昼は？」

先斗の母さん、名は小百合（さゆり）。１８歳のときに９つ年上の、拓郎（たくろう）と出会い一目惚れ。猛アタックの末、２０歳で出来ちゃった結婚でゴールインしてしまった。
顔はそこそこ美人で、友達にも言われるくらいだ。
ただかなりおしゃべりで先斗はよく話に付き合わされる。今の話も小百合から何度も聞かされてうんざりするくらいだった。

「唯たちとファミレス行ってた。飯いらない」
「もう！食べて帰るなら連絡しなさいって言ってるでしょ！全く……。もう海斗（かいと）も帰ってるわよ」
海斗は先斗の弟だ。先斗より一つ年下の中学三年生で、合唱部に所属している。
先斗とよく似ているといわれているが、先斗より身長が５センチ高い１７８センチもあり、初対面の人には海斗が兄だと勘違いされてしまうこともある。
そのたびに先斗は落ち込むため、周りはなるべくこの話題に触れ

ないようにしている。

「ごめん。部活のことも相談してたから」

「そういえば吹奏楽部なかったわね。どうするの？　市民楽団にでも入るの？　知り合いの長瀬さんが入っているところが人数が少ないらしいし高校生も受け入れてるって言うから紹介しようか！？」

「いや、入らないから」

小百合のマシンガントークに冷静に対応する先斗。

「え！？そうか…彩稜落ちたからもう吹奏楽はキッパリ諦めて勉強に励むのね！！　分かったわ！私パートに出るわ！　だから学費のことは心配せずに好きなだけ勉強なさい！！！」

「違うっての！　吹奏楽部創るんだよ！！」

「ああ、創るの。でも楽器はどうするの？」

「なんか桜田中央ができる前にあった私立の桜田西が理事長の自殺で潰れて元お嬢様の世間知らずの理事長の奥さんが建物とその中身ごと桜田市に売りつけたから結構いい楽器があるらしいから大丈夫らしいよ」

めんどくさいので先斗は一気に言い切った。

「そう。お父さん懐かしがってたわよ」

「へ？なんで？」

「あら、知らなかったの？お父さん桜田西の出身なのよ」

「そうなの！？」

意外な展開に驚く先斗。

「うん。この間も同窓会の手紙来てたわよ」

「へえ…」

「そういえばお父さんと出会ったのは…」

「俺上がるね」

話が長くなりそうだったので、先斗はそう言って部屋を出て階段を上がった。

「ちょっと！ちょっと位は聴きなさいよ！」

「同じの何回も聴かされてます～」
１階から小百合の声がするが、ひょうひょうと交わした。

二階には先斗の部屋、海斗の部屋、そして小百合と拓郎の部屋がある。
先斗は部屋に入って普段着に着替えた。
部屋にはフローリングの６畳に、ベッド代わりのロフトがある。
下のフローリングには勉強机と大きな本棚に小さな箪笥が並び、さらに二年前に両親の部屋のを買い換えたときにもらったお古のテレビとゲーム。先斗はマンガ好きなので、本棚の８割はマンガで埋め尽くされている。
机の上には中学のセクションで撮った写真を写真立てに入れて飾ってある。

「もうあれから1年か……」
先斗はそれを手に取った。スプリングコンサートの後に誰が言ったか分からないけど撮った写真。
真ん中でチューバを真上に持ち上げている先斗に、左にはコンバスの弓を振り上げている男子。その横にファゴットの女子がいて、右にはバスクラの女子とバリサクをもつ男子。そして真ん中でしゃがんでいるチューバとユーフォの女子が写っている。
「あいつら元気かな」
先斗は少しさびしそうに呟いて写真立てを机に置いた。
ロフトに上がって横になる。
いつの間にか眠くなって先斗は寝てしまっていた。

9話　朝の風景

先斗はふと目を覚ました。
小百合が消してくれたのだろうか、部屋の電気は消えていた。
枕元の時計を見る。
「3時17分！？」
またやってしまった。先斗はいったん寝付くとなかなか目を覚まさない。
ただ逆に起きるともう一度寝付くことができないのだ。いつも起きる時間まであと三時間以上ある。
「どうしよう……」
ロフトから降りてあるものが目に付いた。
「……ゲームするか」
結局最近あまりやっていなかったRPGをやることにした。
「あ～、レベルあげの最中だった…」
スライムを倒しているうちに日が昇ってくる。
「なんか不毛な時間だな……」
チャチャチャチャッチャッチャ～。
そうつぶやくと同時に、レベルアップの効果音が流れた。

「先斗、朝よ……ちょっと。朝からゲームなんてやってんじゃないの」
起こしに来た小百合がいきなり文句を言う。
「しょうがないだろ？3時に目が覚めちゃったんだから」
「またその癖？とにかく朝ご飯できてるからはやく降りてらっしゃい」
「はいはい」
小百合もその体質は知っているため、特に何も触れずに降りていった。

「さてと、準備するか」
しかしもう荷物は準備してあるし、制服もあと上着を着るだけだ。
「……降りるか」
先斗は部屋を出て台所に降りていった。

今朝の朝食はロールパンにスクランブルエッグ、サラダに紅茶だ。小百合は早起きな上、調理の専門学校を卒業しているので毎朝ちゃんとした朝食を食べることができる。

「ふ～。食った食った」
朝食を食べ終わって、先斗はリビングのソファに腰掛けた。
「出なくていいの？」
小百合が時計を見て聞く。
「唯達と待ち合わせしてるからもう少ししたら出るよ」
「最近、唯ちゃん元気？」
「ああ、元気だけど？」
「ならいいけど」
「じゃあ行くね」
小百合と唯はしゃべり友達だ。最近会ってないから気になったのだろう。
そう思い、先斗は気にせずにリビングを出た。

「ハァ……。あの二人どうなるのかしらね？」
先斗が出ていくと、小百合はふっとため息をつく。
「さあ？先兄と、唯さんの問題だし」
「いつ孫の顔が見られるかしら……」
「あのね、母さん。先兄たち、まだ15だって…」
先走る小百合に、海斗は深いため息をついたのだった。

「おはよ〜！」
待ち合わせ場所で待っていると唯がやってきた。
「おはようさん。唯、母さんが寂しがってたぞ？最近会ってないだろ？」
「え？一昨日、駅前で会って話したけど？」
先斗の言葉に首をかしげる唯。
「そうなのか？じゃあ何で母さんあんなこと言ったんだろうな？」
「そうだよね……」
「ファァ……。おはよう」
庄吾が眠そうにやってくる。
「どうしたの？」
唯が心配そうに尋ねたが、
「ゲームやってたら一時過ぎてて……ファァ」
庄吾はそう言ってまたあくびをした
「もう！心配して損した！あれ、先斗どうしたの？」
先斗は苦笑いしていたのを見られたので慌てる。
「な、なんでもない。それよりもう行かないと電車に遅れるぞ」
「あ、ほんとだ。行こうか」
「そうだな」
三人は駅へ向かった。

１０話　五人目の奏者

教室に入って先斗は横の席の田中（たなか）　拓也（たくや）と話をする。
拓也は桜田二中出身。少し気が弱そうにも見えるが、話をした感じは悪くない。
「西掛は何部に入るんだ？」
「俺は吹奏楽部」
「あれ、吹奏楽部あったっけ？」
「創るんだ」
「創る！？」
拓也は驚く。
「そうだよ。田中も興味があったら来てくれよ」
「ああ。実は俺の…」
そのときチャイムが鳴って、静香が入ってきた。
「はい、静かにして！」
そこで話は途切れた。

今日は初日ということもあり授業も四限まででレクレーションのようなものだけだった。
終礼で静香がこう告げた。
「昨日創部希望があった部がいくつかあったので知らせておきます。ＥＳＳ部、弦楽部、そして吹奏楽部です」
「やったね」
先斗の前の席の唯が振り向いて小声で言ってきた。
「まだ気が早いって」
と言いつつ先斗も軽くにやけている。
「じゃあ終礼を終わります。終礼後に中島さん、西掛君、三上君は西村先生のところに行ってください。じゃあ日直」
終礼が終わった。

「なんだろう？」
「まあ行ってみようぜ」
「そうだな」
３人はその足で職員室に向かった。

「「失礼します」」
職員室に入り、京の元に向かう。
「お、来たか」
そういう京の横には一人の女子生徒が立っていた。
「先生、その子は？」
「今日全クラスに部活の追加を知らせたら早速来てな」
「終礼の時言われたのにですか？」
早すぎる展開に思わず突っ込む先斗。
「ああ、何クラスかは朝礼時に言っていたからな。じゃ、自己紹介して」
女子が一歩前に出る。緊張しているのか、おびえているのか、少し肩がふるえている。
「さ、桜田四中出身で１－Ｃの坂根（さかね）　美香（みか）です。あの…」
「なに？」
唯が聞き返す。
「初心者でも大丈夫ですか……？」
「うん、もちろん。私たち以外にもう一人希望者がいるけどその子も初心者だから大丈夫よ」
そう唯が言ってあげると美香の表情は少し柔らかくなった。
「楽器の希望はあるか？」
庄吾が優しく聞く。
「はい！　あ、でも……」
「でも？」
「楽器の名前が分からない……」
「あ～……」

「先生」
見かねた先斗が先生に助けを請う。
「なんだ？」
「楽器庫の鍵貸してください」
「ああ、楽器選びか。いいぞ」
すぐに意図が分かったのだろう。京は頷いた。
「唯は弥生呼んできてくれ。ついでに楽器希望聞いておこう」
「わかった」
そういって唯が出て行く。
「ほれ、鍵」
京から鍵を受け取り、先斗達3人は旧館二階の第二音楽室へ向かった。

唯たちは先に来ていた。
「遅いよ～！」
「お前が早すぎるんだろ……」
「まあいいじゃない。今来た所なんだし」
怒る唯を弥生がなだめた。
「まあいいや。えっと、美香ちゃんだったよね？その楽器ってどんな形だった？」
「よ、横笛です」
美香が静かに答えた。
「それならたぶんフルートだね。楽器見せてあげるからこっちおいで！」
「はい」
唯は美香の手を引いて先に楽器庫に入っていく。
「じゃあ次は弥生だな。どうする？」
「う～ん…そういえば三人は何の楽器やってるの？」
「俺はトランペット」
庄吾が答える。

「そうなんだ。じゃあ先斗くんは？」
「俺はチューバ」
先斗が答えるが、
「チューバ？…どんな楽器？」
弥生は首をかしげる。
「……見てみるか？」
「う、うん」
「じゃあ俺らも中入るか…」
先斗は肩を落として先に中に入っていった。
「先斗くんどうしたの？」
弥生はあからさまに落ち込んだ先斗に首をかしげている。
「チューバのこと知らなかったから落ち込んでるんだよ」
「あ…悪い事しちゃったかな」
「気にするなよ。知らなくても不思議じゃないし。それに……」
「それに？」
「いまから知っていけばいいんだよ。吹奏楽のことも」
「……うん。そうだね」
「じゃあ俺達も入ろうぜ」
「うん！」
そういって二人も中に入った。

「うわっ、埃っぽい！」
入った瞬間、弥生が声を上げた。
昨日はあまり分からなかったが、楽器庫の中はかなり埃っぽい。
チューバケースは真っ白になっているし、打楽器にかけられたクロスの上にも埃が積もっている。
「何年も掃除されてなかったんだ、仕方ないさ」
庄吾がなだめる。
「掃除しようか」
美香にフルートを見せていた唯が言った。

「そうね」
弥生が同意する。
「え、有吉。楽器はどうするんだ？」
「こんなに汚かったら健康に悪いよ。掃除してからにしよう」
「分かった。じゃあ雑巾とバケツ……」
「はい」
いつのまにか美香が雑巾とバケツを持ってきていた。
「早っ！」
「じゃあやろうか」
「「はい……」」
やる気満々の女性軍に負けて、男性陣ふたりはしぶしぶ楽器ケースを拭き始めた。

「これは何ていう楽器？」
弥生が声を上げる。
ユーフォニウムのケースを拭いていた先斗が声のする方を見ると弥生はある本を広げていた。
楽器庫の奥には本棚がある。そこから持ってきたのだろうか。
「それ？クラリネットよ」
「あ、それバンドジャーナルじゃん」
庄吾が表紙を見て言った。

バンドジャーナルとは、吹奏楽のことについていろいろ書いてある月刊誌で、演奏会情報や楽器のワンポイントアドバイスなどが書いてある。さらに毎月一曲の楽譜が載っている素晴らしい雑誌だ。

「私、これ吹いてみたい！」
ページに写るクラリネットをみて、目を輝かせる弥生。
「じゃあ弥生はクラリネットで決定ね！」
そう言って唯は手を打った。

「うん！じゃ、掃除続けましょ」
「ＯＫ～」
「……女子ってすごいな」
「ああ……」
切り替えが早い女性陣に、男性陣は舌を巻くばかりだった。

数十分後、やっと楽器ケースがきれいになった。
「じゃ俺、雑巾洗ってくるな」
「俺も行く」
先斗と庄吾は雑巾とバケツを持って旧館の外の水道に向かった。
「水真っ黒だな…」
「ああ、部室の大掃除のときよりひどい」
「あれ？田中だ」
庄吾が少し先に立っている拓也を見つけた。
「あ、ほんとだ。お～い！田中！」
拓也は振り返る。
「お前ら誰だ？」
しかし、拓也は怪訝そうにふたりを睨む。
「おい。今朝、話をしたところだろう？西掛だよ。西掛先斗」
「西掛？あ、もしかして」
「もしかして？」
「ちょっと待ってろ」
そう言って拓也は新館のほうに走っていった。

11話　三つの叫びと三つ子

数分後。
先斗と庄吾はその場に立ちつくしていた。
「おい、先斗。お前ならどう突っ込む？」
不意に庄吾が聞く。
「ちょっと思いつかないな。お前は？」
先斗も冷静に答えた。
「そうだな……。あ、思いついた」
「奇遇だな、俺もちょうど思いついた。じゃあ同時に言ってみるか」
「じゃあ掛け声掛けるから。いっせ～の～で」
「「えええええええええぇぇぇぇぇ！！！」」
そしてふたりは叫んだ。

「いや、そこまで叫ばなくても…」
拓也が突っ込む。
「そうだよな」
と拓也が返す！
「そうよね」
と、一緒に現れた二人と顔立ちが似た女子が同意した。
でも普通は驚くだろう。目の前にそっくりな（！）男子二人が立っているのだから。
「でも双子だったとはな…」
「双子じゃないよ？」
先斗が呟くと女子が返した。
「え？」
「私も兄弟よ」
女子が答えた。
「ってことは…？」

「「三つ子だよ」」
と三人が同時に答えた。
「「えええええええええぇぇぇぇぇ！！！」」
そしてまた二人は叫んでしまった。

十分後、やっと落ち着いた先斗はあることを思い出した。
「そういえば、朝何か言ってたよな？」
「ああ、こいつが中学の時吹奏楽部だったからそれを言おうかと思って」
そういってもう一人の拓也を指差した。
「田中（たなか）　龍也（りゅうや）だ。二中でホルンをやってた」
「あたしは田中　ひかり。同じく二中出身よ」
龍也とひかりが自己紹介する。
しかし拓也と龍也はよく似ている。区別することは正直無理だろう。
「龍也。いきなりだが吹奏楽部に入ってくれないか？経験者が入ってくれると助かるんだが…」
庄吾がオファーをした。
「もちろん。そのつもりで旧館に向かっていたからな」
「ありがとう。あ、あとの2人はどうだ？」
庄吾は笑顔で2人の方を向く。
「初心者でもいいなら俺は入るよ。ひかりはどうする？」
「そうね……。吹奏楽ってドラムある？」
ひかりが聞いた。
「ああ、パーカッションとしてだけどな」
「じゃあ入ろうかな。軽音部ないし」
「ドラムやってたのか？」
「うん。中二の時、少しだけだけど」
「ドラムだけじゃなくていろんな楽器やる必要があるけどいいか？」
「いいわよ。ジャンルが違うなら使う楽器が違って当たり前だもの」

思っていたよりもすんなりいって心配したが、ひかりがそう返したので先斗も少し安心したようだ。
「じゃあ龍也がホルン、ひかりはパーカッション（※1）な。拓也は中で楽器決めよう」
そう言って先斗は3人を楽器庫に連れて行った。

「あれ？その子誰……え？」
楽器庫に入った先斗たちに弥生が声をかけたが拓也と龍也を見て言葉を失う。
「で、この三人は入部希望者？そのふたりは双子でしょ！？」
テンションの上がった唯が支離滅裂な言葉を発する。
「いや。三つ子だとさ」
と先斗が答えると案の定、
「「えええええええええぇぇぇぇぇ！！！」」
と、唯、弥生、美香による本日三度目の叫びが楽器庫に響く。
「耳いてぇ…」
さっきよりも高い叫びに、龍也たちは耳を塞いだのだった…。

11話　三つの叫びと三つ子（後書き）

※1　打楽器のこと。

１２話　無人の教室で

４月１１日（水）。
今日はとうとう部活動希望調査の提出の日だ。
現在の入部希望者は八人。
フルートが美香、B♭クラリネットが拓也と弥生、アルトサックスが唯、トランペットが庄吾、ホルンが龍也、チューバが先斗、そして打楽器にひかりだ。
あと二人入部してくれれば活動ができる。

「おはよ～！」
「おはよう」
待ち合わせ場所に唯がやってくる。今日は珍しく庄吾も二番目に来ていた。
「おはようさん。とうとう今日だな」
「そうだね」
「あと二人か……。できれば中低音が欲しいとこだけどな」
庄吾が呟く。

中低音の楽器は高音楽器のフルートやトランペットと低音楽器のチューバなどの橋渡しをしてくれる。　今のところ中低音の楽器といえるのは龍也のホルンのみ。中低音の楽器が無い演奏はまるで薄いカルピスのようでなんだか物足りない。
とりあえずトロンボーンかユーフォニウム、もしくはテナーサックスの奏者が一人ずつくらいはほしいところだ。
「じゃ、行こうか」
あせっていてもしょうがない。まずは授業を頑張ろう。
先斗はそう思いながら、二人を促した。

「今日は四限に部集会があるので部活に入部する人は各部室に行ってください。運動部は部活棟、美術部は新館二階の第一美術室、合唱部は新館二階の第一音楽室、弦楽部は新館一階の視聴覚室、吹奏楽部は旧館二階の第二音楽室、ＥＳＳ部はＯＣ教室です」

朝礼で静香がそう告げた。

今日から授業も少し本格化してきた。授業は今日まで午前中だが、明日からは６時間授業が始まる。

一限はライティング。

「私がライティング担当の牛尾です。この時間は英語の文法について学びます。早速ですが授業に入ります」

そう言って牛尾先生は黒板のほうを向く。

先斗たちは慌ててノートを開き、筆記用具を取り出した。

淡々と授業が進み、あっという間に終わる。

「次の時間から小テストするので今日やった範囲を復習しておいてください」

そういって牛尾先生はあっという間に去った。

行動が早い。

……分からないところを質問する暇も無かった。

「小テスト…」

庄吾が机に突っ伏す。

「勉強すればいいだろ」

「英語は見るだけで頭痛がする！」

そう返され、先斗はあきれてものも言えなかった。

二限は仲里先生の数学。そして三限は京の現代社会だ。

「現代社会担当の西村です。実は大学を卒業したばかりなのでこの時間が初授業です。お手柔らかにお願いします。じゃあ授業始めます」

少し緊張している様子で授業を進める京。

チャイムが鳴る。

「じゃあ終わります」

何とか無事に終わったようだ。

「じゃあこのまま部集会行って下さい。場所忘れた人は前にプリント張っておくから見て。部活に入部する気が無い人は教室か図書室で自習」

「「はい」」

京の指示に教室をみんなが出て行く。

B組は全員が部活に参加するようだ。

「あ、俺トイレ行ってから行くから先行っといて」

教室を出たところで庄吾は先斗たちにそう言った。

「遅れないでよ？」

「はいはい」

庄吾がトイレから出るともうホールに人影はなかった。

「さてと。急ぐか」

トイレは一番奥にあるので、学年ホールを通り抜けなくてはいけない。

「誰もいないな…」

1ーAから1ーEまでは無人だった。しかし、

「あれ？」

1ーFのクラスに誰かがいた。

「……慶太」

「……庄吾か」

本を閉じて振り向いたのは庄吾と同じ小学校に通っていた進藤慶太だった。

当時より身長は大分高くなっていたが、顔だちは当時と変わらない。

「どうしたんだよ？バスケ部じゃないのか？」
慶太は小学5年生からバスケットボール部に所属していた。桜田中央高校にもバスケ部は創設される予定だったから不思議そうに庄吾は尋ねた。
「中3の大会直前で足故障して激しいプレーが出来なくなった。だからバスケ部は入れないんだ……」
慶太は悲しそうにそう告げた。
「……じゃあ、部活はなにも入らないのか？」
それを聞いて庄吾は驚きつつもそう呟く。
「小5から部活はバスケ一筋だったからなにも思いつかなかったな……。庄吾は吹奏楽続けるんだろ？」
「あ、ああ。今から部集会行くところ」
「そっか……」
「……あ、あのさ。慶太」
庄吾はそこで思い切ったように口を開いた。
「なんだ？」
「どうせなら吹奏楽やってみないか？三年間何もしないのはもったいないと思うし」
「え？　……でも俺ベース譜しか読めないぞ？」
「タブ譜読めるならすぐに読めるようになる」
「初心者でもいいのか？」

高校から吹奏楽をはじめる人は大抵そう聞く。でも高校から始めた方が頭を使って吹けるから伸びる場合が多い。小学校や中学で変な癖がつくと後々伸びに限界が出てくる。でも高校は経験者が多いこともあり、周りに指摘されるので癖はつきにくいのだ。

「ああ。もちろん」
そう言って笑顔で頷く庄吾。
「じゃあ、吹奏楽入るわ。庄吾」

「なんだ？」
「……ありがとう。よろしくな」
「こちらこそ。ははっ」
なんか照れくさくてつい笑ってしまう。
「笑うなよ……。まあらしくないけどさ、じゃあ部集会行くか」
「ああ。ってあと二分しかないぞ！？」
ふと時計を見ると、もう１１時４３分だった。
「走るか」
「足、大丈夫か？」
心配そうな庄吾。
「全力じゃなければ大丈夫だ」
「じゃあ急ごう」
ふたりは旧館へと急いだ。

１３話　始動！

庄吾は慶太を連れて二分遅れで第二音楽室に入ってきた。
「遅いよ～！」
唯が文句を言う。
「悪い悪い。こいつ説得してたら時間が掛かっちまって」
「もう……。じゃあ先生始めて下さい」
「分かった。じゃあ部集会を始めます」
京が前に立つ。
先斗は一番後ろに座っていた。後ろからそっと人数を数える。
「オッシャ！」
そして小さくガッツポーズをした。１３人いたのだ。
１０人以上のノルマがクリアできた。
「西掛。うれしいのは分かるがもう少し静かに喜んでくれ」
「……はい」
心で喜んだつもりが口に出ていたようだ。
先斗は顔を赤くして返事をしたの。

「じゃあ一人ずつ自己紹介してくれ」
京の指示で自己紹介が始まる。
唯、弥生、庄吾、先斗、美香、龍也、拓也、ひかりと自己紹介をして次は慶太の番だ。
「進藤　慶太です。桜田南出身です。初心者ですがお願いします」
慶太も庄吾と同じく背が高い。１８４、５センチくらいはあるだろう。
次は大柄の女子。
「えっと、桜田北中出身の倉橋（くらはし）　加奈子（かなこ）です。中学時はバレーボールやってました。よろしくお願いします」
次は少し色が黒い小柄の男子だ。スポーツ刈りというのだろうか

？なんだかスポーツをやっていた感じに見える。
「竹原（たけはら）　優樹（ゆうき）です。三中では野球部にいました。よろしくお願いします！」
次はすこしひょろりとした男子。無口のようで、言葉少なに挨拶を済ます。
「…愛媛県出身の黒田（くろだ）　匠（たくみ）です。中学ではユーフォメインで吹いてました…」

そして最後に女子。明るい感じで唯に雰囲気が似ている。
「中原中出身の吉岡（よしおか）　奈津美（なつみ）です！　中学の時はバトミントン部にいたんですが、
有吉さんの紹介でこっちに来ました。よろしくお願いします！」
「とりあえずパートを決めようか。黒田はユーフォでいいか？」
「はい」
京の質問に匠が答える。
「じゃあ進藤と倉橋、竹原、吉岡は楽器庫で楽器を決めよう。そうだな……。西掛、中島、三上、手伝ってやってくれ。残りの人はちょっと待っていてくれ」
「「はい」」
十三人の声が音楽室にこだました。

「やってみたい楽器がある人は？」
京が聞く。
楽器庫は掃除したから結構きれいになっている。
「はい！あたしはサックスに興味があります」
奈津美が手を上げる。
「じゃあ中島、一緒に見てやってくれ」
「はい」
そういって唯は奈津美を連れてサックスの楽器棚のほうに向かう。

「倉橋は手が長いな」
「バレーでは前衛やってました」
「そうか。希望はあるか？」
「金管楽器をやってみたいです」

金管楽器とは単に金属でできている楽器という意味ではない。それで定義するとサックスやフルートなども金管楽器となってしまう。マウスピースと言う筒に唇の振動を伝わらせて、それを息と楽器で増幅させて音にする。ちなみに木管楽器はリードと言う竹を息で振動させてそれを楽器で増幅させる。ただフルートとピッコロだけは息を楽器に吹きこんで音を出す。

「腕も長いし、トロンボーンなんてどうだ？」
「どんな楽器ですか？」
「見てみるか？」
「はい！」
京はトロンボーンの楽器棚に加奈子を連れていった。

「慶太はどれをやってみたいんだ？」
庄吾が聞く。
「そうだなぁ……。あ、あれかっこいいな」
慶太が指差すほうを見ると唯がバリトンサックスを出していた。
「じゃあ唯に見せてもらってこいよ」
「ああ。行って来る」
そういってサックスの棚のほうに向かう。
「竹原はどんな楽器がしてみたいか？」
「え～っ……。トランペットと打楽器ぐらいしか知らないよ……」
残された優樹は慌てている。

「そういえばどうして吹奏楽部に入ろうと思ったんだ？」
先斗が聞く。
「中学の野球部ではずっと補欠だったから、高校ではちょっと無理かと思ってて。その時テレビで甲子園見てたらちょうど応援の様子が写って！」
少し興奮した様子で話す優樹。
「それで吹奏楽に興味を持ったと」
「そういうこと」
「じゃあトランペットか打楽器がいいんじゃないか？」
「はい。じゃあちょっと両方見てみるか？」
そういうと、先斗達は優樹をトランペットの棚に連れて行った。
どうやら全員順調に楽器を決められそうだ。

十五分後。全員一応楽器を決めることができた。

フルート　坂根　美香
B♭クラリネット　有吉　弥生　田中　拓也
アルトサックス　中島　唯
テナーサックス　吉岡　奈津美
バリトンサックス　進藤　慶太

トランペット　三上　庄吾
ホルン　田中　龍也
トロンボーン　倉橋　加奈子
ユーフォニウム　黒田　匠
チューバ　西掛　先斗
パーカッション　田中　ひかり　竹原　優樹

計　13名

「じゃあ今日から部活動開始としたいんだが……いくつか決めておかないといけない事がある」
「なんですか？」
弥生が聞く。
「まず部長を決めなくてはならない」
「あ、そうか」
「どうやって決めようか？」
「投票は？」
「だってそれぞれのことあまり知らないぞ」

ざわざわとみんな話し始める。
「はいはい、静かに！立候補はあるか？」

「…はい！」

京の声で静まった教室に唯の声が響く。
「中島か。俺は反対しないがみんなどうだ？」
まず弥生が拍手する。全員が拍手するまでそう時間はかからなかった。
「じゃあ部長は中島に決定。中島、挨拶してくれ」
「え？　いきなりですか？」
「無理か？」
「……大丈夫です」
唯が前に立つ。
「部長に立候補した中島　唯です。頼りない部長だと思いますがよろしくお願いします！」
そういって深々とお辞儀した唯にまた大きな拍手が起こった。

１３話　始動！（後書き）

やっと十三人が揃いました。
いくつか追記しておきます。
・ユーフォとはユーフォニウムの略です。
・パーカッションとは打楽器のことです。

金管楽器と木管楽器の違いについて書きましたがなにか間違っていたりしたら教えてもらえるとうれしいです。

１４話　場数（前書き）

この話の中に吹奏楽コンクールの話が出てきますが、吹奏楽コンクールについてはコラムＥとして、一月中に掲載します。

１４話　場数

あれから二週間がたった。今日は土曜日。午前練習だ。
四月も後半に入り、みんな少しずつだが音が出せるようになってきた。

まず美香。頭部管（フルートの口を当てるところ）で音が出て、楽器でも1オクターブくらいは出せるようになったらしい。今は教則本に載っている簡単な練習曲を吹いている。時々、梶原先生も見に来てくれている。先生も学生時代フルートを吹いていたらしい。

次に拓也、弥生、奈津美、慶吾。リード楽器の四人は主に京と唯からの指導を受けている。
京は中学時代にトランペット、高校時代はB♭クラリネットとバスクラリネット、そして大学でファゴットの経験があるため、木管も金管も指導ができるのだ。

加奈子は匠につきっきりで見てもらっている。匠の出身中学は小編成だったらしく、必要に応じてトロンボーンにも持ち替えていたらしい。ポジショニングは覚えたので、今はそれを正確に動かすことを目標としている。

そしてひかりと優樹。ひかりはドラムの経験があったが、まずは基礎からと言うことで二人で基礎打ち（練習台を叩いてリズムや、左右の叩き方をそろえる練習）をしている。

そしてのこった金管の三人は……。

「じゃあ次は音階」

「「はい」」
三人で基礎練習をしていた。今日は庄吾が練習を仕切っている。
「ＦＤｕｒから半音ずつ上がっていって」
「「はい」」
ＦＤｕｒとは、ピアノのファの音から始まる音階で、ファ、ソ、ラ、シ♭、ド、レ、ミ、ファ
と上がっていく。
メトロノームに合わせて音階を吹く三人。
「下のＦと上のＦの音程がずれてるので気をつけてください」
「「はい」」

トントン。

音階を吹いて気になったことを指摘していると、ドアがノックされた。
「どうぞ」
庄吾が返事をすると唯がドアを開けて入ってきた。
「ミーティングの時間だから部室に来て」
「分かった」
三人は楽器を片付けて部室となっている楽器庫に向かった。

「え～っと。今日はいくつか大事な話があります」
全員が部室に集まってすぐに京が話し始める。
「まあ大きく分けて三つだな。一つ目は文化祭のこと」
「文化祭？」
「ああ。本当は六月に文化祭を行うことになっていたんだが、今年はまだ準備できそうに無いってことで、文化部と有志の発表だけで済ませることになっているんだ」
「ってことはじゃあ……」
唯が目を輝かせる。

「そう。文化祭が吹奏楽部の初ステージとなります！」
その声に部室内が沸く。

「曲は？」
「それもみんなで決めてもらいます」
「でも、楽譜があるんですか？」
匠が心配そうに聞いた。

今部員は１３人。各パート一人か二人だ。吹奏楽の楽譜は大体パート数が

・ピッコロ１
・フルート２（たまに３）
・オーボエ（オプションのこともある）１ｏｒ２
・バスーン（オプションのこともある）１ｏｒ２
・Ｅ♭クラリネット１
・Ｂ♭クラリネット３
・アルトクラリネット（オプションのこともある）１
・バスクラリネット１ｏｒ２
・アルトサックス２
・テナーサックス１ｏｒ２
・バリトンサックス１
・トランペット３ｏｒ４
・ホルン２〜４
・トロンボーン３
・ユーフォニウム１ｏｒ２
・チューバ１ｏｒ２
・コントラバス（オプションのこともある）１
・パーカッション１〜Ｘ（パーカッション１人の曲もあれば１０人近く必要な場合もある）

と、かなりパート数が多い。さらにクラリネットなどは同じパートを複数人で吹くから人数はもっと多くなる。
小編成用の楽譜として1～2パートずつになっている譜面もあるものの、それでも桜田中央の編成には足りない。
「ああ、それなら大丈夫だ。編曲してもらうから」
「誰にですか？」
「知り合いに編曲専門の人がいる。もちろん仕事としているから編曲の許可を取ってやってくれる」
「じゃあ安心ですね」
匠がほっとしているように見えた。後で聞いた話だが中学のときやっぱり楽譜で苦労していたらしい。
「次二つ目な。コンクールのことだ」
全員が一気に緊張した顔をする。
「先週、県の吹奏楽連盟に登録してきた。コンクールに出場することにしようと思う」
「ちょ、ちょっと待ってください」
いきなりな展開に優樹が叫ぶ。
「そうですよ。俺達まだ楽器吹き始めて二週間ですよ？」
拓也も慌てている。
「ふたりとも落ち着け。とりあえず話を聞こう」
龍也が静かに言う。
「じゃあ話すぞ？確かに人数も少ないし経験も浅い。でもだからこそ場数は踏んでおいたほうがいい」
「場数？」

「吉岡。合唱の大会で一番緊張したのはいつだ？」
「えっ？そうですね……。一年生の時です。学年が上がるごとにだんだん慣れていった気はします」
急に話しかけられた奈津美は、驚きながらも答える。

「じゃあ緊張が少なくなったのは何でだと思う？」
「……歌が上達したのと、本番を多く経験したから」
「そうだよな？それに本番で学べることもいっぱいある。どうだ？出てみないか？曲はいくつか候補を絞ってあるから今度聞かせられるが」
「……」
楽器庫が静かになった。みんな考えあぐねているのだろうか。

「出ようよ」
ひかりがみんなに声をかけた。
「音楽って人に聞いてもらうために演奏するんじゃない？コンクールに出たらたくさんの人に演奏を聞いてもらえるでしょ？」
「そうだな。それに中学生は四ヶ月でコンクールに出るんだろ？なら同じじゃんか」
慶太が口を開く。
「慶太、よく知ってるな」
庄吾が驚いたように言う。
「うちの弟も吹奏楽部入ってるんだよ。しかもバリトンサックス」
「マジで！？」
「ああ。弟に負けてられない」
そう言ってほほ笑む慶太。
「部長。……どうしたい？」
京が唯に聞く。
「出たいです」
きっぱりと言い切る唯。
「じゃあ出るってことにしていいか？竹原、田中」
「「はい！」」
二人が大きな声で返事をした。
「よし！じゃあコンクールの曲は週明けにでもみんなで聞いて決めるから楽しみにしておいてくれ。最後に来週末の話だ。日曜の午後

に桜田商業高校のスプリングコンサートがある」
桜田商業高校は大編成で、最近は県大会で金賞を受賞している。
「部活は一応休みだが、それを部員全員で鑑賞しようと思っている。何か用事のある人はいるか？」
「ないで～す！」
奈津美が元気に言う。
「じゃあ午後一時に桜田市民ホールに集合な。話は以上だ。じゃあ明日までに文化祭でやる曲を決めてくれ。決まったら頼んでおくから」
「「はい！」」
全員の声が楽器庫に大きく響いた。

１４話　場数（後書き）

次回はコラム。今回は木管楽器です。
お楽しみに。

コラムＡ　木管楽器（前書き）

ここでは本編を少し離れて吹奏楽に関するコラムを書いてみようと思います。
もちろん読まなくても話の展開には支障はございませんのでスルーしても構いません。

コラムＡ　木管楽器

コラムではしばらく吹奏楽に使われる楽器について紹介します。今回は木管楽器。

木管楽器の発音方法は、一枚のリードを息で振動させて、楽器で増幅させるシングルリード（クラリネット、サクソフォン等）、二枚の合わさったリードを振動させるダブルリード（オーボエ、ファゴット等）、空気の流れを楽器の吹き口の角に当てて発音するエアーリード（ピッコロ、フルート等）の三つがあります。

木管楽器の強みは、その機動性にあります。細かい動きもお手の物です。

○ピッコロ（Ｐｉｃｃｏｌｏ）

吹奏楽で使われる楽器の中で一番高音を出せる楽器です。高音が出るので小さい音でもよく通ります。大体のものが木製で、フルート奏者が持ち替えることが多いです（専属の場合もあり）。ソロが有名な曲は、『行進曲「星条旗よ永遠なれ」』など。また最近の吹奏楽コンクールの課題曲でもよくピッコロのソロが使われています。

・マーチ「春風」（２００５年？）
・コンサートマーチ「光と風の通り道」（２００７年？）
・迷走するサラバンド（２０１０年？。最後のどソロです）
・汐風のマーチ（２０１０年？）

また、オーケストラからの編曲作品ですが、『第六の幸運をもたらす宿』には3楽章にスネアドラムとピッコロだけのソリがあります。

○フルート（Ｆｌｕｔｅ）
　金属製、もしくは木製で鳥の鳴き声のような音がします。アルトフルート、バスフルート、コントラバスフルートと呼ばれる音域が低いものもあり、先に述べたピッコロを含めたフルートの同属楽器で構成したフルートアンサンブルやフルートオーケストラがあります。
『第六の幸福をもたらす宿』や、課題曲の『セリオーソ』（２００８年？）、『天馬の道～吹奏楽のために』（２００８年？）などにソロがあります。
（ダブルコントラバスフルートなんてものも見つけました。チューバやコントラファゴットの音域が出て、かつ金管数本分の音量が出せるそうです。）

○オーボエ（Ｏｂｏｅ）
　哀愁あふれる独特な音がします。木管楽器の中で自分が一番好きな楽器です（笑）。
　その独特の音色のためソロも豊富にあります……が、ギネスに登録されるほど難しい楽器らしく、小編成の学校では省かれてしまう場合もあります。
　『朝鮮民謡の主題による変奏曲』、『伝説のアイルランド』、『アルメニアンダンスパート？』などにソロがあります。
　課題曲では『憧れの街』（２００７年？）、『架空の伝説のための前奏曲』（２００６年？）などにソロがあります。

・イングリッシュホルン
　オーボエより少し低い音域まで出せます。主にオーボエ奏者が持ち替えます。
　吹奏楽ではオーケストラを編曲した曲などで使われます。

○ファゴット（ｆａｇｏｔｔｏ）
　オーボエと同じく独特な音がします。時にはこっけいな感じな部分で使われることもあります。作者が現在担当している楽器です。
　運指が難しく、左手の親指では計１１個のキーを操作するので慣れるまでは時間がかかります。
　ソロは、『交響曲第３番』、『華麗なる舞曲』、『オズの魔法使い』などにあります。

・コントラファゴット
　ファゴットより一オクターブ低い音が出せます。
　かなり大きく、管も長いです。（６メートル近く）そのため管が四回折り曲げられています。

○クラリネット（Ｃｌａｒｉｎｅｔ）
　吹奏楽でなくてはならない楽器です。（全部の楽器がなくてはならない大切なものですが）
　ソロ、旋律、伴奏なんでもありです。種類もたくさんあります。

・Ｅ♭クラリネット
　吹奏楽で使われるクラリネットで一番高い音域を担当します。通称はエスクラ。ソロは『ネストリアン・モニュメント』（２００９年課題曲？）にあります。

・Ｂ♭クラリネット
　標準的なクラリネットで、たぶんバンドの中で人数の比率が一番高いです。
１ｓｔ、２ｎｄ、３ｒｄの三つの声部（それ以下やそれ以上の場合もある）が見事にハモると、とても
美しい響きを生み出します。通称　並クラ、ベークラなど。

・アルトクラリネット
　B♭クラに出せない少し低めの音域から、標準的なB♭クラの音域まで出せる楽器で楽器間の受け渡しをしてくれる楽器です。この楽器があるのと無いのでは音が大きく変わります。（演奏しててそう感じました）ただオプション（省いてもよい音）とされてしまう場合も多く、大編成バンドでないと導入しづらいのが現状です。
　またこの楽器からベルが前に向くようになり、金属製のベルが付けられます。

・バスクラリネット
　クラリネットの中で低音域を担当する楽器です。通称はバスクラ。他のクラリネットに出せない低い音域の響きが魅力です。
　『呪文と踊り』にオイシイ旋律がたくさんあります。

・コントラアルトクラリネット
　大編成やアンサンブルの曲でよく使われます。管が長く、アルトクラリネットよりさらに一オクターブ下の音が出せます。

・コントラバスクラリネット
　大編成やアンサンブルの曲でよく使われます。管が長く、バスクラリネットよりさらに一オクターブ下の音が出せます。

・オクトコントラアルトクラリネット
・オクトコントラバスクラリネット
　それぞれコントラアルトクラリネット、コントラバスクラリネットより一オクターブ低い音が
出ますが、とても珍しいので自分は見たことがありません。

○サクソフォン（ｓａｘｏｐｈｏｎｅ）
　サックスと略されることが多いです。とてもポピュラーな楽器でジャズなどで大活躍します。
オーケストラではあまり使われませんが近代の曲で使用されることがあります。
　また、サックス四重奏（ソプラノ、アルト、テナー、バリトン）は弦楽四重奏（バイオリン2、ヴィオラ、チェロ）に匹敵するアンサンブル力を持つと言われています。
吹奏楽ではアルト、テナー、バリトンの3種が基本パートとしてあり、たまにソプラノサックスがそれに加わります。

・ソプラニーノ　サックス
　サックスアンサンブルで使われます。

・ソプラノサックス
　サクソフォーン四重奏においてはリーダー的存在になります。吹奏楽ではポップス系の曲で使われることが多いですが、『リバーダンス』などでも使われます。

・アルトサックス
　日本で一番知られている吹奏楽器といっても過言ではないでしょう。
ポップス、ジャズ、オリジナル、なんでも合います。
　ソロは数え切れないほどあります。『華麗なる舞曲』、『氷河特急』、『伝説のアイルランド』、『アルメニアンダンスパート?』などが有名どころです。
　ポップスでは必ずといっていいほどあります。

・テナーサックス

アルトサックスが女性だとすると、テナーサックスは男性的な音だと言われています。
こちらもポピュラーでソロが多く、『写楽』、『吹奏楽のための木挽歌』などにソロがあります。

・バリトンサックス
サクソフォーン四重奏で一番低音域を担当する楽器です。ジャズなどで活躍します。ソロはあまりありませんがアルトサックスのちょうど1オクターブ下なので、アルトサックスのソロもふ吹けます。一度聞いたことがありますがアルトサックスとちょっと違った感じで好きです。
ポップスで、NSBから発売されている『ディープ・パープル・メドレー』や、『ディズニーランド　セレブレーション』にソロがあります。

・バスサックス
サックスアンサンブルや大編成の吹奏楽で使われることがあるそうですが、自分は見たことが無いです。

・コントラバスサックス
世界でも数台しかなく、背の高い成人男性以外は演奏時に脚立を必要とします。日本にはたった三台しかないらしく、もちろん自分は直接見たことは無いです。（動画で見ました。外人の男性が吹いておられたのですが、その男性より大きかったです…。しかも三百万円以上するそうです…。）

バリトンサックス、バスクラリネット、バスーンをあわせて木管低音と言います。なので学校によってはローウッドセクションとして機能している場合もあるようです。

コラムＡ　木管楽器（後書き）

意外とソロを知らないです…
お勧めのソロや楽器のことで間違いなどがあったら教えてください。

１５話　楽譜

あの後、話し合いをして曲を決めた。
なかなかまとまらなかったものの、みんなが知ってそうな曲であることと桜がつくことから、美香の提案したいきものがかりの『ＳＡＫＵＲＡ』となった。
それを京に伝えて今日は解散となり、今先斗は帰路についていた。
「あ、メールだ」
携帯を見ると桜田商業の朝田（あさだ）　悠莉（ゆうり）だった。
悠莉は桜田一中で先斗と一緒にチューバを担当していた。
＝＝＝

||||||

そうなんだ！？
こっちもスプコンの準備で忙しい（汗）
金管の人数が少なくて一年生も何人かスプコンに駆り出されているよ…。

＝＝＝

＝＝＝＝＝＝

＝＝＝＝＝＝

関東の企業と提携しており、関東方面への出張が多い。今日も出張からの帰りだ。
「出張お疲れ様。今日はどこ行ってたの？」
「神奈川県だ。サンドホープっていう会社まで行ってきた」
「へえ」
「そこの社長さんの娘さんも吹奏楽をやっているらしいぞ」
「そうなんだ。楽器は？」
「フルートだそうだ。そう言えば最近部活どうだ？」
そう聞きながら拓郎はダイニングの机に着いた。
「ぼちぼちかな」
「そうか」
そういって小百合の出してきたビールを飲む拓郎。
「無理はするなよ？」
「……うん」
先斗はただそう返した。

翌週の金曜日。
「楽譜が来たってさ！」
部室に入ってきた先斗に優樹が駆け寄ってくる。
「本当！？」
後ろにいた唯も目を輝かせて部室に駆け込む。
「え？もう来たのか？まだ一週間たってないぞ？」
「先生が言ってたから間違いないよ。今から持ってくるって！」
「やった～！！」
また唯のテンションが上がっている。
「落ち着けよ…？」
庄吾が一応諭すものの軽く諦め気味だ。
「集合だっ……てさ」
匠が部室に入ってきたが唯のテンションに軽く引いている。
「ほら、行くぞ」

「ハ～イ！！！」
唯のテンションがまた上がっていく。
「落ち着け」
そう言って先斗は唯の額にデコピンをした。
「痛った～！」
「落ち着いたか？行くぞ」
「……は～い」
唯はそう言って先斗の後ろについていった。

「これから楽譜を配るわけだが、先に楽語等の説明するから黒板を見てくれ」
黒板には既に何か英語のようなものがたくさん書いてあった。
「ゆっくりでもいいから覚えてくれ。じゃあまずテンポ。これは４分音符＝６０って読む」
黒板に書いてある記号を指差す京。
「これは、一分間に４分音符分の長さの音が六十個入ると言う意味だ」
京はピアノの上にあった機械を持ってくる。いつも練習で使っているものより少し大きい。
「これはメトロノームという機械でいろいろな速さのテンポを刻むことができる」
机に置いてカチカチ鳴らす。ゆっくりなテンポだ。
「これが４分音符＝６０だ。テンポを上げてみるぞ」
ついている錘を下に下げてまた机に置く。
今度はかなり速いテンポだ。
「これは４分音符＝１６０。まあ自分で使って慣れていってくれ。次は強弱の楽語な」
そういって説明が続いていく。

pp　ピアニシモ　とても弱く
p　ピアノ　弱く
mp　メゾピアノ　やや弱く
mf　メゾフォルテ　やや強く
f　フォルテ　強く
ff　フォルテッシモ　とても強く
sf　スフォルツァンド　その音を強調して
fp　フォルテピアノ　音のはじめを強くして落とす

アクセント　その音を強く、

スタッカート　その音を軽く、区切って

テヌート　その音の長さを保って

フェルマータ　音を記載されている長さより適度に長く伸ばす（基本二倍くらい）

クレッシェンド　だんだん強く

デクレッシェンド　だんだん弱く

「まあこんなところかな。分からなかったら他の部員に聞くか俺に

聞きに来てくれ。じゃあ楽譜配る
そういって楽譜が配られた。
「あれ？」
先斗が突然声をあげる。
「どうした？」
庄吾が覗き込む。

楽譜は一週間で作ったとは思えないほど丁寧に作られていたが、チューバの譜面は練習番号のEからずっと休符になっている。
「先生。なんで俺の楽譜こんなに休符長いんですか？」
おもわず京に聞くと、
「ああ。そのことか」
京が軽くにやけている。
なにか嫌な予感がして、先斗は軽く息をのんだ。
「あちらさんにお前の特技を話したらな。それを使おうってことになったんだよ」
「へ？」
「はい。続きの譜面」
「……」
先斗は渡された譜面の左上のパートのところを見て、凍りついた。
「……先生？」
「弾けるだろ？」
「……はい」
パートのところに書かれていたのはＰｉａｎｏだった。
先斗は一応ピアノが弾ける。でもこれまでそれは隠していた。
小学校の時、合唱のピアノ伴奏をしたらほかのクラスの男子からからかわれたためだ。
しかしそのことは京は知らなかったようだ。
「ん？」

「あれ？」
先斗と唯が同時に声を上げる。
先斗の楽譜の練習番号Ｈにｓｏｌｏの四文字。
そしてＡ，Ｓａｘ　ｓｏｌｏとあってキュー（他のパートの動きなどを表す。そのパートが無ければ代わりに演奏する場合もあり）が書かれていて、その後に和音が重ねられている。
「……先生？これって」
「ああ。弾き語りをイメージしたらしい」
一瞬の沈黙。
「「えええええぇぇぇ！！」」
つまりその部分は先斗と唯、二人だけで演奏するということだ。
「楽譜に不備はないな？　では解散！」
「……」
部員たちが練習に向かう中、先斗と唯はしばらく動くことができずに硬直していた。

１６話　自主練習

土曜日。今日は午後練習の予定だ。

「おはよ～」

「おはようさん。音出し終わってるか？」

しかし先斗と唯は午前十時の時点で部室にいた。ソロ部分を練習するためだ。

「うん。じゃあはじめようか？」

「ああ」

２人は楽譜を取り出した。２人とも一応昨日のうちに練習して、通せるようにはしてある。

「じゃあ先斗のソロからね？」

先斗は黙ってメトロノームをピアノのそばの譜面台の上に置いて、ピアノについた。

「カウントしてくれるか？」

「わかった。１，２，３」

先斗はソロを弾きはじめた。

本来はギターソロである部分。ピアノで弾いても悲しげな感じでかっこいい。

ソロは無事終わりに差し掛かり、引き継ぐために唯に目で合図した。

ピャァァ！

しかし、その瞬間リードミスの音が音楽室に響いた。

リードミスとは楽器の調子やリードの状態、緊張して力んでいる場合などが原因で起こるもので、で、出したい音よりかなり高い音がきつい音で鳴ってしまう現象だ。

「どうした？」
「……ごめん」
「もう一度やろうか。それじゃあ俺のソロから」
「……うん」
先斗はまたソロを弾き始めた。

しかし何回やっても唯のリードミスはなくならない。
「そうだなぁ、じゃあ唯のソロからやってみて」
「……わかった」
カウントを入れる。ピアノソロの後は唯のドソロだ。
緊張するならここだと思うが唯はそんなに気は弱くない。中学の時の大会でもソロを吹いたがミスはなかった。
しかし今度は綺麗に入り、ほどよくビヴラートもかかっている。
そこで先斗もピアノの伴奏を入れてみる。アルペジオ（和音を少しずらして弾く奏法）で唯のメロディに和音を重ねる。なんとか無事に通すことができた。
「できたな」
「うん！」
「じゃあ俺のピアノソロからな」
途端に唯の顔が不安げになる。しかし先斗は気付かないようで、そのままソロを弾き始めた。
ソロが終わり、唯に引き渡す。

ピャァァ！

またリードミスだ。
「ごめん……」
「大丈夫か？」
体調でも悪いのかと思って声をかける。

「大丈夫。ねえ先斗」
「なんだ？」
「一回目を合わせずにやってみてくれない？」
「え？　……わかった」
先斗は首を傾げつつも演奏を始めた。今度は唯の方を見ないで演奏をする。
唯のソロの始まりもリードミスなく進み、今度はスムーズに大サビに入った。
「うまくいったけど……どうしてだ？」
先斗は不思議そうに唯に尋ねる。
「それは……」

ガラッ！

「おはよう！」
いきなり弥生が入ってきた。
「あ、弥生。おはよ～！」
唯が弥生に駆け寄る。
「どうしたんだ？部活は午後なのに」
「曲の練習がしたくって。早く出てきたの」
「そうか」
先斗は唯にさっきの続きを聞きたかったのだが、弥生と話しはじめた唯を止めることはできず、結局聞かずじまいでソロの練習を終えることとなったのだった。

17話　コンクール曲鑑賞

午後。全員揃ったところでミーティングが始まる。
「今日はコンクール用の曲をいくつか用意したから練習の前にそれを聞いてもらう。あ、これ解説のプリントな」
京はプリントを配った後、ＣＤを取り出して音楽室のスピーカーにセットした。
「じゃあ一曲目。『セドナ』と言う曲だ」
京はそう言って再生ボタンを押した。

タカタカタン！

スネアドラムの目覚めるような鋭い音と金管のファンファーレ。木管が主題を吹き始める。
曲はだんだん盛り上がり、主題のメロディが広がりを持って再現された。
『セドナ』はアメリカ・アリゾナ州にある景勝地の名前で、突き抜けるように青い空と、低木の緑とに囲まれた赤色の巨岩のパノラマが名高いと言われている。
このように地名から曲名が付けられた曲はたくさんある。
たとえば、『アルヴァマー序曲』は、作者の近くに住むアルヴァさんとマリーさんの経営するゴルフ場の名前から取られたものらしい。

テンポが落ちる。そこにトロンボーンのソロが入った。音もけっこう高い。
「え？」
加奈子が小さく声をあげる。
フェルマータで一度曲が止まった。

ゆったりとしたテンポの部分に出てきたのはフルートソロ。
「うそ！？」
美香の驚いた声。
さらにテンポが上がり、スネアのみがリズムを刻む。
スネアの音が消えたかと思うと、クラリネットのドソロ。すぐにファゴットが入ってきて掛け合いとなる。しかもフルートも入ってきて何がなんだか分からなくなる。
唖然としているうちに曲が終わってしまった。
「せ、先生。ソロってどういうことですか？」
「しかもうちの学校ファゴットいないですよね？」
「もしかしてバリサクが吹けと言うことですか？」
美香、弥生、加奈子、慶太が先生に駆け寄る。
慶太がそう思ったのはファゴットがバリサクと同じ木管低音だからだろう。
「落ち着け。もしこの曲になったとしてもいろいろ考えるから。じゃあ次な。星の情景と言う曲だ」
またCDが再生される。
解説のプリントによるとこの曲は3つの楽章に分かれていて、それぞれの楽章に星座の名前がつけられている。
1楽章のオリオンは、チャイムの音から壮厳に始まる。
優樹が驚いたのは2楽章、ドラゴの最後の部分だ。
タムのリズムに乗って、中低音楽器がキメのリズムを奏でる裏で、ライオンの叫びのような音が聞こえたのだ。
「あれなんですか！？」
おもわず京に聞く優樹。
「ああ、ライオンロアっていう特殊楽器。太鼓のヘッドを片面外して、ヘッドの中央にヒモを通して、ぬれた布でこするとあんな音が出るんだ。まあ、代用で銅鑼を使うことがあるらしいけどな」
そう答えると3楽章が流れ始める。
三拍子で聞こえてくるのはスネアドラムの軽快なリズム。

そこにトロンボーン、ホルン、ユーフォがメロディーを奏でる。
中間部に入ると、ユーフォ、チューバ、バリサクのメロディ。
そしてフィナーレ。
トランペットのメロディーとその下でハーモニーを組む楽器たち。
ティンパニが高らかにクレッシェンドをかけ、曲は終わった。
「この曲いいな」
優樹が楽しそうにひかりに言う。
「そうだけど打楽器が足りなくない？」
しかしひかりは渋い顔をしていた。
確かにティンパニやスネアドラム、ゴングにグロッケン。タムタムにトム。極め付けはチャイムと打楽器は大忙しだ。
打楽器はひかりと優樹だけだから特に厳しい。
「あ、そういえばそうだな……」
「それぞれで協力すればいいんじゃないか？」
匠が口を開く。
「例えばこの曲、ユーフォニウムは低音楽器と同じ音を吹く所が多いから人手が足りない時打楽器に回ることができる」
「あ、そうなんだ」
ひかりが呟く。
「でも楽器の持ち替えって許されているの？」
加奈子が心配そうに尋ねた。
「ああ、俺がいた中学も小編成で、三年が引退したら１５人程度だったからな。打楽器に持ち替えだけじゃなくて楽器自体の持ち替えだってあった。現に俺はしょっちゅうトロンボーンと持ち替えしてたしな。……でもそのおかげで加奈子に教えてやることができるし今となっちゃよかったのかもな」
最後の部分はボソッと呟くように匠は言った。
「そうね。ありがとう、匠」
「え？なんかそこの二人いい関係じゃない？」
唯がにやりと笑って言う。

「……ただの幼友達だよ」
匠が少し顔を赤くして返す。
「え？でも匠、愛媛県出身じゃないの？」
「私も愛媛県出身なのよ。中学入学前にこっちに引っ越してきたの」
加奈子が答えた。
「そうなんだ」
「そろそろいいか？」
京が話を止める。
「確かに打楽器の問題があるが、それは他の曲でも同様だ。いざとなったら管楽器のメンバーにもちょっと手伝ってもらうからそのつもりでいてくれ」
「「はい！」」
「じゃあ最後の曲。『感謝と喜び』と言う曲だ」

CDが再生される。
低音の伸ばしの上にトランペットの勇ましいメロディが乗っかる。そしてティンパニーの重量感のある音がアクセントとして入る。
だんだん楽器が重なっていく。テンポが上がり、クラリネットとグロッケン、鈴の刻みが入った。サックスのメロディにウインドチャイムが重なる。
いったん盛り上がってトランペットとクラリネットのメロディ。トロンボーン、ユーフォニウム、チューバの合いの手が入る。
木管の低音域のメロディ。少し物悲しい感じがする。ウインドチャイムが幻想的な雰囲気をかもし出し、グロッケンがメロディに加わった。
そこにトランペットが明るく突っ込んできて最初のメロディに戻る。そこにスネアドラムが入ってきて…。
気づけば曲は終盤に入っていた。B♭の和音（シ♭、レ、ファ）で曲が終わる。

「この三曲でどれがいいか練習が終わるまでに考えておいてくれ。最後にまた集まって投票するから。じゃあいったん解散して四時にまた集合ってことで。あ、ＣＤ聞きたい人はここにおいていくから聞いてくれ。曲名はケースに書いてあるから」

そう言って京は出て行った。

「どうする？」

「あたしは決めたよ」

「俺は少し迷ってる」

みんな練習に向かいながら相談しあっていた。

（大きなことだからこの短時間で決めるのは難しいんじゃないかなぁ……？）

唯はそんなことを考えながら練習教室に向かった。

１７話　コンクール曲鑑賞（後書き）

今回打楽器の名前がかなり出てきました。コンクール曲の決定後、打楽器のコラムを入れます。

登場人物紹介はただいま作成中です。二十話に到達したら投稿します。

今回、三つの楽曲を作品に使いました。

・セドナ（ＳＥＤＯＮＡ）

・感謝と喜び（Ｔｒｉｂｕｔｅ　ａｎｄ　Ｔｒｉｕｍｐｈ）

・星の情景（Ｓｔａｒｓｃａｐｅｓ）

興味がある方はぜひ聞いてみてください。

18話　教師として、生徒として

3時半。先斗はピアノの部分を練習するためにちょっと早めに音楽室に戻ってきた。
「あれ？先斗。戻ってくるの早くない？」
ひかりが少し驚いたように言う。

ひかりはドラムセットの前で曲の練習を、優樹はマリンバの前で音階練習をしていた。
文化祭ではひかりがドラムセット、優樹が小物や鍵盤楽器を担当することになっているらしい。
「ピアノの練習したかったからな。邪魔ならやめとくけど」
「いいよ。こっちはこっちでやってるから」
そう言って練習に戻るひかり。
先斗もピアノの練習に入ろうとした。
「先斗。ちょっと教えて欲しいことがあるんだけどいいかな？」
そこで優樹が話しかけてきた。
「どうした？」
「今、マリンバの練習を教本を使ってやってたんだけど、よく意味が分からない記号が出てきて」
「どこだ？」
「これふたつ」
そう言って優樹が示したのはトリルとロールの記号だった。
「あ、これはな……」

・ロールは同じ音を連続して発音する奏法で、主に打楽器で使われる。
・トリルは一音離れた音を交互に鳴らす奏法で、木管楽器や鍵盤楽器で使われる。

「……ってことだ。あ、後一音以上離れた音の時はトレモロって言うから覚えといて。鍵盤楽器にはよく出てくるから」
「分かった。ありがとう」
優樹がマリンバのところに戻っていったので先斗はピアノの練習を始めた。

ピアノの音が聞こえ始めた。
ひかりがふと顔を上げると、優樹が練習の手を止めて音に聞き入っているのが見えた。
「優樹。休憩中？」
「ん？あ、ひかり」
ふと我に還ったかの様子の優樹。
「聞き入ってたんだ」
「まあね。上手いよな、先斗」
「そうね」
ひかりは中学の時組んでいたバンドの、キーボーディストを思い出していた。
初めて彼女が弾くのを聞いた時、ちょうどこの感覚を感じた。
（なんで先斗はこんな演奏ができるんだろう……）
ひかりもその音に引き込まれていた。
「……ひかり？」
いつの間にか手が止まっていた。優樹が声をかけてくる。
「あ、ごめん。……そろそろ片付けようか。みんな帰ってくる前に片付けなきゃ」
「うん」
ひかりは優樹に声をかけ、片付けを始めた。
４時。みんな音楽室に戻ってきた。
「投票に移るつもりだったんだが……。ちょっと延期してもいいか

？」
京がすまなそうな顔でそう告げた。
「なんでですか？」
「ちょっと考える時間が短かったからな。火曜日の部活の時、投票するからそれまでに決めてくれるか？」
「別に構いませんけど…」
「悪いな。じゃあ今日は解散」
その声で部員たちは首をかしげながらも帰り支度を始めた。

「先生」
先斗は一緒に出ていこうとする京を呼び止めた。
「なんだ？」
「指摘したの、梶原先生ですよね？」
「バレてたか」
「いや、この学校で吹奏楽関連の人は先生達二人くらいですから」
「いや、それが結構いるんだよ」
「え？」
「数学の仲里先生は高校でオーボエ吹いてたし、現代文の杉原先生はパーカッションだ。杉原先生は同期だから知ってたが仲里先生は意外だったよ」
「そうなんですか……」

「まあ、焦っていたかもしれないな」
二人で廊下を歩く。その途中で京がぽつりと呟いた。
「焦り？」
「今年の県大会は八月四日。あと、三ヶ月ちょっとだ」
「小編成の部ですね」
「ああ。さすがに代表まで行ける自信はないが、金賞は取りたい」
小編成の部とは、在籍部員数が三十人以下の団体に出場権利があ

る部で、7分間で自由曲1曲を演奏する。島根県は少子高齢化が進んでいるため小編成の団体が多く、レベルも比較的高い。出場校が15前後に対して代表は2校だから狭き門だ。
桜田中央高校は全部員が一年生の上に、初心者が部員の半分以上を占めている。他校よりは不利かもしれない。

「諦めちゃ駄目ですよ。どこの団体も一年生入れてくるんです。条件は一緒です。それに……」
しかし先斗は前向きだった。
「それに？」
「諦めたらそこで終わり。出るなら思いっきり開き直れ。そう言ったの先生でしょう？」
先斗は二年前、京に言われたことを思い出していた。

中二のコンクールの時のことだ。先斗たちのひとつ上の学年にはチューバがいなかったため、コンクールは二年生二人で出ることになった。
先斗達は経験が浅くビビッて音が小さくなり、息もうまく入らないため、音程はぼろぼろ。低音がこんなんじゃもうだめだと落ち込んでいた。
そんな時の事だ。
「お？先斗じゃん」
「あ、西村先輩……」
中国大会の会場で先斗は当時帰省中で桜田一中の応援に来ていた京に偶然会った。
「どうした？」
優しく聞いてくる京に先斗は不安をぶつけてしまった。
「……怖いんです。まだトリオの三連符のH（シ）の音も合わないし、自由曲のコラール部分もヤバイし……」
課題曲は『マーチ「春風」』。自由曲は『朝鮮民謡の主題による

変奏曲』だった。
『マーチ「春風」』は、比較的オーソドックスなマーチなのだが、先斗はpの部分の伴奏が苦手だった。なのにp部分の伴奏のチューバは先斗一本にされてしまっていた。
自由曲の『朝鮮民謡の主題による変奏曲』も、第二変奏ではオーボエソロの下でp、しかも下のB♭（シ♭）～下のF（ファ）の音まで出てくるため、低音域が苦手な先斗には地獄だ。しかも第三変奏のマーチ部分は延々とB♭、Fと連続で何十小節も吹き続けないといけない。
そして第四変奏は先斗が一番苦手としている部分だった。
そのコラールは難しいハーモニーばかりなのだ。
スコアには先生が記してくれたコードネームがのっている。
たとえば、A13、Bm7／F♯。
庄吾がエレキギターをやっているし、先斗もピアノを弾いているから、そのコードがいかに難しいかはよくわかっていた。
県大会はなんとか突破できたものの、講評には低音のことがびっしり書いてあり、先斗にとってはそれがプレッシャーになっていた。

「そうか……。俺もだ」
それをすべて聞いた後、京はそう呟いた。
「へ？」
「課題曲のトリオのpの頭打ち、音ひっくり返らないか不安だ。バスクラのリードミスどんなんか聞いたことあるか？B♭クラのなんかかわいいもんだ。もう演奏台無しになるぞ？しかも自由曲は『呪文と踊り』だぞ？」
京は当時、関東の大学でバスクラとファゴットを兼任していた。
ちょうど京たちの学年は部員数が減少しており、木管低音はバリサクがひとりと京だけ、という状態だったのだ。

『呪文と踊り』。

打楽器の大活躍する曲として知られているが、最初のフルートの無伴奏のソリ、バスクラのソロなど、木管にも厳しい曲だ。
桜田一中も12月の市の演奏会で演奏したため、先斗もそれは知っていた。

「じゃあ先輩なんでそんなに堂々と演奏できてるんですか？」
「ビビッてもしょうがないからだ」
「え？」
「ビビッてソロの音外しても損だろ？諦めたらそこで終わり。どうせなら開き直っちまえ」
「…はい！」
先斗はその言葉を受け、思いっきり開き直った。
悠莉にもそれを教えたので、低音は一気に厚くなり、講評でほめてもらえたのだ。

昇降口に差し掛かる。
「それじゃあ、失礼します！」
先斗は笑顔で昇降口を出て行った。

「生徒に説教されちゃいけないな……」
京は苦笑いしながら廊下を歩く。

「あら、西村先生」
階段の所で静香に会った。持っている段ボールには荷物がたくさん入っている。
「お持ちしますよ」
そう言って段ボール箱を持って一緒に歩き出す。
「悪いわね。部活はどうかしら？」
「……焦ってたの、西掛にバレてました」
「そう。西掛くん、勘が鋭そうだものね」

「こんな頼りない俺が顧問でよかったんでしょうか？」
（生徒の前で諦めの言葉を吐いてしまうような俺が……）
そう心の中で付け加える。
静香は落ち込む京の顔を見て、
「完璧な人なんていないのよ。教師もそれにしかり。頑張るのもいいけど、音楽を楽しむ余裕がなくなったら、なんの意味もないのよ。もう少し肩の力を抜いてもいいんじゃないかしら？」
と、当時と変わらない笑顔で言った。

ちょうど化学準備室の前に着く。
「ありがとう」
段ボール箱を受取り、静香は中に入って行った。
肩を回す。結構凝ってるようだ。
（肩の力抜いてこう。まだ先は長いんだ）
心が少し軽くなったのを感じながら京は職員室に向かって歩き始めた。

１９話　演奏会鑑賞　１

日曜日。今日は桜田商業の演奏会だ。
「じゃあ、今から演奏会を鑑賞します。あ、携帯電話持っていたら電源落としといてくれ。マナーモードもだめだぞ」
「「はい」」
部員１３名と京は桜田市民ホールの前にいる。現在１時１０分。開演は１時３０分だ。

桜田商業高校は普通科２クラス、商業科４クラス、国際科１クラスの公立高校で、生徒の８割が女子を占める。
吹奏楽部は県大会で毎回金賞を受賞、３年前には中国大会まで進出した実力校である。

「プログラムだって」
弥生がプログラムを回してくる。
「ありがとう」
先斗はそう言って後ろにいた庄吾にも渡し、プログラムを眺めた。

１部
・２００７年度吹奏楽コンクール課題曲より
憧れの街　南　俊明　作曲
マーチ「ブルースカイ」　高木　登古　作曲
・伝説のアイルランド　R・W・スミス　作曲
・朝鮮民謡の主題による変奏曲　チャンス作曲

2部　OBステージ

・マーチ「ベスト・フレンド」　松浦伸吾　作曲

・ディスコ・キッド　東海林　修　作曲

休憩

3部　ポップスステージ

・アニメ・メドレー「ハウルの動く城」より　鈴木英史　編曲

・リトル・マーメイド・メドレー　Alan Menken　作曲　編曲：星出尚志

・君の瞳に恋してる　真島俊夫編曲

・ユーロビート・ディズニーメドレー　磯崎　淳博　編曲

と、ある。

「朝鮮民謡か……。懐かしい」

先斗は少し顔をほころばせた。

「じゃあ中入りま～す。」
唯の指示でホールの中に入った。
桜田市民ホールは昨年改築工事が行われ、中もかなりきれいになっている。
ホール内に入ると、ステージには打楽器とたくさんの椅子が並べられていた。

「ねえ、あの打楽器は何？」
ひかりがいくつかのブロックのようなものが並んでいる楽器を指差す。
「ああ、あれね。テンプルブロックっていうの」
唯が答える。
「『朝鮮民謡』で出てくるから見ておくといいよ」
「わかった。じゃああれは？」
ひかりの質問は続き、いつの間にか開演時間になっていた。

開演のブザーが鳴り、演奏者がステージに上がる。ぱっと見た感じやっぱり金管奏者が少ない。右手のチューバのところに悠莉がいた。
指揮者の須竹（すだけ）　貴仁（たかひと）先生が指揮台に上がる。

そして一曲目の「憧れの街」が始まった。

低音の伸ばしの上に、他の音が重なる。サスペッションシンバルとティンパニがロールをしながら響きを支える。四つ目の和音でクレッシェンドがかかった。
テンポが上がり、金管楽器のファンファーレ。木管楽器とシロフォンが細かい上向系の連符を上がり、トリルを吹く。デクレッシェンドがかかり、中低音楽器の刻みが始まった。

憧れの街はマーチだ。低音の表打ちにトロンボーンの裏打ち。その上にクラリネットとサックスのメロディが乗っかる。それと入れ替わるようにピッコロ、フルート、オーボエ。

二回目はサックス、クラリネット、オーボエのメロディの上にフルートとピッコロの細かい連符。途中でメロディにトランペットとユーフォニウムが加わった。

曲の雰囲気が変わり、ユーフォニウムとホルンのやさしいメロディ。そこにサックスが三連符で見事なハーモニーを加え、高音木管が涼やかな風のように音階を上がる。

金管のベルトーンでそのメロディが終わると高音木管の細かいパッセージ。木管低音とコントラバスとスネアドラムのリムショットが下を支えた。

その落ち着いた動きを大きく変えるのはトランペット。チューバもトロンボーンと同じ動きで、裏から八分音符を入れていく。

最初のメロディに戻るが今度はトランペットが入り、音楽はさらに明るさを増す。そこにユーフォニウムとテナーサックスの対旋律。主題の後半部が変わり、木管楽器に上向系の連符が加わる。

転調してトランペットのファンファーレ。音楽はｆｆで盛り上がり、デクレッシェンドで落ち着いた。

クラリネットとサックス、ユーフォニウムが柔らかなメロディを歌い上げ、ホルンに変わった裏打ちと、低音の頭打ちはｐで伴奏を続ける。マーチの中間部分、トリオだ。

そのメロディの後、さらに演奏は静まる。木管低音とコントラバスで八分音符の細かいメロディ。チューバとホルンの刻みも止まり、

木管低音とコントラバスの音が引き立つ。

マーチでは縁の下の力持ちである低音楽器。

でもこのマーチは低音のうち、木管低音が目立つことができるため、桜田商業のように木管が充実しているバンドにはうってつけな曲と言えるだろう。

高音木管にメロディが引き継がれ、トリオは美しく幕を閉じた。

そこにトランペットの十六分音符が突っ込む。トランペットが伸ばしに入ると、中低音、中音、高音の順で、アルペジオのように八分音符で音が上がっていく。ホルンは裏打ちのときとは違う勇ましいグリッサンドを決める。

ファンファーレが半音ずつ上がっていくごとに曲の緊張感は高まり、それが最高潮に達したとき、低音とトロンボーンが八分音符のメロディを吹いた。テンポが落ちる。

テンポはもとに戻り、曲は最後の部分に差し掛かる。トロンボーン、ユーフォニウム、テナーサックスの勇ましい対旋律に、高音木管とシロフォンのリズミカルなパッセージ。

トランペットとクラリネットは堂々とメロディを吹き、低音楽器とホルンはそれを支える。

急にテンポが落ち、フェルマータで一度曲が止まった。

そこに入ってきたのはオーボエのソロ。舞台を見るとフルート、クラリネット、ホルン、ファゴット、オーボエの奏者が立ち上がって吹いている。

木管五重奏だと思ったがよく見るとコントラバスも演奏していた。

なんだか懐かしい雰囲気が漂う。

感傷に浸っていると急にテンポが上がり、ｆｆの音楽に戻る。
特徴的なリズムで曲が終わった。

「すげぇ…」
先斗の横に座っていた優樹が声を上げた。会場に拍手が鳴り響く。
「なあ、先斗」
反対側に座る拓也が話しかけてきた。
「ん？なんだ？」
「俺達もあんな風に演奏できるようになれるかな？」
不安気に呟く拓也。
「なれるさ。頑張ればな」
先斗がそう言ってやると拓也はニカッと笑った。
「俺、頑張るよ」
「じゃあ今日のことちゃんと覚えとけよ？」
「もちろん」
そこで次の曲、マーチ「ブルースカイ」に入ったので二人は話をやめ、演奏に集中した。

１９話　演奏会鑑賞　１（後書き）

一曲で一話が終わってしまいました。高校初めてのコンクールでの曲なので思い入れが深いです。今回、またかなり打楽器の名前と奏法が出てきてしまったので、急遽次回を打楽器コラムとします。演奏会はあと、二～三話続きますのでそれが済んだら登場人物紹介とします。遅れて申し訳ありません。

コラムB　打楽器

音楽の三大要素は，リズム、メロディ、ハーモニーです。今回はその三つのうち、主にリズムを担当するパーカッションに焦点を当てて紹介したいと思います。

パーカッションと言ってもたくさんの種類があります。全部紹介すると書ききれなくなるので、吹奏楽でよく使用されるものを中心に書きます。

○スネアドラム（ｓｎａｒｅ　ｄｒｕｍ）

通称小太鼓です。名前の由来はスネアドラムの裏側についている、響線の名前がスナッピーと言うところからきています。この響線、つけたり外したりすることができるため、音に変化がつけられます。また、さまざまな奏法があります。

・ロール

スティックを弾ませて、それを打面に押さえつけるように叩く奏法（シングルサイレンタルショット）と、跳ね返ってくるスティックを握るような感覚で指をうまく利用して一打で二発叩く、ダブルストロークを繰り返す奏法があり、前者が吹奏楽ではよく用いられます。後者はマーチングで使われます。

・リムショット

スティックの先端がヘッド面を打撃すると同時に、手前の部分がスネアドラムの縁に当たるようにして、独特の甲高い打音を出す奏法です。

・ブラシ

数十本のワイヤーを箒状にまとめたブラシという特殊なスティックで打面を擦ると、砂のような音がします。

基本的に単独の動きが多いため目立ちます。
ソロは、『感謝と喜び』、『セドナ』、『第六の幸福をもたらす宿』など、多くの曲にあり、テンポの切り替えなどの役目を果たすことも多いです。

○バスドラム（ｂａｓｓ　ｄｒｕｍ）
通称大太鼓です。
大きな撥で打面を叩いて音を出します。撥二本を使ってロールをすることもできます。オーケストラでは定席を持ちませんが、吹奏楽ではスネアドラム、シンバルと並んでよく使われます。
バスドラムが目立つ曲として、『吹奏楽のための叙情的「祭」』（一番最後にバスドラムの一打）などがあります。
また、『序曲「１８１２年」』では、大砲の代わりにバスドラ複数台を用いたりします。

○トムトム（ｔｏｍ－ｔｏｍ）

・コンサートトム
吹奏楽では異なる大きさの４～８個程度のタムタムの全てをスタンドに固定し演奏する。課題曲で使われる場合は３～４トムが使われます。
現代曲などで使用されることが多いです。
目立つ曲として、『セリオーソ』（２００８年課題曲？）、『躍動する魂～吹奏楽のための』（２００９年課題曲？）などがあげられます。

・トムトム

ドラムセットでは「タム」と呼ぶのが一般的。バスドラムやシンバルスタンドに取り付けたホルダーまたは専用のスタンドを使い、バスドラムの上付近に設置します。

○ティンパニ（ｔｉｍｐａｎｉ）

見た目は銅製の釜のようです。

音程を持ち、管楽器の補強として使われる場合が多いですが、『天馬の道～吹奏楽のための』のティンパニソロをはじめとして、独立した動きをする場合も多いです。

基本四台一組とされていて、ティンパニ（ｔｉｍｐａｎｉ）と言う楽器名も複数形です。

単数形の呼び方はｔｉｍｐａｎｏです。

基本はポリエチレン合成樹脂という特殊な布を巻いた異なる硬さのマレットを使い分けて演奏しますが、手でティンパニを叩く、スーパーボールでティンパニの鼓面を擦るなどの特殊奏法もあります。

（特殊奏法は今後作中で出てきたら説明を入れます）。

目立つ曲として、『アイヴァンホー』（三楽章冒頭）、『Ｗｉｔｈ Ｈｅａｒｔ ａｎｄ Ｖｏｉｃｅ』などがあります。

○シンバル（ｃｙｍｂａｌ）

大きく分けて三種類あります。

・クラッシュシンバル

二枚のシンバルを重ね衝撃音を出します。音が大きく、目立ちます。

・サスペンドシンバル

スタンドにシンバルを横向きに吊るし、スティックで叩いて音を出します。

特徴的な奏法にロールをしながらだんだん大きくしていく奏法があり、爆発的な威力を持ちます。

・ハイハットシンバル
ドラムセットでビートを刻みます。
ペダルで合わせシンバルを鳴らすこともできます。

○ゴング（ｇｏｎｇ）
銅鑼です。低い音程が定まらない音を出します。
ｆｆの時、さらに響きを豊かにしたり、迫力を出すために使われます。

・タムタム（Ｔａｍ－ｔａｍ）
小さな銅鑼です。吹奏楽ではこっちが使われることが多いです。

○ウッドブロック、テンプルブロック
通称木魚です。
現代では長方形のものも使用されており、木製、プラスチック製のものがあります。

・ウッドブロック（ｗｏｏｄ　ｂｌｏｃｋ）
乾いた澄んだ音が出せ、二つ一組で使われます。時計の音の効果として使われる場合もあります。
『Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ』、『日本民謡「わらべ歌」』で目立ちます。

・テンプルブロック（ｔｅｍｐｌｅ　ｂｌｏｃｋ）
ウッドブロックより少しくぐもった音がします。音程を持ち、４～６個一組で使われます。
『朝鮮民謡の主題による変奏曲』、『呪文と踊り』などで目立ちま

す。

○トライアングル（ｔｒｉａｎｇｌｅ）

小さな三角形型の金属の楽器です。紐で吊るして、小さな撥（ピーターと言います）で叩きます。

静かなシーンで一発入ると、物凄い存在感を持ちます。

また、手で少し触れて、響きを消して叩くキープクローズ奏法もあり、オープン（手で触れていない状態）奏法と組み合わせて、リズムを刻んだりもします。

この楽器もロールができるので、音楽が盛り上がったシーンでも使われます。

○タンバリン（ｔａｍｂｏｕｒｉｎｅ）

丸く、皮が張ってあり、周りには小さなシンバルがついています。手に持って叩く奏法が最も一般的ですが、膝に打ち付ける、振ってシンバル部を鳴らす、鼓面のふちにそって鼓面をこする、ドラムスティックで叩くなど様々な鳴らしかたがあります。

小さいですが音が通るので目立ちます。

『華麗なる舞曲』、『アルヴァマー序曲』などでよく聞こえます。

○ジングル（Ｊｉｎｇｌｅ）

鈴を連ねたものを木の棒につけたものです。下向きにして柄の部分の方を叩いたり、振ったりして音を出します。

○ウインドチャイム（ｗｉｎｄ　ｃｈｉｍｅ）

直径数ミリ、長さ数センチから十数センチの金属棒を、数十本、次第に長さが変化するように横に並べて糸で吊り下げたもので、ピーターという金属棒や手で金属棒をゆらすと、金属棒同士がぶつかり合って高い音が出ます。幻想的な場面で使われます。

☆鍵盤楽器

はっきりとした音程を持ちます。

○シロフォン（ｘｙｌｏｐｈｏｎｅ）

木製の音板をピアノの鍵盤と同じ順番に並べたもので、高く硬い音がします。

３オクターブ半～４オクターブの音域を持ち、木管と細かい動きを演奏することがあります。

マーチング用のシロフォンも販売されています。

○マリンバ（ｍａｒｉｍｂａ）

シロフォンと似ていますが、共鳴管という響きを増幅させる管がシロフォンより大きく、鍵盤も面積が大きいので深みのある音色が出せます。

音域は４オクターブ～５オクターブ、最近では５オクターブ半のものまで作られています。

シロフォンより低音域に音域が延びているので、２～４本のマレットを操って、和音を作る役割として使われることが多いです。

特に低音域に音を拡張したマリンバをバスマリンバと呼びます。

○グロッケンシュピール（ｇｌｏｃｋｅｎｓｐｉｅｌ）

金属製の鍵盤を箱に収めてあり、それが共鳴管の代わりとなります（マーチング用には共鳴管付のものもあります）

１オクターブ半～２オクターブ半のものが一般的ですが、三オクターブ半と言う楽器もあります。

メロディの補強として使われたり、和音を組んだりもします。

音が高くて鋭いので小さくても通ります。

○ビブラフォン（ｖｉｂｒａｐｈｏｎｅ）

グロッケンシュピールよりも大きく低い音の出る音板が用いられ、

マリンバと同じように大きな共鳴管がつけられます。
一番の特徴が電気を使うことです。モーターで羽を回し、共鳴管の響きを調節してビヴラートをかけられます。足元にあるペダルを踏んでいる間音を持続させることができるので持続音を演奏することができます。
電気はコンセントを使いますが、電池でも可能です。
この楽器も主に和音を担当します。

○チャイム（Ｔｕｂｕｌａｒ　ｂｅｌｌｓ）
のど自慢の鐘です。木製・皮製・プラスチック製などのハンマーで演奏します。

☆マーチング用打楽器

●バッテリー
ドリルに参加する打楽器のメンバーで、管楽器と一緒に歩きます。奏の際にはただ叩くだけでなく、スティックを用いた視覚的な演技（ギミック）も行います。

基本的にキャリングホルダーに取り付けて使用します。

○マーチングスネアドラム
通常のスネアドラム（コンサートスネアドラム）に比べ、頑丈なつくりで、ハイテンションのチューニングが可能です。
締りのある音色が好まれ、響線も音量と歯切れの良い、テニスラケットのガットに近いものが用いられています。
音が鋭いので吹奏楽用の曲をやるときは音が浮いてしまうこともあります。
オプションとして小さいシンバルやカウベルなどを取り付けるこ

ともあります。

○マーチングバスドラム

主に、楽曲のベースラインを担当し、「ベースドラム」とも呼ばれる。

吹奏楽での役割と少し違って、通常3～5人の奏者が、それぞれ大きさの違うバスドラムを演奏し、独立した声部を演奏します。

○マーチングシンバル

コンサート用のシンバルに比べて小型で軽量、そして薄いものが使われ、叩いて演奏するほか、さまざまなアクションを披露して視覚的な演技も担当します。これはキャリングホルダーを使用しません。

○クイント

スネアドラムと、バスドラムの中間の音域を担当する楽器で、5つのタムによって構成されます。横幅が長く、目立ちます。

○マーチングシロフォン

軽量化のため、音域は2，5オクターブに狭められ、また1つの鍵盤の大きさもコンサート用シロフォンより一回り小さくなっています。重さは7～8キロあります。

○マーチンググロッケン

元々小型の鍵盤楽器であるため、マーチングシロフォンとは違い、音域は普通のものと一緒です。ただし、共鳴箱がないため、共鳴管がついています。

・ベルリラ

小型のグロッケンに棒を取り付けて片腕で持ち運び、もう片方の腕

でマレットを使って演奏します。演奏には片方の腕しか使えないため、難易度の高いリズムは演奏できません。主に幼稚園、小学校の鼓笛隊で使われます。

●ピット

ドリルに参加しない打楽器のメンバーで、歩きながら演奏するのが難しい楽器を演奏します。

ピット楽器として、

・マリンバ

・シロフォン

・ヴィブラフォン

・ティンパニ

・トライアングル

・コンサートバスドラム

・コンサートスネアドラム

・ドラムセット

・サスペンディッドシンバル

などがあります。

吹奏楽連盟のマーチングコンテストでは規定課題があるため、ピット楽器の人も途中でドリルに加わったりします。

また、ピット楽器の音をバッテリー楽器に振り分けて、ピット楽

器を使わない場合もあります。
（マーチングコンテストについては別のコラムで紹介します）
とりあえずこれくらいです。作中で新しい打楽器が出てきたらまた説明します。
また、作中で出てきた小物楽器と言うのはトライアングル、シンバル、タンバリンなどの小さめの楽器のことを言います。

コラムB　打楽器（後書き）

楽器の解説はｗｉｋｉｐｅｄｉａから参照しました。また、楽器名の英語はイギリスの表記と書いていったものを使用しています。もしおかしいところがあったら教えてください。

２／２６

・楽器にトムトム、タムタムを追加しました。

・マーチング用楽器を追加しました。

２０話　演奏会鑑賞　２

そのあとも、プログラムは続き、１部の最後の曲である『朝鮮民謡の主題による変奏曲』に入った。この曲は朝鮮民謡のアリランを主題として使用していて、この主題がどんどん変奏されるという形式になっている。

はじめはクラリネットの低い音域での旋律。

途中からアルトサックスとホルンも加わり、朗々と歌い上げる。

テンポが上がり、銅鑼が鳴り、木管楽器が十六分音符で細かいフレーズを吹き始めた。

さっき唯が説明した、テンプルブロックも小気味よい音でそれに加わる。

第一変奏に入ったようだ

すると今度はトランペットまでその旋律に加わり始めた。トランペットのピストンが何をやっているか分からないほどに上下する。

低音楽器も加わり、演奏はｆｆで盛り上がる。

そして最後はトゥッティ（全員が同じ動きを吹くこと）で終わった。

第二変奏に入り、音楽は静まる。オーボエのソロ。そしてトランペットのソロが続く。

桜田中央高校にはオーボエがないため、初心者の部員たちはオーボエの音を聞くのは初めてだった。その独特な音に全員が釘付けとなった。

またテンポが上がり、第三変奏。低音楽器が４分音符をマーチ風に吹き始めた。先斗が２年前に苦しんだ部分だ。トランペットが旋律を吹き、時々木管がアクセントを加える。

途中で中低音楽器のハーモニーが目立つ部分があったが、そこも綺麗に決まり、またトランペットの旋律。こんどは裏で木管楽器がひたすら三連符を吹き続けている。
音階を下り、だんだん楽器が抜けていく。最後にティンパニのソロが入った。

それが鎮まると、木管が柔らかな音を奏で始めた。
第四変奏だ。
十二連符で木管が音階を駆け上がり、広がりを感じさせるメロディ。問題の金管のコラールも難しい和音なのに悠々と吹いている。
（頑張らなきゃな……）
悠莉が、下でしっかり支えているのを聞いて、先斗は心にそっと誓った。

リタルダントが掛かり、スネアドラムのソロ。打楽器がだんだん加わっていく。
ビブラフォンが三拍子の旋律を弾き、それに木管が乗っかる。すると金管は二拍子でまた別の旋律を吹き始める。そして長い音でメロディーを吹いた。
フィナーレだ。
金管のロングトーンの上でテンプルブロックが十六分音符で動き回る。
タカタカタン！十六分音符のトゥッティで曲が終わった。
須竹先生が立ち上がるように奏者に指示する。
須竹先生の礼で会場は拍手に包まれた。

「続いて二部に入ります。ステージ入れ換えの間、本校吹奏楽部顧問、須竹　貴仁先生に話を聞きたいと思います。須竹先生お願いします」
「吹奏楽部顧問の須竹です。本日は……」

須竹先生が話し始める。

「伝説のアイルランド凄かったな」

「そうだな。特にオーボエとアルサクが。さすが木管の桜田商業」

前に座っている男子高校生が小声で感想を述べている。

桜田商業は木管が強いバンドだ。アンサンブルコンテストでも支部大会の常連で、昨年は木管８重奏が全国大会に出場した。ただ金管、打楽器とのバランスが悪い。

特に去年は三年が抜けると金管はトランペット2、ホルン1、トロンボーン1、ユーフォニウム1しか残らなかったらしく、ウィンターコンサートが開催できなかったぐらいらしい。

今年悠莉はチューバ一人。しかし京のあの言葉をバネに頑張っている。

二部の準備ができたようだ。須竹先生が舞台裏に去る。

「それでは二部に入ります。ＯＢバンドの演奏で、『マーチ「ベストフレンド」』です」

『マーチ「ベストフレンド」』は２００３年の吹奏楽コンクール課題曲だ。残念ながら先斗たちは２００４年に中学校に入学したため演奏していないが、当時から人気のある曲である。

ステージ上には、大学生から５０くらいのおじさんおばさんまで、様々な年代の人がいる。

人数バランス的にはあまり良いとは言えないが、それぞれ楽しそうに演奏していた。

一曲目が終わって、オーボエの席から三十歳ぐらいの女性が立ち上がりマイクで話し始める。

「二曲目は『ディスコキッド』です。この曲は本校吹奏楽部が初めて大編成の部に出た時の課題曲です。当時演奏した部員も何人かいます。どうぞお聞きください」

聞きなれた声に驚く。よく見ると地元局のアナウンサーだった。
この高校の出身なのだろうか。
彼女が座ると先生が指揮棒を上げ、二曲目の『ディスコキッド』が始まった。

ピッコロのソロにドラムが鳴り響く。エスクラ、エレキベースも入り、だんだん楽器が重なっていく。
そして、
「「ディスコ！」」
と言う叫び声とともに木管のメロディが始まった。
「なんだこれ？」
「すごい……」
さっきまでの音楽と違ったノリに初心者の部員達は驚いている。
「吹奏楽はどんなジャンルでもできるんだよ」
唯がそっと呟く。
クラリネットのソロ。十六分音符たっぷりの細かいフレーズ。
コントラバスもベースに負けず思いっきり弾いている。
転調して音楽はさらに盛り上がる。奏者は本当に楽しそうだ。
トランペットは何回もハイトーンを吹き上げ、ドラムは派手に鳴る。
一度音が少し静まる。
そして一気に盛り上がり、曲が終わった。
拍手が一斉に鳴る。
「すごいな……」
「これが課題曲？ベース使っていいのか？」
「昔はエレキベースの使用が許可されていたからな。最近はだめだけど」
庄吾がそういうと慶太が残念そうにする。
「あ、コンクール以外なら使ってもいいから大丈夫だぞ？」
「そうなのか？よかった」

先斗が教えてやると慶太はほっとしたようにそう呟いた。

ＯＢ・ＯＧは額に汗をうかべながらも満足げな顔をして立っていた。

それを見て、十年後もこうやって演奏できていたらいいなと、部員達は思いながら、３部の演奏に期待を膨らませるのだった。

２０話　演奏会鑑賞　２（後書き）

21話　演奏会鑑賞　終　そして…

演奏会はあっという間に過ぎていき、とうとう最後の曲に入った。

最後の曲は『ユーロビート・ディズニーメドレー』と言う曲で、ディズニーの曲がアレンジされている。

先斗たちは中学の時一度この曲をやったがかなり苦労した。

なんと低音が裏打ちだったのだ。

低音はだいたいの曲が頭打ちやシンコペーション（リズムの中で急に裏拍に入ったりしてリズムに特徴をつけること）の動きだが、裏打ちオンリーの楽譜は滅多にない。

しかもテンポがかなり早く、遅れやすいのでトロンボーンの先輩に指導を受けたのをよく覚えている。

曲が始まる。

低音の伸ばしの後すぐにドラムが派手に鳴り響き、金管のリズムが始まる。

はじめは『ミッキーマウス・マーチ』。旋律の裏でトランペット、トロンボーンはバッキングをしている。

また最初のリズムに戻る。ベースとドラムとシロフォンだけの動きが入り、『小さな世界』に入った。

クラリネットとフルートが立ち上がって旋律を吹く。途中でトランペットも加わり、後半のメロディが繰り返される。

『ジッパ・ディー・ドゥー・ダー』はトランペットが旋律。

そしてドラムソロに入る。ソロは数少ない男子生徒が担当している。

大抵の吹奏楽部は男子が少ない傾向にある。
工業高校や男子高は別だが、普通科の学校ではその傾向が大きい。
特に女子が多い商業高校はその傾向が顕著に見られるのだ。
実際、桜田一中時代は学年が２５人に対し、男子は４名。下の学年にいたっては３２人中２人だけだった。
桜田商業も５０人くらいいる中で男子は３人。パーカッション、バリサク、トロンボーンに一人ずつだけだ。
そう考えると桜田中央は男女比が１：１に近いのでかなり特殊なパターンと言えるだろう。

『くまのプーさん』に入り、フルートがソリを決める。
最初に戻り、『ミッキーマウス・マーチ』。そして曲は終わりに向かう。
全員が立ち上がる。
そして最初と同じように低音が伸ばす上で、ドラムがアドリブで盛り上げる。
全員がベルアップをして、音楽は終わった。
一斉に拍手が鳴り響き、ドラムの合図で、部員全員が楽器を降ろして礼をした。

「アンコール！　アンコール！」

前に座っていた男子高校生が手拍子をしながら叫ぶ。
それは隣の男子高校生に伝わり、一気に会場全体に広がる。
須竹先生が微笑みながら礼をして、奏者達に座るように合図した。
指揮棒があがる。
「あ…」
唯が嬉しそうな声を上げる。
木管楽器とグロッケンのイントロで静かに始まったのは、Ａｑｕ

ａ　Ｔｉｍｅｚの『決意の朝に』だった。

この曲は映画の主題歌になった曲で、自分自身をしっかり見つめて前に進もうというメッセージ性を持った曲だ。

クラリネットのソロ。噛み締めるように吹いている。

トロンボーンのメロディ、木管のメロディ。どれもが全て優しい。

さっき盛大に叩いていたドラムも、ベースもそっと演奏を支えている。

サビに入る。歌詞が自然と頭に浮かんでくる。

そしてラスト。グロッケンと木管だけが吹いている。

静かな暖かい空間に支配されるのを感じる。みんな見動きひとつしない。

彼らも今年コンクールに挑戦する。この演奏からそれに向けた決意を感じられた。

最後の和音もきれいに決まり、静かに曲が終わった。

会場は暖かい拍手に包まれる。

「すごいな……」

「さすが高校ね……」

先斗と唯が呟いた。

「これをもちまして、第３０回桜田商業高校吹奏楽部スプリングコンサートを終了させていただきます。お忘れ物がない様に気をつけてお帰りください……」

アナウンスが入る。

部員達は人の波に乗ってホールを出た。

最初と同じホール前の広場に集合する。

「じゃあ今日はここで解散します。明日はみどりの日で祝日なので部活も休みとします。じゃあ解散」

京の指示でそれぞれいくつかのグループにばらけて帰っていく。

「先斗、ファミレスでも行かない？」
帰ろうとする先斗を唯が誘ってきた。
「いいけど」
「じゃあ七人ね」
「七人？」
「あたし、先斗、庄吾、ナツ、竹原くん、弥生、美香ちゃん」
「ああ……」
（おしゃべり大会がはじまりそうだ……）
そう思いつつ、先斗は唯の後ろをついていくのだった。

２１話　演奏会鑑賞　終　そして…（後書き）

歌詞を使いたかったのですが、著作権を考えてやめました。
次は人物紹介です。予定より大変遅くなってしまい、申し訳ありませんでした。

コラムC　登場人物紹介（前書き）

登場人物を紹介します。随時追加していきますのでちょくちょくご覧ください。

ネタばれ要素があるので、初めに書いてある推奨話まで読んでから見ることをお薦めします。

コラムC　登場人物紹介

４５話現在

桜田中央高等学校

■吹奏楽部

○西掛（にしかけ）　先斗（さきと）

・身長　１７３，１ｃｍ
・体重　６２．９ｋｇ
・誕生日　７月２３日
・担当楽器　チューバ（中一から）
・出身中学　桜田市立第一中学校
・クラス　１－Ｂ
・得意教科　数学
・苦手教科　化学
・家族構成　父、母、弟（海斗）
・好きなアーティスト　ＹＵＩ

目立つことをあまり好まない。音感が鋭い。成績がまあまあいいため、たまに庄吾に勉強を教えている。ピアノが弾ける。唯とは幼馴染である。

○中島（なかじま）　唯（ゆい）

・身長　159．2cm
・体重　47、3kg
・誕生日　11月24日
・担当楽器　アルトサックス（中一から）
・出身中学　桜田市立第一中学校
・クラス　1－B
・得意教科　英語
・苦手教科　数学
・家族構成　父、母、祖母、兄、航一（3つ上。大学に通っている）
・好きなアーティスト　Aqua Timez

吹奏楽部の部長。目上の人にはきちんと接し、面倒見もいい。ただし、テンションが上がりすぎると手がつけられなくなってしまうのが玉に傷。おしゃべり大好き。スイーツ大好き。先斗とは幼馴染で、クラスが幼稚園から12年間一緒である。

○三上（みかみ）　庄吾（しょうご）

・身長　188．8cm
・体重　71．2kg
・誕生日　8月24日
・担当楽器　トランペット（小五から）
・出身中学　桜田市立第一中学校
・クラス　1－B
・得意教科　社会全般
・苦手教科　英語、数学

・家族構成　　父、母
・好きなアーティスト　　コブクロ

とにかく背が高い。勉強は苦手で、入試も２４０人定員で、２３９番だったらしい。先斗達とは小学校は同じだったが、中学入学時に先斗を吹奏楽部に誘ったところから仲良くなった。小学校から金管バンドに所属。食欲旺盛。

○坂根（さかね）　美香（みか）
・身長　　１５１、２ｃｍ
・体重　　４３、９ｋｇ
・誕生日　　３月２２日
・担当楽器　　フルート（高校から）
・出身中学　　桜田市立第四中学校
・クラス　　１―Ｄ
・得意教科　　英語、国語
・苦手教科　　物理
・家族構成　　父、母、姉（４つ上。大学に通っている）
・好きなアーティスト　　いきものがかり

おとなしく、引込み思案である自分を変えたくて吹奏楽部に入部。フルートは近所に住んでいる女性が吹いているのを見て憧れていた。読書家で、大体図書室にいる。中学校のときは文芸部。

○有吉（ありよし）　弥生（やよい）
・身長　　１６０、２ｃｍ
・体重　　４８、７ｋｇ

・誕生日　５月４日
・担当楽器　Ｂ♭クラリネット（高校から）
・出身中学　桜田市立中原中学校
・クラス　１―Ａ
・得意教科　数学
・苦手教科　生物
・家族構成　父、母、祖母、祖父、妹（９つ下）
・好きなアーティスト　ＦＬＯＷ

中学時は合唱部。唯とは塾で知り合い、すぐに意気投合。実は庄吾とも面識があるのだがおしゃべりに夢中で忘れていた。根っからの方向音痴で塾で迷子になったことも…。９つ下の妹をとてもかわいがっている。

○東（あずま）　茜（あかね）
・身長　１６１、７ｃｍ
・体重　５０、７ｋｇ
・誕生日　１１月７日
・担当楽器　Ｂ♭クラリネット（高校から）
・出身中学　桜田市立北中学校
・クラス　１―Ｅ
・得意教科　英語、化学、物理
・苦手教科　古典
・家族構成　父、母、兄（４つ上）、妹（９つ下）、弟（１１つ下）祖母
・好きなアーティスト　Ｓｕｐｅｒｆｌｙ

冷静な性格。中学時は生徒会の活動を行っていて、部活には入らなかった。高校では青春したい！と思っていた時吹奏楽に出逢う。

父母が共働きのため、家事スキルが高い。

○吉岡（よしおか）　奈津美（なつみ）

・身長　１６１、７ｃｍ
・体重　４９、８ｋｇ
・誕生日　７月１２日
・担当楽器　テナーサックス（高校から）
・出身中学　桜田市立中原中学校
・クラス　１―Ａ
・得意教科　現代文
・苦手教科　現代社会
・家族構成　父、母、兄（ひとつ上。桜田農林に通っている）
・好きなアーティスト　Ｍｒ．Ｃｈｉｌｄｒｅｎ

中学時はバトミントン部。弥生に誘われて入部を決意。兄が高校の吹奏楽でサックスをしているため、サックスを希望。とても明るい。

○進藤（しんどう）　慶太（けいた）

・身長　１８３、１ｃｍ
・体重　６９、８ｋｇ
・誕生日　１２月８日
・担当楽器　バリトンサックス（高校から）
・出身中学　桜田市立桜田南中学校
・クラス　１―Ｆ
・得意教科　英語
・苦手教科　化学

・家族構成　父、母、姉（８つ上。ＯＬ）、弟（３つ下）
・好きなアーティスト　コブクロ

小学校時は桜田一中校区に住んでいたが、中学入学時に借家から新築に引っ越し、南中に。中学時はバスケットボール部だったが、怪我のため続けることができなくなる。庄吾の誘いで吹奏楽部に入部。弟も吹奏楽部でバリトンサックス担当に。ベースが弾ける。

○田中（たなか）　拓也（たくや）
・身長　１７４、８ｃｍ
・体重　６０．８ｋｇ
・誕生日　８月１９日
・担当楽器　Ｂ♭クラリネット（高校から）
・出身中学　桜田市立第二中学校
・クラス　１－Ｂ
・得意教科　情報、数学
・苦手教科　古典
・家族構成　父、母、三つ子の姉、兄
・好きなアーティスト　ＥＸＩＬＥ

三つ子の末っ子。心配性な性格。中学時はパソコン部に所属。インターネットを使うのがうまく、検索能力、情報処理能力はピカイチ。

○今井（いまい）　里穂（りほ）
・身長　１５８．８ｃｍ
・体重　４９．２ｋｇ

・誕生日　８月２８日
・担当楽器　トランペット（小学校時経験アリ）
・出身中学　桜田市立北中学校
・クラス　１－Ｅ
・得意教科　英語
・苦手教科　生物
・家族構成　父、母、祖母、祖父、叔父家族（叔父、叔母、いとこ）
・好きなアーティスト　大塚　愛

中学には吹奏楽部がなかったため、中学時は美術部にいた。ブランクがあるため、初めは入るのを躊躇していたが、茜に背中を押されて、入部を決意。

○田中（たなか）　龍也（りゅうや）
・身長　１７４、８ｃｍ
・体重　６０．８ｋｇ
・誕生日　８月１９日
・担当楽器　ホルン（中一から）
・出身中学　桜田市立第二中学校
・クラス　１－Ｃ
・得意教科　生物
・苦手教科　英語
・家族構成　父、母、三つ子の姉、弟
・好きなアーティスト　倖田　來未

三つ子の真ん中だが、三人の中で一番しっかりしている。冷静で、客観的に物事を見ることができるが、たまに冷たいと感じられる場合もある。

○倉橋（くらはし）　加奈子（かなこ）
・身長　１６８、７ｃｍ
・体重　６３、０ｋｇ
・誕生日　６月２３日
・担当楽器　トロンボーン（高校から）
・出身中学　桜田市立桜田北中学校
・クラス　１－Ｄ
・得意教科　化学
・苦手教科　数学
・家族構成　父、母、双子の弟（桜田工業に通っている）、祖父
・好きなアーティスト　ＡＳＩＡＮ　ＫＵＮＧ－ＦＵ　ＧＥＮＥＲＡＴＩＯＮ

豪快な性格。男女隔てなく話すことができる。匠とはＡ県時代の幼友達。双子の弟がいて桜田工業高校に通っている。自宅は果物屋で、弁当のデザートに事欠いたことはない。中学のときはバレーボール部。

○黒田（くろだ）　匠（たくみ）
・身長　１６９、５ｃｍ
・体重　４９、８ｋｇ
・誕生日　７月１２日
・担当楽器　ユーフォニウム（中学１年から）
・出身中学　愛媛県松方町立松方中学校
・クラス　１－Ｄ
・得意教科　数学、英語

・苦手教科　なし
・家族構成　父、母
・好きなアーティスト　ＳＥＡＭＯ

無口。だが話すときは話す。加奈子とは幼友達。松方中学校時はトロンボーン、パーカッションも兼任。頭が良く、学年の５本の指に入る。

○竹原（たけはら）　優樹（ゆうき）
・身長　１６３、８ｃｍ
・体重　５６、８ｋｇ
・誕生日　１月１３日
・担当楽器　パーカッション（高校から）
・出身中学　桜田市立第三中学校
・クラス　１－Ｃ
・得意教科　古典
・苦手教科　英語
・家族構成　父、母、姉（１つ上）
・好きなアーティスト　ｍｉｈｉｍａｒｕＧＴ

中学時は野球部。試合中聞こえてきた吹奏楽の音に興味を持ち、入部。前向きな性格。鍵盤楽器とティンパニが得意。

○田中（たなか）　ひかり
・身長　１５４、７ｃｍ
・体重　４７、８ｋｇ
・誕生日　８月１９日
・担当楽器　パーカッション（高校から）

・出身中学　桜田市立第二中学校
・クラス　１－Ａ
・得意教科　現代文
・苦手教科　数学
・家族構成　父、母、三つ子の弟ふたり
・好きなアーティスト　Ｅｖｅｒｙ Ｌｉｔｔｌｅ Ｔｈｉｎｇ

三つ子の長女。三兄弟の中では影の支配者？
中学生のときにバンドを組み、ドラムを担当していた。
ドラムとスネアドラムが得意。

○渡辺（わたなべ）　和志（かずし）
・身長　１６５．８ｃｍ
・体重　５９．２ｋｇ
・誕生日　２月２２日
・担当楽器　パーカッション（高校から）
・出身中学　桜田市立第三中学校
・クラス　１－Ｃ
・得意教科　現代文
・苦手教科　漢文（古文は普通）
・家族構成　父、母、兄二人（３つ上、１つ上）
・好きなアーティスト　ｍｉｈｉｍａｒｕＧＴ

中学時代は合唱部。優樹とは中学のとき、好きなアーティストの話で盛り上がり、仲良くなる。小物楽器が得意。

■先生達

○西村（にしむら）　京（たかし）

・年齢　22才
・誕生日　12月9日
・担当科目　現代社会
・担任クラス　1－B　副担任

吹奏楽部顧問。中学時はトランペット、高校時にバスクラリネットを担当。まだ教師になって日が浅いのでいろいろ悩むことも。桜田東高校出身でそのときは梶原先生が顧問だった。

○梶原（かじはら）　静香（しずか）

・年齢　46才
・誕生日　1月7日
・担当科目　化学
・担当クラス　1－B　担任

学年主任のため、吹奏楽部の顧問はできないが、いろいろな面でサポート。学生時代はフルートを担当していた。三人の子供の母親。

○朝倉（あさくら）　智子（ともこ）

・年齢　32才
・担当科目　音楽

・担当クラス　１―Ｄ　担任

合唱部顧問。明るいがちょっとドジ。

○池田（うちだ）　内人（ないと）

・年齢　２９才

・担当科目　保健体育

・担当クラス　１―Ａ　担任

柔道部顧問。

○仲里（なかざと）　紗香（さえか）

・年齢　２５才

・担当科目　数学

・担当クラス　１―Ａ　副担任

卓球部顧問。中学時は卓球部だったが、高校では吹奏楽部でオーボエを吹いていた。

○杉原（すぎはら）　純也（じゅんや）

・年齢　２２才

・担当科目　現代文

・担当クラス　１―Ｃ　副担任

高校時代吹奏楽部でパーカッションを担当。

○牛田（うしだ）　武久（たけひさ）

・年齢　　４９才
・担当科目　　英語文法
・担当クラス　　１－Ｅ　担任

サッカー部顧問。授業が早いことで有名。

■他校

○朝田（あさだ）　悠莉（ゆうり）

・学校　　桜田商業高校
・学年　　１年
・担当楽器　　チューバ

桜田一中時代に先斗たちと同じ部に所属。現在は桜田商業でチューバを担当。

○村松（むらまつ）　ゆかり

・学校　　桜田農林高校
・学年　　２年
・担当楽器　　パーカッション

出身校は桜田四中。中学校時はユーフォニウムを担当していた。
人数が少ないためいろいろな楽器をするので、基本なんでもできる。

○内田（うちだ）　海里（かいり）

・学校　桜田農林高校
・学年　1年
・担当楽器　パーカッション

出身は桜田南中。中学時は一年のときは卓球部だったが、2年から吹奏楽部に転部、パーカッションを担当。鍵盤楽器が得意。

○高田（たかだ）　瑞希（みずき）

・学校　桜田工業高校
・学年　2年
・担当楽器　パーカッション

桜田二中出身。課題曲を演奏したことがないので大編成をうらやましく思っている。
打楽器が一人きりなので基本オールマイティ。

コラムC　登場人物紹介（後書き）

携帯では見づらいかもしれません。
意見があれば調整します。

1／29
登場人物に
・東（あずま）　茜（あかね）
・今井（いまい）　里穂（りほ）
・渡辺（わたなべ）　和志（かずし）
を追加しました。

4／11
登場人物に
・村松（むらまつ）　ゆかり
・内田（うちだ）　海里（かいり）
・高田（たかだ）　瑞希（みずき）
を追加しました。

２２話　ファミレスでの会話

場所は変わってファミレス。この前と違う店で、入り口にはスイーツフェスティバル開催中と書かれた旗が立っている。

「俺はドリンクバーとチーズケーキだけでいいよ」

先斗はメニューをちらっと見て、そう答える。

合計で￥４８８。ドリンクだけだと高いのでケーキもつけた。

「あたしはケーキバイキングとドリンクバーとチョコレートパフェね」

相変わらず甘いものに目がない唯。その資金はどこから出ているのだろうかと先斗はあきれる。（計￥１３２１）

「俺はケーキバイキングと、ハンバーグセットとドリンクバー」

庄吾はごちゃ混ぜだ。どこにそんなに入るんだろうか？（計￥１２６０）

残りの四人はケーキバイキングとドリンクバーにしたようだ。

隣り合った席がなかったので七人は男女に分かれて少し離れた席に座った。

女子側ではおしゃべりが続いている。意外にも美香はかなり会話に参加していた。唯たちからいい影響を受けているのだろうか？一番最初のころからは考えられなかったことだ。

「なあなあ、先斗」

先斗がその様子を眺めていると、優樹が話しかけてきた。

「なんだ？」

答えて、コーヒーを口に運ぶ。

「お前、中島が好きなのか？」

ブホッ！

先斗は思わずコーヒーを噴き出した。

「あっ、もう汚いな～」

さっとコーヒーを避けた優樹が紙ナプキンを取る。

「お前がそんなこと聞くからだろうが。なんだよいきなり」

受け取った紙ナプキンでテーブルを拭きつつ答える。

「なんか気になってさ。幼馴染みがいて付き合ってるってのはベタな展開じゃん」

「漫画の読みすぎだ。あいつとはそんなんじゃないよ」

「本当にか？庄吾」

そう言って先斗の隣の庄吾に話を振る優樹。

「俺に振るなよ。まあバカップルに見えないこともないけど、こいつらはないと思うぞ？俺の見てきた限りでは」

「ふーん。そうなのか。付き合ってるかと思ってた」

「勘弁してくれよ。唯は確かに話しやすい奴だけどさ、付き合うとは別だよ」

そう言って先斗はコーヒーをまたすすった。

一方、女子のテーブル。

パクパクとケーキを食べる唯。

「ケーキおいし～！」

「ゆ、唯ちゃん……」

美香が度肝をぬいている。

「よく入るね……」

奈津美もあきれ気味だ。

「相変わらずだね。唯」

その中で一人だけ平然と唯を見ている弥生。

「甘いものは別腹なのよ」
「いや、いくらなんでも食べ過ぎ……」
奈津美が突っ込む。
唯は今5個目のケーキを食べ終えて、次のを取りにいこうとしているところだった……。
「よく太らないよね。なにか運動でもしてるの？」
「ジョギングと楽器吹くぐらいしかしてないけど？」

楽器を吹くのも結構体力がいる。唯も中1の時は帰ったらバタッと寝てしまうこともしょっちゅうだった。
なので体力をつけるためにジョギングを始めた。それが習慣となっていて、今も週に三回ほど走っているのだ。

「確かにフルート半日吹いてると疲れるかも」
それを聞いて美香が呟く。
「フルートはチューバより息を使うらしいからね。大変だよ」
「そうなの？がんばらなくちゃ……。私ももう一個食べようかな？」
「じゃあ取りに行こうか」
「うん！」
二人はケーキを取りに向かった。
「美香ちゃんも4個目じゃない？」
「そういえば……いいよね、食べても太らないって」
「うん……」
その後ろで、奈津美と弥生は深いため息をついたのだった。

ファミレスから出てすぐに解散する。
東桜田駅から唯と二人で歩きながら、先斗はいろいろと考え込んでいた。
唯と付き合うのは正直考えられない。でもこの間のドキドキはなんだったんだろうか？

そんなことを考えている途中で、ふと隣を見る。
「……クリームついてるぞ？」
「へ？あっ、本当だ」
そう言って口についているクリームをなめる唯。
（やっぱりないよな…）
そう自分に言い聞かせて先斗は帰路についた。

23話　役割

火曜日。とうとう曲決めの日だ。
「じゃあさっそく投票に移るぞ。紙を配るから曲名を書いてくれ。無記名でいいからな」
「「はい！」」
京の指示に全員が返事を返す。
美香から紙が回ってきたので先斗は一枚取って弥生に渡した。

「書けたか？」
「ちょっと待ってくださ～い！」
京の声に奈津美が慌て声で叫ぶ。
「慌てなくていいから、考えて書けよ？三ヶ月やる曲だからな」
「は～い！」
奈津美も書き終わり、紙が回収される。
「じゃあさっそく開票するか。中島手伝ってくれ」
「はい」
「じゃあいくぞ。『セドナ』、『星の情景』……」
京が曲名を言い、唯が黒板に曲名を書く。

１１票目が投じられ、現在、『星の情景』が４票、『セドナ』が３票、『感謝と喜び』が４票と大接戦だ。
「『セドナ』」
１２票目が投じられ、どの曲も４票。次で決まる。
「最後」
音楽室が緊張に包まれる。
「『感謝と喜び』。じゃあ『感謝と喜び』に決定だな。それでいいな？」
最終確認をとる京。

「「はい！」」
そしてそれに全員が大きな返事を返した。
「よし！じゃあ楽譜持って来るから待っててくれ」
そういって京は音楽室を出ていった。

音楽室はさっきとうって変わってお喋りの輪に包まれる。
「唯は何に入れたんだ？」
先斗は唯に聞いてみた。
「『感謝と喜び』。先斗は？」
「『セドナ』。なんかあの3曲の中で一番かっこよかったし」
「でも『セドナ』グレード高いよ？」

グレードとは、楽譜の難しさをあらわすもので、1～5までがある。
数字が小さいほうが簡単な曲ということだ。

「え？　そうなのか？　……『セドナ』ってグレードいくつだ？」
「3，5だって」
「3，5！？」
グレード3，5は初心者には結構きついかもしれない。

「……他の二つは？」
「『感謝と喜び』が2．5。『星の情景』が2よ。あたしは『星の情景』のほうが好きだったけど、打楽器多くないとできそうにないから『感謝と喜び』に入れたんだ」
「俺なんも考えてなかったな……」
先斗は少し反省した。
「まあ仕方ないよ。グレードのことは曲のこと調べて偶然知ったから。でも先生はなんで『セドナ』を候補曲に選んだのかな？　1つだけ難しさが突出してる気がするんだけど……」

「楽譜配るぞ～」
そこで京が帰ってきて、前から楽譜が回ってきたので、２人はお喋りをやめた。

「はぁ～」
練習終了後、先斗が帰ろうとしていると、慶太が溜め息をついているのを見つけた。
「どうした？」
「先斗か。楽譜みてたらなんか落ち込んでさ」
「どうしてだ？」
「中島や吉岡の譜面はメロディが多いだろ？同じサックスなのになんで俺だけのばしなんだろ」
「低音楽器だからなぁ。みんなを支える役目があるんだよ」

低音楽器のバスクラリネット、バリトンサックス、チューバ、コントラバス、ファゴットは和音の一番下の音（根音とも言う）を担当することが多い。そのため、楽譜によっては伸ばしばかりで旋律が全くない、と言った状態になることもあるのだ。

「でもなぁ」
「……そうだな。じゃあこれ聞いてみるか？」
先斗は楽譜棚の横のＣＤラックを探った。
「あった。はいこれ」
そして慶太にあるＣＤを渡した。
「これは？」
「サックスアンサンブルのＣＤ」
「アンサンブル？」

アンサンブルとは少人数で演奏する演奏体系だ。
吹奏楽も大雑把に言えば大きなアンサンブルとも言える。

「バリサクの音もしっかり聞こえるはずだ」
「分かった。聞いてみるわ」
「じゃあ俺帰るから」
「ああ。じゃあな」

帰りながら先斗は中学の時のことを思い出していた。
自分の楽譜は刻みなのに、隣のユーフォニウムの楽譜が１６分音符の嵐だったことに驚いたり、ポップスの楽譜で延々４分音符のみだったりした。
低音は必要ないんじゃないかと感じたこともあった。
でも。ある日からその考えは大きく変わったのだ。

中学2年生の初冬のある日、先斗は委員会の仕事で遅くなり、合奏の開始に間に合わなかった。
その週の初めに急に寒くなったため、その時期は部内でも風邪が流行っていて休みが続出。今日は４０人ほどしかいないと言う。
風邪は特に低音セクションで猛威を振るった。悠莉とチューバの後輩、コントラバスの1年生、ファゴットの2年生は休み。バリトンサックスとバスクラの2人は早退で、低音セクションで無事なのは2年生のコントラバスのみだった。

部室の外で音出しをしていると曲練習がもう始まってしまった。例の４分音符ばかりの曲だ。
「やばい……」
それを聞いて必死で音階をさらうがあせって指が回らない。
「あれ？」
しかし次の瞬間、違和感を感じて先斗は吹くのをやめた。
音楽室は一応防音はされているが音は少なからず漏れてくる。し

かし、低音が全く聞こえてこないのだ。
４０人ほどいる中にコントラバス一台なので聞こえにくいのは当然だが、なんだか音楽が上に寄ってしまっていてなんだか気持ちが悪い。
音出しを終えてすぐに音楽室に入る。
「遅れてすみませんでした」
「じゃあ続きやるから入って」
「はい」

曲が始まる。最初はフルートソロなので気にならなかったがさっきと低音が入るところになると音楽が違うことを感じてきた。
「ＯＫ。やっぱりチューバ一本入ると違うね」
顧問がそう言って笑いかけてくれたのを先斗は今も覚えている。
そしてその日から先斗の意識が変わった。

土台があれば上に物がたくさん詰める。もし土台の工事をいい加減にやってしまったら建物は崩れる。音も同じことだ。
和音を建物に見立てると、一番下の低音が安定していれば高音楽器も吹きやすい。逆に低音がいなければ音楽は全く味気ないものになってしまう。
地味だけどなくてはならないもの。それがベースラインなのだ。

２４話　それぞれのパート練習

５月３日（木・祝）。
今日はゴールデン・ウィーク初日。吹奏楽部は３日と４日は練習で、５日と６日が休みとなっている。
そして４日は一日練習で初合奏だ。
だから今日は半日セクション練習になっている。

３－Ａの教室ではフルート、クラリネットセクションが音階練習をしている。
音階は木管に必須な練習だと静香に言われたのでセクション練習のメニューにしているのだ。
「次、Ｅ♭ｄｕｒ」
「「はい」」
今日は弥生が仕切っている。
チューナー（音程を測る機械）を使ってゆっくりピッチを合わせていく。
この練習を始めたのは二週間前から。やっと運指表を見ずに簡単な音階がさらえるようになってきた。でもピッチはなかなか合わないし、シャープやフラットが多い音階は指が回らない。
まだまだ練習が必要だなと思いながら４人は練習を続けた。

３－Ｃの教室では庄吾と龍也が基礎練習を終えて、個人練習をしていた。
「あ～あ……」
「どうした？」
庄吾がため息をついているのを見て、龍也が尋ねる。
「……ここが」

そう言って楽譜を指し示す龍也。
「ん？あ、ソロじゃないか。いいな」
「いや、俺ソロあまり吹いたことないんだよ……」
「え？トランペットってソロ多いじゃないか？庄吾そんなに下手じゃないだろ？」
「いや、実はな……」
意外そうに聞く龍也に、庄吾は説明を始めた。

庄吾が中学生のとき、トランペットの同期は庄吾を含めて3人だった。
そのうち1人は小学生から吹いていたためとても上手く、ソロはほぼ全部彼女が担当することになっていたのだ。
結局庄吾がソロを吹いたのは中学三年間で二曲のみ。そのうち一曲は引退コンサートで三年全員にソロがまわせる曲だったので実質一曲だけだ。

「そうなのか……。まあ俺もあまりないけど。聞いててやろうか？」
「じゃあ頼む」
「カウント入れるぞ」
龍也のカウントで庄吾はソロを吹き始める。8小節のソロ。さらに曲のド頭だ。
少し音の上下が激しいが何とか吹けた。

「どうだった？」
「う～ん……。ちょっとアタックがきつすぎるかな。この曲はバラードだからもう少し柔らかいほうがいいと思う、後、リズムが流れてしまっているから…」
龍也は聞いて思ったことを5つ以上並べる。
「これくらいだな……。あ、ごめん。俺結構きつく言っちゃうタイプだから……。つい言い過ぎちまうんだよな」

庄吾の様子を見て、ちょっとすまなそうな顔をする龍也。
「いや、参考になった。ありがとう」

人に意見を言ってもらうことは上手くなるために不可欠である。自分で気づけないことはたくさんあるからだ。
例えば姿勢。よい姿勢でないと息はうまく吸えない。自分でよい姿勢だと思っていても崩れていることはよくある。
確かにたくさん言われたが全部当たっているので参考になる。
庄吾はメモを取り、また練習を始めた。

【第二音楽室】
パーカッションはパートで曲練習を行っていた。
「グロッケンなんか音が硬くない？」
「そうかな？」
今、グロッケンがメロディに入るところを合わせている。
「マレット変えてみたら？」
そう言われて柔らかいマレットに変えてみる優樹。

キーン！

「あ〜、まだ硬いよ。それじゃあ耳に痛い音になっちゃう」
「どうしよう」
これ以上柔らかいマレットはない。

「調子どうだ？」
京が入ってきた。後ろに誰か立っている。
「あ、杉原先生だ」
杉原（すぎはら）　純也（じゅんや）。
１－Ｃの副担任で現代文担当。京と一緒で２２歳の新任教師だ。

「この2人？」
「ああ。パーカッションの竹原と田中だ」
京と純也は2人でなにやら話をしている。

「先生？」
ひかりが怪訝そうな顔をして京に声をかける。
「ああ、悪い。杉原先生は学生時代にパーカッションやっていたから指導してもらおうと思ってな。頼んで来てもらったんだ。じゃあ杉原先生、お願いします」
「分かった」
京が出て行く。

「今何の練習をしているんだ？」
「文化祭でやる曲の練習をしていたんですけど……」
「なにかあったのか？」
ひかりの声の調子に純也は問いかける。
「優…竹原君のグロッケンの音が耳に痛い音になっちゃってて。マレットを変えてもそのままなんです」
「ちょっと叩いてみてもらっていいか？」
「あ、はい」
グロッケンの前に立ち、優樹はマレットを構えた。

キーン！
また耳に痛い音。

「あ、ちょっといいか？」
そういって優樹の肩を触わる純也。
「あ～。やっぱりな」
そして、頷いている。
「どういうことですか？」

「肩に力が入りすぎてる。グロッケン叩くときそんなに力が入ってたら音もきつくなるぞ。そうだな、一回マレット置いて肩の力抜いてごらん」
言われたとおりに脱力してみる優樹。
「じゃあそのままマレット持って叩いてみて。叩きつけるんじゃなくて優しく当てるイメージで」
言われたとおり叩くと、ポーンとさっきと全く違う音が楽器から奏でられた。
「そう。グロッケンは高くて澄んだ音がするから、きれいに叩けるとすごく響くんだ。そのイメージで演奏するといいよ」

その後も純也に奏法を確かめてもらった。
時間はあっという間に過ぎて、もう片付けの時間になる。
「じゃあ、また分からないことがあったら聞きにおいで」
「「はい！」」
２人は笑顔で返事をした。
明日は合奏だ。

２４話　それぞれのパート練習（後書き）

25話　パート練習～昼休み

5月4日（金・祝）。
今日の午後は合奏だ。午前中は昨日のようにパート練習を行っている。
サックスセクションは3－Bでロングトーンの練習中だ。楽器にしっかり息を入れて音をまっすぐ伸ばすことができなければ細かい音符には全く息が入らず、観客まで音が飛んで行かない。
それにロングトーンで自分の調子を確かめることができる。だからロングトーンは大切な練習の一つだ。
「半音階で上がっていって」
「「はい」」
各音を3人で合わせていく。この3人で音がはまらなければ全体でも合わないからだ。

「あ、そろそろ時間だ」
慶太が時計を見て呟いた。
「あ、低音セクションか。いってらっしゃい」
バリトンサックスは低音でもあるのでチューバの先斗とあわせる必要もあるのだ。
楽器をしまって慶太が出て行く。
「じゃあ感謝と喜びやってみようか」
「は～い！」
唯の声に奈津美が元気に答えた。

一方、3－Dの教室では先斗、加奈子、匠の三人がリップスラーの練習をしていた。
リップスラーは、金管奏者にかかせない練習で、唇の柔軟性を付けるための練習だ。

唇に柔軟性があれば、音の間を滑らかに演奏したり、音の上下の激しい楽譜を吹くのが楽になる。
『感謝と喜び』と、『ＳＡＫＵＲＡ』にはスラーがついた動きが多い。特に『ＳＡＫＵＲＡ』はバラードなので、変な音がしたらモロばれだ。
ゆっくりなスラーの練習から始めて、だんだん早いものにしていく。

「じゃあ一回休憩しようか」
匠の指示で休憩となった。加奈子はペットボトルのお茶を取り出し、飲んだ。

楽器は長く吹いているとばててくる。金管楽器はリップリードと言って唇の振動を楽器で増幅させるため特にだ。

「先斗。低音セクしに来たけど」
「あ、慶太か。じゃあ俺隣でセクしてくるから」
慶太がやって来た。
「わかった。じゃあ俺たちは曲練しよう」
「うん」
２人は楽器を構えた。
ユーフォニウムとトロンボーンは音域が近いが、音質が違う。
トロンボーンは直管なので真っ直ぐ音が飛んでいく。
それに対し、ユーフォニウムは何回も管が曲がっていて、ベルが上斜めに向いているため、響きが増幅されて柔らかい音になるのだ。
その音色は木管、金管どちらにもよく合うので、主戦律、対旋律、リズムとなんでも担当できる。

「ん？ストップ」
感謝と喜びの最初のところで匠が止める。

「どうしたの？」
ここは匠と加奈子は同じ動きだ。
今の演奏を振り返ってみる加奈子。
スラーはなんとかつながったが……。
「音程だな」
「音程？」
「音の幅が大きいところでちょっと無理矢理上がってないか？」
「……かも」
「音がぶら下がってる」
「どういうこと？」
「つまりな……」
匠の説明によると、音の幅が大きいところ、シャープやフラットが入り混じっているところ、高い音、低い音のところで音程がイメージ出来ていないために音程が下がったり、上がったりすることがあるらしい

「どうしたらいいの？」
「そうだなぁ……。俺は音を歌ってみるけど」
「歌う？」
「ああ。ちょっとチューナー貸してくれ」
「はい」
加奈子はチューナーを渡す。

「ここだな」
楽譜のさっき止まったあたりを指差される。そこだけ音程の幅が大きい。
「最初の音、歌って」
「え、あ、うん。アー」
「次の音に上がって」
「アー」

音を変える。
「そう。じゃあそのまま伸ばしてて」
そう言って匠はチューナーを操作して二つ目の音に変える。
ワンワンと変な感じがする。
「ストップ。うなってるのが分かるか？」
「うん」
「それが起こるのは音程が合ってない時なんだ。じゃあチューナーの音に合わせて」
「アー」
うなりがなくなった。
「じゃあ次楽器で」
楽器で音を出してみる加奈子。チューナーの音にぴったり合った。
「じゃあ楽譜どおりで」
「わかった」
「1、2、3、4」
下降系のメロディから伸ばしに移る。
「そう。音をイメージすれば少しずつだけど合ってくるから。今は加奈子一人だけど、来年後輩が入ってきたらより大変になってくるぞ」
「どういうこと？」
「大編成の曲だと、トロンボーンは基本1st、2nd、3rdの3声なんだ。トロンボーンはスライドだから他の管楽器より音程いじりやすいだろ？だから重要なハーモニーを組む場合が多いんだ」
「そうなんだ……」
まだ楽器を始めて1ヶ月の加奈子には遠い話だと思えてしまう。
「ま、今はまず正しい音程で吹くことからかな。じゃ、曲戻るか」
「うん！」
そうやってセクション練習の時間は過ぎていった。
曲練習を終えて先斗たちは楽器庫で楽器の手入れをしていた。

「合奏って最初から曲をやるのか？」
「いや、最初にチューニングやったり基礎連やったりする」
クロスで楽器を拭きながら先斗は答える。

「あ、先斗」
唯達がやってきた。
「セクションどうだった？」
「まあまあかな」
部室に戻るとみんな帰ってきていて、それぞれ昼飯を広げている。
「あ、倉橋の弁当うまそう」
優樹がうらやましそうに見る。
「あ、これあたしが作ったの」
「マジ？」
「うん。うち果物屋だからデザートには自信あるよ！」
「あれ？引っ越してきたんじゃなかったっけ？」
「ああ、おじいちゃんがやってたんだけど、五年前に一回倒れたの。心配だから戻ってこようって話になったらしくて」
「そうなんだ」
「みんなも食べる？」
もうひとつのタッパーから出てきたのはタッパーいっぱいのイチゴだった。

「あ、食べる食べる！」
唯が真っ先に一つとって口に入れる。
「甘～い！」
「ほんと？じゃあわたしも！」
そういってみんながつまむ。
甘いイチゴをつまみつつ、昼休みは過ぎていった。

26話　初合奏

1時15分。京が第二音楽室に入ってくる。

「「こんにちは！」」

一斉に挨拶する部員達。

「こんにちは。じゃあ初合奏という訳だけど……。みんな固くなってるな～」

緊張している部員に対し、ラフな感じの京。

「リラックス、リラックス。とりあえず今は楽しんで吹こう」

緊張し過ぎると息は吸いづらくなる。

しかも音は固くなるし、小さくなるしでいいことはなにもない。

「私達はどうなるんですか～？」

ひかりがつっこむ。

「悪い悪い。楽しんで演奏しよう」

そのツッコミで空気が少しやわらかくなった。

「チューニングはしてきたか？」

それにうなずく部員たち。

「よし！じゃあみんなでB♭伸ばして。打楽器はスネアと鍵盤で八分音符を刻んで」

「「はい！」」

京が手を上げて合図する。

「3、4」

ヴォワワワワア～！

悲惨な音が音楽室に響く。

「そうだな。まず、音の頭をそろえて」
「「はい！」」
「3，4！」

プワアアアア～！

「うん。じゃあ、木管は中島、金管は三上を観察してみて。二人は吹いて」
「え？」
「あ、はい」

パアー！

二人が吹くと音はまっすぐ一本のように聞こえる。
「坂根、音が混ざっているのが分かるか？」
比較的近くにいた美香に京がたずねる。
「よく分かりませんけど……全員で吹いたときより音が近づいているような気がします」
「音は？」
「響いてます」
「何でだか分かるか？西掛」
「……息の太さですか？」
「そう。太い息が楽器に入れば、音はよく響く。発音のイメージは、アかオにして、たくさん楽器に息を入れて。でも体はリラックスさせること」
「はい」
先斗はメモを取る。
「あ、西掛みたいにメモを取ることは重要だぞ。人間の記憶の七割は一日でなくなるって言うからな。メモ帳を用意しておいてくれ」
「「はい！」」

返事が音楽室に響き渡った。

その後、曲合奏をして、今日の合奏は終わろうとしていた。
「じゃあ合奏はここまでなんだが…」
「どうしたんですか？」
弥生がたずねる。
「この間、中島に部長をやってもらうことになったんだが、副部長も決めなくてはいけなかったんだ」

それぞれの部活動が五月から本格的に始動し始めた。
各部それぞれ部員が入り、最終的に部活動加入割合は９３％となった。
そしてゴールデンウィーク明けに部活動の予算の申請書を出すらしいが、そこには部長と副部長を書かなくてはならないらしい。

「誰かやりたい人はいるか？」
この間と違って場は静まり返る。

「じゃあ部長推薦してくれ」
「え？推薦ですか？」
「ああ。頼む。選ばれても拒否権はあるし」
「そうですね……」
ちょっと先斗のほうを見る。
「……龍也君どう？」
「俺はちょっと……自信ないな。まとめられる自身があまりない」
「そっか……。じゃあ庄吾どう？」
庄吾は中学のとき金管セクションリーダーだった。まとめるのは苦手ではないだろう。
「……俺でいいんなら」
「それじゃあ、三上が副部長だな。みんな拍手！」

部室は拍手に包まれた。
「遅くなっちまったな……。拓也たち帰ってるだろうな」
合奏後。龍也は楽器を磨いていて部室に入るのが遅くなった。
「あ、龍也くん」
部室には唯だけが残っていた。部室の鍵閉めは部長の仕事だったからだ。
「遅くなったな。先斗達は？　一緒じゃないのか？」
「本屋寄るって言ってた。駅で落ち合うことになってる」
唯は楽器を磨きながら答える。
「そっか。……なあ、何で先斗を推薦しなかったんだ？」
龍也の言葉に唯の手が止まった。
「……気づいてた？」
「ああ、俺を見る前に先斗をしばらく見てただろ」
「……先斗は中学のとき、副部長だったの」
唯は普段見せないような暗い表情で言葉をつなげた。
「じゃあうってつけじゃないか」
「でもね……」
「でも……？」
しかしそこから唯は口を閉ざした。
沈黙が続く。
「……ごめん。やっぱ話すのやめておく」
「言いづらいならいいけど……。まあ、聞かないでおくわ。じゃあ俺帰るな」
「うん」
龍也は楽器を棚に置いて、部室を出ていった。
「いつか話すことになるかもね……」
そう呟いて部室の電気を消して外に出る。
唯は部室の鍵をかけた。

27話　ある休日に

5月6日（日）。ゴールデンウィーク最終日。
龍也は暇なので拓也とひかりを誘って出かけることにした。

「どこ行く？」
「そうだなぁ…ゲーセンでも行くか？」
「お前には負けるからなぁ…」

拓也はゲーマーだ。パソコンでのオンラインゲームが一番好きらしいが、アーケードでもかなりやりこんでいる。

そのときだ。
「あれ？唯と庄吾だ」
商店街の途中で唯と庄吾が歩いている。
「先斗がいないな？」
「もしかして…デート？」
「え～！中島は先斗とかと思ってたのに」
口々に勝手なことを言うひかりと拓也。

「どうする？」
龍也はふたりにたずねる。
「…つけようぜ」
「…賛成者挙手」
ひかりの提案に三人とも手を挙げた。
「満場一致で可決されました」
龍也たちはそっと後ろから二人を尾行し始めた。

ふたりはしばらく行った先にあるショッピングセンターに入って

いく。
「買い物か…？」
このショッピングセンターは今年改修工事を終え、県最大級の大きさとなったもので、四階建てで東館と西館がある。
龍也たちは西館から中に入った。
「楽器屋に入ってくぞ」
このショッピングセンターには、クリーニング店、旅行代理店、大型書店、映画館、ゲームセンターなど計２００のテナントがはいっている。西館の二階に楽器店はあった。
「あ！クラリネットだ…」
拓也が目を輝かせている。
しかしその表情は値段を見て一変した。
「げ、２４万８千円！？」
「楽器は高いからなぁ…」
龍也が中学のとき使っていたホルンは４０万円した。
チューバは１００万円以上するものもある。
入門者用といって安い楽器もあるが、音程が悪かったり、癖があったりして逆に上達しづらい。
「ちょっと、二人見逃すよ」
「ああ、悪…」
「あ、このスティックいいな～」
言ったそばからドラムのスティックを見るひかり。
「なあ、二人行っちゃうぞ？」
そういって拓也が後を追う。
「あ、本当だ。急ごう」

「…」
龍也はちょっとため息をついて、二人の後ろを黙って追いかけるのだった。

三階。フードコートに入る。
マクドナルドの列に並んだ二人。龍也達は物陰から様子を伺う。
「つけたのはいいんだけどさ…これからどうする？」
「先斗は知ってるのかな？」
「知らないだろ。それなら三人で帰ったりしないよ」
そう分析する拓也。
「え～。先斗かわいそう…」

「誰がかわいそうだって？」
後ろから聞き慣れた声。おそるおそる振り返る。
そこにはブスッとした様子で仁王立ちしている先斗の姿があった…。

「ったく、何考えてるんだよ」
ポテトフライをつまみながら先斗は呟く。
もちろん龍也達が奢らされたものだ。
唯達が行った後、四人はマクドナルドで昼飯を取っていた。

「だってさ、唯と庄吾が二人きりで歩いてるんだもん」
「それで、なんで俺がかわいそうだという結論に達するんですか？」
「…だってクラス発表のときのやり取り見てたらねぇ…」
ひかりが反論する。
「うぐっ…俺は今日塾だったんだよ。だからここで待ち合わせてるわけ」
「な～んだ。でもなんでここ？東桜田から結構遠いじゃん」

この店は桜田中央駅から歩いて二十分くらいの距離だ。東桜田からはさらに遠いだろう。
「ああ、それはな…」

「お待たせ～」
唯と庄吾が戻ってくる。
「あれ？ひかりに龍也に拓也。三人揃ってどうしたんだ？」
「あ、ああ、たまたま会ったんだよ」
拓也が慌ててごまかす。
「ふ～ん。まあいいや」
庄吾はなんとか納得してくれた。

「ところで庄吾。服買えたか？」
「ああ。ここしか大きいサイズないからな。前、ＪＲで桐丘まで行ってたことを思うとほんと助かる」
「「えっ！？」」
三人が同時に叫ぶ。
「どういうこと？」
ひかりが思わず聞くと、
「こういうことだ」

庄吾の身長は１８８ｃｍ。このサイズとなるとなかなか合う服がない。以前はかなり遠くまで買いに行っていた。
しかし今年。このショッピングセンターが改築工事を行い、リニューアルオープンされた。
売り場面積が増え、店舗数も増えたため、大きいサイズを扱う店が入った。だから今回見に来た…らしい。

「な～んだ…」
へたり込む龍也達３人。唯と庄吾はわけが分からないようで、た

だその姿を見ているだけだった。

コラムD　高校案内

ある休日。先斗は部活を終えて家に帰っていた。

コンコン。
ノックの音。
「どうぞ～」
海斗が入ってきた。
「ん？海斗。なんだ？」
「あ、先兄。ちょっといい？これ、高校の案内。志望校考えないといけないんだけど…」
「そうか。海斗どこ行くつもりなんだ？」
「情報が少なくて…迷ってる」
「じゃあ中学のときの友達に聞いて書き足してやるよ」
それぞれメールを送る。

「返ってきた。えっと…」

○桜田中央高等学校

クラス数
普通科６クラス

２００７年４月に新設された新設校。元桜田西高等学校の校地にあり、旧校舎として利用されている。

○桜田東高等学校

クラス数
普通科　７クラス
理数科　１クラス
定時制　２クラス

桜田市の中で一番古い普通高校。部活動が盛んで、卓球部と合唱部が全国大会、野球部、吹奏楽部が支部大会に出場するなど、活躍している。文武両道をモットーとしていて、進学率は９７％と、かなり高い進学校。

○桜田女子高等学校

クラス数
普通科　３クラス
商業科　１クラス
英語科　１クラス
国際科　１クラス（廃止）

県内でもただ一つの女子高。新体操部が全国大会に進むなど部活も盛んだが、昨年のクラス削減で、存続が危ぶまれる部もある。

○桜田工業高等学校

クラス数
機械科　１クラス
電子機械科　１クラス
自動車科　１クラス
電気科　１クラス
情報システム科　１クラス
環境システム科　１クラス

男子生徒が八割を占める。進学率は５５％。就職先の案内も多い。
部活はバスケ部、アメフト部が県大会で上位の成績を修めている。

○桜田農林高等学校

クラス数
環境土木科　１クラス
食品化学科　１クラス
生物工学科　１クラス
森林化学科　１クラス
園芸化学科　１クラス

広大な敷地を持ち、校内の畑で育てられた作物は１０月の農林祭と１１月の商業高校での商業祭で販売される。
部活動は、弓道部が支部大会に出場している。

○桜田商業高校

クラス数
商業科　４クラス
普通科　２クラス
国際科　１クラス

女子生徒が８割を占める。十一月の商業祭は、いい物を安い価格で販売するため、かなりの客が集まる。
吹奏楽部が県大会で金賞を受賞、写真部が県の展覧会で優秀賞を受賞するなど、文化部の活動も盛ん。

○私立青南高等学校

クラス数
総合学科　６クラス
特別進学コース　１クラス

総合学科という、幅広く解説された科目の中から自分の興味や関心のある科目を自由に選択できる学科がある。
部活は、吹奏楽部が支部大会で金賞を受賞、男子テニス部、剣道部でそれぞれ全国大会への出場経験がある。
桜田市内で唯一の中高一貫校で、半分くらいの生徒は中学から持ち上がり。

○彩稜高校

クラス数　普通科４クラス
音楽コース　１クラス
美術コース　１クラス
特別進学クラス　１クラス

桜田市周辺の中学生達の憧れとも言える高校。毎年特別進学クラスからは多数の難関大合格者が出る。倍率は毎年２～３倍。
部活動は、吹奏楽部、バトミントン部、卓球部など多くの部活が全国大会出場を果たしている。

「…こんなかんじだけどどうだ？」
「サンキュー、先兄」
「あ、なにか追加あったら更新するかもしれないのでよろしくお願いします」
「…先兄？」
「あ、なんでもないなんでもない！」

「ご飯よ〜」
「あ、母さんが呼んでるぞ。行こう」
「…？わかった」
二人は階下に降りていった。

コラムD　高校案内（後書き）

今週末まで忙しいので更新できないと思います。年末年始で更新します。

28話　中間騒動

5月14日（月）。
桜田中央高校は、中間試験期間を迎えていた。

終礼時。静香がプリントを抱えて入ってくる。
「じゃあ中間試験の日程を配ります」
その言葉にクラス中から嫌そうな声が聞こえてくる。
「はいはい、静かに！」
先斗は前から回ってきたプリントを眺めた。

中間試験日程

5／21　1．数学α　2．現代文

5／22　1．理科総合A　2．世界史A　3．英語R

5／24　1．古典　2．現代社会

5／25　1．数学β　2．英語W

＝＝＝

「部活はテスト期間は原則休み。各自でしっかり勉強に励んでください」

「先斗助けてくれ～！！このままじゃ欠点だ」

終礼が終わった途端、先斗の元に庄吾が駆け寄ってくる。

「あのなぁ、今回は一ヶ月しかないからそんなに範囲も多くないはずだ……あ」

英語Wの範囲に唖然とする先斗。

p4～p33までの約30ページ。一ヶ月で授業は10回くらいしかなかったのだが……。

「そうだ……。牛尾の授業、異様に早いんだった……」

二人呆然としていると、唯がやってきた。

「どうしたの？」

「英語が訳わかんなくて……」

「庄吾は特に英語苦手だもんね、英語の入試の点だって……」

「言うな！」

それを聞いて、先斗は四月の終わりにあった高校入試の成績開示の時のことを思い出していた。

「先斗、どうだった」

事務室から出てきた先斗に尋ねる唯。

「まあ予想通り」

先斗は入試のあと、新聞に出ていた解答で自己採点をしていたので大体の点は予想できていたのだ。

「庄吾はどうだっ……た？」

その後に出てきた庄吾にも同じように聞こうとした唯の言葉が止まる。

庄吾の方を見るとなにかが抜けて出ていったかの表情をしていた。

「ど、どうした？」

すると庄吾は黙って開示をメモした用紙をふたりに見せた。

国語８７
数学５８
社会９７
理科７２

「なんだ、模試よりかなり点上がってるじゃ……！？」
しかし、その言葉も英語の点を見て言葉が止まる。
「じゅ、十……」
「言うな」
庄吾から発せられる声は低く、凄味があり、怖かったので先斗と唯はなにも言えなかったのだった。

「で、どうするの？」
桜田中央高校は３５点未満が欠点だ。欠点を取ると、追試、補習が待っている。

「５０点を目標にする」
「取れるの？」
「……唯」
「なに？」
「助けてください……」
「またぁ……？」
庄吾は中学の時から毎回唯の助けで再テストを免れてきたと言っても過言ではない。唯は英語が得意で、英検２級を持っているのだ。
「受験の前に高校では頼らないと言ってたのはどこの誰よ？」
「誰だっけ？」
「……はあ、わかったわよ。今度なんかおごってよ？」
「恩にきります……」

普段は少し強気の庄吾も勉強のことがあるときは唯に逆らえないようだ。
そして3人は勉強場所を求めて教室を出て行った。
場所変わって駅前の喫茶店。この店はチーズケーキが美味しいらしく、唯のお気に入りの店のひとつだ。
「じゃあ次。この括弧に入る関係詞は？」
「……ｗｈｉｃｈ？」
「違～う！ここは人とものが主語だからＴｈａｔ！」
「関係詞嫌いだ……」
「あんたは英語全部苦手でしょ！この１０点台！」
「１０点言うな１０点！お前だって中二の学年末、数学２５点だったくせに！」
「ちょっと！それ言わないでよ！」
そう言って騒いでいる二人の横で先斗は理科総合Ａの提出課題を解いていた。
「え～と、水兵リーベ、僕の船……ナナマガリ……。続きなんだったけな……」
しかし、理科が苦手なのでなかなか答えが埋まらない。
「あれ？先斗くんじゃないか」
いきなり声をかけられ、振り返るとそこには店員が立っていた。
しかし顔に見覚えがある。
「あ、航一さん」
思い出して声をあげる先斗。
その声に唯が振り向く。
「お兄ちゃん！」
「よ、唯。スパルタしてるな」
航一は手を小さくあげて唯に声をかけた。
航一は唯の兄で、大学一年生だ。

高校は松江にある進学校に通っていた。
そして、今春見事、島根大学に合格。通える距離なので、実家から通っている。

「どうしたんですか？こんなところで？」
「今週からここでバイトしてるんだ。三人はテスト勉強か？」
「はい」
「あ、そうだ。お兄ちゃん、今週暇？」
「え？ああ、今のところここのバイトしか入れてないし、ここは5時までだからこれが終わったら空いてるけど……」
「庄吾に英語教えてやってよ、欠点だ～！　って騒いでるの」
「いいよ。先斗くんは大丈夫か？」
「化学教えてもらえませんか？ちょっと苦手で……」
「OK。唯は数学か？」
「うん、お願い」
「じゃあ仕事終わるまで待っててくれるか？後一時間くらいだから」
「分かりました」
「じゃあ後で」
航一はカウンターの裏に入っていった。
「じゃ、安心したところでケーキ食べよっと。庄吾。支払いよろしく～」
「ちょ、俺5問しか教わってないぞ！？」
「一応教えたでしょ？先斗も食べたら？ここのチーズケーキ美味しいよ」
「じゃあ食べるかな。すみませ～ん！」
庄吾の抗議を無視して、ふたりはチーズケーキを注文するために店員を呼ぶのだった。

２９話　本番前日

５月２８日（月）。中間テストも終わり、文化祭まで一週間を切った。
庄吾も航一のおかげで欠点を免れることができた。
１０点代の英語がなんと６５点まで上がったのだ。
しかし、庄吾を悩ませるものが一つあった。

「三上、ソロ！もっと感情込めて吹け！」
「はい！」
『ＳＡＫＵＲＡ』の冒頭は庄吾のソロから始まる。今回の演奏はそのソロによって観客の心を掴むことができるかが重要だ。
庄吾の悩みはそのソロだった。

「はぁ～」
合奏後、落ち込む庄吾に先斗は声をかけた。
「大丈夫か？」
「ああ、…なんか曲のイメージが掴めないんだよな」
「音、聞いたか？」
「ＹｏｕｔｕｂｅでＰＶは見たんだけど…」
「何回も聞いてみるしかないかもな…」
「「はぁ…」」
二人同時に溜め息をついて、より落ち込んだ。

帰りの電車の中でもＩＰｏｄに入れた『ＳＡＫＵＲＡ』を聞く。
「うーん…」

実のところ、今吹くのが精一杯な状態だ。
リズムが難しく、龍也に言われた通り、音が流れてしまうし、音

の高低も激しい。
それはまだ改善できてきたのだが、西村先生に言われた感情を込めるということが難しい。

悩んでいても時間は過ぎていく。とうとう本番が明日になってしまった。
唯と先斗はなんとかソロを成功させているようで、余計焦ってしまう。

「じゃあ今日はここまで。明日の本番は午後からだから、３限から公欠になっている。音出しをして、１２：００から早めに昼御飯。１３：００から合奏、１３：４０から体育館に入って、弦楽部、合唱部の演奏を聞いて、本番だ。打楽器の搬入があるから３人手伝ってやってくれ」
「あ、俺やります」
「じゃああたしも」
「…俺もやります」
庄吾、奈津美、匠が手を挙げる。
「じゃあ楽器置いたらすぐに手伝ってやってくれ。じゃあ今日は解散。部長」
「あ、はい。起立、気を付け、礼！」
「「ありがとうございました」」

楽器を片付けて、鞄を持ち、部室を出る。
「庄吾くん」
後ろから声をかけられた。
「坂根？」
美香が立っていた。
「あの…」
「どうした？」

「…これ！」
そう言って、紙袋を渡された。何か入っているようだ。
「これ、な…」
「じゃ、またね！」
美香は走って、帰っていってしまった。
「なんなんだよ…」
紙袋を開けようかと思ったが、先斗達を待たせていたので、開けずに帰る事にした。

帰って紙袋を開ける。
「これって…」
中にはいきものがかりの１ｓｔアルバム、『桜咲く街物語』が入っていた。
「…聞いてみるか」
コンポにＣＤをセットする。
一曲目にいきなり『ＳＡＫＵＲＡ』。
「そうだ、歌詞カード…」
始めて歌詞カードを見た。今までは音の高低、雰囲気しか聞いてなかったため、何回も聞いていたのに、歌詞はおぼろ気だった。
「すげぇ…」
一気に聞き終わる。
「ん…？アコースティックバージョン？」
１４曲目に、『ＳＡＫＵＲＡ　ａｃｏｕｓｔｉｃ　ｖｅｒｓｉｏｎ』とあった。
早速再生してみる。
ボーカルの声と、ピアノのアルペジオが耳に入っていく。
最初に聞いた『ＳＡＫＵＲＡ』からも、暖かな印象を与えられたが、さらに暖かく、素朴な印象を覚えた。
「…これか」
なんか掴めた気がする。

「坂根、ありがとな」
リピートでかかる『ＳＡＫＵＲＡ』を聞きながら、庄吾はそのまま眠りについていた…。

「あれでよかったの？」
「うん。庄吾くん、あれ聞いたらたぶん何か感じてくれるかな、と思ったから」
夜。美香は家で唯と電話中だ。
「そうじゃなくて…好きなんでしょ？」
「へ？」
思わず聞き返す。
「庄吾のこと、好きなんでしょ？」
「…なんで分かったの？」
「だって、美香ちゃん、庄吾の話題になると、なんかテンション高いし声が嬉しそうなんだもん。だからカマかけてみたんだけど…」
「そう…かな」
「うん。いつもよりトーク５割増ってかんじ。で、どうするの？」
「どうしよう…」
「告る？」
「…まだそんな勇気ないよ。もっと仲良くなってからじゃないと無理だと思う」
「そう。まあ、あたしはいつでも相談乗ったげるから。ただし、告る時は教えてね」
「うん、分かった」
「じゃあ明日は頑張ろうね！　おやすみ」
「うん。おやすみ」
電話を切った。
そのあと、譜面を取り出して、指をさらう。
「よし、明日頑張ろう！」
美香は部屋の電気を消し、眠りについた…。

30話　二つの円

6月1日（金）。先斗は一人電車に乗っていた。
早朝で、通勤ラッシュには少し早いため、車内は少し席に空きがある。
ＩＰＯＤに入れた『ＳＡＫＵＲＡ』を聞いているうちに桜田中央に着いた。
いつもの通学路を通り、校内に入る。

「西村先生」
職員室に入り、京に声をかけた。
「ん？西掛もか？」
少し眠そうにしつつ、京が答える。
「…も？」
「ああ、三上が朝練したいって鍵借りに来たから」
「マジですか？」
先を越された…。急いで部室に向かう。

「ん？」
部室に近付くとトランペットの音だけではなく、フルートやホルン、ドラムの音まで聞こえてきた。
「龍也達まで…？」
音楽室に入ると庄吾だけではなく、龍也、拓也、ひかり、美香がそれぞれ練習をしていた。
「先斗遅いぞ！」
「お前こそ先駆けしやがって。ソロはどうなんだ？」
「ああ、坂根のおかげでバッチリ。坂根」
庄吾が美香の方を向く。
「ありがとな。これ返すよ」

「う、ううん。役立ったならよかったよ」
美香は少し顔を赤くしてＣＤを受け取った。
「寝過ごしたぁ～！！」
その瞬間、唯が飛び込んできたのでみんなそっちを向いたが、美香が庄吾から渡されたＣＤをギュッと胸に抱えて嬉しそうにしていたのを先斗は見逃さなかった。

１限と２限は芸術。Ａ，Ｃ組と合同だ。
吹奏楽部のメンバーは全員音楽をとっていたので、９人が一緒になる。

「今日から一学期の終りまではキーボードを使って授業を進めます」
合唱部顧問の朝倉先生が黒板にコードを写す。
「一学期の終りにはみんなで一曲通すのを目標にしています。曲目は今度の時間に発表します」
そこまで言うと、朝倉先生は、
「大変申し訳ないんだけど、私、文化祭の準備の担当なので、後自習していてください。前に書いたコードを覚えてくるのを宿題とします」
と言って、音楽室を出ていった。
すぐに音楽室は騒がしくなる。

「先斗～」
唯が呼ぶ。
「なんだ？」
「口三味線で合わせよう。今、楽譜ある？」
「もちろん」
音楽の教科書の中に潜ませていた楽譜を取り出す。

結局あの後、全てピアノで弾くことになってしまい、楽譜は三枚になった。
楽譜は譜面台にＡ４二枚しかのせられない。
だから本番前には楽譜を製本する。譜めくりを楽にするためだ。
幸い唯のソロのところで譜面はめくれるので今回は楽だ。

先斗、唯、庄吾、弥生、龍也、奈津美、拓也、優樹、ひかりの九人で円になって、楽譜を見ながら向かい合う。

「何が始まるんだ？」
「さあ…？」
まわりの生徒達も興味深々でその様子を見ている。

「いくよ？１、２、３」
ひかりのカウントで『ＳＡＫＵＲＡ』が始まる。
「タラリラタラリラ」
「ターン」
「ツツタツツタトコトン」
側から見ていると滑稽かもしれないが、この練習は全員でタイミングを合わせるのに結構適している。
美香、加奈子、慶太、匠がいないので所々メロディが消えるがなんとか通せた。

キーンコーンカーンコーン…。
チャイムが鳴る。
「行くか…」
「うん」
キーボード（ほとんど弾かなかった）を片付けて音楽室を出ようとした時、
「頑張れよ！」

と、声が聞こえる。
「ああ！」
優樹の友達だった。優樹はそれに答え、笑顔で音楽室を出た。

「あいつ誰？」
廊下に出てすぐに先斗は優樹に聞いてみた。
「うちの組の渡辺（わたなべ）　和志（かずし）。合唱部入りたかったらしいんだけど、男子が入らなかったから無理で、今帰宅部」
「ふ～ん」
「急げ！音出しの時間なくなるぞ！」
庄吾が怒って言う。
「悪い悪い。すぐ行く」
先斗達は走って庄吾に追いついた。

音楽室で音出しを一時間やって、昼食。
加奈子の差し入れのサクランボ（甘くて粒が大きい。買ったら高そうだ）をもらう。
「こんな高そうなの持ってきていいのか？」
思わず聞いてしまう先斗。
「母さんがね、今日本番だって言ったら持って行きなさいって、大奮発してくれたから大丈夫」と、聞いて安心して（？）頂いた。

食後、歯を磨いて合奏。
「よし、今日は本番だな。不安な所があるかも知れないけど、そこは開き直って演奏してほしい」
「「はい！」」
「ソリスト！」
「「はい」」
先斗、庄吾、唯、匠が返事をする。
「頼んだぞ」

「「…はい！」」
『ＳＡＫＵＲＡ』を二回通す。
「…よし！行くぞ！」
「「はい！」」
「あいさつ！」
「起立、気をつけ、礼！」
「「ありがとうございました！！」」
今までで一番そろって、おおきな挨拶が音楽室に響き渡った。

「ねえ、円陣組まない？」
加奈子が提案する。
「いいね。やろうか」
「掛け声は？」
「部長頼んだ」
「ＯＫ」
「お～い。なにやってんだ？」
京が呼ぶ。
「あ、先生も来てください！」
「…あ～。そういうことか」
京も状況がつかめたようで、円に加わる。
「じゃ、行きます」

「行くぞー！」
「「オー！」」

「他になんか考えられなかったのか？」
先斗が呆れた様子で唯に聞く。
「だってとっさだったんだもん…」
「まあそれはいいや。…頑張ろうな」
「…うん！」

いよいよ本番が始まる。
９ヶ月ぶりの本番に、先斗は不安５０％、期待５０％の心持ちでいた。

31話　『SAKURA』

体育館の端の方に楽器を持って座る。

まず弦楽部の演奏から。

曲目は久石　譲さんの『SUMMER』。ステージには14名の部員が乗る。

ほとんどの部員が弦楽器を持って間もないはずなのにかなりうまく聞こえた。

次に合唱部18名。こちらはジブリ作品を女声合唱にしたものと、合唱の課題曲を演奏した。

ジブリは、『さんぽ』、『君をのせて』、『テルーの歌』の三曲。

『さんぽ』は手拍子が出たし、『君をのせて』、『テルーの歌』はしっとりと聞かせてきた。

一番最後に演奏した合唱の課題曲『言葉にすれば』は、終わった瞬間にとても大きな拍手が鳴った。

「…この後はきついな～」

大きな拍手を聞いて優樹が苦笑いして言う。

「大丈夫だよ」

ひかりが励ます。

「異種格闘試合しているわけじゃないんだから。さ、楽器搬入だよ！」

「…オス！」

演奏準備が終わり、全員が席に着く。

「次は吹奏楽部です。曲目はいきものがかりで『SAKURA』。指揮は西村　京先生です」

アナウンスが終り、京が指揮台に立つ。
２６の目が京に向いた所で、京は指揮棒を振り上げた。

庄吾のトランペットが昨日とは全く違う暖かい音でソロを奏でる。
それを彩るのは先斗のピアノと美香、拓也、弥生の高音木管。そして慶太、龍也、加奈子が下で和音を重ねる。
間奏に入り、高音木管の三人に加えて、優樹のグロッケンが旋律に加わる。
最初は固いだけだった優樹のグロッケンの音色も、かなり澄んだものへと変わってきていた。

Ａメロに入り、旋律はホルン、クラリネット、テナーサックスに変わる。
リズムが難しいが、崩れず、音楽が進む。
Ｂメロは匠のソロ。
さっと立ち上がり、細かい音符を歌うかのように奏でる。
普段は感情をあまり出さない匠。でもユーフォニウムを吹くときは音がいきいきとしている。
このギャップの大きさはソロの直後にＤ組からどよめきが上がるほどだ。

そしてサビ。
クラリネット、トランペット、ユーフォニウム、サックスが主旋律を吹く上で、フルートとグロッケンは対旋律を奏で、中低音の楽器が下を支える。
ひかりのドラムも存在感を出しつつ、旋律を潰さないようにコントロールして絶妙なバランスを保っている。
原曲では二番に入るのだが、そのまま落ちサビへと向かう。

その前に先斗の間奏ソロが入る。

もうサビが終わる。
（…やれる！）
京がこっちを向く。
感傷的な旋律。先斗は全ての感情を音に込めた。
たった6小節だけど、ソロはソロ。

だからこそしっかり表現しないと、みんなに申し訳ない。

次の落ちサビは唯のソロだ。先斗は唯と目を合わせた。
唯は頷いて、ソロに入った。

（…あれ？）
今、無意識で目を合わせてしまったが、唯はリードミスしなかった。しかも、今までにないくらい音にビヴラートがかかっていて、体も自然に揺らして吹いている。
京もここは指揮を止めているから唯の音がのびのびと体育館いっぱいに広がっていった。
それに入っていくのは先斗のピアノ。静かにアルペジオでコードを重ねる。
落ちサビの最後。唯のアルトサックスの音が残る。
ひかりのハイハットが一発入るのを合図に、先斗は一気にグリッサンドで音階を駆け上がった。

大サビは先斗も伴奏に回って曲は大きく盛り上がる。
高音楽器が主旋律を奏でる裏で、トロンボーン、ユーフォはそれを追いかける。
ホルンとバリサクとピアノが下を支え、グロッケンは煌びやかに曲を彩った。

曲はエンディングに入り、テンポが落ちる。

そこにすかさず先斗は短いアドリブソロを入れた。
優樹もウインドチャイムを鳴らす。
ひかりがサスペンドシンバルを静かに入れた。
そして余韻を楽しむかのように少し長く伸ばしていた音を京がゆっくりと止めた。

31話　『SAKURA』（後書き）

『SAKURA』の吹奏楽バージョンは、現在ウインズスコアで販売されていますが、今回書いたのは、作者の想像によるものです。ご了承ください。

（1月16日からミュージックエイトでも発売予定です）

32話　嬉しい誤算

演奏は無事に終了した。
友達にからかわれるんじゃないかと心配していた先斗だったが、逆にほめられた。
そんなこと初めてだったため、テンションが上がりまくり、唯に心配されるくらいだった。

6月5日（火）。
今日はミーティングだ。

「ふんふふ～ん～」
職員室から戻ってきた唯が鼻歌を歌っている。機嫌が妙にいい。
「どうしたんだ？」
「あ、先斗。あのね！」
「始めるぞ～！部長」

その時。京が入ってきたため、話は途切れる。
「ハイ！起立、気をつけ、礼！」
「「お願いします！」」
唯の号令でミーティングが始まった。

「え～っと…。この様子だとみんな聞いてない様子だな？」
「はい」
唯が笑って言う。
俺達は何がなんだかわからないのできょとんとしている。
「伝えとけって言ったろうが…」
「先生が早く来すぎなんですよ。言おうと思ったらガラッ！ですもん」

「…まあいいか。今日はとてもいい知らせがある」
「なんですか？」
弥生が尋ねる。

「有吉。今吹奏楽部の部員は何人だ？」
「え？１３人です」
唐突に聞かれて慌てつつも弥生は答えた。
「はずれだ」
「え？あ、先生入れて１４か」
優樹が答える。
「それもはずれ」
「…もしかして」
先斗が呟く。
それと同時にみんなの視線が先斗に飛んだ。
「なんだ？」
先輩はにやりと笑いながら先斗に問う。

「部員が増えるってことですか？」
その真似をしてにやりとしつつ、先斗は答えを言い放った。

「マジで？」
「やったぁ～！」
「じゃあパートの人数増えるのかな？」
答えた瞬間、部室がざわめく。

「はいはい！静かに！３人とも入って来い！」
「３人！」
拓也が嬉しそうに声をあげた。

前に立ったのは男子一人に女子が二人。
「え！？」
次は優樹だ。
まあ、仕方ないだろう。
目の前に友達である和志が立っていたのだから。
「ま、そういう訳で。よろしく」
和志は頭をかきかき、そう言った。

しかしよく見ると、もう一人先斗の知った顔がいた。
「東？」
眼鏡を掛けた女子に声をかける。
「あれ？西掛くんじゃない」
「そう言えば東も中央受けたんだったな」
「うん。無事に通ったよ」
「先斗、知り合いか？」
庄吾が聞く。
「ああ、中学の時、一緒の塾だったんだ」
「東（あずま）　茜（あかね）です。よろしくお願いします」

「で、その横の子は？」
ひかりが聞く。
「あ、私の友達の今井（いまい）　里穂（りほ）。小学校のとき金管バンド入っていたらしくて、誘ったら入るって」
「よろしくお願いします」
「…勝手に盛り上がるのはいいんだが、どうせなら全員に自己紹介してくれないか？」
京が口を出した。
「あ、すみません…」

その後、無事に（？）自己紹介を終え、楽器決めになった。

「私はトランペットやってたのでできたらそのままトランペットやりたいです」
里穂はすぐに決まった。
「じゃあ二人ともどうする？」
「「…」」
二人とも迷っているようだ。
「う～ん。そうだな。じゃあ楽器を体験してみようか」
「「はい」」

まずフルートから。
ス～。
二人とも音が出ない。
次にクラリネット。
ホー！
いきなり茜は音を鳴らす。かなりしっかりとした音だ。
それに対して和志は顔を真っ赤にするだけだった。
サックス。
相変わらず音が出ない和志。茜はまたしっかりと鳴らした。
オーボエとファゴット。
茜は全くリードが鳴らなかった。
リードが細いため、息が入りづらいようだ。
ポー！

「あ！鳴った！」
和志がファゴットのリードで音を鳴らすことができた。
「…Ｒ４？Ｓ２？Ｔ５…？」
教則本の運指表のページを見ると２０近くもキーがある。その多さに和志はびびったのか、
「じゃ、次金管で…」
と言って、教則本を閉じ、庄吾のいる金管の棚のほうに向かった。

トランペット、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバ、ホルンと吹いていったが、ふたりともユーフォが微かに鳴っただけで後は音が出せない。
「私、クラリネットがやってみたいです」
ここで茜が結論を出したようだ。
「そうか。じゃあ東はクラリネットな」
「やったー！茜ちゃん。よろしくね！」
弥生が喜びの声をあげる。
「うん。よろしく」
笑顔で茜は返した。

それに対してあせる和志。
「そうだな…。パーカッションはどうだ？」
そんな和志の様子を見て京が提案する。
「打楽器…」
打楽器と言えば小学校の時、発表会の合奏でコンガを叩いたことを覚えている。

なかなかうまく叩けず、放課後も練習したものだ。

「…体験(やって)みていいですか？」

「ああ。竹原、見てやってくれ」

「あ、はい」

楽器庫に入り、優樹が楽器を出してくる。

「これがティンパニで、こっちがビブラフォン。これは銅鑼…。まあ叩いてみるか？」

「ああ」

「何やりたい？」

「コンガ」

「…コンガ？」

「ああ。コンガ」

当惑する優樹に、和志は笑顔で返した。

32話　嬉しい誤算（後書き）

新たに加わった登場人物

・東茜（あずあかね）
・渡辺（わたなべ）　和志（かずし）
・今井（いまい）　里穂（りほ）

この三人は今月中に登場人物紹介に入れます。

【追記】1／29　追加しました。

33話　シフト

6月8日（金）。雨が降り続く嫌な天気で、部室もなんだか湿っぽい。

「あ～あ。今日も雨か」

優樹が呟く。

「しょうがないじゃない。梅雨なんだから。さ、パート練習しよう。来週からまたテスト期間だから練習できないし」

ひかりが練習を促す。

「あ～。テストもあったんだった…」

「はいはい。テストは忘れて忘れて。やるよ！楽器持ち替えの割り振りしなおさないと！」

「は～い…」

和志が入って打楽器は3人になったものの、やっぱり打楽器の数が多い。

それまでは、抜くと演奏が成立しない楽器のみ演奏することにしていた。

ひかりがスネアドラムと鈴、優樹がティンパニとウインドチャイムとチャイムを練習して、無理そうな楽器は京と相談して省いていた。

「トランペットとかは2パートなのになんで打楽器は数多いんだろ？」

「ああ、それはね…」

いつの間にか近くにいた唯が説明してくれた。

この曲は、D・シェーファーと言うアメリカの作曲家が作曲した。
実はアメリカでは授業で吹奏楽を導入しているため、スクールバンドに向けた作曲が多い。
打楽器の数が少ないと、演奏できない生徒が出てきてしまうため、それを防ぐ目的で打楽器を多くしているのだと言う…。

「ってことなの」
「なるほどな…」
「まあ、割り振り無理そうだったら言ってね。こっちも協力するから」
「分かった」
「じゃあ私もパート練習行ってくるね」
唯は音楽室を出て行った。

「さてと！割り振り始めよっか」
「はい」
「じゃあ最初のティンパニはそのまま優樹ね」
「はい」
全員初心者であるため、なるべく負担が均等になるように心がける。

「で、クラッシュシンバル、和志君よろしく」
「はい」
「あたしがスネアドラムやって…次のグロッケンとウインドチャイムと鈴どうしよう…」
「ウインドチャイムなら近くにあれば俺間に合うと思うよ」
「OK。あたしも鈴何とか間に合わせるわ」
「グロッケン…持ちかえるの無理だと思う…」
和志が少し申し訳なさげに言う。

確かに、一小節間でクラッシュシンバルを置いて、グロッケンの撥を持って、グロッケンの位置に移るのは物理的に無理だ。

「途中から入ると目立つしな…」

ここは同じ音で叩く刻みだ。

「クラリネットがこの刻み吹いてるしいいんじゃない？」

先生から借りたスコアを見てひかりが呟く。

「じゃあ…カットかな」

「仕方ないね。じゃあ次のサスペンションシンバルよろしくね」

「ＯＫ」

「そこであたしはスネアに戻るから、優樹はティンパニ…」

「俺がクラッシュシンバルに戻って…」

「あ、ここどうしよう…」

指差すところには、スネアドラム、グロッケン、サスペンションシンバル、ティンパニが入っている。

「この前のグロッケン削る？」

「でも旋律だよ？」

「どうしよう…」

他を削ろうにも、その後にはスネアドラムのソロが待っているし、ティンパニもすぐに動きがある。サスペンションシンバルを削れば、盛り上がりに欠けてしまう。

「…とりあえず切ってさ、他を決めてしまおうよ。ここもクラリネットが旋律吹いてくれてるしさ」

決断したのは優樹だった。

「そうだね…」

ひかりも賛同する。

その後は、静かな部分だから打楽器の数は少なく、大体決められた。

優樹がティンパニとウインドチャイムとチャイム。
ひかりがスネアドラムと鈴。
和志がクラッシュシンバルとサスペンドシンバルだ。

「じゃあこの編成で確定として先生に出すね。じゃあ基礎練習するよ！」
「「はい！」」
三人は基礎練習を始めた。
ちなみにセクションリーダーはひかりだ。
バンドを組んでいたときもリーダーだったらしい。

「次、感謝と喜びやるよ」
「「はい」」
基礎練習を終えて、早速曲に移る。
「最初からね」
メトロノームをテンポ８０にセットする優樹。
「1，2」
ひかりがカウントを入れた。

始めは優樹のティンパニがロールで入る。最初は低音と同じだが、次の小節に入ったところで独立した動きを持つ。
そこに和志のクラッシュシンバル。

グシャァ～ン！

「ストップ！」
情けないシンバルの音に思わずひかりが止める。
「ごめん…」
和志が申し訳なさ気にうつむく。

「あ、こっちも止めてごめん。まだ慣れないから難しいよね…。あたしもまだロール苦手だし…」
「なあ、個人にしないか？まだ俺も練習したいところあるし…」
「そうね…。セクションは明日やろっか」
「うん…」
優樹の提案でパートは終わった。

6月9日（土）。
優樹は朝7時に目を覚ました。
「…ねむ」
普段なら二度寝してしまうところだが、今日は午前練習だ。
9時に集合なので、それまでに行かないといけない。

「いってきます」
朝飯をかっ込むともう八時前。鞄をもってリビングから出る。
「あ、あたしも今日補講だから出るね」
後ろから追いかけるように出てくるのは姉の里美。
竹原（たけはら）　里美（さとみ）。
桜田女子高等学校に通う二年生だ。
優樹とはけっこう仲がよい方だ。

「いってらっしゃ～い」
母さんの声に見送られ、優樹と里美は家を出た。

「補講って、赤点でも取ったわけ？」
「違うわよ。二年生になったら、受験対策ってことで月一で午前授業が入るの！」
「ふ～ん」
「でもあんたが吹奏楽とはね。ホント意外」

「俺にとっては姉さんが茶道部だってことが一年たった今でも意外だよ」

文化祭の写真を見たとき、優樹は着物姿の里美に吹き出してしまい、グーで殴られた。

「あのとき痛かったな…」

「うるさいわね～。あたしだって分かってるわよ！」

たわいのない会話をしながら駅へと向かう。

「で、その発表っていつなのよ？」

梅賀駅のホーム。優樹は和志と合流できると思ったがいなかった。この便で行かないと間に合わないから、先に行ったのだろう。

「8月4日がコンクール。でも7月22日に市の定期演奏会があるからそれに出るよ」

約束はしてなかったので特に気にせず里美と話す優樹。

5日のミーティングでそれは告げられた。

動揺はしたものの、みんな最後は受け入れた。場数を増やすことが必要だと、文化祭の演奏を通して感じたからだ。

優樹自身、ガチガチになって、グロッケンの音がきつくなってしまった。

まず、緊張をなんとかしなくてはならない。

「ふ～ん。じゃああたし聴きにいこうかな？市の定期演奏会ってタダでしょ」

「え？うん、タダだけど」

「じゃあ行くわ」

「え？」

思わず耳を疑う。

「だって、あんたが演奏してるところなんて想像つかないもん。決めた。行くわ」
「ちょ、ちょい待って…」
「あ、電車来たわ。じゃああたし行くね」
反対側の電車が来て、里美はそのまま乗っていってしまった。
「はあ…」
混雑した駅のホームで、優樹は一つ大きなため息をつくのだった。

学校に着いて、すぐに部室に向かう。
「グシャァァ〜ン！シャン！ジャン！」
部室に近づくにつれ、なにやら金属がぶつかり合うような音が聞こえてくる。
優樹はドアをそっと開けて、部室を覗いた。

「ジャン！」
「それ。とりあえずシンバルの中の空気を早く逃がしたら、間の抜けた感じの音にはならないから」
「はい！」
「じゃ、もう一回」
和志と純也だった。
「あれ？優樹」
「竹原？」
和志達が突然振り向く。
「ども」
優樹は軽く頭を下げた。

３４話　ベンチでの会話

「え？今日って練習休みですか？」

渡り廊下にある自販機の前のベンチで一休みする３人。

「西村が急に出張入ってな。部長からメール来てなかったか？」

純也の問いに携帯を取り出す優樹。

桜田中央高校は携帯の持ち込み規制がないから、授業中に切ってあれば使用可能だ。

「本当だ…」

唯からメールが来ていた。

＝＝＝

＝＝＝

「俺と一緒ですね」
「そうだな。まあ渡辺と違って俺はふてくされて練習してたんだけどな。なかなかいい音が出なくて。そしたら先輩がお手本で叩いてくれた。その音がすごくクリアで…かっこよかった」
純也は軽く遠い目をして語った。

「あいつはあいつでバスクラ初心者だから苦労してたみたいで。よく一緒に朝練したもんだ」
「じゃあ先生達が仲いいのって吹奏楽のおかげなんですね」
「仲いいか？ま、こうやってるのもあいつのおかげだしそうしとくかな。お？」

先生がふと時計を見た。
「もうこんな時間だ。そろそろ練習再開するか」
「「はい！」」
三人は部室に戻った。
「タッタカ…タタン」
部室からまた音が聞こえる。
「なんだ？」
「この音は…スネア？」
「ってことは」

ガラガラッ！

勢いよくドアを開ける優樹と和志。
「おはよ！」
ひかりが振り向いてスネアドラムの撥を上げた。
「ひかりもメール見忘れか？」
笑って聞く優樹に、
「違うわよ。今日セクションするって言ったじゃない」

と答えるひかり。
「ああ、そういえばそんなこと言ってたな」
「じゃあやろうか」
「うん！」

ふと優樹が振り向くと、純也は三人を懐かしそうな目をして見ていた。
（…がんばろう！）
優樹はティンパニの撥を強く握り締めた。

35話　夏の始まり

「いってきます」
「いってらっしゃ～い」

7月2日（月）。
いつもより早く先斗は家を出た。
今日は快晴。今朝のニュースで、沖縄の梅雨明けが発表されていた。中国地方ももうすぐだろう。
まだ朝だからかそんなに日射しは強くなく、ちょうどいい気温に感じられる。

「あ～。テスト今日返って来るんだっけ…。まあ赤点はないだろ…って独り言、でか！」
独り言を呟きながら歩いていたのに気づき、顔を赤くする先斗。
今日は唯のマシンガントークがないため、口が寂しいのだ。

桜田中央駅で降りる。
「お。龍也に拓也にひかり。おはようさん」
「おはよう」
「先斗も朝練？」
「ああ」
田中三姉兄弟（きょうだい）に出会った。
「三人とも仲いいな…」
「母さんが同じ電車で行けって言うのよ。ほら、西方面の電車、痴漢出るって言うし」

桜田中央駅はＪＲと私鉄桜田線が通じている。
桜田線は西方面と東方面があり、東方面は桜田東、青南高、西方

面は桜田商業、桜田女子，
彩稜高へと続いている。
なので本来は西方面の電車のほうが空いていると思われるのだが、西方面の終点は隣の市、桐ヶ丘なので、そこに住んでいるビジネスマンが通勤電車に殺到し、結局西方面のほうが混むらしい。
ちなみに東方面の終点は春日関。青南中学高校があるが、もう一つの特徴がある。

春日湾だ。

春日湾は日本海に面しており、漁港がある。
もちろん海水浴場もあり、夏はサーファーや、海水浴客がたくさん訪れる。先斗も小学生の頃よく出かけたものだ。

「お前なんて襲う奴いないって」
龍也が笑って返すが、
「いや、物好きもいるかもしれないぞ…」
拓也が神妙な顔をしている。
「あのさぁ～。朝から殴られたい？」
ひかりが拳を固めつつそう静かに聞いた。
「「いえいえいえいえ！！！」」
二人同時に首を大きく振る。首が攣らないか先斗が心配になるくらいだ。
普段冷静な龍也も大慌てで珍しい。
「落ち着けよ。朝練する時間なくなるぞ」
「そうね、行きましょ。ほら、二人ともいつまでも首振ってないで行くわよ！」
「「は、はい！」」

…今まで龍也がこの三人で一番しっかりしてると思ってたが、権

力が一番強いのはひかりのようだ…。これから気をつけなければ…。
そう思い、恐怖におののきつつ、先斗は三人についていくのだった。

朝練を終え、１－Ｂの教室に拓也と向かう先斗。
「あ～テスト返ってこなくていいっての。そのまま燃やして廃棄処分してほしい」
「お前なぁ…。中間の時もそんなこと言いつつ学年３０番だったじゃないか。ホント心配性だよな。拓也は」
ちなみに先斗は６０番くらいだった。

ガラガラ…。
教室のドアを開ける。
「あ、拓也くんに先斗。おはよ」
「…おはよう」
「…お、おはようさん。で、なんだ？その横にいる死体は？」
「…死んでねえ」
普通に返す唯の横に、死にかけの庄吾の姿があった。

この間の席替えで、先斗達四人は同じ班になった。
先斗の横に拓也、前が唯で、拓也の前に庄吾が座っている。

「テスト…嫌…欠点…赤点…追試…留年…退学…」
…思考がとことんネガティブだ。
「大丈夫だって。今回も航一さんに教えてもらったじゃんか」
そう励ます先斗だったが…。
「昨夜（ゆうべ）、全部名前書き忘れて０点の夢見たんだ…。飛び起きてそれから眠れなかった…」
「…」
その言葉になにも言えない三人だった。

キーンコーンカーンコーン…。
チャイムが鳴った。

放課後。今日は得点集計のため、部活動は全面中止となった。
「庄吾よかったじゃん」
先斗、唯、庄吾は三人で帰路についていた。
「ああ！中間に引き続き赤点０！やったぜ」
そこには朝とテンションが正反対の庄吾がいた。
「あたしのおかげなんだから感謝しなさいよ？」
「はいはい」
実は庄吾、始め、英文法が３４点だった。

「だ、大丈夫か？」
テストが帰ってきたとたん、化石のように動かなくなった庄吾。
あまりにも心配になり、先斗は声をかけた。
「…欠点…赤点…追試…留年…退学…」
朝のネガティブモードが悪化…。ほんとに消えてしまいそうなほど落ち込みきっていた…。
「あらら。あと一点だったのに…ん？」
庄吾の解答用紙をみて、首をかしげる唯。
「どうした？」
「気のせいかな？十点低い気がするんだけど」
先斗も各設問の点を合計してみる。
「あ、本当だ。庄吾。４４点じゃないか？先生のとこ行ってみろよ」
「マジ？」
その声に庄吾の目が輝く。

「ああ。横の配点が正しかったらな」
それを聞いて、目を見開いて計算を始める庄吾。

計算が終わったようだ。
「どうだ？」
「先生！点違います！」
先斗の質問に答える代わりに、そう叫んで、牛尾先生のところに駆けていく庄吾。
「よっぽど嬉しかったんだな…」
先斗たちが呆れすぎて逆に感心するぐらいの行動の早さだった…。

「じゃあなんか奢ってね？」
「ああ。なんでも…しまった」
やっちまったという顔の庄吾に、にやりと笑う唯。
「なんでもいいのね？じゃあ駅前の一階の喫茶店のケーキセットでも…」
「やめてください…」
一回覗いてみたが、ケーキセットが１１００円もした。その代わりかなりおいしいと母さんが言っていたが…。
「先斗～！唯を止めてくれ～！」
「唯。俺も同行していいか？」
ちょっと乗ってみる先斗。
「うん。庄吾に払わせるから」
「じゃ行こうかな」
「やめてくれ～！」
「冗談だって。唯。そろそろ勘弁してやれよ」
本気で庄吾が焦っているので、先斗は笑って唯にそう促した。
「そうね。じゃ、テスト明けだし、いつものケーキバイキングの店に行こうか」

唯は、なにかいいことがあると、ケーキバイキングに行く。

「じゃ、俺も付き合うよ」
「先斗、珍しいね？いつもはあまりケーキ食べないのに」
「なんか甘いもんが食いたい気分なんだよ」
先斗が同意したので、
「俺も行く…支払いは各自だよな？」
「もちろん」
それを聞いて庄吾も同意。
「じゃ、行きますか！」
「「お～！」」

テスト明けですっきりとした気分も率き連れて、三人はケーキ屋に向かった。
空は快晴で雲ひとつなく、太陽はギラギラと輝いていた。

もう夏がやってくる。

３５話　夏の始まり（後書き）

配点が十点違ったと言うのは、作者の実話です（笑）。
金管コラムはコンクールまでには書きます。

コラムE　金管楽器（前書き）

木管、打楽器よりかなり長くなりました。おいおい加筆、修正をします。

コラムE　金管楽器

コラムも五回目。今回は金管楽器を紹介します。

金管楽器、読者の皆さんの中にも演奏経験がある方がいると思います。

その理由として、木管楽器に比べて金管楽器は仕組みが簡単だということが挙げられます。

木管楽器はキーを押さえて音の高低を変えます。両手をフル稼働するため、指使いを覚えるのも大変です。キーの連結がちょっと狂うと音が出なくなります。

一方、金管楽器はピストン、ロータリー、スライドと、口を使って音の高低を変えます。同じ指使いでも口で音の高低を変えることができるので、指の操作は片手で済む場合が多いです。

左手を骨折したトランペット奏者が、右手のみを使ってコンクール12分間を吹き切ったという話があるくらいです。

小学校でも手入れのしやすさから吹奏楽部より金管バンドの団体数が多いです。

ただし！演奏面は難しいです！

トランペットの1st（主旋律を担当することが多いパート）を満足に演奏するのに平均2～3年かかると言われています。

もう一つ挙げると、木管楽器は主にリードを鳴らして音を出しますが、金管楽器は唇をリードの代わりに使うので、木管に比べて口の疲労度が大きいです。

○トランペット（Trumpet）

金管楽器で一番有名といっても過言ではないです。明るく、澄んだ力強い音が特徴で、主に三本のピストンを操作して音を変えます。

課題曲だけでも、『架空の伝説のための前奏曲』、『吹奏楽の為

の序曲』など、たくさんの曲にソロがあります。
特に作者がおすすめなのは、１９９３年度課題曲３、『マーチ「潮煙」』です。
一番最初のトランペットのメロディがとてもかっこいいのでぜひ聞いてみてください。
また、オリジナル曲では、『海の男達の歌』にホルンとのソリ、『朝鮮民謡の主題による変奏曲』、『マゼランの未知なる大陸への挑戦』など、多様な曲目にソロがあります。

●ピッコロトランペット
普通のトランペットより少し高い音域が出しやすい楽器です。音程が取りづらいこと、音域の拡大のためなどの理由で４番管まであることが多いです。
アンサンブルや、高音域が多用される曲でよく使われます。

●コルネット（ｃｏｒｎｅｔ）
トランペットより少し音が柔らかいです。主にトランペット奏者が持ち変えます。
管が二回巻いてあり、少し楽器が小さいので、小学生がトランペットの変わりに使用することがあります。（楽器が大きいと姿勢が崩れ、後々癖がつく場合があるためです）
曲によってはトランペットと別パートとされていることがあります。
その例として、アルメニアンダンスパート１に短いソロがあります。

●フリューゲルホルン（Ｆｌｕｇｅｌｈｏｒｎ）
トランペット、コルネットよりも管が太いため、深く、柔らかく、甘美な音色を生み出します。『第六の幸福をもたらす宿』、『ゲール・フォース』などで使用。

また、スライドトランペット、バルブトランペットなどの種類がありますが、吹奏楽ではほとんど使わないので省かせていただきます。

○ホルン（Ｈｏｒｎ）

カタツムリのような形状に巻かれた円錐状の管と、３つから５つの、ロータリー式のバルブ（弁）を持ちます。
左手でバルブを操作し、管の長さを変えて音の高低を変え、右手はベルに突っ込みます。管の長さが長いため、広い音域を持ちます。

また、その中でもいくつかに細分化できます。

●シングル・ホルン
構造が一番簡単で、楽器が軽く扱いやすいです。
Ｆ（ファ）の音を基準とするＦシングル・ホルン、Ｂ♭（シ♭）の音を基準とするＢ♭シングル・ホルンがあります。

●ダブル・ホルン
２種類の調性（主にＦとＢ♭）を切り替えられるようにしたもので、今一番主流な楽器です。親指でレバーを切り替えて調を変えます。

●トリプル・ホルン
Ｆ管とＢ♭管に加え、通常のＦ管より１オクターブ高い音域を演奏できるＨｉｇｈ－Ｆ管を備え付けた楽器です。欠点として、楽器が重く長時間の演奏が難しいこと、音色の違いが挙げられます。

ホルンは、さまざまな音質を持ち、ｐ～ｍｆの音量では柔らかく、

ｆでは勇ましい音色を持ちます。
主に対旋律、伴奏を受け持ちますが、課題曲の『架空の伝説の前奏曲』ではホルンソリ、『海へ…吹奏楽の為に』ではソロを受け持っています。またこの曲ではホルンとティンパニ、コントラバスのみが和音を構成する部分があり、その部分のハーモニーはとても美しいです。
オリジナル曲では、『海の男達の歌』の冒頭ではトランペットとのソリ、後半では勇ましいソリと、大活躍しますし、『アルプスの詩』では長々としたソロもあり、とても魅力的な楽器です。

●アルトホルン
金管バンドでよく使われます。
音色はトランペットのように抜けた明るさではなく、まるくやわらかい音色です。
分類としては後述のバリトンに入りますが、フレンチホルンの代わりに使われていることもあるのでこちらに入れました。

○トロンボーン（Ｔｒｏｍｂｏｎｅ）
２つの長いＵ字型の管を繋ぎ合わせた形状を持ち、スライドを動かして音程を操ります。
スライド楽器なので音程をとるのが他の管楽器に比べて難しいですが、逆に音程を変えることが容易なので、ハーモニーを組み立てるのが得意です。ジャズ、オーケストラ、アンサンブルと活躍の場も多いです。

●テナートロンボーン
最も基本的な構造をした、トロンボーンの代表格とされる楽器です。
しかし、今では次に紹介するテナーバストロンボーンが主流にな

ってしまっています。
その理由として次の二つがあります。

・七番ポジションに手が届きにくく、早い演奏が難しい
管が長くなるほど、音は低くなります。そのため、スライドをめいっぱい伸ばさないといけない音が出てきてしまい、腕が短い人には演奏が困難になります。
それを解決するためにスライドに紐を付けている奏者もいます。

・出せない音域がある
これは難しくなるので割愛します。
下の音域のH（シ）～Ｅｓ（ミ♭）の音が出せません。

●Ｆ管アタッチメント付テナートロンボーン（テナーバストロンボーン）
テナートロンボーンに１つの追加のバルブを持たせた楽器で、バルブを使用することで音域が広がるため、日本国内では、テナーバストロンボーンという呼称が広く普及しています。
利点はさっきも述べた下の音域が出せるようになることに加え、低音域で６番ポジション、七番ポジションで吹かなくてはいけなかった音も、バルブを併用することで一番、二番ポジションで吹けることが挙げられます。
欠点は、
・バルブがついた分、楽器が重たくなる

・吹くときの抵抗が大きくなる
抵抗が大きいと息が通りにくいので音がはっきり出しにくくなります。

・バルブ使用時と未使用時の音色に差が出る。

欠点はありますが、操作性がいいため、今一番主流な楽器です。

●バストロンボーン

吹奏楽で使われるトロンボーンで一番低い音域を持ちます。

低音域はチューバに匹敵します。

利点として一つか二つ付いているバルブのおかげで遠いポジションまで腕を伸ばさなくても低い音が得られること、低音が鳴りやすくなること、管が太くなる分、音が太くなることが挙げられます。

主に３ｒｄ（低い音のパート）を担当しますが、バストロンボーンの楽譜が独立してある場合もあります。

トロンボーンソロがある曲は、『セドナ』（１７話で書いた後気づきました。後で修正します）、『マジック・スライド』などがあります。

『アルメニアンダンス』、『錨を上げて』、

オケ編曲で交響詩『「ローマの祭」より主顕祭』などで目立ちます。

（ＧＴ．ｓｐｉｒａｌさんから教えていただきました。ありがとうございます）

課題曲で『海へ…吹奏楽の為の』、オリジナルで『海の男達の歌』でも目立ちます。

○ユーフォニウム（Ｅｕｐｈｏｎｉｕｍ）

幾重かに巻かれた円錐管と、通常４つのバルブを持ち、ピストンを動かして音程を操作します。ユーフォニアムとも呼ばれ、読み方は統一されていません。この小説ではユーフォニウムの表記としま

す。
　音域はトロンボーンと近いですが、音質は異なります。トロンボーンが直管でベルが前に向いているのに対し、ユーフォニウムは前述のとおり、管が幾重にも巻かれていることと、ベルが斜め横に向いていることが理由で、人をほっとさせる朗々とした音色と表現されます。男性の声に一番近いと言われています。主に吹奏楽、ソロで使用され、オーケストラではほとんど使われません。

　ユーフォニウムの仲間を紹介します。

●バリトン（Ｂａｒｉｔｏｎｅ）
　フランスやイギリスなどでユーフォニアムの役割を担う楽器です。ユーフォニウムより管の太さがずっと細いです。

・バリトン・サクソルン
　バリトンの原型とされています。イタリアではフリコルノ・テノーレと呼ばれます。

●テノールホルン
　ドイツや中欧・東欧で使われていて、バリトンとユーフォニウムの中間ぐらいの管の細さです。
　もともとはトランペットに形が似ていたそうですが、だんだん卵形、チューバ型に移行していったようです。

●マーチング・ユーフォニアム
　マーチングやパレードで使用され、ベルが正面を向いている楽器です。古くはベルだけを曲げたものが使われましたが、現在ではトランペットのように両手で楽器を支えるタイプのものと、本体を肩に担ぐタイプのものがあります。

その音色からユーフォニウムのソロはたくさんあります。
課題曲から、『海へ…吹奏楽の為の』、『道祖神の詩』『雲のコラージュ』。
オリジナルから『吹奏楽のための第1組曲ヘ長調～第1曲「行進曲」』、『海の男たちの歌』、『Ｔｈｅ ７ｔｈ Ｎｉｇｈｔ ｏｆ Ｊｕｌｙ』などがあります。

○チューバ（Ｔｕｂａ）
ホルン以上の管の長さの太い管は長円状に幾重にも巻かれ、大型のベルは上部に向いています。３つから７つの弁を持ち、ロータリー式のバルブ、もしくはピストンを操作して音を変えます。バルブの仕組みが二つあるのはそれぞれの発祥が違うためで、ピストン式（アップライト型とも呼ばれます）の楽器は、アドルフ・サックスによって考案された、サクソルンと言う楽器が元となっています。また、ユーフォニウムも同じ発祥とされています。
調もいくつかあり、Ｂ♭管、Ｃ管、Ｅ♭管、Ｆ管が主なものとなっています。Ｂ♭管が一番館の長さが長く、低い音が出せます。
またバルブの数を増やすことで管の長さが長くなり、低い音を出せるようになったり音程の調整が容易になるため、Ｅ♭管、Ｆ管などの管の長さが短い楽器にはバルブが多く付けられることがあります。
Ｂ♭管、Ｃ管をコントラバスチューバ、Ｅ♭管、Ｆ管をバスチューバと呼ぶことがあります。

●テナー・チューバ
ユーフォニウムの別名です。チューバとユーフォニウムが似ていると言われる理由はここにあるのかもしれません。日本ではバルブの形態により、ロータリー式の楽器をテナー・チューバ、ピストン式の楽器をユーフォニアムとして呼び慣わしています。

●ウィンナ・チューバ

Ｆ管のチューバの一種で、左手で３個、右手で３個、計６個のロータリー・バルブを操作します。他の金管楽器とよく融け合う響きを出し、特にドイツ式トロンボーンと相性がいいです。

●スーザフォン

行進やマーチングなど立奏に特化した楽器です。昔は金属製でとても重かったそうですが、１９６０年代以降、より軽い繊維強化プラスチック（ＦＲＰ）などの材質を用いたスーザフォンが多く使用される様になったため、少し軽くなりました。両肩に担ぎます。

●マーチングチューバ

パレードやマーチングといった立奏を前提として考案された楽器で、通常のチューバを横にした形状をしています。左肩の上に乗せベルを前方に向けて演奏します。スーザフォンよりも、パフォーマンスがしやすく、最近はスーザフォンよりもこちらがよく見られるようになって来ました。また、マウスパイプ（マウスピースを挿すところで、歌口ともいいます）を交換でき、座奏でも演奏できるよう考慮されています。この様式はしばしば「コンバーチブル」と呼ばれます。

チューバは主に伴奏を担当します。メロディは少ないですが、素晴らしいものもたくさんあります。

『吹奏楽の為の第一組曲より「シャコンヌ」』、『呪文と踊り』、『アルメニアンダンスパート１』などはけっこうおいしいメロディがあります。ソロは『Ｔｈｅ　７ｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ』にあるそうです。

なんだかチューバだけ異様に長い気が…。作者がチューバ吹きだからでしょうか。…いっそいろいろ書いちゃいます。

前述の通り、チューバは低い音を出すために非常に長い管を持ちます。そのため、本体の重さがB♭管で約１０キロ。ハードケースを含めると約２０キロあります！（マーチングチューバは約９キロ）

はじめはその重さに翻弄されますが、慣れると楽器の入ったケース２個を運ぶことができたりします。

以上、金管でした。弦楽器は次のコラムで紹介します。また、以前のコラムも加筆修正していることがあるので覗いて見てください。

コラムE　金管楽器（後書き）

間違い等あればメッセージ、感想欄で指摘してください。対応します。

コラムＦ　吹奏楽の大会

運動部に大会があるように、文化部である吹奏楽部にも大会があります。

ただし、他の運動部とは違って、年に2～3回しかありません。

・全日本吹奏楽コンクール

夏～秋にかけて行われ、

（地区大会）→県大会→支部大会→全国大会という流れで行われます。

支部は、

・北海道支部
・東北支部
・東関東支部
・西関東支部
・東京支部
・北陸支部
・東海支部
・関西支部
・中国支部
・四国支部
・九州支部

の計１１つです。

部門もいくつかあるのですが、県ごとに大きく異なります。

各県の吹奏楽連盟のホームページなどを見ると、

例1、島根県

小学校の部　（人数自由、支部、全国大会に進むことが可能）

中学校

Ａの部

演奏者は５０人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

Ｂの部

演奏者は５０人までで、Ａの部と同様に１２分間で課題曲、自由曲を演奏するが、大会は県大会のみ。同じ学校がＡの部と重複して参加することはできない。

Ｃの部

演奏者は５０人までで、８分間で自由曲を演奏する。大会は県大会のみで、同じ学校がＡの部と重複参加できる。

小編成の部

在籍部員数が３０人以下の学校が参加可能。七分以内に自由曲を演奏。支部大会がある。

高校

Ａの部

演奏者は５５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

Ｂの部

演奏者は５０人までで、Ａの部と同様に１２分間で課題曲、自由曲を演奏するが、大会は県大会のみ。中学校の部と違って、同じ学校がＡの部と重複して参加が可能。

小編成の部
在籍部員数が３０人以下の学校が参加可能。七分以内に自由曲を演奏。支部大会がある。

大学の部
演奏者は５５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

一般職場の部
演奏者は６５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

例２、岩手県。

小学校の部
人数は自由で、７分以内に自由曲を演奏。支部、全国大会に進むことが可能

中学校の部
演奏者は５０人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

中学校小編成の部
演奏者は２５人まで。七分以内に自由曲を演奏。支部大会がある。

高校の部

演奏者は５５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

高校小編成の部
演奏者は２５人まで。七分以内に自由曲を演奏。支部大会がある。

大学の部
演奏者は５５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

一般職場の部
演奏者は６５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

例３、沖縄県

小学校の部
人数は自由で、１０分以内に自由曲２曲を演奏。支部、全国大会に進むことが可能

中学校の部
演奏者は５０人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

高校の部
演奏者は５５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

大学の部

演奏者は５５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

一般職場の部
演奏者は６５人までで、１２分間で課題曲、自由曲を演奏。支部、全国大会と続く。

この小説では、島根県のパターンを使用します。

上記のとおり、全国大会があるのは、中・大編成部門（Ａ部門）です。
小学生は全日本小学校バンドフェスティバルという別の大会があります。
小編成の部は支部大会（ただし、北海道・東北・東関東・西関東・東京・北陸支部に所属する団体は全国大会として東日本学校吹奏楽大会があり、支部代表権を獲得すると出場することができます）
Ｂの部、Ｃの部は県大会までしかありません。
でもこの制度のおかげで、多くの学校がコンクールに出場できるともいえます。

次にコンクールのシステムを説明します。
まず、県にもよりますが、６月～７月にかけて地区大会が行われます。
そこから上位何組かを選出し、県大会へ推薦します。

【審査方法】
７人の審査員が演奏を聴いて、技術と表現でそれぞれ５段階の評価をつけます。

課題曲と自由曲、別につけるので審査員のひとりの持ち点は、２０点です。

ただし小編成などは、１０点満点になることがあります。

その７人の審査のうち、一番良い評価をつけた審査員と、一番悪い評価をつけた審査員の点を除いた５人の点がその団体の評価となります。（上下カット方式といい、審査がなるべく平等になるようにするための措置です）

全ての団体の評価が終わった後、点が上の団体から大体３：４：３の比率で金賞、銀賞、銅賞の賞が贈られ、上位数団体が上位大会への推薦状が贈られます。（もし同点なら審査員の多数決で決まります）

県大会が７月下旬から８月上旬（北海道支部は県大会がありません）、支部大会が８月下旬から９月にかけて行われ、その大会を勝ち抜いた団体（中学、高校は２～３団体）のみが、吹奏楽の甲子園と呼ばれる普門館で演奏することができるのです。

コラムF　吹奏楽の大会（後書き）

マーチングコンテスト、アンサンブルコンテストについては話に出てきたら追加します。

36話　地獄へのじゃんけん

7月11日（水）。
梅雨も少し早く明け、天気は快晴。
太陽はギラギラと輝き、最高気温は32度を越えている。
「あっぢぃー……」
「仕方ないだろ。旧館はクーラーないんだから」
唯が変な声をあげるのを聞いて呆れた声で返す先斗。

旧館は少し建物が古いせいかクーラーがない。
京によると、来年度工事を行うとの話だが、暑いものは暑い！
ちなみに唯がこの状態になっているのは、部室を開けた瞬間の熱気にやられたからだ。

「そういう先斗も声ヤバイぞ……」
庄吾の力ないツッコミ。
「庄吾だってそうじゃん……」
ふたりも熱気にやられたようで、一気にダウン。部室の中でへたっている。
「唯だって」
「先斗だって」
「庄吾だって……。ってもうそろそろ練習始めようぜ」
先斗はあることを思い出して楽器を出す。
「あ、冷たい……」
楽器ケースから出したばかりのチューバに触れる先斗。
チューバは金属で出来ている上にでかいので、熱が伝わりにくく冷めやすい。

そのため、吹く前のチューバは結構冷たい。
「あ、ずるい！」
「俺も俺も！」
今まで倒れていた二人が駆け寄ってくる。
「おい、ベタベタ触るなよ！　指紋付くじゃないか！」

そうやって騒いでいると、
「こらこら。騒いでんじゃない」
いきなり京が入って来た。

「あ、すみません。でも先生どうしたんですか？今日セクション練習ですよね？」
庄吾が聞く。
「そうなんだが、ちょっと連絡事項があるからミーティングに変えていいか？終りしだいセクション練習にするから」
「はい、分かりました。」
そう答えると京は第二音楽室に入って行った。
「なんだろ？」
「さあ……」
首をかしげつつ、ホワイトボードに連絡を書く唯。

＝＝＝

～１８：３０
自主練可（音出しは１９：００まで）
完全下校１９：３０
・ぞうきんが家にある人は持ってきてください
＝＝＝

「マジですか？」
京の言葉にみんな動揺しだす。
「マジだ。合唱部とＥＳＳ部もそれぞれ夏の大会でやる演目をやるからな」
「大丈夫だよ。あたし達校内発表文化祭でしたんだし」
唯がみんなをなだめる。
「まあそうだな」
「場数増やさないとね」
唯の言葉にみんな納得したようだ。
「じゃあそれで発表ってことで。次、７月２１、２２日にある吹奏楽の集いの２日目に出ます」

吹奏楽の集いでは桜田市と、北東にある梅ヶ崎町の学校の吹奏楽部がコンクール曲を演奏する。
そのため吹奏楽コンクールのリハーサルとも言える。
梅ヶ崎町は春日関から電車を乗り換えた先にある町で、人口は約２万８千人だ。
中心部にはホテルなどが建っているが、少し離れると田園が広がるのどかな所である。
小学校４つ、中学校３つ、高校２つがあり、どの中高にも吹奏楽部はあるが学校数が少なく単独で演奏会を行うことが難しいため、桜田市と共同で演奏会を行っている。

「で、初日の午前中、桜田工業、桜田農林と一緒に会場係をやります」
「会場係？」
弥生以外の初心者の部員が首をかしげる。
「有吉は合唱やってたから分かるな」
「あ、はい。集合から舞台裏まで誘導する係ですよね？」
「それもある。それが誘導係。全員で６人のローテーションだが、

うちからは女子3人頼まれている。それと、打楽器係。これは3人頼まれているから打楽器セクションの3人やってくれ」
「何をするんですか？」
ひかりが聞く。
「打楽器のセッティングの補助だ。部員だけだとセッティングに時間がかかって運営がスムーズに進まないからな。ティンパニーや鍵盤楽器を雛壇に上げる場合もあるし」
「はい」

「次にドア係。これは会場の入り口のドアについて、演奏が始まったらドアを閉め、終わったら開けてお客さんを入れる。桜田市民ホールには1階に4つ、2階に2つ入り口があるから、中と外で計12人。うちからは男子4人頼まれている」
「結構楽そうだな……」
「だな。演奏聞いていられるし」
拓也と優樹がこそこそ話している。

「あ、保護者とかに文句言われるかもしれないけどしっかり入れないこと。演奏中に入ってこられたら集中が切れてしまうからな。いいな。そこ2人！」
「は、はい！」
2人は同時に返事を返した。
「最後に駐車場係。男子2人。で、残り三人は仕事ないから午前中の演奏を鑑賞。じゃあ時間やるから、部長中心で係を決めて」

十分後。女子はすぐ決まったが、男子が決まらない。
「ねえ！全員中希望してもしょうがないでしょ！さっさとしてよ」
「だって外暑いじゃん……」
「あれは地獄だぜ……？」

朝の９時前から午前の部が終わる１２時半過ぎまでずっと外で交通整理をするのだ。先斗も中学のとき経験済みなのでこれは避けたい。

「よし。じゃあじゃんけんで決めようぜ」

庄吾が提案する。

全員が頷く。

「ＯＫ。じゃあ行くぞ！最初はグー！」

「「じゃんけんホイ！」」

全員の手が一斉に振り出された……。

37話　吹奏楽の集い初日　前編　～散々な男子達～

「あぢぃ……」
庄吾が声をあげる。
「暑い暑い言うな。体力消耗するだけだろ……」

7月21日（土）。
先斗と庄吾は日が高く昇ってきている屋外にいた。
じゃんけんの対象者は先斗、庄吾、匠、龍也、拓也、慶太の六名。
確率は3分の1だった。
しかし……。

「じゃんけんホイ！」

匠、拓也、龍也、慶太がグー。
先斗と庄吾はチョキだった。

「何で一発で決まるんだろ？」
「さあな……。あ、車来た」
「誘導するか」
演奏順が遅い学校もあるので、車は次々とやってくる。
「あ、こっちに回ってください！」
そこからは無駄話する暇もなく、ふたりはただ黙々と働くのだった。

その頃、慶太は無事にじゃんけんに勝ち、ドア係になった。
しかも内ドアなのでタダで演奏も聴ける。
慶太はこの機会にいろいろな演奏を聞こうと思っていた。

「…自由曲、スウェアリンジェン作曲、『チェスフォード・ポートレート』。指揮、井上（いのうえ）　多恵子（たえこ）」

演奏が始まる。慶太は一階席の左側前方の入り口にいるので、ステージも結構見えた。

ステージ上には２０人くらいいるだろうか？

ティンパニーが広がりを持ってクレッシェンドをかけ、トランペットのファンファーレに入る。少し音がかすれてしまっているが、なんとか音は消えずにいる。

リタルダントがかかってすぐにテンポが上がり、中低音の打ち込みの後、フルートソリが始まった。

いきなりトロンボーンが飛び出した。

それにつられてフルートソリが早くなる。

演奏が一気に崩れかけたが、低音とパーカッションが何とか指揮についていっているのでなんとかテンポは取り戻した。

中間部に入るが、トランペットは音をスカすし、クラリネットはリードミス。

しかもみんなｆｆで鳴らすので、まるで戦場のようだ。

先生も焦っているのか、指揮がだんだん早くなってきている。

冷静な低音とパーカスだったが、指揮のせいでとうとう崩れ始めた。

最後の音階も上がりきれずに、トランペットの、

ポヘ！

と言う音で、曲が終わったのだった。

もちろん拍手もおざなり。

慶太も礼儀で拍手しつつも、汗をかきながら礼をする指揮者を見ているしかできなかった。

（眠い……））
一方、じゃんけんには勝ったものの、龍也は今朝の話し合いで外ドア担当になってしまった。
しかも一番入り口に近くて、人通りの多い右正面のドア。
寝ていたら一発で先生にばれてしまいそうな位置だ。
「ここで、十五分間の休憩とします」
アナウンスが聞こえる。
このとき以外は片方のドアだけ開ければいいのだが、今回は両方開けないといけない。
（重……）
防音のため、ドアは厚く、重量もある。
ドアを開けた瞬間人が流れ出てきた。
龍也は脇においてある椅子に座り、瞼と瞼がくっつきそうになるのを耐えつつ、休憩が終わるのを待った。

ブー！

ブザーが鳴る。
「まもなく再開いたします。ロビーにおいでのお客様は至急会場にお戻りください」
やっとドアを閉められる。
中学生くらいの少女二人が慌てて駆け込んだのを確認し、龍也はドアを閉めた。
「12番。桜田市立桜田東中学校A。課題曲?。自由曲、ビル・ウィーラン作曲『リバーダンス』です……」
演奏が始まる。
コンクールで大編成の部は課題曲を演奏するが、運営のために課

題曲は番号で呼ばれる。
ちなみに２００７年度の課題曲は、

？　ピッコロマーチ
？　コンサートマーチ　「光と風の通り道」
？　憧れの街
？　マーチ「ブルースカイ」
？　ナジム・アラビー

となっていて、？は大学、一般、職場の部のみが演奏できる。
毎年、マーチとそれ以外の曲が交互に課題曲となり、今年はマーチの年だ。
龍也の出身校である桜田二中は小編成だったから課題曲が演奏できる団体をうらやましく思ったこともあったりした。

課題曲が始まってすぐのことだった。

ドタドタドタ……。

重苦しい音とともに厚化粧で太目のおばさんがホール内に駆け込んできた。
しかし外の暑さのせいか化粧は崩れてきていて、かなりケバい状態になっている。
龍也の眠気は一気に覚め、なんとも言えない恐怖が襲ってきた。

「ちょっと入れてちょうだい！」
ハアハアと鼻息を荒くしながら甲高い声で言うおばさん。
「すみません。規則なのでこの学校の演奏が終わるまでお待ちください」
京に言われたとおりにやんわりと止める龍也。化粧が崩れすぎて

いて、かなり怖い。
一応ポーカーフェイスを保とうとするが、顔はかなり引きつっているだろう。
しかもおばさんのつけている香水と汗が混じっているのか、においがきつく、ちょっと気分が悪くなってきた。
「何でよ！」
「いや、規則ですから」
「うちのナナコちゃんの出番なのよ！いいから早くして！あんたにそんな権限あるの！？」
ちょっとカチンときた。
「演奏中に入ると奏者の集中が途切れてしまいますから。あなたもナナコさんにいい演奏してもらいたいでしょう？」
でも龍也はあくまでも冷静に返した。
こんなわがままなおばさんは冷静に対応したほうがいいのだ。
こっちまで熱くなると、収まりがつかなくなる。
「んもう！いいわ！他の入り口行くから！」
おばさんは肩を震わせながら、どしどしと他の入り口に歩いていった。
（あ、あっちは拓也がいる入り口だな。…あいつ大丈夫かな）
自分の無事に感謝しつつ、龍也は弟の拓也の心配をするのだった。

（げ……。こっち来る！？）
おばさんの大声は拓也のいる左正面の入り口まで聞こえていた。
「ちょっと入れて……。あれ？あんたいつの間にこっち来たの？」
どうやら龍也と間違えているらしい。
「なんの話ですか？奥さん大丈夫ですか？お疲れのようですけど…

…」
「ああ、そういえば走ってきたから……。幻覚かしらね？」
「ちょっと休んだほうがいいですよ。あちらのベンチにどうぞ」
そうやってにっこりと笑ってベンチを指差す拓也。
「そうさせてもらうわ……」
おばさんはどっしりとベンチに腰掛けた。
（ＧＪ（グッジョブ）！）
ふと拓也が龍也の方を見ると、口パクでそう言っている龍也が見えた。

結局そのおばさんはベンチでグースカ眠り始めて、交代の時間まで起きる様子がなかった。
「あ、お疲れ様です」
役員のワッペンをつけた中学生がやってきた。
中原中学校の生徒だ。
中原中学校も小編成なので、明日が本番だ。
「あ、どうも。中原って午前練習？」
「そうです。本番前は大体体調管理のために早く終わるんで」
「そうなんだ」
「で、あれなんですか？」
そういって寝ているおばさんを指差す中学生。
おばさんはいびきをゴウゴウとかきつつ、眠っている。
弁当を食べようとしていた高校生もそのベンチだけは避けていた。
「何で寝てるんだろう……」
「まあ、話しかけなかったらいいと思うよ。たぶん勝手に起きてどっか行くから」
「……分かりました」
「じゃ、頑張って」
「お疲れ様でした！」

お互いに挨拶を交わし、拓也は集合場所に戻っていった。

３８話　吹奏楽の集い初日　後半　～忙しい女子＋打楽器～

「さ、桜田第三中学校さんですね。全員いますか？」
「はい」
か細い美香の声に対してトロンボーンを持った部長らしき女子生徒は元気に答える。
美香は今、５０人近い人数の奏者の前に立っている。じゃんけんで負けて案内係になってしまったのだ。
（こういう仕事が一番苦手なのに…）
美香は大勢の前に立つと声がうまく出せなくなる。今も声がひっくり返らないかひやひやしているくらいだ。

桜田三中は市内で一番大きい中学校だ。各学年６クラスあるらしい。
吹奏楽部も人数が多く、部員数は８０人超で、校内で一番大規模な部活で、去年からマーチングも始めたらしい。

「では音出し室に案内します。ついてきてください」
「「はい！」」
大きな声に圧倒されつつも、美香は恐る恐る案内を始めた。

３階の音出し室に着く。
「では、音出しの時間は２５分間なので、１０時３５分までとなります。時間になったら呼びます」
「「はい！」」
またまた大きな声にビビる。

美香は音出し室の横にある椅子に腰を降ろした。
「はぁ…」

いまだにたくさんの人の前に立つのは苦手だ。
部長としてみんなに冷静に指示を出せる唯をうらやましく思う。

「あ、時間だ」
腕時計を見て気づく。
ドアを開けて音出しの終了を告げる。
「では次にチューニング室にご案内します。二階なので下に降ります」
「「はい！」」

二階のチューニング室も無事に案内し終えて、舞台裏まで来た。
「それでは頑張ってください」
無事送り出せると思ったその時だ。

「あれ？ない！」
フルートの女子が顔を青くしてうろたえている。
「どうしたの？」
同じセクションの子が聞く。
「楽譜がない…」
「うそ！？さっきまで持ってたじゃない！」
ピッコロの子も、オーボエの子も慌てだす。
「里奈どうすんの！？」
「…どうしようどうしよう…」

「どこに忘れたか分かる？」
とっさに美香は里奈と呼ばれた子に声をかけた。
「えっと…音出し終わってチューニング室に持っていったまでは覚えています」
里奈は少し驚きつつもそう答える。
「チューニング室ね？」

「たぶん」
「じゃあ私が取ってくるから」
「え？でももう自由曲入っちゃってますよ！？」
「いいから。あなたは深呼吸していて」
「え？」
「そんな緊張してたら音出せないでしょ？」
「…はい！」
美香は舞台裏から出るとすぐに走り出した。

チューニング室に飛び込む。
「失礼します！」
５０人くらいの奏者が美香を向く。
「あれ？もう時間ですか？」
指揮者の先生が驚いた顔で聞く。
「すみません、フルートの楽譜忘れていませんでしたか？前の学校の子が忘れていったんです」
「これですか？」
オーボエの男子が譜面を上に持ち上げた。
「あ、駿介回してあげて」
順々に楽譜は人の手を回り、美香の元まで来た。
譜面を見ると、左上に１ｓｔＦｌｕｔｅの文字。
「あ、これです！ありがとうございました！」
美香はお礼もそこそこにチューニング室を飛び出した。

階段を駆け下り舞台裏に戻る。
前の学校は自由曲最後の音を伸ばしていた。
「はい！これでしょ？」
里奈に楽譜を渡す。
「あ、これですこれです！ありがとうございます！」
「頑張ってね！」

「はい！」
そして彼女達はステージに登っていった。
（あれ？）
無我夢中でいったからだろうか？たくさんの人の前でも声が出たことに気づく。
（いけるかも…）
結局この日、美香の声がひっくり返ることはなかった。

ひかり達パーカッションパートは舞台裏で待機していた。
「次は、ピアノ搬入だから男子そっちよろしくね」
「「はい！」」
農林生の指示に三人が答える。

ここには桜田農林と桜田工業、そして桜田中央のパーカッションパートが集まっている。
メンバーは計六人。
桜田農林の二年生、村松（むらまつ）ゆかり、一年生の内田（うちだ）海里（かいり）。
桜田工業の二年生、高田（たかだ）瑞希（みずき）。
そして、桜田中央のひかり、優樹、和志の三人だ。

「桜田中央ってパーカッション多いよね…」
楽器を搬出し終わってからすぐに瑞希がうらやましげに言う。
「そうですか？」
「うん、多いよ。うちは一人だからすべてオールマイティにやらないといけないの」
「大変ですね…」
「中学も小編成だったから打楽器少なかったし」
「こらこら。愚痴言ってんじゃないの」
ゆかりが瑞希を諭した。

この二人は去年の打楽器講習会で知り合い、今ではかなり仲がいいらしい。
「だって～。桜田中央は再来年、いや来年には確実に大編成に出られるわけでしょ？私も一回ぐらい課題曲演奏してみたい…」
「してるじゃん。毎年スコア買ってるし」
「そうじゃなくて合わせてやってみたいの！」
「合同で演奏できたらいいんですけどね…」
申し訳なさげにひかりが呟く。
「うん…。あ、ごめんね。ひかりちゃん達責めているわけではないから」
「わかってますよ。あ、演奏終わりましたよ」
「ほんとだ。みんな指示出すよ！次は１３番の梅ヶ崎第一中学校です。ティンパニは男子３人で協力して上げて。グロッケンはひかりちゃん。マリンバは男子が終わり次第協力して入れます。シロフォンとチャイムは私と瑞希。後のものは梅ヶ崎一中の子におまかせするけど、手が空いたら手伝ってあげて」
「「はい！」」
ゆかりさんの指示でみんな動き出す。
（課題曲かぁ…。一緒に演奏できたらいいのにな…）
ひかりにも瑞希と同じ気持ちが芽生え始めていた。

弥生と唯と奈津美は、女子のじゃんけんに勝ったため、客席にいた。
まあ弥生は方向音痴だからもともと外されたのだが…。
「プログラム１５番。青南中・高等学校中等部Ａ。課題曲１、自由曲、レハール作曲、『喜歌劇「ロシアの皇太子セレクション」』。指揮、有田（ありた）　清二（せいじ）」

青南中・高等学校は、桜田市にある二大私立の一つだ。

彩稜高校は高校しかないが、青南は中高とあり、一貫性の教育を行っている。
また、県内で数少ない総合学科がある学校で、彩稜ほどではないが人気のある学校なのだ。

中等部、高等部ともに支部大会に出場などかなりの成績を残している。

課題曲は安定した演奏で、無事に終える。

「この自由曲好きなんだよね～」
「なんで？」
「聞いてりゃ分かるわよ！」
奈津美の問いに笑顔で答える唯。

最初は金管のファンファーレ。その横で木管はひたすら半音階を駆け上がる。
少し静かな部分を通り抜け、鍵盤楽器のみが残る。
一度音楽が止まった。

カカカカン！

カスタネットの固い響き。その横で中音楽器が独特なリズムを吹く。
だんだん楽器が増えていく。
盛り上がりきった瞬間。アルトサックスのソロが始まった。音圧たっぷり、艶やかな音色とあらわせばいいだろうか。中学生とは思えない演奏だ。

「かっこいい…」

奈津美が呟く。
「まだまだ〜！次もすごいよ！」
小声で周りに迷惑をかけないようにはしゃぐ唯。

続いてソプラノとアルト、テナーふたりにバリトンまで、サックスセクション五人が全員立ち上がり、豊かなハーモニーを奏でる。

続いてアルトサックスのソロに戻る。しかも次はどソロだ。
とても早いパッセージの上、テンポはある程度奏者に任せているようで指揮者はタイミングのみを出していた。

（あらら…）
ちょっと弥生が横を向くと、奈津美と唯が全く同じ顔で目をキラキラさせていた。
どうやらこの部分はアルトサックスがものすごく目立つようだ。唯が好きなのもわかる気がする。

演奏も中盤に入り、クラリネットが優しい音で旋律を吹く。
途中で金管も入り、トランペット、トロンボーンが重厚な響きを客席まで飛ばした。
全員がロングトーンに入る。ｆｆなのに全くピッチが崩れない。
吹ききった。そう感じた直後、ピアノが速いテンポでリズムを刻む。

「「ハイハイハイハイハイハイハイハイ！」」
いきなり全員が手拍子とともに声を出した。
まだ少し幼い声に、彼らが中学生であることを思い出させられる。
そのスキャットに客席が拍子抜けしているうちにシロフォンとビブラフォンが打楽器ソリを始めた。

「コンクールで声出していいの？」
小声で唯に聞く弥生。
「うん。歌詞がついてなかったらあり」

打楽器ソロのあとにはいろいろな楽器がメロディーを奏でる。
そのメロディはだんだん複雑になる。
木管がわけの分からないパッセージを吹いたとおもったら一気にデクレッシェンドしてティンパニのロールだけが残った。

最初の金管のファンファーレが戻ってくる。
フィナーレだ。
最後の音を伸ばす。
指揮者が思いっきり指揮棒を振り切った。

「ブラボー！」
客席から声が上がる。

「すっご～い…」
「さすが支部級だわ…」
唯たちもため息をついている。
「これで午前の部を終了致します。午後の部は1時15分から開始します」
アナウンスとともに客が会場から出ていく。
「あたし達も集合場所行こうか」
「うん」
「弥生迷わないでよ？」
「一人じゃないし大丈夫よ」
顔を赤くして呟く弥生。
人の波に乗って、三人は外に出た。

１２時４５分。
そこには疲れ切った男子達と、満足げな女子達が並んでいた。
「…先斗どうだった？」
拓也が先斗に死にそうな声で聞く。
「暑かった…」
「そうか…。こっちはモンペが出たから精神的に疲れた…」
京が戻ってきた。
「お疲れ様。運営者側から弁当をもらえるから一階の会議室で食べてください。食べ終わったら学校に戻って練習。１５時半から軽く合奏、諸連絡等を済ませて、５時には解散します」
「「はい！」」
いつもよりハリがないものの、十分大きな声が会場横のスペースに響いた。

会議室に入ると、机に弁当とペットボトルのお茶が並べられていた。
「じゃ、合掌でもする？」
「え？やんの？小学生じゃあるまいし」
唯のいきなりの提案にツッコむ庄吾。
「ま、たまにはいいんじゃないか？」
そういって諭す先斗。
「そうだな。まあいいや。唯やってくれよ」
「ＯＫ。それじゃあ…合掌」
「「いただきます！」」
１６人の声が会議室に響き渡った。

３９話　吹奏楽の集い二日目　１　～集合、音出し、チューニング～

７月２２日（日）。今日は吹奏楽の集いの２日目だ。
８時に学校に集合して積み込み、会場の桜田市民ホールへと自転車で移動した。
小編成の部からなので、本番は１０時５０分からの５番目だ。

「あ～。ヤバイよ～」
「落ち着けよ」
先斗が卓也を見て声をかける。
「だって校外発表って始めてだし……」
拓也がかなりガチガチだ。

現在９時３０分。
積み下ろしを終え、楽器を組み立てている所だ。
１５分後に集合、チューニングを経て、本番となる。
組み立てている場所はホールの二階の会議室。学校ごとに組み立て場所が割り当てられているが、演奏の順番が早いので、今は先斗たちが占有している。
「場所は関係ないだろ？校内発表はうまく行ったじゃないか」
横でホルンを組み立てていた龍也が諭す。
「……うん」
「それにクラは東や有吉もいる。三人で支えあえば大丈夫だろ？……俺は一本なんだからな」
「……分かった」
「拓也く～ん！打ち合わせするよ～！」
「今行く！」
弥生の声に、拓也はクラリネットセクションのほうへ向かった。
「まったく……。あいつは心配性だな」

「まあ、言ってやるなって。二中は小編成だったよな？」
「ああ。中二はホルン一人だったからきつかったな……」
楽器を組み立てながら話をする先斗と龍也。
「俺は上の先輩がいなかった」
「でも同級生にいたんだろ？チューバ」
「まあな。でも、中二のときは怖かったぜ？バスクラの先輩がスパルタでさ……」

そんなたわいのない会話をしていると、
「そこの2人早く！集合時間になるよ！」
唯がアルトサックスのストラップを首にかけてやって来て、ふたりを追い立てる。
「ああ悪い悪い」
2人は楽器を持つと、慌てて集合場所へと向かうのだった。

そのころ、優樹の姉、里美は友達と桜田市民ホールを訪れていた。
「あ～、涼しい……」
ホールに入ったとたん、クーラーの涼しさについ声をあげてしまった。
「里美～。おばさんくさいよ～」
友達の青木（あおき）　松葉（まつば）が笑って言う。
「うるさいわね～！　あたしはまだピチピチの17歳なんだからおばさんなんて言わないでよ！」
「ピチピチって表現もおばさん、いやおじさんくさい」
「じゃ、どっかいいとこ連れていきましょうか？お嬢さん」
「遠慮しときま～す」
「なによ！人が乗ってあげたのに」
「ごめんごめん。私が悪かった！じゃあ入ろ。席なくなっちゃう」

「それにしても優樹くんが吹奏楽ねぇ……」
「意外よね」
「そうかな？意外とリズム感いいじゃない。彼」
松葉は中学校では吹奏楽部に入っていた。だから誘ってみたら一緒に来てくれたのだ。
「いいの？」
「うん。だって優樹くん音ゲー得意でしょ」
「そうだけど…」
それって関係あるのだろうか…？

「どうぞ」
受付の女性がプログラムを差し出す。
「ありがとう」
座席についてプログラムを開くふたり。

＝＝＝

指揮　大西（おおにし）　美穂（みほ）

・吹奏楽のための音詩「輝きの海へ」

八木澤　敦

3，　10：20　桜田市立桜田第二中学校（29人）

指揮　江角（えすみ）　優子（ゆうこ）

・飛行の幻想

シェルドン

Visions of Fright

Robert Sheldon

4，　10：30　桜田市立桜田第四中学校（19人）

指揮　天野（あまの）　めぐみ

・管楽器と打楽器のためのセレブレーション

スウェアリンジェン　Celebration for Winds and Percussion

James Swearingen

5，　10：40　県立桜田中央高等学校（16人）　指揮

西村（にしむら）　京（たかし）

・感謝と喜び

シェーファー
ＴＲＩＢＵＴＥ　ＡＮＤ　ＴＲＩＵＭＰＨ
Ｄａｖｉｄ　Ｓｈａｆｆｅｒ

休憩（１５分）

＝＝＝

「全員いるよ」
庄吾が答える。
「よし！全員います」
「ではチューニング室に案内します。ついてきてください」
京とはチューニング室で落ち合うことになっている。

チューバと楽譜を持って階段を上がる先斗。
チューバは１０キロあるので最初は結構きつかった。
さすがに４年目になると慣れて普通に運べるが、階段が狭い！
本来は非常階段なのだからもう少しスペースを取ってもらいたいものだ。
しかも段差がデカイ！ベルが階段に当たりそうで怖い。上がりはいいけど下りが恐ろしい。
チューバと階段から落ちたら大怪我は免れないだろう。

「大変だな」
慎重に上がる先斗を見て、慶太が話しかけてくる。
「ま、チューバ吹きの宿命ですから」
「でかいもんな」
「バリサクもでかいと思うけどな」
同じように階段に気をつけている慶太を見て、そう返す先斗。
「ま、俺は背高いからちょっと余裕だけどな」
「ど～せ、背低いよ」
ほんとうは先斗ぐらいが標準なのだが、吹奏楽部には庄吾と慶太の二大トップ（？）がいるため、けっこう劣等感を覚えたりするのだ……。

チューニング室前に着くと、中から二つ前の団体の桜田二中が出てきた。大体２５人くらいだろうか。
「あ、田中先輩！」

ホルンを持った男子生徒が龍也を見つけてやってくる。
「あれ？なんで田中先輩クラリネット持ってるんですか！？ホルンやめちゃったんですか！？」
と思いきや拓也に声をかけている。拓也は当惑顔だ。

「こっちだ、こっち」
ちょっと溜め息をついて後輩を呼ぶ龍也。
「あれ！？田中先輩が二人いる！？」
「だから前三つ子だって説明しただろうか。ほら、二中の連中行っちゃうぞ」
「あ、やべ！じゃあ行きます。先輩、コンクール終わったらまた二中遊びにきてくださいね！ホルン一年生入りましたから！頑張ってください！」
そう言ってホルン吹きの後輩は駆けていった。
「走るなよ！」
龍也がその背中に声をかけた。

「後輩か？」
「ああ。羽山（はやま）って言うんだけど落ち着きがなくて」
そういってまたため息をつく龍也。結構苦労人のようだ。
チューニング室に入る。
「……広いな」
「うん」

音楽室より少し広い部屋がチューニング室に当てられていて、椅子が並べてある。
「二中も小編成だけど人数多いよね」
椅子の並びを見て里穂が呟く。
二中は29人だとプログラムには書いてあった。

小編成の部の出場規定人数ぎりぎりの人数だ。
それに比べて桜田中央は１６人と下から二番目の人数である。
「ま、来年たくさん部員入れりゃいいじゃん。それより早く音出ししちまおう。チューニングまでに吹いとかないと」
庄吾が諭す。

昨日の合奏の時、チューニング時間の振り分けは言われていた。小編成の部は音出しとチューニングの時間が一緒になっていて、合計４０分ある。
そのうち音出しは２５分もらっているが、個人でもチューニングをしておかないといけないので、時間はあまりない。
先斗はマウスピースを楽器本体から取り外し、バズィングを始めた。

「準備いいか～？」
京が入ってくる。
「ＯＫです！」
全員気合いの入った声で返事を返す。
「よし、Ｂ♭！」
京が合図を出す。

パァー！

最初の合奏とは比べ物にならないくらい綺麗に音が響く。
「よし、感謝と喜びの頭」
「はい！」
チューニングを終えると、すぐに京は曲のスコアを広げた。

先斗と慶太が音を延ばす上で、庄吾と里穂、龍也と唯がファンファーレを吹く。

途中で他のメンバーも加わって、一旦盛り上がった。
テンポが上がり、クラリネットが刻みに入る。
唯と奈津美が旋律を吹き始めた。
そこで京は指揮を止めた。
「ＯＫ。じゃあ残り３分は個人で調整。金管はきちんと水抜きしておくこと」
「「ありがとうございました！」」
「頑張って行きましょう！」
いよいよ本番だ。

４０話　吹奏楽の集い二日目　２　～舞台裏～

「じゃ、頑張っていこう！」
「「オ～！」」

唯の掛け声にみんなが答える。
「じゃあ舞台袖に案内します。ついてきてください」
案内をしているのは桜田商業高校の生徒だった。

桜田商業をはじめとする高校Ａ編成の部、中学校Ａ編成、Ｂ編成、そして小学校の部の演奏は昨日終わっていて、今日は小編成、中学校Ｃ編成、高校Ｂ編成、大学・一般の部の演奏が行われる。

急な階段身の危険を感じつつ降り（特に先斗と慶太）、重い扉から舞台袖に入る。
舞台袖では前の団体の演奏を聴けるのだが、前の団体がめちゃくちゃうまかったり、曲が被ってたりすると無駄に緊張してしまう。

「プログラム４番。桜田市立桜田第四中学校。自由曲、スウェアリンジェン作曲、管楽器と打楽器のためのセレブレーション。指揮、天野　めぐみ」
女性が指揮台に立つ。

「ここって美香ちゃんの出身校でしょ？」
先斗の後ろで奈津美、美香、里穂が小声で話している。
「うん」
「吹奏楽部あったんだね。入ればよかったのに」
「ちょっと気後れしちゃって…。友達と一緒に文芸部入っちゃったの。入っとけば良かったな」

そういって美香は軽く笑った。

演奏は後半に差し掛かり、奏者のテンションはますます上がっているようで、転調するごとに音圧が上がっていく。

「すごい…」

「うちの次に少ないんだったよな…」

加奈子と匠が驚いている。匠は小編成の演奏を数多く聴いてきたからなおさらだろう。

桜田四中は去年小編成の部で県大会金賞受賞、あと2点で代表だったという最近急成長を見せているバンドである。

しかもこの中の三分の一は楽器を持って間もない一年生なのだ。

顔で大体分かるが、必死について行っている。

庄吾は慶太と一緒に深呼吸をしているし、クラリネットセクションは指回しをセクションで行っている。みんなそれぞれ緊張を取り除こうとしているようだ。さっきあんなにビビッていた拓也も、真剣な顔で指回しをしている。

そして一番心配する必要のないはずの唯は…。

「あれ…？」

安心していた先斗だったが、唯が珍しく不安そうな顔をしているのを見て驚いた。顔色もあまり良くない。

「ちょい頼む」

先斗はチューバを匠に頼み、唯の元に向かう。

「どうした？」

「なんかちょっと中二のときのこと思い出しちゃって…キュっていわないかな？」

唯はリードミスを恐れていたのだ。

中二の時の本番のことだ。静かな部分でいきなり唯がリードミスをした。

リードの状態が悪かったのか、それで動揺したのか、出す音出す音リードミスになる。

とうとうサックスのメロディがぷっつり消えてしまった。

軽くトラウマになっているのだろうか？

そういえばあのリードミスがあったのはこのホールだった。

「大丈夫だ」

優しく声をかける先斗。

「でも…」

「目、閉じて」

「うん」

「ゆっくり三十数えて」

「え？うん、1、2、3…」

これは先斗が二つ上の先輩に教えてもらった緊張を取り除く方法だ。

やるとかなり気分が落ち着く。

唯が数えている間に桜田四中の演奏はそのままのテンションでフィナーレを迎える。

タッタカタカタカタン！　パパパパン！

スネアドラムが独立した動きを持ち、全楽器がトゥッティ（全員が同じ動きを演奏すること）で演奏を終えた。

パチパチパチパチ…。
拍手が鳴る。それは同時に桜田中央高校の本番が始まることを意味する。
「落ち着いたか？」
唯の顔を見る。
少し落ち着いたようだ。顔色も戻ってきた。
「うん」
「じゃ、行くか」
「うん！」
唯は目いっぱいの笑顔で答えてくれた。

同じ頃。ひかり達は何度も配置表を見ていた。
＞ｉ５３３―１４９＜

いきなり和志が手を差し出す。
「な、なに？」
「あ、あのさ。円陣。三人でやらない？」
「…うん！優樹～。来て！」
「ちょい待って！後ちょっとだから」
ティンパニー担当の優樹。他の学校が演奏しているときはチューニングができないため、必死でチューニングをしている。

和志くん、ひかり、優樹の順で手を重ねる。
「頑張るぞ～」
「おー」
一応舞台裏なので声を落とす三人。

その後、優樹はティンパニのほうに戻った。
打楽器は舞台裏にいるのが長いから演奏を聴いていられる。
「あのさ…」
ひかりは和志が話しかけてくるのに気づいた。
「なに？和志くん」
「…くんってつけるのやめてくれないかな？」
「え？」
「優樹は呼び捨てじゃん？なんか他人行儀な感じしてさ」
「いいよ。和志」
なんとも思わずにひかりは和志くんを呼び捨てで呼んだ。
「…ありがと」
ちょっと顔を背けていう和志。
「？」
「あ、終わったみたい」
拍手が聞こえてきた。
「じゃ、行きますか」
「うん！」
ひかりは撥をぎゅっと握り締めた。

「どうぞ」
係員の声に優樹はティンパニを薄暗い舞台に運び込む。
舞台下手に置く。袖に戻ってもう一台。
舞台転換は早くしないと運営に影響が出る。
そして周りを見て最終確認。
チャイム、サスペンションシンバル、スネアドラム、クラッシュシンバル、ジングル、そしてティンパニの横にウインドチャイム。
先週から部室で搬入の練習をしておいたため、打楽器のセッティングはバッチリだ。
まだ舞台は暗いが、客席がよく見える。

（あ、姉ちゃんいた…）
優樹は里美を見つけた。手を振ってきたので、軽く頷いて返す。
朝だからか客席に人は少なく、思ったよりは緊張しない。
ひかりも和志もあまり緊張の様子は見られないようだ。

（さっきの和志の顔、赤かったなぁ…なんでだろ？）
そんなことを考えているとライトが舞台を照らした。優樹はライトがまぶしくて一瞬目をつぶる。

「プログラム５番。県立桜田中央高等学校。自由曲、シェーファー作曲、感謝と喜び。指揮は西掛　京です」
京が指揮台に上がる。
全員の顔を見渡す。

京は部員達の様子を見て軽く頷き、指揮棒を上げ、そして下ろした。

40話　吹奏楽の集い二日目　2　～舞台裏～（後書き）

ちなみに編成は、

Flute　坂根　美香
1st Cl　有吉　弥生
2nd Cl　東　茜　田中　拓也
A，Sax　中島　唯
T，Sax　吉岡　奈津美
B，Sax　進藤　慶太

1st Tp　三上　庄吾
2nd Tp　今井　里穂
Hrn　田中　龍也
Trb　倉橋　加奈子
Euph　黒田　匠
Tub　西掛　先斗

Per　田中　ひかり（スネアドラム、ジングル、サスペンションシンバル）
竹原　優樹（ティンパニ、ウインドチャイム）
渡辺　和志（サスペンションシンバル、クラッシュシンバル、チャイム）

となっています。

打楽器が被っているのは、場所によって、間に合わない場合があるからです。

４１話　吹奏楽の集い二日目　３　～本番～

先斗、慶太の低音族と、優樹のティンパニのロールが音を伸ばす。
そこに庄吾、里穂のトランペットと龍也のホルンが二声のファンファーレを入れた。三本の太い響きが会場に飛ぶ。
ティンパニーがファンファーレにアクセントを加えた。
楽器が加わっていく。クラリネット、ホルン、トロンボーン、ユーフォ、サックス。
ロングトーンに入る。和音もいつもよりけっこうマシな方。

クラリネットがリズムを刻むが三本なのでかなり響く。ジングルを鳴らすひかりも少し戸惑っている。
そういえばこんな広い会場でやるのは初めてだ。
この間体育館で演奏したが、ホールはそれ以上に広い。

キイ！

サックスがメロディーに入る直前。拓也がリードミスをした。

その瞬間、唯の肩がビクッと揺れる。
でも今回はまだ落ち着いているようで、すぐにメロディーに入った。
クラリネットの２ｎｄは茜もいるので、刻みも無事続いていく。
休符であった先斗はほっと息をついた。

クラリネットの刻みが終わり、トロンボーン＆ユーフォ、クラリネット＆アルサク、トランペットの順でメロディーを重ねた。

トランペットとホルンのメロディ。トランペットのふたりはメロ

ディーを引っ張っていき、龍也はハモっている。二声のメロディーだが、全員経験者なので、うまくバランスをとれている。
ただ、時折入る中低音とティンパニのリズムと少しずれた。

うって変わって静かなメロディ。クラリネット、フルート、アルサクがメロディーだが、音程が悪すぎる…。途中でトランペットが入るとさらに壊滅的になった。

中低音のリズムが入るところで何とか取り返す。

クラリネットが対旋律を吹く。ここは吹きやすい音域なのできれいに鳴る。
それに対抗する主旋律はまたトランペット&ホルンなので、ちょうどいいバランスで鳴った。

ひかりのスネアソロも成功して、前半の頂点に来た。
トランペットなどの高音楽器がメロディーを吹き、一拍遅れて中低音が入る。

リタルダントがかかる。

ここは打楽器が忙しい場所だ。クラッシュシンバルを叩いた和志がチャイムに、スネアを叩いたひかりがサスペンションシンバルに移動しなくてはならない。

ひかりは成功。和志もハンマーをつかみ損ねたがなんとか予備を取り直し、ぎりぎりのところでF（ファ）の音を入れた。

ホルンとフルートがメロディーを吹くが場所が遠くてずれまくる。優樹がウインドチャイムを入れ、一度音楽が止まった。

クラリネットのメロディ。ここは途中から１ｓｔがメロディーで２ｎｄがハモりになる。
１ｓｔの弥生は元合唱部だけあって、メロディーを歌うのがうまいようだ。音程も最初の部分よりは気にならない。
途中でトランペットが加わり、また出て行った。

ゆったりと音楽が流れていく。

テンポが少し上がったところでホルンとアルサクのメロディ。
チャイムとサスペンションシンバル、トランペットが加わり、中間部最大の盛り上がりの部分に差し掛かる。
旋律を担当する楽器が壮大にメロディーを奏でる中、低音は下降系の４分音符を吹いた。

テンポが上がり、クラリネットが刻みを吹きはじめた。

またスネアのソロがやってくる。
ひかりは自分の手が震えるのを感じた。
この曲は再現部があるため、このソロも二回あるのだ。
中低音との刻み。この刻みからまたスネアが入る。
テンポ１６０で十六分音符中心のリズム。楽譜は暗譜したものの、不安が消えない。

タカタカタン！

なんとか決める。ロールを入れて、すぐにサスペンションシンバルの方へ…。

（え！？）

同じリズムが転調しながら再現される。
京も、スネアの音が急に消えたため、驚いた顔でひかりをみる。
（しまった！）
コーダに音楽が飛んでいた。
最後にはまたスネアの決めるところがある！

フルートとクラリネットのトリルが聞こえる。
この間にスティックを持ち直し、なんとかスネアの前に立つことはできた。でもこの時点で４小節分叩き損ねている。
ひかりは泣きそうだった。
管楽器にも動揺は広がり、ピッチが崩れる。
震える手でひかりは最後のリズムを刻んだ。

パチパチパチ…。
桜田四中より明らかに小さな拍手。
京が礼をして、退場を促す。
舞台が暗くなった。

「とりあえず搬出しよう。反省はそれから」
呆然としているひかりに優樹が声をかける。
「うん…」
ひかりはスティックを小物台に置き、スネアを持って搬出口へと進んだ。

４２話　吹奏楽の集い二日目　４　～反省、復活、そして～

午後５時。
部員達は積み込みを終え、学校に戻ってきていた。
「じゃ、ミーティングするから音楽室に」
唯も少し元気がない。

少し遅れて唯達が音楽室に入ると、沈んだ顔のみんながいた。

京が入ってくる。
「さてと。今日演奏してみてどうだった？」
部員達に問いかける京。

「会場が広くて、合わせるのが難しかったです…」
美香。
「リードミスしてしまいました…」
拓也。
「音程が…」
茜。
「ハンマー落としかけました…」
和志。
「息がうまく吸えなくて、響きがなくなりました…」
庄吾。
「走りました…」
加奈子。
「スネア…移動する…ところ…間違えて…しまいました」
泣き声のひかり。
音楽室は暗い雰囲気になりかけた。

「それだけか？」
そう聞く京。
「……」
みんなうつむいている。
「…講評配るから読んでみろ」
そういってコピーした講評用紙を配る京。

吹奏楽の集いは、コンクールのリハーサル的要素も含んでいるため、講評を5人の先生から書いてもらえる。
講評をもらった団体はそれを読んで残りの期間、直すべき問題を探すのだ。

＝＝＝

中間部、木管上手に歌えています。
打楽器のｓｏｕｎｄもＧｏｏｄ！
縦をもう少しあわせましょう。

・安西　良太

評価Ｂ

金管の音が太くてよい。
速いテンポになると音の処理が雑で吹き捨てたような音になるので注意。

・小林　孝彦

評価Ｃ

メロディー担当の楽器が少ない時、伴奏に潰されてしまっている。
メロディー自体はうまく歌えているので残念。
早いテンポの部分、音程注意。

・松原　剛一郎

評価Ｃ

音量変化がはっきりしていてよいが、ｃｒｅｓｅが雑。
人数のわりに響いていたが、乱れると一気に響きが失われる。

＝＝＝

「どうだ。いいところも書いてあるだろう？」
「はい」
「大会まで後二週間。いいところを残しつつ、直すところは出来る限り直していこう」
「「はい！」」
「じゃ、部長連絡」
「はい！」
元気が戻った唯。連絡を始めた。

「明日から夏休みです。夏休みの部活は予定表に書いた通り、一週間前までは午前練習、一週間前からは一日練習になります。暑くて体調崩しやすいですが万全な体調で本番を迎えたいので、無理はしないでください。後、家族や知り合いでコンクールのチケットが欲しい人がいたら、西村先生に希望枚数を言ってください。大人１，５００円、高校生以下１，０００円です」
「「はい！」」
「じゃあ、解散とします。起立！礼！」
「「ありがとうございました！」」
音楽室にまた明るい声が響いた。

「がんばらなくちゃね！」
帰り道で唯が笑いかけてくる。
一日でこんなにコロコロと感情が変わるとは…。先斗は逆に感心した。
「ああ！」
でも先斗ははっきりと返事をした。

それが唯だ。
立ち直りが早いのが唯の長所だ。

コンクールまで後三週間。
三週間しかないと思うか、三週間もあると思うか、みんなそれぞれ考えが違うだろう。
でも、できることが限られているのも確かだ。
だから頑張るしかない！

コラムG　弦楽器

コラム６回目は吹奏楽で使われる弦楽器について説明したいと思います。
といってもたった二つしかありません。

○コントラバス
４本～６本の弦を持つ大きな弦楽器です。吹奏楽では主に４弦のものを使います。
また、奏法として、いろいろな種類があります。

・アルコ
弓を使って演奏します。

・ピッツィカート
弦を指ではじいて演奏します。管楽器には真似のできない音を出すことができ、弦楽器の魅力ともいえます。
英語の発音に近いのはピッツィカートですが、この小説ではピチカートと表記します。

・バルトーク・ピッツィカート
バルトークという作曲家が好んで曲に書いた奏法で、弾く際に弦を指板と垂直に強く引っ張って離して弦を指板にぶつけます。

・ハーモニクス
倍音を出す演奏技法で、ギターでも使われます。

オーボエ、ファゴット、アルトクラと同様に小編成バンドではな

かなか導入しづらい楽器です。
ただし、ピチカートは他の管楽器には真似ができない（一番近い音を出せるのはファゴットだそうです）ので、静かな部分の伴奏では良く好まれて使用されます。
コントラバスが目立つのは、
・『第六の幸福をもたらす宿』の三楽章
・『イーストコーストの風景』の終楽章
などがあげられます。

○ハープ
共鳴胴の両端に2本の棹を立て、2本の先を結び、棹のうちの曲線状になった方と共鳴胴との間に平行に弦を並べて張った楽器です。
弦の数は数十本に及び、この弦を指で弾いて演奏します。
一番古い楽器ともいえ、同種の楽器は世界各地に分布しています。
音域はピアノと同じく吹奏楽で使用される楽器の中ではトップクラスです。
特徴として、音階のグリッサンドができることがあげられます。
今独奏や合奏で用いられているのは、ダブル・アクション・ペダル・ハープというもので、47本の弦を変ハ長調全音階で張ったものです。（半音低く調律された白鍵のみのピアノのイメージ）
また、半音ごとに弦が張られたクロマティック・ハープというものもあります。
アンプが使えるものもあります。

ちょっと話は変わりますが、みなさんハープにどんなイメージをお持ちでしょうか？
優雅、美しい女性がポロロンと奏でていそう…。
自分も中学生のときまではそんなイメージを抱いていました。
しかしある演奏会の時です。
ステージにハープがありました。

演奏が始まり、男性がハープを演奏していました。
それはいいんです。楽器は男性でも女性でも演奏していいのですから。
しかしその足が、ものすごく動くんです！
あっち行ったりこっち行ったりと。
調べてみたら、
「7本のペダルを足で操作することにより、各オクターブのハ、ニ、ホ、ヘ、ト、イ、ロそれぞれの弦を同時に半音上げたり、全音上げたりできるようになっている」
とありました。
つまりハープは音階を足元のペダルで変えるのです。
そのため曲内で転調が多いと、自分が演奏会で見たようにペダルを何回も変える必要が出てきます。
ちなみにハープを演奏する女性は大抵長いスカートを履いていますが、それは足がペダルを押す動きを隠すためらしいです。
とても高価なのでコンクールで使用する場合はレンタルしたり、持っている学校から借りたりします。
代用として、ビブラフォン、ピアノなどが考えられますが、先述の音階のグリッサンドを再現するのは困難です。
とりあえずこれで吹奏楽で使われる楽器の紹介が終わりました。
次回からは別のことを考えます。

コラムＧ　弦楽器（後書き）

無事５０部分まで書くことができました。
さらに１５，０００アクセス突破しました！
これからも『ＳＡＫＵＲＡ　ＷＩＮＤＳ』をよろしくお願いします。

コラムでやってほしい企画があったらぜひメッセージか感想欄へ。
よろしくお願いします！

４３話　一枚の紙

７月２３日（月）。
いつもより気合を入れて学校に向かう先斗。

今日から夏休み。練習もたっぷりできる。
ただ、来年から夏休みが短くなるらしく、来年は７月一杯授業があり、８月の下旬には再開するらしい。
ただ、桜田東高に行った友達が言うには、
『７月２８日まで補習。夏休みは三週間で、８月１６日に模試があって、実質二学期が始まる』
らしい。

「おはよう！はいこれ！」
楽器庫に入ると唯の明るい声が響く。
「おはようさん。なんだこれ？」
挨拶とともに渡された一枚の紙。
「これ、昨日の演奏の録音を聞いて二週間で直せそうなものを書いてみたの。練習の参考にして」
紙を見る先斗。

＝＝＝

・pの伴奏はもっと優しく。
・二回目～コーダに入る一拍遅れた伸ばしは音程をはっきり出すように。
・コーダ5小節目のｆｐは潰さないで。
・その後のＡｓ，Ｇ，Ｆの流れは低音しか吹いていないからはっきり。（慶太くんと音程を合わせて）

＝＝＝

軽くうつむいていた唯が顔を上げる。
「ああ。できることならな」
「じゃあ今日ちょっと帰り付き合って」
「…ほぼ毎回付き合ってやってるつもりだが？」
「いいから」
「…分かったよ」

今日はなんだろうか？
（ケーキバイキングは今月の頭に行ったし…。）
先斗には全く思いつかなかった。

４３話　一枚の紙（後書き）

今回は短いですが、ここで切らないと次回の話につなげにくいのでこうしました。

【追記３／２４】

続きを書きたいのですが、今日から事情により、１０日間更新ができません。帰って来次第更新しますのでご容赦ください。

４４話　奇跡の１日

午前９時。練習の開始だ。
今日から混合練習が始まった。

――

７月２３日（月）

○　９：００～１０：００　音出し＆個人練習

○１０：００～１０：４５　セクション基礎練習

・フルート＆クラ
・サックス
・ペット＆ホルン
・ボーン＆ユーフォ＆チューバ
・パーカス

～休憩～

○１１：００～　ミックス練習

・低音＆パーカス　１～１３小節
・ホルン＆フルート　５３小節～５７小節

・クラリネット&アルサク&テナサク　５８小節～７３小節

・チューバ以外の金管　２５～４０小節

○１１：３０　分奏（木管、金管、打楽器）

○１２：００　合奏

～１３：００　終了

＝＝＝

「庄吾待たなくていいのか？」
「庄吾は慶太くん達とご飯行くって言ってた」
「俺らも昼飯にしないか？」
現在時刻１３：３２。先斗のお腹の虫は大騒ぎしている。

「用が先」
冷たく言い放つ唯。
「おい…」
突っ込もうとしたが唯はまた歩き始めている。
先斗は慌ててその後ろを追った。

ふたりは桜田中央駅に来ていた。いつもの列車に乗る。
「帰るのか？」
「…」
聞いてみるが唯は何も言わないで歩いていく。
（なにか機嫌を損ねることでもしただろうか…？）
特に思いつかないまま、東桜田駅に着き、気づいたら商店街を歩いていた。
唯は相変わらず無口なまま携帯をいじっている。
不意に唯が足を止めた。
「ここって…」

喫茶　櫻田。チーズケーキが美味しい、唯のお気に入りの店のひとつだ。

「チーズケーキ食べたかったのか？」
聞いてみると唯は予想外の回答を返した。
「入って」
「え？」
しかし店のカーテンは閉まっていて、とても開いているようには

思えない。
「い～からドア開けて！」
「わ、分かったよ」
唯が促すままにドアノブを握る先斗。

ガチャ！

ドアを開けた。

パンパン！

「先斗誕生日おめでとう！」
「へ？」
クラッカーを持った庄吾、慶太、優樹、美香、弥生の姿。

「驚いた？」
振り向くと、にんまりと大成功というような顔をしている唯。
「なんで？」
「だって先斗いつも誕生日忘れてるじゃない」
確かに夏休みに入った上、コンクール前だから毎年忘れてしまっていた。
去年も小百合が夜にケーキを出してきて初めて思い出したくらい

だ。

「先斗くん、誕生日おめでとう」
奥から航一がケーキを持ってきてくれた。この店自慢のチーズケーキだ。
「ありがとうございます」
嬉しすぎてこれしか言えない先斗。
「じゃ、プレゼントね。私はこれ！」
弥生が出してきたのはチューバの形をしたキーホルダー。楽器屋にあるものだ
「ありがとう」

「俺はこれ」
優樹からは小さな鉢植え。
「これは？」
「姉ちゃんに相談したらこれくれたんだ。だから分かんねえ」
「…ありがとう」

「私はこれ」
美香は図書券。読書好きな美香らしい。
「ありがとう」

「俺はこれだ」
庄吾が出してきたのは…。
「オイル？」
楽器のオイルだった。

「実用的な方がいいと思ってこれにした」
「センキュ。ちょうどなくなりそうだった」

「最後に、あたしはこれ！」
唯は持ってきていた楽器を取り出した。（唯はＭｙ楽器を持っている）
そして『Ｈａｐｐｙ　ｂｉｒｔｈｄａｙ』の曲を、アドリブを入れて吹き始めた。

「…ありがとう」
本当にこの言葉しか出ないのだ。

「じゃ、乾杯しよっか」
いつの間に用意されたのか、テーブルにはジュースやコーラなどのグラスが置かれていた。

「じゃあ、先斗の誕生日を祝って…」
「「カンパ～イ！」」
みんなグラスをぶつけ合う。

そして誕生日パーティーは終始和やかな雰囲気で過ぎていくのだった。

４４話　奇跡の１日（後書き）

タイトルはｍｉｈｉｍａｒｕＧＴの、『Ｂｉｒｔｈｄａｙ　Ｓｏｎｇ　ｆｅａｔ．常田真太郎（ｆｒｏｍ　スキマスイッチ）』の歌詞から取らせていただきました。

４５話　番外編１　風之舞

「えっ、吹奏楽？」
俺は思わず声をあげた。

２００４年４月。桜田第一中学校１－Ｃの教室。
４月も後半に入り、みんな学校にも慣れてきたところだ。
「吹奏楽ってあれか？入学式の時後ろで吹いてた」
「そうそれ。よく覚えてたな、西掛」
話題を振ってきたのは三上　庄吾。
小学校が同じだが、今までクラスが被ったのは小５の一度きり。
しかも俺はサッカー部だったけど庄吾は金管バンド部。接点はこれと言ってなかった。

「頼むよ！見学だけ、な！？」
現在放課後。今週は部活見学期間で、好きな部を自由に回れる。

桜田第一中学校は市内で二番目に大きな学校なので、部活数も多い。
運動部が野球、卓球、バスケ、サッカー、テニス、体操、剣道、柔道、空手、バトミントン、水泳、陸上の１２つ。
文化部が合唱、美術、パソコン、ＥＳＳ、科学、漫研、そして吹奏楽の７つと計１９もある。

「わかったよ。見学だけだからな」
サッカーは初日に行って、部内の雰囲気が最悪だったことを確認済みなので、却下。
ちょうど他の部を探していたから一応行ってみることにした。

「失礼します…」
四階の視聴覚室に入る。
「あ、いらっしゃい！今から合奏なの！聴いてって！」
やたらハイテンションの女子生徒が後方の椅子を勧める。
椅子には既に２０人くらいが座っていた。
（…って女子しかいないじゃん）
気まずく感じ、帰ろうと振り向くが、そこには庄吾となぜか唯の姿。
「な、なんで唯いるんだよ！？」
「あたしも初日から来てるメンバーだけど？ほら」
見せられた紙には、

＝＝＝

ーーー

「では。ラストは今年の課題曲から。吹奏楽のための「風之舞」です」

クラリネットがリズミカルな旋律を吹きはじめた。

大きなボウルみたいなのに蓋をしたような楽器（ティンパニというらしい）をきっかけに一気に楽器が増え、響きが自分のところまで飛んでくる。

中間部。とても大きな金管楽器（チューバというらしい）もメロディーを吹き始めた。

そしてクライマックス。

全ての楽器が同じ動きを吹いて曲が終わった。

拍手が沸く。

「ありがとうございました！明日からは楽器体験も始めるのでぜひ来てください！」

安斎部長の挨拶で部活動見学は終わった。

一週間後。今日は本入部の日。

俺は音楽室の前に立っていた。

その手に握られているのは…

＝＝＝

第一希望　トロンボーン

第二希望　パーカッション

第三希望　チューバ

――――――

４５話　番外編１　風之舞（後書き）

自分が入部を決意したのもこの曲を聴いたからでした。
番外編はこれからも書いていこうと思っています。

46話　ザ・レッスン

8月5日（日）。

コンクールまで一週間をきり、今日から一日練習だ。
朝の9時半から、夕方の5時までしっかりと練習する。
開始が普段より一時間遅いのは体調を崩さないようにするためらしい。
そして今日の午後は初めてのレッスン。講師の先生に学校に来てもらって指導してもらう。

「先斗〜。坂口先生って知ってる？」
昼休み。弁当を食べながら先斗に唯が聞いてくる。
「知らないけどクラリネットの先生みたいだよ。クラリネットの教本に名前があったから」
隣にいた弥生が答える。
「そうなんだ。じゃ、木管怒られちゃうかなぁ…」
「うん…」

「「こんにちは！」」

午後1時。京が音楽室に入ってきた。後ろに四十代ぐらいの女性がいる。
「こんにちは。今日は講師の先生に来てもらっています。坂口先生です」
「坂口　成実です。今日はよろしく」
「「よろしくお願いします！」」
「じゃあ、一回聴かせてもらいます」

「分かりました。チューニング終わっているか？」
「「はい！」」
「よし。じゃあ一回通します」
「「はい！」」
部員達は緊張しながらも楽器を構えた。

「じゃあ坂口先生お願いします」
「はい」
京が指揮台を降り、坂口先生が代わりに指揮台に上がる。
「起立！」
唯の号令でみんな立ち上がる。
「礼！」
「「お願いします！」」
「ありがとう。元気いいね～！」
坂口先生はにっこり笑って座るように促した。
「じゃあ、楽器置いて。打楽器の人も少し前のほうに来てちょうだい」
「え？」
いわれるままに楽器を下ろす。

「まずみんなに聞きたいんだけど、今回やる『感謝と喜び』。どんなイメージを持って吹いている？じゃあ、そこのクラリネットの眼鏡の子」
茜を指名する坂口先生。
「えっと…。『感謝と喜び』という曲名なのでそのまま…」
「じゃあ、誰にあなたは感謝するの？」
「えっと…家族？」
「そう。それも感謝ね。家族の支えがあるから部活動もできるんだしね」
「はい！」

「曲ってイメージが大切なの。作曲者は曲名の中にヒントを残してくれている。だからそれを読み取ること。じゃあ、楽器持って。最初から」
「「はい！」」

始めの遅い部分はあまり触れられずに通り過ぎたが、テンポが上がった瞬間、指揮が止まった。
「クラリネット。ちょっとそこの刻み吹いてみて」
「「はい」」
「1，2、3、4！」

パッ！
「ストップ！」

「え？」
最初の音を出した瞬間にストップをかけられる。
クラリネットの三人は戸惑っているようだ。

「息の吸い方をそろえてちょうだい。この小節からテンポが一気に上がるからそんなゆっくり吸っていたらスピード感がなくなるから」
「「はい！」」
「じゃあもう一回。1、2、3、4！」
今度はさっきよりもスピード感がある音になっているように感じる。ここの指示も〈元気に〉だから、こっちのほうが聞こえもいいだろう。

そして問題の静かな部分に来た。

「まず伴奏の人。サックス、ホルン、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバ、ウインドチャイムの人」

「「はい」」
吹き始める。
「うーん…トロンボーンはどっちを吹いている？」
坂口先生が加奈子に聞く。
「１ｓｔです」
実はこの曲、トロンボーンは２パートある。
でもトロンボーンは加奈子一人。だからメロディーラインの多い１ｓｔの譜面を吹いている。
「バランスが悪いからそこだけ２ｎｄの譜面を吹いてもらえるかな。３３小節から３９小節まで。楽譜はある？」
「あります」
「じゃあよろしく」
「はい」

「次はメロディーラインね。フルートとクラリネット。途中からトランペット入って」
「「はい！」」
「３，４、１！」
このメロディーは伴奏に１拍遅れて始まり、クラリネットの１オクターブ上でフルートが同じメロディーを吹く。
「じゃあ音名で歌ってみて」
「はい」
「３，４，１！」
「ドーミーミドレミファー」

四人の歌声が音楽室に響く。
「小さい。もっとしっかり！」
「はい！」
「もう一回！3、4、1！」
「「ドーミーミドレミファー！」」
さっきより大きい歌声。そこにトランペットの二人が加わる。
「はいOK！口で歌うときでもしっかり息を使わないと楽器に生かせないから歌うときはしっかりね」
「はい！」
「じゃあ、半分のテンポで」
「はい！」
こんなふうに細切れにして合奏が進んでいく。
第二音楽室にはクーラーがないため、みんな汗びっしょりだ。
汗かきの庄吾はタオルを片手に演奏している。
先斗もポケットに入れたハンカチを取り出し、汗を拭い、ついでにクロスでチューバについた汗を拭き取った。
「先生。そろそろ…飛行機の時間もあるので」
いつの間にか窓の外が赤くなっていた。時計を見るともう5時半を回っている。
坂口先生は言葉巧みに合奏を進めるので時間が過ぎるのを忘れてしまった。
「最後に。木管はもっと楽器に息を入れるようにすること。金管は音の処理を気を付けて。打楽器は息を吸うこと」
「息…ですか？」

ひかりが首をかしげる。
「そのまま打つより、スピードが合うからタイミングを合わせるのに有効なの。練習しておいてね」
「はい」

「じゃあレッスンはここまで。本番頑張ってください！」
「「はい！」」
「起立！」
唯の気合いの入った声。
「気を付け、礼！」
「「ありがとうございました！」」

「涼し～い…」
防音の閉めきっていた窓を開けた瞬間、唯が声をあげた。
第二音楽室の窓は南側にあるが、その先には住宅街が広がっている。
そのため、なるべく窓は閉めきって練習する必要があるのだ。

唯の姿を見て音楽室の空気が一気に緩む。
「唯ちゃんちょっといい？」
「なに？美香ちゃん」
唯が美香に呼ばれて音楽室を出て行く。
「どうしたんだろ？」
「さぁ？」

一方、加奈子は立ち聞きをしていた。
トイレに行く途中で唯と美香の話し声が聞こえてきたのだ。
空き教室の並ぶ廊下。学習室３１にふたりはいた。
なにを話しているのだろうか？

「…コンクールの後はちょっと駄目だと思うな…」
「そっか…」
「でもね…実はまだオフレコなんだけど…」
美香の耳元でコソコソと話す唯。案の定なにも聞こえない。
「本当！？」
「ホントホント。だからその時はどうかな？」
珍しくテンションが上がっている美香。

（…めちゃくちゃ気になる！）
加奈子は思わず出て行きそうになったが、何とかとどまった。
立ち聞きがばれるのはなんか気まずい。
「うん！…じゃあ今は集中しなくちゃ」
「そうだね。じゃあ戻ろうか」
「うん」

唯達が戻ってきた！とっさに加奈子も隣の教室に隠れる。
（ふたりはなにを話していたんだろう…？）
加奈子は身を隠しつつ、それを考えるのだった。

47話　GO！

8月10日（金）。
明日はとうとうコンクールの日だ。

「忘れ物はない？」
「子供じゃないんだから。ちゃんとチェックしたっての」
小百合の心配声に答える先斗。
「でもうちの県って広いわよねぇ……。前日から行くなんて」
「午後だったら朝から行けたのにな……」
ふたりはため息をついた。

それはレッスンの翌日。京が告げた。
「え～っと、コンクールまで一週間を切りましたが……。コンクールの演奏順が決まりました」
「ほんとですか！？」
「何番ですか？」
「というより会場ってどこでしたっけ？」
弥生、唯、奈津美の木管騒がし娘（優樹命名）が騒ぐ。
「説明するから！落ち着け！」
三人のテンションの高さに焦る京。

「プリント二枚行ったか？」
落ち着いたところで京はプリントを後ろに回した。
「はい」
一番後ろの列にいた加奈子が答える。
「じゃあNO．1のプリントを出してくれ」

「「はい」」

「一枚目はコンクールの演奏順だ。８月１０日の金曜日は中学校Ｃの部と中学校小編成部。８月１１日の土曜日が中学校Ｂ編成の部、高校小編成の部。そして８月１２日の日曜日が高校Ｂの部、高校Ａの部だ」

「あれ？中学Ａと大学・一般は？」

「それは先週終わってる。中学Ａは一番人数が多いからな。３１団体もある」

「高校小編成はどれくらいですか？」

「１６団体だ」

唯の問いに京が答える。

「意外と少ない？」

弥生が首をかしげる。

「中学と比べたらな。高校Ａの部は２２団体だから県の高校の半分くらいは小編成ってことになるぞ（※）」

「…意外と多い？」

「どっちだよ」

拓也が突っ込む。

「愛媛県ってどうだったんだ？」

庄吾が匠に聞く。

「大編成と同じくらいは小編成の団体はいたな」

「…そろそろいいか？」

京がため息をつきつつ聞いてきた。

「あ、すみません…」

部員達はプリントに目を戻した。

――

第４８回吹奏楽コンクール島根県大会

会場　芸術文化センター　大ホール　（杉浦市東杉浦町３５６）

高校小編成の部　８月１１日（土）

１０：００　１　島根県立杉浦西高等学校
１０：０９　２　島根県立桜田農林高等学校
１０：１８　３　島根県立梅ヶ崎高等学校
１０：２７　４　島根県立旭高等学校
１０：３６　５　小浦学園　彰晃（しょうこう）高等学校
１０：４５　６　島根県立桜田工業高等学校
１０：５４　７　島根県立桐ヶ丘工業高等学校
１１：０３　８　島根県立杉浦農林高等学校

～休憩～

１１：２５　９　島根県立湯釜（ゆがま）高等学校
１１：３４　１０　島根県立桜田中央高等学校
１１：４３　１１　島根県立香月商業高等学校
１１：５２　１２　島根県立高杉高等学校
１２：０１　１３　島根県立木崎高等学校
１２：１０　１４　私立葵ヶ崎（あおいがざき）高等学校
１２：１９　１５　島根県立杉浦工業高等学校
１２：２８　１６　島根県立稲穂田（いなほだ）高等学校

～休憩～

１２：５５　高校小編成の部　結果発表　表彰式

＝＝＝

そして部費も月に千円ずつ集めることになった。
「それに生徒会から部活動運営費も出ているしな。初年度だから多く出たし楽器のメンテナンスもできた」
「そうだったんですか…」
「親御さんに帰ったらお礼言っておけよ？部活動ができるのは親御さんが稼いできてくれるからだからな」
「「はい！」」

自分の知らないところでいろいろな人が活動を支えてくれている。だからそれに『感謝』して、一生懸命活動しなくてはならない。

「じゃあ次、ＮＯ．２のプリントを出してくれ。日程だ」

ーーー

２１：００頃　ホテル到着
２３：００　就寝

８月１１日（土）
６：００　起床
７；００　朝食（３階中広間）
８：３０　出発
９：３０　芸術文化センター到着、積み下ろし、打楽器搬入
１０：３４　集合時間
１１：３４　本番
楽器を片付け、鑑賞
１２：５５　結果発表、表彰式
１３：３５　打楽器搬出
１４：１５　芸術文化センター出発
１８：００頃　桜田中央高校到着、片付け、解散

・服装
制服、革靴
＝＝＝

駅前で唯と庄吾と落ち合う。
「おはよう！」
「おはようさん。っても、もう昼前だけどな」
「まあいいからいいから」
「じゃ、行くか」
「うん！」

いつもと同じように、でもいつもと違う気合を入れて、三人は駅舎に入っていった。

４７話　ＧＯ！（後書き）

※実際のコンクール参加団体とは異なります。当時の資料が見つかったら訂正します。

48話　出発前のドタバタ

「じゃあここまでにしよう」
１５時半。最後の合奏が終わった。
「部長。指示を頼むぞ」
京は指揮台を降り、音楽室を出て行った。
「はい！それじゃあ、バスは４時過ぎに来るのでそれまで楽器の準備をしたり、休憩したりしていてください」

「「はい！」」
部員達はそれぞれ準備を始めた。

打楽器。
「ひかり、ちょっとチェックリスト見てみて」
「分かった。あれ？どこやったっけ」
「あ、俺が持ってる」
ポケットからチェックリストを取り出す優樹。

――――――

ーーー

本番では少しでもコンディションがいいリードを使いたい。
木管楽器、特にリード楽器にとってリードは演奏に一番大事なこととともいえるくらい大切なものだ。
へたったリードを使うと音もしょぼくなってしまうし、下手したら音も出ない。
さらにリードは消耗品だからこまめに選ぶ必要がある。

「ハァ…。こんなに少ないのか…」
隣で慶太と拓也がため息をついている。
どうやらいいリードがあまりなかったらしい。

リードはクラリネットの場合、一箱１０枚入っていて、二千円～三千円はする。
１０枚ほとんどが使えるものだったらいいのだが、その箱の中には使えるリードと使えないリードがあるため、一枚一枚はとても貴重。
しかもサックスの場合、同じ値段で５枚しか入っていないからなおさらだ。

「ちょっと！リードは早めに選んでっていったじゃない！箱から出したリードは慣らさないと長く使えないよ？」
唯が男子ふたりを怒る。
「ごめんなさい…」

「あ！欠けちゃったぁ～」
奈津美が声をあげる。

リードは竹からできているので欠けやすい。
欠けるともう使い物にならない。

「うそ！？ナツ、どうすんのよ～！？」
「あ、大丈夫。これ、マウスピースに当てる用のやつだから」
「…」
「みんな大変だね…」
美香が楽器を磨きながら呟いた。

「重い…」
「頑張れ～」
重そうに楽器ケースを運ぶ先斗を尻目に庄吾は軽々とトランペットのケースを運ぶ。

チューバケースは楽器込みで約２０キロある。
先斗の楽器ケースには車輪がついているが、それでも半分持ち上げて運ばないといけないので結構運ぶのはきつい。
しかもトラックが来るのは新館の正面玄関。
旧館二階の楽器庫から階段を降り、渡り廊下を進み、食堂、職員室の前を通り過ぎ、昇降口まで行かなくてはいけない。
「疲れた…」
「お疲れさん。じゃ、打楽器の手伝い行くか」
「…分かった」
現在１５時５７分。もうすぐバスがやってくる。

なんとか積み込みも終わり、出発式を行う。
静香は明日会議があるため応援に行くことはできない。
代わりといってはなんだが、出発式に参加している。
「次に梶原先生にお言葉をいただきます」

「え？」
京のいきなりの振りに驚く静香。
でもすぐに冷静さを取り戻し、部員達の前に立ち、話し始めた。
「みなさん、高校初めてのコンクールで、緊張していると思います。でも『音を楽しむ』ということを忘れないで、精一杯演奏してきてください」
「「はい！」」

「じゃあ、バスに乗ってください」
唯の指示で部員達がバスに乗り始める。
「ちょっとクサかったかしら？」
ちょっと照れたように京に感想を聞く。
「いえ、素晴らしいお言葉でしたよ」
「ありがとう。…ごめんなさいね。行けなくて」
「会議ですから仕方ありませんよ。じゃあ、行ってきます」
京が乗ったところでバスが出発する。

「いってきま～す！」

部員達は窓を開けて手を振る。

「いってらっしゃい！」
手を振り返す静香。

静香は、バスが校門から出て、見えなくなるまで手を振り続けていた。

49話　車内

「ホントに〜！？」
「ホントだって！」
女子達は少しテンションが高くなっているようだ。

現在、杉浦市に向かう中型バスの中にいる。
席は自由で、席数にも余裕がある。
それぞれ、思い思いに過ごしているようだ。

ひかりは美香や弥生、奈津美と話しているし、庄吾、慶太、拓也、優樹はトランプに興じている。
和志、龍也、匠はおのおの音楽を聴き、加奈子と里穂は金管同士仲が良くなったようで、一緒に話していて、茜は読書をしていた。

そして唯は…。
「寝てる…」
通路を挟んだ席に座ってスウスウと寝息を立てている。
音楽を聴いていたのだろうか、イヤホンを付けたままだ。

「やれやれ…」
ちなみにそんな先斗は…宿題をしていた。

毎年コンクールや、夏休みの練習に夢中になって、結局最終日まで残ってしまうのだ。
そこで今年は、さっさと終わらせてしまおうともくろんでいる。

二時間後…。

「よし、数学一周できた」
数学の課題は問題集。夏休み明けには課題テストもある。
「よくバスの中でできるわね…」
先斗の後ろに座っていた茜が呆れたように言う。
「東もバスの中でよく本読めるよな」
同じように返す先斗。
「慣れよ。慣れ。あ、休憩みたいよ」
バスは道から外れてサービスエリアに入っていく。

「じゃあここで夕飯にします。それぞれ食券を買って食べてください。出発は１８時４５分。４５分後にします」
みんな続々とバスから降りていく。
「それにしてもお前よく寝てたな…」
唯にそういってからかう先斗。
「聴いてたら眠くなっちゃってね。あ～！やっぱり『海へ…』いいな～！

『海へ…吹奏楽のために』は、２００６年度の吹奏楽コンクール課題曲の４番となっている曲だ。
最初の四音はティンパニのみ。そこからトロンボーンと、ミュートトランペットがリズムを刻み、フルートとオーボエへとつなぐ。ユーフォニウム、アルトサックスのソロがあるが、一番おいしいのはホルンだ、
ホルンセクションは中間部のソリのうえに、ブリッジの部分ではホルンのハーモニーとスネア、コントラバスのみで音楽を引っ張っていくのだ。

「ま、チューバはずっと同じリズムなんだけどな」
「へへん。いいでしょ」

「いや、その同じ刻みを同じように丁寧に続けることが大事…」
「美香ちゃん大丈夫？」
ひかりの声にふたりが振り向くと美香が青い顔をして座り込んでいるのが見えた。
「…バスに酔ったみたい。ちょっとはしゃぎ過ぎちゃったかな」
平気そうにするが、顔色はかなり悪い。
「坂根。大丈夫か？」
京も心配そうにやってきた。
「はい…」
「夕飯食べられるか？」
「…少しなら」
「そうか。じゃあゆっくりでいいから行くか。俺が付き添うからみんな飯行ってこい」
京はそう言って、心配してバスから降りていない部員達に降りるよう促した。

あの後、何とかバスから降りてサービスエリアの中に入った美香。
中にはお土産屋と食堂、それと自販機がたくさん並んでいる。
「じゃあ無理するなよ」
唯たちのところまで京に連れて行ってもらう。
「坂根さん大丈夫？」
茜が気遣ってくれた。
「うん。もうだいぶ気分良くなった」
「そう。よかった」
「心配してくれてありがとう」
「ううん。じゃあ食券買いに行こうか」
「うん」
茜、加奈子、里穂と食券を買いに行く美香。
「私は天ぷらうどんとおにぎり！」

加奈子が真っ先に決める。
「じゃあ私はカレーうどん。アズは？」
「里穂もうどん？私は…。しょうが焼き定食にしようかな。坂根さんは食べれそう？」
「…少なめにしておく。ミニうどんにする」
美香はもともと小食だ。普段も一人前食べられるかぎりぎりぐらい。まあデザートを除いてだが…。

四人は食券を買い、列に並ぶ。
「東さん。私もアズって呼んでいい？」
加奈子が茜にそう聞いた。
「いいわよ。じゃあ私も下の名前で呼んでいいかな？」
「もちろん」

四人でテーブルにつく。
「「いただきます」」
サービスエリアだからあまり味には期待していなかったが結構おいしい。食欲がなかったのも忘れてみんな速いペースで食べ終わった。
「おいしかった～！じゃあ食器返してバス戻ろっか」
「うん」
食器を返す。

「坂根さん。行こう」
美香が呼ぶ。

「あ、あの」
「どうしたの？気分悪くなった？」
心配そうに聞いてくる茜。

「わ、私もあだ名で呼んでいいかな？」
美香は小学校中学校と、友達も少なかったし、あだ名で人を呼ぶこともなかった。
呼び方を変えると相手に変に思われるんじゃないかという気持ちから、はじめの呼び方から変えることができなくなってしまっていたのだ。
でも、もっとみんなと親しくなりたい。
部活に入ってそう思えるようになった。

「…いいよ。美香」
そう言って微笑む茜。
「二人とも早く～！」
唯が呼ぶ声。時計を見るともう集合時間五分前だ。
「すぐ行く～！じゃあ行こうか。美香」
「うん！アズ！」
美香はすっきりとした気分でバスへと向かった。

バスに乗って酔い止めを探す美香。
「あれ？ここに入れたと思ったんだけどな…。あ！」
間違えて大きな鞄の中に入れてしまった…。大きい鞄はバスの荷物入れの中だ。
「どうしよう…」
「どうした？」
「あ、庄吾くん」
庄吾が話しかけてきた。少しドキッとする。
「…実は酔い止め大きな荷物に入れちゃって…」
状況を説明する美香。
「じゃあこれ使ってよ」

そういって庄吾が差し出したのは自分の酔い止めだった。
「いいの？」
「ああ。俺ぜんぜん酔わないから。これ、眠くなるやつだけどいい？」
「あ、ありがとう」
「ゆっくり休めよ。じゃ」
そう言って庄吾は席に戻っていった。
水で酔い止めを飲む。
美香は少し幸せな気分で眠りに着いた。
食後のせいか起きていた部員もいつの間にか眠りについていて、バスの中は静寂に包まれる。

「やっぱ、子供だな」
「ま、仕方ないだろ」
起きていた京と純也。
純也も補助としてついてきていた。
「高校の頃思い出すな…」
「ああ。マーコンの前の晩なんかお前…」
「こら、その話持ちだすなよ！」
「アハハハハハ…」
ほんの数年前なのにもう遠い。
ふたりはそんな高校生の頃に思いをはせていた。

「起きろ～！着いたぞ」
京の声で目を覚ます先斗。
眠っていたのだろうか。いつの間にか旅館に着いていた。
「じゃあ、楽器と…荷物を降ろし…て、ロビーに並んでくださ…い」
唯もあくび交じりだ。

ロビーに並ぶ。
「いらっしゃいませ。ごゆっくり休んでください」
旅館の女将さんが挨拶をする。
「じゃあ、部屋割り発表します。時間がなかったので先生が勝手に決めました」
唯がそう言って部屋割りを発表した。

――――――

１０９
○中島　唯
・有吉　弥生
・吉岡　奈津美
・田中　ひかり

１１６
・西村　京
・杉原　純也

――

「部屋長は鍵を取りに来てくれ。風呂は露天風呂だ。温泉だぞ」
「やった！」
庄吾が喜ぶ。庄吾は風呂好きだ。祖父の影響らしい。

鍵を受け取る。

「じゃあ、諸注意だ。一般のお客さんもいるから騒がないこと。特に風呂。あと、就寝時間を過ぎたら部屋から出ないこと。その二つだ。じゃあ解散」
「「ありがとうございました」」

部員達は各々部屋へと向かった。

50話　イン・ザ・バス

「うわっ！　広いな～」
庄吾が声をあげる。
１０６号室は和室で、四人が十分くつろげる広さだった。

「失礼いたします。お布団をひかせていただきに参りました」
中居さんが入ってきた。
「あ。ありがとうございます」
「あの、すみません」

拓也が中居さんに声をかけた。
「なんですか？」
「こちらって一泊いくらですか？」
「はい？」
中居さんは呆然としている。
「拓也、いきなりなんだよ？」
庄吾が呆れたように言う。
「だって遠征代親に出してもらっているのにこんな高そうなところ泊まるってなんか申し訳なくてさ」
中居さんはクスクス笑いながら答えてくれた。

「うちは１５名様以上は一割引きとさせていただいています。それに料金は部屋単位でいただいていますからそこまでいきませんからご心配なく。では失礼します」
いつのまにか布団を敷き終わった中居さんは出ていった。
「さすがプロ…」
唖然とした四人にはそう言うしかできなかった。

その頃。大浴場では１０７号室の男子、四人が入浴に来ていた。
「でかっ…」
優樹がため息をもらす。
大浴場には、内風呂が二つと、露天風呂が外に一つあった。
かけ湯をして、ゆっくりと湯船につかる匠。
「あ～あったまる…」
実は匠も風呂好きだ。毎晩３０分は浸かっている。

「匠、おっさんくさいぞ」
横にタオルを頭にのっけた和志の姿。
「お前こそ」
「ま、温泉が気持ちいいからいいや」
「どんな理由だよ…まあいいか…」
風呂好きのふたりはゆったりとお湯を楽しんだ。

龍也と優樹は露天風呂に向かった。
岩にコケが生えていて、転倒注意という看板が立っている。

「「あ～…」」
湯船に浸かる。二人同時に声をあげて、お互いクスリと笑ってしまった。

「ん？」
他に笑い声が聞こえる。
「誰だろ？」
そう呟くと、湯煙の奥から誰かが出てきた。

「こんばんは」
「あ、こんばんは」

ふたりと同じぐらいの年の男の子。まあ、ここに女子がいたら大問題なのだが。
「高校生か。高校どこ？」
「ああ。桜田中央高校。君は？」
「湯釜。桜田市からか。遠征？」
「明日大会なんだ」
「…吹奏楽か」
「…君も？」
「じゃ、敵同士ってわけか」
「…そうなるな」
しばらく対峙しあう龍也と男の子。

「なんてね」
そういってにやりと笑う男の子。
「へ？」
優樹が変な声をあげる。

「俺は同じコンクールに出るからって敵対しあうのは好きじゃない。吹奏楽って吹いて奏でて楽しむものだろ？」
「もっともだ。俺も敵対は嫌いだ」
龍也も同じようににやりと笑う。

「俺、霧崎（きりざき）　翔吾（しょうご）。高1でホルン吹き」
「俺もホルン吹きだよ。あ、俺は田中　龍也。同じく高1。ショウゴって名前の奴、うちのバンドにもいるぜ」
「ほんとか？」

「漢字は違うけどな」
「俺は竹原　優樹。パーカス担当」
「ま、お互いベストを尽くそう」
「ああ」

温泉から見える景色を見ながらお互いのバンドについて話す。
湯釜高校は普段は大編成に出ているのだが、今年は部員数が減ったため、小編成の部に挑戦することにしたらしい。

「え？ここが翔吾んち？」
「ああ」
なんと、翔吾はこの旅館の息子だと言う。
「だから毎晩この風呂もゆっくり使えるってわけさ」
「いいな…」
優樹が呟く。

この旅館がある湯釜町は、中国山地のおかげか、温泉が多い。
県外に面しているので、県内外からけっこうお客が来るという。

三人は温泉から上がり、脱衣所に出た。
「あ、先斗」
庄吾と、先斗が脱衣所に入ってきたところだった。
「龍也。もう上がったのか。その横の人は？」
「この温泉の息子の翔吾」
「俺？」
庄吾が指を自分に向ける。
「いや、こっち…」
軽く混乱してきた。
「…こっちがトランペットの庄吾。で、こっちがホルンの翔吾」

「…なるほど」
十分後やっと落ち着いた。
「じゃ、メルアド交換しようぜ」
「ＯＫ」
５人は赤外線でメルアドを交換し合った。
「そういえば、匠と和志は？」
「もう四十分経つぜ？」
「のぼせてるんじゃ…」
慌てて風呂のドアを開ける龍也。
「あれ？あがったんじゃなかったのか？」
匠と和志はまだ湯船に浸かっていた。
「のぼせないのか？」
「え？もうそんなに時間経ったか？」
「…四十分経ってるぞ？」
「マジで？」
「…このふたり俺以上に長風呂だな…」
翔吾と庄吾が、同時にため息をついた。

51話　ザ・朝風呂

8月11日（土）、4時46分。

先斗は目を覚ましてしまった。

「…」

起床時間は6時。

二度寝しようにも、先斗は一度目が覚めると起ききってしまうタイプだ。

「…朝風呂しようかな」

せっかく温泉にいるのだ。入らないと損だろう。

大浴場は朝5時から開いているらしいからちょうどよい。

先斗はみんなを起こさないように着替えを探し、大浴場に向かった。

開くにはまだちょっと早いので風呂の前で待っていると、

「おはよう」

唯がやってきた。

「おはようさん。珍しいな。唯がこんな時間に起きてくるなんて」

唯は基本的に寝坊気味だ。

「なんか目が覚めちゃってさ。温泉入ろうかなと思って。弥生もすぐ来るって」

「同じだな」

「うん」

しばらく沈黙が続く。

「なあ」

「なに？」

先に口を開いたのは先斗だった。
「今日…頑張ろうな」
「…うん！」

「仲いいな」
声に驚いて振り向く。

「おはよう」
翔吾だった。
「翔吾も朝から早いな」
「ああ。毎朝温泉の開ける係が俺だから。男風呂はちょっと待ってて
てくれ。片付けしてないから」
どうやら男風呂は朝掃除するようだ。
「先斗。知り合い？」
唯が先斗に聞く。
「あ、俺、ここの息子の霧崎　翔吾。湯釜高でホルン吹いてます」
「あ、あたしは桜田中央でアルサク吹いてる中島　唯です。よろしく」

「唯、お待たせ～」
自己紹介が終わったところで弥生がやってきた。
「じゃ、お先に」
唯は掃除の済んでいる女風呂に入っていった。

「あ～…」
先斗は昨日入らなかった露天風呂に浸かっていた。
昨晩は暗くて見えなかったが、日の出の時間が近いためか、朝の
光に照らされた湯釜町の全景が見ることができる。
「どうだ？」

翔吾が入ってきた。
「最高だな」
「ああ。俺の毎朝の楽しみ」
ゆっくりとお湯に浸かるふたり。
「今日帰るのか？」
「ああ、本番が終わったら」
「そうか…」

なんだかしんみりした気分になる。
「なあ」
翔吾が口を開いた。
「ん？」
「あの…確か中島さんだったっけ？」
「唯がどうした？」

「お前ら付き合ってんの？」
「な！？」
翔吾の言葉におもわず立ち上がる先斗。

ツルっ！バッチャ～ン！

その瞬間、苔に滑ってお湯の中にひっくり返ってしまった。

「大丈夫か？」
「な、なんだよいきなり」
何とか座りなおす先斗。
「なんか、俺と彼女に似てるな～なんて」
「へ？翔吾、彼女いるの？」
「ああ。同じ部活で、優しくていい奴。ちょっと暴走気味だけどな」
「…」

（なんか唯に似てる気がする…。）
「ただの幼馴染だよ」
声の調子に気をつけつつ、そう答える。
「そうか。ま、大事にしてやれよ？」
先斗の顔色を観察しつつ、そう翔吾は言った。
「…ああ」
赤くなる顔を湯煙で隠しつつ、先斗は小さくうなずいた。

風呂から上がるふたり。
「あ、先斗」
一足先に上がったのだろうか？コーヒー牛乳を飲んでいる唯と弥生の姿があった。

「ん？長風呂でもしたか？」
唯の顔が少し赤い。

「…そうかな～？　あ、もう起床時間１５分前だよ。一応部屋帰ろうか」
「ああ…」
「あ、あたしトイレ行ってから帰るから先行ってて」
弥生が慌てたように言う。
「分かった」
唯と先斗は部屋に先に帰った。

「霧崎くん」
ふたりが十分遠くに言った後、弥生は翔吾を問い詰めた。
「なんだ？」
「知ってたでしょ」
「なにを？」
「露天風呂。境目の上が開いてるの知っててあんな話題ふったでし

ょ？」
「分かったか」
いたずらな笑みをこぼす翔吾。
「まあね。あの二人、本当は付き合ってんじゃないかなんて思うことしょっちゅうだもの」
「あ、やっぱり？」
「うん。私も影から応援してるし」
これは本当である。あの二人ならお似合いのカップルになると、たぶん部員の大半が思っているだろう。

「そうか」
翔吾はさっきと違う笑みを見せた。その顔にちょっとだけドキッとしてしまう弥生。
「なあ」
「な、なに？」
弥生のドキドキが高鳴ってくる。
それを見つつ翔吾は、
「一応言っとくけど彼女いるんで」
と、ニヤニヤ笑いながら言った。
「な！？なに言ってんのよ！じゃあ、私も戻るね！…あ。…あの」
「ん？なんだ？」
「忘れてたんだけど…私方向音痴なの…部屋まで連れてってくれない？」
「…了解しました。お客さん」
弥生は別の意味で顔を赤くしつつ、ため息をつく翔吾に部屋まで送ってもらった。

52話　音と気持ち

「じゃあ、出発します」
「「はい！」」
唯の指示でバスに乗る部員達。

昨日とは打って変わって静かなバスの中。
会場の杉浦市芸術文化センターまでは旅館から約一時間。
先斗も音楽を聞いてリラックスするよう努めるものの、少し緊張している。

「すみませ～ん！ちょっといいですか？」
イヤホンを外し、顔を上げると唯が立ち上がってマイクを持っていた。

「着く十五分前から口合奏したいんですけど、やってもいいですか？」
「いいよ」
「了解」
反対する声はなかった。
「じゃあ、そのときに行動の確認もするのでよろしくお願いします」
そういって唯は席に戻った。

９時１５分。
「やります」
「「はい！」」
京が立ち上がり、通路に立つ。
「1、2、3，4！」

レッスンの日から合奏に口合奏も取り入れた。
すると自然と息の量も増え、音がしっかりしてきたし、打楽器のタイミングも合うようになってきた。
坂口先生が言っていた、『息を吸う』という練習にもなったようだ。

「はい。ＯＫ！じゃ、部長続き頼む」
京はにっこりと笑って席に戻った。

「じゃあ、入ってからの行動をもう一度確認します。まず、会場に着いたら楽器を会場の横の駐車場で降ろします。停車時間が決まっているので、すばやく行動をお願いします。そこで打楽器の人はそのまま搬入口に行ってください。杉浦三中から借りたチャイムとティンパニー二台を降ろします。チャイムは重たいので、管楽器の男子二人に手伝ってもらいます。拓也くんと、庄吾くんは楽器をパートの人に預けてついていってください」
「「はい」」

「管楽器は二階の多目的ホールにおきます。スペースが限られているので、コンパクトにまとめてください。集合時間は１０時３４分なので最初の二団体だけ聞いて、楽器を出しに行きます」
「「はい」」

「打楽器はそこから別行動なので、渡した進行表を見て行動してください」
「はい」
「管楽器は集合したら音出し兼チューニング室に向かいます。時間配分は集いのときと一緒にします。チューニングが終わったら舞台裏に移動、本番となります。それじゃあ頑張っていきましょう！」

「「はい！」」
「皆さん。そろそろ着きますので、準備をお願いします」
バスの運転手さんが声をかける。
バスが着いた。
会館裏。
「いっせ～の、せ！」
男子四人でチャイムを持ち上げる。
「重たい…」
「我慢我慢」
なんとか楽屋口の階段を上がり、裏側からチャイムを運び入れる。
杉浦市芸術文化センターはかなり広い。
客席は1階に１０００席、2階に５００席あり、計１５００人もの観客が収容できる。
桜田市民ホールも１０００席あるが、それ以上の広さだ。
現在9時３５分。開場された会場にだんだんとお客さんが入ってきている。
「思ってたより人、多いなぁ…」
優樹が幕の陰からそっと外を覗いていると
「優樹。ひざ」
「へ？」
庄吾の声でひざが笑っている事に気づく優樹。
「やば…」
それに対して普段どおりの庄吾。
さすがに楽器歴が部員の中で一番長いから肝が据わっている。
「やっぱ経験長くないと楽になんないのかな…」

「あのな。人間って気の持ち方でかなりかわってくるんだ」
優樹が呟くと庄吾は珍しく真剣な顔で話しだした。
「暗い顔でティンパニを叩くのと、笑顔でティンパニ叩くの、どっちがいい音すると思う？」
「…笑顔かな」
「そう。だから普段みたいににっこり笑ってティンパニ叩けばいいんだよ。俺達、今までたくさん練習してきたんだから。ミスったら命とられるわけじゃないし」
「うん！」
「じゃ、音出し行くから。頑張っていこうぜ」
「オス！」
ふたりは拳をぶつけあう。そして優樹は舞台裏、庄吾は会館横へとそれぞれの集合場所に向かっていった。

１０時。コンクール二日目が始まった。
「それでは、コンクール二日目のプログラムを始めます。プログラム１番、杉浦西高等学校。自由曲、レハール作曲、『メリーウィドウセレクション』。指揮は、大竹（おおたけ）　栞（しおり）です」
舞台には２５人くらいの部員が並んでいる。
パーカッション以外の部員は最初の二団体だけ聞いてすぐに楽器の用意をすることになっている。

指揮者が礼をするが、朝一でホールに人が少ないから拍手も小さい。
ただでさえ広いホールだから、スカスカ感が大きい。
小編成の部にこのでかいホールはちょっと大きすぎる気がする。
しかし。
「すごい…」

最初の一音から力強い音がホールに響いた。
おもわず呟く先斗。

フルート、クラリネット、サックスのメロディーとしっかりとした低音。
それにホルンのグリッサンドも相まって、少人数であることを忘れさせるほどの迫力が生み出された。

テンポが落ち、打楽器アンサンブルが入る。
グロッケンのメロディーに、ビブラフォンとマリンバ、ピアノのハーモニー。
それが終わると、木管楽器が入ってきて、同じ旋律を吹く。
リタルダントの直後、金管の勇ましい音が会場の一番後ろまで飛ぶ。
ホルンだけが残った。

スネアドラムの音で、急激にテンポが上がる。
木管楽器の軽やかなメロディー。

二回目も同じメロディーだが、その後ろからトランペットのワウミュートのおどけた音とトロンボーンのグリッサンド。

半音階で音階を下り、だんだんアラルガンド（リタルダント＋クレッシェンド）が掛かっていく。
一瞬ティンパニーが残り、管楽器が2部音符を力強く伸ばした。

最後のフレーズ。
クラリネットはもう指の動きが見えないほどの動きを吹いているし、スネアドラムもロールとストロークが複雑に混じったリズムを叩く。

金管楽器とサックスはメロディーを吹くが、最初のクラリネットのメロディーと同じ旋律とは思えないくらい雰囲気が変わっている。
その音にはどこか威厳すら見えるくらいだ。

最後の一音。

バン！

音が鳴りきった。
一気に部員達が立ち上がる。
その音に惜しみない拍手が送られた。

「すげぇ…」
「なんか私たち場違いみたい…」
弥生と、拓也が不安げな顔で呟く。

「ふたりとも！しっかりしようよ」
先斗は唯の発言かと思った。
でも。

「美香ちゃん…」
なんとその発言は美香のものだったのだ。
「私たちには私たちの音があるんだもん。今日はそれを出しに来たんだから、思いっきり吹けばいいんだよ」
「坂根…。そうだよな」
拓也がうなずいた。
「うん。頑張ろう」

次の団体を聞き、部員達は会場を出て、楽器を出しに向かった。

53話　声と気持ち

集合して、音出し室に向かう。
「うわっ…広」
この間の会場よりさらに広いうえに天井も高い。
でも臆せずに音だしをする部員達。
「よし！じゃあチューニングするぞ！クラから」
２０分後、部屋に入ってきた京は、タキシードを着ていた。
長身だから結構似合っている。
まずクラリネット。初心者揃いのクラリネットだが、音色（おんしょく）が徐々によくなってきている。
「よし！サックス！」
サックスセクションも毎日のセク練でのロングトーンのおかげでピッチは安定している。
「ラッパとホルン！」
高音金管が輝かしく鳴る。
「よし！中低音」
バァー！
「ちょっと頑張りすぎだ。力抜いて」
「「はい！」」
「だから力抜けって！」

大きな返事に京は笑いながら注意した。

パァー！

「よし！じゃあ最後フルート」

柔らかいながらも芯が出てきた美香の音。

「ちょっと高い」

「はい！」

（あ…）

唯は、か細かった美香の声が大きくなっていることに改めて気づいた。

（変わったな…。美香ちゃん。）

それは美香自身も感じていた。

最近自然に大きな声が出せるようになった。

先週、中学のときの友達に会って気づいたことだ。

「美香〜！久しぶり！」

「杏奈！久しぶり！」

「吹奏楽やってるんだって？」

「うん！」

「あれ？」

「どうしたの？」

ちょっと首をかしげる杏奈。

「ううん。なんか中学校のときより美香ちゃんがはきはきして見えるの」

「え？」
「あ、声も大きくなってる」
「ホント？」
「うん。あたしと初めて会った時なんか、か細すぎて何も聞こえなかったもん」

（私、少しは変われたのかな…）
変わることを人は嫌がると、英語の教科書で読んだことがある。
でも嫌な気持ちではない。
むしろ、気持がいい。

美香は手に持つフルートを見て、少しにこりと笑った。

「全員で」
「「はい！」」

明るい響きが、音出し室に響く。

「よし。じゃあ感謝と喜びの頭」
「「はい！」」

最初の低音の伸ばし。
この間よりも暖かくブレンドされた音が響く。
トランペットとホルンのファンファーレはさらに太く。
そこに加奈子と匠の中低音がファンファーレに加わり、クラリネットがハーモニーを構成する。
伸ばしに入った。

パンパンパパパン、パパパパンパパン！

クラリネット三本の刻み。
それに負けないようにサックスのメロディーが入ってくる。
そこで京が指揮を止めた。

「よし！そこまで。じゃあ後はセクションで調整して」
「起立、気をつけ、礼！」
「「ありがとうございました」」

各パートごとに分かれて、最終確認をする。
唯はその様子を眺めていた。

クラリネットパートは三人で円陣を組んでいる。
「じゃ、やりますか！クラリネットパート、ファイト～！」
拓也くんが叫ぶ。
「「オ～！」」
三人の声が響く。

次にトランペットとトロンボーン。
「今井大丈夫か？」
「うん…」
里穂は小学校の時金管バンドで吹いていたものの、コンクールに出るのは初めてなので緊張しているようだ。
「里穂」
加奈子が里穂の前に立つ。
「なに？」
「笑顔」
そういって変顔をした。
「プッ、ハハハ…」
「アハハハハハッ…」

里穂だけではなく、庄吾まで笑いが止まらなくなったようで、笑いの二重奏(デュエット)が起こる。
「はあ、か、加奈子」
やっと笑いが止まった里穂が加奈子の方を向く。
「ありがと。頑張ろうね」
「うん！」

「…俺忘れてないか？」
女子二人で盛り上がってしまって、取り残された庄吾。

しかし、
「し、庄吾くん」
「坂根…」
美香が庄吾に近づいた。
（…もしかして高校デビュー？）

気になるが二人はそっとしておいて、ホルンの龍也とユーフォの匠を見る。
二人はただいつものように冷静に寡黙に過ごしている。
でも今日は集中力のオーラが見えるようで、ちょっと怖い。

「唯」
自分を呼ぶ声に振り返る唯。
「行動観察もいいけど、サックスセクションの連中が待ってるぞ。行ってやれよ」
先斗はひとり、楽器の水抜きをしていた。
「先斗か」
「なんだよ？」
「先斗は過ごす相手いないの？」
「…金管低音(チューバ)は孤独なんだよ。匠は集中力高めてるから邪魔しちゃ

悪いし」
「なにかっこつけてんの。じゃ、サックスの方においでよ。慶太くんは低音だし」
「じゃあ、お言葉に甘えて」
先斗と共にサックスセクションの方に向かう唯。

「遅いよ～」
奈津美がほほを膨らまして怒っている。
「ごめんごめん。ナツは緊張してないね」
「合唱で慣れてるからね。慶太くんは？」
「ん。大丈夫だ」
ふたりは思ってたより緊張に強いようだ。
「クラに習って円陣でもする？」
「いいよ」
「じゃ、唯頼んだ」
「ＯＫ」

「いい演奏するぞ～！」
「「オ～！」」
四人で円陣を組む。

わざと金賞という言葉は入れなかった。
（いい演奏をすれば、賞もついてくる）
そう信じてるからだ。

「桜田中央高校さん。時間なのでよろしくお願いします」
「「はい！」」
役員の誘導で部員達は音出し室を後にした。
「忘れ物ないようにね！」

「あ、楽譜忘れるとこだった」
唯の声に庄吾が慌てて席に戻る。

「…ま、庄吾らしいわ」
里穂が呟く。
「なんか言ったか？」
「別に。じゃ、行くよ」

本番まで、あと１５分。

54話　レイラ

その頃、パーカッションパートは舞台裏で他の団体の演奏を聞いていた。

「ではプログラムを再開します。プログラム9番。島根県立湯釜高等学校。自由曲、星出尚志作曲、『丘の上のレイラ』。指揮は馬庭浩二（まにわこうじ）です」

舞台には30人ぎりぎり。元が大編成だから、オーボエもバスクラも、コントラバスもいる。

丘の上のレイラの「レイラ」は女性の名だ。ただ、この曲の「レイラ」は特定の人物を表しているわけではなく、象徴的な存在らしい。

和志も吹奏楽歴がたった二ヶ月だけど、先斗にCDを借りて以来、この曲が大好きになった。

和志はレイラにある人を重ねている。

だから聞くたびになんだか幸せな気分になる。

始めはクラリネットのゆったりとしたメロディー。

バスクラとユーフォのソリの後にグロッケンのソロがはいる。

そこにオーボエのソロ。

B♭クラと、ユーフォのソロの掛け合いがはいり、導入部が終わった。

クラリネットアンサンブルで、レイラのテーマが始まる。
ホルンも加わり、クラリネットとの掛け合い。
翔吾もメロディーを優しい音で奏でている。

「ん？」
和志がふと横を見ると、ひかりがスティックを持って震えている。
「ひかり。大丈夫か？」
「…怖いよ」
「え？」
「怖いよ…。ソロ怖い…」
「ひかり。」
和志はそっと手を重ねた。
顔を上げるひかり。
「大丈夫！ひかりなら叩ける」
「…でも」
「あんなに練習してたじゃん」

音楽室にいつも一番最後まで残っていたのはひかりだった。

成功しても、まだ良くなるんじゃないか、ここが甘かったからもう一度と、自分に厳しく練習していたのもひかりだった。

そして、パーカッションパートを引っ張ってきてくれたのもひかりだ。

「信じてるよ。ひかりは１００％成功させられる！」
「俺もだ」
そういって優樹も手を重ねる。
「ひかりのスネアのおかげで、俺もテンポに乗ってリズムを刻めるんだ。…信頼してるんだぜ？」

「…ありがとう」
重ね合わせた手に、ひかりの涙が落ちた。
「泣くなよ。成功させてうれし泣きしようぜ？」
そういってティッシュを渡す優樹。

「なんか、臭いね」
そういって笑い泣きするひかり。
「自分でも思った」
「やっぱり！」
ひかりに笑顔が戻ってきた。

雄大に主題が帰ってくるのが聞こえる。
ホルンが高らかに、勇ましく旋律を奏で、チャイムが鳴る。
トロンボーン、そして木管。音楽が終わりに近づいているようだ。
力強いのになぜか優しい。観客はそんな不思議な感覚に襲われていた。
ティンパニーが高らかに鳴り響く。

いつの間にか曲は終わっていた。
歓声が会場に広がる。
ステージの照明が落ちた。

「桜田中央高校さん。お願いします」

役員の生徒が促す。
「行こう」
「ああ」
「頑張ろう」
手を離し、打楽器を運び入れるため、三人はステージに出て行っ

た。

その少し前。先斗たち管楽器メンバーも舞台裏にたどり着いていた。

「1、2、3…」

先斗の横では唯が数を数えている。

「「4、5、6…」」

先斗もそれに習って一緒に数えていた。

「「29、30！」」

同時に数え終わった。

「落ち着いたか？」

「うん。ありがとね。先斗」

「礼は、倉田先輩に言えよ」

倉田（くらた）　紗枝（さえ）。

先斗にこれを教えてくれた先輩。

現在、彩稜高校にいて、先斗の目標の人だ。

「じゃあ順番に二列で並んで～」

入り口はステージから向かって右。だから左手に入る人から並ぶ。

一列目に里穂、庄吾、加奈子、龍也、匠、奈津美、慶太、俺の順。

二列目は、美香、弥生、拓也、茜、唯。

ちょうど先斗と唯は一番後ろになった。

「頑張ろうな」

「うん！」

「じゃあ、桜田中央高校さん。お願いします」
「「はい！」」
部員達は、暗くなったステージに出て行った。

「龍也！」
龍也を呼ぶ小さな声。翔吾だった。
「お疲れ」
「頑張れよ」
翔吾は急いでステージを空けなくてはならないから、会話は短かった。
でもそれは龍也にとって心強いものとなった。
席に着き、譜面台の高さをあわせる。
すぐに京が入ってきた。

本番が始まる。

５５話　『感謝と喜び』

「プログラム１０番。県立桜田中央高等学校。自由曲、シェーファー作曲、感謝と喜び。指揮は西村　京です」

（高校生の頃には、ここに立つ日が来るなんて思っても見なかったな…）

京は舞台中央に歩きながらそう考えていた。

指揮台の横に立ち、顔を上げると、さっきよりも混んできた会場の様子が見える。

演奏を終えた学校、中学校の部の学校、保護者、そして審査員…。

さまざまな顔がこちらを向いている。

京はその人たち全員に向かって深々と礼をした。

指揮台に立ち、全員の顔を見る。

そして大きく一つうなずき、指揮棒を振り上げた。

先斗と慶太の低音、そして優樹のティンパニがしっかりと下を支える上で、庄吾、里穂、龍也の高音金管がファンファーレを奏でる。

ここの指示はｍａｅｓｔｏｓｏ。威厳を持って、荘厳にという意味だ。

加奈子と匠、奈津美の中低音楽器が下降形のリズムを刻み、ひかりのスネア、クラリネットやサックスなどの木管も入ってきた。

そして、三つの伸ばしを、威厳たっぷりに吹ききる。ハーモニーも今までで一番最高だ。

シャンシャンシャンシャン…。

ひかりが持ち替えたジングルと、クラリネットの刻みが会場に響

き渡る。
メロディーが入る前に落としていくように指示されたため、自然に小さくなるジングルの音。
そこに唯と奈津美のメロディー。集いのときよりも音は艶やかになっていて、唯はビブラートもかけている。

メロディーが終わったところに入ってくる低音。トロンボーンとユーフォ、クラリネット、トランペットと一小節ごとにメロディーが移り変わってゆく。
木管の上向形の音階とスネアドラム、サスペンションシンバルで、一旦音楽が盛り上がった。
トランペット、ホルンの高音金管と中低音の掛け合い。
金管がこの部分を中庭で分奏していたのが職員室からも聞こえたのを思い出す。
集いのときは正直ひやひやしていたが、今回はかなり安定している。

そして問題の弱奏部。
口合奏のおかげで息のスピードが合うようになり、音程も許容ライン。
途中から入ったトランペットも上出来だ。

タッ、タッタタ、タッタタタタタン！

印象的なリズム。
その横でトランペットとホルンのファンファーレが会場めがけて飛んでいく。

さっきと同じ掛け合いだが今度はそれにクラリネット、フルートの対旋律とスネアドラムのソロが入る。

そして前半部で一番盛り上がる場所もうまく通り過ぎ、和志とひかりの持ち替えも成功。
ホルンとフルートのソリに入った。タイミングもバッチリ。
ユーフォとクラリネットも伸ばしでソリを支える。
リタルダントして音楽が止まった。

クラリネットとアルトサックスのメロディー。
テンポが遅い部分は集いのときも安定していたがさらに安定して、表情豊かになっている。
トランペットの上昇音の後はフルートのソロ。
集いのときは弱かった音が、息のしっかり入った芯のある音になった。

テンポが上がり、ホルンとクラリネットのメロディー。
龍也はベルアップをし、反響板に音を反射させて会場に響かせた。
音がしっかりと飛んでゆく。
転調して、チャイムが入ってきた。
クレッシェンドをかけて強奏になるが、響きは潰れない。

(歌って!)
口パクで指示する京。
低音の4分音符が下降形の音を吹き、フェルマータに入った。
フルートと、クラリネットだけの静かな部分。

途中から管楽器が入ってクレッシェンドする。
テンポが元に戻り、鈴とクラリネットの刻みが戻ってきた。
サックスのメロディーもかなり歌えてきている。

二回目の弱奏部も無事に通過して、残るはひかりのソロのみだ。

ひかりは京のほうをしっかりと見ていた。
（……あたしはできる！）
確かにソロだ。
でも和志のサスペンションシンバルが盛り上げてくれる。
優樹のティンパニがリズムを刻んでくれる。

（私は…一人じゃない！）
ソロ二小節前。京がこっちを向く。

（行け！）
ひかりには二人の声が聞こえた気がした。
出だしの八分音符のタイミングも上出来。
アクセントもしっかり決め、ひかりは叩ききった。

そして、コーダに待っている、この間叩けなかった四小節。
悔しくて何回も何回もここを練習した。和志と優樹は何回もここに付き合ってくれた。ひかりはそこをかみ締めるように叩く。

木管のトリルの後に響く、先斗と慶太の低音のｆｐ（フォルテピアノ）。
もう曲が終わってしまう。
最後の和音が鳴り響く。

でも最後三小節が打楽器の決め所だ。
始めに和志のクラッシュシンバルが鳴り、ひかりのスネアと、優樹のティンパニの掛け合いが入る。京が指揮を振り切り、優樹がティンパニの響きを手で止めた。
拍手が鳴る。集いのときよりも大きい。
舞台が暗くなった。

「やったな」

和志がひかりに声をかけた。
ティンパニーを運ぶ優樹の顔も笑顔だ。
「じゃ、搬出するか」
「うん！」
ひかりはスティックを小物台に置き、スネアを持って搬出口へと進む。
こないだと同じ行動だが、こないだと違ってひかりの気分は最高だった。

56話　写真

狭い通路を抜けて、裏口から外に出た。

外では太陽がギラギラと輝いていて、夏の日差しは容赦なく部員達を突き刺してくる。

一気に汗が出てきたので、先斗はカッターシャツの袖で汗をぬぐった。

「終わった～！」

唯がはじけたような笑顔を見せながら、両手を振り上げた（サックスはストラップについているから落ちる心配はない）。

「おつかれ～」

「うん。疲れたな」

疲れたけど、だるさはない。充実感のある疲労感だ。

「じゃ、写真撮影行きますか」

「うん」

ホールの前の広場へ向かう。

広場には芝生が敷かれていて、集合写真用の段が組まれている。

「桜田中央高校さんですね」

３０代ぐらいのカメラマンが京に確かめる。

「じゃあ、写真取ります。まず、パート写真から。え～っと、一人のパートはどうしますか？」

「中島。振り分け頼む」

「はい」

唯の指示でグループを五つ作った。

【グループ1】

フルート&クラリネット。
弥生たちはフルートとクラリネットをそれぞれ前に突き出し、先を重ねてポーズを取った。
「いいアイディアね」
茜が美香に言う。美香の案のようだ。
「ありがとう」
「じゃ、撮りますよ～！ハイ、チーズ！」

【グループ2】
サックスセクションはポーズに迷っているようだった。
「ねえどうする？」
「え～。合唱のときは集合写真しかなかったし、分かんない。唯決めてよ」
「普通に構えりゃ良くないか？」
「う～ん」

「サックスさ～ん…まだですか？」
カメラマンがサックスセクションをせかす。
「もうちょっと待ってくださ～い！」
「じゃ、先にトランペットとホルンさんお願いします」

【グループ3】
トランペットとホルン。
「これはどうだ？」
龍也がアイディアを思いついたようだ。
「いいかも。で、誰が？」
「じゃ、庄吾でよくない？」
「えっ、俺？」
「ほらほら、時間ないんだから」
「…分かった」

「トランペットとホルンさ～ん。いいですか？」
「ＯＫです」
庄吾がホルンを持ってしゃがむ。
そして里穂と龍也はトランペットを庄吾の頭に鬼の角のようにのせた。
「真ん中の鬼く～ん、ちょっと顔が固いぞ」
「…はい」
…庄吾はやけになったように笑っていた。

【グループ４】
トロンボーン＆ユーフォ＆チューバ。
三人は、ただ普通に立っていた。
「中低音さ～ん…なんかポーズとってください…」
カメラマンも困っている。
「どうする？」
「じゃ、これで…」
結局ピースで済ませた。

【グループ５】
パーカッションは、それぞれの楽器のスティックをもっていた。
ひかりはスネアドラム、優樹はティンパニ、和志はチャイムのハンマーだ。
それを中央に向けて重ね合わせる。
「じゃ、撮りまーす」

カシャッ！
シャッター音が響いた。

その後、サックスも慶太の案でなんとか撮り終えた。

「じゃあ、最後に全員で撮ります。上の段にクラ、フルート、ペット、ボーン、ホルン。下の段にサックス、ユーフォ、チューバ、パーカスで。先生達は真ん中にお願いします！」

人数も少ないのですぐに並び終える。

「写真は三枚撮ります。始めは、真面目に」

カシャッ！

「あ～。目、閉じちゃった」

「ぎりぎりまで目閉じとくと閉じずにすむよ」

「ほんと？やってみよう」

先斗が振り向くと上の段でクラリネットの女子ふたりが話している。

「じゃあ、次、ピースで」

目を閉じる。

「ハイ、チーズ！」

カシャッ。

思ったよりもシャッターがおりるのが早く、先斗は目が閉じたままになってしまった…。

「じゃあ、最後好きなポーズで」

「なんにする？」

「う～ん」

いろいろと案が出てくるがなかなかまとまらない。

「あの～時間も押してますんで…」

カメラマンも困り果てている。急がないと次の学校も来てしまう

からだ。
「じゃあ～…、自由で！」
唯がそう叫んだ。
「「はい！」」

先斗は楽器を目いっぱい振り上げた。
端っこなので他の人に当たることもない。

カシャッ！

シャッターが下りる。今度は目も開けられた。
「「ありがとうございました～！」」
段から降りる部員たち。
「お疲れ様でした～…」
たぶん一番疲れたのはカメラマンだろう…。

後日届いた写真には十八人の笑顔が綺麗に写っていた。

57話　無音の色

１２時５０分。
部員達はふたたびホールの中に入っていた。
５分後に結果発表が開始されるからだ。

「あ～。緊張する！」
優樹が突然大声をあげる。
「優樹、ちょっと声のトーン落としなよ」
「あ、ごめん…」
先斗は会場を見回した。
リラックスしておしゃべりしている生徒、黙り込んで前を見つめている生徒、寝ている生徒…。みんなそれぞれ自由に過ごしている。

「みんな緊張してるな…」
桜田中央の生徒はおおかた緊張して固まっていた。
「初めてだからな。仕方ないさ」
「龍也、貧乏ゆすりしてるぞ」
そういう龍也もいつもより落ち着きがない。
「あ、悪い…」
「でも４回目でもきついよな…」
「ああ…。庄吾は？」
「６回目だけど同じく」
先斗と龍也は中学一年から、庄吾にいたっては小学五年生からコンクールに出ているが、やっぱり落ち着かない。
たぶん何十回経験してもこればっかりは慣れないだろう。

「でも、中島はもっと緊張してるだろうな…」
唯は部長なので、ステージ裏に待機している。

ブー！

ホールのブザーが鳴った。

「始まるぞ！」

審査員、大会役員、そして十六校の部長がステージに上がる。

唯はひな壇の下の段、左から二番目に並んでいる。

「これから、第４８回、全日本吹奏楽コンクール島根県大会、高校小編成の部の成績発表と表彰、および第４８回全日本吹奏楽コンクール中国大会への推薦団体の発表をはじめます。表彰は大会実行委員長、池田（いけだ）　元康（もとやす）が行います」

男性がステージ右端に立つ。

「それでは成績発表、および表彰に移ります。賞は、金賞、銀賞、銅賞がありますが、金賞と銀賞が聞き取りにくいため、金賞の場合は、『ゴールド、金賞』と呼ばせていただきます」

賞は金、銀、銅の三つ。賞の比率は３：４：３が標準だ。

今年は１６校出場しているから大体、各賞５～６校の割合となる。

「ではプログラム順に発表します。プログラム１番、島根県立杉浦西高等学校。…ゴールド金賞！」

「「キャ～！」」

いきなり金賞が出た！杉浦西高校の生徒達は大はしゃぎだ。

「うそだろ？朝一で金賞…」

「でも、あの演奏なら納得だよ…」

後ろの学校の生徒が呟いているのを先斗は聞いた。

確かに朝一番の演奏は、なかなか金賞が取りづらいと言われている。
審査員がその日初めて聴く演奏になるため、評価がしづらいからだ。
でも朝一の演奏で支部大会に出た学校もあるし、県大会で最優秀賞を取る学校もある。

「プログラム5番。小浦学園　彰晃（しょうこう）高等学校。ゴールド金賞！」
今日二つ目の金賞。今年もなかなか厳しいようだ。

「プログラム6番。島根県立桜田工業高等学校。　銀賞」
「プログラム7番。島根県立桐ヶ丘工業高等学校。　銅賞」
「プログラム8番。島根県立杉浦農林高等学校。　銀賞」
金賞はなかなか出ない。

「プログラム9番。島根県立湯釜高等学校」
翔吾たちの学校だ。
「ゴールド金賞！」
「おっしゃあああああ！」
部長さんがステージで叫び声をあげる。
しかしその声も先斗達には遠くでのことにしか聞こえなかった。
次が、桜田中央高校だ。

「プログラム10番。島根県立桜田中央高等学校」

この間が妙に怖い。

「……銀賞」
会場のざわめきがさらに遠くなっていく。
銀賞。

中国大会の推薦枠は二校。
金賞が既に三校出ているからもう名前が呼ばれることはない。
先斗にはなにも聞こえなくなった。

「西掛君…」
先斗を呼ぶ声。
「…東？」
茜が心配そうに先斗の顔を覗き込んでいた。
「とりあえず外に出よう？中学の部が始まるから…」
「…うん」
会場にはもう高校生の影はなかった。ふたりが最後のようで保護者と、中学生が入ってきている。
ホールを出る。
「あ…。これ」
茜が不意に先斗にティッシュを渡した。
「え？」

頬に何かが流れていた。
それを拭くけれど、拭いても、拭いても、出てくるものはなかなか止まってくれなかった。

会場の外に出た。
「…代表どこだ？」
「杉浦西と湯釜」
茜はただ淡々と答える。それが先斗にはありがたかった。
「そうか…」
それからふたりは何も言わずに集合場所であるバスに向かった。

バスに乗り込む。
バスの中はうそのように静かだった。

「先…」
唯が声をかけようとするが、先斗の顔を見て口を閉じた。
そんなに悲惨な顔をしているのだろうか…。鏡なんてものは持ち合わせていないから先斗にはよく分からない。

点呼して、そのままバスは出発した。
(夏が、終わったな…)
そしてそのまま先斗は眠りについた…。

58話　海辺にて

１１日は楽器を片付けてそのまま解散。
次の部活はお盆明けの１６日だ。
先斗は家に着くと着替えもせずにすぐに眠りについた。

「……先兄。朝だけど、飯食べる？」
海斗に起こされて先斗が目を覚ますと既に朝の１０時半だった。
実に１６時間も寝ていたことになる。
人間が寝続けていられるのは通常１５時間が限界らしいが、それをさらに1時間越えている。
「……ん」
軽く頭を振って、先斗は体を起こした。

リビングに降りて行くと小百合が洗い物をしていた。
「……おはよ」
「ああ。やっと起きたの。疲れているだろうからほっておいたんだけどさすがにそろそろ起きてもらわないと、と思ったから海斗に起こしてもらったのよ。今日はお布団も干したいからね」
「干しといてくれたらよかったのに……。昨日、一昨日は俺いなかっただろ？」
いつものようにマシンガントークで話す小百合。
「昨日までは曇ってたからね。今日はいい天気だもの。あ、先斗。昨日お風呂入らずに寝たでしょ？　汗臭いからご飯の前にシャワー浴びてきなさい。制服も洗っちゃうからそのままかごに入れといてくれたらいいからね」
「……はいはい」
先斗はそのまま風呂場に向かった。

「はぁ……」
風呂場で服を脱ぐ。
「あ……」
肩についていた出場者リボン。
それを見ると昨日のことを思い出してしまう。
また何かこみあげてきそうだったので、先斗は慌てて風呂場に入り、熱いシャワーを浴びた。

「ちょっと出てくる」
シャワーから出て朝兼昼飯を食べ、することもないので先斗は出かけることにした。
「いってらっしゃい」
リビングから小百合の声。
いつもはいろいろ聞いてくるのに今日はただ送り出してくれた。
それが先斗にはありがたかった。

「さて、と。どこ行こうかな……」
誰か誘おうかとも思ったが、気分は乗らない。
「ん？」
携帯が鳴る。
先斗の着信音は、『科戸の鵲巣』だ。

『吹奏楽のための祝典序曲「科戸の鵲巣」』は、中橋　愛生さんの作曲した曲で、防衛庁設立五十周年記念として陸上自衛隊中央音楽隊の委託で作曲、２００４年１２月１６日に練馬文化センターで行わた陸上自衛隊中央音楽隊第６１回定例演奏会において、陸上自衛隊中央音楽隊によって初演された。
編成がとにかく大きく、最低５５人必要な上に、技巧的にもかなり難しい。

中間部では様々なソロが絡み合い、特にオーボエにかなりの負担が掛かる。
でも、中間部の終わったあたりの旋律がとても素敵で、先斗はそこを着信音にしている。

「もしもし？」
「あ、先斗？」
庄吾の声が聞こえる。
「どうした？」
「あのさ～」
次の言葉に、先斗は耳を疑った。
「海行かない？」

ガタンゴトン……。

私鉄桜田線東方面の列車の中。
先斗、和志、庄吾、優樹は電車の四人がけシートにかけていた。
桜田線は普段、多人数用のシートで運行しているが、昼間などは観光客用にと四人がけのシートを設置する列車も走っているのだ。
「どうしたんだよ、海行きたいなんて。どうせ海水浴客でいっぱいだぜ？」
先斗は不満そうだ。まあ行くところがないから別によかったのだが。
「夏といえば海だろ？ちょうど今日休みだし、いっかな～なんて」
「でもな……」
「ま、いいじゃん。ちょうど予定空いてたんだろ？」

和志が諭す。
「ま、男四人てのはあまりいただけないけどな……」
「仕方ないだろ？みんな予定入ってるみたいだったから……」
唯を誘ってみたら女子は女子で出かける予定があったようだ。

「え～。次は～海浜～。海浜です」
車掌があの独特の声で知らせる。
「じゃ、降りるぞ」
「え？終点行かないのか？」
「ああ。穴場があるんだ」
四人は途中下車して、ホームに出て行った。

「あ、涼しい……」
四人は海岸沿いのコンクリートに腰掛けて、それぞれコンビニで買った飲み物を飲んでいた。
ここは観光客が来ない場所のようで、海の家も何もない。

「落ち着いたか？」
「え？」
突然の庄吾の言葉に先斗は驚いた。
「電話に出た時の声、なんか沈みきってたからさ」
「……庄吾はどうなんだよ」
先斗は軽く目を伏せてボソッと呟いた。

「悔しいに決まってんじゃん？」
でもそう答えた庄吾の顔はすっきりとしていた。
「吹き切れたから後悔はないさ。銀賞取れたし。それに銀賞の一位だったんだぞ？」
「マジ？」

「ああ。８２点の７番！」
「でも銀は銀だろ？」
「先斗」
庄吾は真剣な顔で、先斗を見た。
「それ、銅賞の学校の人に言ったらどう思われると思うよ？」
「……悪い」
「それにさ」
そういって庄吾は砂浜に飛び降りた。そんなに高さはないため怪我はしない。
庄吾はそのまま木の枝を取って、大きく銀の字を書いた。
「崩して読んでみろよ！」
そう言って庄吾は笑う。
「金より、良い……！　そういうことか」
普段ならくだらないと思うのだろうが、心の中から何かの重荷がすっと消えたような感覚を先斗は感じた。
「そう！　結果はしょうがないからプラスに考えようぜ？」
「分かった！」
先斗はそのまま同じように砂浜に飛び降りる。
「お、吹っ切れたか？」
「ああ。ありがとな。庄吾」
「どういたしまして！　じゃ、帰るか？」
「そうだな。電車来ちまう。優樹～！　和志～！　帰るぞ～！」
「はいは～い！」
午後６時。もう太陽は西のほうに向かって落ち始めている。
四人は駅に向かって歩き始めた。

59話　ｈｉｇｈ　ｈｉｇｈ　ｈｉｇｈ！

８月１６日（木）。

お盆が明けて練習が再開する。

今日はミーティングの日だ。

全員欠席することなく揃っている。

「みんな、コンクールお疲れ様」

京が話し始める。京の顔は明るかった。

「部長と副部長には言ったが、得点は８２点。順位が１６団体中７位。銀賞の一位だった。…ここまで行けるとは思ってなかったよ」

「へ？」

優樹が変な声を上げた。

「正直集いの演奏を聞いたときは銅賞を危惧したくらいだった。でもな」

京はそこで一旦言葉を切る。

「集いの後の二週間。あきらめずに部長副部長中心に練習メニューを組んで練習していた。合奏ごとに技術が向上していくのがはっきり分かった。それがとても嬉しかった！」

京は部員たちをぐるりと見回す。部員たちは真剣な顔で京を見ていた。

「確かに結果は銀賞だったけど、この銀賞は桜田中央高等学校吹奏楽部の初めの一歩にふさわしいものだ。これからも高みを目指して頑張って行って欲しい。いや、頑張って行こう！」

「「はい！！」」

部員たちの声を聞き、京は微笑んだ。そして続けた。

「で、その高みを目指すために…8月の２４日、２５日に学校で合宿を行いたいと思います！」
「「えええええ！！！」」
唯と美香と匠以外の全員が叫ぶ。

「…唯知ってたのか？」
先斗はみんなの反応を楽しんでいる様子の唯を問い詰める。
「部長ですから」
そういってにっこり笑う。
「坂根も？」
「唯ちゃんに聞いてた」
「匠は？」
「…そんな叫ぶことか？」
匠はあくまで冷静だった…。

「落ち着け～！」
京の声が飛ぶ。

「でもコンクール終わりましたよね？なにに向けてやるんですか？」
いち早く落ち着いた弥生が聞く。
「目的は４つある。まずは基礎力アップ」
西村先輩は指を一つ立てる。

「ある程度音は合うようになってきたが、音が薄かったり、指が回らなかったり、上がりきれなかったりと初心者、経験者関係なく基礎力が足りない。だから自分の弱点と向き合って改善の方法を探す必要がある。これが一つ目」
先斗も低音域が苦手だ。音が潰れてしまっている。
「二つ目は、９月の体育祭の曲の練習」

体育祭は9月21日にある。
今年はA、E組が赤組、B、D組が青組、C、F組が黄組だ。
「君が代と、得賞歌を演奏する。この曲はユニゾンがしっかり合わないとめちゃくちゃになるからな。しっかり練習してくれ」
「「はい！」」

「次、三つ目。9月1日のオープンスクールの曲の練習」
「オープンスクール？あ、学校見学か」
庄吾が納得したように言う。
「そう。学校見学後に部活見学があるから、ポップスを二曲ほど演奏して、楽器体験もしてもらおうかなと思っている」
「曲は？」
「とりあえず、『SAKURA』は決定。この後みんなでもう一曲選んでくれ」
「「はい」」
「で、最後。これが一番大変だ」
「…」
部員達は息をのむ。

「毎年10月の終わりに、桜田市では市内公立高校の吹奏楽部によるチャリティーコンサートを行っている」
「あ、俺知ってます」
龍也が手を上げる。
「このチャリティーコンサートの収益金は全てユニセフに寄付される。例年の参加校は、桜田東高校、桜田女子高校、桜田商業高校、桜田農林高校、桜田工業高校だ。…でも今年はうちの高校も参加することにした」
「「えええええええ！！！」」

部員たちの叫び。
「単独ですか！？」
「え～！？」
「やばい…」
「落ち着け落ち着け！」
京の再三の静止でやっと静かになる音楽室。

「単独で出てもいいんだが、できる曲もちょっと限られてくるからな。今回は、桜田農林と桜田工業と合同で出演することになった。明日、ここで顔合わせな」
「よかった…」
優樹がほっと息をつく。
「一応曲は配っておくから、今日譜読みしておいてくれ」
「「はい！」」
「じゃあ配るぞ」
楽譜が配られる。

一曲目。
「あ」
先斗はすぐに何の曲か分かった。
『マーチ「ブルースカイ」』。今年度の課題曲で、県大会でも一番演奏割合が高かった曲だ。

「キャー！なにこれ！？」
弥生が悲鳴を上げる。
「ああ…あれか」
先斗はこの曲をＩＰｏｄに入れていたから大体どこか分かる。
トリオ（マーチの中間部）の後。トランペット、トロンボーン、テナーサックスが主旋律を吹いている上で、木管は延々と三連符を吹いているのだ。木管にとっては地獄だろう。

「ま、指回し練習するしかないか」
と思いきや、あっさりとしている弥生。
茜と拓也も苦笑いしている。
こんなところは唯に似ている。

「キャー！なにこれ！」
次はそんな唯の叫び。
「うれし～！」
今度は歓喜の叫びだ。
「ああ、なるほど」
二曲目の楽譜に目を落とす先斗。

『宝島』。
Ｔ－ＳＱＵＡＲＥの名曲の一つで、１１枚目のアルバム、『Ｓ・Ｐ・Ｏ・Ｒ・Ｔ・Ｓ』に収録されている。
これはその曲を真島　俊夫さんが編曲したもので、アルサクのソロ、パーカスのソリ、ペットとボーンのソリがある。
しかもアルサクのソロは二回とも長い。
唯が狂喜乱舞するのも無理はない。

「お～い。中島。他校にもアルサクはいるからな」
「あ、そっか」
いきなり落ち着く唯。
「…」
今度はサックスセクションが苦笑い。

「じゃ、最後。『カーペンターズ　フォーエバー』な」
この曲は、１９７０年代にアメリカで活躍した兄妹デュオ、カーペンターズの名曲の中から、『シング』、『愛のプレリュード』、『トップ・オブ・ザ・ワールド』、『遥かなる影』、『スーパース

ター』、『ふたりの誓い』の六曲をメドレーにしたものだ。
特に『トップ・オブ・ザ・ワールド』は２００３年に放映されたドラマで主題歌として使用されたため、先斗達にはなじみがあった。
「今日は個人練習な。明日は午前中に顔合わせ会とパート決めだから、パートが別れている人はどれを希望するか考えておくこと。じゃあ、解散」
京の声にみんな散っていった。

「「あ～」」
庄吾、里穂、加奈子の直管楽器のメンバーは顔を蒼くしている。
「どうした？」
先斗が近づく。
「これ」
そういって、『宝島』のトランペットの３ｒｄと１ｓｔの譜面を見せる里穂。

「なんじゃこりゃあ～！？」
その譜面を見て先斗も絶叫した。
なんと３ｒｄですら最高音は上のＡ♭（ラ♭）の音。１ｓｔにいたっては最後にあるｈｉｇｈＤ（基準のドより２オクターブ上のレ）が最高音だ。
３ｒｄは和音の根底を担当する場合が多いのだが、ここではペットとボーンのソリのため、ハイトーンが要求されるのだ。　加奈子のトロンボーンの楽譜も同様。しかもペットと同じ１６分音符満載のフレーズなのでスライドさばきがかなりきつそうだ。いくら音階のように上がっていくフレーズでもかなり厳しいことに違いはない。

「ま、やってやろうじゃないかぁ！」
いきなり庄吾が吠えた。

「俺、『宝島』、１ｓｔ吹きたい！」
「どういう心境の変化？」
加奈子が笑う。
「このソリ、ハンパなくかっこいいんだぜ？俺が吹かないで誰が吹くくらいの勢いでいかなきゃな！」
「…それもそうね。私もハイトーンから逃げずに吹かなきゃ」
里穂も気合いを入れる。
「私も頑張る！」
勝手に盛り下がって、勝手に盛り上がる。
先斗は半分感心して半分呆れつつ、意気揚々な直管楽器の３人を見ていた。

「で、先斗の譜面は？」
「俺は…って勝手に取るな！」
庄吾は先斗の持つＢａｓｓ　ｉｎ　Ｃ（チューバ等の低音楽器用）の譜面をとって見た。
「…」
ちなみにこの曲、チューバはオール伴奏だった。

「いいんだよ！…『カーペンターズ　フォーエバー』吹けるし！それに低音はな！下からバンド全体をずっしりと支えることを生きがいとしてるから今のままでいいんだよ！それに…」
先斗はそれから低音の魅力を延々と語り、３人はそれを３０分以上聞くことになったのだった。

60話　顔合わせ～木管

8月17日（金）。

今日は合同演奏の顔合わせの日だ。各パートそれぞれ顔合わせを行っている。

桜田農林も桜田工業も三年生はコンクールで引退なので、それぞれ桜田農林が10人、桜田工業が13人と、少数だ。

メンバーは次のとおりになっている。

桜田工業高等学校

Fl　安井（やすい）　真奈美（まなみ）（2）
　　湯沢（ゆざわ）　愛華（あいか）（1）

B♭Cl　芥屋（あくたや）　舞（まい）（2）
　　番田（ばんだ）　尚（なお）（1）

A，Sax　小泉（こいずみ）　修也（しゅうや）（1）

B，Sax　津田（つだ）　悠斗（ゆうと）（1）

Tp　相田（あいだ）　なずな（2）
　　小森（こもり）　徹（てつ）（1）

Hn　松崎（まつざき）　梢（こずえ）（2）

Tb　宮野（みやの）　葉月（はづき）（1）

Eup　遠藤　英子（2）
Tub　斉藤　朱里（2）
Per　高田　瑞希（2）

桜田農林高等学校

Fl　熱田　南（1）
Ob　尼崎　若葉（1）
Fg　岸　猛（1）
B♭Cl　近藤　沙里華（2）
BsCl　小早川　和彦（1）
T，Sax　吉岡　隆利（2）
Tp　坂本　春香（1）
Hn　奥　由美子（2）
Tb　神田　祐子（1）
Per　村松　ゆかり（2）
内田　海里（1）

フルートセクション。
メンバーは４人。唯一の二年生である、桜田工業の安井　真奈美がしきっている。
「じゃあ、ピッコロは愛華お願い。それで、１ｓｔは一人、２ｎｄは二人かな。南ちゃんと美香ちゃんどうしたい？」
桜田工業の一年生、愛華は中学時代も吹奏楽部に所属していたため経験が一番長い。中学二年の後半からはピッコロを担当していたそうだ。
桜田農林の南は初心者。今年のコンクールはまだ音が安定しないため、パーカッションに回っていた。そのため、この本番がフルートデビューだ。

「あたしは２ｎｄがいいです…」
南は自信なさげにそう答える。
「そうね…。じゃあ私が１ｓｔ吹くから、一年生ふたりは２ｎｄよろしく！」
「「はい！」」
美香ははっきりと答えた。

クラリネット&ダブルリードセクション。
メンバーはＢ♭クラ６人にバスクラ、オーボエ、ファゴットが１人ずつだ。
「じゃあ、１ｓｔはあたしと、拓也くん。２ｎｄが、尚くんと、弥生ちゃん。３ｒｄが、沙里華と茜ちゃんね」
クラは舞が仕切っている。
「「はい！」」
パート決めも早々に終わり、おしゃべりタイム。今日は交流会を兼ねているので、１１時半までは自由だ。

「中央は初年度なのに編成整っているよね～」
「そうですか？」
「うん」
「でも農林もうらやましいですよ。オーボエもファゴットもいるんですから」
「そう？うちは今年一年生６人入ったんだけど、４人経験者だったのよ。それで、若ちゃんとタケが中学からオーボエとファゴットやってたから相談してそのままその楽器やってもらってんの。でも小編成じゃダブルリードは楽譜がなかなかないから毎回他のパートから書き換えてるのね。ね、若ちゃん」
「はい。だから今回ちゃんとオーボエの譜面吹けて嬉しい！」
「よかったね～」
そういって若葉をなでる沙里華。
女子が三人揃って姦（かしま）しいと言うが、ここは五人いるから女姦女？

そして男子。
「でも中央は男子がこんなにいるとは…部員も多いし」
桜田農林の二年生、小早川　和彦。一昨日までは三年生にチューバがいたが、引退したのでちょっと不安なようだ。
「すごいっすよね男子８人って…」
同じく桜田農林の岸　猛。ファゴット吹きだ。
「そうそう。うちは女子が多い上に全員一年生だから特に弱くって…」
桜田工業の番田　尚。中学時はE♭クラ担当。高校に入ってB♭クラに戻ったらしい。
「まあ、１対１ですから…でも女子は口が達者で」
そして拓也。
男子も男子で愚痴り（？）大会だ。
「ちょっと！なに愚痴ってんのよ！」
しかしそれを女子に聞かれて、男子４人怒られるのだった。

サックスセクション。
メンバーはアルトサックス2人、テナーサックス2人。バリトンサックス2人だ。
「あ！お兄ちゃん！」
他校の生徒が部屋に入って来た途端叫ぶ奈津美。
「よ。奈津美」
「え？どういうこと？」
唯はわけが分からずぽかんとしている。

「そういうことだったんだ…。だからナツはサックス希望したのね」
「うん！」
なんと、隆利は奈津美の兄だったのだ。
「じゃ、パート分けしようか」
「「はい！」」
隆利が仕切り、パート分けが始まった。

十分後。
「あたしがやりたいです！」
「いや！俺が！」
「…落ち着けよ」
唯と桜田工業一年のアルサク吹き、修也がもめている。

『宝島』のソプラノは人数の関係で隆利がやるのと、『宝島』と、『カーペンターズ　フォーエバー』は慶太がエレキベースに回ることは決まったのだが、問題はその二曲のソロだった。
宝島に2箇所、カーペンターズに1箇所ソロがあるため、どうもうまく分けられないのだ。

「はいはい！じゃあ、『宝島』は一箇所ずつ、カーペンターズは合奏のときみんなに判断してもらおう！」
「は～い…」
「じゃ、この話はこれでおしまい！」

そして交流会に移る。
（険悪にならないといいけどな…）
隆利は心配したが、
「ねえ、リードなに使ってる？」
「バンドレンの3半だけど」
「へ～。私は3使ってる」
「薄くないか？」
「そうかな？」
意外と話が進んでいるようだったので、ほっとしていた。

６０話　顔合わせ～木管（後書き）

女姦女…。なんて読めばいいのでしょうか？書き終わって推敲しながら考えてしまいました（笑）

61話　顔合わせ　ペット&ホルン&ボーン

金管もそれぞれ顔合わせを行う。まずはトランペットセクション。トランペットセクションは、計5人だ。

「桜田工業二年で、部長の相田（あいだ）　なずなです。今回は一緒に演奏できてうれしく思っています。よろしくお願いします」

「同じく桜田工業の一年、小森（こもり）　徹（てつ）です。トランペットは高校に入ってから始めたんでまだなかなか音も当たりませんが、よろしくお願いします」

「桜田農林の一年の坂本（さかもと）　春香（はるか）です。トランペットは中学の二年の時、ホルンから移ったのでそれからやってます。よろしくお願いします」

「桜田中央の三上　庄吾です。一応副部長やらしてもらっています。トランペットは小学五年生から金管バンドで始めました。よろしくお願いします」

「同じく桜田中央の今井　里穂です。楽器は、小学校の時金管バンドでやっていて、高校でまた再開しました。よろしくお願いします」

五人はさっさと自己紹介を終え、パート決めに移った。

「え～っと。『ブルースカイ』は、1st2人、2nd1人、3rd2人がいいかなと思うんですがどうですか？」

「いいと思いま～す」

庄吾はリラックスした様子。実はなずなは桜田一中の先輩なのだ。

礼儀正しいだけではなく親しみもあり、トランペットパートでは姐御（あねご）と呼ばれていた。

「了解。それにしてもあんたが副部長とはね。引っ張っていけてんの？」
「実際全部唯がやっちゃうんで…。俺はサポートだけですから」
「そう。ま、しっかりやってんならいいや！じゃ、とりあえず徹は３ｒｄね。１ｓｔはまだ当たらないし、一人で２ｎｄも不安でしょ」
「はい！」
「で、春香ちゃん。音程とるの得意？」
「まあまあ得意です」
「じゃあ、一人だけど２ｎｄ頼んでいいかな？」
「いいですよ」

「よし！じゃ、中央のふたり。１ｓｔと３ｒｄ。どっちか選んで。１ｓｔ２人でもいいし、１ｓｔと３ｒｄ一人ずつでもいいよ」
「庄吾。わたし１ｓｔ行ってもいいかな？」
「いいよ。じゃ、俺３ｒｄ」
「あら珍しい。庄吾が自分から３ｒｄ行くなんて。いつも未来と張り合ってたのに」

＊　未来とは、二十四話で出た、トランペットがめちゃくちゃうまい同級生のことです。

「いや、後二曲の唇が持つかななんて。『宝島』も、『カーペンターズ』も高いし」
「ちょっと～？口弱いわね…ま、いいか。じゃああたしも１ｓｔ吹くってことで。次『宝島』」
　これは４ｔｈまであるので、徹が４ｔｈ、春香が３ｒｄとなる。
「どうする？あたしも１ｓｔ連続はきついけど、庄吾に任せるのもなぁ…」
「吹きますよ！ＨｉｇｈＤは最後だけですし！」
「庄吾。ちなみにカーペンターズは？」

「１ｓｔ希望です！」
「あのオイシイとこ吹きたいの？」
「はい！」
軽く沈黙が続く。
「…しょうがない。両方吹いていいよ。１ｓｔ。里穂ちゃん。『宝島』１ｓｔ吹いてもらっていい？最後のｈｉｇｈＤは一応オプションだから当たらなかったらオクターブ下げていいし」
「あ、はい」
「じゃ、『宝島』は１ｓｔが庄吾と里穂ちゃん。２ｎｄがあたし、３ｒｄが春香ちゃん、４ｔｈが徹ね。で、『カーペンターズ』は、１ｓｔが庄吾と春香ちゃん。２ｎｄが徹とあたし。３ｒｄが里穂ちゃん。さすがに3曲１ｓｔは唇厳しそうだし」
「はい」
「で、あの最後の前のソロは、２人とも練習しておいて」
「「はい！」」
「じゃ、おしゃべりしますか」
話がすすむか不安である里穂だったが、みんなテンションが高く、気づけば話にのっていた。

お次はホルン。
「どうしようか…」
桜田工業の二年、松崎（まつざき）　梢（こずえ）がため息をつく。
「うん…」
桜田農林の二年、奥（おく）　由美子（ゆみこ）も譜面を見て考え込む。
「…全員３ｒｄ希望とは…」
龍也もため息をついている。

ホルンは、大体の譜面が１ｓｔ、３ｒｄ、２ｎｄ、４ｔｈの順で音が高い。

そのため、１ｓｔと３ｒｄを吹く人を上吹き、２ｎｄ、４ｔｈは下吹きと言ったりする。

「じゃ、一人ひとつずつにしましょう。後の二つはそれから決めて」

由美子の提案でセクションが決まった。

『マーチ
「ブルースカイ」』
１ｓｔ　龍也　２ｎｄ　由美子　３ｒｄ　梢

『宝島』
１ｓｔ　梢　２ｎｄ　龍也　３ｒｄ　由美子

『カーペンターズ　フォーエバー』
１ｓｔ　由美子　２ｎｄ　梢　３ｒｄ　龍也

となった。ちなみに４ｔｈはｏｐｔｉｏｎ扱いだったのでカットした。

続いてトロンボーン。

パート分けはさっさと決まったのだが、『カーペンターズ』の長いソロはみんな敬遠していた。

「あたしはまだ４ヶ月なんで…」

「え？私も」

「ほんと？」

なんと桜田工業の一年、宮野（みやの）　葉月（はづき）もトロンボーンは初心者。

中学時代はチューバを吹いていたらしい。

「じゃあ、祐子ちゃんお願いします！」

桜田農林の一年、神田（かんだ）　祐子（ゆうこ）に請うふたり。
「…無理。こういうポップス系の曲私苦手なのよ～！」
「でも経験者祐子ちゃんしかいないよ！」
「経験者は経験者でも私はド下手な経験者だもん！」

そういって大騒ぎしていると、
「失礼します…。どうしたの？」
桜田農林の顧問、青山（あおやま）　真理子（まりこ）先生が入ってきた。

「『カーペンターズ　フォーエバー』のソロか…裕子。やりな」
「ええっ！？」
「だってあんただけでしょう。経験者。それにこれは三曲目だし、まだもう一曲増えるのよ。唇の耐久力考えるとあんたが一番成功率高い！」
「「え？」」
「あ、聞いてなかった？はい、これ」
「「えええええぇぇぇ！！」」
そう言って楽譜を渡す真理子と、三人の叫び。それは楽譜の届いていた一階にいるユーフォニウム&チューバセクションの教室にも届くほどだった…。

62話　顔合わせ　バスパート

ユーフォ&チューバセクション。
構成メンバーはユーフォニウム2人とチューバ2人だ。

「…なんで難しい曲がきたんだろ…」
先生の持ってきた模範演奏のCDを聴きつつ呟く先斗。
「仕方ないだろ。時間余るんだから」
匠が言葉少なに返す。

先ほど、先生が新しい楽譜を持ってきた。
なんと割り当て時間が30分もあったらしく、3曲では時間が余るらしい。
『マーチ「ブルースカイ」』が3分、『宝島』が5分、『カーペンターズ　フォーエバー』が7分くらいだから、確かに余る。しかしこれ以上ポップスを入れるのもバランスが悪い。
そこで、吹奏楽オリジナル曲を入れることになった。

『アイヴァンホー』は9分ほどだったから、ちょうどいい時間になる。

『アイヴァンホー』。
ベルト・アッペルモント作曲で、同名の騎士道小説を基にして作曲されたものだ。
三楽章に分かれていて、

1，騎士道のおきて
2，忠義か愛か
3，戦いとフィナーレ

と、楽章ごとの副題もかっこいいものとなっている。
グレードは4。
確かに難しいのだが、一番の問題は2楽章だった。

「じゃあ、遠藤先輩…」
匠が、桜田工業の2年、遠藤（えんどう）　英子（えいこ）に話しかけた。
「そうね…」
ふたりは身構えた。
「私がやるわ！」
「いいえ。俺が吹きたいです！」
普段静か、むしろ無口の匠が張り合っている。
実は二楽章、ユーフォニウムのソロから始まるのだ。
2人とも吹奏楽に関しては積極的なようで、どっちも吹きたいと言っている。

「あ～…。英ちゃんは一回言うと譲らないからなぁ…」
同じ桜田工業の2年のチューバ吹き、斉藤（さいとう）　朱里（あかり）も呆れている。
「はいはい！とりあえず2人とも練習すればいいじゃない。ほら、各パート2人なんだから仲良くしようよ。西掛くんは出身一中だよね？」
「はい。一昨年の連盟の講習会で会いましたよね。先輩は弓掛でしたっけ？」
「そうよ」

弓掛中学校。
大編成の部で毎年支部大会へ進む実力校だ。
中学Aの部では毎年4団体が支部大会へ進める。
例年、弓掛と青南が定席となっていて、他の学校は残りの2枠を争うことになる。

「弓掛もオーディションあったんですよね？」
「うん。部員が2，3年で６０人くらいいたからね」
弓掛中は桜田三中と同じくらい部員数が多かった。特に2年前、つまり朱里の代では全校５００人中、１００人が吹奏楽部だったと言う。
ちなみに桜田一中は部員数の面では三番目となる。ちょうど2，3年で５０人前後。先斗の代は過去数年で一番多くて５７人もいた。
「オーディション怖かったよね」
「はい。チューバは全員通ったからよかったですけど…」
コンクールにも人数制限がある。中学A、B、Cの部、高校A、Bの部が５０人。中学小編成の部、高校小編成の部が３０人だ。一人でも定員をオーバーすると、失格となってしまう。
そのため、先斗たちの代のオーディションは特に熾烈（しれつ）なものだった。
先斗はその時のことを思い出していた。

62話　顔合わせ　パスパート（後書き）

次話は先斗の回想になります。

63話　番外編2　記憶

あれは２００６年の６月のことだった…。

「オーディションですか！？」

「ああ」

顧問と話す先斗。その頃先斗は副部長を務めていた。

練習の終わった後の報告会。これには部長、副部長２人、金管リーダー、木管リーダーの５人のトップと、顧問が参加する。

「それで、今年は一年生の経験者にも参加してもらおうと思っている」

「え？」

部長の伊万里（いまり）　結花（ゆか）も驚いた声を上げた。例年は二、三年生でオーディションを行っているからだ。

桜田一中の周辺には小学校が３つある。

桜田第一小学校、泉田小学校、船橋小学校だ。

そのうち、桜田第一小学校には金管バンド、船橋小学校には吹奏楽部がある。

そのため、吹奏楽部に入ってくる部員の３分の１が経験者なのだ。

「確かに譜面は渡しましたけど…」

顧問の指示で、先週楽譜は渡している。曲目は『架空の伝説のための前奏曲』と、『小組曲』だ。

『架空の伝説のための前奏曲』。

２００６年度の課題曲の１番で、かなり難しい曲だ。

冒頭のアンサンブルはかなり難解、テンポが上がってすぐに１ｓ

tトランペットのソリ、クラリネットの延々と続く連符、ホルンソリと盛りだくさん。さらにユーフォニウムは木管なみの連符が要求される。
　中間部は打って変わって歌いのメロディー。クラリネットとアルトサックスの裏からユーフォニウムが朗々と対旋律を歌い上げる。
そして…。
…と、語りたくても語りきれない程の曲だ。

『小組曲』。ドビュッシーのピアノ組曲を吹奏楽に編曲したものだ。四楽章あり、桜田一中はそのうち

1．小舟にて
4．バレエ

を演奏する。
「吹けないやつを出しても仕方がないからな。吹けない3年を出すよりは吹ける1年を出すほうがいいだろう？」
「…」
「とにかく。明日のミーティングでそれは言うから。心に留めといてくれ」
「…はい」
　トップ達はあまり納得がいかなかったが、返事を返した。

　翌日、部員達にもそれは告げられた。
　該当者は3年生２５名、２年生３２名、１年生は３１人中１２名。今年度は部員数が８８人と過去最高だ。
「オーディションは６月１６日に木管とコントラバス、１７日に金管と打楽器を行う。課題は、基礎のＦｄｕｒの音階と、課題曲自由曲の指定部分。指定範囲は後でパート長にプリントを渡すからそれ

で見てくれ。今日はパート練習だからそれぞれ練習すること。ただし2、3年生は忙しいだろうが1年生の練習をしっかり見てやること。1年生はCの部の曲もあるからな」
顧問が指示する。
「じゃあ解散」

3－2の教室。チューバパートの練習教室となっている。
メンバーは、3年生が先斗と悠莉、2年が、バッシーこと大橋(おおはし)貴弘(たかひろ)、1年の小渕(こぶち)　真由(まゆ)の4名。まゆは初心者だから、該当者は2，3年生の3人となる。
「じゃあ、配布しまーす」
悠莉が指示を出す。
チューバは先斗が副部長をやっているため、悠莉がパートリーダーをやっている。
役職が被らないようにするためであるが、もちろん悠莉もパートリーダーを努めるほどの技量とリーダーシップは持ち合わせている。
「え～っと…うげぇ…」
「バッシー。変な声あげるなよ…」
「だって先斗先輩。ひどいですよこの範囲…」
そういって表を先斗に示す貴弘。
「どれどれ…」

Ｔｕｂａ　課　６７の３拍目～７４
１００～１０７
１４３～１５０（ｒｉｔなしで）

自　練習番号３、２２、２５からいずれかオーディション時に指定。

＝＝＝

交代でやったし、セクション練習も全員でやった。

そしてオーディションの日。

はじめがパーカッション、続いてホルン、トランペット、トロンボーン、ユーフォと続き、チューバは一番最後だ。午前中にオーディションは終え、午後に発表となる。

「じゃんけんポン！」

控え室となっている楽器庫。じゃんけんで3人の演奏順を決める。悠莉が1番、貴弘が2番、先斗が3番になった。

「全員ちゃんと通ろうね！」

「もちろん」

「頑張ります！」

「チューバ、1番の人入ってください」

結花が呼びに来た。結花はオーボエなので昨日既にオーディションが終わっている。

「じゃ、健闘を祈る」

「そちらこそ」

そう言って、悠莉は楽器庫のドアから音楽室に入っていった。

「2番」

「頑張れよ」

「はい！」

貴弘も音楽室に入っていって、先斗はひとり楽器庫に取り残された。音楽室は防音されているから、楽器庫はとても静かだ。

「1、2，3…」

楽器庫に先斗の声が響く。

「29，30」

数え終わる。余分な緊張はもうどこにもない。

「じゃ、3番」
先斗はひとつ息を吐いて、チューバと譜面を抱え、音楽室に入っていった。

音楽室に入ると部員全員が後ろを向いていた。音だけで審査するためだ。
前を向いているのは顧問と部長、チューバのメンバー。
「音出しお願いします」
そしてメトロノーム係の庄吾だけだ。
先斗はマウスピースで音を軽く鳴らし、楽器に付けて音を出した。

「…これで全員終了です。お疲れ様でした」
先斗はそっとチューバを降ろし、貴弘の脇に座った。
「ふぅ…」
「お疲れです」
「バッシーどうだった？」
「いつもくらいは吹けました」
「悠莉は？」
「完璧」
「じゃ、OK」
「先斗先輩は？」
「…」
不安そうな顔をする先斗。2人の表情が一気に曇る。
「…最高」
しかしすぐに表情を崩す先斗。
「心配させないでくださいよ…」
「もう…」
「悪い悪い」
「チューバ～」

気づくと庄吾がこっちにきていた。
「盛り上がってるのはいいが、昼食にみんな行ったぞ。飯食おうぜ」
「ああ」

男子11人（3年4人、2年2人、1年5人）で飯を食べる。
「やべぇよ…対旋律ちょっと崩れた…」
ホルンの3年、嵐山（あらしやま）　浩二（こうじ）。パートは1st。
「大丈夫だって。俺はスネアミスったからな…。第二希望のティンパニはうまく行ったけど」
パーカッションの黒川（くろかわ）　亮輔（りょうすけ）。希望はスネアドラム。
「俺もですよ…『小組曲』、トロンボーン少ないのにけっこう重要な動き多いんですから」
もう一人の2年生、バストロンボーンの金田（かねだ）　良樹（よしき）。パートは3rd。
「うちなんか11人だぞ？大変だったよな。秀吾（しゅうご）」
庄吾が話しかけたのは1年生のトランペット、小林（こばやし）　秀吾（しゅうご）。
「俺はまだ3rdですから…。そんなに音高くなかったですけど…浩之、よく指回るよね」
トランペットは4年目なのでかなりの実力があるのだが、あくまで謙虚だ。
「確かに…なんとか指回ったけど音程がめちゃくちゃになっちゃって…」
1年のクラリネット、中宮（なかみや）　浩之（ひろゆき）。秀吾と同じ船橋小で、クラリネットは4年目だ。本人はそう言っているが、指回しのうまさはB

♭クラリネット15人の中で5本の指に入るといわれている。
他に、アルトサックスに1人、パーカッションに1人、ファゴットに1人初心者の男子がいる。
男子達はいつもと違う重苦しい雰囲気の中で昼食を終えた。

午後。メンバーの発表だ。
フルートから順に発表されていく。
木管はなんと浩之が通った。木管の一年生で唯一だ。
パーカッション。亮輔はスネアではなく、ティンパニで合格。
金管。ホルンの浩二、トランペットの庄吾、秀吾、トロンボーンの良樹。全員合格だ。
トロンボーンまでで、合格者は45名。ユーフォも3人だから6人中1人だけ落ちる。
結果は…。

「西掛君？」
「…はい？」
先斗はふと我に帰る。朱里たちが心配そうな顔をしてこっちを見ていた。
「なんか思いつめた顔していたけど…」
「なんでもないです」
「顔色悪いよ？」
「…大丈夫です」
去年の苦い記憶…。思い出すだけで胸の奥がきゅっと苦しくなる。
先斗はつい思い出してしまったその記憶を、胸の奥にしまい、鍵をかけた。

６４話　顔合わせ　パーカッション

第二音楽室。

「いや～。本当に夢が叶うなんて！最っ高～！」
「瑞希。一年生たち引いてるから」
テンションアゲアゲの瑞希を押さえるゆかり。パーカッションパートは例の六人。
集いの後、それぞれメルアドを交換していたから、結構交流がある。

「とりあえずアイヴァンホーはまだ楽譜きてないらしいから後回しで。『ブルースカイ』から決めようか」
「「はい！」」
ゆかりの指示でパート分けを始めるパーカッションパート。

『ブルースカイ』は課題曲なので、５パートしかないのだがシンバルとタンバリンを分けて６パートにした。

「希望聞くから手を挙げてね。スネア」
「「はい！」」
瑞希とひかりが手を挙げる。
「被ったか～。まあ後でもう一度話し合いってことで。次ティンパニ」
「…」
「いないなら私がやっていい？」
「いいよ～」
瑞希の声。
「じゃあスネアは決定。クラッシュ」

「…」
誰もいない。
「バスドラ」
「はい」
和志が手を挙げた。
「よし、じゃあよろしくね。タンバリン」
「…」
「…鍵盤」
「「…はい」」
優樹と海里がおずおずと手を挙げた。
「じゃあそれぞれ話し合い。決まった人は仲介役ってことで」
「はい」
スネアの仲介役がゆかり、鍵盤の仲介役が和志となって相談が始まった。

「じゃあ、どうする？」
女子3人が円となり座る。
「あの…。私経験短いし先輩どうぞ…」
いきなりひかりが切り出す。
「え？経験少ないのは関係ないでしょ？」
「いえ、夏の大会で私スネアやりましたし…」
「でも…」
いつになく弱気のひかり。
ゆかりも困惑顔だ。

「遠慮しているの？」
「え？」
瑞希の突然の問いに驚くひかり。
「あのね、ひかりちゃん。遠慮でパート譲られてもあたしは全くうれしくない」

「でも先輩スネアやりたいんじゃ…」
「そうだよ。でもね、そんな風に弱気じゃ何やってもうまく行かないよ？」
「先輩…」
「ま、譲ってくれるならやるけど？」
「…です」
ひかりが呟く。
「ん？聞こえないよ～？」
「私！スネアやりたいです！」
「よし！じゃ、譲ったげる」
「え？でも…」
「私はタンバリンやるわ。今まで編成の関係で小物楽器は省きがちだったの。だからチャレンジしてみたい」
そういってタンバリンを手に取る瑞希。
「…ありがとうございます！」
「頑張ってね」
「はい！」
ふたりはそれぞれ練習を始める。
「ちょっと！今日はもう二曲決めないといけないんだけど？」
「あ、すみません…」
ゆかりは半分感心、半分呆れてため息をついたのだった。

「鍵盤決まった～？」
「はい！」
「優樹くん鍵盤？」
「はい」
「そっか。海里どうしたの？」
「シンバルにチャレンジしようかなって思って」
そういってシンバルを手に取る海里。

ジャン！

一発慣らした音は、綺麗に第二音楽室へ響いた。

「…そっか。頑張ろうね」

「はい！」

「じゃ、次『宝島』決めるよ～！」

「「はい！」」

その後もいろいろあったがなんとかパートを決め終わった。

「やっと終わったぁ…」

ゆかりが息を深くついて、椅子に座り込む。

「じゃ、おしゃべりしますか…」

ガラッ！

瑞希が言った途端、ドアが開く。

「あ。みんな帰ってきた」

時計を見るともう１１時４０分になっている。

「集合だね。並ぼうか」

「は～い」

右からフルート、クラ&ダブルリード、サックス、トランペット、ホルン、トロンボーン、ユーフォ&チューバ、パーカッションの順で並ぶ。

「え～っと。じゃあ練習計画を配ります」

桜田農林の顧問、北澤（きたがわ）　篤（あつし）先生がプリントを配る。

「プリントのとおり、本番が１０月２８日の日曜。それまでに合同練習が６回しかないので、各高校である程度仕上げておいてください」

「「はい！」」
「じゃあ、解散とするので、各自気をつけて帰ってください。じゃあ、桜田工業の部長さん、挨拶お願いします」
「はい」
なずなが立ち上がる。
「起立、気をつけ、礼」
「「ありがとうございました！」」
こうして、初回の合同練習は終了した。

「頑張らなきゃ…」
「ソロは俺が…」
帰り道。先斗と唯と庄吾は3人で帰っていた。先斗以外の2人は思い切り意気込んでいる。
「ま…」
「なに？」
先斗が何かを呟いたのに唯が気づいた。
「いや、まずは楽しまないとな…と思ってさ」
「…そうね。ソロ以前に合同演奏初めてだし、楽しまなきゃね」
「…そうだな。ま、気張らない程度に頑張ろうぜ。本番多いから気を抜けるときはちゃんとぬいとかなきゃ…」
「じゃ、息抜きにケーキ屋行こうか」
唯がいきなり提案する。
「え？お前昨日女子だけで行ったんじゃなかったか！？」
「それはそれ。これはこれ」
「…庄吾。付き合ってやろうぜ」
諦めたような声で先斗。
「…そうだな」
「じゃ、レッツゴ～！」
先陣を切って歩き出す唯。
「…暑」

テンションが上がりきった唯を見ていると、気のせいか先斗は気温が３度高くなったような気がしたのだった…。

65話　手入れ　前

8月18日（金）。
コンクールも終わったので部員たちは楽器の手入れをしている。
「トランペットは、小さくて、いい、よな！」
チューバを回しながら先斗は叫んだ。
先斗と庄吾、そして里穂は旧館一階の水道で楽器の水通しをしている。

主管から水を通してマウスパイプ（マウスピースをさす所）の掃除をした後、チューバのベルから水を入れて、そのまま楽器を回して管の中の掃除をする。ただでさえ重い楽器の重量が水のせいでハンパなく重くなるので先斗は汗だくになっていた。
「先斗、いっつもそれ言ってない？」
里穂が突っ込むが、
「重いもんは重いんだよ！おりゃあぁぁ！」

ザバーン！

水を抜くと、管内から一緒に緑のヘドロのようなものまで出てきた。
「よし！」
先斗は満足そうだ。
「すごいな……」
庄吾が驚いた様子でそれを見る。
「これは4月に洗ったんだけどな…。ま、しっかり吹いた証ってことで」
「数ヶ月でこれってことは上にあるチューバってどうなるんだろ？」

里穂の呟きに先斗の顔色が変わる。
楽器庫にあるチューバは桜田西高校が閉鎖されてからずっと放置されているものだ。４月の時点ではしばらく使わないだろうからと手入れをしていなかったが、来年のことを考えると今しておかないといけないだろう。
「あと５本あったんだった……」
先斗は悲鳴を上げた。
桜田中央高校にはＢ♭管のロータリーチューバが３本と、ピストンチューバが２本、Ｅ♭管のフロントアクションの楽器が１本ある。
先斗はかっちりした音のほうが好みなので、ロータリー式の楽器を使っている。

「庄吾手伝ってくれないか？」
「無理無理。トランペットも１０本あるんだ。今日くらいしか洗う機会ないからな。パーカスなら手開いてるんじゃないか？」
「ちょっと行ってみる。庄吾、楽器頼んだ」
「了解」
先斗は手を拭いて、第二音楽室に走っていった。

「あ～、これはひどいな……」
第二音楽室の入り口から先斗が覗き込むと、パーカッションセクションが全ての楽器を出して純也に点検してもらっていた。
マーチングバスドラや、タムタム、ビブラスナップなどあまり見慣れない楽器まで並んでいて、まるで打楽器のフリーマーケットに来たようだ。
「シンバルクリーナー使おう」
「削るんですか？」
見ると、楽器庫の奥から出てきたマーチングシンバルが青く錆びている。
「仕方ない。来年マーチングするかは分からないけどパレードとか

の時には使うだろうから。ただ使いすぎると音質変わっちゃうから
これからは定期的に手入れしてくれ」
「分かりました」
（忙しそうだ……）
先斗は特に声をかけず、そのまま水通しに戻った。

チューバ６本に水を通し終わると、先斗はコンクリートに新聞紙を敷き、クリーニングスワブを取り出した。そしてチューニング管を抜いていく。現在先斗が使っている楽器の管は簡単に抜けたのだが、放置していた楽器の管はなかなか抜けない。
「庄吾。ちょっと楽器押さえていてもらっていいか？」
「抜けないのか？」
「ああ。固すぎ」
「分かった」
庄吾が楽器の本体を支えたのを確認して、先斗は思い切り、ただしゆっくり管を引っ張った。
「おりゃあぁぁ！」

ポン！

音がして、管が抜けた。

「よし……」
計３０本の管を抜き終わると、一本ずつクリーニングスワブを通していく。管の中からも洗い残した汚れが出てきた。
その汚れも水で洗い流し、新聞紙の上に並べる。
楽器本体も横に並べ、あとは乾かしてグリスとオイルを塗るだけだ。

「終わった……」

先斗は息をついて、汗をぬぐう。
「おつかれさん」
庄吾がねぎらいの言葉をかけた。
「トランペットも終わったか？」
「ああ。あと乾かしてグリスとオイル塗るだけ」
先斗はそう言って、息をついた。

「先斗～！」
その時、唯がやってきた。
「サックスも終わったのか？」
「ううん、まだ。西村先生がマーチングチューバも水通ししてだってさ……。先斗？」
「唯。タイミング悪すぎ……」
里穂が先斗の様子を見てため息をつく。
「……」
マーチングチューバは現在学校に４本ある…。
先斗は完全に硬直していた。

66話　手入れ　後

「…疲れた」
マーチングチューバの水通しを終えると、先斗は疲労困憊でひっくり返ってしまった。

「生きてるか～？」
「…なんとか」
庄吾の問いに先斗は弱い声で返す。
「ま、乾かしている間休んどけよ」
「そうする…」
そう言うと、先斗は日陰に入り、目を閉じた。

夏の日差しは強く、一時間もしないうちに楽器についた水はすっかり乾いた。
「先斗～。乾いてるぞ」
庄吾が起こしに来る。
「ん？あ、庄吾。シルバーポリッシュ持ってるか？」
目を開ける先斗。寝転がったまま庄吾に聞く。ちょっと無作法だと思われる。
「持ってるけど。マーチングチューバに使うのか？」
しかし特に怒った様子もなく庄吾は返した。
「ああ。ちょっと白錆がひどいから」

シルバーポリッシュは銀メッキ仕上げの楽器のひどい汚れや、錆を落とすのに使う。
桜田中央高校にあるチューバのうち、銀メッキ仕上げなのはマーチングチューバのみだ。

「よし、と」
起き上がって、庄吾からポリッシュを借りると、先斗はクロスにポリッシュを出し、楽器を磨き始めた。
錆は水によるものだ。
座奏とは違って、動き回って演奏するため汗が楽器についたり、雨に濡れたりする。
毎回拭き取っているつもりでもたいてい水滴が残っていて、白い錆となって表面に残ってしまうのだ。

「終わった…」
３０分後。やっと白錆が落ち、３本の楽器はぴかぴかになった。
しかし先斗にはまだ仕事がある。
「…」
７本分のチューニング管、計３２本の手入れだ。
新聞紙で古いグリスを拭き取り、新しいものを塗る。そしてそれを正しい管に挿し直す。
「あ～！多いんだよ！グリスなくなっちまう！」
チューバのチューニング管は言うまでもなくトランペットの比でないほど太く、長い。その上、今日は７本分の管にグリスを塗るのでグリスの消費量も半端ない。

「これで終わりか？」
「…オイルをさしたら終わる」
そういうと、先斗は手入れ道具入れから２種類のオイルを取り出した。
ピストン式用のバルブオイルと、ロータリー式用のロータ－オイルだ。
それぞれ楽器にさす。
そしてそれを二階の音楽室に持って上がり、ケースに収めた。

「終わったぁ…」
「お疲れさん。一休みしようぜ」
「ああ」
庄吾と先斗は一階の自販機スペースに向かった。

「あ～。うまい！」
紙パックのレモンティーを飲んで叫ぶ先斗。
「そりゃあんなに叫んでるからだろうが。先斗らしくない」
「…暑さでおかしくなったかもな」
「そうだと思う」
さっきまで快晴だった空に入道雲が出ていた。明日は雨かもしれない。
「…そういや、結果聞いたか？」
「ああ…。昨日バッシーから電話掛かって来た」
「そうか…」
庄吾は軽くうつむく。

桜田一中は今年、県大会で銀賞だった。
あの事件の影響もあったのだろう。

「…バッシー、どうだった？」
しばらくの沈黙を破ったのは庄吾だった。
「…泣いてたよ」
「そうか…」
「すみませんって謝られたのが辛かった。俺らのせいでもあるのにな」
「ああ…」
空の雲はだんだん増えていく。もしかしたら午後から降り出すかもしれない。
「…帰ろうか」

「ああ」
今日は手入れが終わったら帰っていいことになっている。二人は容器をゴミ箱に捨てると昇降口に向かった。

６６話　手入れ　後（後書き）

来月から模試が山のように入ってくる＆補講が始まるので、更新速度が激遅になります。

二週に一回は更新できたらいいな…。と思っていますので、見捨てずにお付き合いください。

67話　久しぶり

8月19日（土）。
休みということもあり、先斗はゆっくりと朝寝を楽しんでいた。
例年と違い既に提出物は作り上げているし、何の予定もないため今日は安心して眠れる。

コンコン。

ベッドの上でダラダラとしていると、ドアをノックする音が聞こえた。

「はい？」
「先斗！起きなさい！」
小百合の声だ。時計を見るとまだ8時前。今日部活がないことを知らないのだろうか？

「ん～？今日部活ないって…」

ガチャ！

いきなりドアが開いた。
「起きなさい！今日は黒松のおじさん達来るって言ってあったでしょ！」
「え？なんで！？」
「お盆だけど、今年はお父さんが忙しくていけないからあっちが遊びに来るのよ」
ガバっと起き上がる先斗。

黒松家は春日湾沖の柳紅諸島の後島にある、小百合の実家だ。
先斗の祖母である早苗、小百合の弟の淳平、妻の愛海、いとこの耕一と、はとこの天音が住んでいる。

「いつ着くって？」
「朝一のフェリーで来るって言ってたから１１時頃ね。でもそれまでに家事片付けちゃいたいから、早く朝ご飯食べて頂戴」
「…分かった」
先斗はしぶしぶ階下に降り、朝飯を済ませた。

「こんにちは～！」
「は～い！」
１１時１５分。淳平達がやってきた。

「いらっしゃい。まあ、耕一くん大きくなって。今年中三だったかしら。月日がたつのは早いものね～。ついこの間中学校に入ったと聞いたと思ったのにもうすぐ高校生なのね」
「姉貴は相変わらずだな…」
淳平は苦笑しながら挨拶を返した。
「お姉さん。こんにちは」
愛海も少し遅れて挨拶を返す。
「あら、愛海さんお久しぶりね～。確か一昨年行ったとき以来ね。お母さんは元気かしら？」
「はい。おかげさまで」

「よ。耕一」
「先兄。久しぶり」
そして子供同士でも挨拶を交わす。
「天音ちゃんは今日来てないのか？」

「あいつ夏風邪ひいちゃってさ。今朝熱は下がったんだけど、咳がまだ出るからってばあちゃんと留守番」
「そうか」
「海斗は部活？」
「合宿。合唱は盆明けが大会だからな。盆休みもなし」
「大変だな…」

「先斗～！食事行くから準備しなさい！」
「え？あ、は～い！」
小百合の声に返事を返す先斗。

「行こうぜ。今日泊まってくんだろ？俺の部屋来いよ」
「了解」
そう言うと二人は玄関を出て、拓郎の車に乗り込んだ。

「ふぅ～。満腹満腹」
「小百合おばさん料理上手だな～。料理学校卒業だけはあるわ」

夕飯の後、二人は先斗の部屋でテレビを見ていた。
「このタレント馬鹿だな～」
「役作りじゃない？今はおバカを売りにしてるタレント多いし」
クイズ番組を見つつ、おしゃべりに花を咲かせる二人。

「先兄」
「ん？」
ＣＭに入ってすぐ、耕一が先斗に話しかけてきた。耕一の声は声変わりのせいか二年前に会ったときよりも低いものとなっている。

「ちょっと変な質問していい？」
「…いいけど」
「もし先兄が夢を叶えるのを引き換えに家族と別れなくちゃいけない状況になったらどうする？」

「夢に向かって進む」
少し驚いたが、先斗はほぼ間髪なく答えた。
「理由聞いてもいい？」
しばらくして耕一が口を開く。
「戻ってくる気になれば戻って来れるし、夢みているだけじゃ結局叶わないから…かな。俺も二、三年後には家出て行くわけだし」
「そっか…」

沈黙が続く。
「なあ、もしかして…」
先斗が口を開く。
「たぶん先兄の予想通りだよ」
「…高校、本土に来るつもりか？」
「うん。できたら桜田中央に行きたいと思っている」
「なんでだ？」
「…前島の高校じゃ、人数が少なすぎて学びたい勉強ができなそうなんだ…」

柳紅諸島の前島にある、柳紅高等学校。
全校生徒１５８人。一学年の定員は８０人だが毎年定員割れで、生徒数は年々減少している。

「何を学びたいんだ？」
「地理が勉強したい。でも柳紅じゃ社会は世界史しか履修できないって二つ上の先輩に聞いてさ」

「じゃあうちに来るってこと？」
「それをおばさんたちに相談するために今回は来たんだ」

「いいわよ」
階下でも拓郎と淳平、小百合と愛海がダイニングテーブルにかけて話し合いをしていた。
「いいの？」
あっさりと言う小百合に戸惑う淳平。
「お義兄さんはどうですか？」
愛海が拓郎に尋ねる。
「私は構わないよ。実際私はあまり家にいないし、海斗や先斗も喜ぶだろうから」
「じゃあ、月においくら払ったらいいでしょうか？食費等もあるでしょうから」
「耕一君の学費だけでいいわよ」「姉貴！？さすがにそれは…悪いよ」
今度は淳平が驚愕した。
「いいのよ。母さんにまだこの家の頭金借りたままだからそれで三年間面倒みてあげる」
「…ありがとう」
「さあ、話はこれでおしまい！あなた。ビール飲むでしょ？淳平相手してあげて」
「分かった」

小百合が持ってきたビールを受け取り、二人はリビングに向かう。
「じゃあ愛海さん、私たちはおつまみ作ってあげましょう。手伝って」
「あ、はい！」

そして女性陣もキッチンへ入っていくのだった。

67話　久しぶり（後書き）

ちなみに耕一は青空の島の主人公です。そちらも読んでみてください。

68話　受験事情とお小遣い事情

翌日。
「お世話になりました」
「じゃあ耕一、来年な。受験受かれよ」
「はいはい」
耕一たちは帰っていった。

「え？耕一来てたんだ」
「ああ。それでさ…」

その翌日の8月21日（水）。
合宿から帰ってきた海斗は先斗の話を聞いて驚いた。
「そっか。耕一来るんだ」
「うん。幸い今年から校区撤廃だから8％枠なくなるしちょうどよかったな」

島根県には去年まで高校の学区があった。
柳紅半島は西部に属しているため耕一の通う後島中学校は校区外となっていたため、去年までは校区外の生徒は定員の8％しか入学することができなかった。
しかし今年、少子化による生徒数の減少により校区の撤廃が決まった。
そのため県内に住んでいる中学生なら、県内の高校を制限なしに受験することができるようになったのだ。
「で、部屋どうする？どっちかの部屋か、客間使うかって言われた

けど…」
「俺のところでいいよ。先兄の部屋より広いし」
先斗の部屋は6畳＋ロフト。
一方、海斗の部屋は8畳だ。
布団を敷くとしたら海斗の部屋のほうが良い。

「了解。じゃ、耕一に電話しとくよ」
「分かった。あ、そうだ。今日学校で貴弘に会ったんだけど…」
「え？今日練習なのか？」
意外な言葉に驚く先斗。
「報告演奏会に向けて自主練習だってさ。で、先兄がよかったら指導に来てほしいって」
「分かった、連絡しとく。じゃ、俺出かけるから」
「また本屋？」
「ああ。この間新刊がなかったから」
「先兄漫画好きだよね。小遣い足りるの？」

先斗の小遣いは月５０００円だ。友達の中では大体一般的な金額と言われているが、先斗は毎月5冊以上漫画を買っているし、週刊の漫画雑誌も買っている。
そのため概算すると漫画で小遣いの半分以上を使っていることになるのだが、先斗は唯に付き合ったりしてよくファミレスやケーキ屋に行っている。
しかし海斗は先斗が小遣いを前借りしたりしているのを見たことはなかった。

「ちょっと工夫してんだよ」
「え？」

先斗は少し得意げに話し始めた。
「昼飯で毎日５００円もらってるんだよ」
「学食で食べてるんだっけ？」

桜田中央高校には学食と購買がある。学食には５種類ほどメニューがあり、最も売れている日替わり定食（￥４８０）を先斗はいつも食べている。

「ただし週二回だけしか定食は食べない」
「え？昼飯抜くの？」
「いや。そして購買で買ったパンを二つ食べる」
「うんうん」
「そうすると週で７００円ほど浮くからそれで週刊誌と漫画１冊が買える」
「へぇ…。結構いろいろやってるんだ」
「だってそうしないと漫画買えないし。海斗こそ足りてんのか？ゲーム買いまくってんじゃん」
「中古ソフト買ってるよ」
「でも傷とかついてんじゃないか？」
「いや、物によってはすぐに飽きて売る人もいるし、傷なしのものを買えば問題ない。それに部活が忙しいからあまり小遣いは使わないからね。なんとかやってるよ」
「ふ～ん」
「ところで先兄行かなくていいの？」
「あ、やばい。庄吾と待ち合わせしてたんだった。じゃ、行ってくる」
携帯を見て呟くと、先斗はリビングを出ていった。

69話　合宿！（1）

８月２４日（金）。
今日と明日は合宿だ。
寝泊りは部活棟の中に運動部の合宿部屋があるためそこを使わせてもらえることになっている。

朝１０時。いつもより遅く練習が始まった。
軽く個人でアップを済ませた後、１０時半から基礎合奏を昼までびっしりやることになっている。

「チューニングＢ♭から８拍吹いて、４拍吸うで、半音階で下がっていって」
「「はい！」」
第二音楽室。管楽器のメンバーの基礎合奏が始まった。
打楽器のメンバーは楽器庫で純也の指導を受けることになっている。

「低音！もっと響かせて吹け！ロートーン潰れてるぞ！」
京は音を聞きながら各パートに激を飛ばす。
「サックス！Ｅ♭（ミ♭）が低すぎ！もっとあげろ！」
「直管！もっと飛ばせ！」
「金管！アタックが雑になってきた！」
「木管！音の処理！」
クーラーのない音楽室。部員達も京も汗びっしょりだ。
「次、１６拍吹いて４拍吸うで。なるべく限界まで息を入れて吹いてくれ。苦しかったら途中で吸っていいから」

「「はい！」」
パー！
始めは順調に音が伸びる。
パワワワァァ～…。
しかし１０拍を過ぎたところでだんだん音がゆれていく。
パァァ～～～プファー！
カンカンカンカン！
「ストップ！」
京が止める。
「今入ったの誰だ？」
「…はい」
里穂が手を上げる。
「ノータンギングで静かに入って。目立つ」
「はい！」
「全員だが、セクション練習でカンニングブレスの練習しておいてくれ」
「「はい！」」
カンニングブレスとは、合唱や金管楽器、木管楽器の演奏などにおいて、本来息を継ぐべきでないフレーズの中途などで行う呼吸のことだ。
一息では発音できない長いフレーズが切れずに繋がって聞こえる

ように、同じパートの演奏者が少しずつ場所をずらしてブレスをするなどの方法によって行う。
先斗も中学時代はかなりパート内で話し合いを重ねたものだ。

その後もロングトーンやスラー、音階などをさらった。
「よし。12時になったから午前の練習は終わり！次は1時15分から『マーチ「ブルースカイ」』の初見合奏するからさらっといて」
「「はい！」」
そういって京は職員室に戻っていった。

「ふえぇぇ～」
弥生が譜面台に突っ伏した。緊張がほぐれたのと、暑さのせいだろうか。
「あらら…。西掛君窓開けて」
それを見て茜が窓の近くにいる先斗に指示する。
「はいよ」
窓を開けると、夏の生ぬるい風が入ってきた。なんか逆に暑くなった気もする。
「ほえぇぇ～」
さらに弥生がダレていく…。
「…やっぱり閉めて」
「了解…」
先斗はすぐに窓を閉めるのだった…。

13時15分。京が戻ってきた。
「はい。じゃあ、『ブルースカイ』。まずはインテンポで一応通してみるぞ」

「「はい！」」
昼飯を食べて弥生もしっかりとし直したようだ。
指揮が上がり、演奏が始まった。
金管とサックスのイントロに、木管の上昇音。一週間しか練習していないのでまだなかなか指は回らないようだ。
クラリネット、トランペットと刻みを入れ、第一主題に移る。
ここでのメロディーはクラリネットとアルサク。対旋律でユーフォニウムが入る。
本当はここにトロンボーンの伸ばしとホルンの刻みのハーモニーが入るのだが、どちらのパートも一人ずつなので音は薄い。
トリオのメロディーも少し流れがちだし、ミュートトランペットとシロフォンがずれて、はっきりとしない。
最後の木管の三連符にいたっては途中で消えてしまっていた。
「ま、最初だから仕方ないな。ゆっくりとやっていこう。じゃあ、イントロの４小節を倍テンポで。そうだな、伸ばしは八分音符で区切ってくれ」
「「はい！」」
指定テンポが１３２。
倍テンポだから京はメトロノームをテンポ６６に合わせた。
「３、４！」
「ホルンずれた！」
「クラ、流れるな！」
テンポが遅いからか、なかなか合わず、ここだけで８回繰り返す羽目になる。
「じゃ、伸ばしそのままで」
「「はい！」」

（こんなゆっくりで間に合うのかなぁ…）
奈津美はなかなか進まない練習にちょっと不安を抱いていた。
最初の合同合奏は９月８日（土）。あと２週間しかない。
しかもまだ３曲練習しなくてはならないのだ。
奈津美はそれを思うと少し憂鬱になるのだった。

「よし、１５分休憩」
練習番号Ｂまでさらったところで休憩となった。
「はあ…」
「どうした？」
奈津美が椅子に座ったままため息をついていると龍也が話しかけてきた。
「…間に合うのかなって思って」
「なんで？」
「だって『ブルースカイ』はメロディーや対旋律だらけだし、『宝島』はかなり細かいし、『カーペンターズ』はテンポころころ変わるし、『アイヴァンホー』は長い上に難しいんだもん。２ヶ月で仕上がるのかな…」
「まだ２ヶ月あるって考えたらどうかな？」
「え？」
「だって、後６５日だろ？だから、後１５６０時間、つまり９３６００分ある訳よ」
「長い…」
「だろ？だから地道に頑張ろうぜ」
「うん！」
奈津美は大きく頷いた。

「でも龍也くん暗算速いね」
「小学校の時そろばん習ってたからな」

話を続ける二人。それを、
「あれどう思う？」
「なかなか意外なカップリングだけどありじゃね？」
少し離れた美香の席で唯と美香、先斗が見ていた。
「それにしてもうちの部はカップル候補が多いね～」
唯が掴んでいるのは、加奈子×匠、美香×庄吾だ。
「三組目か。面白くなってきたぁ～！」
「落ち着け」
またテンションが上がりそうになった唯に先斗が軽くグーを入れる。
「痛ったぁ～！叩かなくてもいいじゃないの。ＤＶ！」
「バ～カ。ＤＶはドメスティック・バイオレンス、つまりは家庭内暴力だ」
少し小馬鹿にしたようにいう先斗。
「何よ。ちょっと間違っただけじゃない。細かい男ね」
「なんだと～？」
「まあまあ、落ち着いて。…作戦会議どうする？」
またいつもの喧嘩が勃発しそうだったので、思わず美香が止めに入る。そして時計を指差した。
「あ、時間なくなっちゃった…。美香ちゃんごめん。作戦会議、夕食後でいい？」
「いいよ。気にしないで。じゃあそろそろ休憩終わるから後で」
「うん」
「了解」

席に戻る２人。
（私は四組目を知ってるけどね…）

美香は２人が席についたのを見ると、フルートを構えてさっき合奏で注意された部分をさらい直すのだった。

70話　合宿！（2）

「はい、じゃあ今日の練習はここまで！」
午後6時5分。
『アイヴァンホー』の一楽章の初見合奏が終わった所で、京が合奏の終わりを告げた。
「流れを説明するぞ。今から片付けをして、私服に着替えて7時に一階の食堂に集合だ。夕食を学食のおばちゃんたちに作って頂いたのでそれを食べる」
「やった」
庄吾が小さく声をあげる。

実は桜田中央の学食、市内で一番おいしいと言われているのだ。
特に日替わり定食は主菜に副菜、汁物におかわり自由のご飯がついて480円、しかもおいしいという素晴らしいものなので、予約券を買っておかないと売り切れてしまうほどの人気メニューだ。

「その後の予定は合宿係からだ。続き頼む」
「はい！」
優樹と加奈子が立ち上がり、加奈子から話しはじめた。
「まず、8時から肝試しをします」
「「え？」」
唯と里穂が声をあげる。
（やっぱりな…）
先斗はにやりと笑う。

実は肝試しの案を優樹に提供したのは先斗である。
幸い一番後ろにいるので、先斗の笑いは誰にも気づかれなかった。

「組は男女ペアとします！」
「「え！？」」
加奈子の声にほぼ全員が声をあげる。
「ちょっと！」
「はいは～い。くじ引きに来てくださ～い。男子はこっち、女子はそっちね」
里穂の声も空しく、優樹がくじを持ってきた。
「仕方ない、引こう…」
「うん…」
唯の諭しに里穂はしぶしぶ従った。

☆☆くじ引き結果☆☆

1　東×黒田
2　坂根×三上
3　田中ひ×田中龍
4　吉岡×渡部
5　今井×田中拓
6　中島×西掛

（やった！）
唯にとっては、美香と庄吾がくっついたことで満足だった。
一気に肝試しが楽しみになる。
「あれ？弥生と慶太は？」
くじを引かない二人に里穂が首を傾げる。
「あ、二人と優樹には脅かし役やってもらうことになってます」

「「ええっ？！」」
また唯と里穂が声を上げた。
「楽しみにしててね～」
弥生がにっこり笑う。
しかしその笑いは黒い笑いだったため、二人は軽く顔を引きつらせていた。

「そしてその後は花火をして、解散、入浴、就寝とします」
「「はい！」」

「じゃ、部長…中島？」
「え？あ、はい！き、気をつけ、れ、礼」
沈黙していた唯が反応して、どもりながらもなんとか号令をかける。
「「ありがとうございました！」」

夕食後、すぐに旧校舎の入り口に集合する部員達。
弥生、慶太、優樹の姿は既にない。ついでに京の姿もだ。

「怖いよ～…」
「大丈夫だって」
もう泣きかけの唯。ひかりが一生懸命諭すが、効果は薄いようだ…。
「じゃあルート説明しま～す」
加奈子が前に立つ。

「ここから入って行って、東側階段から三階に上がり、西側階段から二階に降りて、第二音楽室に入って指揮台の上に置いてあるトラ

ンプのカードの中から好きなものを一人一枚ずつ取ってきてください。音楽室を出たら、中央階段を降りて、第二昇降口から出てください」
「戻ってこなくていいの？」
ひかりの問いが飛ぶ。
「はい。昇降口からグランドに行ってください。梶原先生が花火の準備をしています」

部員の半分が女子のため、女性がいたほうがなにかと対処しやすいということで、今回は静香も合宿に同行していた。

「なにか質問はありますか？」
「はい！」
さっと手を上げる唯。
「はい、唯さんなんでしょか？」
「辞退ってなしですか～」
「はい、なしです。他にはありますか？」
「…はい」
加奈子に軽くあしらわれて、落ち込む唯。

「ないようなので、第一陣、アズと匠行ってください」
「はい」
「…ん」
二人は静かに旧校舎の中に入っていった。

７０話　合宿！（２）（後書き）

今日でＳＡＫＵＲＡ　ＷＩＮＤＳを書き始めてからちょうど一年が経ちました。毎月アクセス数が増えていき、とても嬉しく思っています。さらに、なんと今日アクセス数が３０，０００アクセスを超えました！読者の皆様のおかげです。受験で更新頻度は落ちましたが止めるつもりは全くないので、これからもＳＡＫＵＲＡ　ＷＩＮＤＳと作者を暖かく見守っていただけると光栄です。

71話　合宿！（3）

【一組目　茜&匠】

真っ暗な廊下を懐中電灯で照らしながら歩いていく二人。
「黒田くんと二人になるのって初めてね」
「…そうだな」
「…」
また沈黙が続く。三階に上がっても黙ったままだ。
「はぁ…。加奈ちゃんに聞いたとおりね」
「…なにが？」
「黒田くんって、音楽関連以外の話だと無口になっちゃうって」
「…必要ない会話をしたくないだけだ」
「ふ～ん」
「…それにぐちゃぐちゃしゃべってたら脅かし役が出て来れないだろ？な、優樹」
「え？」

すると、優樹がばつが悪そうな顔をして教室の中から出てきた。
手には何かを持っている。
「匠鋭いな…。結構考えたのに」
「一階に脅かし役を配置したら、声で大体の位置が後のやつにばれちまうからな。始めの配置はこの辺かなって踏んでたんだよ」
「じゃ、なんで俺ってわかったんだ？」
「勘」
「勘って…ま、いいや。さっさと行ってくれ。後続来るだろうし」
「了解」

その後もいろいろ匠が見破って肝試しはあまり怖くないまま終わ

ってしまった。
外に出る。
「ま、楽しかったかな」
「…黒田くん」
「なんだ？」
ジト見してくる茜にちょっと焦る匠。
「…ネタばればっかりでつまらなかったわ」
「…ごめんなさい」
その視線が怖かったため、匠は素直に謝ったのだった。

【二組目　坂根&三上】

（は、話さなきゃ…）
美香は今までにない至近距離に庄吾がいるため、かなり緊張していた。
「坂根大丈夫か？」
庄吾はそれを怖がっていると受け取ったのだろう。美香を心配してきた。
「う、うん！大丈夫」
「ならいいけど」
三階に上がる。そのときだ。
ヒュン！
何かが美香の足元に飛んできた。
「キャア！」
「うわぁ！？」
美香は思わず庄吾に飛びついてしまった。

「ど、どうした？」
「あ、足元になんか飛んできた！」
庄吾が美香の指差すあたりを懐中電灯で照らす。
「あ！なんだ…おもちゃのへびだよ」
「な～んだ…。よかった…」
息をつく美香。

「ところで坂根…。そろそろ離してもらっていいかな…」
「へ？」
自分の状況を確認する美香。

庄吾に抱きついている自分がいた…。
「きゃぁぁぁあああ！」
次の瞬間、美香はバッと庄吾から離れて走り出していってしまった。
「お～い…」
庄吾は慌ててその後ろを追いかける。
「…」
そしてその背中を優樹は呆然として見つめているのだった。

【三組目　ひかり＆龍也】

「ひかりと当たるとはな…」
「それはこっちの台詞よ」
言葉を投げかけあいながら、ふたりはのんびりと階段を上がっていった。

ヘビのおもちゃも難なくかわし、二階に下りる。
「え～っと。音楽室だっけ？」
「そうだよ

音楽室前の木の引き戸を開ける。

ガラガラッ！

「きゃ！」

意外と音が響くので、ひかりは自分で開けたのに少しビビッてしまった。

「ビビりだな～」

龍也が笑う。

トランプを取り、音楽室を出る。

その瞬間。

バタン！

「ウガアアアア！」

いきなり掃除用具箱が開き、ジェイソンのマスクを被った大男が飛び出してきた！

「「ぎゃあああああ！」」

二人は走って一目散に音楽室から逃げていくのだった。

【四組目　奈津美＆和志】

二人も音楽室の前まで、無事に到達していた。

「後、二人か…」

「二人って？」

「さっき優樹が出てきたろ？だからあと、脅かし役は弥生と慶太だけだ」

「あ、なるほどね…」
「たぶん次はこの辺だと思うぜ？例えば」
そう言って、
「そこの掃除用具入れとか？」

ガタッ。

言った瞬間に掃除用具入れから物音がする。
「きゃ！？」
「やっぱりな」
そう言って掃除用具入れの扉を開ける。

そこにはジェイソンのマスクを被った大男。
「暑かったろ。慶太」
「え？慶太くん」
「まったく、匠もお前も鋭すぎなんだよ」
マスクを外すと慶太の顔が現れた。
「ま～、ご丁寧に斧のレプリカまで持って」
プラスチック製の斧を手に取る和志。
「…さっさと行けよ。後、二組脅かさないといけないんだ。あ～シャワー浴びてぇ…」
よく見ると慶太は汗だくだ。黒いシャツがびしょぬれになっている。
「頑張れよ～」
そう言って二人は音楽室を出て行った。

中央階段に差し掛かる。
「結構凝ってたね～」
「そうだな」

階段を降り切った瞬間だ。

ジャーン！

「ウワァアアア！」

いきなりオペラ座の怪人のテーマが流れ出す。

二人は驚いて一気に入り口まで走り切った。

入り口まで来てやっと落ち着いた二人。

「あ～、ビビった…」

「なんでジェイソンでビビらないであれでビビるのよ…」

「いや、音はだめだろ音は…」

「…そうかも」

なんだか変な理由だが、なぜか奈津美は納得してしまったのだった。

【五組目　里穂&拓也】

「キャァ！」

「ウワァアアア！」

蛇、ジェイソンと驚き続けている二人。逆になんでそんなに驚けるのか不思議なくらいだ。

「早く出ようよ…」

「あとちょっとだから…」

二人ともびくびくしながら中央階段を降りる。

ジャーン！

そしてオペラ座の怪人が鳴る。

「あ、これ金管バンドでやった」
「そうなんだ。俺中学の時音楽の授業で映画見たな」
二人は驚かずそのまま出口へと歩いていった。

「…なんでこれは大丈夫なの？」
二人が通り過ぎた後、弥生は悔しそうにつぶやいた。
「ま、いっか。次は唯だし…ふふふふふ！」
弥生はそういって黒い笑顔を浮かべるのだった。

72話　合宿！（4）

【六組目　先斗＆唯】

「怖いよ～」
出発前から唯はびくびくしっぱなしだ。
「唯大丈夫？」
さすがに加奈子も心配している。
「う、うん」
「じゃあ、そろそろ出発…」

「うわぁああ！」
そこに中から拓也の悲鳴。
「きゃあああああああ！」
そして唯の悲鳴…。
これが二回繰り返されている。

「…行くぞ」
先斗は待ちきれなくなって歩き出した。
「え？え？　待ってよ～！」
その後ろを唯は追いかけていった。

三階に上がる。

ビュン！

蛇のおもちゃが先斗の足元に飛んできた。
「おっと」

先斗はそれを拾い上げる。
「…おもちゃ？」
「そうだな」
「また見破られたか…」
「優樹くん？」

優樹が出てくる。
「じゃ、行くか、優樹は片づけか？」
「いや、一緒に行くわ」
「え？肝試しの意味ないんじゃ…」
唯のツッコミが入る。
「ひとりでここいるの地味に怖いんだ…」
「…了解」
先斗は少し呆れてそう答えた。

音楽室。カードをとり、音楽室を出る。

「ウガァアアア！」
「きゃあああ！」
「慶太か。お疲れさん」
おびえる唯に対し、冷静な先斗。
「3人目だぞ…見破るの。…ま、中島が驚いたからいっか」
慶太はため息をついてマスクを外した。なんだか疲れた顔をしている。

「あれ？なんで優樹いるんだよ？」
怪訝な顔をする慶太。
「いや、最後だしいいかな～なんて…一緒に行こうよ」
慌てて話をそらす優樹。あくまでもビビリと思われたくないようだ。

「…そうだな。早く出てシャワー浴びてぇ」
「じゃ、行くか」
四人は中央階段へ向かった。

ジャーン！

またオペラ座の怪人が鳴る。

「来年人数増やしてこれ吹きたいよね」
「そうだな」
「だからなんで音にはみんな驚かないの！？」
弥生が半分呆れ半分怒って出てきた。

先斗はまだしも唯まで驚かなかったのだ。考案者の弥生にとっては悔しいこと極まりない。
「だってこれ音だけじゃな。慶太にファントムの格好させて横で流すとかだったら面白かったかも」
「いや、タキシードなんて着たら熱がこもってぶっ倒れちまうよ」
先斗の提案に慶太が反論する。
「…もういいや。出よう？花火早くやりたいよ」
弥生は諦めたように言った。

「おわった～！」
脅かし役が全員出てきたので、唯は一気に元気になった。
「あ、唯知ってる？」

弥生が話を始めた。
「何？」
「西村先生に聞いたんだけどさ～。ここの廊下の先に倉庫あるでし

ょ？」
「うん。入ったことないけど扉の上のほうにガラスはいってるから中見えるよね」
その角を曲がってまっすぐいったら昇降口だ。
「でもあそこたいして何も入ってないよね？」
「そういえばそうだね」
「何でか知ってる？」
「…知らない」

唯が怖がり始めたのを先斗は察知した。
「そこで校長が自殺して、時々霊が出てくるからなんだって！」
「きゃあああああああ！」
唯は今までで一番大きな叫び声をあげた。
「おい有吉、やりすぎだって…。中島泣きかけてるじゃん」
慶太が諭す。
「あ～！唯ごめんごめん。うそうそ。確かに校長は学校で自殺したけど前の新校舎の校長室らしいから！」
弥生が唯を見て大慌てで否定する。
「…よかった」
ほっと息をつく唯。
「じゃあ出ようぜ。花火するんだろ？」
「うん」
五人はまた歩き始めた。

「ごめんね。唯」
改めて謝る弥生。
「いいよ。いつものことだし」
「いつものこと？」
慶太が首をかしげる。
「ああそのこと？毎年夏になると弥生が怖い話したがるんだよね…

先斗どうしたの？」

さっきから黙りこくっている先斗に気づく唯。

「確か弥生、霊が出るのって新校舎って言ったよな？」

ちょうど弥生の話した倉庫の前で立ち止まる先斗。

「え？うん。でも前の校舎が建ってた場所に部活棟が建ってるらしいから大丈夫でしょ」

少し戸惑いつつ答える弥生。

「弥生、そっちは旧校舎だ。新校舎が旧校舎なんだ」

「新校舎が旧校舎？どういうこと？」

「あ」

唯が声をあげる。

「思い出したか？」

「たしか初めて旧校舎きたとき…」

「何で旧館があるんですか？ここ、新設校ですよね？」

「お前ら知らなかったのか？」

「「はい」」

「何だ知らなかったのか。まあ結構前になるからな」

「そこの記念碑見てみな」

「えっと。１９９４年８月、桜田西高等学校新校舎完成記念…」

―――――――

先斗は弥生を問い詰めるが、否定された。
「じゃ、じゃあ本物！？」
「とりあえずどうする？」

パニくっている唯を抑えて慶太が聞く。
「…みんなには黙っとこうぜ」
「…そ、そうだな。合宿中止になったりしたらいやだし」
「…と、とりあえず来年は肝試しなしね！」
「「当たり前だ（よ）！」」
五人は声をそろえて言った。

「さて、どうするんですか？杉原先生？」
意地悪く言う京。
「やれっていったのは西村先生でしょうが」
ため息をつく純也。
ふたりは少し離れたところから五人を見ていた。もちろん仕掛け人はこの二人だ。
「七不思議になったりしてな」
「あのなあ」
「ま、…そろそろ学生のノリは卒業しなくちゃな。俺も、お前も」
「…そうだな」

しんみりとした表情の二人。
八月も後半に入り、夜は２５度を下回るようになった。
夏ももうすぐ終わりだ。

「ま、たまには必要だと思うけどな」
そう言って笑う京。

「そういう雰囲気狙ってたろ？」
「さあな」
高校時代と変わらないままの笑顔を二人は浮かべた。
「さてと。花火行きますか」
「はいはい」
二人は笑いながらグラウンドへと戻っていった。

73話　合宿！（5）

「じゃあ、自由に始めてくれ。花火はたくさん用意してあるから」
「「は～い！」」

20時50分。
京の合図で花火大会が始まった。
みんな思い思いに花火を楽しんでいる。

「あ、かわいい！」
静香は下の子供を連れてきていた。
「梶原（かじはら）　千夏（ちなつ）です！よろしくお願いします！」
「何年生？」
「小学四年生です！」
はきはきと答える千夏。
「かわいい～！　先生！連れて行ってもいいですか！？」
奈津美は目を輝かせている。
「じゃあ、お願いしてもいいかしら？千夏。お姉さん達に迷惑かけちゃだめよ？」
「大丈夫よ！私ももう4年生なんだから子ども扱いしないで！」
少し頬を膨らませて、千夏は奈津美とひかりについて行った。

「そろそろ口も達者になってきちゃって…。上の娘の時もこうだったわ。息子も反抗期だし…」
息をつく静香。

「上の娘は娘で部活に夢中で家の手伝いもしてくれないし」
「そういえば娘さんも吹奏楽部でしたね」
純也が思い出したように言う。

「ええ。桜田東も今日は合宿なのよ。あの子コンクールはメンバー落ちしたんだけど、次はマーチングだ！って張り切っちゃって」
「え？先生の娘さんも吹奏楽部なんですか？」
いつの間にか近くに来ていた庄吾もそれに反応する。
「ええ。あ、三上くんもトランペットだから知ってるかもね。梶原美佐子って知ってるかしら？」
「あ、はい」
庄吾はその名を聞いて一瞬ドキッとした。

彼女は昨年、支部大会に出場した佐倉中学校のトランペットのファーストを担当していた。
昨年度は桜田一中もかろうじて支部大会に出場することができたため、庄吾は支部大会の会場でその音を聞いた。
佐倉中が選択した課題曲は『架空の伝説のための前奏曲』。
この曲は前半にファーストトランペットのソリがあり、庄吾もそれを未来と一緒に重ねて演奏していた。跳躍が激しく、吹くのが難しかったからだ。
しかし彼女はそれを一人で吹ききった。その上、音色は素晴らしいもので、庄吾は敗北感すら感じた。
そんな彼女ですら、メンバー落ちしてしまったのだ。桜田東高は、どれだけレベルが高いのだろう。
再来月、彼らと同じステージに立つことになる。
庄吾は今から心配になってきていた。

「さて、どうする？」
「とりあえず作戦はそのまんまで行こうか」
一方、唯、先斗、美香は端のほうで固まって話をしていた。
「美香ちゃん、大丈夫？」

「うん…」
美香はさっきの出来事を思い出したのか、少し顔を赤くしながら答えた。
「大丈夫だよ。庄吾にカマかけたら…」
「言わないで！」
「え？」
「…本人の口から聞きたいから」
顔をさらに赤くしつつ、美香は言った。
「…わかった。じゃあ、あたしたちはそっと抜けるから、２１時１０分になったら庄吾連れ出してね！」
「了解」
「じゃ、作戦開始」
唯と美香はなるべく校舎側に、先斗は庄吾の近くに、それぞれ分かれた。

２１時。

美香と唯は新校舎に入っていた。
部活棟に続く通路があるため、今日は鍵を開けてあるのだ。

「ご苦労さまで～す」
入り口で警備員さんに声をかける。
「お疲れ様」
警備員さんは２０代後半の優しい顔立ちの男性。警備会社から派遣されている人だ。
「じゃあこれとあと鍵。後で返してね」
「はい」
鍵と、なにかを受け取る美香。
今回の作戦は校舎内で行うため、警備員さんに協力してもらう必

要がある。
唯は了承が取れるか不安だったが、警備員さんは了承してくれただけでなく、作戦の改良案まで出してくれた。
なんと小説家を目指しているらしく、こういうことを考えるのが大好きらしい。

「じゃあ、行くよ」
「うん」
「頑張ってね」
「はい！」
二人は警備員さんにお礼を言うとすぐに一階の練習室に向かった。

その頃。
先斗はどうやって庄吾を連れ出すか考えていた。
なるべく自然かつ、回りに気づかれないように連れ出さないといけないのだ。
「先斗どうした？」
「え？」
「なんか考え込んでたけど」
ところが庄吾のほうから話しかけてこられてしまった。
（え～い、ままだ！）
「あ、あのな。庄吾」
「なんだよ？」
「ちょっとついてきてくれないか？」
「どこに？」
「新校舎」
「なんで？」
「いや…」
「なんでだ？」
時間を稼ごうとしたがどうしようもなくなる。

（そうだ！）
そのとき、案がふっと脳裏に浮かんだ。
「ト、トイレついてきてくれないか？」
「？…いいよ」
不審げな顔をしつつも庄吾は先斗についてくる。
先斗はほっとして、新校舎に向かって歩き始めた。

７４話　乙女の調べ

２１時１３分。
先斗達は新校舎に入る。
「でも先斗は意外とビビりなんだな～。知らなかった」
「…」
（人の気も知らずに…）

先斗は呑気な庄吾に半分キレていた。今から告白される羨ましい男のキューピッド役をなにが悲しくてやらなくてはいけないのか。
最も、庄吾は状況を知らないのだから呑気でいてもいいわけで、先斗の怒りはただの八つ当たりとなるのだろうが。
殴りたい衝動に駆られつつ、先斗は庄吾を一年会のトイレに誘導する。
「じゃあここで待っててくれるか？」
「分かった」

そう言って先斗はトイレに入っていった。
トイレの個室に入って携帯を取り出す。
「…よし」
そして唯にメールを打った。

＝＝＝

件名　無題

ＯＫ

「あ、来た」
１－Ｂの教室。小声で唯が美香に伝える。
「準備ＯＫ？」
「…うん」
美香は小さく頷いた。
「じゃ、頑張って」
「…ありがとね。唯ちゃん」
「どういたしまして。うまくいくこと、祈ってるから」
そう言うと、唯は教室の窓側のガラス戸をそっと開けて教室から出て行った。
「…よし」
不思議と気持ちは落ち着いていた。
入り口に近づく。
そして手探りで電気のスイッチに触れた。

「ん？」
急に１－Ｂの教室の電気がついた。
庄吾は不審に思って教室に近づく。
「誰かいるのか…。坂根？」

美香が教室の真ん中に立っていた。
「どうしたんだよ？花火しないのか？」
「…庄吾くん。あのね」
「どうした？」
いつもと違う雰囲気に庄吾は真剣な表情になった。
「話があるの」
「…なに？」

外で打ち上げ花火の音がし始めた。花火も佳境に入っているのだろう。優樹たちが騒いでいる声がかすかに聞こえてくる。
それに対して庄吾と美香は静かに見つめあっていた。
「私、庄吾くんのことが好きなの」
長い沈黙の後、美香が唐突に切り出した。
「え？」
「…初めて会った時、一目惚れしちゃったんだ」
「…」

また沈黙が続く。
（ちょっとあせり過ぎちゃったかな…）
美香は軽く後悔した。
「坂根。俺…」
「ちょっと待って！」
2分の沈黙の後、庄吾が口を開いたが、すぐに美香は止める。
「え？」
「今から私、曲を一曲吹くからそこに座って聞いていて」
そう言って椅子を指差す。
庄吾は今気づいたのだが椅子と机がすこしどけてあって、その真ん中に椅子が一脚だけ置かれていた。
そして美香の手にはフルートが握られている。

「断るなら、曲の途中で出ていって。…もしＯＫだったら、最後まで聞いていて」
「…分かった」
「じゃあ座って。…私は目を閉じて吹くから」
そう言うと、美香はドアのところのスイッチを押して、電気を消す。
月に雲が掛かったのだろうか。教室はほぼ闇に包まれた。
「聞いてください。『コイスルオトメ』」
そういって美香はそっと目を閉じ、始めの音を奏で始めた。
いきものがかりの３ｒｄシングルに入っているこの曲、歌詞を読むとどちらかと言うと告白後の曲のように聞こえる。
でも美香が何を吹くか考えた時、一発でこの曲が出てきた。
『運命の人』。
庄吾を好きになったのも一瞬だ。
でも勇気がなくて告白できなかった。
だから思いを暖め続けてきた。
それは辛くもあり、楽しいものでもあった。
でも今日。その思いを音に籠めて庄吾に伝えている。
ガタッ。
Ｂメロに入ったところで、音がした。
庄吾が立ち上がったのだろうか。それを聞いて美香の音が一瞬震える。
（行かないで！）
目を開けてしまいそうになる。走り出して彼の肩を掴もうとしてしまいそうになる。

美香はその衝動を抑えつつ、音を続けた。
庄吾の足音が聞こえる。きっとそのままドアに歩いていくのだろう。　だんだん足音は大きくなっていく。
（たぶん、今夜泣いちゃうだろうな…）
そんな自分に対する嘲笑の気持ちまで湧き上がってくる。
でも美香は吹き続けた。泣きたい感情を全て音に変えた。
心で歌詞を歌いながら、とにかく吹き続けるしかなかった。
そしてサビに入る。
「！？」
美香は吹くのを突然やめた。
いや、吹けなくなった。
「庄吾くん…ルール違反だよ？」
「そうだな」
庄吾が美香を抱きしめていたからだ。
さっきは自分から飛びついてしまったが、今は庄吾が抱きしめてくれている。
しばらくそのままでいたが、美香はまだ返事をもらっていないことに気づいた。
「…返事聞かせてもらってもいいかな？」
意を決して聞いてみた。
「…あのＣＤ借りてから、坂…いや、美香のこと気になってた」
「え？」
意外な言葉に驚く。
「俺も…美香が好きです」

美香を抱きしめながら小さな声で、しかし力強く庄吾は返事を返した。
「…ほんと？」
「この状態で嘘つけるかよ…」
「…うれしい」
安心したのか、美香の頬に涙が流れ始めた。
「泣くなよ…」
そういってさらに強く抱きしめる庄吾。
「…よろしくお願いします」
涙声で美香がそっとささやく。
「こちらこそ」
それと対照的に庄吾は優しい顔で笑っていた。

「いつまで抱きしめていてくれるの？」
「…美香が望むだけ」
「じゃあもう少しだけ…お願い」
「了解」
月を包んでいた雲は晴れ、月明かりが2人をそっと照らし続けていた。

７４話　乙女の調べ（後書き）

え～と、生まれて初めて告白シーン書きました。なのでかなり駄文となってる（いつもか？）かもしれません。ご了承ください（言い訳）。

75話　合宿（6）　Night　Panic　前

「「えええ！？」」

６人の叫び声。

部活棟の合宿室Ｂ。この部屋には１２人の女子生徒が泊まる事ができる。

「ホントだよね。美香ちゃん」

「…うん」

唯の促しに少し顔を赤くして答える美香。

あれは数分前。

風呂から上がり、みんながのんびりしていたときだ。

「そういえば美香。花火の途中いなかったけどどうしたの？」

茜が髪を拭きながら美香に尋ねた。

「ちょ、ちょっとね」

「あれ～？なんか怪しくない？」

美香のどもりを聞いて奈津美が怪しむ。

最近は美香がどもることは減ってきていたからだ。

「そういえば唯もいなかったよね？」

「西掛君と三上君もいなかった」

弥生とひかり。

「唯～？」

そっと逃げ出そうとする唯の肩を奈津美が掴んだ。

「美香ちゃん？」

同じく、美香の肩を掴む理穂。

「話聞かせてもらいましょか？」
加奈子が二人を座らせた。
そして残りの六人が二人を囲むように座る。
「美香ちゃんどうする？」
「いいよ。どうせ分かることだし」
「うん。じゃ、美香ちゃんどうぞ」
「実は…」

「…という訳で、庄吾くんとお付き合いすることになりました！」
「…」
一瞬の沈黙。
「おめでとおおおお！」
「美香ちゃんすごぉ～い！」
「うらやましいいィ！」
女子達は大騒ぎだ。

「あれ？理穂は落ち着いてるね」
顔に笑顔を浮かべつつも騒ぎはしない理穂。
「うん」
「もしかして理穂は相手いたりするの？」
「まさかぁ…」
加奈子が笑い飛ばすが、次に続く言葉は意外なものだった。
「いるよ」

「「え？」」

一瞬の硬直。
「「えええええええぇぇぇ！！」」
また部屋に奇声が広がる。
「だ、誰よ！？」
「…桜田工業の津田（つだ）　悠斗（ゆうと）くん」
理穂は頬を染めて答えた。
「バリサクの？」
「うん」

唯は悠斗の顔を思い出してみた。
悠斗も桜田北中出身だ。吹奏楽は高校からだが、サックスは中学時代にジャズバンドで始めたと言っていた。
顔は結構いいと思う。さらに背もそこそこある。
性格も悪くはなかったと思う。

「いつからよ」
「中二から」
「えぇ！？　三年目！？」
加奈子の声が部屋に響く。
「うん。中学時代に告られた」
「…すご」
「私達も頑張らなくちゃ…」
「え？他にカップルいたりしないわよね？加奈子と唯」
「「なんであたしたち！？」」
ひかりの問いに唯と加奈子の叫び。
「だってねぇ…」
「「うんうん」」
残りの五人は頷いている。

「さてと、しっかり聞かせてもらいましょか？」
「…」
ひかりたち五人の尋問は加奈子と唯に向けられた。
「…」
美香はそっと部屋から抜け出した。

合宿室Ｄでは、庄吾が男子５名（先斗と匠以外）に囲まれていた。
「どういうことすかね？」
「告られたと」
「ほ～」
「いいご身分ですな」
「うらやましいねぇ」
五人は鬼の目で庄吾を睨んでいた。
「いやぁ…」
庄吾は真ん中で小さくなっている。
１８８センチの長身が嘘のようだ。
「そろそろ勘弁してやれよ」
イラついた声で五人を止めたのは匠。
何しろこの状態は一時間も続いていた。
いい加減うんざりしてきたのだろう。
「だってさぁ…」

「なあ」
「相手がいる匠はいいじゃないか」
「な！？」
拓也の言葉に一瞬戸惑った様子を見せる匠。
「先斗もな」
「おい！？」
先斗も驚き、言葉に詰まる。
「加奈子はちがうっての！ただの幼馴染だよ！」
「そうだ！唯も幼馴染でしかねえよ！」
しかしすぐに反論を始める二人。
「ならなんであんなに仲いいんだよ！？」
「そうだそうだ！あれは反則だ！」
いつの間にか鬼の目は先斗達のほうに及んでいる。
「…」
その隙に庄吾は部屋を抜け出した。

「美香」
「庄吾くん？」
「そっちも逃げて来たのか？」
「…うん」
ちょっと苦笑いしつつも美香は頷く。
「外行こうか」
「…うん！」
「ん」

庄吾が手を差し出す。
「…うん」
二人は手を繋ぐと、そっと部活棟から抜け出した。

76話　合宿！（7）　Night Panic 後

ふたりは部活棟を出て中庭へ向かった。
「みんな騒ぎすぎだよな…」
「うん。そういえば理穂ちゃんにも彼氏いたらしいよ」
「へ〜。みんな知らなかったんだな」
「え？庄吾くん知ってたの？」
「ああ。パート練習の雑談でな。龍也も知ってる」
「そうなんだ…。じゃあ龍也くんのも？」
「残念ながら聞けなかった」
「へぇ…」

さっきまでの雲はすっかり晴れていて、空には満天の星と真ん丸の月が浮かんでいる。
二人は芝生に座りながらしばらくたわいのない話を続けていたが、美香が何か思いついたような顔をした。
そしてすぐにその顔が青くなる。

「どうした？」
「今気づいたんだけど…」
「なに？」
「先生も部活棟にいるんだよね…」
「ああ」
「あんなに大騒ぎしてたら注意しに来るよね…」
「…ああ」
「いなくなってるってばれたらまずくない？」
「……やばいかも」

夜中に高校生男女二人が屋外で一緒にいる。

けしてほめられたことではないだろう。
むしろ咎められる。
校外なら下手したら警官に交番まで同行させられるレベルだ。
「…戻ろう」
「そうだね…」
ちょっと残念そうに言う庄吾に美香が応じた。

手を繋いで部活棟に戻る二人。階段の前で足を止める。
「じゃあ…また明日」
「ああ」
女子は二階、男子は一階。
ここで別れないといけない。
「じゃあな」
「うん…」
しかしなかなか足を進められない美香。
「どうしたんだ？」
「怖いの…」
見ると美香は少し震えている。
「…どうして？」
「これが夢だったらって思うと…怖くて」
「…ば～か」
「！？」
庄吾は美香の両頬をぎゅっと押した。
「なにするの！？」
顔を真っ赤にして庄吾を見つめる美香。
「この感触が嘘だって言うのか？…大丈夫だからさっさと戻ろうぜ。
みんな心配してるだろうから」
「…うん！」
返事を返すと、美香は階段を昇り始めた。
「おやすみ！」

「ああ。おやすみ」
美香の姿が見えなくなったところで、庄吾は部屋に戻っていった。

「やれやれ…やっと部屋に帰ったか」
「お疲れさん」
部活棟の職員用宿舎。
見回りから戻ってきた京を純也がねぎらう。
「三上はともかく坂根が抜け出すとはな」
純也が意外そうに言う。
「ああ。四月はあんなに内気だったのに」
「で、注意はするのか？」
教師としてはしておいたほうがいいかもしれない。

でも。
「…しないよ。二人は自分で気づいて戻ったみたいだしな」
「そうか。まあ顧問にお任せします」
「そりゃどうも」
「顧問も脱走経験者だしな。高２の合宿の時…」
「おいそれを持ち出すなよ！」
「はいはい」
合宿の夜はこうやって更けていった。

77話　いらっしゃい！　前

二学期が始まって１０日ほどたった9月1日（土）。
今日はオープンスクールの日だ。
参加者はなんと３００人。入学定員を大きく上回っている。
それには大きな理由があった。
こういっては悪いが、これまで桜田市にはちょうどいいレベルの学校がなかったのだ。
特に男子にとってはかなり厳しいものがあった。

桜田東は進学校だし、桜田女子は女子しか入れない。工業、農林は専門性があるし、商業も普通科はあるが男子には入りづらい。青南は総合学科でいろいろなことが学べるが校則が厳しいし、彩稜はそこそこ頭がいい先斗が落ちるほどレベルが高い。

なので、中央のレベルを見るために多くの生徒と親がオープンキャンパスに訪れていた。

「いよいよだね…」
「そうだな…」
午後2時半。
吹奏楽部室では部員達が中学生を待っていた。
見学希望者は唯が連れてくることになっている。
「全く来なかったらどうしよう…」
心配性の拓也が呟く。
「ちょっとぉ…。ネガティブにならないでよ。もっと不安になっちゃうじゃない」
「あ、ごめん…」

茜に文句を言われて頭をかきつつ謝る拓也。

「あ、唯戻ってきた！」

廊下を覗いていた弥生が声をあげた。

「みんな定位置戻って！」

ガラッ！

全員が席に戻った瞬間、ドアが開く。

「「こんにちは！」」

立ち上がり、一斉に挨拶する部員達。

「「こんにちは！」」

それに負けずに返す中学生。

「じゃあ適当に椅子にかけてください」

唯の指示で椅子にかける中学生たち。先斗が数えてみると、１８人もいた。

全員が座ったところで唯が挨拶を始める。

「えっと。中学生の皆さん。今日は吹奏楽部の見学に来てくださってありがとうございます。私達吹奏楽部は現在１６人で活動をしています。今日は演奏と楽器体験、パートごとでの交流会を予定しているので、分からないことがあったら積極的に聞いてください」

「「はい！」」

「じゃあ、早速楽器体験を行います。まず希望パートを取ります。経験者の人でも、自分のやっている楽器と別のものを希望して構いません」

希望を取ると、フルート1人、オーボエ1人、クラ3人、サックス2人、ペット2人、ホルン2人、ボーン2人、ユーフォ1人、チューバ1人、打楽器3人となった。

【フルート&オーボエ】
フルートとオーボエに来たのは1人ずつ。
幸いにも今回部活見学に来た中学生は全員経験者だったため、指導は特に必要ない。

「じゃあ自己紹介からしようか。フルート担当の坂根　美香です。フルートは高校からなんで、みんなに教えられることはなかなかないと思うけど、良かったらうちの部に来てください。じゃあ右の子から自己紹介よろしく」
「桜田三中の木山（きやま）　里奈（りな）です！先輩。集いの時はありがとうございました」
「え？…あ！あの時の？」
「はい！おかげさまで金賞取れました！」
「集いってことは…あ！あの時入ってきたのって先輩だったんすか！？」
オーボエ担当の男子が叫ぶ。
「え？」
「あ、佐倉中の浦田（うらた）　駿介（しゅんすけ）っす。先輩集いの時飛び込んできたでしょう？」
「あ！思い出した。楽譜渡してくれたよね？」
「はい！」
話が弾む3人。

「じゃあ後はピッコロ担当かぁ…」
美香が呟くと、
「あ、俺知ってますよ」
駿介が思い出したように言う。
「え？誰かいるの？」
「はい。今日は弓掛中が行事で来られないじゃないですか」

「そうなの？」
里奈が聞く。
「うん。体育祭らしいよ。それで弓掛に友達のピッコロ吹きがいるんですよ！」
「ほんと！？」
「はい！桜田中央に来るつもりだっていってました」
「よかった～。じゃあその子によろしく言っといてね」
「はい！」

【トランペット】
「お。マッツンじゃん」
「あ、庄吾さん。お久しぶりっす！」
今日は耕一もはるばる柳紅後島からオープンキャンパスに来ていた。
「それに舞も」
「どうも。三上先輩お久しぶりです」
舞も桜田一中だ。
「なんか私だけ疎外感？」
理穂がふてくされている。
「あ、悪い悪い。紹介するな。右が黒松　耕一。先斗の従弟で、俺も知ってる。左は若林（わかばやし）　舞（まい）。桜田一中の後輩」
「今井（いまい）　理穂（りほ）です。よろしくね」
「よろしくお願いします。ところで庄吾さん」
耕一がにやりと笑って庄吾の方を向く。
「あ、私も聞きたいことあったんです」
舞も同じように庄吾の方を向いた。
「え、なんだ？」
「「彼女のこと教えてください！」」
「へ？…誰から聞いたんだ！？」
「先斗から」

「唯先輩から」
「あいつら…」
「そうね。もっと詳しく聞きたいわ」
「り、理穂さ～ん？」
そして理穂が正面に立つ。
「合宿の晩、一時間も何やってたのかしら？」
「え～！？庄吾さん」
「聞きたい聞きたい！秀吾も聞きたがってましたよ！」
「さて。お話していただきましょうか？」
「だ、誰か助けてくれぇ～！！」
「どうした！？」
庄吾の叫びを聞いて駆けつけた龍也と中学生によってこの尋問は止められた。

「あれ？なんだったんですか？」
「…お前マイペース過ぎだわ」
状況をつかめていない桜田二中の後輩、羽山（はやま）　潤（じゅん）に呆れる龍也。
（鈍っ…）
梅ヶ崎一中の駒沢（こまざわ）　千秋（ちあき）も、口には出さないが同じように呆れている。
「ほら、楽器吹く時間なくなるぞ。吹いた吹いた」
「は～い」
中学生四人は素直に従って楽器を吹き始めた。

78話　いらっしゃい！　中

【チューバ】
「おっ。バッシー！久しぶり」
「先斗先輩。どうも」
チューバには桜田一中の後輩、大橋（おおばし）　貴弘（たかひろ）が訪れていた。
「もうすぐ引退だな」
「はい…。すみませんでした…」
「なにが？」
「あの…銀賞…」
うつむいて答える貴弘。
　貴弘は今年部長も務めていたため、責任を感じているのだろう。
「…気にすんなよ。俺らも今年銀賞だったんだ。来年、一緒に頑張ろうぜ」
「…はい！」
貴弘は顔を上げて答えた。
「よし。バッシーはそうじゃないとな」
「そうって？」
「明るくてちょっとバカでないとな。シリアスは似合わねえ」
「ひどいっすよ～」
「悪い悪い。報告演奏会いつだっけ？」
「今月の17日、二時半開演っす。今年はプラタナスホールを借りられたんでそこでやります」
「了解。見に行くからな。頑張れよ」
「はい！」
「さてと。じゃあ、お前の音久々に聞かせてもらうかな」
「よろしくお願いします！」
貴弘の顔に元気が戻ったのを見て、先斗は少し胸をなでおろした。

【音楽室】
「最後に二曲演奏したいと思います！」
４時。全員音楽室に戻ってきたところで唯が京を呼んで戻ってきた。

「一曲目は部員だけで、二曲目は中学生も一緒に演奏してもらいます」
「「はい！」」
「じゃあ聞いてください。『ＳＡＫＵＲＡ』」

文化祭でやったこの曲、１６人となったため少し楽譜に改訂があった。
Ｂ♭クラリネットはそのままだがトランペットに２ｎｄができ、パーカッションはドラム、グロッケンとウインドチャイムに加えて、タンバリンとビブラフォンが加わった。
庄吾のトランペットソロは音がさらに優しくなっていたし、優樹のグロッケンは澄んだ音になった。
さらに和志のビブラフォンが加わることで鍵盤独特の幻想的な音がプラスされ、響きが優しくなる。
そして大サビ直前。
ピアノソロを弾ききり、先斗は唯にソロを回す。
唯はその雰囲気を受け取って、堂々とソロを吹いた。。
大サビはさらにダイナミックになり、一気にエンディングに向かう。
最後に残るのはビブラフォン、フルート、ウインドチャイム、ドラム、ピアノのみ。
綺麗に和音を決めた。

パチパチパチパチ！！！！

大きな拍手が音楽室に響く。
文化祭から3ヶ月。
この曲は吹奏楽部のレベルアップを証明した演奏となった。
「ありがとうございました！じゃあ次は中学生も一緒に演奏しましょう！」
唯の声にそれぞれ空けておいた席に中学生が座った。
一列目にオーボエとフルート、二列目にクラリネットとアルサク、三列目にホルンとユーフォとテナサクとバリサク、木低の後にチューバ、そしてひな壇にトランペットとトロンボーンだ。

「なんか寂しいな…」
中学生が座っていた椅子を見て庄吾が呟く。
「そうだな…」
前に座る龍也も同意見のようだ。
観客なしで演奏するのもなんだか寂しい。

「そうだ！」
いきなり和志が手を打った。
「先生！他の部も部活見学してるんですよね？」
「え？あ、ああ。そろそろ終わる頃だな」
「じゃあ、その人たちに演奏聞いてもらいませんか？」
「あ、それいいかも」
「そうですね！」
みんな口々に賛同する。
「よし。じゃあちょっと内線で聞いてみるぞ」
そう言うと、京は音楽室の入り口の横にある内線でどこかに電話をかけ始めた。

五分後。

「弦楽部と合唱部、卓球部の部員と中学生が来てくれるそうだ」
京がうれしそうに伝える。
「分かりました！じゃあ、高校生は来る人たちの分の椅子を準備して。中学生はチューニングをしておいてください」
「「はい！！」」
それを聞いた唯の指示でみんなが動き始めた。

「唯先輩ってすごいな…」
貴弘が感心したように呟く。
「そうね。あんなに上手くみんなを統制できてる…」
近くにいた舞がそれに答えた。
「俺もあんなふうにできてたらな…」
ちょっと落ち込み始めた貴弘。

バシッ！

「いたっ！」
その背中をびしっと叩く舞。
「しっかりしなさいよ。まだ半月あるじゃない。それに…」
「それに？」
「崩壊しかけてた部をあそこまで立て直せたのはあんたのおかげでもあるんだから。もうちょっとしっかりしてよね。部長さん？」
部長のところにアクセントを置いて、舞は言い放った。
「…ああ！」
「じゃ、チューニングしよう！」
「了解！」
二人はチューナーを取り出すと、楽器に息を吹き込み始めた。

79話　いらっしゃい！　後

十分後。

部員が用意した椅子いっぱいに観客がいる中、演奏は始まろうとしていた。

観客のほうを向いて唯が話し始める。

「中学生、卓球部、合唱部、弦楽部の皆さん。急なことだけど集まっていただいてありがとうございます。今から中学生と部員で合同で一曲演奏します。一生懸命演奏するのでよろしくお願いします。曲はＭＯＮＧＯＬ８００で、小さな恋の歌です」

ＭＯＮＧＯＬ８００は、１９９８年に結成された沖縄県出身の男性三人組のロックバンドだ。今回演奏する『小さな恋の歌』のほかに、『あなたに』などが有名である。

席について客席を見る唯。

卓球部で友人の松田（まつだ）　亜理紗（ありさ）や、弦楽部の琴浦（ことうら）　健吾（けんご）の姿が見えた。

（お～い！）

軽く手を振る唯。

二人も振り返してくれた。

「唯ちゃん！」

奈津美が肩をつつく。

ふと前を見ると京が指揮棒を上げていた。

唯は慌てて楽器を構えて指揮を見つめる。

京は一つため息をつくと、そっと指揮棒を降ろした。

始めはホルンとサックスの落ち着いたメロディ。クラリネットが

ハーモニーを組んでそれを支える。
「おお～！」
おもわず小さく声をあげる健吾。
ここは低音もないため、実はメロディーと伴奏の音域が一緒なのだ。
でもアルサクの唯と、桜田三中の加藤（かとう）　葵（あおい）、ホルンの龍也と潤（じゅん）、千秋（ちあき）の五人が芯のある音で吹いているため、ぼやけずに健吾のところに聞こえてきた。
そのクラリネットとトランペットがメロディーに加わり、低音も入ってくる。
（楽しい！）
耕一は大人数で演奏することの楽しさを感じていた。
島でのアンサンブルも楽しかったが、大編成にはまた別の楽しさがある。
その顔を見て、庄吾と理穂、舞も笑顔を浮かべる。

Bメロに入り、メロディーがトロンボーンとユーフォに移る。
加奈子、桜田一中の良樹、海浜（うみはま）中の桂木（かつらぎ）　雪乃（ゆきの）、匠、桜田四中の神田（かんだ）　竜一（りゅういち）の五人のメロディー。
桜田四中の宇野（うの）　泰子（やすこ）がグロッケンで加わり、サビに移る。

トランペット、トロンボーン、クラリネット、サックスなどメロディー楽器が一緒にリズミカルなメロディーを吹く横で、ホルンやテナーサックスが裏メロを滑らかに奏でる。
さらに下では低音にドラムがリズムをコントロールしている。
なにしろこの曲、テンポが４分音符＝２１６なのだ。
低音とパーカスがなければあっという間に崩壊してしまうだろう。
あっという間にコーダに飛び、和音を重ねて曲は終わった。

ワァー！！！

拍手とともに観客席から歓声が飛んでくる。
京の指示で全員立ち上がる。
「ありがとうございました！これからも吹奏楽部をお願いします！」
唯が深々と礼をして挨拶をして、ミニ演奏会は終了した。

「ありがとうございました～！」
音楽室から中学生が出て行く。
「ふう…」
全員で見送った後、唯は部室に入ると息をついて椅子に座り込んだ。
「お疲れ」
「あ、先斗」
「どうした？」
「不思議だよね。なんだか一気に部室が広くなった気分…」
確かにさっきまであんなに中学生がいたのだ。でも今は１６人だけ。
「来年は狭くなるぞ？」
「うん。そうだよね。全員入ってくれたら…３４人か」
「大編成ぎりぎり出れるな」
「でも…」
「でも？」
「できたら４０人以上ほしいな…」
にっこり笑いながらそういう唯。
「ってことは２５人くらい入れないといけないぞ？」
「勧誘頑張ればいいじゃない。４月みたいに」
それを聞いて先斗は４月のことを思い出していた。

初めて部室に入った時。部員は3人だけだった。
アルトサックスとトランペットとチューバ兼ピアノ。
それでは吹奏楽としての演奏は成り立たない。
でもそれが１３人、そして今は１６人となったのだ。
一応活動もできている。

でも。
もっとたくさん活動したい。
もっと部を大きくしたい。
それには部員を増やさなくちゃいけない。
部を大きくするのは自分達の役目なのだ。

「唯」
「ん？」
「頑張ろうな」
「…うん」

その後も二人はしばらく椅子に座っていろいろと思案をめぐらせていた。

79話　いらっしゃい！　後（後書き）

遅くなりました。
すみません。

８０話　合同練習

９／２９（土）。
体育祭も無事に終わり、今日は桜田農林高校でチャリティーコンサートの合奏だ。
午前中にセクション練習を行い、午後からは合奏が入る。

９時４５分。
先斗達は桜田農林高校の前に集まっていた。
管楽器は京がワゴン車で持ってきてくれている。

「でか…」
弥生が思わず呟く。

桜田農林高校は農業高校のため、敷地内はいくつかの温室やビニールハウス、さらには水田まである。
ここで採れた収穫物は出荷したり、桜田商業高校の文化祭のバザーで販売されたりするらしい。

「じゃあ、音楽室に上がるぞ」
「「はい！」」
京についていく部員達。
音楽室は二階にあった。
「あれ？スリッパ脱ぐんだ」
和志が意外そうな声をあげる。
音楽室の前に下駄箱が置いてあったからだ。
上履きを脱ぎ、中に入る。
「あ～。なるほど」
桜田中央はフローリングだが、こちらの音楽室はカーペットが敷

いてあった。これならスリッパはいらないし、打楽器を運ぶとき床を傷つける心配もない。

「「こんにちは！」」

音楽室には既に桜田農林、桜田工業の生徒が揃っていた…ひとりを除いて。

「あれ？小早川は？」

同じ木低の慶大が首を傾げる。

「あ、あいつね、ち…」

隆利が答えようとした瞬間、

「遅れてすいませーん！」

ドタバタと音を立てながら和彦が飛び込んできた。

「またおまえは！今日は遅刻するなって言ったろうが！」

そして隆利に怒られている。

「すいません…」

「で？遅刻理由は？」

「バスに乗り遅れました」

「なんで？」

「電車に乗り遅れたからです」

「なんでだ？」

「駅に着くのが遅れたからです」

「だからなんでだ？」

「…寝坊しました」

「だから最初からそう言えといつも言ってるだろう！そうすれば一言で終わるだろ？」

「ねえ、ナツ。吉岡先輩怖くない？」

その横で茜が隆利の妹である奈津美に耳打ちする。

「そう？」

「でもすごい剣幕よ？」

「だってお兄ちゃん、家ではあんな風にお母さんに怒られているから。もしかしたら似てきたのかもね」
奈津美は半分笑って答えた。

十分後、お説教も終わり、隆利が全員に指示を出す。
「じゃあセクション練習を昼までやってください。場所は、フルセクが２－１、Ｂ♭クラとオーボエは２－２、サックスとバスクラ、バスーンは２－３、トランペットは２－４、ホルンは１－１、トロンボーンは１－２、ユーフォとチューバは１－３、パーカッションはここで。農林生はセクション場所まで誘導してあげること。では解散」
隆利の指示で部員達は移動を始めた。

【フルート＆ａｍｐ；ピッコロ】
「じゃあブルースカイやるよ」
「「はい！」」
真奈美の指示に全員が反応する。
音出し、チューニングを終えて四人は曲練習を始めることになった。
「じゃあまずＡの前まで」
「「はい！」」

「１，２」
タータータララララタータータータララララ…。
「はい、ＯＫ。付点４分音符の二つ目飛び出さないよう気をつけて。愛華はオクターブ上だから特に発音注意。フルートはＡ二つ前の刻みはｆｆからｍｐにがくっと落ちてからデクレッシェンドかけて。今はｆｆからゆっくりかけちゃってるから」
「「はい！」」
さすが経験が長いだけあって指示は的確。美香も安心して指示を

聞くことができる。

練習が続く。

「次、美香ちゃん」

今度は一人ずつ吹いて回す練習をしていた。真奈美が終わって次は美香の番だ。

「は、はい！」

慌てて楽器を構える美香。

「３、４」

タラタタッタター…。

なんとか吹き終わり、楽器をそっと降ろす。

「お疲れ様。まず、ＢとＣの最初の４小節、そしてその後では役割が変わってくるし場面も違うからそれをもう少し意識して」

まずは真奈美。

「はい」

「ｍｐのところは上手く吹けているからもう少し強奏部分を強くしてください。あと、１６分音符が転びます」

次に愛華。

「…転ぶってなんですか？」

美香が首をかしげる。

「あ、テンポより早くなることです」

「はい」

「デクレッシェンドが意識できててよかったと思います」

最後に南。

「はい」

「じゃあ次は南ちゃん」

「は、はい…」

そっと楽器を構えて吹き始める南。

少し音が震えている。まだ安定していないのだろうか？
とちりながらも最後まで何とか吹ききって南は楽器を降ろした。
「お疲れ様。連符はこれから練習していくとして、アタックにもうちょっと気を使ってみて。音は綺麗だから指がついていけば伸びると思うから」
「はい」
「えっと、美香ちゃんにも言ったけど１６分音符がちょっと転ぶんでもう少しゆっくりのテンポでメトロ練習をしておいてください」
「はい」
「えっと…。う～ん…」
「美香ちゃん。なんでもいいんだよ」
少し戸惑っている美香に声をかける真奈美。
「スラーのところで音が切れているのでもう少し意識してください」
「はい」
「そう。最初はそんな感じでいいからね」
「はい！」
真奈美が笑顔で褒めると美香は少しはにかんだ顔でそう答えた。
「じゃあ…愛華は音がないし別の場所にしようかな」
「え～！？真奈美先輩それはないですよ～」
明るいセクション練習の雰囲気に、美香は来年こんな風に練習ができたらいいなと考えていた。

コラムH　桜田中央高校

「こんにちは～！さて、とっても久しぶりな今回のコラムのテーマは桜田市ということで…」
「早速始めるのはいいんだが、ちょっと落ち着こうか」
「はいはい…」
唯を先斗がいさめる。
「ところでなんで桜田市なんだ？俺ら、一応十年以上住んでいるから問題ないだろう？」
「いや、…あの人が説明しとけって」
「あの人？」
「あの人よ。受験だから更新遅くするなんて言いつつ結局は勉強進まなくて、現実逃避で小説書いている…」
「ああ、Ａｓ…」
「先斗、それは言っちゃだめだよ。それより桜田市の紹介しなくちゃ」
「でも紹介するって言ったって、どの分野を話すんだよ」
「どうする？」
「どうするって…何も聞いてないのか？」
「うん。自由にやってくれだって」
「そうだなぁ。じゃ、オープンスクールも終わったけど俺達の高校、桜田中央高校について話そうか」
「オッケー」
「あ、これは読まなくても一応ストーリーに影響がないように心がけるって」
「え？」
「ああ、こっちの話」
そう言うと、唯はなにやら模造紙を取り出し、ホワイトボードに貼

り出した。

「なんだこれ？」
「学校の概要」
「唯が作ったのか？」
「いや、あの人」
「暇なんだな…」
「そうね。テスト期間中のはずなのにね」
「…いいのか？」
「いいんじゃない？利用できるものは最大限に使わないと」
「…そうだな」
「じゃあ先斗。貼るの手伝って」
「了解」

――――――

バスケ部
剣道部
柔道部
バトミントン部（２００８年～）
テニス部（２００８年～）
陸上部（２００８年～）

○文化部
吹奏楽部
合唱部
ＥＳＳ部
美術部
弦楽部
文芸部（２００８年～）
軽音部（２００８年～）
パソコン部（２００８年～）

☆校舎
○新校舎

◇一階
昇降口　職員室　校長室　一年教室　保健室Ａ　第一図書館　会議室Ａ１０１　会議室Ａ１０２　倉庫Ａ１１１　倉庫Ａ１１２　倉庫Ａ１１３　給湯室　用務員室　ミーティングルーム（ＥＳＳ部部室）
職員更衣室　渡り廊下北（部活棟へ）渡り廊下西（旧校舎一階へ）
　食堂　購買

◇二階
三年教室　調理室　裁縫室　第一音楽室　視聴覚室　第一音楽準備

室　第一理科室　第二理科室　第一美術室　パソコン実習室　パソコン準備室　数学準備室　理科準備室　第一美術準備室　学習室Ａ２２１　音楽実習室　渡り廊下西（旧校舎二階へ）

◇屋上

○旧校舎

◇一階

二年教室　学習室Ｂ１２１　第二職員室　国語準備室　保健室Ｂ倉庫Ｂ１１１　倉庫Ｂ１１２　倉庫Ｂ１１３　学習室Ｂ１２１　学習室Ｂ１２２　地歴公民教室　地歴公民準備室　渡り廊下東（新校舎一階へ）

◇二階

第二音楽室　楽器庫（吹奏楽部部室）　第二音楽準備室　第二美術室　第二美術準備室　学習室Ｂ２２１　学習室Ｂ２２２　倉庫Ｂ２１１　倉庫Ｂ２１２　渡り廊下東（新校舎二階へ）

◇三階

第二図書室　書庫　進路指導室　進路資料室　ＯＣ教室　学習室Ｂ３２１　学習室Ｂ３２２　倉庫Ｂ３１１

「来年度からクラス数増えるんだな」
「市町村合併の影響で編入してくる人もい多いらしいのよ。今後４年で、人口が３割増しになるって計算されているらしいわ。確か、梅ヶ崎町は住民投票で反対したんだっけ」
「そうそう。桜田市としては桜田空港がある梅ヶ崎町が欲しかったようだけどな」
「地理的には桜田中央高校はどの位置にあるの？」
「私鉄桜田中央駅から北に徒歩７分くらいだな」
「近いのかな」
「桜田農林は駅からチャリで１５分かかるらしいから近いんだろ。じゃあ次、校内な」
「うん。まず正門ね。桜の木が十数本植えてあって、春には桜が散って綺麗だよ」
「正門からまっすぐいくと東側、つまり右から新校舎、中庭、旧校舎と並んでるんだ。確かクラス掲示もあそこであったな」
「元々は私立校だったからスペースは結構広めにとってあるよ」
「駐輪場は新校舎の東側。俺達は電車だけどな」
「チャリで来ようと思えば何とか来れなくもないんだけどね。四十分かかるから…」
「まあ、電車のほうが朝、楽だしな…」
「その裏にはグラウンドと、体育館が２つあるよ」
「第一体育館の方が大きくて、二階には卓球場がある。昼休みにそこで弁当食ってるやつもいるな」
「卓球部が昼練してたりもするね」

「次、新校舎ね」
「一階の主な施設は昇降口、職員室、校長室、一年教室、保健室Ａ、第一図書館だな」
「図書館は昇降口入ってすぐにあるんだけど異様に広いよね」
「ああ。まず天井が吹き抜けになっていて、二階まで続いてる」

「後、壁の一面がガラス窓になってて明るくて、そこから中庭が見えるよ。美香ちゃんと茜ちゃんがよく読書してるよね」
「ああ。あの二人よく読むよな」
「だって図書委員会だもん」
「へ？まじ？」
「うん。美香ちゃんは副委員長だよ」
「そうなんだ…でも東は委員会やってないんだな」
「中学ではやってたらしいけど、高校では青春したいって言ってた」
「へ～…」
「まあ、それは置いといて、次2階ね。うちの学校は珍しく、二階に三年生教室があるんだよね」
「ああ。俺達はいつもそこで練習してる」
「渡り廊下渡ったらすぐだもんね」
「でも来年はパート数増えるだろうから3年会だけじゃ足りなさそうだな」
「そうなるといいな…」
「そうだな…」
「あ、そういえば新校舎には屋上があるよ」
「話変わるな…庄吾がよくそこで練習してるよ。音を遠くに飛ばす練習らしい」
「音が住宅地に飛んでかない？」
「山の方向いて吹いてるし、6時前には屋内に戻るから大丈夫だとさ」

「で、次に旧校舎だね」
「旧校舎は三階建て、でもまだクーラーがない…」
「え、来年あたし達あそこなんだよね…？」
「部活でも授業でも暑いのか…」
「大丈夫だぞ～」
「あれ、西村先生？」

京が汗をかきつつやってきた。
「さっきの職員会議で春休みに旧校舎は工事することになったから」
「あ、ありがとうございま～す」
「でもそのせいで春休みの前半は部室使えないからな～」
「「え～！？」」
「まあその時期はちょっと他の場所借りるから心配するな」
「あ、分かりました…」
「じゃ、会議の続きあるから。今日の午後の合奏はカーペンターやるからよろしく」
「は～い」

そういうと京は職員室に戻っていった。
「先斗どうしよう…」
「とりあえずそのことは後で考えるとして話し続けようか。肝試しで弥生が言ってたけど一階の倉庫Ｂ１１３は校長の亡霊がでると…」
「いやぁあああああ！」
「ま、まあその話もやめといて、二階行くか」
「そ、そうだね。二階にはあたし達吹奏楽部の部室があるんだよ」
「楽器庫と第二音楽室だな」
「授業に使うのは第一音楽室だけだから実質占有してるな」
「まあね。だから結構自由に使ってるよ」
「で、３階。書庫と進路指導室があるな」
「進路指導室前には大学案内がいっぱいあるよ」
「なんであるんだ？まだ俺ら一年なのに」
「さあね？もう考えろってことかな？そういえばもうすぐ文理選択よね」
「唯は文系か？」
「う～ん…まだ思いつかないや。先斗は理系？」
「俺もまだ思案中。まあ正式な決定は２学期の終わりだからもう少し考えよう」

「そうだね。あ、今日は合奏だった。早く行かなきゃ」
「そうだな。カーペンターズはチューバもＯｎｅ　Ｐｌａｙ（１人で吹く）があるからしっかり練習しておかないと…行くぞ！」
そういって走り出す先斗。
「あ、待ってよ！じゃ、桜田市案内の続きはまた今度ということで…」
「唯～！」
「あ、すぐ行く～！」
そういって二人は音楽室を出て行った。

81話　負けない！

午後1時半。
桜田農林高校の音楽室では合同演奏の合奏が行われていた。

「じゃあ始めようか」
「「よろしくお願いします！」」
桜田農林の顧問、青山（あおやま）　真理子（まりこ）先生が指揮台に立つ。
今回の演奏会では3人の顧問が交互に指揮を振ることになっており、『マーチ「ブルースカイ」』と『宝島』が篤、『アイヴァンホー』が真理子、『カーペンターズ・フォーエバー』が京の指揮となっている。
「じゃあ1楽章の初っ端、金管のファンファーレから。トランペットは壮厳に、でもベタ吹きにはしないで。ホルン、ユーフォは後から入るからとくにはっきり。チャイム誰？」
「はい」
海里が手を上げる。
「他のパートとテンポの感じ方が違うからずれないように」
「はい！」
「じゃあスネアが入るところまで」
「「はい！」」
指揮が上がり、そっと降ろされた。

バッパカバ、パパパ…。

トランペットがファンファーレにホルン、ユーフォの対旋律、チャイムの二拍子が加わる。
低音が厳かに入ってきて、ファンファーレが一瞬ホルンとトロンボーンに渡される。

しかしすぐにトランペットに戻り、ティンパニとスネアが入ってきたところで真理子が指揮を止めた。
「うん。直管はそんな感じ。ホルン、ユーフォはもっとはっきり吹かないとモゴモゴして分からない。チューバはもっと付点のリズム意識して。2拍目でずれる。チャイム。もっと大きくていいから自信持って叩いて」
様々な指示が飛ぶ。
曲の一番最初は曲の印象を決める大切な部分だ。
結局ここの部分の合奏は30分に渡って続いた。

「じゃあ二楽章。ユーフォソロのテストするよ。遠藤さん、黒田くんの順で」
「「はい！」」
ふたりの気合いの入った返事。
先斗には2人の目から火花が飛び散っているように見えた。
まず、英子から。最初のC（ツェー）の音から素直な音が流れ出す。
クラリネットとビブラフォンが伴奏を慎ましく吹き、それにうまく乗っかる英子。
最後のトランペットとのソリも油断なく吹ききった。

「はいOK。次、黒田くん」
「はい」
匠はそっとユーフォを構えると、指揮を見つめ、息を深く吸い込む。
真理子の指揮が降りた。

ヴィブラートの効いた美しい音色が楽器から出てくる。
息の吸い方も上手く、休符まで音楽として表現しているかのようだ。
加奈子は少しうっとりした様子でその音色を聴いていた。

トランペットとのソリもユーフォの柔らかな音を生かして丁寧に決める。

「OKよ。ふたりともかなり上手。でも両極なのよね…」

真理子が嬉しそうに、しかし困った顔で二人に告げる。

「両極？」

一番前にいた愛華が首を傾げる。

「表現がね、遠藤さんは素直な感じで、黒田くんはなんていうのかな、大人びているで正しいかな？あ、そう。大人の恋愛って感じ？」

「なんですかそれ」

猛が呆れたように笑う。

「思いつかないのよ。北澤先生、どう思います？」

「そうですね…。私は黒田くんの吹き方のほうが好みですが…」

「西村先生は？」

「自分も黒田の吹き方が好みですね」

「じゃあ一応黒田くんがソロを吹くことにしましょう。でも遠藤さんも練習しておいて」

「はい」

「はい…」

英子は肩を落としつつもそう答えた。

「じゃあ続き行こうか。オーボエソロのところ…」

（…）

（…）

その後も合奏は続いていったがその後、英子は落ち込んだままで音に覇気がなくなっていた。

「オーボエ！それじゃあヴィブラートじゃなくてビビラートよ！」

「は、はい～」

若葉は恐る恐る吹いている。

ゆったりとした感傷的なソロである上に、若葉のソロが二楽章の

盛り上がるところへ引っ張っていかないといけないのだ。緊張してしまうのも無理はない。

「青山先生。ちょっといいですか？」
「あ、はい」
篤が声をかける。
「尼崎さん、ちょっと肩の力抜いてごらん」
「え？」
「ソロだからと言って力む必要はないから。好きなように吹いてごらん」
「は、はい」
そう言われて若葉は深呼吸をするとそっと楽器を構えた。
「1、2」
（おー！）
思わず声を上げそうになる拓也。
なんと若葉の楽器から甘美な音色が出てきたからだ。
そのまま音楽が進み、二楽章の最も盛り上がる部分に差し掛かる。
トランペット、クラリネット、ユーフォ、サックスなどがメロディーを吹き、その下ではひかりがハイハットを3連符で刻む。
静かな雰囲気に戻り、木管の優しい音色とミュートトランペットの掛け合い。
「OK。若葉」
「は、はい！」
「その調子。もう少し安定して吹けるように練習しておいてね」
「はい！」
その後、三楽章の練習もして、大体いい時間になる。
「じゃあ今回はここまで。次回は『カーペンターズ・フォーエバー』と『マーチ「ブルースカイ」』やるからよろしく。じゃあ解散」
「「ありがとうございました」」　合奏が終わった。

「あの…遠藤先輩」
匠はうつむいている英子に恐る恐る声をかけた。
「なんか…すみま…」
「謝らないで。私が未熟なだけだったから」
言い終わる前に言葉を挟む英子。
「でも…」
「黒田くん」
英子が顔を上げる。その目には決意が見えた。
「は、はい？」
「抜いて見せるから」
「え？」
一瞬間が開く。
「ソロ、奪って見せるから」
「…負けませんよ？」
それを聞いてわざと少しおどけて笑ってみせる匠。
「じゃあ、次回ね」
「はい！」
二人はがっしりと握手を交わしたのだった。

82話　初めての…

１０月１４日（日）。

今日は珍しく部活が休みだ。

先週、中間試験も終了し、気分も軽い。

「お待たせ」

「気にすんなよ。俺も今来たとこだから」

桜田中央駅前の喫茶店。

ボックス席で座って待っていた庄吾は、入ってきた美香にそう返した。

「今日どこ行く？」

「買い物行きたいな…あ、カフェオレお願いします」

やってきた店員にそう告げると、美香は雑誌を取り出し庄吾に見せた。

「このお店、大きいサイズもあるから庄吾くんと一緒に行きたいなって思ってたの」

そう言って記事を見せる。

「中崎か。ちょっと遠いかな…」

中崎は桐ヶ丘の一つ手前の駅で、桜田女子高がある。

「だめかな？」

美香が顔を暗くする。

「いや、いいよ。行こう。そうだな、まだお昼前だし中崎で昼飯食べようぜ」

「うん！」

「カフェオレのお客様」

「あ、どうも。庄吾くんはなにか頼んだ？」

「モーニングセットCのお客様〜」
庄吾の前にスクランブルエッグ、ベーコン、パン、コーヒー、サラダが運ばれてくる。

「…まだ10時半だよ？」
店員が去ると、美香は呆れたように言う。
「朝飯まだだったからな」
ベーコンを食べながら返す庄吾。
「なんで？寝坊か何か？」
聞かれると庄吾は、
「き、気合い入れて身支度してたら時間なくなった…」
と言い顔を赤らめた。

確かに今日の庄吾はいろいろ気合いが入っている。
髪はワックスで整えているし、ストライプのシャツにジーンズも似合っている。

「あ、に、似合ってるよ」
「ありがとな。美香はどうしたんだ？なんか眠たそうだけど」
普段は紅茶派だと聞いていたので、カフェオレを飲んでいるのを珍しく思ってそう聞く。
「夕べ眠れなかったんだ」
「なんで？」
「…じ、人生初デートだから…」
（って何言ってんだろ…）
言ってから顔を赤らめる美香。

「そっか。おそろいじゃん？」
「え？」
「俺も人生初デート」

「そうなの！？」
「うん」
「なんかうれしいな…」
「…俺もだよ」
そういってにっこり笑ってみせる庄吾。あの晩と同じ笑顔だ。
「今日楽しもうぜ」
「うん！」
「じゃ、行こっか」
美香がカフェオレを飲み干したのを確かめて、庄吾は立ち上がる。
「あ、お会計いくらだろ…」
「いいよ。俺払うから」
「え、でも…」
「ま～いいからいいから」
「でも…」
「じゃあ」
渋る美香を止める庄吾。
「後でお茶ご馳走してもらうわ。それであいこだろ？」
「…うん。分かった」
美香はにっこり笑った。
二人は電車に乗ると、中崎に向かって出発した。

「あれ？」
「どうした？」
和志と優樹は中崎のゲーセンにいた。
久々の休みと言うことで遊び倒したかったのだ。
現時点で既に１０００円以上消費している。
「あれ見ろよ」
「庄吾に…坂根？」
和志の目には二人が歩いているのが見えた。楽しそうに話している。

「あの二人ってことは…」
「デート！？」
「ほほぅ…」
優樹の目が輝く。
「どうしますか？」
「尾行しますか？」
「そうしますか？」
「そうしましょうか」
そういって二人の後を、和志と優樹はついていった。

「ここだよ」
美香の案内でついた服屋。
幸い男性物と女性物両方取り扱っている店のため、和志たちも入っていける。

「これはどう？」
「あ、なんかおしゃれだな。サイズもいいし」
「ここいいでしょ？」
「ああ。美香はよく来るのか？」
「うん。地元から二駅だから」
「そっか。じゃあこれ買おうかな？」

「庄吾はシャツをご購入と…」
陰から二人を尾行する和志たち。
「なかなか似合ってんじゃん？あの二人」

「あれ？優樹？」
後ろから声がする。
「え？」

「あ…姉ちゃん」
なんと後ろに立っていたのは優樹の姉、里美だった。
「あんたこんなとこで何やってんの？和志くんまで」
「姉ちゃん、ちょっと静かに…ばれる」
「ん？なにが？」
「そ、それはぁ…」
里美は優樹たちが見つめていた先を見て、思いついたように軽く頷いた。
「そういうことか…ちょっといらっしゃい」
「え？でも…」
「いいから！」
「「は、はい！」」
優樹と和志は里美によって店外に連行された…。

「全く！あんたらはデリカシーってもんがないの！？」
「ご、ごめんなさい…」
さっきの店からすぐ近くのコーヒーショップ。
優樹と和志は里美のお説教を受けていた。
「女の子はね、デートの時知り合いには会いたくないもんなの！なのにあんたらは尾行なんてして！」
「申し訳ございません…」
すごい剣幕の里美に、ただただ謝るばかりの二人。
「はあ…全く…」
「あんた達も好きな人いるんでしょ？なら邪魔されたくない気持ち分かるわよね？」
「はい…」
「今度からは気をつけなさいよ」
「はい…」
「じゃ、話はこれでおしまい！」
里美はキャラメルマキアートを飲むと、

「でも確かにあの二人お似合いね」
と言った。
「…うん」
ちょうど今、二人は向かいのファミレスでお昼を取っている。
とても楽しそうだ。
「応援してあげなさいよ？」
「「はい」」
二人は頷いた。

「はぁ…」
その晩。優樹はベッドに寝転がりながら今日のことを思い出していた。
「…」
そして二人と、自分を重ね合わせる。
「あんな風になれたらな…」
そしてまたため息をつくのだった。

８３話　前日（前）～音出し、セクション練習～

１０月２７日（土）。

とうとう本番前日となってしまった。

今日は参加校全てのリハーサルが行われる。

桜田中央、桜田農林、桜田工業のメンバーは桜田芸術ホール前に集合していた。

桜田芸術ホールは市内で二番目に大きなホールで、中高の定期演奏会などでよく利用されている客席数９００席のホールだ。

合同バンドのリハーサルが最初のため、合同メンバーはステージ準備も行う。

ちなみに予定はこうなっている。

―――――――――――――――――――――

２７日（土）

０９：００　ステージ組み立て（桜田中央、桜田農林、桜田工業）

１０：００　合同バンド音出し開始（客席）

１１：００　合同バンドステージ練習開始

１２：３０　桜田商業音出し開始（楽屋）

１３：００　合同バンドステージ練習終了、片付け

１３：３０　合同バンド撤収、桜田商業ステージ練習開始
１５：００　桜田市女音出し開始（楽屋）
１５：３０　桜田商業ステージ練習終了、片付け
１６：００　桜田商業撤収、桜田市女ステージ練習開始
１７：００　桜田東音出し開始（楽屋）
１８：００　桜田市女ステージ練習終了、片付け
１８：３０　桜田市女撤収、桜田東ステージ練習開始
２０：３０　桜田東ステージ練習終了、片付け
２１：００　桜田東撤収

２８日（日）

１０：００　全団体集合、音出し（客席）
１１：００　合同演奏曲合奏
１２：００　昼食
１３：３０　開場
１４：００　開演

１４：１０　桜田市女演奏
１４：４０　ステージ入れ替え
１４：４５　桜田商業演奏
１５：１５　休憩（１５分）　ステージ入れ替え
１５：３０　合同バンド演奏
１６：００　ステージ入れ替え
１６：０５　桜田東演奏
１６：３５　合同演奏準備
１６：４５　合同演奏（行進曲「Ｋ点を超えて」）
１７：００　閉演
１７：３０　片付け、終了しだい解散
――――――――――――――――――――――――
と、かなりめまぐるしいものになっているため、時間の厳守が必要だ。
合同バンドのメンバーはステージを組み立ててすぐに音出しを始める。
トランペットのメンバー五人はステージの端でチューニングをしていた。
「ＯＫ。徹、だいぶ安定するようになったからもうちょい早く合わ

せられるようにしようね。じゃ、五人でチューニング」
「「はい！」」
「1，2」
パーン！
明るい音が響く。ピッチも完璧に合っている。
「OK！じゃあまず宝島のソリ吹いてみようか」
「はい！」
「そうだな…。よし、雛檀の上でやろうか。本番どおりにいくよ」
「はい！」
メトロノームを譜面台に置いて、五人は楽器を構える。
「1、2、3」
ステージから客席に向かって細かい音が飛んでいく。
徹も高いところはなかなか当たらないが、必死に指を動かしている。
「うーん…梢〜！」
吹き終わって少し考えていたなずなはいきなり客席の奥の方で吹いていた梢に向かって叫ぶ。
「なーにー？」
「今の飛んできた〜！？」
「少しぼやけてるー！ベル少し上げてみてー！」
「わかったー！」
「相田センパーイ！」
ステージ右手で吹いていた葉月がなずなに声をかける。
「なーにー！？」
「ボーンも入れてくださーい！」
「いいよー！　おいでー！」

「はーい！」

ステージにトロンボーンのメンバーが上がってきて、八人が並ぶ。

「1、2、3！」

オクターブ下でボーンが加わり、音が厚くなる。

細かい連符だが、ひたすらスライドのスピードを合わせる練習をしただけあり、ズレは少ない。

「だいたいいいけど，3連符焦りすぎないで」

「はい！」

「じゃあもう一度」

直管セクションはその後もしばらくそのフレーズを練習し続けた。

【サクソフォン】

慶太はエレキベースを構えてフレーズをさらっている。

今回慶太は『カーペンターズ・フォーエバー』と『宝島』でベースを担当するため、自前のベースを持ってきていた。

「バランスは合奏で確かめるから頼む」

「はい」

音合わせを済ませると慶太はベースをケースにしまい、バリサクを抱えてサックスセクションの位置に戻った。

「お帰り。もうすぐ全体チューニングだとさ」

「あ、はい」

隆利に言われて席に着く。

座席はこのようになっている。

＞ｉ１９１５―１４９＜

慶太は合奏に向けて苦手な部分をさらい始めた。

８４話　前日（後）～フラジオ～

「はい。合奏始めます！」
「「よろしくお願いします！」」

１０時４５分。ステージに３９人が着席したところで篤がステージに立つ。
「今日は二時間ちょっとしかステージが使えないから有効に使えるよう、集中してやってください。まず『宝島』」
「「はい！」」

慶太がベースを構えるのを確認して、篤はそっと瑞希のほうを向いて指揮を振る。
瑞希のアコゴが小気味良い音を立ててリズムを刻み始めた。
そして海里のシェーカー、和志のコンガに続いてひかりのドラムが入る。
この曲は打楽器のソリから始まるため、ここでテンポキープができないと後の演奏が全て崩れてしまう。
そして管楽器のメロディーが始まる。
本来はフュージョンのこの曲だが、サンバ調にアレンジされているため、乗りやすい。

「よし。じゃあアドリブソロ」
「はい！」
唯の一回目のソロが終わると、篤の指示で前に立つ修也。
話し合った結果、このソロの負担が大きいと言うことで、修也のソロはこれ一つで後の二つは唯ということになった。
しかしこのソロ、かなりの難易度だ。
フラジオ音域と言う高い音域を使用しており、アルトサックス奏

者が下手な時にはちょっと音域が高いソプラノサックス奏者が代わりに吹くこともある。
もちろん今回修也はアルトで吹く。
「Eから」
「はい」
木管の静かなメロディーのあと、アルトサックスの独奏状態となる。
ベース楽器とパーカッション以外では時おり金管が合いの手を入れるのみだ。
16分音符満載の楽譜でしかもアクセントが入ったり16分休符が混じっているため、かなり技術が必要だ。
しかし修也はそれを生き生きと吹き、フラジオ音域も楽器をしっかり鳴らしてはっきりと当ててくる。
「OK！上手く仕上がっているな。じゃあ次に進むぞ。パーカスソリとペットボーン！」
「「はい！」」
気合を入れて楽器を構える雛檀のペットとボーン。
パーカスソリを抜けて、直管ソリに入る。
そこで八人は立ち上がってソリを吹き始めた。

「よし。大体OKなんだが…」
「はい…」
「丁寧だがおとなしすぎるんだよな…。NSBの曲だしもっと派手にかましてほしい…いっそベルアップしてみるか」
「ベルアップですか？」
「ああ。見た目のインパクトも出るしな。ベルアップして派手に吹いてくれ」
「はい！」
「じゃあ、後でもう一回さらうから。時間がないから『マーチ「ブルースカイ」』」

「はい！」

その後も合奏は過ぎていき、一応全部通したところでそろそろ時間となる。

先斗が舞台袖を見ると、桜田商業の生徒が舞台裏からステージをのぞいているのが見えた。

「よし。じゃあクールダウンして片付け。早めに桜田商業さんに場所を譲ってくれ。打楽器は今回使いまわすから商業さんの打楽器奏者と打ち合わせして」

「はい」

「相田、号令」

「起立、礼」

「「ありがとうございました！」」

礼が終わって先斗はロートーンのロングトーンでクールダウンを済ませ、楽器ケースの置いてある客席へと向かう。

「先斗。久しぶり」

そしてその横では悠莉がチューバを出していた。

「お、悠莉。中大おめでとさん！」

「ありがと！」

桜田商業は今年、県大会を４位で突破し、中国大会へと進出した。

中国大会での結果は銀賞と芳しくはなかったが、県大会突破は部創立史上初のことらしく、部員全員大喜びらしい。

「チューバ、スプコンの後で増えたんだって？」

「うん！美晴～！」

少し向こうでチューバを磨いていた女子に悠莉が声をかける。

「な～に～？」

「これがあたしの中学の時のタメの先斗」

「これ言うなこれ。桜田中央の西掛　先斗です」

「あ、ど～も。商業の安斎（あんざい）　美晴（みはる）です」

なんだかのほほんとした女の子だが、先斗はそこは気にせず、ほ

かの事に気が向いていた。
「安斎？もしかして…二つ上にお姉さんいたりする？」
「いるよ～」
「悠莉。もしかして、安斎さんって安斎部長の妹さん？」
「うん。そうだよ。中学は京葉学園（けいようがくえん）の中等部に行ってたんだって」
「へぇ…」
京葉学園は桐ヶ丘市にある県内で数少ない付属小、付属中がある
エスカレーター式の私立高校だ。
「でもなんで高等部に進まなかったんだ？」
「私立校だからいろいろめんどくさくてね～。最初は弦楽部に入っ
たんだけど…。でもやっぱりわたし吹奏楽が好きだから。チューバ
が忘れられなくて結局転部したの」
「そうか。チューバはいつから？」
「中1からだよ」
「へ～」
「朝ちゃ～ん、安ちゃ～ん、音出ししょー！」
少し離れた所から呼ぶ声。
「あ、はーい！」
「誰？」
「ユーフォの松原先輩。天然だけどめちゃくちゃうまいの！」
美晴が教えてくれる。
「そうなんだ。じゃあまた明日な。俺も行かないと」
「わかった。じゃあね。合同演奏楽しみにしてるね」
「ああ、じゃあな」
先斗はチューバをしまうと、集合場所へと戻っていった。

８４話　前日（後）～フラジオ～（後書き）

ＮＳＢとはニュー・サウンズ・ブラス（ＮｅｗＳｏｕｎｄｓＢｒａｓｓ）の略です。
毎年ＣＤと楽譜が発売されていて、いろいろな団体がいろいろな機会に演奏しています。

85話　伝説のアイルランド

１０月２８日（日）。
今日は桜田市公立高校チャリティーコンサートの日だ。
会場３０分前なのに、会場前には長蛇の列が続いている。ざっと百人はいるだろう。

「うわっ…なんでこんなに人いるんだよ？去年きたときはここまではいなかったのに…」
庄吾が二階の控え室の窓から外を覗いて呟く。
「そりゃ、全国大会常連の桜田東に加えて中国大会初出場の桜田商業がいるんだ。人も増えるさ」
そして龍也が冷静に返す。
「高校生も多いね。あれ？あれ霧崎くんじゃない？」
弥生が指さした先には確かに翔吾が並んでいた。
「ああ、来るってメールきてた。そう言えば湯釜も中国大会金賞だってさ」
龍也がそれを見て答える。
「ホント？」
「ああ」
「ふえー。レベル高いんだ…」
奈津美が呟いてため息をつく。
「まあまだ一年目だしね。まずは桜央ブラスを知ってもらうのが大事…あれ？霧崎くん、彼女連れてない？」
部長として士気を上げようとしたように見えた唯だったが、言い終わる前に視線に移る翔吾の横の女子に気づき声を上げる。
「え？うそ！どこどこ！？」
女子達がそう言って大騒ぎする横で匠はある男子の姿を捉えていた。

（やっぱ、来てくれたか。…俺のソロ聴いといてくれよ）
匠は静かに演奏への熱意を燃え上がらせるのだった。

開場したホールには中高生中心に様々な年齢層の観客が入ってきていた。
「おわっ…すげえ数」
ステージ裏で打楽器の準備をしていた優樹が呟く。
「さてと。パーカッションはこれでいいか？」
純也がやってくる。
今日は純也も打楽器担当のスタッフとしてサポートに回るのだ。
「先生もいっそ副顧問になっちゃえばいいのに…」
「そうしたいんだけどな。副顧問に梶原先生いるし、弦楽部の顧問やってるからな…まあ来年改変あるから希望してみるさ」
「そろそろ開演です」
他のスタッフがやってくる。
「お、そろそろか。合同バンド、桜田東の生徒は客席に行ってくれ」
「はい！」
今日のプログラムはこのようになっている。

――――――

・君の瞳に恋してる～フルートとバンドのための～

☆島根県立桜田女子高等学校

・ピッコロマーチ

・くるみ割り人形ファンタジー

・タイタニックメドレー

・ホール・ニュー・ワールド

休憩（15分間）

☆桜田市三校合同バンド

・マーチ「ブルースカイ」

・宝島

・アイヴァンホー

・カーペンターズ・フォーエバー

☆島根県立桜田東高等学校

・コンサートマーチ「光と風の通り道」
・ラピュタ～キャッスル・イン・ザ・スカイ～
・Ｍｙ　Ｆａｖｏｒｉｔｅ　Ｔｈｉｎｇｓ
・情熱大陸

☆全体演奏
・Ｋ点を超えて

――――――――――――――――――――

演奏者席に座って待っているとブザーが鳴り、桜田東高校の相川（あいかわ）光幸（みつゆき）先生が舞台左手のマイクの前に立った。

「みなさん、こんにちは。桜田東高校吹奏楽部顧問の相川と申します。今年もこの演奏会を開催することができることを喜ばしく思っています。第４回目となる今年度は参加校が１校増え、６校の参加となります。高校生の演奏を最後までごゆっくりとご鑑賞ください。ではさっそくですが演奏に移らせていただきます。桜田商業高校吹奏楽部の演奏です」

既に生徒と顧問の須竹　貴仁先生はスタンバイしている。
ライトがぱっとついた瞬間、貴仁はそっと指揮を振り下ろした。

最初の和音はチューバが増えたことでスプリングコンサートよりもバランスのとれたものになっている。

テンポが上がってファンファーレの後に第一マーチが始まる。
安定感があるというのだろうか。低音とバスドラの表打ちと、トロンボーンとスネアの裏打ちがとても上手くかみ合っていて安心して聞いていられる。
第二マーチの中音楽器のメロディーもさらに艶やかになっているし、リズミカルな高音のメロディーはかわいらしい。
４月の演奏も上手かったのだが、今回は一皮むけたどころか、４皮も５皮もむけたような演奏に生まれ変わっているのだ。
先斗達はただただ息をのむばかりだ。

驚きの中で曲は終わり、『伝説のアイルランド』へと曲は移る。
『憧れの街』は少年の冒険の旅をイメージされた曲であるのに対し、『伝説のアイルランド』はアイルランドの古い伝説に登場する人物、場所、出来事をその民族音楽で描いた作品である。

ティンパニと銅鑼のクレッシェンドで一気に別の世界へと引き込まれていく。
力強い序奏に港を思い起こさせるチャイムが鳴り、鎖がジャランジャランと叩きつけられる。
ホルンの勇ましい音色とともにタムタムのソロへと移り、そして第一主題へと移った。
オーボエのソロの下で、なにやら涼しい音が鳴り響く（フィンガーシンバルという打楽器らしい）。
その音で観客達はさらに音楽に引き込まれる。

打楽器の音色は音楽を大きく左右するのだ。
打楽器が音楽のスパイスといわれる所以もここにある。

ソロの流れを引き継いで木管が入ってきて、メロディーラインは厚くなる。

流れるような旋律の中に所々はいる装飾音符。しかし音楽は崩れない。
二度目のオーボエソロが終わると、金管の勇ましいバッキングが入り、テンポは緩やかになる。
そこに出てきたのはコーラス。吹奏楽では声も楽器にしてしまうのだ。
その響きに乗ってフルートのソリが入る。
とても幻想的な部分で、聞き惚れてしまう。
またテンポが上がったところに出てきたのはアルサクソロ。
そのソロも美しく、唯達サックスセクションは全く同じ表情をしてソリストを見つめている。

だんだん音楽が激しくなっていく。
それは音楽が終わりに向かっているということでもある。
そしてコーダ。
冒頭のメロディーが再現されるが、ホルンの勇ましい音色の後には金管のフラッター奏法。
ティンパニソロが激しく流れ込み、金管の壮厳な音色で曲は壮大に終わった。

「ブラヴォー！」
スタンディングオーベーションをしている高校生。よく見ると商業のスプコンに来ていた男子生徒だ。
（またあいつだ…。でもどこだろう？あんな制服ここらへんじゃ見たことないし…）
彼のことが少し気になってはいたが次の曲が始まるため、先斗は視線をステージへと向け直した。

86話　舞台へ…

15時15分。
合同バンドのメンバーはチューニングを終えて、各セクションで最終確認に入っていた。

トランペットセクションでは主にスタンドプレイの確認を行っている。
「庄吾、Hの一小節前で立つの忘れないでよ？」
「大丈夫だよ…」
「リハで三回もミスったでしょうが！」
理穂に注意されているのは庄吾。他の3人は完璧なため、より間違いが目立っているのだ。

「庄吾たいへんだな…」
横で指を再確認しながら呟く徹。
「大丈夫よ、庄吾本番に強いから」
そう言うのはなずな。
さすが二年間庄吾を見てきただけあり、その言葉はしっかりしている。
「だからほっといたんですか？」
「ううん。さすがに成長してると思ったから言わなかったんだけど…言わないといけないかしらね。庄吾～！ちゃんとやりなさい！」
そういって駆け寄っていくなずな。
「うちで何回もやりましたよ！」
焦ってそう返す庄吾。
「正しいの覚えたの！？」
「ちゃんとメモってますよ！」
そういって譜面を見せる。

「ほんとに？見せなさい…ってあんた書き間違えてるじゃないの！」
「え？マジっすか！？」
素っ頓狂な声をあげる庄吾。
「ちょっと理穂ちゃん、色ペン持ってる？」
「はい。どうぞ」
ポケットから赤いペンを取り出す理穂。
「もう時間ないから赤ででっかく書いときなさい！ここは立つ！ここはベルアップ、ここは…」

焦っている3人をサックスセクションは半ば呆れて眺めている。
「…中島さん、三上君って副部長だよな…？」
「…一応。まあムードメーカーってところですかね。でもやることはちゃんとやるんで」
隆利が怪訝な顔で聞いてきたので説明する唯。
「そっか。ま、演奏頑張ろうや、部長さん」
「ですね」

そしてバスセクション。
「…」
「…」
ユーフォはいつものように静かだった。
「ここは私が四拍目の裏で、西掛くんは二拍目ね」
「はい」
その横でチューバの二人はブレスのタイミングを確認している。

演奏をしているとどうしても息がきついところが出てくる。
しかし何も考えずにブレスをとると、音と音の間が途切れて、プツっと切れた感じになってみっともない。
響きを残すように演奏して一瞬で吸う方法もあるが、ｆｆなどだといかんせん息が足りなくなる。

そのため、二人以上奏者がいる場合はカンニングブレスをとるのだ（詳しくは六十七話で）。
また、この方法ならテンポをとりやすい。
なのでマーチで特に有効だ。

「移動します」
京の指示で舞台裏に移動する。
ステージでは桜田女子高校の最後の曲、『ホール・ニュー・ワールド』が終わるところだった。
「少なくなったなぁ…」
ステージを見て京が呟く。
現在桜田女子の部員数は三学年で３２名。
桜田商業が４９名で桜田東は８１名。比べるとかなり少ない。
京が現役の頃は５０人近くいたので少なさが際立つ。
それでも演奏は繊細で丁寧で、編成の薄さを上手く生かしていた。

「１７、１８…」
いつものように数を数えて緊張を紛らわせる先斗と唯。
「２４、２５」
それに今日はサックスとバスのメンバーも加わっている。
「「２８、２９、３０！」」
「どうですか？」
「結構効果あるな。今度からやってみようかな」
隆利が笑って言う。
「じゃ、行きますか！」
「はい！」
ステージ転換がされている間に並ぶメンバー達。
「合同バンドさんお願いします！」
静かに入場する。本番も４回目。そろそろ入場にも慣れてきた。

一列目にフルートとオーボエ、二列目にクラリネット、三列目にサックスとバスーン、雛檀の下段にホルンとユーフォ、雛檀上段にトランペットとトロンボーン、そして雛檀左右にパーカッションとチューバが並ぶ。

ライトがつき、アナウンスが入る。

「三番目に演奏いたしますのは、小編成合同バンドです。このバンドは桜田市内の小編成の団体、桜田工業高校、桜田農林高校、そして今年度新設されました桜田中央高校による合同バンドとなっております。では、小編成合同バンドの演奏をお楽しみください。指揮者は一、二曲目が桜田工業高校、北澤　敦先生。三曲目が桜田農林高校、青山　真理子先生。そして四曲目が桜田中央高校、西村　京先生です」

篤は指揮台に立ち、軽くテンポの指示を出すと、一つ息をついて指揮を振り下ろした。

87話　マーチ『ブルースカイ』

第一音から輝かしい音が会場に飛んだ。
打楽器も和志のバスドラ、ゆかりのティンパニ、そして和志のシンバルが鮮やかな音を立てて響き、ライトにキラリと光る。
ファンファーレの直後に木管だけのパッセージが入るが安定している。
第一マーチ直前でクラリネットからペットとボーンへ刻みが受け渡され、それはホルンへと引き継がれた。
クラリネットとアルトサックスの旋律。
青空のようなさわやかな旋律に観客の耳がひきつけられる。
合同バンドでは木管の旋律の透明度を重視したため、その旋律がさらに引き立てられているのだ。
トロンボーンの和音と中低音の対旋律が入り、音が厚くなるが音の透明度は薄れない。
高音木管が入って第一マーチが終わった。

第二マーチは中低音の出番。
マーチの第二マーチは大抵低音のメロディーのため、普段伴奏の低音楽器は張り切りがちだ。
しかしあくまで冷静に、正確に演奏することが求められたため、音形を意識しつつはっきりした音で音を刻む。

そこからは各パートの腕の見せ所。
いくつもの旋律が絡み合いピッチも狂いやすいところだが、丁寧に旋律を奏でる。
このような輪唱のような表現を＜フーガ式ムジカ＞というらしい。
だんだんクレッシェンドがかかり、最高潮に達したところで木管の連符と共に第一マーチに戻った。

旋律は一緒だが、今度はホルンが別の旋律を力強く奏で、打楽器と低音のリズムも変わっているので全く別の印象が与えられる。
トゥッティの三つの八分音符をきっかけに、ひかりのスネアが鮮やかにロールを決め、瑞穂のタンバリンに受け渡した。

トリオ。
旋律は引き続きクラリネットとアルトサックスだが、伴奏は第一マーチと違ってホルン、チューバ、バスドラ、タンバリンのみ。
pが苦手な先斗も緊張はしているが、安定した音で伴奏を刻んでいる。
旋律は長い音符が多いため単調になってしまう恐れがあったが、上手くうたって表情豊かなメロディーに仕上げてきた。
そこに飛び込んできたのはミュートトランペットとシロフォンの軽やかなリズム。
さらにフルート、オーボエ、テナーサックス、ファゴット、ユーフォが対旋律を艶やかに奏で、裏打ちがホルンからトロンボーンに変わる。
加奈子は２ｎｄの譜面を吹きながら、龍也から教えてもらったことを思い返していた。

「裏打ちがうまく行かない？」
「うん…」
四回目の合同練習の翌日。
龍也に加奈子がそう相談した。
「裏って難しいもんな…ところで何で俺？匠いるじゃん」
「スコア見たら裏打ちやってるのあたしと龍也くんとひかりちゃんしかいなかったから…」
「なるほど。じゃ、こうやって見る？」

そういって匠はリズムを黒板に写し始めた。

>ｉ２３０７―１４９<

「これ、チューニングＢ♭で刻んでみて」

そう言ってメトロノームを１３２に合わせる龍也。

「うん」

パパパパパパパパ…

「ＯＫ。じゃあ次これ」

龍也はそう言ってさっきのリズムにアクセントを加える。

>ｉ２３０８―１４９<

パパ！パパ！パパ！パパ！…

これは少し戸惑うようで何回かやり直す。

「うんＯＫ。じゃあラスト。さっきのイメージを持ったままこれ吹いて」

そういって新たにリズムをホワイトボードに書いた。

>ｉ２３０９―１４９<

ンパンパンパンパ…

「あ、吹きやすい…」

ぽかんとしている加奈子に龍也が話し始める。

「裏打ちってな、裏ばっか意識しちゃうからずれるんだよ。だから八分音符で感じとけば大体あってくるわけ。そっからは練習あるの

みだけど」
「なるほど…」

裏打ちを終え、トロンボーン率いる中低音の旋律が力強く鳴る。
その後からサックスとホルンの１６分音符に急いでミュートを外してきたトランペットのパッセージ。
そこからはだんだん演奏が高揚していく。
トランペットのＢ♭でのファンファーレ（実はオーボエもこっそり加わっている）に低音の八分音符。
低音は音がだんだん下がっていくが演奏のヴォルテージは上がっていく。
ゆかりのティンパニがｆｐでロールをかけた。

高音木管とクラリネットはひたすらに三連符を刻み、トランペットとトロンボーン、オーボエのメロディーは力強く音を鳴らす。
サックスとホルンは対旋律。しかも和音で重ねているため、とても響く。
この曲は龍也がファーストなので上の音がバンバン出てくるが全く気にせずはっきりと当ててくる。
そしてグリッサンドでハイＢ♭を当てたところでトロンボーン、ユーフォと低音を除いた全パートがメロディーとなる。
つまりトロンボーンだけが対旋律を吹くのだ。
なんと人数比、２５対３。
しかしトロンボーンセクションはその音をしっかりと飛ばしてきた。

そしてフィナーレ。

クラッシュシンバルが鳴るたびに演奏のヴォルテージが上がっていく。
木管のトリルにホルンサックスのグリッサンド。
シロフォンに持ち替えた優樹と木管の連符が上がりきり、十六分音符のトゥッティで『マーチ「ブルースカイ」』は終わりを告げた。

88話　信頼

「ありがとうございます。一曲目は『マーチ「ブルースカイ」』でした」
拍手が静まるのを確かめて、茜がマイクを持って話し始める。
「みなさんこんにちは。小編成合同バンドです。例年は桜田工業高校、桜田農林高校での合同バンドで参加していますが今年は私達、桜田中央高校も参加させていただいています。司会は私、桜田中央高校の東　茜が努めさせていただきます。３９人と編成はそこまで大きくはありませんが、一生懸命演奏いたしますので最後までお楽しみください」
そこでまた拍手が入る。
「ありがとうございます。では続いて『宝島』を演奏します。この曲は日本のフュージョン音楽界を代表するポップ・インストゥルメンタル・バンド、Ｔ－ＳＱＵＡＲＥの代表曲で、吹奏楽ではサンバ調にアレンジされたものが演奏されています。パーカッションのノリノリのソリ、サックスのアドリブソロ、直管楽器のソリなど聞き所満載な曲です。では、お楽しみください」
茜が席に着き、慶太がベースを構えるのを確認して、篤はそっと瑞希のほうを向いて指揮を振る。

瑞希のアコゴが小気味良い音を立ててリズムを刻み始めた。
そして海里のシェーカー、ゆかりのサンバホイッスルに続いてひかりのドラムが入る。
木管の降下音と共に主題が始まった。
トランペットとサックス、クラリネットがメロディーを吹き、それにトロンボーンなどの中低音楽器
が合いの手を加える。
低音は慶太のエレキベースを音の芯として、しっかりとバンドを

支えた。
会場もテンションが上がって手拍子が入る。
タタッタッタッタタ！
キメのリズムで主題が終わると、木管のメロディーが流れる。
（あ～やばい…）
唯は手に汗をかいているのに気づいた。
会場はほぼ満員。
一曲目はトゥッティだからまだ大丈夫だったが、ここからはソロ。
短いと言ったってソロなのだ。
（え？）
ふと楽譜に目をやる。楽譜は大抵書き込みで真っ黒になっているのだが、そこに書いた覚えのない赤い文字が記されていた。
『ちゃんと繋げてくれよな』
そっと横を見ると、修也がそれに気づいていたずらっぽく笑った。
（…分かってるわよ！）
唯はそっと立ち上がる。スポットライトが唯に向く。緊張の一瞬だ。
しかし唯は堂々と、太い音でソロを吹き始める。
練習でも出なかったほどの音圧。フレーズの取り方も最高。
吹き終わって唯が礼をすると、たくさんの拍手が唯を包んだ。
そこから主題に戻って木管の静かな旋律に移る。この後は修也のアドリブソロだ。
ここは休みなので唯はそっと修也のほうを向く。
そして口パクで、
（あんたこそちゃんとやりなさいよ）
と言ってやった。
修也はただうなずくと、神妙な顔になって立ち上がり、グロッケ

ンの前を抜けてステージ左手へしっかりと立った。
最初の音から強烈な音質。
細かい音なのにはっきりと会場に飛んでいく。フラジオ音域もしっかり鳴らしているし、所々アドリブも嫌味にならない程度に入っている。
２ｎｄの伴奏で支えながら唯はその音色に舌を巻いた。
それを見て隆利はソロの割り振りがうまくいったことにほっとしていた。
どちらかというと技術的には修也が勝っている。しかし表現は唯が上手いのだ。

アドリブソロが終わるとパーカスソリ。
ここは楽譜を改変して、ソリを１６小節にし各楽器２小説ずつのアドリブソロを入れた。

始めに瑞希のアコゴ。心地よい涼しい音色が前に出されて綺麗だ。
お次はゆかりのサンバホイッスル。独特な音色に思わず耳を引かれる。
そして海里のシェーカー。シャカシャカという砂の音が響く。
続いて優樹のトライアングル。普段は静かな部分で目立つこの楽器だが、オープン奏法と響きを消して叩くキープクローズ奏法を駆使して複雑なリズムを刻む。
ひかりのドラム。力強い音に心強さまで感じられる。

ひかりは叩きながら和志のほうを見た。
（頼むわよ）
（もちろん）
アイコンタクトを交わすと和志はコンガの前に立つ。

ここからは合同バンドオリジナル。

コンガを力いっぱい叩く和志。本来は編成にないのだが、それを感じさせないくらい素晴らしいソロとなっている。
残る４小説。ソロはなんと慶太のエレキベース。
グリッサンドから始まり、細かくてどう弾いているのか分からないほどのリフを決め込んできた。

そしてトランペットとトロンボーンのソリ。
庄吾もさすがに今回は無事に立ち上がり、ベルアップしながら強烈にソリをかます。
その音は会場の一番後ろの席でついつい居眠りをしてしまっているおじさんを起こすほどだった。
派手にソリの終わりを告げると、主題に戻る。
ホルンのグリッサンドも華麗に、しかししっかりと当たっていた。
金管のグリッサンドと、木管の降下音が掛け合い、とうとう曲も終盤に向かう。
１小節ごとに木管、雛檀二段目、最上段とだんだん立ち上がる。

庄吾は少しだけハイＤを当てられるか不安だったが雛檀最上段から見える全員の姿を確認すると、ふっきれたようにベルアップをして、最後のハイＤを当てたのだった。

89話　アイヴァンホーとカーペンターズ

一曲目より大きな拍手が会場を包む。
篤はまずソリストだった唯、修也、慶太を立たせた。
礼をする3人。
拍手がさらに大きくなった。
篤は拍手が静まると、礼をして出て行く。
入れ替わりに真理子が入ってきた。
茜がマイクを持って立ち上がる。
「ありがとうございます。『宝島』でした。三曲目はみなさんを中世の世界にご案内したいと思います。三曲目は『アイヴァンホー』です。これはウェルター・スコットが著した同名の歴史小説をもとにB．アッペルモントが吹奏楽曲として作曲した吹奏楽オリジナル曲です。読んだことがあるかたもいらっしゃるのではないでしょうか」

そこで茜は物語を少し語り始める。
その間にセクション内でのパートの移動を行うためだ。
「物語の舞台は中世イングランド。国王リチャードは十字軍に参加して長らく国を留守にしており、その間、王の弟ジョンは玉座簒奪の企てにうつつを抜かし、貴族たちも王権を蔑ろにして正にやりたい放題。王国では反感が燃え盛っていました。そうした中十字軍から帰還したアイヴァンホー。国王の忠実な臣下として王弟一派の陰謀に立ち向かうとともに、ロクスリ姫を守り、世に蔓延る悪を倒すため今日も剣を振るいます…。その他にも語りたいことは数多くあるのですが物語の背景はこの程度に。長々と話すよりもまずは曲を聞いていただいて、興味が出てきたら本を読んでいただければと思います。それでは、お聞き頂きましょう。B．アッペルモント作曲、『アイヴァンホー』より、?．騎士道のおきて、?．忠義か愛か、

?．戦いとフィナーレ。指揮は桜田農林高校の青山　真理子先生です」

茜はここまでを全く詰まらず、しかもカンペもなしに言い通した。

さすが文学少女。知識は半端ない。

真理子は礼をして指揮台に上がると、そっと指揮を上げた。

そしてそっと降ろす。

バッパカバ、パパパ…。

トランペットのファンファーレ。壮厳な音色が会場に飛んでいく。

それにホルンとユーフォの対旋律と、二拍子のチャイム。

和志もなんとか二拍子の感じをつかめたようだ。

低音が厳かに入ってきて、ファンファーレが一瞬ホルンとトロンボーンに渡される。

トランペットに戻り、ティンパニとスネアが入ってきたところでイントロは終わった。

クラリネットの柔らかでゆったりとした旋律。

しかしすぐにスネアが入り、音楽は勇ましくなっていく。

トランペットのファンファーレでリタルダントがかかるとテンポが上がり、ホルンの音色と木管の柔らかな音色の対比で音楽の場面が変わる。

サックス、クラリネット、ホルンの勇ましいメロディに、低音とのスネアドラムの４分音符。

ここを表現すると、馬に乗って走っている部分だろうか。

この曲を演奏する前に全員で話のどんな部分か考えた結果、そういうことになった。

トランペットが加わってすぐにまた場面が変わりホルンとユーフ

ォ、フルートの滑らかな旋律の掛け合い。そこに響くのはテンプルブロックだ。
４月からずっとテンプルブロックの音色に惚れていたひかりは、とてもうれしそうにそのリズムを叩ききった。

音楽は激しくなっていく。激しいトロンボーンのメロディーにスネアのリズム。
頂点に達すると、一気に静まり、龍也のソロ。
それになずなのソロが重なる。
そして最後に加奈子のソロで一楽章は終わりを告げた。

一楽章が終わり、真理子は匠を見る。
匠は臆することなく指揮を見つめている。
それをみて真理子は安心して指揮棒を降ろした。
最初からヴィブラートの効いた美しい音色が楽器から出てくる。
息の吸い方も上手く、休符まで音楽として表現しているかのようだ。加奈子は後ろで少しうっとりした様子でその音色を聴いていた。
なずなとのソリもユーフォの柔らかな音を生かして丁寧に決める。

そこで拍手が入る。演奏中に拍手が入るのはポップスではよくあることだが、吹奏楽オリジナル曲では稀なことだ。匠は顔を少しほころばせて、そっとトゥッティの音を吹き始めた。
２楽章のタイトルは『忠義か愛か』。
場面としてはアイヴァンホーが騎士としての役目とロクスリ姫とのロマンスの間でゆれているんじゃないかという女子からの意見が採用された。
そして若葉のソロ。
ほかにはクラリネットの沙里華、ホルンの由美子、そしてファゴットの猛のみが伴奏を担当している。
若葉は緊張してはいたが、柔らかで艶やかな音を精一杯表現しき

った。
そして和志のクラッシュシンバルと共に、二楽章最も盛り上がる部分へ突入する。
トランペット、クラリネット、アルトサックスなどがメロディーを吹き、ひかりがハイハットを3連符で刻む、そしてボーンやユーフォ、テナーサックス、ファゴットは対旋律を感情の全てを込めて吹く。
ここの部分が苦手といっていた奈津美も横で兄が吹いていることもあって安心して吹けている。
静かな雰囲気に戻り、木管の優しい音色とミュートトランペットの掛け合い。
バリトンサックスは楽器の最低音に近い音だが潰さないでしっかり、しかし優しく支えている。
テナーサックスのソリとクラリネットのアルペジオで二楽章は終わりを告げた。

そして三楽章。
アーフタクトからゆかりのティンパニが重量感のある音で他の打楽器を先導する。
和志のクラッシュシンバル、海里のバスドラもそれについて音を奏でる。
クラリネットの伴奏も暗く、なにかの前兆を告げているかのようだ。
そう。ここは戦いの部分だ。
ホルンの激しいメロディー。二楽章とは全く違う音色。
この曲は三楽章全てで違う雰囲気を求められるので難しいのだが、ホルンセクションはそれをしっかりと表現しきってきていた。
ミュートトランペットが鋭い音色で音を飛ばす。
その合間に入るのは優樹のシロフォンだ。フルートもその勢いに負けず同じ刻みを吹く。

頂点に達すると急激に音量が落ち、また不安定な部分となる。
そしてまただんだんとクレッシェンドがかかり、一楽章の冒頭が転調して再現される。
そろそろ金管は唇がばててくるはずだがどの楽器も精一杯吹ききる。

フィナーレに近づいていく。
だんだん音楽が明るくなっていき、アラルガンドがかかる。
そしてフィナーレ。
金管が煌びやかな音を吹く下で支えるティンパニと低音。
海里の銅鑼、ホルンのグリッサンド。
ラストの音を吹ききった。

パチパチパチパチパチパチ！！！

いままでの三曲の中で一番大きな拍手が響く。
「ありがとうございました！では最後の曲です！『カーペンターズ・フォーエバー』、お聞きください！」
真理子の声に、いつの間にか指揮台に立っていた京が指揮を振り下ろす。

クラリネット、フルート、アルトサックスが細かい連符を吹きながらステージに並ぶ。
始めの曲は『シング』。
全パート立ち上がってベルを左右に振りながら演奏する。
音が安定しないように思われるが、しっかりと楽器を口に固定していれば大丈夫だ。
そしてテンポが落ちると木管は席に戻り、唯一人だけが残る。
唯のソロだ。

『愛のプレリュード』はミドルテンポの曲で、最初はアルトサックスのソロで始まる。
唯の得意な分野のため、堂々としっかり吹ききる。
曲はクレッシェンドで盛り上がり、木管のメロディーとトランペットのバッキング。
メロディーがトロンボーンに移ってまた唯がソロを吹き、ホルン、木管と同じ旋律が回る。

そしてひかりのドラムのバスドラとともに『トップ・オブ・ザ・ワールド』が始まった。
前奏はなんとエレキギター。
吹奏楽ではエレキベースだけではなく、エレキギターまで編成に入っている曲があるのだ。
この部分は徹が雛檀を降りて弾く。幸いここからサビまでは音はない。
素朴ながら存在感のあるソロを決めた。
徹が戻ったところでサビ。
トランペット、サックスなどのメロディの裏ではホルンが勇ましい対旋律を吹く。
さすが対旋律の神様とでも言ったものだろうか。
オーボエソロを抜けて、『遥かなる影』。
トランペットのソリのため、立奏だ。
タイミングがずれやすいソリだが、上手く吹ききった。
『スーパースター』に入りトロンボーンのソロ。担当は祐子。
スライドを上手く使って、ビブラートの利いた渋いソロを聞かせてくれる。

金管がメロディーを吹いた後一度静まり、テンポが上がったところで今度はひかりのドラムソロだ。
ハイハットを16分音符で刻み、タムを力いっぱい叩く。

ひかりはステージのライトに大汗をかきながらも思いっきり演奏した。
クラリネットのさわやかな旋律とともにホルンが『シング』を思わせるパッセージを吹く。
最後の曲、『二人の誓い』だ。
サックスとホルンのメロディーと金管のバッキング。
木管とシロフォンのスケールと共にペットとボーンがメロディーに加わり、裏で木管が細かい動きを吹く。
ひかりのタムを合図に庄吾が立ち上がり、ハイトーンのソロを吹き上げる。もうためらいはなかった。
最後のハイCも決めて、また『シング』が再現される。
そして全員のロングトーンの後、特徴的なリズムで曲は終わった。
「ブラヴォー！！」
割れんばかりの拍手と共にその声が飛んでくる。
（あ…）
その声を聴いた瞬間、庄吾の目から涙がこぼれた。
京の指示で立ち上がり、全員で礼をする。
ステージが暗くなった。

「庄吾、よくやった！」
通路から退場した後、龍也が庄吾と肩を組んでそう言った。
「…センキュ！」
「すごかったよ！あれ？庄吾くん目赤いよ？」
駆け寄ってきた美香がふと庄吾の顔を覗き込んで首をかしげる。
「え、あ、え～と…」
「お～い、急がないと桜田東聴けないぞ？」
助け舟のように後ろから先斗が声をかける。
「あ、本当だ！急がなきゃ」
美香たちは楽器置き場へと走り始めた。

「庄吾、お疲れ」
先斗は分かっているようにただそう告げる。
「…ああ」
そう返す庄吾の顔には涙と笑顔、両方が浮かんでいた。

９０話　豪快な響き

桜田東高校は圧巻だった。
先週の全国大会で銀賞を受賞したこのバンド、桁が違いすぎる。
『光と風の通り道』、『ラピュタ～キャッスル・イン・ザ・スカイ～』は全国大会で演奏したため、迫力が桁違いなのは分かる。
しかし残りの『Ｍｙ　Ｆａｖｏｒｉｔｅ　Ｔｈｉｎｇｓ』、『オーメンズ・オブ・ラブ』は一週間で仕上げてきたのだ。
なのにこの仕上がり。
先斗達は格の違いに驚かされた。

しかし呆然としている暇はない。最後に合同演奏が残っているからだ。
桜田東の演奏が終わってすぐ、参加者達はすぐに楽器のセッティングをしてステージに上がった。

合同演奏の編成はこうなっている。

☆ピッコロ２人
☆フルート１１人
☆オーボエ７人
☆ファゴット５人
☆Ｅ♭クラリネット３人
☆Ｂ♭クラリネット３３人
☆アルトクラリネット２人
☆バスクラリネット５人
☆アルトサックス１１人
☆テナーサックス７人

☆バリトンサックス４人
☆トランペット２４人
☆ホルン１７人
☆トロンボーン１９人
☆ユーフォニウム１１人
☆チューバ９人
☆コントラバス６人
☆パーカッション２５人

――

と、かなり大きな編成だ。
特にパーカッションは打楽器の割り振りができないため、楽器を増やして演奏する。

ステージも会場も満杯。
チューバは桜田商業２人、桜田女子１人、合同バンド２人、桜田東はなんと４人だ。
セッティングが終わるとアナウンスが入る。
「最後に合同演奏を行います。演奏曲目は、１９９９年度全日本吹奏楽コンクール課題曲より、『Ｋ点を越えて』。指揮は桜田東高校、相川（あいかわ）　光幸（みつゆき）先生です」
光幸が指揮台に上がる。
一瞬の緊張。
さっと指揮が振り下ろされた。

トランペットの爽やかなファンファーレ。中低音のリズムで第一マーチが始まる。
クラリネットとアルトサックス合計４４人の太い旋律が流れ始めた。
さらに低音は２９人、バスドラは４人。裏打ちのトロンボーンは１９人、スネアは６人。

なんとも豪快な演奏だ。
縦があわせにくいがとにかく指揮を凝視して演奏する。
トリオに入り、クラリネットのメロディーにミュートトランペットとフルートとシロフォンのバッキング。
途中からトランペットがメロディーに加わり、ホルンとサックスの対旋律も入る。
吹きながら先斗は中学の入学式のことを思い出していた。

入学式の入場曲も『K点を越えて』だった。
桜田第一中学校は5クラスあり先斗はC組だったため、入場は真ん中の辺り。
入場が大方終わった頃、ちょうどこの辺に差し掛かっていたのを覚えている。
そして全員の入場が終わり、指揮者が演奏を止めた瞬間。

ポヘッ！

その情けない音を出したのはトランペットの先輩だった。
顧問が先輩を思いっきり睨んでいたことを思い出し、つい笑い出しそうになってしまう。

そしてリタルダントがかかり、一番盛り上がる部分に差し掛かる。
トロンボーンの、スライドをフル活用した対旋律。
爽やかな旋律とともにだんだんと高揚していく。
トランペットの細かいパッセージ。
トゥッティのリズムで曲は幕を閉じた。

「お疲れ様でした〜！」
片付け終了後、トランペットのメンバーは自販機の前で各々ジュースを買い、乾杯をしていた。
「庄吾、よくやったね！」
なずなは笑顔だ。
「ありがとうございます！」
庄吾ははにかんでいる。
「でも合同バンド、これで解散かぁ…」
春香がぼそっと呟く。
「また一緒に演奏したいね」
理穂もそれに賛同する。
「来年どうなるかによるわね。中央はたぶん大編成になるでしょ？」
「そんな話にはなってます。オープンスクールでかなりの人数が来てくれたんで」
「なら来年は単独でしょうね…引退のばしてもらおうかしら」
「姐御は引退してからどうするんですか？」
「その呼び方懐かしいわね」
庄吾の呼びかけにくすりと笑うなずな。
「わたしは大学行くわよ。成績はキープしているから推薦狙い」
「へぇ…」
「庄吾こそどうするの？もうすぐ普通高校は文理選択よね」
「俺は文系です」
「あんた社会好きだもんね」
「はい」
「理穂ちゃんは？」
「私も文系です。看護系行きたいんで」
「そう。頑張ってね」
「で、なんでこんな話になってるんですか？」
徹が不満げに聞く。
「あ、ごめんごめん。そういえば徹もここ二ヶ月でだいぶ当たるよ

うになったわよね」
「マジっすか！？」
「うん。音域広がったわよね。コンクールの時は1オクターブちょっとが限界だったのにいまは2オクターブ出せるようになったし」
「そういえば『宝島』、本番ではA♭（ラ♭）当たってたね」
となりで吹いていた春香が思い出したように言う。
「そうね。でも」
そこで言葉を止め、なずながいたずらっぽい目をする。
「で、でも？」
それを見て徹は顔をこわばらせる。
「音程も安定してないし、音もまだ細い。明日から基礎練しごくから覚悟しといてね」
「え～！？」

（あれ？）
その光景をぼんやりと眺めていた理穂は軽く目をしばたかせた。
一瞬、庄吾以外の3人が別の顔に見えたからだ。
そのうち二人は耕一と舞、もう一人は知らない女の子だった。

「理穂ちゃ～ん！」
なずなの声にはっと顔を上げる。
「打ち上げ行こう！」
いつの間に話がまとまったのだろうか。四人は少し先で立ち止まっていた。
「あ、は～い！」
（誰だったのかな？）
理穂は少し考えたが思い出せなかったので、そのまま四人を追いかけた。

９０話　豪快な響き（後書き）

終わり方微妙ですが、これでチャリティーコンサート編終了です。
文章力のない作者をお許しください（笑）

９１話　新たな挑戦

１０月３０日（火）。

今日はミーティングの日だ。

「唯。西村先生なんの話って言ってた？」

音楽室に戻ってきた唯に訪ねる先斗。

「あ、それがね…」

唯が言いかけた瞬間。

ガラガラっ！

「ミーティング始めるぞ？。部長、挨拶」

京が紙袋を抱えて入ってきた。

（なんかデジャブ…ま、いいか）

「起立、気をつけ、礼」

「「お願いします！」」

京が話し始める。

「合同演奏会お疲れ様でした。収益金は１５８，４５３円で、例年より多く集まりました！」

パチパチパチパチ！

拍手が鳴る。

「で、今週各校の代表が一緒に銀行に持って行きます。だから中島は金曜日公欠。後で届け渡すから書いて持ってきてくれ」

「はい」

「あ、新聞社の人が来るらしいから覚えておいてくれ」

「は…ええ！？新聞に載るんですか！？」

テンパり出す唯。

「落ち着け！まあ、地方面に載るだけだろうから。そう力まなくていいから」
「はい」
「これが一つ目の話な。次に二つ目。１２月１６日に桜田市定期演奏会がある」
「定期演奏会？」
弥生が首をかしげる。
「西掛たちは知ってるな？」
「はい」

桜田市定期演奏会は毎年7月、１２月、２月に行われている演奏会だ。
７月はコンクールシーズンだからほとんどの団体がコンクール曲を演奏するが、１２月、２月はポップスを演奏したり、合同バンドを組んで出たりするなど少しコンセプトの違った演奏会になっている。

「で、もしかして…」
「予想できていると思うが、それに出演します」
「「はい！」」
さすがに何回も本番を繰り返してきたことはある。今回は誰も動揺せずに前向きに返事を返した。

「なんていう曲をやるんですか？」
加奈子が待ちきれないように聞く。
「『バンドのための民話』という曲だ」
そう言って楽譜を配る京。
「この曲なら今の編成でもぎりぎりいけるだろう。パーカッションは主にティンパニ、スネア、タンバリン、クラッシュシンバル、トライアングルで組んでくれ。低音いるからちょっと今回バスドラは

省く」
「はい」
ひかりが返事を返す。
「ＣＤがまだ届いてないから届き次第音源は聞いてもらう。期末前までにある程度形が作れるようにしたいからさらっておいてくれ」
「「はい！」」

「これが二つ目」
「え？まだあるんですか？」
龍也が驚いたように言う。
「ああ、後二つある。三つ目。これが一番重要かな。１２月２３日にアンサンブルコンテストの県大会がある」
「まさか…」
唯はワクワクしながら話の続きを待つ。
その顔は期待に満ち溢れていた。
「そのまさかだ。アンサンブルコンテストに出場します！」
「「やった～！」」
サックス３人が歓喜の声をあげる。
「お？サックス。アンサンブルそんなに楽しみだったのか？」
「はい！サックスアンサンブルやりたかったんです！」
「…申し訳ないんだが」
サックスセクションのメンバーのうれしそうな声とは裏腹に本当にすまなそうな表情をする京。
「え？」
「今年はこっちで編成を決めてしまったんだ」
「え～！？なんでですか！？」
奈津美が頬を膨らませて怒り出す。
「それがな…」
京の話によると、今年度から学校ごとにコンテストに出れる団体

数が制限されるのだと言う。
「で、次の大会につながるAの部と県大会のみのBの部があってな。Bの部は3団体、Aの部は2団体しか出れないんだ。少しでも多く出したくていろいろ楽譜を探してみたんだが難易度の問題もあってな…。すまん、来年は自由に編成を組んでもらって、それからオーディション等で出る団体を決めるようにするから今年はちょっと我慢してくれ…」
「はい…」
「すまんな…じゃあアンサンブルのメンバーを発表するぞ。今年は打楽器三重奏と管打八重奏を組んだ。打楽器アンサンブルが田中、竹原、渡部の3人。管打八重奏が、フルートが坂根、アルトサックスが中島、ホルンが田中、トロンボーンが倉橋、チューバが西掛。で、B♭クラとトランペットは迷ったんだが…今回はB♭クラが田中、トランペットは三上で頼む」
「「はい！」」
「あれ？先生管打って言いましたよね…？」
加奈子が首をかしげる。
「ああ、それなんだが黒田」
「…はい？」
「確か中学時代にトロンボーンとユーフォに加えて、パーカッションも持ち替えをしていたと言ってたな」
「はい」
「悪いんだが、今回だけパーカッションに回ってもらえないか？」
「パーカッションですか…」
「嫌か？」
「…いえ。やらせてもらいます」
「悪いな。じゃあアンコンメンバーは部室でリーダー決めをしてくれ」
「「はい！」」

「で、私達はどうするんですか？」
１１人が音楽室から出て行くと、弥生が京に聞いた。
「五人にも組んでもらいたかったんがな…編成が編成で…」
Ｂ♭クラリネット２、テナーサックス１、バリトンサックス１、トランペット１。
もちろんこんな編成でアンサンブルを組むのは不可能だ。
一応金管五重奏をいじってみることも考えたが、やはり中低音が奈津美のテナーだけでは少し組みづらい。
「だから５人にはソロやデュエットの練習をしてもらおうかと思っている」
「ソロ！？」
「デュエット！？」
それぞれ驚いた顔をする五人。
「アンコンの数日前に校内発表ってことで部内で演奏会をしようと思うんだ。そのとき、なんでもいいから好きな曲を一曲演奏してほしい」
「なんか楽しそうかも」
「そうだね。目標あったほうが練習楽しいし」
「…」
楽しそうに話す女子達の横で、慶太は少し不安そうな顔をしていた。
「進藤？どうした」
「バリサクでソロって可能なんですかね…」
「もちろん可能だぞ。高校時代に校内ソロコンをやったときなんかバリサクでアルトの譜面をオクターブ下げて吹いていたやつがいてな。斬新で面白かったよ」
「へえ！そんなの可能なんですね」
「ああ。曲が思いつかないなら中島に相談してみるといい。別にアルトに持ち替えてもいいぞ」
「え？」

「サックスは運指が一緒だからな。アルトとバリトンは調も同じだし。おとといの演奏会だって吉岡のお兄さんがソプラノを吹いていただろう？」

吹奏楽でよく使われるサックスのうち、ソプラノサックスとテナーサックスはB♭（シ♭）管、アルトサックスとバリトンサックスはE♭（ミ♭）管だ。

運指もアルトとバリトンで比較すると、ローC（バリトンサックスで出せる一番下のドの音）を出すための運指があるだけで後は一緒だ。

「分かりました！俺やります！」

「よし。じゃあとりあえず曲を決めておいてくれ。部室の楽譜の棚の鍵を渡しておくから」

そう言って京は鍵を慶太に渡し、音楽室を出て行った。

92話　ザ・投票

「で、誰がリーダーやる？」
音楽室から一番近い２－Ｄで管打８重奏のメンバーは話し合いをしていた。
曲目は『夢への冒険』。

この曲は大阪市立三国中学校の委託により２００６年に福島弘和さんが作曲した曲だ。
曲想はまるでディズニー。
前半はヒロインが表情豊かに「夢の歌」を歌う場面、後半は元気よく「冒険に旅立つ」場面など色々な場面がある。
所々で各楽器の目立ちどころがある、混成アンサンブルらしい曲だ。
さらにこの曲を編曲した吹奏楽バージョンもあり、中学校を中心によく演奏されている。

「唯でよくないか？」
「え～…」
先斗が推薦するが唯は拒否。
「じゃあどうやって決める？」
「投票とかどう？」
譜面を見ていた拓也が提案する。
「いいね。そうしよっか」
美香も賛成した。

「じゃあ紙配るね～」
唯が裏紙を八つ切りにしたものを配る。

「無記名投票で、推薦する人を一人上げてね」
「はいはい」
全員それぞれ考えて唯の元に持っていく。
「はい。じゃあ早速開票しま～す」
さっそく一枚目を開く唯。

「先斗一票」
「え？俺！？」
先斗の声も気にせず黒板に書いていく唯。
「あたし一票…」
しかし二枚目で出てきて落ち込んだ声を出す。
「龍也くん」
「匠くん」
「先斗」
「庄吾」
「匠くん」
その後も開票は続き、残り一枚となった。
今のところ、先斗2票、匠2票、龍也1票、庄吾1票、唯1票。
かなりバラけた。
「最後」
息をのむ五人。
「匠くん」
「…分かった。やるよ」
ちょっと諦め気味にため息をつく匠。
「よろしくね。じゃ、先生に言ってきて」
「了解…」
匠は教室を出て行った。

譜読みをしながら話す先斗達。
「匠も大変だよな。ユーフォからパーカスとは…」

「でも持ち替え経験あるからね。あたし達がやるよりはいいんじゃないかな？」
「持ち替えといえばさ、お前中二の春休みのこと覚えてるか？」
「愛媛の親戚の家に遊びに行ったときのこと？」
「ああ」
「あれ？二人きりで親戚の家に一緒に遊びに行くほどふたり仲いいんだ？」
拓也が興味津々と言った様子でやってくる。
「二人じゃねえよ。庄吾と海斗も行った」
「先斗の父方の実家に行ったんだよ。なんか先斗のおじさんに愛媛県トップクラスの吹奏楽部の選抜メンバーがジョイントコンサートやるらしいから来ないかって誘われたんだ」
庄吾が補足する。
「へぇ…」
「で、そん時持ち替えしてたやつがすごかったなって話」
「そこ小編成だったのか？」
「いや、プログラム見たけど６０人以上いた」
「じゃあ何で？」
「さあ？でも上手かったな。『アルメニアンダンス・パート１』って曲演奏してたんだけどな。初めチューバ演奏してたと思ったらホルン、オーボエ、ユーフォ、トランペット、トロンボーンとどんどんおいしいところばっかり持ち替えしてた」
「ソロが多かったけど、ｔｕｔｔｉでもユーフォ吹いてたわね」
「へえ…なんて奴？」
「確か…若林だったっけ？」
「竹原じゃなかったかしら？」
「優樹かよ」
「竹林だろ？」
声に振り向くと、匠が帰ってきていた。

「あ、そうそう竹林。　竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）って名前だった。なんで匠知ってるんだ？」
「俺もあの演奏会行ってたんだよ」
「あたしもね」
「加奈子も？」
「うん。あたしのおばあちゃんの家が愛媛にあるから、遊びに行ってたのよ」
「そうなんだ…」
「あん時すごかったんだから。匠ったら…」
「加奈子、ちょいその話なしで。スコアのコピーもらってきたから配るぞ」
「うん…」
　そのままその話は終わり、結局先斗達は続きを聞くことはできなかった。

93話　電話

練習終了後。加奈子と匠は帰宅の途についていた。
匠の家は加奈子の家の近くのマンション。

普段は茜と理穂と加奈子、匠と匠の友達で弦楽部の倉田（くらた）　康平（こうへい）と剣道部の佐野（さの）　遼（りょう）とでそれぞれ別に帰るのだが、今日は康平は地区の連合音楽会に参加、遼は風邪で欠席、茜と理穂はソロコンの楽譜選びでそれぞれいないため今日は二人で帰っている。

「でさ、なんで匠さっき中学時代のこと話そうとしたら止めたの？」
さっきから加奈子は少し不機嫌だ。
「…恥ずかしかったんだよ」
そっと呟くように答える匠。
「…なにが？」
「なんかあの頃の俺ってさ、自分の技術面だけ磨いて周りあんまり気にしてなかったからさ…」
「どういうこと？」
「大勢と合わせるの苦手だったんだ。だから合奏よりアンサンブル、アンサンブルよりソロが好きだった」
「へぇ…」
「でも、あいつ…泰徳と会ってから考え方変わった。あいつ、大編成はキライだ、俺ほど下手くそな奴はいねぇ、とか言いながら周りに合わせるところはきちんと合わせている」
「そういえばアルメニアンでも伴奏はしっかり溶け込んでたね」
「音を混ぜるのはある意味でソロで吹くよりも難しいんだ。クラリネットがよく音質合わせてるだろ」
「うん」
「俺はユーフォ一人だったってのもあるかもしれないけど音が浮い

ているって言われてた。でもそれ気にしてなかったんだ。あのまま行ってたらますますひとりよがりな音になってただろうな」
「…」
「でもあいつのおかげでそれに気づけた。だから泰徳には感謝してるんだ」
「そうだったの…。泰徳くんとはまだ連絡取ってるの？」
「ああ、メールや電話で連絡取ってる。でもあいつは携帯持ってないからパソコンだけどな」
「じゃあさ、電話してみたら？」
「え？」
「パーカッション、不安なんでしょ？」
「…ああ」
加奈子の家の前に着く。
加奈子の家は八百屋だ。店の前では加奈子の祖父、丈一郎（じょういちろう）がそろそろ店じまいをしようかとしているところだった。

「ただいま。おじいちゃん」
「おお、加奈子か。遅かったな。それに匠くんも」
「こんにちは」
「ちょうどいい。お～い、和子さん。匠くんになんか持たせてやっとくれ」
「あ、いいですよ…」
「はいはい」
匠は断ろうとしたが、裏から加奈子の母の和子がすぐに出てくる。
「いつもありがとうねぇ。はい、みかん。旬のものだから甘くておいしいわよ～」
そういってネットにはいった温州みかんを差し出した。
現代ではハウス栽培でいつでも食べられるようになったみかん。
でも本当の旬は１０月末～１２月だからやはりそこで食べたいも

のだ。

「ありがとうございます」

加奈子の視線もあり、受け取る匠。

「じゃあまた…」

「じゃあね」

加奈子は角まで匠を見送ると、家に入る。

「あ～寒々…」

制服を脱ぐのもそこそこにこたつに飛び込んだ。

昨日からぐっと気温が下がったためコタツが昨日急遽出されたのだ。

「制服しわになるわよ」

店の片づけを終えた和子が居間に入ってきたとたんに文句を言う。

「だって寒い」

「まったく…でも匠君とあんたって妙な縁があるわよね…」

「そうだね…」

コタツでぬくぬくしながらなんとなく答える加奈子。

「初孫はいつ見れるかのぉ…」

既にコタツに入っていた丈一郎が呟く。

「そうだね…っておじいちゃん！？」

「そうねぇ…。お母さん、匠くんなら安心して加奈子を任せられるんだけどな…」

「ちょっとお母さんまで…もう！お風呂入ってくる！」

そういい残すと、加奈子は顔を赤くしながら居間を出て行った。

その頃、家に着いた匠はみかんを母親に渡して自分の部屋に入っていた。

「竹林竹林…」

携帯の電話帳を開きアドレスを探す。

「あった」
そしてメールを打つ。

＝＝＝

――――――

「ティンパニ、シロフォン、スネアくらいはあるよ」
「実はな…。俺アンコンでパーカッションやらないといけなくなったんだよ」
「へぇ…。そうなんだ」
「打楽器の種類が多すぎて不安なんだよ…」
「へぇ…」
「…聞いてるか？」
「聞いてるよ。…先輩ってやる前からだめだって言うようなヘタレだったか？」
「な！？」
「そりゃやる前からそんなこと言ってたら不安にもなる。そんなんじゃアンサンブルどころか自分のパートを叩くのが無理ってもんだ」
いきなり口調が変わる泰徳。
「…」
「そんなんじゃあ松方中の天才肌、黒田匠の名が廃るぜ？」
それを聴いた瞬間、匠の目の色がさっと変わった。
「！…やってやろうじゃねえか」
「ん？どうした？聞こえねえな」
「やってやるって言ってんだよ！そんなこと言わせてたまるか！」

「…ほら解決した」
一転して、してやったりと言いたいかのような声を出す泰徳。
「え？」
「もう大丈夫だよな。じゃ、俺受験勉強するんで。さよなら」
呆然としている匠の耳に、電話のツー、ツーという機械質な音だけが残った。
「…やってやる」
コンタクトを外し、机から出した眼鏡を掛ける。
そしてスコアと筆記用具を取り出し、参考音源のCDをコンポにかけると、スコアリーディングをはじめた。

「…これでいいだろ。先輩」
泰徳は電話をみつめニヤリと笑うとそのまま二階の自分の部屋へと戻っていった。

９３話　電話（後書き）

前の話から名前は出ていますが、今回の話ではコラボとして、ＧＴ．ｓｐｉｒａｌさんの作品、「ブラス魂♪」シリーズの主人公、竹林　泰徳くんが登場しています。
彼は今後も登場していきますのでご期待ください。

ジョイントコンサートの話の詳細についてはＧＴ．ｓｐｉｒａｌさんの「ブラス魂♪　～Ｓｅａｓｏｎ　ＩＩ～」をご覧ください。

９４話　番外編３－１　松中吹奏楽部（前）　（前書き）

この番外編では視点が中学生時代の匠となります。

９４話　番外編３－１　松中吹奏楽部（前）

きっかけは澪のあの言葉だった。
「ねえ、竹林　泰徳って知ってる？」

竹林　泰徳。
愛媛県の吹奏楽界で有名なチューバプレーヤーで、さらにどの楽器をもオールマイティーにこなすという、いわゆる天才。最強中学生と呼ばれているらしい。
そんな天才の所属する常套中学校と、北佐屋中学校、そして斎木高校と言う全国大会常連校が２月にジョイントコンサートを開催するらしい。
（面白そうだな……）
俺は幼馴染で島根から遊びに来ていた加奈子と、コンサートを聴きに行くことにした。

ガヤガヤ……。

さすが県内屈指の団体が集まっているだけある。開場一時間前なのに会場前には長蛇の列ができていた。
「つき合わせて悪いな」
それを見てポカンとしていた加奈子に話を振る。
「ううん。すごい演奏が聴けるんでしょ？　楽しみだよ」
「そっか。加奈子も楽器やればいいのに」
「高校入ってからかな。あたし、新設校の桜田中央高校に入るつもりなんだ」
「へえ……」

話しているうちに開場になる。

だんだんと列が前に進んできた。
（ん？）
ふと視線を感じて横目で伺ってみる。
壁際で３人の中学生が覗き込んでいた。二人の女子のうち、片方は寡黙な感じ、もう一方ははっきりしてそうな感じで、残りの男子からは幼さが残りながらもなにかオーラを感じる。
しかしひとつ不可解なのがそれが怒りのオーラだったことだ。
（なんだ？あいつ）
俺はそれほど気にせずに中に入った、

ブー……。

「間もなく開演です。ロビーにお越しのお客様は、なるべく早めにお席にご着席ください」
アナウンスが閑散とした客席に響き渡る。
（さて。聴きますか）
プログラムによるとこの日演奏される曲は、

・吹奏楽の為の『風之舞』
・をどり唄
・ヘンリーマンシーニメドレー
・アルメニアンダンス　Ｐａｒｔ１
・野球拳ファンタジー

の五曲だ。
曲から見て、例の持ち替えは『アルメニアンダンス　ｐａｒｔ？』で披露されるのだろう。
幕が開き、『吹奏楽のための「風之舞」』が始まった。
中低音のＤの音のユニゾンが綺麗に揃っている。

でもここはまだ序章だ。まだまだ期待していいだろう。
（ん？）
豪快なサスペンドシンバルの１打と共に金管とスネアドラムが入ってきた。
しかしスネアの音質以外のものも聞こえてくる、
（あ！）
スネアに水軍太鼓で使用する『締太鼓』が重なっている。さらにクラベスの代わりに拍子木。指揮者の音楽センスの高さが伺われる演奏だ。
あっという間に曲が終了する。
指揮者が指揮台から降りて礼をした。演奏者達を立たせる。
ふと視線を感じて舞台の右手を見るとさっきの男子だった。チューバ吹きのようだ。
しかしなぜかこっちを睨みつけている……。
（なんだあいつ……まさか？　……まさかな）

しかしその期待は最後の大曲、『アルメニアンダンス　ｐａｒｔ？』で裏切られた。
休憩後、そいつの周りにはオーボエと全ての金管楽器が配置されていたのだ。
（竹林　泰徳……）
そして曲は始まった。

演奏会終了後。
「加奈子。ちょっと先帰っててもらっていいか？」
入り口のところで加奈子と別れようとした。
「え？なんで」

「……ちょっと喧嘩売ってくる」
少し笑って言ってみた。
確かにあいつの演奏は確かに素晴らしかった。
しかし突っ込みたいところがいくつもあった。

「あたしも行く」
「おい……」
「匠を止めないと一晩中でも話し続けてそうだからね」
「……分かった」
「じゃあ行こうか」
俺達は第三楽屋に向かった。

ドアの前に立つ。
「どうしたの？入ろうよ」
「加奈子。できるだけ口出しはしないでおいてくれよ。ちょっと猫被るかもしれないから」
「分かった」
「じゃ、加奈子先入ってくれるか？」
「了解」
（さて。最強中学生の異名がつくほどの腕前、見せてもらおうか）
俺は期待で胸がいっぱいだった。

「失礼します。あの、竹林　泰徳さんっていらっしゃいますか？」
加奈子が一番近くにいた寡黙そうな女子に尋ねる。
中にはさっきの3人。
どうやらこの3人、かなり仲がいいようだ。
「あぁ、俺だけど」
演奏が終了して少しリラックスしていたようだ。
「あ、あなたなんですね、持ち替えしてた人」

ファーストインプレッションが大事だ。俺はあえて敬語を使ってみることにした。
「……？　誰？　あんた」
「松方中学校2年、黒田　匠です」
「お前が……」
それを聞くなりやつの目の色が変わり、攻撃的なものになった。
中学生とは思えないガンのつけようだ。
「お前が黒田　匠……」
どうやら楽屋に来たことで動揺しているようだ。
「……？　どうかしました？」
「あ、いや、何でもねぇ」
「あんたの横の女、名前は？」
「あ、私ですか？」
「てめぇ以外に誰がいる」

（ご挨拶だな）
やつは初対面の相手なのに冷たく言い放った。
確かにこっちは相手の名前は把握してたがあまりにも挑発的で幼い対応だ。
「あ、すみません……。私、倉橋（くらはし）　加奈子（かなこ）って言います」
「ふーん。で、お前ら何しに来た？」
「僕らですか？　いや、あなたの『アルメニアンダンス』での持ち替えに感動して、この楽屋を訪れた次第です」
「愉快じゃねぇな」

やつの態度は相変わらず冷たい。
敬語を使わないのを差し引いても初対面の相手に対する態度とは思えない。
「何か、僕の事誤解してませんか？」
「何だって？」

「だって、さっきからめっちゃ態度冷たいじゃないっすか」
思い切ってストレートに当たる。一人称も俺から僕に変えて気弱そうにしてみた。
「気に食わねぇことでもあんのかよ」
「いや、それは……」
予想通りの反応。だから特に何も言わずに置いた。それを見て、やつはこう言った。
「まぁいいや。今日は演奏を聴きに来てくれた客だしな。まぁ座れや」
やつは椅子を引いて、俺達に座るよう指示した。
「何か言いたそうだなぁ。言ってみ」
「あ、分かっちゃいました？　さすがですね。僕の見る目に間違いは無かったですよ」
言えと言われたので言ってみた。
「へぇ。あんた、音楽には十分自信ありそうだな」
「冗談言わないで下さい。貴方ほどではありませんよ」
「それは俺に対する皮肉か？」

やつは妥協をしないし、自分の才能をひけらかすようなタイプではない事は演奏を聴いていて分かっていた。だから挑発を掛けてみたのだ。
「とんでもありません。あのアルメニアンダンスは、誰が聞いても凄いですよ」
「じゃあ聞くが、どこが凄いんだ？」
その一言をきっかけに、音楽論争が勃発する事となった。
「まずはあの杏の樹。トランペットであそこまでのハイトーンを出すのは至難の業ですが、それを一発で当てるなんてやっぱ凄いですよ」
「トランペットに上限の音など無い。ユーフォニアムやホルンなどの音域が限られる楽器では仕方ないが、トランペットに関しては下

限の音はあるものの、上限の音は出そうと思えばいくらでも出せる。要はアンブッシュアの問題だ」
金管は理論的には上限はないが、ペットは特に上限がないといっても良い。
ジャズ奏者の演奏なんて何オクターブあるか分からなくなるくらいだ。
「でもそうなると、唇切れたりとかしません？」
「しねぇよ」
「何でですか？」
「んなことも分かんねぇの？」
やつの言葉に妙に苛立ちが見え始めた。俺以外の女子3人はキレた時に備えて身構えている。
「分かんなくて何が悪いんですか？」
「いや、わかって当然だし。さてはお前、ユーフォ奏者だな？」
「何で分かったんです？」
俺は何の躊躇いもなく、やつに聞き返した。
「何故なら！　お前上唇が妙に引き攣ってるからだ。こういう癖は、中途半端な奏者では身に付かないものだ。到底経験の積んだ奴じゃないと、現れない。それとあともう1つ」
ここでやつは、一旦話すのをやめた。
「どうしたんですか？　早く話してくださいよ」
急かしを掛けてみた。急に静かになったのでキレ出すかと思ったがやつは静かに答えた。
「お前の右手親指に、楽器を構えた時に出来る胼胝（たこ）と、緑色の錆が付いている。チューバでもこういうことはあり得るが、それに比べるとお前のは小さい。…トイレ行ってくる」
そういって部屋を出て行った。
（意外とマイペースだな）
「竹林って人、やっぱ凄かったな」
素直に知識量に感服する。

「そうね。こんな短時間で貴方をユーフォ吹きだって見破るなんて」
とコンバスの女子。
「貴方って、ユーフォ吹きなんですか？」
とユーフォの女子が尋ねる。彼女の手にも胼胝ができていた。コンサートのためによっぽど練習したのだろう。
「その通りです。全くしてやられましたよ、竹林君には」
正直舌を巻いている状態だ。
「実は、僕は泰徳君の音楽分析力を試したくて来たんです」
「でも、泰徳も負けませんよ」
「それはさっきの会話をしていれば分かります。彼、相当な実力者ですね」
「ええ。実はあの人、初心者なんですよ」
（マジかよ…）
「いやぁ、びっくりしたな。初心者であれほどとは」
素直に驚きを表してしまった。
「でも、まだ試す気なんでしょ？」
「当然です。最強中学生と言われた竹林君の、化けの皮を剥いでみたい」
「あなたも相当な力を持ってるって有名ですよ」
「そんな滅相も無い。分析力に長けているのは自分も自信がもてますが、流石に楽器の技術に関しては自身などもてませんよ」
天才肌などと呼ばれているようだが正直買い被りすぎだと思っている。
「どうしてです？」
「自分が満足したらそれで終わりだからです」
挑戦したいと思った理由はここだ。
俺と似たものを感じられたのだ。
「後半戦も見ものですね」
「期待しててください」
そう言ってみたものの、正直思った以上にレベルが高い。

（後半は本題に入ってみるか……）
そう思った瞬間、やつが帰ってきた。

その後も基礎練習のことやアナリーゼについて、無知な振りをしながら聞き出す。
まあ途中で、
「今の発言、松方中学校の生徒にしちゃぁ、爆弾発言だぜ」
と言われた時にはちょっとムカッと来たが。
A編成の全国バンドとB編成で四国大会銀賞のバンドを比較されても困る。
そこで本題に入ることにした。

「じゃあ4楽章の『アラギアス山』の対旋律も適当じゃないってことですか？」
「当然だ」
「例えばどんな事を思ってあんな吹き方したんですか？」
あそこの部分はユーフォニウムの対旋律をやつは担当していた。
美しい旋律だからもっと歌い上げてもいいかと思ったが、やつは流した。

「あれはあくまでも対旋律だ。メロディーがあるのに、それよりも目立ってしまっては仕方が無い。俺は自己主張が苦手でな」
「最終楽章もですか？」
「何の事だ？」
話の核心に入る。
「後半のトランペットです。あれはどう聞いても小さすぎやしませんか？　音量」
「別に」
やつは即答した。
「何でなんですか？」

ｆｆなのに納得がいかなかった。
「何故大きな音をあそこで出す必要があった？　あそこはフィナーレに向けてボルテージを上げる為にわざわざ木管と金管を被せて、さらに打楽器まで足している。そういう複雑な関係を保たず、意のままに行ってしまうと折角の演奏が台無しじゃないか。それに、今のアンタの曲分析はすべて技術面から来るものだ。そんなんでは、いい演奏家にはなれない」
（！）
今までの俺の演奏は浮いていると言われることが多かった。
今その所以が分かった。

俺の演奏はパート間の関係を気にしていなかったのだ。

ホルンとサックス、トランペットとクラリネット、テナーとユーフォ、シロフォンと木管…。
作曲者がどんな気持ちで音を重ねたのか全く理解しようとしていなかった。
それがやつと俺との違い。
（これじゃ演奏者として失格だ…）
立ち上がり、頭を下げた。
「負けたよ、泰徳君。君の勝ちだ」
素直に言えた。
「勝てて光栄です。黒田先輩」
何かが変わったのが分かったのだろうか。泰徳も俺を先輩と呼んだ。
「僕は貴方の事を誤解していたようですね」
「僕こそ、試してしまってすまない。良ければ、メールアドレスを教えてくれないか」
「もちろんです」
そう言って泰徳は紙にメールアドレスを書いて、俺に手渡した。

「ありがとう。帰ったらメールするよ」
「待ってますよ」
「じゃあ」
「さようなら」
加奈子と部屋を出た。

「加奈子」
「なに？」
「やっぱり先に帰っていてもらっていいかな？」
「え？バトル終わったじゃないの」
「学校寄って帰るから」
「何しに？」
「ユーフォ、取って来る」
「……分かった。また音聞かせてね」
「ああ。じゃあ後で」
俺は自転車を必死に漕いだ。
そして学校に入り、当直の先生に鍵を借りて部室に飛び込む。

楽器ケースを開けた。
そこには銀色に輝くユーフォニウム。
俺はそれをそっとなでた。
（…負けねえ）

２月１１日。その日は俺にとって、転機になる一日だった。

９５話　番外編３－２　松中吹奏楽部（中一上）

「今年はＡ編成出るから」
「え？」
４月２８日。一年生が本入部して一週間した頃のことだ。
俺達松方中学校吹奏楽部の面々は顧問の浅見（あさみ）先生の言葉にフリーズしていた。
「ちょ、先生！？なに言ってるんですか！？私達２９人しか部員いないんですよ！？」
「大丈夫。規定は満たしているから」
副部長の中崎（なかさき）　愛子（あいこ）（パーカッション担当）の驚きに冷静に返す先生。

愛媛県のコンクールの部門は２つある。
まずＡ編成。
この部は全国大会まで続く、通称大編成の部。
課題曲自由曲を１２分以内に演奏し、人数の下限は２５人で上限が５０人。

そして例年出ているＢ部門。
支部大会まで続く、通称小編成の部。
こちらは自由曲のみで８分だ。

「でも…」
「何が不安なの？」
「だってこの人数で佐倉や常套や北佐屋にどうやって対抗するんですか！？」
「…ちょっと落ち着いて思い出してみて。あなた達が入部した当時のこと」

「…はい」
「あなた達が一年のときの編成覚えてる？」
「はい」
「ちょっと書いてみてくれる？」
「え？はい」
浅見先生の指示で黒板に愛子が編成を書く。

	3	2	1	計
フルート	2	0	1	3
オーボエ	0	0	0	0
エスクラ	0	0	0	0
ベークラ	1	0	2	3
バスクラ	0	0	0	0
アルサク	1	1	0	2
テナサク	1	0	1	2
バリサク	0	0	1	1
ペット	1	2	1	4
ホルン	0	1	0	1
ボーン	1	1	0	2
ユーフォ	0	0	1	1
チューバ	0	0	0	0
パーカス	1	0	2	3
合計	8	5	9	22

「今は？」
「えっと…」

	3	2	1	計
ピッコロ	(1)	0	0	(1)
フルート	1	1	1	3

オーボエ	0	1	0	1
エスクラ	（1）	0	0	（1）
ベークラ	2	1	2	5
バスクラ	0	0	1	1
アルサク	0	1	1	2
テナサク	1	0	0	1
バリサク	1	0	0	1
ペット	1	2	1	4
ホルン	0	1	1	2
ボーン	（1）	1	1	2
ユーフォ	1	0	1	2
チューバ	0	1	0	1
パーカス	2	1	1	4
計	9	10	10	29

「違い分かる？」

「…人数」

「他には？」

「…」

「偏りがなくなってるの、分かる？」

「あ…」

確かに中一の時の編成は低音がバリサクしかいないし、クラよりトランペットが多かったり、中音楽器が少なすぎたりしていた。

「私が赴任してから今年で三年なんだけど、今年、やっとまともな編成になった。それに今年初めて部員が25人を超えたの。できることなら課題曲も演奏してほしい。挑戦してみない？」

「…賛成」

俺はおもわず手を上げた。

「え？」

それに驚く部長でトランペット3年の松原（まつばら）　祐二（ゆうじ）。俺が普段大編成は苦手だといっていたからだろうか。
「大編成出たいです」
「ちょ、匠！？」
普段感情をあまりださない俺の発言に愛子も驚きを隠せない様子だ。
「三年にとっては最後の大会になるかもしれないんだ。管楽コンテストも出られるかは分からないし」

日本管楽合奏コンテスト。
管打楽器および吹奏楽に関する研究・調査・啓発を行うとともに音楽文化の向上を図り、学校教育・生涯学習における管打楽器および吹奏楽の充実・発展に寄与することを目的とする大会で、日本管打・吹奏楽学会の主催で毎年１１月に開催されている。
ＭＤ録音による審査を突破したら本大会に出ることができるため松方中学校は毎年挑戦しているが、本大会に出られたのはここ数年では去年のみだ。

去年は『吹奏楽のための音詩「輝きの海へ」』で挑戦して、優秀賞を受賞した。まあ優秀賞といっても賞の区分が上から最優秀グランプリ賞、最優秀賞、優秀賞の順なので参加賞なのだが。

「だから、チャレンジできることはやってみたい」
「賛成です！」
間髪いれずにパーカッション2年の小金井（こがねい）　先人（さきひと）も手を上げる。
「課題曲叩いてみたいです！」
「…というわけだけどみんなどう？一年生も経験者が多いから無理な話ではないと思うんだけど…」
「「賛成！」」
全員一斉に賛同する。

「よし。じゃあさっそく楽譜配るわ」
「え？」
「みんなならＯＫしてくれると思ってたからね。準備してあるの。課題曲聴いたことある人？」
ちらほらと手が上がる。全体の三分の一くらいだろうか。もちろん俺も上げた。
「じゃあとりあえず全部見てみようか」
模範演奏のＤＶＤを再生する先生。
視聴覚室はオーディオ設備が充実しているため、すぐにスピーカーから楽器の音が流れ始めた。

「？は『架空の伝説のための前奏曲』よ」
初めからクラリネットのソリ。だんだんサックス、金管と重なっていき、盛り上がりきる。
ティンパニとスネアドラムのソリでテンポが上がり、トランペットのソロが始まった。
「げ！？」
祐二の奇声。
さらにクラリネットのひたすら続く１６分音符。
「ウソ！？」
クラリネットの２年、神崎（かんざき）　祥子（しょうこ）も奇声を上げる。

そこからは奇声の嵐。
ホルンのソリ、木低のソリ…。
一年生しかいない木低にはかなり重荷だ。
ユーフォも木管並みのパッセージがある。
一曲終わる頃にはほぼ全員が奇声を上げていた。
「これはなしね。わたしも振る勇気ないわ」
そして？、？と聴いていくが、
「…」

「…」
「課題曲ってこんなに難しいんだ…」
「だって課題の曲だもん…」
意気消沈していく部員達。
「…じゃあ最後。？。『海へ…吹奏楽の為に』。これも小編成用の曲よ」

課題曲には大編成、小編成の違いがある。
大編成用は作曲時にオーボエ、ファゴット、エスクラ、アルトクラ、ホルンの４ｔｈ、コントラバス、パーカッション４のパートにもソロや重要な単独の動きを任せていいようになっていて、小編成用はそのパートを省いても演奏が可能なようになっている。
今年の課題曲は？、？が小編成用だ。
「じゃあかけるわね」
再生ボタンが押された。

「おお！」
いきなりティンパニの重厚な音。
パーカッション３年、倉橋（くらはし）　俊之（としゆき）が反応する。
シロフォンの上昇音でフルートとオーボエのソリが始まった。
「素敵…」
「うん…」
愛子とフルート兼ピッコロで３年の斉藤（さいとう）　澪（みお）が顔をほころばせる。
木管は連符が多いが、漣（ささなみ）のような動きにみんな聞き惚れているようだ。
アルトサックスのソロが入り、テンポが落ちた。
「うわぁ…」
クラリネットの穏やかな波のようなパッセージと共に呼び寄せられたのはユーフォソロだった。

後輩の松田（まつだ）　浩輔（こうすけ）がその音に目を輝かせている。

聞き終わるころにはみんなの心は決まっていたようだ。

「何番がいいですか？」

「「？！」」

全員が声をそろえて叫ぶ。

「はい。じゃあ？に決定！じゃあ次、自由曲。これはこっちで決めさせてもらったわ」

そういって今度はＣＤをセットする。

「なんていう曲ですか？」

「『ミス・サイゴン』よ。ミュージカルの曲だけどね」

再生される。

冒頭。

「え？何の音？」

愛子がきょとんとする。

グロッケンにしては柔らかく、しかしビブラフォンの音のように余韻の長い音ではない。

「チェレスタね。ビブラフォンで代用するわ」

チェレスタの独奏にピアノが加わる。

「え？」

部員に何人かいるピアノ経験者が声をあげる。

（…細かい）

テンポはそこまで速くないものの、ひたすら１６分音符が続いている。

「げ…」

さらにクラリネットも同じパッセージ。

クラリネット３年の小浦（こうら）　達也（たつや）の声が重なる。

（あれ？）

小さくミュートトランペットが聞こえてきた。

それはだんだん大きくなる。
最高潮に達した時サスペンドシンバルと共にバスドラと金管が飛び込む。
裏で鳴っているのは銅鑼。
かなりのボリュームだが、繊細さも求められそうだ。
トムトムの激しいリズムと共にソプラノサックスのソロが始まった。

曲が進んでオーボエソロが終わったときだ。

バタバタバタバタ…。
「ん？」
「なんだ…？」
低く、しかし金属質な音が響く。
「…ヘリコプター？」
そう俺が呟いたとたん、金管のクレッシェンドで曲想が一気に変わった。
金管の激しいメロディーと木管のメロディーが対比されて奏でられる。
ティンパニはひたすらロールをしている。
テンポが落ちて、金管がひたすらメロディー。
かなりきつそうだ。
だんだんと緊張感が高まっていく。
クラリネットの連符、低音の下降音、ティンパニのロール。
そしてシンバルの一発で音楽が静まった。

打って変わって木管の壮厳なメロディー。
ティンパニとチャイムがそれにアクセントを加える。
途中で金管も加わり、響きが厚くなる。
「綺麗…」

そしてクライマックス。
クラリネットの半音階で最後のトランペットのハイトーンのメロディーに移る。
「早っ！」
「高っ！」
両パートから声が上がる。
トランペットのハイCで曲は終わった。

「…」
音楽室は静まる。
「どうかしら？」
「ちょっときつい気が…」
達也が少し苦笑いをする。
「でも不可能ではないだろ」
祐二が口を挟む。
「確かにハイトーンや連符とか問題はあるけど、まだ3ヶ月あるんだ。克服できなくはない。それに」
そこで言葉を切り、こう続けた。
「限界を決めてしまったらそこで成長は止まってしまう。練習すれば何とかなるんじゃないかな」
「…同感だ」
俺も同意する。

それを聞いて泰徳を思い出していた。
あいつの演奏は聴くたびにグレードが上がっていく。
才能の面も確かに大いにある。
しかしその技量を支えているのは努力だ。

だから。
難曲だとしても頑張ってみたい。

「三年生は乗り気みたいね。一、二年生はどうかしら？」
「この曲やりたいです」
2年トップでアルトサックスの長瀬（ながせ）　正二（しょうじ）も賛成した。
「じゃあこの曲に決めていいかしら？」
「「はい！」」
全員の声が響く。

こうして例年と違う一年が始まったのだった。

９５話　番外編３－２　松中吹奏楽部（中一上）（後書き）

センター終わったんでちょっと書きます。

９６話　番外編３－３　松中吹奏楽部（中）

２００６年７月２９日（土）。
吹奏楽コンクール愛媛県大会二日目。
松方中学校のメンバー達はステージ脇に集合していた。
部員数２９名。今回の団体の中で二番目に小さな編成だ。
「松方中学校の皆さん。よろしくお願いします」
前の団体が終わり、案内係の生徒が誘導する。
匠達は入場した。
「先輩、楽譜どうぞ」
「ありがとう」
トロンボーンの一年生でセカンドの相田（あいだ）　秀平（しゅうへい）が楽譜を渡してくれる。
今回匠はトロンボーンとユーフォ、両方を担当するため、楽器を両手に抱えていた。

匠だけではない。
フルート１年の斉藤（さいとう）　夏華（なつか）は自由曲でピアノとパーカッションを、トランペット２年の熱田（あつた）　竜二郎（りゅうじろう）は課題曲中心にホルンを、バリトンサックス３年の筧（かけい）　耕一（こういち）は課題曲でコントラバスに持ち替える。

ステージのライトが点った。アナウンスが入る。
「プログラム２９番、松山市立松方中学校。課題曲？に続きまして、自由曲、Ｃ．Ｍ．シェーンベルグ作曲『ミュージカル「ミス・サイゴン」』より、序曲、わが心の夢、サイゴン陥落、今がこのとき。指揮は浅見（あさみ）　麻衣（まい）です」
先生が指揮台に立ち、ティンパニ担当の先人を見た。
そして指揮棒をあげ、そっと振った。

アーフタクトからティンパニの壮厳な四つの音が響き、それにトロンボーンの刻み、ミュートトランペットの鋭い音、低音のリズムが重なる。
シロフォンが駆け上がり、バンド全体がクレッシェンドで盛り上がった。サスペンドシンバルが響く。
しかしすぐに金管は静まり、フルートとオーボエの柔らかなソリが会場に響いた。

（小編成でも結構響くもんだな…）
泰徳は客席でその演奏を聴いていた。
常套中学校は現在在籍部員は１００人近くいる。退部者も多いため実質はもう少し少ないがれっきとした大編成のバンドだ。
一方松方は小編成。
今までやったことない編成だから聞いてなにか生かせるかも知れない。
今回、昨日自分の演奏が終わったにも関わらず聞きにきた理由はそれだ。

（フルートのピッチはうちより合わせるのが上手いな…）
人数が少ないのも関係しているだろうが、エアーズの時のずれを考えるとこれはバンドの改善点の一つだろう。
さらに、常套中学校にはないオーボエの存在。課題曲は全部軽くさらったが、やはりオーボエのあるなしで響きが違って聞こえる。
あれだけ人数がいるのだからダブルリードも入れていい気がしないでもない。

そして金管が入ってきて強奏部分に差し掛かる。
シロフォンが入ってくる。担当しているのは上級生らしき女子だ。細かい動きだがはっきりと粒のある音が飛んでくるのが分かる。

去年卒業した中田先輩には劣るかもしれないがかなりの腕前の持ち主だ。
強奏部分も終わり、前半の締めであるアルトサックスのソロに入った。
（正直劣るな…）
幼馴染の音色を思い出しながら顔をしかめる。
確かに愛よりは上手いかもしれないがそれでもあいつには敵わない。

（…な、なかなかやるじゃない）
一方、常套のアルトサックス奏者、浜口（はまぐち）愛（まな）も演奏を聴きに来ていた。
上手い奏者は上手い演奏からでも下手な演奏からでもなにかしらを汲み取っていることに最近気づいたので、できるだけ演奏を聴こうと心がけているのだ。
（…悔しい）
ソロを吹いている正二の姿を見つめる愛。
見たことのない奏者だったらこんなに悔しく思わなかったかもしれない。
悔しさがこみ上げてくる理由は彼と自分が知り合いであることだった。

正二と愛が会ったのは、吹奏楽連盟主催の楽器講習会でのことだ。
学年ごとにクラスが分けられており、常套の2年のアルトサックス奏者は自分だけなので、少し心細く思っていた。
「あれ？」
愛はかばんを見て慌てた。
なんと楽譜入れを忘れてきてしまったのだ。
講習会での練習曲である、『海へ…吹奏楽の為の』の楽譜ももちろんその中。

「ど、どうしよう…」
パート練習だけならいいが今日の最後には学年合奏もある。
「どうした？」
そんな時話しかけてきたのが正二だった。
普段なら素直に物事を言えない愛だったが、さすがに今回は事情を素直に話した。

「そっか…あ、そうだ。これでいいなら使う？」
そういって『海へ…』の譜面を取り出す正二。
「え？でもそうしたらあなたの譜面ないんじゃ…」
「大丈夫だよ。暗譜してるから。はい」
「あ、ありがとう」
基礎練習後の休憩の間に譜面を借りて、コンビニに走ったので合同演奏はなんとかなったのだった。

（あたし、負けないんだから…）
そう思う愛の心にはライバル心以外のものも芽生え始めていた。

トロンボーンが三つの和音を決め、テンポが落ちる。
その音の処理もしっかりと止め、匠はトロンボーンからユーフォに持ち替えた。
実は匠、この曲でユーフォを吹くのはここだけであるため、一発目の音からソロだ。
バズィングを軽くして、深く息を吸う。
穏やかな音が楽器から流れ始めた。
その音に常套中学のユーフォニウム担当、谷（たに）　未来（みき）はおもわず匠の顔を見てしまう。
天才肌との異名を持つ匠だが、未来はその音色を聞いたことがなかった。

初めの一小節を聴いて、未来は匠の音がソロ向きだと感じた。
はっきりと浮いて聞こえるのだ。
自分は上手く合わせる事は下手ではないが、スタープレイヤー性はないと思っている。
だからその音をうらやましく思った。

サスペンドシンバルが打ち寄せる波のように響く中、木管のメロディーが柔らかく奏でられる。
アルサクが一瞬単独の動きを吹いて、ホルンソリへと受け渡した。
いつの間にか持ち替えたのだろうか、トランペットの竜次郎がホルンの３ｒｄに回っている。
その上で１ｓｔの天草（あまくさ）　和音（かずね）が安定した音でメロディーを奏でた。

中間部のピークに達する。
トランペット率いるメロディーにそれを追いかける対旋律。
アルサクとグロッケンがソリを決めると、テンポが上がった。

ここからはホルンとコントラバス、スネアドラム、ティンパニだけの世界だ。
長いブリッジだが、スネアが表情豊かにリズムを刻むので飽きさせない。
途中でクラリネットが加わり、雰囲気が変わる。
クレッシェンドがかかりはじめる。だんだん緊張感が増す。
管楽器がだんだん加わり、クレッシェンドがピークに達した瞬間。

シャァーン！

クラッシュシンバルが一発鳴ったのだった。

そこで場面は再現部に入る。冒頭のティンパニが壮厳に響き、トロンボーンとミュートトランペットが打ち込みを入れた。

強奏部を抜けると、曲は終わりに向かう。

リタルダントして、中間部を彷彿させるメロディーを金管が吹き、トランペット三本が重なりながら打ち込みを入れると、テンポがまた上がった。

フィナーレだ。

金管はひたすらにリズムを刻み、木管とシロフォンは今までで一番ハードであろう連符を刻む。

シロフォン担当の愛子の額には汗が滲む。しかし愛子は１音も外さずに叩ききる。

そして低音の四つの音で『海へ…』は終結した。

＞ｉ４２７０―１４９＜

96話　番外編3－3　松中吹奏楽部（中）（後書き）

編成

Flute　斉藤　澪（3）
青木　松子（2）
斉藤　夏華（1）

Oboe　竹内　真由子（2）

Clarinet　小浦　達也（3）
坂口　尚美（3）
神崎　祥子（2）
遠藤　正樹（1）
谷崎　涼子（1）

BassCl　板倉　絵梨（1）

Alto Sax　長瀬　正二（2）
尼崎　志保（1）

Tenor Sax　倉田　彩音（3）

Baritone Sax　筧　耕一（3）

Trumpet　松原祐二（3）
中野　しおり（2）
熱田　竜二郎（2）
小村　紗枝（1）

Horn　天草　和音（2）
佐倉　理沙（1）
Tromborne　小森　和也（2）
相田　秀平（1）
Euphonium　黒田　匠（3）
松田　浩輔（1）
Tuba　東　貴弘（2）
Percussion　中崎　愛子（3）
倉橋　俊之（3）
小金井　先人（2）
熱田　唯（1）

見づらくてすみません（汗）。落ち着いたら修正かけます。

97話　番外編　3ー4　松中吹奏楽部（中ー下）

課題曲が終わり、すぐに移動を開始する。
夏華がピアノに、耕一がバリサクに戻り、いくつかのセクションがパートを交代するだけだが、時間に余裕がないので急いで移動する。
15秒ほどで移動を終えるとすぐに、麻衣はビブラフォンを担当する愛子のほうを見た。
愛子が頷く。
それを見て頷き返すと、麻衣はそっと指揮を降ろした。

ミュージカル「ミス・サイゴン」はクロード＝ミシェル・シェーンベルグが作曲したミュージカルで、1989年9月20日にロンドンのウエストエンドで初演された。
ストーリーはベトナム戦争を元にしたもので、製作のきっかけはある1枚の報道写真だった。
娘に別れを告げるベトナム人の母親と彼女を受け取るアメリカ人の父親…。その二人は主人公のキムと、クリスを髣髴とさせる。
そのため、部員達はベトナム戦争について調べてから曲に取り掛かった。
ベトナム戦争は1960年から15年間も続いた戦争であり、歴史の教科書でも触れられている。
形式的には南北ベトナム間の戦争であるものの、実質的にはソビエト連邦を盟主とする共産主義陣営と、アメリカを盟主とする資本主義陣営の対立を背景とした「代理戦争」である。
アメリカ軍が、兵士が森に隠れられないように枯葉剤を噴射したことは有名であり、その人体的影響はそれを浴びた国民に障害を持つ子どもが多く生まれたこともよく知られている。
「ミス・サイゴン」はそのベトナム戦争の末期から終結後の時代

を描いたもので、主人公のキムも自分の家を焼かれて当時の首都のサイゴンに逃げてきていた。

今回演奏する曲は、その中から、『序曲』、『わが心の夢』、『サイゴン陥落』、『今がこのとき』の四つのシーンを切り出している。

『序曲』。

最初の2小節は愛子のビブラフォンソロ。本来はチェレスタだが、楽器がないため代用だ。十六分音符がずっと続くため、腕への負担はかなり大きい。

しかし愛子はそれを感じさせないほどはっきりとした音を会場に響かせた。

そこに加わるのは夏華のピアノと、クラリネットセクションの連譜、そして唯のグロッケン。

夏華は7年ピアノを習っているので、慣れた手つきでビブラフォンと同じ旋律を奏でる。

クラリネットセクションには一年生が二人いるが、上級生の根気強い指導の甲斐あって、なんとかついていけている。

グロッケンは二拍ごとに正確にリズムを刻み、拍が分かりにくくなるこの部分を支えている。

さらにミュートトランペットが加わる。不安な雰囲気を醸し出すこの音はだんだんクレッシェンドをかけていく。

ティンパニの音とともに中低音楽器が加わり、演奏のヴォルテージがあがる。

俊之がバスドラと銅鑼を交互に打つ。その間も木管はせわしなくそのリズムを刻み続けていた。

決めのリズム。唯が力いっぱいトムトムを叩く。小柄な唯の体からは信じられないほど大きな音が会場に響いた。

そしていつの間に持ち替えたのだろうか。正二がソプラノサックスでソロを吹く。
ところどころポルタメントもかけながら艶やかな音を奏でる正二に愛はただただ感服していた。
二回目の決めのリズム。今度はテンポを落として、ユーフォ、ミュートトランペット、ホルン、サックス、ピアノと音を繋いでいく。
浩輔は一瞬ソロになったが、物怖じせずその音を滑らかに繋げた。
ピアノがリタルダントをかけながら音を刻む。
その間に匠はユーフォに戻る。

『わが心の夢』。
このシーンは、キャバレー「ドリームランド」で行われている「ミス・サイゴンコンテスト」で優勝した、キムの先輩であるジジがアメリカでの平和な生活を夢見て寂しく歌い、キムがそれに寄り添うように歌うシーンだ。
はじめはジジの歌。真由子のオーボエの物悲しい旋律を支えるのは夏華のピアノのみ。
十四歳の中学生にはジジの心情を表現することは難しいが、自分のできる表現をしようと試みた。

それに寄り添うのはキム、アルトサックスの志保だ。
志保は小学生時代からサックスをやってきたこともあり経験は長い。このシーンでは志保の音の方が合っていると正二と麻衣は判断したため、このソリは志保に任せた。
ソリとなってハモると、さらに物悲しさは増していく。
木管全体のメロディーになり、強奏部分になる。
俊之がハープをかき鳴らす。男性のハープ奏者に観衆の視線がそっちに向いた。
しかし俊之はそんなことも気にせずにグリッサンドを決めた。
そして冒頭のオーボエソロが戻ってくる。

その間に俊之はさっと、横に倒したバスドラムの前に移動した。そこには鎖が乗せてある。
愛子はバスドラに、唯はフロアタムのチューニングを緩めたものの前に、先人はティンパニの前でスタンバイしている。
ピアノの音が途切れた瞬間。
バタバタバタバタバタバタバタバタ…！

あの時、ＣＤから聞こえてきたヘリコプターサウンドが再現される。
その間にユーフォを吹いていた匠はさっとトロンボーンに持ち替え、クレッシェンドをかました。
夏華が、ピアノの横に配置されたサスペンドシンバルを鳴らすと、テンポが急激に上がった。

『サイゴン陥落』。
主人公のキムとクリスが離れ離れになってしまうシーンだ。
冒頭のヘリコプターサウンドはベトナムから撤退するアメリカ軍のヘリの音の再現。
クリスはキムをアメリカに連れて帰ることになっていたのだがサイゴン陥落の混乱で結局二人は会うことができず、キムは取り残されてしまうのだ。
先人のティンパニの激しいリズムを合図に、金管主体のメロディーが始まる。その裏では高音木管の細かいパッセージが鳴っている。
そのメロディーはクラリネットやサックスに引き継がれ、俊之のスネアが鋭く鳴る。
ティンパニの二打で雰囲気が変わる。
木管の後からホルンが滑らかに流れてくる。二回目はそれがトランペットに変わり、トランペットが高音を当てるとすぐに夏華と唯はバスドラとトムに移動する。
リタルダントが懸かり、一番苦しい部分にやってきた。

直管楽器は延々とメロディーを吹き続ける。ホルンはハモり、裏では打楽器が延々とロールを続けている。
同じペースで十何小節も叩き続けるので、唯や夏華はもちろん、男子の俊之にも厳しいものがある。しかも今度はただ強く叩くだけではなく、クレッシェンド、デクレッシェンドまでかかっているのだ。
ティンパニの先人はひたすら4分音符を刻む。
そして崩壊を現すかのようなクラリネットの連符をきっかけに低音の下降音、木管の上昇音、ヘリコプターサウンドのクレッシェンドが絡まり合う。
シャアアアン！
それが最高潮に達した瞬間、愛子のクラッシュシンバルが一発鳴った。会場全体が静まる。
愛子が一番この曲で重要と考えていたのはここだった。愛子のシンバルと次の音の間には三年の年月が流れるのだ。
一瞬の間。
会場にいる愛、未来、泰徳を始めとする観衆も身動き一つしない。
麻衣は緊張感を保ったまま、そっと次の指示を出した。
『今がこの時』。

キムと元の許婚(いいなずけ)であるトゥイが決別するシーンで、旋律はとても美しいが裏には憎しみと怒りが混ざり合った部分だ。

サイゴン崩壊から三年。街の名もサイゴンからホーチミンに変わり、キムはまだそこでひっそりと暮らしていた。

トゥイは敵である北ベトナム側、ベトゴンに寝返り、新政府の高い地位に就いていた。

しかしキムを執拗に欲するトゥイは、キムの働いていたキャバレーの経営者のエンジニアに、サイゴン陥落前の罪を許す代わりにキムの居場所を言わせ、遂にキムはトゥイに見つかってしまう。

結婚を迫るトゥイにキムはクリスとの間にできた子ども、タムを見せるが、トゥイはなんとタムを殺そうとした。

そのため、キムはタムを守るため、クリスの残した銃でトゥイを撃ち殺すのだった…。（※1）

木管の柔らかなメロディー。

裏でティンパニとチャイムがメロディーに華を添える。

だんだん色々な楽器が加わり、いよいよクライマックスに近づいてきた。

トランペットが主体の荘厳なメロディーの後ろから、ホルンとユーフォ、テナーサックスが大きな波のように力強い対旋律を吹く。

ティンパニが鳴り、スネアが加わり、曲は終わりに向かう。

木管が半音階を駆け上がると、トランペットの難所に差し掛かる。

ファーストの祐二と竜二郎の音はまるで一本の音のように会場へと突き刺さった。

そして最後のロングトーン。

澪、達也、尚美、彩音、耕一、祐二、匠、愛子、俊之。

松子、真由子、祥子、正二、しおり、竜二郎、和音、和也、貴弘、

先人。

夏華、正樹、涼子、絵梨、志保、紗枝、理沙、秀平、浩輔、唯。

そして麻衣。

３０人の思いをのせ、『ミス・サイゴン』は終わりを告げた。

97話　番外編　3ー4　松中吹奏楽部（中ー下）（後書き）

※1
その後のあらすじを紹介しておきます。

トゥイを殺してしまった後、キムはエンジニアとタムと共にバンコクに飛びます。

1978年10月。
バンコクのキャバレーで働いていたエンジニアはクリスの友人で、クリスにキムを売った（キャバレーでキムはジョンに一夜を買われました）ジョンに再会します。
そしてキムとも再会しますが、ジョンはキムにあることを告げられませんでした。
キムはクリスの泊まるホテルに向かいますが、そこにいたのはクリスの妻、エレン。
そう。クリスは結婚していたのです。
キムはタムだけでもアメリカに連れて行って欲しいと言うキムだが、エレンは拒否。キムはせめて今夜クリスに会わせて欲しいと言って立ち去ります。
戻ってきたクリスはエレンから話を聞き、ジョンの制止を振り切ってエレンとキムとタムの元へ。
クリスはタムをバンコクのアメリカンスクールに通わせ、できる限りの援助をすると決意しましたが、キムの願いはタムをアメリカに、クリスに委ねることだけ。
キムもある決意をしてクリスに会います。そして、タムとクリスに永遠の別れを告げ、カーテンの裏に消えていきました。そして銃声

が一発。キムは皮肉にもクリスが残した銃で自分を撃ったのでした…。

ミス・サイゴン、ベトナム戦争についてはＷｉｋｉｐｅｄｉａなどを参考にしました。なにか間違いがあったら訂正をお願いします。

松方中学校編も終わりが近づいてきました。もう少しお付き合いいただけると光栄です。

98話　番外編　3－5　松中吹奏楽部（下）

「え？匠、島根に行くのか！？」
祐二が驚きの声をあげた。

1月。
コンクールはダメ金（※1）、管楽コンテストも出場はできたが優秀賞と、結局上の大会に進むことができないまま俺達の大会は終わった。途中で常套との合同練習などもやったが既にもうかなり前のことだ。
そして俺達三年生は受験生になっていた。
ちなみに新部長は正二、副部長は祥子。そして1年トップは秀平。
俺達は塾から帰るところだった。
「ああ。父さんが松江支社に転勤らしい」
松江は島根県の県庁所在地。そして俺は近くの桜田市に住むことになる。
「一緒に斎木（さいき）高校行けると思ってたのにな…」
斎木高校は県内屈指の吹奏楽強豪校で、ジョイントコンサートにも参加していた。
「祐二は斎木に行くのか？」
「ああ。学力的には五分五分だがな。愛子とか耕一も行くらしい。あいつらは余裕だろうけどな。確か島根は桜田東や彩稜高校が有名だよな。お前はどこに行くんだ？」
「桜田中央ってとこ受けようかと思ってる」
「桜田…中央？」
聞き慣れない名前に眉をひそめる祐二。
「新設校だ。潰れた私立高校の土地を市が買ったらしい」
「…おい、じゃあ伝統も何もないところに行くのかよ？部活もまともにできるか分からないんだぞ？」

俺の言葉を聞いて焦りだす祐二。
「大丈夫だ。あそこ、元はどこの高校だったか知ってるか？」
「どこだよ？」

「…桜田西」
「！！」
その学校名を聞いて息を飲む祐二。
「確か…、全国に十数回出場して支部内最強の高校と言われていたが理事長の死によって閉校に追い込まれたあの桜田西か？」
「ああ。だから練習環境は整ってる。それに」
「それに？」
「伝統を最初から作り上げて行くのも悪くないだろ？良くするも悪くするも自分たち次第って訳だ」

「全く…昔からお前は挑戦者だったよな」
沈黙の後に、祐二の表情が驚きから懐かしむようなものに変わった。
「管楽コンテストのことか？」
「あ～、あれもお前だった。調べてきて、先輩達も乗り気にさせて結局出場しちゃうことになったし」
祐二はそう言って、こう続けた。
「やっぱお前ユーフォニウムみたいな性格だわ」
「なんじゃそりゃ」
意外な言葉に思わず笑ってしまう。
「おいしいところ全部持ってくってことだよ」
「それはトランペットも一緒だろ？」
「いや、ユーフォは裏から全部だ」
そういっていたずらに笑ってみせる祐二。
「褒めてんのかけなされてんのか分からないな。なんか黒幕みたい

な扱いじゃないか」
「さあ？まあお前ならどこでも上手くやっていけるだろうよ」
「そりゃどうも」
そこからは黙って歩き続けた。
T字路に差し掛かる。
「お前受験いつだ？」
「3月6日だ。お前は？」
「3月8日。愛子達は推薦もらったから来月だけどな」
「そっか。ま、頑張ろうや」
「ああ。じゃあな」
そして俺達は別れた。

3月6日。
「試験初め！」
俺は試験会場である桜田中央高校で試験を受けていた。
最初は国語。愛媛県と傾向は違うものの、なんとか解ききる。

「ふう…」
最後の教科の英語が終わった。
立ち上がり、入り口に行こうとした時だ。
「お～い、庄吾大丈夫か」
「ちょっと…あんた死んでるじゃない」
後ろの方から声がする。
振り返ると、一組の男女がもう一人の男子を慰めているようだった。
一人の男子はこれといって特徴がなく、女子は活発そう、そして庄吾と呼ばれた男子はものすごく背が高かった。185はあるだろう。
「無理だ…。死んだ、落ちた、浪人だ…」

「あんた社会は完璧だっていってたじゃない。十分英語カバーできるわよ」
「そうそう。というか二人とも騒ぎすぎだろ。周りから注目されてんじゃんかよ」
そこまで聞いた所で入り口に加奈子を待たせていることを思い出したので、俺は試験教室を出た。
（にぎやかな連中だな…。まあ入学しても絡むことはないだろ）
俺はそのときそう思っていた。まさか一番長く時間を過ごすことになろうとは思っても見なかった。

そして3月21日。無事に桜田中央高校に受かった俺は、松山空港にいた。父さんはまだ仕事の引き継ぎがあるため、俺だけ先に桜田市に向かうことになった。島根に行くにはまず大阪の伊丹まで飛び、そこから島根へ戻らなくてはならない。
「13時5分発、伊丹空港行きの便に搭乗なさる方の搭乗手続きを開始します」
声を聞き、そっと立ち上がる。
愛媛ともお別れだ。
「感傷に浸ってるな」
「…なんでお前来てるんだ？」
横からの声。振り向くと…。
「そりゃ、先輩の旅立ちだからな。行かないと」
そこに立っていたのは泰徳だった。チャリで飛ばしたのだろうか。涼しい声とは裏腹に汗をかいている。
「どうして分かった？お前には言ってなかった気がしたんだが…」
「美奈から聞いた。同じ先生に習っている斉藤って子から聞いたらしい」
「澪か…」
「なんで言ってくれなかったんだ？」
「お前、今年から裏家業（※2）やってるだろ？忙しいかと思って

な。事後報告で済まそうかと思ってた」
「水臭いぜ」
「そりゃ失礼。悪かったな」
「まあ、いいけど…。で、眼鏡は？」
今気づいたのだろうか。泰徳は俺の目の辺りを指差す。
「コンタクトに変えた。高校ではキャラを変えようかと思ってな」
「匠が高校デビュー？似合わないな～」
「…お前見習って毒舌キャラにでも変えようかな」
軽く睨みつける。
「それもありかもしれねえな。まあ下手したら友達減りそうだが」
しかしひょうひょうと返されてしまった。
「…止めとくか。じゃあ、そろそろ行くな。わざわざ見送りありがとう」
「あ、そうだ」
「なんだ？」
なにかいい足りなさそうな泰徳に足を止める。
「コンクールのこと言いそびれてた。…まだまだ発展途上だなってのが感想だな」
「な！？」
口調が変わる。
「まず目立つのがクラリネットの音色が揃っていない。技術はあるんだろうがあわせる能力が足りないな。次に持ち替え。お前は三年間やってたから違和感はないが、ペットとホルンを持ち替えたやつがホルンの持ち替えの時、調の違いや管の長さからかピッチがあまり安定していなかった。とくに高音でピッチが取りづらかったようだな。ただシロフォンの子は上手かったし、ペットの高音もジャストなところで当たってた。後、ユーフォの一年は伸びそうだな。…楽しませてもらったよ」
「…ご挨拶だな。一応褒められたと思わせてもらう」
「まあご自由に。元気でな」

「ああ」
握手を交わすと、エスカレーターを上がって出発ロビーに向かう。
もう振り向かなかった。

そして今。俺は１５人の仲間とともに楽器を吹き続けている。
時にはトロンボーンに持ち替えたり、パーカッションに回ったり、小編成なりの大変さは変わらないが。
でも今の部活も楽しんで活動できているから悪くはない。

「匠。基礎セクやるか」
「ああ」
俺は先斗や加奈子のそばに座った。
「じゃあ、ロングトーンから、チューニングＢ♭からローＢ♭（※３）まで８拍４休の半音階で下がって上がるで」
「はい！」
息を吸う。
パーン！
それぞれの楽器から出てきた音は、暖かかった。

98話　番外編　3－5　松中吹奏楽部（下）（後書き）

※1
吹奏楽コンクールやマーチングコンテスト、アンサンブルコンテストでは金賞、銀賞、銅賞が各団体に贈られ、金賞団体の中から代表が選ばれます。ダメ金とは金賞だが代表になれなかったと言う意味で使われます。

※2
ブラス魂シリーズの中で、主人公泰徳くんはある活動をしています。詳しくはブラス魂シリーズをお読みください。

※3
チューニングB♭とは、合奏等でチューニングをするとき使う比較的出しやすいB♭（シ♭）の音で、ローB♭はその1オクターブ下をさします。
ただし、例外としてバリトンサックスはチューニングB♭の1オクターブ下は音域外です。

やっと松方中学編が終わりました汗

皆さん、主人公はまだ覚えていますでしょうか（笑）

次回からは本編に戻ります。

では。

９９話　期末大騒動

１２月３日（月）。期末テストも終了し、全ての科目が帰ってきた。

部活の前、先斗と唯は部室で話していた。

「…ねえ、先斗。期末どうだった？」

「難しかったよな…」

「見せて」

「いいけど」

得点集計票を見せる先斗。

「ちょっと！めちゃくちゃいいじゃないの！」

集計票をつき返して言う唯。

数学αは９４点、βは８７点。苦手なはずの理科総合Ａでも７５点は取っている。

校内順位も３５番だ。

「いや、拓也の見たらな…」

「へ？あ、拓也くんだ。テストどうだった？」

「まあまあだったかな」

部室に入ってきた拓也が答える。

「見てもいい？」

「別にいいけど」

そういって集計表を見せる拓也。

「…」

見たとたん無言になる唯。

「どうした？…なるほど」

唯を心配しつつ、拓也の集計用紙を見て納得する先斗。

数学αは９８点、数学Ｂは９６点、情報？においては１００点をたたき出している。

一番低いのは古典の５８点だがそれでも校内順位は１２番だ。

「古典が苦手なんだよな…」
「十分でしょ…。あ、そういえば庄吾は？」
庄吾が部室に来ていないことに気づく唯。
「お前、ＳＨＲの時の庄吾見てなかったのか？」

今回のテストは全てＳＨＲで返された。
唯は自分の点のみ気にしていたようだが、先斗は庄吾の様子もチェックしていたのだ。
「…あれは補習級の表情のヤバさだったぞ」
「誰が補習だって？」
振り返ると、庄吾がふてくされた顔で立っていた。
「あ、庄吾」
「補習はねえよ」
「英語大丈夫だったのか？」
「ほれ」
そういって表を見せる。

１ｌＢ　２８番　三上　庄吾

・現代文　６７点
・古典　７１点
・数学α　６５点
・数学Ｂ　５６点
・理科総合Ａ　６９点
・世界史Ａ　１００点
・現代社会　１００点
・英語Ｒ　３６点
・英語Ｗ　３５点
・保健体育　５５点
・家庭総合　５７点

・情報？　６９点
・音楽？　９８点

平均６７．５点
順位９２／２３７

「…なんか極端よね」
英語は欠点ギリギリなのに社会は両方満点、音楽も一問ミスだけだ。
「けらなきゃいいんだよ。けらなきゃ」

「なにやってるんだ？」
その時、匠が入ってきた。
「お、匠。お前期末どうだった？」
匠は普段教えてくれないが一応聞いてみた。
「…ん。まあまあだな」
案の定集計表は見せない。
そのまま話は流れるかと思った瞬間。

「匠。集計表落ちてたぞ」
弦楽部で匠の友達の佐野　僚がやってきて、集計表を机の上に置いた。畳むこともなく。
「お、おい！」
匠は焦って畳もうとしたが、その前に庄吾が、
「お、すげえ！」
と言って、身を乗り出したため机が動き集計表は舞い上がった。
そしてそれは先斗の手に舞い降りた。
「…やっぱりお前頭いいわ」
それを見て先斗は苦笑いした。

１ーＤ　１２番　黒田　匠

・現代文　９７点
・古典　９１点
・数学α　９５点
・数学Ｂ　９６点
・理科総合Ａ　９０点
・世界史Ａ　９１点
・現代社会　９３点
・英語Ｒ　９２点
・英語Ｗ　９５点
・保健体育　９０点
・家庭総合　８７点
・情報？　９９点
・音楽？　１００点

平均　９３．５点
順位　２／２３７

「…確かに」
全員が驚愕した。
「でもこれでも2位なんだ」
「1位誰だろ…」
そのとき茜が入ってきた。
「みんな。今日合奏だって」
「え？いきなり！？」
「明日西村先生が急に出張になったんだって。三十分後に基礎合奏だよ」
「やべ！音出ししなくちゃ」
「急いで！」

そして一分もしないうちに全員どたばたと楽器室を出て行った。

「さて。さっさと準備しなくちゃ」

茜は鞄から譜面入れを取り出す。

「あら」

譜面入れと一緒に何かが飛びだした。

「…頑張ってトップ維持しなくちゃね」

そう言って茜は集計表を鞄にしまうと、楽器室を出て行った。

１００話　緩やかな歩み

１２月６日（木）。今日も合奏だ。

「「よろしくお願いします！」」

基礎合奏が終わり、京が指揮台に立つ。唯の合図で全員立ち上がり挨拶をした。

「はい。期末も終わったんで、市の演奏会とアンサンブルにむけて頑張ろう」

「「はい！」」

「じゃあ『民話』」

「「はい」」

全員が準備を済ませ、楽器を構えたのを確認すると、京は指揮を降ろした。

最初から和志のクラッシュシンバルが激しく鳴った。

前奏はティンパニと中低音のリズムから始まる。一小節遅れて木管とトランペットがそれぞれ別の動きを入れ、ひかりのスネアが鋭くロールを入れた。

中低音とトランペットの掛け合いが繰り返され、伸ばしに入る。

デクレッシェンドする管と共に、スネアの刻みの音量も落ちていく。

「はい。ストップ」

そこで京は音を止めた。

「スネア、デクレッシェンドが甘い。ガクッと落ちるんじゃなくてアンプのつまみを下げていくイメージで」

「はい」

「バスとボーン。しっかりオクターブで根音（＊１）組まないと和

音が不安定になる。３人いるんだからきちんと合わせろ！それ以外もその音吹いてるのはお前ら一人ずつだけなんだからちゃんと鳴らせ！」
「はい！」
期末前よりも具体的に、細かく厳しく指示が入っていく。
一番遅く楽器を始めた茜達も既に楽器歴は半年。そろそろ初心者だからという甘えは効かない時期になってきた。
クラリネット、ユーフォ、テナーサックスのメロディー。
「クラ。低音域だからしっかり下の管まで息を入れないと鳴らないぞ」
「はい！」
そして中間部。ゆっくりとした金管のメロディーの部分に入る。
「倉橋。ｐ（ピアノ）が不安定だから音程が全然定まっていない」
「はい…」
加奈子も注意された。
（どうしたら直るのかなぁ…）
加奈子はなかなか直らないこの癖を危ぶんでいた。
ｆ（フォルテ）は綺麗に鳴る（らしい）が、ｐになると急に音がヒョロヒョロと細くなってしまうのだ。
匠に練習に付き合ってもらっているが、匠はアンサンブルでパーカッションを担当するため最近はそっちに行くことが多く、曲の合わせで精一杯の状況だった。
アンサンブルにせよ、合奏にせよ、ｐの部分は出てくるので克服しなくてはならないが…。

「はあ…」
合奏終了後、ため息をつく加奈子。
「加奈子、大丈夫？」
それを聞いて横の里穂が声をかける。
今回の演奏会では里穂がトランペットの１ｓｔを担当することに

なっていた。アンサンブルに参加する庄吾の負担を減らすためだ。
ちなみに加奈子は一人なので、スコアと照らし合わせて和音やメロディーが消えないように京や静香が作り替えた譜面を使っている。

「うん…」
「最近元気ないね。アンサンブルとの両立きつい？」
「…それは慣れたんだけどpがうまく鳴らせなくて。後４ヶ月で後輩が入ってきてパートリーダーになるから早く初心者卒業しなくちゃいけないのに…」
金管での初心者は加奈子だけだというのも加奈子を焦らせていた。
トロンボーンは加奈子一人だから必然的に加奈子がパートリーダーになるのだ。

「黒田君はどう言ってるの？」
「匠、アンサンブルの持ち替えで最近一緒に基礎練習できてないから…」
「そっか…。ちょっと吹いてみてくれる？」
「え、うん」
「まずf（フォルテ）でB♭（シ♭）」

パァーン！

安定した輝かしい響きが楽器から飛び出す。

「じゃあmf（メゾフォルテ）で」
パーン！
「mp（メゾピアノ）」
パ～ン！

「p（ピアノ）」

パワワァ〜ン…。

やはり音量が小さくなるごとに音の張りがなくなって不安定になっていく。

「あ、分かった」

理穂はすぐに頷いた。

「加奈子、pで吹くとき息のスピード変えてるでしょ」

「え？」

「たぶん口でいじってるからそこで勢いがなくなっちゃうのよ」

「あ…」

ずばりといわれたので何もいえない加奈子。

「確かに音量は下がるけど支えがなくなっちゃうから不安定になっちゃうの。私もよくそうなって先輩に指摘されてたよ」

「そうなんだ…」

「じゃあ問題です。音のスピードを変えずに息の量を減らすにはどうしたらいいと思う？」

「…息の太さを細くする」

「そう！ろうそくを吹き消すイメージでやってみるとわかりやすいと思うよ。後、デクレッシェンドの練習もすると息のスピード保ちやすいと思う」

「ありがと。練習してみる」

「あ！それとさ」

お礼を言ってまた楽器を吹こうとした加奈子を止める理穂。

「そんなに焦り過ぎなくていいと思うよ」

「え？」

「最初はみんな初心者なんだもん。それに…」

「それに？」
「パートリーダーは必ずしも何でもできなくちゃいけないわけじゃないよ。パートをまとめるのが役目だからね。加奈子らしくパートを引っ張ってくれれば後輩も安心してついて来てくれると思うよ」
「…ありがと！」
加奈子は笑って見せた。
「頑張ってね！じゃあ私今日用事あるからお先に」
「うん。わざわざありがとう」
「ううん。またね～」
そういって理穂は音楽室を出て行った。
「よし。練習！」
加奈子は気合を入れると、再び楽器を構えるのだった。

１００話　緩やかな歩み（後書き）

１００話まで来ました！
何話まで続くかは分かりませんが、今後もお付き合いよろしくお願いします！

１０１話　相談

「ふう…」
合奏後、京は職員室でほっと息をついていた。
教師になってもう九ヶ月。
新設校に来たこともあって公民の教師は自分だけ。しかも全クラス担当だから負担も大きい。
「西村先生。どうぞ」
そっと置かれたコーヒー。
「あ、どうも…。って梶原先生！すみません、わざわざ」
それを置いた主を見ると、それは静香だった。慌てて立ち上がってしまう京。
「いいえ。ちょうど私も飲みたかったから入れたのよ。最近吹奏楽部はどうかしら？年末で少し忙しくて坂根さんのレッスンもしてあげられてないんだけど…」
「なんとかやってますよ。最近は来年も見据えてちょっと厳しくし始めていますが」
コーヒーを飲みながらそう答える。
「あら。どうしてかしら？あの子達なら大丈夫だと思うわよ。しっかりしたメンバーが揃ってるし」
「信頼はしてるんですがね。今まで大きなトラブルがなかったんである意味怖いんですよ。…高校時代のことを考えると」
「そうね…」
少ししんみりとした様子で頷く静香。
「そういえば校内発表はいつにする予定？」
「１３日の放課後にと思っています。審査員お願みできますか？」
今回は大会も絡んでいるため、審査員を置くことにしていた。
数学担当で元オーボエ奏者の仲里先生と、打楽器担当の杉原先生、音楽の朝倉先生には既に承諾をもらっていたが、もう一人がまだ決

まっていなかったのだ。
「ごめんなさい。１３日は理科の研修授業があるから出れそうにないわ…」
「そうですか…。他に誰か頼めそうな人いらっしゃいませんか？」
「そうねえ…。あ、ちょっと待っていて」
そう言うと静香は自分の机に向かい、メモ帳を取り出すと、電話を掛け始めた。

「もしもし。常套中学校ですが」
事務員らしき人が電話に出る。
「もしもし。島根県の桜田中央高校の梶原と言う者ですが、立石先生はいらっしゃいますでしょうか？」
「あ、はい。ではお繋ぎしますのでお待ちください」
しばらく待つ。
「もしもし。梶原先生ですか。お久しぶりです」
「あ、どうも。お久しぶりです。急にすみません」
立石（たていし）　和則（かずのり）。常套中学校吹奏楽部顧問で音楽担当教師。静香と同じくフルート奏者だ。

「いえいえ。構いませんよ。今日はどうなされましたか？」
「実は今校内でアンサンブルの校内発表会を企画していまして。審査員を探しているんですがなかなか適任者がいないんですよ。誰か適任者がいらっしゃいませんか？」
「そうですね…。プロでなくてもよろしいですか？」
「校内審査なので楽器経験者であれば問題ありません」
「そうですか。他に審査員は？」
「楽器経験者の先生３人と音楽教諭に頼んでいます」
「ではもうひとりいれば十分ですね。ひとり適任者がいますよ。プロ級の奏者ですし音楽センスも確かです。発表会はいつですか？」

「今月の１３日です」
「そこならたぶん大丈夫でしょう。頼んでみますので今週中にまたお電話させていただきます」
「ありがとうございます」
「いえいえ。では」

京の所に戻り、話をする。
「プロ級ですか…。なら安心ですね。ありがとうございます」
「いいえ。じゃあ私はこれで帰るので」
「お疲れ様でした」
「お先に」
職員玄関に出る。
「あ、そういえば相手の名前を聞くのを忘れたわね…。今度掛かって来た時に聞いてみなくちゃ…」
そう呟いて静香は家路に着いた。

１０２話　Ｌｅｔ、ｓ　ｅｎｓｅｍｂｌｅ！

１２月１０日（月）。
もうすぐ校内大会が迫ってきていた。
それぞれメンバーは練習を重ねている。

「もう少し柔らかく吹くところと鋭いところ使い分けられるようにしたいな…」
「うん…」
匠のアドバイスに頷く美香。
管打８重奏組は大まかな形は整ってきたので細かい部分を練習していた。
今日は早くなった部分のピッコロソロから演奏している。
この曲では美香もフルートとピッコロの持ち替えをする。運指はほぼ一緒なのだが、楽器が短い分息のコントロールが難しくただただ鋭い音だけになってしまうのだ。
「家でも練習しておくよ…」
「家でピッコロの音出せるのか？かなり響くけど（＊１）」
庄吾が聞く。
ピッコロはかなり音が飛ぶ。なにしろオーケストラのｆｆのトゥッティの中でも動きが音がはっきり聞こえるのだ。
「大丈夫。防音室あるから」
「「防音室！？」」
全員が驚く。
「お母さんがピアノ教室やってるから…」
「あ、そんなこと言ってたな」
「じゃあ練習よろしく。じゃあもう一度早くなったところから」
そういって匠はメトロノームをセットしてボンゴの前に立つ。
「１，２、３」

ボンゴの音色と共にトゥッティのリズムが奏でられ始めた。
その頃打楽器のメンバーも音楽室でアンサンブルの練習をしていた。
「配置どうしようか…」
3人は楽譜とにらめっこしながら悩んでいた。
この曲で使う打楽器はパーカッション1がグロッケン、マリンバ、シロフォン。パーカッション2がドラムセット、トライアングル、ビブラフォン、サスペンデッドシンバル。パーカッション3がティンパニ、サスペンデットシンバルだ。
担当はそれぞれ優樹、ひかり、和志となっているが、トライアングルで困っていた。
「間に合わないよね…」
中間部の終わりでひかりがビブラフォンを担当するのだが、その後ですぐにトライアングルを叩き、2小節でスネアドラムに移らないといけない。
「…勝手に変えるのってだめかな?」
「え?」
和志が呟いた。
「俺ならなんとかトライアングル叩けるんだけど」
「あ…」
迂闊だった。
「それありかもしれない」
「でも楽譜どおりにやらなくて失格とかにはならないかな…」
「大丈夫だよ。音を減らしてるわけじゃないんだから」
「うん…。そうだね。じゃあそれで行こう」
「OK!じゃあ最初からメトロなしでやろうか」
「「はい!」」
さっとそれぞれの持ち場につく3人。
優樹がシロフォン、ひかりがドラムセット、和志がティンパニの

前に立つ。

最初はシロフォンのソロから。
スネアとティンパニが加わる。しかし、すぐに崩れだす。
シロフォンのメロディは１６分音符が多いからこけやすい。ティンパニは４分音符でずっと刻んでいたのでなんとかテンポキープはできていたがティンパニソロで崩れた。
「ストップ！」
冷静にリズムを刻んでいたひかりもおもわず止める。
「…ごめん」
優樹がしょげた様子で謝る。
「どうしたら合うかな…」
ひかりは指揮やメトロノームのありがたさを改めて味わっていた。
個人個人の中のテンポが合わないとアンサンブルは合わないのだ。
「…ひかり。そういえばバンドで合わせる時ってどうやってた？」
ふと思いついたように和志が呟く。
「まずベースとドラムのリズム隊で合わせて、それから全体で合わせたよ」
「リズム隊で合わせるとき意識してたことは？」
「お互いを見あって…あ！」
「どうした？」
「ちょっとビデオチェックしてみよう！」
視聴覚室の端に置いたビデオカメラとテレビの前に集まる３人。
通し練習をした時に楽器間の移動のチェックをするために撮っていたのだ。

ビデオカメラを接続したテレビに移る３人の姿。
メトロノームのクリック音が流れる中演奏が始まった。
「やっぱり！」
演奏中の自分達を見て頷くひかり。

３人はメトロノームを見るか、鍵盤を見るかでお互いにアイコンタクトが取れてなかったのだ。
「合わせるならお互い見合って合わせないと…」
「でもシロフォン鍵盤見ないときついよ…」
「う～ん…」
暗譜はできているが、やはりまだ厳しい。
「じゃあテンポをキープしなおす場所を決めよう」
「あ、そうだね。ティンパニソロは打面見なくてもいける？」
「うん。じゃあその前のスネアと同じリズムを叩くところで修正して」
「分かった」
３人はまた楽譜とにらめっこしながらアイコンタクトの位置を決め始めるのだった。

１０２話　Ｌｅｔ、ｓ　ｅｎｓｅｍｂｌｅ！（後書き）

＊１，作者の経験談ですが、高校から２００メートル離れた駅からも微かに聞こえました。

１０３話　謎の審査員

１２月１３日（木）、昼。
桜田空港に立つ一人の男がいた。
「立石先生も急なんだからな…。まあいいか。さて、どうやって行こうか…。あ、桜田中央駅への直行バスがあるじゃんか。これで行こう」
その男はキャリーバックを引いて、バスの方向へと歩き始めた。

その頃桜田中央高校は昼休みの時間を迎えていた。
「優樹！食い終わったか！？」
和志が後ろの席の優樹を呼ぶ。
「おう！行くぞ！」
そう優樹が答えると、二人は教室を飛び出していった。
「おい、あの二人最近ずっとああだけどどうしたんだ？」
二人の共通の友人である弦楽部の有田（ありた）　正行（まさゆき）が同じく友人の龍也に尋ねる。
「今日、アンサンブルの校内発表だから昼練習してるんだよ」
エビフライをつまみながらそう答える龍也。
「お前も行かなくていいのか？」
「金管は口使いすぎるとばてるからな。朝練習で合わせたから後は放課後にちょっと練習するだけだ」
「金管かぁ…」
「弦楽部とコラボもいいかもな。入学式とかでありえるかも」
「お。面白そうだな。杉原先生に頼んでみようかな」
龍也の呟きに正行が乗る。
「じゃあ俺も西村先生に頼んでみよう」
そうやって話はまとまっていった。

放課後。
全員が演奏するのでアップをそれぞれした。
今日は合唱部と弦楽部、美術部やＥＳＳ部の文化部、そして教職員が観客役として協力してくれる。
本番の緊張に少しでも近づけるためだ。
その数約１００人。
視聴覚室の前の部分がステージ、そして審査員席が並び、その周りに観客席となっている。
そして全員にプログラムが配られた。

＝＝＝

「大丈夫だって」
そう言って茜が励ます。
「あれ？」
そう言った茜だが驚いた声をあげる。
「どうしたの？」
弥生が顔を出す。
「審査員見てみて」
そう言われて弥生は審査員席を見た。
右から仲里先生、杉原先生、朝倉先生、そして京が並んでいる。
そして…
「…中学生？」
少し背の低い、大人びた顔の中学生が左端の席に座っていた。
「どうした？」
匠が顔を覗かせる。
「え…？」
そしてすぐにその顔の色が変わる。
「…泰徳」
審査員席に座っていたのは泰徳だった。

１０４話　最強中学生の講評

驚いている間に進行役で放送委員会委員長の高岡（たかおか）　千草（ちぐさ）がマイクのスイッチを入れて開会の挨拶をした。

「ただいまから、吹奏楽部のソロ＆アンサンブルコンサートを行います。ソロ部門１番。テナーサックス、吉岡　奈津美。曲は『ダニー・ボーイ』です」

奈津美は一礼をして、深く息を吸うと、ゆっくりメロディーを吹き始めた。

テナーサックス特有の渋い音色が会場に響く。

明るく、物怖じしない性格の奈津美は素直に演奏を楽しんでいた。

その姿に唯は感銘を受ける。

（なんか悔しいな…）

唯は本番に弱いのを自覚していたため、余計そう感じるのだろう。

無伴奏なのだが、そんなこともものとせず、奈津美は曲を吹ききったのだった。

パチパチパチパチ！

会場に拍手が溢れる。

奈津美は礼をすると、脇の控え席に座った。

慶太がバリサクを抱えて入場してきた。舞台切り替えの間に泰徳は講評を書く。

＝＝＝

・吉岡　奈津美『ダニー・ボーイ』

技術　Ｄ
表現　Ｃ

まだまだ技術は荒削りだが表現力は伸びそう。フレーズの取り方を研究することが必要。

――――――

二人はお互いを見て頷く。先斗のピアノの前奏が始まる。
ピアノの八分音符のパッセージが数回繰り返されると、慶太は深く息を吸い、ソロを奏で始めた。
本来の譜面よりオクターブ低いため雰囲気もかなり違う。
サビに入る。
シンコペーションが多用されていて、なかなか厳しいが何とか吹ききった。
サビが終わり、冒頭のピアノのリズムが入るがすぐに終結部へと向かう。
キメのリズムで曲は終わった。
泰徳は評価を書く。

＝＝＝

一礼し、そっとトランペットを構えると演奏を始めた。
暖かな音色がまっすぐ飛んでいく。
経験者であるため音は比較的安定しているが、泰徳は少し違和感を覚えた。
特に跳躍部分。無駄に音が膨らむ。
（…後押しだな）
泰徳は演奏終了後、すぐにペンを取る。

＝＝＝

１０４話　最強中学生の講評（後書き）

※1、吹奏楽バージョンの演奏のシーンはにっくん♪さんの小説、奏～Ｋａｎａｄｅ～の『第３０話　ＴＲＵＴＨ！』に描かれています。

※２　ウインドシンセサイザーとは電子楽器の一種で、管楽器の奏法でシンセサイザーをコントロールできる楽器です。サクソフォンの運指を基にしているのでサクソフォン奏者には演奏しやすい楽器です。

１０５話　限界を超えて

「続いてアンサンブル部門に入ります。１番、クラリネット二重奏。東　茜、有吉　弥生。曲は『風のとおり道』です」

アナウンスの後、二人は一礼をして楽器を構える。弥生が１ｓｔ、茜が２ｎｄだ。

弥生が楽器を縦に振り合図を出し、曲が始まった。

独特のリズムが奏でられ始める。

二人が吹いている音は違うのだが、二人の息はぴったりなので全く崩れない。

そしてあの有名な旋律に入った。

弥生がメロディーを奏でる下で茜が伴奏を奏する。

弥生が思いきり歌い、それを茜が支える様子が泰徳には印象に残った。

＝＝＝

――――――

すごい成長率…」
「え？」
「梶原先生からきいたんだとさ」
匠がフォローを入れた。
「そうか…」
「悪いが演奏聞かせてやってくれないか？なんか金管の連中かなり期待してるみたいだから」
「いいが…楽器がないぞ？」
そこに先斗が口を挟んだ。
「マッピはある？」
「はい」
「なら楽器貸せる。B♭管とE♭管しかないけど…」
「ならE♭管お願いします」
「分かった」
「あ、後ピアノある曲なんですけど伴奏できる人いますか？」
「譜面は？」
「これです」
そういって泰徳は譜面を渡した。先斗は楽譜に一通り目を通す。
「十五分もらえるか？」
「え？」
「俺伴奏者やるよ」
「あ、はい…」
泰徳は拍子抜けした様子でそう答えた。

十五分後。
音楽室の前部分にステージが用意され、泰徳はチューバを抱えて座っていた。
E♭管のフロントアクションモデルで公立の高校にあるのは珍しい型だ。
そしてピアノの前には先斗。

演奏の準備ができた。
「では、演奏します。『大きな古時計変奏曲』です」
初めは先斗のピアノから始まる。
先斗が弾き始めた瞬間、泰徳は驚いた。
（インテンポ！？）
この曲のピアノ伴奏は泰徳も弾けるが、譜読みの段階ではゆっくりとしか弾けなかった。
だが先斗はその伴奏を１５分で譜読みして、さらにインテンポで演奏しているのだ。
しかし驚いている場合ではない。泰徳はすぐに楽器を構えなおした。
主題は『普通の大きな古時計』の旋律だ。
少しテンポを揺らして演奏しているが、先斗はそれに合わせてくる。
（…こいつ何者だ？）
泰徳はそう思ったが演奏に集中することに努めた。
短い間奏をはさみ、第一変奏に入る。
第一変奏は８分の６拍子。
ハ長調になっているので４番管の酷使が激しいが、泰徳は涼しげな顔で吹いている。
そして第一変奏が終わると、先斗の間奏。
１５分で仕上げたとは思えないほど涼しげな顔で弾く先斗。
（…ちょいテンポ上げてみるか？）
そこで第二変奏はテンポを上げてみた。十六分音符の列挙だが、フィンガリングが完璧なのでしっかりと聞こえてくる。先斗はそれにもついてきた。
（…よし）

泰徳は決意を固める。

第３変奏。泰徳は自分の限界に挑んだ。

第３変奏は１６分音符に加え、主題のメロディーが旗上向きの４分音符として加わっている。

なのでかなりのハイ・テクニックな楽譜だ。

急にテンポが上がったことは曲を聞いたことのある匠は察知していた。

（おい泰徳、無茶じゃねえか…？）

先斗もさすがにそれに気づいたのか目の色が変わった。

泰徳の１６分音符に喰らいつくように追いかける先斗。ハイテンポにも関わらず二人の息はぴったりだ。

そして最後の盛大な部分。テンポがゆっくりに戻るはずがそのまま突っ切り、最後はマウスピースを外した超高音で曲は終わった。

先斗も泰徳も息切れ切れだ。

「ブラヴォ～！」

何も知らない部員達は純粋にその演奏に賞賛を送ったが、匠だけは違った。

「泰徳」

「な、なんだ？」

息をつきながら泰徳は返す。

「ちょっと、来い」

そう言う匠の顔はものすごく怖かったため、泰徳は素直に従った。

近くの教室に入る二人。

「この…馬鹿野郎！」

匠は泰徳を一喝し、ビンタをかました。

「な、なんだよいきなり！」

普段見せない激しさに泰徳は驚いた。

「お前な…心臓病あるんだろう？」
「あ、ああ」
うつむいて答える泰徳。
「ならあんな無茶すんな…」
急な声の変化に顔を上げると、匠の目は潤んでいた。

泰徳は未熟児として生まれたため、元々心臓に障害があった。そのため他人よりリスクが大きい。
実際、１年の７月、学校で突発性拡張型心筋症を発症し、救急車で運ばれると言う過去があった。

「…悪かった。でも挑戦したかったんだ…」
「何に？」
「西掛先輩に」
「…確かに先斗も喰らいついてきていたな」
匠も先斗のピアノの腕前には驚愕していた。
先斗が匠の前でピアノを弾いたのは『ＳＡＫＵＲＡ』の時以来だったからだ。
「…挑戦したい気持ちは十分分かるが無茶だけはしないでくれよ？」
「…分かった」
泰徳はしおらしく返事を返した。

１０６話　質問の嵐

その後、音楽室に戻ると女子達が駆け寄ってきた。
そして質問攻めが始まる。
「ねえ！なんでそんなに上手いの！？ウォームアップって何やってる！？」
「え？あ、ウォームアップはそれぞれなんでいろいろ試して自分の一番やりやすい方法でやったほうがいいと思います」
「なんだかフィンガリングがスムーズにいかなくなったんだけどどんな練習をしたらいいと思います？」
「あ、木管ならまず連結狂ってるかもしれないんでメンテ出してください。金管も急に動きおかしくなったらロータリーやピストン疑うんで」
「タンギングがなかなか早くならないんだけど…」
「あ、楽譜提供するんで練習してみてください」
それぞれ唯、弥生、奈津美と質問が続くが、泰徳はすらすらと返す。
「…泰徳くんすごいな…」
遠くからそれを眺めていた先斗が匠に話しかける。
「ああ…あのカシマシ娘達と渡り合ってる…」
その後も質問は続いた。
いつの間にか質問は雑談に変わる。泰徳は相変わらず女子に囲まれていた。
「おい！下校時間とっくに…。ってなんで竹林くんが残っているんだ！？」
入ってきた京が驚く。
「え？まだ６時じゃないですか。下校時刻７時ですよ？」
そう言って時計を指差す優樹。
「…あれ壊れてる」

「え？」
先斗は携帯を取り出す。
１９：２６
時計は無常に時間を示した。

「嘘だろ！？」
それを聞いた泰徳は慌てた。
飛行機の離陸時間は１９：４０。それが最終だ。
「どうしよう…」
「ごめん…おしゃべりに夢中になっていたから…」
唯も顔を青くしている。
「誰かの家に泊める？」
「そうだな…じゃあ匠頼んだ」
「悪い。今日両親揃って出張で叔母さんが来てるんだ。気難しい人だから無理だ…」
「そうか…。男子電話してみてくれるか？」
匠がそう言うと、残る６人が電話をかけ始めた（田中家は龍也）。
「うち無理」
「うちもだ」
次々と返ってくる答え。
「後は…」
そういって電話を続ける先斗を見つめる１５人。
「あ、分かった。じゃあよろしく」
そういって電話を切る。
「ＯＫ！」
「よし！じゃあ泰徳、今夜は先斗の所に行ってくれ」

「分かった。西掛先輩。よろしくお願いします」
「よろしく」
「ちょっと待った！　竹林くん。家には電話したか？」
行こうとした二人を京がとめる。
「あ、まだです」
「なら西掛の家に着いたら連絡をしてくれ。あと、私にも頼む」
そういって電話番号をメモに書き、渡す。
「分かりました」
「じゃあ行こうか、泰徳くん」
「はい」
そう言って泰徳はキャリーバックを引きながら先斗についていった。

１０６話　質問の嵐（後書き）

短いですが、調整のためです。

１０７話　向上心

家に着く。
「まあ、いらっしゃい。狭いところでごめんなさいね。愛媛から来たんでしょう？私の兄が愛媛にいるからよく行くんだけどいいところよね。ご飯は食べるわよね？お口に合えばいいんだけど…！」
「…」
「悪い。うちの母さんいつもあんなんだから…」
小百合のマシンガントークにただただ呆然としている泰徳に先斗がすまなそうに答える。
一階のリビングに入る。
「いらっしゃい」
出迎えたのは海斗。
「どうもすみません。急に…」
「いいのよ。ちょうど都合がつくメニューだったから」
そういって席を勧める小百合。
「ありがとうございます」
「今夜は？」
先斗が聞く。
「クリームシチューよ」
そう言って小百合はキッチンから料理を運んできた。

メニューはクリームシチューにフランスパン、オムレツとサラダだ。
「う、うまそう…」
つい声に出してしまう泰徳。
「あら、うれしいわ～。さあ召し上がれ」
「「いただきます！」」
３人揃って手を合わせた。

「おいしかったですね…。先輩のお母さんの料理…」
「調理学校出てるからな」
先斗の部屋。
小百合は客間を勧めたが、泰徳は先斗の部屋にお邪魔することにした。
「へえ…。西掛先輩、最初はトロンボーン希望だったんですか」
「希望者が多すぎてアウトだったけどな。だからチューバは第3希望」
雑談をする二人。
「僕はフルートをやりたかったんですが、第二希望でトロンボーンになったんです」
「でも今はチューバだよな？」
「チューバの子が辞めちゃって…」
「ああ、よくあるパターンだな」
「そうなんですか？」
「俺らの一つ上がそうだったからな。おかげで中二のコンクールは息絶え絶えだった…」
しばらく話した後で、泰徳は本題に触れることにした。
「西掛先輩、ピアノ何年やっているんですか？」
「え～っと、小学校入学する前からだから１０年くらいかな。途中でレッスン休んだから実質はもうちょっと短いけど」
「そうなんですか…譜読みの速さに驚いたんで。どうやったらあんなに早くできるんですか？」
「慣れかな。片手も両手もそんなに関係ないし」
「初見のとき心がけていることってあります？」
「そうだな…手元を見ないで楽譜の少し先の小節の音を見ることかな」
「へえ…」
「どうした？」

さっきと逆に質問を繰り返す泰徳の様子を不審に思ったのだろうか。先斗が泰徳に聞き返す。
「いえ、俺負けず嫌いなんでいろいろ知りたいんですよ」
「そうなんだ。…それがたぶん泰徳くんの強みだと思うよ」
「え？」
意外な言葉に驚く泰徳。
「上手くなりたいって言う欲求がかなり強いから短期間でプロ級になったんだと思うんだ。なんか上から目線で悪いけど」
「いえ。…ありがとうございます」
「君を見ていて先輩を思い出したよ」
「…先輩？」
「倉田先輩って言って今彩稜高校の音楽科にいるんだ。半年しか一緒に活動しなかったけど集中力がハンパなかった」
「へえ…」
「だから君はすごい奏者になると思う」
「…ありがとうございます」
沈黙が続いた。
「…なんか恥ずかしくなったな。ちょっとお茶持ってくる。竹林くんも飲むか？」
「あ、はい」
先斗は少し顔を赤くして階下に下りていった。

先斗が階下から戻ってくる。
「泰徳くん…あ」
「スウ…スウ…」
泰徳は眠っていた。
「あんな無茶したからな…。仕方ないな」
先斗は毛布を持ってくると、泰徳にそっとかけるのだった。

１０８話　ベタｖｓベタ

１２月１６日（日）。
今日は市の定期演奏会の二日目だ。
今日の午後が桜田中央高校の出番である。
「寒い…」
桜田市民ホールの裏の搬入口。
桜田中央高校のメンバーは楽器搬入を進めていた。
「確かにな…。ティンパニのフレーム冷たい…」
先斗と優樹はティンパニを運んでいる。
「急いで！あとちょっとで集合時間だよ！」
唯が急かす。
「これで最後か？」
「うん。じゃあ管は楽器出して」
「「はい！」」
部員達はすぐに二階の楽器置き場に急ぐ。
なんとか集合時間には間に合った。

「どうした。息切れ切れだぞ」
チューニング室に入ってきた京がメンバーの様子を見て驚く。
「意外と搬入に戸惑ってしまって…」
「おいおい。来年は楽器もっと増えるんだぞ。打ち合わせ頼むぞ」
「はい…」
「じゃあ音出し１５分したらチューニング！」
「はい！」
返事を返すと、部員達はそれぞれ楽器を暖め始めた。
チューニング後、舞台袖に移動する。
「編成でか…」

前の学校は桜田三中だった。
三年生が引退しても部員数は６０人以上。中学校では市内最大級バンドである。
ちょうど三中の入場が終わった辺りにメンバーはやってきたため一曲まるまる聴ける。
「プログラム１５番。桜田市立第三中学校。演奏曲目、『アルヴァマー序曲』。指揮は影山（かげやま）　千晶（ちあき）です」
「ベタな選曲だな…」
アナウンスを聞いて龍也がおもわず呟く。
「ベタ？」
拓也がそれに反応する。
「ああ。『アルヴァマー序曲』は吹奏楽経験者なら一度は耳にしたことのある曲って言われてるんだ。まあ、『バンドのための民話』もそうだけどな」
「へえ…」
そんなことを言っているうちに、指揮が上がったのでふたりは口を閉じた。

金管主体の勇ましい序奏。
シンバルも輝かしく鳴っている。
「かっこいい…」
反対側の舞台裏にいた和志も目を輝かせていた。
序奏が終わると低音とトロンボーンの刻みが始まる。
さらにタンバリンがそれに加わる。
この刻みはひたすら繰り返されるので、トロンボーン殺しとも呼ばれるほどだ。
そこに浮かび上がってきたのがホルンとクラリネット、サックスのメロディー。
それにトランペットの１６分音符が絡み合ってきた。
そして三連符を含んだ印象的なメロディーをトランペットが奏で

る。
これが繰り返されると、リタルダントと共にテンポが落ち、中間部に入った。
トランペットの暖かいメロディーをクラリネットが引継ぎ、ホルンの対旋律が滑らかに入る。
その旋律が絡まりあうと音楽は中間部の最も盛り上がる部分に達した。
クラリネット、サックス、トランペット、フルート、ユーフォが旋律を歌い上げる。
それが静まると、チューバの一小節のみのメロディーが入った。
先斗がそれを吹くチューバ奏者をじっと見守っていたのは言うまでもない。
それを合図にテンポが戻り、序奏が少し変形されて奏され、主題に戻った。
さっきと同じメロディーが繰り返されるが、さっきとは少し感じが違う。
間奏部分の緊迫感がさっきよりも大きいのだ。
間奏部分が変形され、一瞬三拍子になる。指揮者が大きく振りかぶった。
金管の中間部と同じメロディーに、冒頭のリズムを変形させた木管の対旋律。
壮大なクライマックスだ。
この部分を上手く仕上げられるバンドは少ないのだが三中は丁寧に仕上げてきていた。
そしてラスト。
木管が同じリズムを刻み、それにどんどん楽器が加わっていく。
低音のメロディーが一小節だけ奏でられる。
盛り上がりが最高潮に鳴った瞬間、シンバルが一発鳴った。
木管のトリル。
最後のトゥッティのリズムで曲は終わった。

パチパチパチパチ！

拍手が鳴る。照明が暗くなった。

「よし、入場だ」

管の１３人は入場を始めた。

椅子と譜面台がどんどん外に出され、ステージがガラガラになる。

搬入が終わり、京が入場すると照明がついた。

アナウンスが入る。

「１６番。桜田中央高校。演奏曲目、『バンドのための民話』。指揮は西村　京です」

京は一礼をして指揮台に上がる。

全員の準備ができていることを確認すると、京は指揮を上げ振り下ろした。

１０９話　『吹奏楽のための民話』

クラッシュシンバルが激しく鳴る。
堰を切ったように始まる序奏部。
中低音、木管、トランペットの順に入ってくる。
中低音の和音がしっかりと決まってきたため、重なってきても綺麗に聞こえた。

ジム・アンディ・コーディル作曲のこの曲、日本では１９６０年代～１９７０年代に大ヒットした曲である。「民話」「バン民」の通称で広く親しまれ、当時の吹奏楽経験者は必ず耳にしたはずだ。
現在でも吹奏楽曲では有名な一曲で、２００８年にはアメリカの大手出版社ハル・レナード社が、再販新譜として出版した。

トランペットの動きが繰り返され八分音符のパッセージが最高潮に達した瞬間、デクレッシェンドがかかった。どんどん楽器が抜けていく。
伸ばしなので動きがあるのはスネアドラムだけ。
正確に、淡々とリズムを刻むひかり。その表情は真剣そのものだ。

そしてスネアも静まった瞬間、クラリネットとテナーサックス、ユーフォニウムの主題が始まった。
スクールバンド向けに作られた曲にしては珍しく憂いのあるメロディーで、これがこの曲の魅力だとも言われている。
クラリネットのシャルモー音域（※１）が美しいこの旋律を支えるのはチューバとバリトンサックス、スネアドラム。そして優樹のトライアングルだ。
涼やかな音色が美しい旋律をさらに際立たせる。

主題が終わると、和志のシンバルの一打と共に金管が流れ込んできた。優樹がティンパニに移る。
メロディーはトランペットが加わり、オクターブが上がったことで勇ましい印象に変わる。
リズム隊はシンコペーションの多いリズムながらも正確に決めた。
リタルダントがかかり、ティンパニとチューバの八分音符の刻みが聞こえ、フェルマータ（※2）がかかり音楽が静止した。

始まったのはクラリネットのメロディー。さっきよりも憂いが増したように聞こえる。それにホルンとサックスが対旋律を絡める。それを支えるのはバスクラの代わりのチューバ。ここでは影譜（※2）の扱いだがバスクラがいないから仕方ない。
ここからは金管アンサンブル。トランペットの旋律を他の楽器が支える。
一人一人の責任が大きいが、六人はしっかりと役目を果たした。
チューバとトロンボーン、ホルンとユーフォ、トランペット二人と、同じメロディーを一小節ずつ転調しながら繰り返す。木管が全員楽器を構えた。
テンポが上がり、序奏部が明るい和音に変わってトランペットで奏される。この曲の中で唯一明るい部分といえる部分だ。
しかしすぐにリズムがどんどん変形され三拍子に変わる。リタルダントがかかり、静まっていく。
クラリネットの旋律とフルートの対旋律、そして優樹のトライアングルだけの世界になる。
美香は実質的なソロだ。しかも音が高い。キンキンとした音にならないよう細心の注意を払いながら吹く。
そして入れ替わるように中低音のメロディーに変わる。民話という名だけあって、和志のタンバリンと優樹のティンパニ、チューバとバリトンサックスがリズムを刻み、ホルン、トロンボーン、ユーフォがメロディーを吹く。

そのメロディーに木管が加わり、トランペットの対旋律とスネアが入り全員で演奏する。
メロディーが終わると木管の伸ばし。そこに低音のメロディーが入る。
綺麗な和音で中間部は幕を閉じた。

冒頭のクラリネット、テナーサックス、ユーフォニウムのメロディーが再び始まる。
再現部といわれる部分だ。
旋律が終わると急にテンポが上がり、木管のトリルが激しく鳴り、シンバルが鳴る。
ティンパニの連打で曲は終わった。

拍手に包まれる会場。
全員が立ち上がり、京の合図で礼をした。
そして退場する。

「あ〜緊張した…」
楽器置き場。美香がフルートをしまいながら息をつく。
「珍しいね。美香ちゃんがため息つくなんて」
唯がそれを見て微笑む。
「だってフルートの高音、ピッチ取るのが難しいんだもん。ソロだから緊張しちゃった」
「そっかぁ、あ…」
その時だった。急に唯の目つきが鋭くなった。
「え？ど、どうしたの？」
それを見て美香が慌てる。
「あ、うん。ちょっとね」
そう言いながら唯はまだ誰かの姿を見つめている。

美香はその視線を追ってみた。
そこにはユーフォニウムのケースを持った一人の女子の姿。
その姿はなぜかおびえて見える。
「確か…。北梅ヶ崎高校だっけ。あの制服」
北梅ヶ崎高校は小編成の学校で、コンクールには出ていない団体だ。
「そうだね。…美香ちゃん。行こうか」
「う、うん」
唯の声は怖かった。普段からは全く想像できないほどに。
美香はそれに従うしかできなかった。

階段を降りる。
「ゆ、唯！」
美香が足を止めて振り返ると、さっきのユーフォニウムを抱えた女子だった。
しかし唯は歩みを止めない。
「唯！待って！」
その言葉に唯はやっと振り返る。
しかしその表情は険しい。
「…よくのうのうと声をかけられたものよね」
「…確かにあれは私が悪かった、でも…」
「でも？でもってなによ？千紗。あんたはかおりちゃんを…それに先斗や悠莉をどれだけ傷つけたか分かってるの！？」
「…」
「美香ちゃん。行こう。みんなが待ってる」
「…うん」
唯に手を引かれ、美香は通路を進む。
振り向くと、千紗はその場で立ちつくし、涙を流すばかりだった。

１０９話　『吹奏楽のための民話』（後書き）

※１　シャルモー音域とは、クラリネットの最低音から開放のファ♯を指し、この音色はクラリネットの魅力の一つ。

※２　影譜とは、その楽器がない時に他の楽器がここを演奏しろという指示。チューバでは、コントラバスがない場合吹く場合が多いが、この曲ではバスクラリネットの代わり。他にはオーボエの変わりにフルートやクラリネットにこれがある場合がある。

１１０話　あの夏

１２月１９日（火）。
今日もアンサンブルの練習だ。
アンサンブル以外のメンバーは終業式で演奏する曲（校歌、得賞歌）の練習をしている。
管打八重奏のメンバーは部室で練習していた。
「じゃあ休憩」
匠の指示で休憩に入る。
「あ、あたしトイレ行ってくる」
「あたしも行く」
加奈子と唯が出て行く。
庄吾と龍也は楽器からつばを抜くと楽器を置いておしゃべりを始め、拓也は楽器にスワブを通す。
匠と先斗は打楽器とチューバが重なる部分の打ち合わせをしていた
一方、美香は椅子に座って考え事をしていた。
一昨日の唯はなにかおかしかった。
美香は唯のあんな静かな怒りをみるのは初めてだった。

「美香？どうかしたか？」
庄吾がそれを見て話しかけてくる。
「あ、うん…」
「…唯と何かあったのか？」
「…え？」
「昨日から唯と話するの避けてる感じだったから…」
「…やっぱ庄吾くんには分かっちゃうか」
そう言うと美香は一昨日のことを話した。
「…千紗か。確かに唯、あいつのこと怒ってるかもな」
「怒ってる…？」

「だろうな」
「あ、先斗…」
匠と話していた先斗が近づいてきた。庄吾の横に座る。
「千紗のことだろ」
「…なんで分かった？」
「…一昨日、本人から聞いたんだ」
「！？」
先斗の表情は悲しげだった。
「あいつに会ったのか？」
「解散後、俺一人で帰ったろ？ちょうど商店街で会っちまったんだよ」
「…お前もキレた？」
「いや…。ただただ謝られちゃってもうどうしようもなかった。泣き出したからとりあえず喫茶店で落ち着かせて帰したよ」
「お前涙に弱いもんな…」
「…それは認めざるを得ないな」
「…ねえ」
そこで美香は意を決して聞いてみた。
「…昔何があったの？」
「…先斗どうする？」
庄吾が先斗に問いかける。
「ここまで話したんだ。話しちゃったほうがいいかもしれないな」
「じゃあ俺が話すわ。先斗きついだろ？」
「…ああ。感情的になっちゃうかもしれないから頼むわ」
「分かった」
その時加奈子たちが戻ってきた。
「よし。全員戻ってきたから練習再開しよう」
「はい！」
全員が楽器を構えた。

練習終了後、庄吾と美香は学校近くのマクドナルドに入った。二人で席に座る。
「さて…じゃあ話そうか」
「…なんで唯ちゃん怒ってたの？」
「あいつ…千紗な、コンクールをボイコットしたんだよ」
「…ボイコット！？」
「…ああ。ちょっと前から話そうか。あれは去年の六月だったな…」
庄吾は中学三年の夏のことを思い出し始めた。

１１１話　誤解と崩壊

庄吾は中学三年のことを回想し始めた。

＝＝＝

「はい！」
「…大橋」
「…はい！」
3人とも呼ばれた。つまりユーフォが一人落ちるということだ。
「やった」
先斗がうれしそうに呟く。チューバパートは3人で出ることを目標としていたので喜びも一塩だろう。
しかしユーフォニウムのメンバーは顔色が悪い。
特に一年生の御手洗（みたらい）　かおりは真っ青だ。
俺はメトロノーム係だったからトランペット以外の演奏をすべて顔を合わせて聞いていたが、彼女も他の二人と負けず劣らずの演奏をしていた。
「最後にユーフォニウム」
「櫻井」
「はい！」
二年生の櫻井（さくらい）　美里（みさと）が返事をする。
とうとうラスト1人だ。
「…御手洗」
「え…。は、はい！」
かおりは顔を上げて返事をする。
「…」
一方、三年生の久保田（くぼた）　千紗（ちさ）は涙を流し始めた。
「以上50人がコンクールメンバーだ。残りのメンバーのうち2年と3年は後で来い。今日は解散」
「はい」
俺達は楽器を片付けるために部室へ向かった。
「…千紗」
「…」
唯が千紗を慰めている姿が見えた。
「どっちも辛いよな…」

「ああ…」
先斗がそれを見て呟き、俺も頷く。
当時、唯と千紗は親友だった。
「でもまさか3年落とすとは…。大北先生やっぱり厳しいわ」
「しかも千紗だけ…」
「今からまったく別行動か…」
「最後はみんなで出たかったな」
「…なあ」
「なに？」
「中国大会での再オーディション提案してみないか？千紗にチャンスもらおうよ」
「賛成。じゃあまずは県抜けなきゃな」
「分かってる。じゃあ練習だ」
「おし！」
俺達は楽譜を用意し始めた。

その後、俺達は頑張った。県も例年は4位通過なのに2位で通過した。

でも。

千紗はコンクールの日から部活に来なくなった。

――――――

「分からない。コンクールの日、結局あいつは来なかったんだ…」
「…Ｃの部は？」
「ユーフォが重要な曲だったから…。結局棄権した」
「…そんな」
「そして、二学期には学校からもいなくなった。不登校かと思ったんだが、籍ももうなかったんだ…。それからだったな。部活が崩れていったの」
「…崩れた？」
「御手洗もそのショックで部活を休部して、中国大会での演奏はボロボロ。しかも顧問は勝手に御手洗に退部届けを出させて事を終わらせようとしたから部員がそれに反発。…十二月には１、２年で６３人いた部員が３０人台になっちまった」
「そんな…」
「怖いよな。一つ信頼が壊れるだけでばらばらになるんだから」
「…」
「ただそれを立て直したのがバッシーだった」
「…バッシー？チューバの…大橋くんだっけ」
「ああ。部長だったあいつは１人１人と話をしたんだ。時間をかけてな」
「…」
「３月には辞めた部員の大半が帰ってきてくれて、正顧問の生野先生も戻ってきて、なんとか部活も再開したんだ」
「…すごい」
「ああ。普段はお調子者だけどほんと、あいつには驚かされた」
「…ねえ」
「なんだ？」
「庄吾くんは千紗さんをどう思っている？まだ怒ってる？」
「…裏切られた感はあるけど、もう怒ってはいないよ」
「じゃあ唯ちゃんも裏切られたから怒っているのかな…」
「多分な。あいつ親友だったから怒りより悲しみが大きいんだろう

な…」
「…ねえ」
「…どうした？」
「部外者が口出すのもどうかと思うけど、提案があるの」

唯は急に庄吾に呼び出された。
「緊急ってメール来たけどなんだろ…」
指定された喫茶店に入る。
「中島様ですね。こちらです」
店員に案内される。
「…！」
席にはなんと千紗が座ってた。
「な、なんで？」
「私が呼んでもらったの」
「…美香ちゃん？」
美香が横に立っていた。
「…美香ちゃんには関係ないことでしょ」
「もう関わっちゃったの。…せめて話だけでも聞いてあげてくれない？」
「…少しだけね」
そういって座った。
「…唯」
「…久しぶりね」
「ごめんね…」
ゆっくりとだが、千紗はあの時の状況を話し始めた。

「…なんで？なんで連絡してくれなかったの！」
話を聞き終わると唯は怒り始めた。
千紗の欠席の理由は心労による体調不良だったのだ。しかも入院していた。
「連絡してくれたらあたし達だって誤解すること…」
「あたしが急に倒れたからどたばたでそれどころじゃなかったらしくって…退院した日に大北先生に電話したら…。…お前はもう…いらな…いから来なく…てい…いって…！」
そこまで言うと千紗は泣き崩れてしまった。

「…最低だ」
唯はそっと呟いた。
「大北先生も最低だけど…あたしも最低だ…。知ろうともしなかった…。ずっと千紗責め続けてた…。…話聞かなくてごめんね。千紗、ごめんね…！」
唯も大粒の涙を流し始めた。

「…落ち着いた？」
唯に美香が問う。
「…うん」
帰り道、夜も遅かったので唯と美香を庄吾は送っている。
「美香ちゃん」
「何？」
「ありがとうね」
「ううん」
「話聞かなかったら、ずっと千紗を傷付け続けてたかもしれない。本当にありがとう」
「…うん」

美香と別れて電車に乗る。
「卒コン、千紗来てくれるかな」
「大丈夫だろ」
唯は桜田一中の卒業コンサートのＯＢステージに千紗を誘ったのだ。
「とりあえず、まずはアンコン頑張らなきゃな」
「うん！」
唯は笑顔で頷くのだった。

１１１話　誤解と崩壊（後書き）

実際にこんなひどい教師がいないことを祈ります…。

１１２話　『エオリアン・トリオ』

１２月２３日（祝・日）。
今日はアンサンブルコンテスト島根県大会の日だ。
「積み込みＯＫ？」
「うん。じゃあよろしくお願いします」
２ｔトラックの運転手に声をかける優樹。
トラックにはシロフォン、マリンバ、ビブラフォン、グロッケン、ティンパニ、マレット、ドラムセットがぴっしりと詰め込まれている。
「それでは出発します」
トラックは出発した。
「よし、じゃあ移動しよう」
「おし！」
優樹の声に答える和志。積み下ろしもあるのでひかりには先に向かってもらっている。
「でも寒いな…」
空っぽの音楽室で呟く和志。
なにしろまだ朝の７時２０分。辺りはようやく日が上ってきたくらいだ。
今日３人は６時に集合し、最後の合わせ練習を終えていた。
「仕方ないじゃん。打楽器最初なんだから。とりあえず８時１０分までに行かないといけないから飛ばすぞ」
「ああ！」
「準備はできたか？」
純也が車のキーを持ってやってくる。今日は純也に会場まで乗せてもらうのだ。
「はい！」
「じゃあ行くぞ」

そう行って乗り込むのは中古のミニバン。
「…古いですね」
「母親の中古だからな。１０万キロ走ってるがエンジンは快調だ。行くぞ」
ブルルン！
エンジンがかかり、車は発車した。

「着いた！」
会場に着いたのは８時１０分。二人はひかりの下へ急ぐ。
「こっちこっち！」
積み下ろし場所にはひかりと慶太が待っていた。今日は打楽器の補助として慶太と純也が手伝ってくれる。
「じゃあまずティンパニから！」
３人の出番は３番目、９時１２分からだ。
アンサンブルコンテストは大抵形態ごとに順番が決まっており今回は、

打楽器　１４団体
フルート　７団体
クラリネット　１０団体
サックス　７団体
木管混合　１２団体
トロンボーン　１団体
バリチューバ　２団体
金管アンサンブル　１２団体
管打アンサンブル　４団体

の順となっている（※１）。

さらに各形態で編成が小さいアンサンブルから演奏されるため、打楽器3重奏のメンバー達は順番が早いのだ。ちなみに先斗達は最後から2番目、68番目だ。
楽器を搬入してティンパニやドラムのチューニングをする。
「よし」
3人と慶太と純也はステージ脇に着く。
「3人とも自分らしい演奏して来い」
「はい！」
純也の声に小さな声で返事をする。
「桜田中央高校さん、どうぞ！」
打楽器を運び込む。
鍵盤は前列に、ドラムとティンパニは後列に、雛形に並べる。純也たちが手伝うのはここまでだ。
「頑張れ！」
そう小声で告げて二人は退場していった。
「プログラム3番。桜田中央高校、打楽器三重奏。金田　真一作曲、『エオリアン・トリオ』。」
ステージのライトがつく。
3人は礼をして、それぞれの持ち場につく。
（いくよ？）
（OK！）
アイコンタクトを取り、3人は撥を振りかぶった。

シロフォンが鋭い音で音を刻む。それに応えるようにティンパニが同じ音で叩く。それを支えるようにドラムがスネアとサスペンドシンバルを刻んだ。
ティンパニのクレッシェンドで音楽は激しくなり、シロフォンは16分音符で駆け回り始める。ティンパニもそれに負けないくらいの存在感でリズムを刻む。ひかりがサッシン（※2）を激しく鳴らす。

一瞬のキメが入るとシロフォンが一瞬静まってティンパニソロがやってくる。和志はリズムカルにリズムを鳴らした。
ソロが終わると音楽は静まっていく。そこに出てきたのはグロッケンだ。優樹が優しく音を鳴らす裏でひかりはトライアングルを鳴らす。
ティンパニとトライアングルだけになる間に優樹はすぐにマレットを持ち替えマリンバに移る。リタンルダントがかかり、中間部に入った。マリンバがトレモロをかけながらメロディーを奏する。
そこに出てきたのはビブラフォンのメロディー。これはひかりが担当している。ひかりは鍵盤楽器は初めてだったが、丁寧に奏でた。すぐにマリンバとティンパニとの掛け合いになる。
マリンバのメロディーをひかりはビブラフォンのアルペジオで彩る。
そこに和志がサスペンドシンバルを入れた。
ティンパニとマリンバ、ビブラフォンのトゥッティになる。
3人はアイコンタクトを取れる位置にいなかったが、お互いの雰囲気を感じあいながら、完璧に縦をあわせる。そっと静まっていきながら、中間部は幕を閉じた。
和志が高くトライアングルを掲げる。
涼しげな音が鳴る。それに呼び起こされたようにシロフォン、スネアが鳴る。
和志の楽譜には、イメージとして、
『春風』と大きく記されていた。
曲名の『エオリアン・トリオ』のＡｅｏｌｉａｎ（エオリアン）は風と言う意味。このイメージは3人とも共通意識として持っていた。
冒頭のシロフォンが戻ってくる。ティンパニのクレッシェンドで強奏部分に移る。
『春の嵐』。
シロフォンは風に舞う花びら、ティンパニは暴れまわる風。スネアは鋭く物を吹き飛ばす風。

３人はそうイメージしていた。
スネアをひかりが激しく鳴らすと雰囲気が変わる。
一瞬風が止まった。
そう思わせた瞬間風が蘇り始める。
シロフォン、ティンパニ、サッシン。
順番に鳴って、嵐は強くなっていく。
ビート感のあるシロフォンのトレモロからティンパニ、ビート感のあるシロフォンの八分音符とめまぐるしく場面が変わっていく。
シロフォンの下降音。３人のトゥッティで曲は終わった。

静かになる会場。嵐の後のようだ。
ひかりが合図して礼をすると、拍手が起こった。
３人は演奏の成功に顔をほころばせながら搬出作業に向かうのだった。

112話　『エオリアン・トリオ』（後書き）

※1　実際の県大会の順番とは異なります。
※2　サスペンドシンバルの略。

１１３話　『夢への冒険』

午後。管打アンサンブルのメンバーも最終練習を終え、準備を始めていた。
「パーカッションこれで全部？」
唯が匠に聞く。
「ちょっと待てよ。え～っと、グロッケンにタムタムに、ウインドチャイム、トライアングル、ティンパニ、ボンゴにコンガと。ＯＫだ」
「よし。じゃあパーカッションのメンバーにあっちで待っててもらってるから早く積み込んじゃおう」
「ああ」
朝と同じ２ｔトラックに楽器を積み込む。今度は八人だから朝よりもスムーズだ。
「ティンパニ上げるから男子！」
「よし！」
先斗の声に庄吾と龍也が駆け寄る。
「いっせーの！」
「「せ！」」
３人はティンパニをどんどん積み込んでいく。息はぴったりだ。
その他にトロンボーン、ホルン、トランペット、チューバを荷台に積み込む。フルートとクラリネット、アルトサックスは助手席だ。
「じゃあ先斗と庄吾頼んだ」
「了解」
龍也はそういって荷台から飛び降りる。
先斗と庄吾はトラックの荷台の中に乗って移動することになっていた。打楽器アンサンブルの時と違って中がスカスカなのでタムタムを支えておく必要があるのだ。
「じゃあ閉めま～す」

運転手は二人がしっかりタムタムを支えているのを確認すると荷台のドアを閉めた。
トラックは走り出した。
「やっぱ冬だと中も快適だな」
「だな。中学のコンクールの時はひどかった」
お互い苦笑いする。
先斗達は一昨年のコンクールの時も荷台に乗った。だかなにしろ密室だ。クーラーなど効いているわけもない。暑さで汗がダラダラと流れ、脱水症状でも起こしかねないくらいだった。
しかし今は１２月。今日は晴れて気温も１０度を越しているため、車内は暑くもなく寒くもないちょうどいい状態だ。
「でも千紗があんなことになってたとはな…」
車内で二人は千紗について話していた。
「誤解が解けてよかったよな」
「ああ。３月が楽しみだ」
「問題は大北だけどな」
「あいつ転勤でもういないってよ」
「え？マジ？」
「ああ。なんか去年の騒動で異動させられたってさ」
「なら千紗も安心して来れるな」
「ああ」
「今日もアンコン出るみたいだぞ」
「え？あ、北梅ヶ崎もアンコンは出てるのか」
「ああ。金４（※１）だって。ほれ。プログラム」
そう言ってプログラムを渡す庄吾。
「どれどれ…。３つの舞曲（※２）？確かバッシー達が一年のときやったよな？」
「ああ。たぶんそれ」
「じゃあそろそろ演奏してる頃か…」
腕時計を見てそう呟く庄吾。

「俺らも頑張らなきゃな」
「もちろん。お。止まったぞ」
トラックが駐車場に着く。
ガチャ！
「お疲れさん。暑かったかい？」
ドアの開く音とともに運転手が顔を覗かせる。
「いえ。大丈夫でした」
この運転手さんには中学からお世話になっているため顔馴染みだ。
「じゃあ管を降ろしちゃおう。すぐにパーカスの降ろし場に回らないといけない」
「はい！」
二人は管楽器をさっと降ろす。
「これで全部か？」
「フルート、クラ、アルト、ペット、ボーン、ホルン、チューバ…。はい、揃ってます」
「じゃあパーカスに行くから」
「お願いします」
トラックはすぐに搬入口に走っていった。

「よし、全員着いたな」
全員が楽器置き場に集合した。
「じゃあ中島、後頼んだ」
「了解」
唯にそう告げて匠は移動し始めた。
匠は打楽器なのですぐに舞台裏に回らないといけないのだ。
裏手の階段を降り、舞台の裏手に回る。
「匠、こっちこっち」
小声で和志が呼ぶ。
「搬入ありがとう」
匠も小声でお礼を言う。

「ううん。俺達も慶太に手伝ってもらったから。じゃあ打ち合わせしよう」
ひかりと優樹も近づいてきて、四人で円になる。
「俺と匠でタムタムとティンパニ、グロッケンとトライアングルがひかり、ボンゴとコンガが優樹、手が空いた人からサスペとか残りの楽器な」
「「了解」」
搬入は大会の運営において一番重要なことだ。搬入が遅れればタイムテーブルが崩れて進行がずれてしまう。
「じゃあ匠、ティンパニのチューニングしちゃって。今休憩時間だから」
「分かった」
匠は頷くとティンパニに付いたのだった。

管楽器のメンバーも楽器裏に着く。
「全員準備ＯＫだな？」
匠が合流して全員を集めた。
「あれ？…拓也は？」
庄吾の声に振り返ると拓也は必死に運指をさらいなおしていた。しかしもつれる。会場内は暖かいのに手が震えてしまうのだ。
「全く…。落ち着け」
龍也が拓也の手を押さえた。
「で、でも…」
「何も気張る必要はないんだ。普段と同じように吹けばいいだけだから」
「…うん」
「よし。じゃあ全員集まれ」
八人は円陣を組む。
「金賞取るぞー！」
「「オー！」」

小声で叫ぶ。
「桜田中央高校さん、出番です」
「「はい！」」
まず匠と打楽器のメンバーが大物打楽器を搬入する。
それに少し遅れて管楽器。
美香、拓也、唯、先斗、庄吾、龍也、加奈子の順で入場する。
先斗は椅子の角度を整えると、じっと客席を見つめた。
普通は緊張するものだが先斗はなぜかそうすると落ち着くのだ。
打楽器の準備が終わる。
「プログラム６８番、桜田中央高等学校、管打八重奏。福島弘和作曲、『夢への冒険』。」
ライトが付く。
匠の合図で礼をすると、先斗は椅子に座り楽器を構えた。
最初の音は拓也と匠。
二人は見つめあい、そっと初めの音を鳴らした。

クラリネットのふくよかな音。一小節遅れてフルートも加わり、ハモる。さらにアルサクが加わり、木管アンサンブルになる。
そこに加わるのがトランペットとホルンのファンファーレ。雄姿なその音が会場に響く。そして静香に鳴り響くサスペンドシンバルとタムタム。なんと匠は右手でサスペンドシンバルのロールをして左手でタムタムを叩いたのだ。地味ながらも大事な音だ。
緩やかにリタルダントがかかり、クラリネットとアルサクの掛け合いが始まる。
途中でそれにトランペットが加わる。春に柔らかい吹き方に苦労していた庄吾も今回は柔らかい音で掛け合いに加わることができた。
ホルンの勇ましい音で雰囲気が変わる。ホルンソロだ。龍也は反響版にしっかり音をぶつけて会場に音を響かせた。
木管の優しい部分を抜け、トランペットの勇ましさが戻ってくる。
リタルダントをかけながら三つの和音を決めた。

テンポが上がり、コンガが鳴り始める。
金管の打ち込みとともにピッコロソロが始まった。
一ヶ月前と違ってしっかりとピッコロをコントロールする美香。吹く姿はとても楽しそうだ。長いソロだが緊張などもろともせず吹ききる。
次に出てくるのは拓也。途中で唯も加わり掛け合いになる。この部分は合わせるのが一番難しかったが二人は匠のコンガに乗って崩れることなく吹くことができた。
そしてチューバソロ。そこにトロンボーン、ホルン、トランペットとだんだん金管が加わって複雑になっていく。それが絡まりあって最初の打ち込みに戻るが、急に静まり、クレッシェンドがかかる。
頂点に達した瞬間、ティンパニが一発しっかりとした音で鳴った。
それを合図に雰囲気がまた変わる。
トランペットは堂々とメロディーを吹き、木管は連符で動き回る。ホルンは雄たけびを上げた。
サッシンが鳴り、打ち込みが戻ってくる。
クラリネットが一瞬ソロになるが、すぐに他の楽器が加わり、畳み込むように曲は終わった。
先斗が立ち上がり、匠が打楽器の前に出て礼をすると、拍手が鳴った。
８人はすぐに楽器を搬出し、退場を済ませた。

「まだかな…」
拓也が不安げに呟く。
午後５時。桜田中央高校の音楽室。部員達は楽器の片づけを終え、ある連絡を待っていた。
アンサンブルコンテストの結果である。
アンサンブルコンテストは団体数が多いため、結果と講評は学校ごとに顧問に渡されるのだ。

「結果来たぞ！」
京が音楽室に入ってきた。手には封筒を持っている。
「先生！どうだったんですか！」
「落ち着け！読み上げるから」
駆け寄ってくる部員達を制止し、京は封筒を開いた。
全員が京を見つめる。
「打楽器三重奏。金賞！」
「「やったぁ！」」
打楽器３人はハイタッチしあう。
「先生！管打は！？」
拓也が迫らんとする勢いで聞く。
「落ち着け！管打八重奏…も金賞だ！」
「おっしゃあぁぁ！」
拓也の雄たけび。涙を流して喜んでいる。
両団体金賞。初出場にしてはものすごい快挙である。
さらにこれは桜田中央高校にとって初めての金賞だ。
「先生代表は？」
「え～っと、桜田東校の打楽器４重奏と金管打８重奏、彩稜高校の管楽８重奏、金管８重奏、木管３重奏、湯釜高校の金管５重奏、杉浦西高校の打楽器４重奏だな。うちは打楽器が２６番、管打が１１番だった…ってことは管打ももう少しで代表だったかもな…」
「じゃあ来年も頑張ろう！」
「「オー！」」
「はいはい！盛り上がるのはいいが今後の話もあるから一回座ってくれ」
「は～い」
唯たちを制止して座る。
「え～っと、これまでで一番いい結果となりました。これはメンバー全員が一丸となって大会に望めたという証でもあります。これからもこの連携を崩さないで頑張っていってほしいと思う」

「「はい！」」
「いい返事だ。これからも頑張るぞ！」
「はい！」
「よし！じゃあ部長連絡頼む」
「はい！今年の練習は明日が最後です。明日は９時に集合、大掃除とミーティングをして１時には解散です。部室に私物を残さないようにしてください。新年は４日から部活を再開します」
「「はい」」
「以上です」
「よし！じゃあ解散」
「「ありがとうございました！」」

「やったぁー！」
唯は両手を掲げて喜んでいる。
「よかったな」
「うん！」
今日は庄吾も美香とデートらしく、今日は二人で帰っている。

唯の家の前に着いた。
「じゃあな」
「うん。あ、先斗」
いつものように別れようとすると唯が呼び止めた。
「なんだ？」
「明後日時間ある？」
「え？」
胸がドキッとした。普段なら気にもしないが、明後日はクリスマスだ。
（唯が自分を誘っている？）
先斗の心が高鳴り始める。
「ある？」

「う、うん」
バクバクが止まらない。
「よかった～。明後日部活の忘年会やるつもりなの。先斗も参加ね」
「わ、分かった」
「じゃ、また明日～」
唯は笑顔で家に入っていった。

「…どうしたんだろ、俺」
唯を意識したことなんて今までなかった。
唯はただの幼馴染だ。
そう思うが、そう考えると胸のドキドキが説明できない。
「…帰ろう」
先斗は家へと歩き始めた。
先斗の中で何かが変わり始めていた。

＜２００７年編　完＞

１１３話　『夢への冒険』（後書き）

※１　金管４重奏の略。金管８重奏は金８（キンパチ）。
※２　作者も中学時代にやりました。かなり編成が自由になる曲でした。詳しいことは楽曲紹介で書きます。

コラムⅠ　第一回　座談会

作者（以下作）「どうも～。Ａｓｋｅｒです。ＳＡＫＵＲＡ　ＷＩＮＤＳをご覧の皆様いつも拙作を読んでいただきありがとうございます。本日は番外編ということで作者も登場しております。ラジオ形式で話を進めていきますのでよろしくお願いします。ではさっそくゲストを…」

ドカッ！

作者「痛っ！」
先斗（以下先）「話長いわ！」
唯「そうよ。だらだら長い！」
匠「簡潔に話せよ」
庄吾（以下庄）「まあまあ。とりあえず始めようぜ。一応作者さんだから大事にしないと書いてもらえない」
美香（以下美）「そうだよ。…まあ蹴ったの庄吾くんだけど」
作「庄吾ひどい…」
先「いいから始めろよ。質問あるんだから」
作「は、はい。本日は桜田中央高校吹奏楽部から先斗、唯、美香、庄吾、匠に来てもらってます」
唯「なんでこのメンツなの？」
作「ああ、君たち五人は昔書いてた小説…、つまり『ＳＡＫＵＲＡ　ＷＩＮＤＳ』の前身となる小説に出してたキャラだからだよ。まあ三つ子を出すとか、庄吾と美香をくっつけるとかは当時から案があったけど。ちなみに当時の主人公は匠だったよ」
庄「へ？今もじゃないの？」
先「…どーせ存在感ないよーだ」
作「はいはい。いじけない」

先「あんたのせいだろ！」
作「まあ理由として…『ブラス魂』シリーズで匠をピックアップしたことが上げられるかな。協力者に匠が主人公だろとツッコミもらいましたから…。まあそれでいいかと」
先「ふざけんな（怒）」
作「だ、大丈夫！来年は先斗は目立つから！ある大事な役職に就かせるし」
先「ならいいけど…」
唯「じゃあそろそろ寄せられた質問に答えていこうか」
作「はい。じゃあ始めます。まずＧＴ・ｓｐｉｒａｌさんからの質問です。桜田中央高校の皆さんは泰徳をどうおもっていますか？だって。というかこの人はコラボ相手だね。じゃあここの五人に聞いてみようか」
先「演奏を聴いて目標となったな」
庄「高音がハンパなかったな」
唯「かわいかった！」
美「すごすぎて…よく分からなかった」
匠「いい友でありライバルだな」
作「はい。以上…」
匠「作者はどう思っているんだ？」
作「え？俺か？ブラス魂シリーズを読んで俺的に分析すると…性格的には少し幼さを感じる。匠に対しても先入観による見方バリバリで対抗してたからな。だが、作品が進むごとにちょっとずつだけど成長はしてるかな。技術的には…俺は何も言えない」
先「作者、チューバヘボいもんな」
作「さ、さあ次の質問。リトルさんの質問です。これはノンフィクションですか？いいえ。こんな男女比が１：１の部活なんてそうそうありません」
先「一言だなおい！」

作「はい。とりあえずここで一休みと…」
先「おい、体力ないな～」
唯「あたし達より2歳年上だもんね」
先「時系列的には同い年なんだがな…」
匠「書くのが遅いからだろ。本来なら俺たちも高校卒業してるぞ」
作「大学受験だったんだもん…」
庄「だったもん？センター終わった日に更新してたろ」
作「実はあれセンターの初日終わってからバスでちょっと書いてたり…」

ドカッ！

匠「バカ！だから前期試験落ちたんだろ！」
唯「え？作者大学落ちたの？じゃあ浪人…」
作「五人のかわいそうなものを見る目が作者につきささる…。って状況説明している場合じゃなかった！浪人ではないです！」
全員「「え？」」
作「高校一年生の君達はまだ知らないかもしれないが国公立の受験には前期試験と後期試験ってのがあってな…。幸い後期試験で大学受かりました」
美「よかった…」
唯「これで私達ガンガン書いてもらえるね！」
作「さて。重大発表して調子も戻ったし質問の続き行こうかな。駅長さんからの質問です。桜田中央高校吹奏楽部はかなりのカップル率ですが乱立してこれからどうする気ですか？…どうしよう」
唯「確かにカップルになりそうな組み合わせは多いわね…。まあ実際のカップルは庄吾と美香ちゃんだけだけど」
庄「で、あのシチュレーションはどうやって思いついた？」
作「…妄想」
美「…」

唯「まあいいじゃない。美香ちゃんの好きなアーティストの人もブログでこう言ってたじゃない。『創造とは想像から生まれ妄想とはその想像を構築する』って」
作「まあ妄想しないと小説なんて書けませんから。プロの人ってすごいな～」
先「で、回答は？」
作「あ、はい。まあなんとかなるでしょう」
唯「楽天的ねぇ…」
庄「まあいいじゃん。作者らしくて」
作「楽にいきますよ。来年度また人数増えるからカップル率下がりますし」
唯「新入生はかなり入りそうなの？」
作「内緒。君たちの勧誘次第だから」
匠「…まあいいか。ＴＡＫＡさんからの質問…。いつから匠くんはそんな目立つキャラになったんですか…。俺目立ってる？」
全員「「うん」」
作「番外編で５話も話を作っちゃったからな。既にブラス魂シリーズでもそこそこ出てるし、主役級と言ってもいいかも」
先「それで俺の出番が減ると…」
作「だから来年活躍するってば。一応目立つのを好まないキャラという設定になってるんだよ？だから静かに待ってて」
先「…わかったよ」
作「はい。とりあえず質問はこれで全部。それぞれから聞きたいことある？」
先「作者は担当楽器何だったんだ？」
作「中高共に先斗と同じチューバ。中学のときはパーカス、高校ではオーボエ希望してたんだけどね。人数の問題や中高の顧問がそれぞれ知り合いだったりとかで６年間チューバ吹いてきました」
唯「作者の高校時代の成績は？庄吾の成績かなり散々に書いてきたけど」

作「ぎく！えっと…。現代文と社会が平均越しであとは結構ズタボロ…。過去に定期考査の点が一桁だった教科が数？。まあこれは提出物でなんとかなった。問題は通信簿で1をとった化学…。有機化学なんてもうまったく分からないからお手上げ。あと物理はマーク模試で県最下位を取りました」
庄「俺よりひどいな…。って作者理系？数？とか物理とかあるけど」
作「三年からの文転組だね。まあ英語苦手だったからかんなりきつかった。前期も後期も英語あったから泣きそうでした。ちなみに君たちも年明けに文理選択させるんでよろしく」
庄「作者が書きやすいキャラは？」
作「庄吾かな。いじられキャラでムードメーカーだから書きやすいし。次がパーカッションの三人。一番書きにくいのは先生たち。大人の会話が書けない…。もうちょい授業のときとか先生観察しとけばよかったな～」
匠「授業はまじめに受けろよ…。授業中に来年度の編成考えてただろ」
作「すみませんね。校内成績2位の匠くんには頭が上がりませんよ」
匠「なんかやな言い方だな…。俺も質問。どんなとき話が思いつくんだ？」
作「え～っと、授業中とか模試の残り時間に話が思いつきますね。一番いいのが化学。授業は当てられないし、模試もマークは勘で埋めちゃうから15分で終わって45分間ずっとネタが考えられましたし」
匠「だから成績が悪かったと…」
作「卒業できたから結果オーライだよ」
唯「これで教師目指してるんだよね…。教えられたくないなぁ…」
作「中学時代はまだ成績マシで真面目な生徒だったけどね…まあ時折掃除サボったり授業サボったりしてたけど」
全員（だめだこりゃ）
作「なんか変な視線が向いてるな～…まあいいや。美香は質問ある

？」
美「今後、この小説はどうなっていくの？作者の目標は？」
作「そうだねぇ…。とりあえず今年の時点でフラグはいっぱい立てきたからそれを解消しながらストーリーを進めていきます。コラボも続けていこうかなと。後、脈絡がよく分からないとブラス魂の方の座談会で指摘されたから大学に入ったら本や映画をたくさん見たり読んだりして語彙力と表現力を付けていきたいと思います」
唯「向上心あるなら大丈夫かしら…。具体的には？」
作「地の文をもっと大事にしたいね。上手い小説は文を読むだけで情景が浮かぶもん。だからチキンライスさんやにっくん♪さんは凄いと思う」
美「泰徳くんも認めてるしね」
作「さて。まだまだ未熟者な作者ですが、これからも」
全員「「よろしくお願いします！」」
作「以上、座談会でした！次はコンクール後辺りにお目にかかりましょう！さようなら～！」

作「で、先斗くん」

先「なんだよ？俺だけ呼び止めて」
作「質問がもう一つ残ってる」
先「誰から？」
作「俺」
先「え？」
作「お前、唯好きなの？」
先「…どうだろ。まあ最近女らしい部分が見えてきて、…気になってはいる」
作「そっか。まあ俺も見守ってくから」
先「あんたが書くんだろ？」
作「そうだけどな。まあ頑張れ」
先「…うん」

コラムⅠ　第一回　座談会（後書き）

２００７年編はこれで終了です。
いくつかコラム等追加いたしますので２００８年編は４月からの更新になります。
これからもよろしくお願いします。

～２００７年あらすじ～

今回はこの一年分の年表を書きます。
最初から読むのが面倒な方、ざっと見直したい方はご利用ください。
ネタばれ多いのでまだ読んでない人は読むのをお勧めしません。
パソコンで打っているので携帯では見づらいかもしれませんがご了承ください。

４月１日　桜田中央高校設立。

４月９日　第一回桜田中央高校入学式、２４０名入学。
先斗、唯、庄吾、吹奏楽部設立を決意。

弥生入部希望。

４月１０日　拓也、龍也、ひかり、美香入部希望。部室の大掃除。

４月１１日　部集会。吹奏楽部創部。先の八人に加え、慶太、加奈子、匠、優樹、奈津美が入部。部長が唯に決定。

４月２１日　文化祭出演決定。
コンクール出場決定。

４月２７日　文化祭用の譜面が届く。弾き語り風ソリに先斗と唯は驚愕する。

４月２８日　コンクール曲鑑賞。

４月２９日　桜田商業高校スプリングコンサート、桜田中央高校は鑑賞。

５月１日　コンクール曲が『感謝と喜び』に決定。

５月４日　初合奏。副部長が庄吾に決定。

５月６日　唯と庄吾の恋愛疑惑。しかし結局田中３兄妹の誤解に終わる。

５月２１日～２５日　中間考査。

６月１日　文化祭。音楽部の演奏。吹奏楽部は『ＳＡＫＵＲＡ』を演奏。

６月５日　茜、理穂、和志が吹奏楽部に入部。吹奏楽部は１６人に。

６月２６日～３０日　期末考査。

７月１１日　ミーティング。吹奏楽の集いに参加決定。

７月１９日　終業式。校歌演奏、壮行式で『感謝と喜び』演奏。

７月２１日　吹奏楽の集い二日目に桜田中央高校出場。ミスが多く落ち込むものの、部員達は改善することを決意する。

７月２３日　先斗の誕生日。ドッキリパーティーでお祝

い。

7月29日　初レッスン。クラリネットの坂口先生に指導を受ける。

8月3日　コンクールのため、杉浦市に出発。龍也と翔吾の出会い。

8月4日　吹奏楽コンクール島根県大会開催。桜田中央高校は高等学校小編成の部で銀賞を受賞。

8月5日　落ち込む先斗を庄吾たちは連れ出し、励ます。先斗復活。

8月6日　チャリティーコンサートに合同バンドでの出演が決定。

8月7日　合同バンドの顔合わせ。

8月12日　楽器掃除。

8月13日　柳紅諸島に住む親戚である黒松家がやってくる。耕一初登場。

8月17～18日　桜田中央高校で吹奏楽部の合宿が行われる。美香が庄吾に告白。庄吾はそれを受け入れる。

9月1日　桜田中央高校オープンスクール。312名の中学生が見学に訪れ、18人が吹奏楽部に見学に来た。『SAKURA』、『小さな恋の歌』を演

奏。

９月８日　第１回合同練習。桜田中央高校にて。

９月２１日　第１回桜田中央高校体育祭。

９月２８日　第２回合同練習。桜田農林高校にて。

１０月８日　第３回合同練習。桜田工業高校にて。

１０月１３日　第４回合同練習。桜田中央高校にて。

１０月１４日　庄吾と美香の初デート。優樹と和志が尾行するが、和志の姉の里美に見つかりお説教を食らう。

１０月２１日　第５回合同練習。桜田農林高校にて。

１０月２７日　本番前日。ホール練習。

１０月２８日　チャリティーコンサート開催。桜田女子高等学校、桜田商業高等学校、桜田市小編成合同バンド、桜田東高校が出演。収益金１５８，４５３円と大成功。

１０月３０日。　アンサンブルコンテスト出場決定。打楽器三重奏と管打八重奏が組まれ、後のメンバーはソロの練習となる。また、市の定期演奏会に出演決定。匠は慣れないパーカッションを担当することになり、不安になり、友人の竹林　泰徳に相談する。しかし泰徳の挑発に乗り、その弱気はぶっ飛ぶ。

１１月２６日～３０日　期末考査。

１２月３日　　期末考査の返却。庄吾が追試になりかけるがぎりぎり逃れる。匠が校内２番の成績であることが判明。ちなみに１番は茜。

１２月６日　　静香が常套中学校の立石先生にソロ＆アンサンブルコンサートの審査員を打診。泰徳が呼ばれることに。

１２月１３日　　ソロ＆アンサンブルコンサートが開催。終了後、泰徳と先斗が『大きな古時計変奏曲』を演奏。しかし泰徳がかなりの無理をしたため、匠は激怒。その後、質問の嵐を浴びせられ時間を忘れてしまった泰徳は飛行機の最終便に乗り遅れてしまう。そのため、先斗の家に宿泊。

１２月１６日　　桜田市定期演奏会に出演、『バンドのための民話』を演奏。唯と、桜田一中出身の千紗が再会、しかし唯は怒鳴って立ち去る。

１２月１９日　　美香は庄吾に中学時代起きた事件のことを聞く。美香の働きで唯の怒りは誤解が生んだものであると知り、唯は千紗に謝る。

１２月２３日　　アンサンブルコンテスト島根県大会開催。打楽器三重奏は『エオリアン・トリオ』、管打八重奏は『夢への冒険』を演奏し、金賞を受賞。先斗は唯に、幼馴染みとは違った感情があることに気づく。

以上です。

１１４話　迷い（前書き）

２００８年編開始します。
登場人物紹介は小説内で新入生が登場してからとさせていただきます。
また、楽曲紹介は完成しだい挿入しますのでご了承ください。

114話　迷い

「どうするかな…」
先斗は自分の部屋の机の前で悩み込んでいた。
1月3日（木）。
三が日も今日で最後。明日から部活が再開する。
それは楽しみなのだが、先斗はある重大な選択に悩んでいた。
文理選択だ。
桜田中央高校のカリキュラムによると、二年生から文系と理系にクラスが分かれることになっている。
文系は世界史Bと、日本史Bか地理Bと社会二科目を二年生で学ぶ。三年生になる時にはどちらを継続して学習するか選び、さらに現代社会の演習が始まる。理科は生物？だけだ。
一方理系は化学？と、物理？か生物？のどちらか一方、合わせて理科二科目を二年生で学び三年生になるとそれが？に発展する。社会は世界史Bを選んだら日本史Aか地理A、日本史Bか地理Bを選んだら世界史Aと、A科目とB科目の二つを二年生で学び、三年生になるとB科目ひとつを継続して学ぶ。さらに数学は文系と共通の数？A？Bに加えて、数？Cを学ぶ。
数学？Cは多くの理系大学の二次試験に課される。
そのためここでの選択は大学受験、さらには将来就く職業に影響するのだ。
しかし先斗はまだなりたい職業を絞れていなかった。
「どうするかなあ…」
先斗が興味のある職業は3つ。まず数学の教師、弁護士、そして

リペアマンだ。
庄吾の影響もあって先斗は社会、特に公民分野に興味がある。公民を勉強するなら文系に進むべきだが、文系から数学の教師にはまずなれない。数学？Ｃが入学試験に必須だからだ。
弁護士になるには司法試験を突破しなくてはいけないが、合格率は低い。合格者の平均年齢が２８歳ということも先斗を迷わせている。司法試験を突破してもその後司法修習生として一年半勉強してさらに試験を受けなくてはいけないのだ。弁護士になるのは３０歳前後になる。
リペアマンは吹奏楽からの考えだ。この職業に就くには専門学校等に行って技術を磨く必要がある。分類としては文系だろう。
このように希望する職業で文理が混在してしまっているため、なかなか選ぶことができないでいるのだ。過去二回の希望調査でも未定の欄にマルをつけていた。
しかし今回は本登録である。今回は絶対に決めないといけない。
年末の三者面談でもこれは指摘されており、小百合たちにも相談はしているが、先斗が自分で決めた方向なら応援するという結論だった。

「あいつらは決めてんだろうな…」
先斗は同じクラスである唯と庄吾、拓也のことを思い浮かべる。
唯は得意の英語を生かした職業に就きたいと言っていたし、庄吾は歴史の勉強がしたいと言っていたから2人とも文系だろう。拓也はパソコンソフトの開発をしたいから理系だと言っていた。
「そういえば龍也も決めてないって言ってたな…。あいつ決めたかな」
そう呟くと先斗は傍らにおいてある携帯を手に取り、龍也に電話をかけた。
「もしもし？」

５コール鳴って、電話に龍也が出る。眠そうな声だ。
「あ、龍也？」
「ん？あ、先斗か。どうした？こんな時間に」
「こんな時間って…。まだ八時だぞ？」
時計を見て答える先斗。
「正月寝すぎたから体内時計戻そうとして今日は早く寝てたんだよ。明日から部活だし」
「そっか。悪いな」
「いや。別に気にしなくていいよ。で、何？」
「お前文理選択決めた？」
「ああ。一応。でも提出新学期だろ？」
「ゆっくり考えられるの今日までだからな…」
明日からの部活は半日だが、宿題の残り等もこなさないといけないのだ。それに三が日ゆっくり考えようと引き伸ばしてしまったからもう引けない。
「先斗は考えすぎるもんな。拓也に似てきたんじゃないか？」
「そうか？で龍也はどっちなんだ？」
「理系」
「なんで？」
「親父が潰し利くからって。それに実験とか好きだし」
「へえ…」
「先斗は？お前数学好きだからそれで行ったら？」
「でも化学がな…」
「まあなんとかなるんじゃねえか？」
「…考えてみるわ」
「そっか。じゃあな」
電話が切れた。
「まあ考えるのは自分だもんな…よし」
そう呟くと、先斗はまた机に向かい考え始めたのだった。

１１５話　新たな始まり

１月４日（金）。

今日は部活初めだ。
「おはよ…ファァァ…」
庄吾が欠伸をしながら音楽室に入ってくる。
「おはようさん。庄吾正月ボケか？」
既に音楽室にいた先斗がからかう。
「親戚のガキが大騒ぎして寝れなかったんだよ…」
「そりゃご愁傷さん」
「流すなよ…。そういや唯は？」
音楽室を見回して先斗に聞く庄吾。
「さあ…。今日は俺も寝坊気味だったから気にせず出たんだが…」
「部長が新年早々遅刻かよ…」
「副部長も遅刻だぞ？」
「いや、９時１分前だからセーフ…」

トントン。

音楽室のドアがノックされる。
「誰だろう…？」
京や唯ならノックするわけがない。
「リペアの人じゃない？」
茜が答える。
「誰か楽器調整頼んだ？」
「さあ…。とりあえず開けたげようよ」
「そうだな」
そう言って一番ドアの近くにいた庄吾はドアを開けた。

「Ｈｉ！」
「へ？」
庄吾の目の前には青い目をした金髪の少女が立っていた。一瞬ポカンとしてしまう。
「Ｉｓ　ｔｈｅｒｅ　Ｗｉｎｄ　Ｏｒｃｈｅｓｔｒａ　Ｃｌｕｂ　ｒｏｏｍ？」
「えええええっと…。匠助けてくれ！」
思わず助けを求める庄吾。
「え？ああ。Ｓｏｒｒｙ．　Ｈｅ　ｉｓｎ、ｔ　ｇｏｏｄ　ａｔ　Ｅｎｇｌｉｓｈ．　Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ｔａｋｕｍｉ　Ｋｕｒｏｄａ．Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ．」
「Ｏｈ！Ｍｙ　ｎａｍｅ　ｉｓ　Ａｍａｎｄａ　Ｓｍｉｔｈ．Ｎｉｃｅ　ｔｏ　ｍｅｅｔ　ｙｏｕ　ｔｏｏ！」
「Ｏｋ．Ｗｈｙ　ｄｉｄ　ｙｏｕ　ｃｏｍｅ　ｈｅｒｅ？」
「Ｏｈ，ｓｏｒｒｙ．Ｉ　ｗｉｌｌ　ｇｏ　ｔｏ　ｔｈｉｓ　ｓｃｈｏｏｌ．．．」

「…通じてる」
「うん…」
庄吾と先斗はただただ二人を見つめていた。

「アマンダ～！先に行かないでよ！」
その時唯が教室に駆けてきた。
「唯！遅刻だぞ」
「用事があって職員室にいたのよ…。アマンダ来てる？」
「アマンダ？」
「ああ。あの子よ」
そう言ってアマンダを指差した。
「アマンダ！」

そして声をかける。
「あ、ユイ」
「勝手に行っちゃだめじゃない…」
「場所は知ってたからネ。早くミンナに会いたくて」
「唯。ちょっと説明してもらえないか…？」
「うん。あのね…」
「ミーティング始めるぞ～！」
京が入ってくる。
「…なんかこの展開多くないか？」
「…誰かの手抜きかもね」
唯はため息をついたのだった。

「初めまして。アマンダ・スミスです。アメリカから来ましタ。アマンダって呼んで下サイ」
アマンダが改めて挨拶する。
アマンダは留学生として桜田中央高校に来たのだ。受け入れ先は唯の家だ。
「でもいつ来たんだ？初詣の時は唯、何も言ってなかったのに…」
「昨日よ。みんなには秘密にしとこうと思って」
唯がいたずらっぽく笑う。
「というか…。アマンダ日本語話せるんだ。しかも結構流暢…」
「グランマが日本人だからネ」
にっこり笑って答えるアマンダ。
「じゃあなんで最初英語…？」
「ユイが庄吾驚かせたいっテ」
「おい！唯！」
「はい！話進めるぞ！副部長静かに！」
庄吾がいきり立つが、京がずれ始めた話を修正する。
「で、今日アマンダが来たのは他でもない。彼女も吹奏楽部に入ってくれることになりました！」

「マジですか！？」
「やった！」
部員達は大喜びだ。
「アマンダ！楽器は何？」
ひかりがうれしそうに聞く。
「コントラバスだヨ」
「…コントラバス？」
耳馴染みのない楽器名に首をかしげるひかり。
「ああ、うちの高校に担当者いないからな。まあ…。簡単に言えばバイオリンのでっかい奴だな。西掛。同じ低音だから後で楽器庫に案内してやってくれ。田中も見るといい」
「「はい」」
そこで京は一度息をつくと、また言葉を続ける。
「改めて…。あけましておめでとう」
「「おめでとうございます！」」
「桜央（さくおう）吹奏楽部も二年目を迎えました。４月には新入生も入ってくるし、それぞれが部活を引っ張っていくんだという意識を持って欲しい。今年も頑張っていこう！」
笑顔で京は言い切った。
「「はい！」」
「さて。アマンダも入部してこれから三ヶ月は１７人で活動していくわけだが…。今日決めておきたいことがたくさんある。まずそろそろ新入生を受け入れる準備もしなくてはいけない。だから君達にはいろいろな役職や係に就いてもらう」
「…役職ですか」
唯が呟く。
「ああ。こっちでもいくつか考えてきた。とりあえず黒板に書くから他に必要だと思う役職や係があったら追加して欲しい」
そう言って京は黒板に役職名を書き始めた。

○部長　中島
○副部長　三上
○金管リーダー
○木管リーダー
○学年指揮
○楽譜係
○清掃係
○教室見回り
○積み込みリーダー
○会計

「他に追加したいものはあるか？」
「はい！」
優樹が手をあげる。
「なんだ？」
「楽器係が欲しいです。部室に楽器がたくさんあるのでまとめておいたほうがいいと思います」
「そうだな。じゃあ楽器係も入れよう。他には？」
「…」
「これくらいか。とりあえずこの三ヶ月間やってみて必要そうなものがあったら1年生が入ってから追加しよう。部長、後は仕切ってくれ」
「はい」
唯が立ち上がり黒板に楽器係を追加する。

○部長　中島
○副部長　三上
○金管リーダー（1名）
○木管リーダー（1名）
○学年指揮（1名）

○積み込みリーダー（1名）
○楽譜係（2名）
○楽器係（2～3名）
○清掃係（2～3名）
○教室見回り（2名）
○会計（2名）

「さて。とりあえず金管リーダーと木管リーダー、学年指揮を決めます。立候補したい人いますか？」
「…」
無言だ。
「じゃあ推薦。ただし理由を述べてください。乱立しても困るので」
「…はい」
美香が手を上げる。
「はい。坂根さん」
「あの…。推薦じゃなくて質問なんだけど学年指揮って何をするの？」
「そうだね…。普段の基礎合奏と、先生がいないときの合奏を仕切るわ。チューニングがあるから音感ある人のほうがいいと思う」
「分かった。なら西掛君を推薦します」
「え？俺！？」
先斗が立ち上がる。
「な、なんで？」
「普段の基礎合奏が全く狂わないし、アンサンブルの練習で黒田くんが風邪で休んだ時西掛君の仕切りが上手かったからです」
「はい。ほかに推薦したい人はいますか？」
「…」
他に推薦はない。
「西掛君。やってくれますか？」
唯が問いかける。

「…俺でいいのか？」
「じゃあ西掛君が学年指揮でいい人、拍手」
パチパチパチパチ…。
全員の拍手が鳴る。
「分かりました。引き受けます」
「よろしくお願いします。じゃあ次に…」

こうして役職や係が決まっていった。

○部長　中島
○副部長　三上
○金管リーダー　黒田
○木管リーダー　有吉
○学年指揮　西掛
○積み込みリーダー　竹原
○楽譜係　田中ひ　倉橋
○楽器係　田中龍　吉岡
○清掃係　今井　坂根　アマンダ
○教室見回り　進藤　渡部
○会計　田中拓　東

金管リーダーは全員一致で匠、木管リーダーは茜の推薦で弥生となった。積み込みリーダーは立候補で優樹。その他の係もそれぞれの適正を生かせる配置になった。
「じゃあこの配置でこれからもよろしくお願いします」
「「はい！」」
全員の返事が音楽室に響いた。

１１５話　新たな始まり（後書き）

途中の英語の部分は自信ないです（笑）

１１６話　地味？

翌日。今日は土曜練習だ。
クラリネットセクションではパート決めを行っていた。
実はミーティングの後でたくさんの曲を配られたのだ。
まず部内での話し合いで、２月１４日にバレンタインコンサートを行うことになった。桜田市も快く了承してくれて、桜田中央駅前の広場で演奏することができる。
選曲された曲は以下の三つだ。

○千の夜をこえて
○Ｌｏｖｅ　ｓｏ　ｓｗｅｅｔ
○永遠（とわ）にともに

さらに市の定期演奏会で演奏する『百年祭』。
この曲は閉校してしまう奈良県立城内高校のために福島　弘和さんが作曲した。
初演の題名には副題で～１０人の奏者のために～と付いていて当時は１０名で演奏したらしい。
冒頭と後半にはクラリネット、アルトサックス、フルートの掛け合いのソリがあるし、変拍子の部分もあるため、結構難しそうだ。
その上、入学式の曲が４曲。入場用の『アルセナール』、校歌、国歌、そして退場の『全力少年』だ。
極めつけは課題曲。２００８年度の課題曲が配布された。今年は大編成に出る確率が高いということだろう。五曲のうち、高校生が演奏できるのは、

？　ブライアンの休日
？　晴天の風

？　セリオーソ
？　天馬の道

の四曲。どの曲にするかや自由曲は一年生が入ってきてから決めるらしい。
合計１２曲。今までで一番多い曲数だ。

「…ねえ」
楽譜を分けた後、茜が不機嫌な様子で弥生に声をかける。
「何？」
「なんで私全部２ｎｄか３ｒｄなのよ」
茜の楽譜のうち、百年祭だけが２ｎｄで後は３ｒｄだ。
「だってトランペットだってパート固定してるじゃない。だからずっとそれでいいかなって思って…」
「私だって１ｓｔ吹きたいよ。ずっと２ｎｄか３ｒｄだもん」
「でも…」
弥生は渋る。
「もういいよ」
それを見て茜は諦めて席に戻る。
「…弥生は目立ちたがり屋だもんね」
その瞬間だ。
「…なによ。その言い方」
弥生が立ち上がる。声色がいつもと違うことに拓也は気づいた。
「だってそうじゃない。今までずっと弥生は１ｓｔ。百年祭だってクラリネットのソロはすっごい目立つし！」
茜も立ち上がる。
「…茜が目立とうとしないだけじゃないの？」
「ちょっと…止め」
拓也が口をはさもうとしたが、
「…地味？…じゃあ目立ってみようか？」

茜はそう静かに言い放つと、つかつかと弥生の前に迫り、
バシッ！
ビンタをかました。
「…なにすんのよ！」
「目立ってみろといったから行動に移しただけよ！」
そこからは二人ともがお互いを叩きあい始めた。
「ちょ、ちょっと二人とも止めろよ！」
拓也が慌てて止めに入るが、相手が女子ということもあって無理やり引っ剥がすわけにもいかず、オロオロしている。
「おい、何しているんだよ！」
「え！ちょっと二人とも止めなさいよ！」
その騒ぎを聞いてトランペットセクションの二人が飛び込んでくる。
理穂が間に入ってなんとか二人を止めたのだった。
１５分後。それぞれが落ち着いた後、トランペットの二人は茜と弥生に別々で話を聞くことにした。
３－Ａの教室で茜と庄吾、３－Ｅの教室で弥生と理穂だ。
「落ち着いたか？」
庄吾が教室に残していた茜に声をかける。
「…うん」
「事情は大体拓也から聞いた」
「うん…」
「でもなんで引っ叩いたんだ？普段東もうちょっと冷静だろ？」
「…やっぱり私が地味だから３ｒｄなのかな…」
「え？」
「私ね、地味だって理由で小学生時代からかわれていたの」

急に茜は過去のことを話し始めた。
「…」
「私はいっつも言い返せなくて、だからからかいは止まらなかったわ」
「…」
庄吾はただ茜の話を聞いていた。
「中学生になって生徒会に入ったら収まったけど、いつまでも私は地味な子なんだってコンプレックスは消えなかった」
「…だから地味って言われて怒ったわけか」
「…うん。なにやってんだろ…私。よく考えたら地味だなんて弥生一回も言わなかったのに…」
「東。なんで３ｒｄが地味だって思うんだ？」
「だってずっとメロディーのハモリかオクターブ下なんだもん…。…三上くんはずっと１ｓｔだから分かんないだろうけど」
「東。その考え間違ってるぞ」
「…え？」
「これ、先斗から借りてきたんだけど」
そういってセリオーソのスコアを見せる。
「…あ」
練習番号Ｂから３ｒｄとアルトクラのソリだ。桜田中央にはアルトクラ奏者はいないから３ｒｄのソロになる。
「ついでに天馬の道」
「…あ」
これもクラリネット３本がそれぞれ別の動きをしていた。
「な？３ｒｄが地味なわけじゃないだろ？」
「…うん」
「それにな」
そこで言葉を切る庄吾。
「１ｓｔだけが大事なわけじゃない。１ｓｔから３ｒｄまでがしっかりと重なり合って初めて綺麗に響くんだ。だから地味でも必要な

いわけでもないんだ…まあこれ先輩の受け売りだけどな。それに俺ずっと１ｓｔだって言うけどそれぞれの適正生かすためにパート編成、今のようにしてるんだぞ」
「え？」
「俺は高音が得意だから１ｓｔ、今井は音程とるのが上手いから２ｎｄ吹いてるんだ。まあ時折変えるけどな。それに中学の時は俺ずっと３ｎｄだったよ。音量が出るからって」
「…そうだったんだ」
「有吉も東の適性考えて３ｒｄにしたんじゃないかな？」
そこで茜はこの間弥生に言われた言葉を思い出した。
（茜の音って綺麗だよね。特に低音域が）
「…弥生に謝らなくっちゃ」
涙を拭いて立ち上がる。
「行って来い」
駆けていく茜を庄吾はまぶしい笑顔で送り出した。

「…弥生」
茜がドアをあけると、弥生が立っていた。
「…ごめんね」
先に弥生から謝罪の言葉が出た。
「…ううん。私の思い込みが激しかっただけだったの。私こそごめん」
二人はお互いに頭を下げた。
「…ねえ。茜」
「何？」
「百年祭、茜が１ｓｔ…。ソロ吹いてよ」
「…ううん。私は２ｎｄでいいよ」
「…でも」
「じゃあさ！」
理穂が口を挟む。

「二人で１ｓｔ吹いたらいいんじゃない？あの曲ソロ二回あるから一回ずつやればいいじゃん」
「…そうする？」
「うん！」
「じゃあもう一回パート決めなおそうか」
「行こう！」
二人は笑顔で練習教室に戻っていった。

１１７話　懐かしい記憶

１月１７日（木）。

先斗の母親である小百合は自分が経営者の一人である喫茶店、『鐘の音』で働いていた。

六年前におしゃべり仲間と始めたこの店、駅から近いことや小百合特製のパウンドケーキなどの効果で固定客も増え、最近は売り上げも増えてきた。

店の休みは日曜日。二人ずつで店に出ているため、週四回の出勤だ。

少し忙しいが小百合はそれくらいが自分に合っていると思っているため、苦にはならない。

「西掛さん。ちょっと休みましょう」

共同経営者の加藤（かとう）　美樹（みき）が小百合に声をかける。

美樹は小百合より３つ年上で中学三年生の娘と中学二年生の息子がいる。

小百合とは高校時代にトランペットを吹いていたという共通点から仲良くなり、今に至る。

「は～い」

小百合は返事をしてカウンター裏に入ると、美樹が紅茶とクッキーを用意していた。このクッキーは美樹のお手製だ。

飲み物を頼んだお客さんにこのクッキーは提供されていて、これも店の人気のひとつである。

「今日はダージリンですね？いい香り…」

「そうね。さ、いただきましょうか」

二人はゆったり、優雅に、上品に紅茶をすする…。

「でも西掛さんのとこも大変よねえ…。歳子(としこ)だから受験も連続じゃない」
「加藤さんのところもそうじゃないですか。今年は葵(あおい)ちゃん、受験でしょう？」
「そうなのよ。塾に通わせてるんだけどなかなか成績が上がらなくて…。先斗くんみたいに成績が良かったらいいのに…」
「葵ちゃんなら大丈夫ですよ。三年間部活も勉強もしっかりやってるんだから。うちの海斗はこの時期に及んでゲームばっかりやってるのよ？もう何考えてるんだか…」
「そうなの？でも西掛さんとこの子は頭いいからねえ…。先斗くん彩稜受けるだけの実力あったわけでしょう？」
かに思えたが、結局はおしゃべりに精を出している。

カランカランカラン…。
「あら、お客様だわ。いらっしゃいませ！」
小百合は対応しようとして立ち上がった。
入ってきたのはスラリと背の高いが、親しみやすい顔立ちの女性だった。多分小百合くらいの年齢だろう。
「ブレンドをください」
「はい。しばらくお待ちください…」

小百合はカウンターに入る。
(なんだろう…)
応対をしながら小百合は何かを感じていた。懐かしい何かを…。
(なんだか見覚えあるのよね。誰かしら…あ！)
すぐに顔と名前が一致した。
「もしかして…」
その時相手も何かを思い出したようだ。
「まさか…」

「小百合ちゃん！？」
「丸谷先輩！？」
２人は立ち上がって叫んだのだった。

「でもまさか丸谷先輩がたまたまこの店に来るとは…」
「ちょうど仕事の出張で松江支店に来ていたのよ。支店はこの近くだから」
「そうだったんですか。でもホントご無沙汰ですね。どれくらい振りですっけ？」
１０分後、小百合と女性はコーヒーを片手にテーブル席に着いていた。店の入り口にはｃｌｏｓｅの看板が揺れている。
「１０年振りくらいね。敦美（あつみ）ちゃんの結婚式以来だから。それに私ももう丸谷じゃないのよ」
女性はそう言って指の指輪を見せて笑った。

丸谷…いや、菊池（きくち）　美香子（みかこ）は小百合の所属していた大阪府立今高高校吹奏楽部の先輩だった。担当は２人ともトランペットだ。
今は夫や母親の出身地である島根に住んでいるものの、亡くなった父親の実家は大阪にあったため生まれてからの１８年間、小百合は大阪で暮していたのだ。

「心配してたのよ？あれっきり疎遠になっちゃって。私の結婚式の連絡も返信なしだし…」
「ごめんなさい。島根に引っ越してドタバタしてて手紙が返せなかったんです…」
すまなそうに答える小百合。
「まあ仕方ないか。でも元気そうね」
しかしすぐに気を取り直して話し始める美香子。
「先輩もお元気そうで。先輩お子さんは？」

「6歳と4歳と2歳の三人。全員男だから暴れまくって大変よ。母に見てもらえるから仕事出れるけどね。小百合ちゃんのとこは？確かそろそろ高校生よね」
「ええ。高校一年生と中学三年生ですよ。上は吹奏楽部でチューバ吹いてます」
「そうなの…」
美香子はコーヒーカップを置くとそっと息をついた。
「二十年前なのね。あれも」
「そうですね…」
楽しくもあり、苦しくもあった三年間だが、やっぱり楽しいのほうが大きかったと思う。
「ハチャメチャだったわよねぇ…」
美香子が苦笑いする。
「ええ…。部室で麻雀やったり、男子が女装して演奏したり…。今思うと自由だったなと思います」
「そうよね。私三浦くんに中学の時の制服貸したんだけどぴったりだったのよね。小路君は小路君で絶世の美少女になっちゃうし。あの晩は泣いたわ」
「確かに…。写真で見せてもらったんですけどあれはすごかったですね。だってまるっきり女の子ですもんね。色は白いし小柄で手足もきれいだし。私も見たとき羨ましくなりましたもん。小路先輩に言ったら怒られましたけど」
「そりゃ怒るわ…。でもあなたたちの代はトランペットは美女ぞろいだったじゃない」
「え、そうですか？確かに敦美ちゃんは大人っぽくて綺麗で、揚子ちゃんは気と目つきはきついけど髪綺麗だし美少女系でしたけど私はあまり…」
「あら？あの学年の中で一番にゴールインしたのは誰だったっけ？」
「…」
黙り込む小百合を見て微笑む美香子。

「ふふっ。でもあなたたち三人仲良かったわよね。休憩時間はずーっとおしゃべり。いつ休憩終了って口はさめばいいか分からなかったわよ」
「先輩もしょっちゅう加わってたじゃないですか」
「まあね。でもあなたたち三人には叶わなかったわ。あなた達、なんて呼ばれていたと思う？」
「え？なんか言われていたんですか？」
「ええ。今高怒涛のマシンガントリオだって。ちなみに三浦君命名」
「すごいネーミング…」
「そうね…。でもぴったりだと思ったけどね」
「えーっ。先輩ひどいですよ」
「ごめんごめん」
その後も二時間雑談は続いた。

「あら。もうこんな時間か。電車が出ちゃう」
「急がれたほうがいいですよ。田舎だから本数少ないですから」
「そうする。また出張で来たらよらせてもらうわ。小百合ちゃんも定演のお知らせ送ってもらうから来れたら来てね。揚子ちゃんも敦美ちゃんも会いたがってたから」
「はい！」
「じゃあね」
そう言って美香子は去って行った。

その晩。
「そうか。久しぶりに会えてよかったな」
子供たちが自室に戻ったころ、小百合は拓郎と晩酌をしていた。
「ええ。相変わらず先輩は美人だったわ」
「お前も出会ったときと変わらないさ」
「やだ。恥ずかしいじゃない」

拓郎の言葉に顔を赤らめる小百合。
「ねえ、あなた」
「なんだ？」
「市民楽団に入っていい？」
それを聞いて拓郎はまじまじと小百合の顔を見つめる。
「どうしたんだ、いきなり」
「先輩が生き生きして見えたのよ。先輩はコルネットに持ち替えたけど２０年間楽器を続けている。でも私は高校卒業してから趣味で楽器は続けていたけど先斗が生まれてからはずっと吹いてない。高校時代の話をしていたら楽器を吹きたいという気持ちが爆発しちゃったの」
「…そうか。君が無理のない範囲ならいいよ」
「ありがとう！」
そう言って小百合は拓郎に飛びついた。

翌日。
「さてと」
小百合は家事を終えると和室の押し入れを開けた。
「あったあった」
押し入れから黒く光るケースを取り出し、開ける。
中には高校生の時に買ったトランペットが眠っていた。
「意外と綺麗なままね。でもオーバーホール（※1）に出さないと…あら」
横からファイルが出てきた。
「…懐かしい」
そこにはコンクールの譜面と写真が挟まっていた。小百合たちが満面の笑顔で写っている。
小百合はそれをゆっくりと見ながら思い出に浸るのだった。

１１７話　懐かしい記憶（後書き）

※１　部品ごとまでバラして点検をすること。

今回出てきた丸谷　美香子さんはチキンライスさん著の「Ｈａｒｍｏｎｙ　Ａ　Ｄｅｃａｄｅ　Ａｇｏ」のキャラクターです。そちらの方も読んでみることをお勧めします。

１１８話　作戦始動

１月１９日（土）。
今日は一日練習の日だ。扱う曲が多いので今日はじっくり合奏をすることになっていた。
「あーあ…」
昼飯の時間。拓也がため息をつく。
「どうしたんだよ？」
それに隣でおにぎりを頬張っていた庄吾が反応する。
男子は音楽室の横にあるひな壇の板を積んでいる上で飯を食っていた。
「最近なんか肩身狭いんだよな。クラセクションで」
「どうしてだよ？また問題でも起きたか？」
「いや…。ただなんか女系家族のお父さん的な感じ？」
「なんじゃそりゃ」
庄吾は笑ってかえす。
「結構深刻なんだぞ？俺以外全員女子だから。一年生入ってきて男子がクラにいなかったらどうしよう…。慶太はどうなんだ？サックスの二人濃いじゃん」
取り合わない庄吾を見て、拓也は慶太に話題を振る。
「そうだなあ…。別に肩身の狭さは感じないかな。ただおしゃべりが激しいからついてけない…」
「あ、わかる。休憩時間とか一番つらい…」
クラリネットセクションとサックスセクションは人数比が等しいので通じるところがあるのだろう。ふたりで意気投合しそうな勢いだ。
「まあ木管男子は希少だもんな」
「え？そうなんだ」
龍也の言葉に反応する拓也。

「ああ。うちの学校は去年男子5人だったけど、ホルンが2人とボーンとチューバとパーカスに1人ずつだった」
「え～…。じゃあクラ吹き男子っていないの？」
「いや、いるよ。俺の中学に1人いたし、この間のチャリコンだってクラに男子いたろ？」
　庄吾が口をはさむ。
「あ、そっか」
「確かにサックスとかクラならたまに見かけるな。でもフルートはほぼ絶滅指定種級だ」
「なんじゃそりゃ」
　龍也の発言に全員が笑いだしたのだった。

「って話があったんだけどさ。お前のパートも女子ばっかりだったよな？どうしてたんだよ」
　その晩。匠は愛媛の泰徳に電話をかけていた。中学の時のあの大騒動を経て二人は仲良くなり、今では電話をする仲だ。
「そうだなぁ…。うちのパートの女子は確かに騒がしかったけど、あんま気にしないで練習してたな」
　泰徳があまり興味がないように返す。泰徳は硬派なのでこういう面は結構サバサバしているようだ。
「そうなんだ…。全員女子でもか？」
「ああ。中二の時は俺以外全員女子だったけど特別何も意識とかはしなかったな」
「へえ…」
「まあうちの学年のバスパートは全員幼馴染だしそれもあったかも」
「なるほどな…」
　匠は納得したようにうなずいて、砂糖入りの紅茶をすする。
「まあ、男子を入れれば済む話だろう」
「まあな。拓也心配性だから」

「しょうがないな…。ま、頑張って新入生入れろよ。俺は吹奏楽入るか迷ってんだよな」
泰徳も４月から高校生だ。既に常套中学吹奏楽部からは引退している。
「そうなのか？お前ならどこでもやっていけるだろうに」
「音楽科に入るつもりだからちょっと忙しくなりそうでな」
「そうか…。お前はプロの道に進むわけか」
「ああ。いつかゲストとして桜央の演奏会に出演してやるよ」
「はは。期待してるよ」
匠は電話を切った。
電話を切ってもう一度紅茶をすする匠。もう冷たくなっている。
「もう一月だもんなぁ…。あいつらどうしてるかな」
匠は松方中学校のメンバーたちの顔を思い浮かべた。
愛子たちは斎木高校に無事合格し、部活を楽しんでいるらしい。
松方中学校も今年は県大会を抜けて支部大会に出た。人数も増えて今年は４０人体制だ。
「…俺も頑張らんといけないよなぁ…よし」
匠はうなずくと、メールを打ち始めた。

一日飛んで月曜日。今日はミーティングだ。音楽室に全員がそろったところで唯が話し始めた。
「はい。今日の議題は新入生勧誘についてです」
「え？もう？」
唯の発言に首をかしげるひかり。
まだ一月。入学式まではまだ３カ月ある。
「うん、そうよ。桜央吹奏楽部の今年の課題はまず部員を増やすこと。私たちがここで頑張らないと後の代の後輩に申し訳が立たないわ」
「でもまだ一月よ？」
「一月だからだ」

「へ？」
匠が立ち上がる。
「うちは新設校。部員獲得合戦がより激しくなる。先手必勝で新入生を確保しておけば後で楽だろ？」
「…確かに」
「じゃあ話を進めようか。部長。作戦は？」
ひかりを納得させると、匠は話を唯に振った。
「うん。まず、名簿作成よ」
「名簿？」
「うん。まず出身中学の吹奏楽部から桜央に入ってきそうなメンバーをリストアップするの。名前が分かれば勧誘にも行きやすい。とりあえず桜田一中、二中、三中、四中、桜田北、桜田南、中原のメンバーは調べられるわ。まとめるのは拓也くんよろしく」
「え？俺？」
「うん、多分この中で一番資料をまとめるのがうまいのは拓也くんだから。そして次、3月に各中学校の卒コンに行くの。卒コンのプログラムには三年生の進学先が書かれているから使えるわ。調べてみたけど、一中、弓掛、佐倉、神西（じんざい）の卒コンがあるのは分かってるわ。とりあえず入学式前にできるのはこれくらいね」
「…なるほど。中島よく考えたな」
龍也がいつもと違う唯の様子に驚く。
「えへへ。実は昨日あたしと庄吾と先斗と匠くんと弥生でトップ会やったのよ。そこで出た意見なの」
「そうなんだ…」
「で、他に何かいい案がある人いる？」
「はい！」
ひかりが手を挙げる。
「はい。どうぞ」
「14日のバレンタインコンサートの案内を各校に送るっていうのはどう？」

「でも三年は追い込みの時期だから来れないんじゃない？」
「でもやらないよりはいいと思う。息抜きとして来てくれる子もいるかも」
「うん。じゃあ先生に頼んでおくね。他には？」
その後も様々な意見が飛ぶ。
「よし、じゃあ新入部員獲得目標２５人！頑張っていきましょう！」
「「オー！」」
それぞれ役割分担を決め、１７人は作戦に取り掛かり始めたのだった。

１１９話　偽りの決断

１月３０日（水）。

今日はセクション練習だ。アマンダと先斗は曲の合わせを行っていた。

「じゃあ、『アルセナール』から。アマンダ、弾いたことある？」

先斗はアマンダに尋ねる。

アメリカでは学校で吹奏楽の授業があるだけあり、アマンダの楽器経験は長い。さらに日本語も流暢ということもあり２人はあまり混乱せずにセクション練習を進められている。

「あるヨ。所々細かいから難しいよネ」

「確かになあ…」

アルセナールはＪ，ヴァンデルロースト作曲の行進曲だ。ちなみに意味は格納庫である。行進曲には珍しく低音に連符があり、チューバの最高音はｈｉｇｈＢ♭。なかなか難しい曲となっている。

「よし、じゃあまず最初から」

先斗がメトロノームをセットする。二人は楽器を構えた。

「１、２」

「失礼しまーす」

その時入り口のドアが開く。

「Ｏｈ！」

「おわっ！？…って唯か」

驚いて軽くずっこけたが、相手が唯と分かり先斗はため息をついた。

「どうしたんだよ？今、曲の合わせしてるんだけど」

「うちのセクションもそうよ。次が先斗なのに来ないから呼びにきたの」

「俺の番？なにが？」

思い当たらないので先斗は聞き返す。
「…今日面談なのに忘れたの？」
「あ…」
「…完全に忘れてたみたいだね」
唯はため息をついた。
文理選択調査表を出してから二週間。今週は担任との個人面談週間なのだ。
「梶原先生待ってるよ」
「…行ってくる。アマンダ、ちょっと個人やっててて」
「分かったヨ。いってらっしゃい」
先斗はアマンダに軽く頭を下げると、進路指導室に向けて走り出した。

「はあ、はあ、はあ…」
進路指導室の前で先斗は息をついていた。何しろ進路指導室は旧校舎の三階。練習教室から一番離れている場所にあった。
「失礼します」
軽く息を整えると先斗はドアをノックして進路指導室に入る。
中では静香が資料を見ていた。
「遅れてすみません…」
「いいわよ。中島さんが早く終わったから。座って」
静香は笑って席を勧めた。
「失礼します」
「はい。じゃあさっそく面談始めるわね。西掛くんは理系志望ね。なんで理系にしたの？」
「数学の教員が希望進路なので理系にしました」
そう答えたものの、先斗は適当に理由をでっち上げていた。確かに数学の教員も進路希望に入っているが本当は決められないだけだ。だから潰しの利くという理系で希望調査表を出したのだ。
「なるほどね。まああなたは文理共に成績もいいし、どちらでもい

けそうといえばいけそうだから大丈夫ね。じゃあ理系で登録するわ」
静香は頷いて話を進める。
「社会は地理Ｂね。うん、あなたはあまり心配してないから大丈夫よ。進級も問題ないわ」
「ありがとうございます」
「他に何か心配なことはあるかしら？」
「特には」
「そう。じゃあ、最後にこれ返しておくわね」
何か思い出したように何かを取り出す静香。
「…これは」
とたんに嫌そうな顔をする先斗。
「１１月の進研模試よ」
「…ども」
そっと開いてみる。今回の模試は国数英の三教科。記述式で全部１００点満点だ。
偏差値はそれぞれ国語が６１、数学が５４、英語が６２だった。
「西掛くんはそんなに悪くないからそんな深刻そうな顔をしなくても大丈夫よ」
静香は暗い顔をする先斗にそう声をかけた。
「は、はい」
「じゃあ、これで話はおしまい。練習頑張ってね」
「はい」
先斗は進路指導室を出た。

「はあ…」
進路指導室からの帰り道。先斗はついため息をついていた。
得意だったはずの数学が最近低迷してきていたからだ。
「こんなんで数学教師になれるのかなぁ…」
練習教室の近くに戻ってくると、アマンダの弾くコントラバスの音が聞こえてきた。

「…こんな暗い顔してたら心配掛けちまうよな…」
先斗はほほをパンパンと叩き、無理やり明るい顔にして練習教室に入って行った。

１２０話　宝部屋？

２月２日（土）。
今日は本来は休みの日なのだが、部員たちは新入生獲得のために奔走していた。
「拓也君、これ北中の吹奏楽部で桜央にくるメンツのリスト」
「了解！」
弥生が渡すリストを目にもとまらない速さでパソコンに打ち込む拓也。
今日はマイパソコンを持ち込んでデータの処理を行っている。
作業に取り組む拓也の眼光は鋭く、いつもの優柔不断でオロオロしている様子とは全くかけ離れている。
先斗はその様子を驚いた顔で見つめていた。
「先斗。大橋君は桜央来るんでしょ？」
唯が先斗のほうを向いて聞く。
「え？あ、ああ。まああいつの頭なら大丈夫だろ。倍率が倍率だから不安っちゃ不安だが…」
先斗は我に返るとそう答えた。
先週、教育委員会から今年の高校入試の倍率が発表された。
桜田中央高校は７クラスに増員されたにも関わらず、倍率は１、８倍。島根県では、普通科が１、５倍を超えることが稀なため今回は大波乱となりそうだ。
「海斗くんもなんでしょ？」
「ああ。あと耕一もだな」
「全員受かるといいね。でも海斗くん合唱部でしょ？女子合唱しかうちはやってないのにどうするんだろう…」
「高校では合唱やるか分からないとか言ってたぞ」
「へえ…」
「そこの二人、暇なら手つだってよ…」

ひかりが先斗たちを呼ぶ。今日は楽譜の整理をしているようだ。
「ああ。…でもよくこんなに譜面があるな…」
「うん…」
楽譜の山を見上げる４人。
なぜか平積みにしてある楽譜とスコアたち。びっしりと壁をふさいでしまっている。
「とりあえず分類していこうか。課題曲と、吹奏楽オリジナルと、ポップスとかに分けておけば後で使いやすいし」
「そうだな。じゃあさっそく…」
譜面の山から楽譜を取り出す先斗。
「交響的舞曲か…。え！１９８８年Ｂ？２０年前じゃん（※１）」
「アラベスク…。１９７３年！？３５年前の課題曲じゃない」
その後も様々な種類の楽譜が出てきた。一番古いのが祝典行進曲という曲で、１９５９年に作曲されたらしい…（※２）。
「…絶対１日じゃ無理だろ」
先斗のつぶやきに全員がうなずく。その顔には疲労の色が浮かんでいた。
楽譜の山が片付いたと思ったら、後ろからまた棚が出てきたのだった…。

「これでいいかな」
一方、楽器係の龍也は楽器のリストを作成していた。楽器の種類と、メーカー、状態などをメモしているのだ。今まとめておけば新入生が入る前にリペアに出したり、借りなくてはいけない楽器も分かるからだ。
「ん？ここも楽器倉庫か？」
楽器をどけると、後ろからドアが出てきたのだ。ちょうど壁の色と同じなので全く分からなかった。
ドアを開けると中にはいくつかの棚があった。そして奥にもう一つドアがある。こっちのドアは木製の古いドアで、ドアノブはガタ

ガタな状態だ。
「お。これも楽器じゃん」
棚にあるケースを開けてみる。
「…これ、メロフォンだ！」
龍也のテンションが一気に上がる。
メロフォンは金管バンドで使われる楽器で、明るくあっさりとした音がする楽器だ。
「そういえば桜田西高は戦後比較的早い時期に吹奏楽部ができたって聞いたな…」
１９７０年代には、フレンチホルンが今以上に高価だったため、代用としてアルトホルンやメロフォンが使われていたらしい。そのためその頃のコンクールの写真を見るとホルンパートのベルが様々な方向に向いているという状態がみられる。
しかし１９８５年には生産が終了しているので、今となってはかなりのレアな楽器といえるだろう。
「ちょっと遊びで吹いてみようかな」
龍也は第一楽器庫に戻り、手入れ道具を用意する。幸い状態もいいためオイルを差す程度でよさそうだ。
「よし」
ピストンオイルを差し、楽器付属のマウスピースを付けた。
「トランペットみたいだな…」
構えてみて改めてそう思う龍也。
メロフォンにはトランペットのようにベルが前に向いているものとホルンの形をしたものがある。
倉庫にあったのはベルが前に向いているタイプだ。
パーン！
明るくて軽い音が楽器庫に響く。
「お。綺麗に鳴る！」

「なんだ？」
その音を聞きつけて匠と庄吾が楽器庫に入ってきた。
「お！メロフォンじゃん！どうしたんだよそれ！？」
庄吾が楽器を指差して聞く。
「そこの奥の部屋にあったんだよ」
「え？あんなところに部屋あったんだ…。俺も見てみよう！」
そう言って庄吾は第二楽器庫に駆け込む。
「あ、俺も行く！」
匠もそれを追いかけた。

「うわ！すげえ！」
中から庄吾がケースを持って飛び出してきた。
「どうした？」
「ロータリートランペットがある！」
「え、マジかよ！？」
三人のテンションが急激に上がる。
ロータリートランペットはドイツやオーストリアでよく使われていて、重厚な音色を出す。吹奏楽で使われることは稀だが、常総学院高等学校が平成１３年の吹奏楽コンクールの自由曲で使用している。
「すげえ！」
「おい、こっちにはバリトンあるぞ！」
「おお！」

三人はそのままいつにないテンションで盛り上がりまくったのだった。

１２０話　宝部屋？（後書き）

※１　この曲はチキンライスさんが書いているＨａｒｍｏｎｙ　Ａ　Ｄｅｃａｄｅ　Ａｇｏで、今高高校の課題曲として扱われています。

※２　園　伊久磨作曲。１９５９年、当時皇太子であった明仁親王及び美智子妃の成婚を祝して作曲された曲。この曲は日本を代表する行進曲であり、海外の軍楽隊等が日本において演奏会を行う場合には、瀬戸口藤吉の「軍艦行進曲」とともに必ずと言って良い程演奏される曲目である（ｗｉｋｉｐｅｄｉａより）。作者も演奏したことがありますが、チューバの音域意外と広いです。

１２１話　痛み

「ねえ、先斗。ケーキ屋行かない？」
「え？またかよ…」

２月１１日（月・祝）。
バレンタインコンサートまで後３日。
半日練習を終え、部室で帰り支度をしていた先斗を唯が誘った。
「まあいいや。今日はどこだ？鐘の音以外ならどこでも構わないぞ」
半ば諦めたように頷く先斗。それを見て唯が顔をほころばせる。
「うん。今日は喫茶　櫻田にしよ」
「ああ。分かった」
そういうと、先斗は唯と一緒に部室を出て行った。

「あの二人相変わらず仲いいよな」
「ホント、あの二人ってなんで付き合わないんだろうって最近不思議になるよ」
庄吾と美香がそれを見てため息をついた。
「まああの二人は１２年間ずっとあんな感じらしいからな…。仕方ないさ」
庄吾が苦笑いして答える。
先斗と唯が出会ったのは４歳の時。それからずっと一緒なのだ。
「そうなんだ…。ねえ、私たちも帰りにどこか寄って行かない？」
美香が庄吾を誘う。
「そうだな。モスでも行くか？」
「うん！」
美香が笑顔で返事を返すと、二人も部室を出ていった。
「…いいよな」

「…ああ」
そしてそれを見ている残りの男子たちはいちばん深いため息をつくのだった。

「あれ？倉橋」
先斗たちは喫茶　櫻田に入るとすぐに席に案内された。
「…ども」
その席にはなんと加奈子がいた。二人が来たことに気づいて少し恥ずかしげに手を振る。
「加奈子、先斗に話があるんだって」
「そうか。…まあとりあえずなにか頼もうぜ」
「うん」
席に着いて、三人はそれぞれ注文を済ませた。

「で、話って？」
それぞれのメニューが来て、先斗が話を切り出す。加奈子は意を決したように話し始めた。
「あのさ、西掛くんってセクション練習を匠とやってるでしょ？」
「ああ」
「…匠、あたしのことどう思ってると思う？」
「へ？」
意外な質問におもわず加奈子の顔をまじまじと見つめてしまう先斗。
「…まさか、倉橋」
「そのまさかなのよ。明々後日バレンタインデーでしょ？そこで気持ちきっぱり決めちゃいたいって」
唯が補足する。
「ってことは…」
「そういうことよ」

「なるほど…」
先斗はやっと状況がわかり、頷いた。
心の奥がなぜかズキッと痛む。
「で、またキューピッド役やれと？」
声の色が少しきつくなっているのが自分でも分かる。
「ううん。匠の気持ちが聞きたいだけなんだけど…」
「…言わない」
「え？」
その返事に加奈子が声を上げる。
「それ聞いて何になるんだ？」
「ちょっと、先斗…」
唯がとがめるが、先斗は続けた。
「告白って自分でするもんだろ？いくら周りが大丈夫って言っても結局最後は自分次第なんだからな。俺がなんか言って安心させたり不安にさせても結果は変わらねえよ」
そう言い切り、自分の紅茶を飲み干すと、先斗は代金を机に置いて帰って行ってしまった。
「先斗！」
唯が声をかけるが先斗は振りかえらなかった。

（…何やってんだろ、俺）
先斗はふっと息をついてとぼとぼと商店街を歩き始めた。
なぜあんなことを言ってしまったか自分でも分からないでいる。
でもあの瞬間、心の中で何かがはじけた気がしたのだけ覚えていた。
「はぁ…。ん？」
ふと顔を上げる。バレンタインセールがお菓子屋の前で繰り広げられていた。
女子たちが顔を明るくしてチョコを選んでいる。その横に彼氏が一緒にいる奴もいる。

「…くそっ！」
先斗は石を蹴飛ばすと、家に向かって走り出した。
（なんでだ？なんでなんだ？…なんでなんだよ！）
なぜかイライラしていた。誰にイラついているのか、なんでイラついているのか、それすら分からなかった。

１２２話　愛の日に

２月１４日（木）。
今日はバレンタインコンサート当日だ。
部員たちは午後から公認欠席をとり、桜田中央駅前で会場の準備をしていた。
「配置はこれでＯＫだな。じゃあ一旦戻るぞ」
午後５時。京の指示で用意された控え場所に戻る部員たち。
日も傾き、気温が一気に下がってきているのでクラリネットの３人は楽器に息を吹き込むのに必死だ。
木管、特にピッコロ、オーボエ、クラリネット、ファゴットは管体が木でできているため、周囲の温度が急激に変わると管体が割れてしまうからだ。

一方、先斗と唯、加奈子はずっと黙って座っていた。
「……何があったんだ？」
「……さあ」
美香と庄吾も不安げに三人をみつめる。特に唯と先斗はここ三日間お互いに話していないのだ。こんなことは今までなかったので庄吾はただただ困惑していた。

「じゃあ、スタンバイして」
午後５時５０分。本番が近付き、京が準備を促す。あと数分で入場だ。
「先斗」
耐えきれなくなった庄吾は先斗に声をかけた。
「……」
しかし先斗からは返答がない。なにか考え事でもしているのだろうか。

「先斗！」
「……ん？なんだ？」
庄吾が語調を強めるとやっと先斗は反応した。
「……なにがあった？」
じれったいことは好きではない。庄吾はストレートに質問を先斗にぶつけた。
「……話したくない」
しかし、先斗は答えることを拒否し、口を閉ざした。
「……分かった。でもしっかりしてくれよ。久々の演奏会なんだから」
「……了解」
庄吾は念を押すと、楽器を持って、控え室から出て行った。
（おかしいってことは自分が一番わかってるさ…）
「おい、入場だぞ！」
（しっかりしなきゃ……）
匠の声を聞くと先斗は首をぐるりと回し、立ち上がった。

午後６時。全員の入場が終わり、セッティングも終了した。
マイクを持った奈津美が立ち上がる。
「みなさん、こんばんは～！」
「こんばんは～！」
奈津美の挨拶に小さな女の子の声が返ってきた。
会場となっている駅前広場にはたくさんの人が集まり始めていた。主に中高生が多いが、お年寄りや会社帰りのＯＬやサラリーマンも足を止めてくれている。
「あれ、あたしの妹」
弥生がさっきの女の子を指差して少し嬉しそうに茜に話す。
「へえ……。うちも弟と妹いるけど弥生のとこは大分離れているんだね～」
ふたりがこそこそ話している間にも奈津美の挨拶は続く。

「桜田中央高校吹奏楽部です！私たち吹奏楽部は今年創部され、現在は１７名で活動しています。今日はバレンタインデーということで恋にちなんだ曲をいくつか演奏したいと思います。最後までごゆっくりとお聞きください。一曲目は、嵐で『Ｌｏｖｅ　Ｓｏ　Ｓｗｅｅｔ』です。ＴＢＳ系ドラマ「花より男子２」の主題歌として人気を博したこの曲、吹奏楽でもその楽曲の魅力は変わりません。それではお聞きください。指揮は当部顧問、西村　京です」

奈津美が座る。

京はそっと指揮棒を上げると、空振りを三拍入れた。

フルートの涼やかな上向系の連符から、前奏が始まった。優樹がタンバリンでリズムを刻みだすと、会場も盛り上がり始め、手拍子が加わる。

先斗もしっかりしようと思いながら、音を埋めていた。

しかし。

ボフッ！

ｐの部分で急に音が外れてしまった。幸い、アマンダがエレキベースで入っていたから音が消えるということはなかったが、おそらく周りには分かってしまっただろう。

（……落ち着け、俺。落ち着け……）

自分を落ち着かせようとするものの、結局引きずったまま、演奏を終えることとなってしまった。

「じゃあ片づけが終わったところから解散な。もう夜遅いから特に女子はまとまって帰れよ」

「「はい！」」

京の合図で解散となる。

午後９時。部員たちは片づけを終え、部室に戻ってきていた。

演奏会は一応成功に終わった。しかし先斗だけはもやもやが残っ

たままだった。
「……なにやってんだろ」
先斗は片づけを早々に済ませると、早めに帰り支度をする。
(帰ろう……)
「先斗」
先斗が部室のドアを開けようとした瞬間、唯が声をかけた。
「……なんだよ」
「ちょっと付き合って」
「……ケーキ屋に行く気はねえぞ」
先斗はつっけんどんに返して部室を出ようとした。
「すぐ終わるわ。……来て」
しかし唯は先斗の腕を掴んで無理やり渡り廊下に連れて行った。

渡り廊下に着く。さっきから雪が降り始めていて寒い。
「……なんだよ」
ぶっきらぼうに聞く先斗。気分は最悪、早く帰って寝てしまいたい。なんだか体もちょっと熱くなってきた。
「……これ」
唯が四角く、青いリボンでラッピングされた箱を取り出す。
「……なんだ？」
「バレンタインチョコよ。あたしから」
「……え？」
意外な展開に一瞬唖然とする先斗。
「お礼っていったらなんだけど……。あのね。加奈子、先斗のおかげで吹っ切れたって。お礼言っといてって言われた」
「……そっか」
少し心が穏やかになる。
「今頃、匠君のところ行ってるはずよ。……先斗、ごめんね」
「え？」
顔を上げる。唯の目には涙が浮かんでいた。

「先斗の気持ち、考えずにこんなこと頼もうとしちゃって。美香ちゃんの時も、嫌だった？今回も嫌な思いさせちゃったよね」
「……」
「でも、両方先斗は助けてくれたよね。ありがとう」
「……！」
その時先斗の中で何かがほどけた。
「……先斗？」
そしてそれは涙となって流れ始める。
「お、俺……。そんな感謝されるような立場じゃない……。むしろサイテーだよ……。あんなひどいこと言ったのに……。あんな風に……」

「先斗はサイテーなんかじゃないよ。サイテーなんかじゃない」
気がつくと唯が背伸びをして、先斗の頭をポンポンとなでていた。
「……ありがとう」
涙を流しながら、先斗はなんとか言葉を発した。

「なんかこうしてると小さい頃のこと思い出すね」
ホットココアをすすりながら唯がつぶやく。
涙を拭いてなんとか落ち着いた後、二人は自販機の横のベンチに腰かけていた。
「そうだな」
先斗も相槌を打つ。
「いっつもあたしがああやって慰めてたよね」
「……だったな」
小さいころのことを思い出す。先斗が今の家に引っ越してきたのは４歳の時。当時は泣き虫だった先斗を、唯はいつも見つけてはさっきのように慰めてくれていたのだ。
「あの頃は先斗の方がずっと小さかったのに、いつの間にか先斗が

大きくなっちゃったね……」
「だな」

「ねえ」
しばらくたわいのない話を続けた後、唯が改まった表情で先斗の顔をみつめた。
「なんだ？」
「……先斗、あたしのことどう思ってる？」
「……え？」
「……先斗はあたしをどういう対象で見ている？」
「……」
唯からのいきなりの質問に、先斗はしばらく返事を返すことができなかった。

１２３話　離れて寄って

「珍しいわねぇ…。あんたが熱出すなんて」
小百合が体温計を見てつぶやく。
コンサートの翌日。先斗は熱を出して寝込んでしまっていた。
「まあ、ゆっくり寝ときなさい。海斗に移ると困るし、早く治してもらわないと…」
「うん…」
ベッドの上から答える先斗。
海斗は高校入試の追い込み時期。ここで風邪をうつしてしまうと本当に取り返しがつかなくなる。
「じゃあ、私仕事行くからね。昼ご飯はリビングの机の上に置いておいたからレンジでチンして温めて」
「うん」
「じゃあ、行ってくるわね。夕飯前には帰るわ」
そう言って小百合は部屋を出て行った。
「はあ…」
ため息が何度も出る。
先斗は昨日のことを思い返していた。

「…先斗はあたしをどういう対象で見ている？」
「え…」
あの時、唯の目は本気だった。そして先斗の答えをずっと待っていた。
「…幼馴染み」
目をそらしてなんとか答えた。
「…それだけ？」
唯の瞳がうるんでいるのが先斗にも分かる。

「…今はそれ以上ともそれ以下とも言えない」
「…そっか」
唯は涙を軽く拭って、目を伏せた。

「…あのさ」
数分の沈黙の後、唯がいきなり言葉を切り出す。
「…ん？」
「今はってことはいつかそれが変わる日が来るかもしれないってことだよね」
「…意味上はそうだな。…まあ気持ち的にもそうだが」
先斗は言葉を選びながら返す。
「…じゃあ、じゃあ、もしあたしが先斗にとって幼馴染み以上になれたと思った時、あたし、また告白するから。…あたし頑張るから」
唯を見る。その顔は本気だった。
「…分かったよ」
先斗は少し表情を緩めて頷いた。
「じゃあ、帰るね」
唯が立ち上がる。
「送ろうか？」
「…ううん。今日だけは一人で帰りたい」
「…分かった」
唯は振り向かずに歩いて行ってしまった。

「やっぱり俺はサイテーだな…」
ベッドに横たわったまま、自嘲的につぶやく先斗。
体が熱い。さっきより熱が上がったかもしれない。
「先に進む勇気がないだけじゃねえか…」
一番唯を傷つける返事の返し方をしてしまった。希望を唯に残してしまった。進む勇気もなく、突き放す勇気もなくうじうじとしている自分が本当に嫌になる。

「唯…」
先斗は朦朧とした意識の中、唯のことを考え続けていた。

「…そっか」
美香が悲しそうに相槌を返した。
そのころ唯は部室で昼ご飯を食べながら昨日のことを美香と加奈子に話していた。
今日は教室で食べる気がしなかったのでふたりを誘ったのだ。
「いきなり言っちゃったのが悪かったのかな…」
唯は目を赤くしていた。夕べも一晩中ずっと泣いていたのだ。授業中もぼっとしていて二回も注意されてしまった。
「なんか私めちゃくちゃ申し訳ないわ…」
加奈子が目を伏せる。
加奈子の告白はうまくいき、匠と付き合うことになったのだ。
「加奈ちゃんは全然悪くないよ。むしろおめでたい事なんだから。…匠くんと仲良くね」
唯はむりやり笑顔を浮かべて見せた。
「でも…」
「それにさ。まだ希望があるってことだもん。だからまだ頑張れる」
幼馴染以上にも以下にも見られないと言われたが、それ以上になる可能性があるとも先斗は言ってくれた。唯はそれに希望をもっていたのだ。
「じゃあこれからは積極的にアタックするの？」
それを聞いて少し楽になったのか、加奈子が聞く。
「ううん。今まで通り自然にふるまうわ。…このことは他のみんなに言わないでくれる？」
自分たちの問題でこれ以上部に迷惑をかけるわけにはいかない。
唯はそう考えていた。
「…庄吾くんにも？この間からすごく心配してたんだけど」

美香がおずおずと尋ねる。
「…庄吾には自分で言うわ。多分一番迷惑かけちゃったし」
「…分かった」
「さ。食べちゃおうか。５時間目体育だし」
「うん」
三人はいつもより静かに昼ご飯を済ませた。

翌週。
やっと熱が下がり、先斗は久しぶりに登校した。
「はあ…」
唯と顔を合わせるのが不安だった。どんな風にふるまわれるだろうか。先斗はそればかり考えていた。
教室のドアを開ける。
「あ、先斗だ」
庄吾の声。
「先斗。おはよう！」
唯が挨拶をしてきた。普段と全く変わらない。
「お、おはようさん」
先斗は軽く戸惑いながらも挨拶を返す。
その後も唯に全く普段と違う様子は見られなかった。
「あ、先斗」
「な、なんだ」
不意に声をかけられ驚く先斗。
「これ、休んでた時のノートのコピー」
そう言ってＡ４サイズのプリントを何枚か渡される。
「あ、ありがとう」
（…なんなんだろ）
深刻に考えていた自分が馬鹿な気がしてきた。
（…いつもどおりやるか）
なにかが心からすっと抜けていく感じがする。

先斗は少し表情を緩めると仲間たちのもとへ戻って行った。

１２３話　離れて寄って（後書き）

以上バレンタイン編でした。
…なんか読み返して恥ずかしくなります（笑）。

１２４話　留まる思い

２月２４日（日）。

唯が先斗に想いを聞いてから１０日が過ぎた。

今日は部活が休みだったので、唯は自分の部屋で電話を掛けていた。

「あ、もしもし？さゆ姉？」

「唯ちゃん？久しぶりね～。吹奏楽部順調？」

明るい声が受話器から聞こえてきた。

電話の相手、中野（なかの）　さゆりは神奈川県の七海高校に通う高校二年生。唯のいとこでアルトサックスを吹いている。唯より一つ年上なので唯は親しみをこめて「さゆ姉」と呼んでいた。

唯がアルトサックスを吹きたいと思ったのもさゆりの影響だ。

「うん！この間留学生の子も入部してくれたの！」

「え？留学生！？」

電話の向こうから驚いた声が飛んでくる。

「うちにホームステイしてるんだよ。ちょっとかわるね」

そういうと唯は隣で座っていたアマンダに子機を渡す。

「え？え、ちょっと！？はるかかわって！」

「あたしだって英会話無理よ！っていうかさゆりのほうが英語得意じゃないの！」

唯の急な振りに、電話の向こうは大慌てだ。

「こんにちは。アマンダ・スミスデス。はじめまして、サユリ」

「…へ？」

電話の向こうの拍子抜けした様子が手に取るように分かる。唯は大笑いしだした。

「あはははは！さゆ姉～。アマンダは日本語できるから大丈夫だよ」

ひとしきり笑った後、受話器を受け取ってまた話し始める唯。

「なんだ…。驚かさないでよ」
「ごめんごめん。ところではるかって誰？」
「ああ。同じ高校でテナーサックス吹いてる友達。すっごく色っぽい音色出すのよ。しかも彼氏持ち」
「ちょっと！最後は言わなくていいじゃない！あ、西嶋（にしじま）はるかです。唯ちゃん、よろしくね」
受話器からはっきりとした声が飛んできた。
「あ、はい！」
「そういえば唯ちゃん、今日はどうしたの？久々だけど」
「さゆ姉、先斗って覚えてる？」
「え？ああ。唯ちゃんの幼なじみでしょ？その彼がどうしたの？」
「うん…。実は」
唯はバレンタインデーでの出来事を話した。

「そっか…。で、唯ちゃんはまだ諦めてないの？」
「うん…。でも今後どう付き合っていけばいいかがいまいちよくわからないんだ…」
正直な思いをぶつける唯。部活やクラスでは周りに心配をかけないように明るく振舞っていたが、1人になると不安になってしょうがない。
今までどおりに先斗と接しようと思うが、思うように付き合えないのだ。
「いままで通りに付き合いたい…か」
「こんなことなら行動を起こすんじゃなかった…」
「唯ちゃん…」
唯の声が震えるのがさゆりにも分かる。
「でも行動に起こさなかったらなにも進まないでしょ」
はるかの声が静かな部屋に響く。
「…え？」

「私の友達にね。愛実ちゃんって子がいるんだけど」
はるかはさゆりから受話器を受け取り、話し始めた。
「彼女も幼なじみの男の子がずっと好きだったのよ。だから彼を追いかけてナナコウにも入ったの。でも」
「でも？」
「彼にはもう相手がいたの。彼女には絶対割り込めないと思ったらしいわ」
「…かわいそう」
「でも彼女は想いを伝えたの。本当に蹴りをつけるためにね」
「…」
「もちろん返事はＮＯだったけど…。その話をする彼女の顔はすっきりしてたわ。これで先に進めるって」
「…強いんですね。彼女」
「そうね。私もあんなに彼女が強いって思わなかった。ねえ、唯ちゃん。唯ちゃんにはまだチャンスがあるわけでしょ？」
「…はい」
「なら今までの関係を保とうとするのもいいかもしれないけど、どうせなら幼なじみ以上になれるように頑張ってみたらどうかな？」
「…はい！」
「じゃ頑張ってみてね」
「はい！」
唯は明るい声で受話器を置いた。

「やれやれ。経験者はいうこと違うわね～」
さゆりがからかうようにはるかの肩をつつく。
「まあね～」
「でもはるかは告られた側だから参考になるかしら？」
「なんですって～！？」
怒って見せるはるか。
「ま、その意見には賛成だからいっか。そういえば最近日高くんと

はどう？」
「ナイショ！」
「え～！？聞かせなさいよ～」
「やーだ！」
ふたりはその後もガールズトークを繰り広げるのだった。

１２４話　留まる思い（後書き）

今回はにっくん♪さん著の『奏～Ｋａｎａｄｅ～』からサックスパートの中野　さゆりさん、西嶋　はるかさんに登場していただきました。

今後もにっくん♪さんとのコラボは続きますのでご期待ください！

125話　ここだから

3月2日（日）。

三月に入り、昼間はだいぶ暖かくなってきて過ごしやすくなってきている。

夕方、部活から帰ってきた匠は自宅で勉強に励んでいた。学年末テストが終わりもう今年度はテストがないのだがさすが学年2位の匠。自宅学習を欠かさない。

「文ハイ狙わなきゃな…」

ちなみに文ハイとは、文系のハイクラスのことである。来年度からクラス編成は将来の進路によって決まる。

A組が文系ハイクラス、B～D組が文系普通クラス、E組が理系ハイクラス、F組が理系普通クラスだ。

匠は好成績を維持しているので文ハイに入れると先生から太鼓判をもらえたが、それでも油断はできない。もし成績が下がったら三年時に文ハイからは外れてしまうからだ。

匠は難関大学を目指していたので文ハイから外れることは避けたかった。

♪～。

携帯が鳴る。電話だ。

「誰だろ…」

少なくとも加奈子からではないことはわかる。彼女である加奈子からの電話やメールは別の着信音にしてある。

「先斗かな」

先斗とはこの後勉強会をすることになっていた。最近数学で軽く躓いているらしく、聞きたいことがあるそうだ。

「…あれ？」
ディスプレイを見ると電話番号のみが浮かぶ。どうやら登録していない番号のようだ。
少し警戒しつつも匠は着信ボタンを押し、携帯を耳に当てた。
「…はい」
「あ、黒田先輩！？」
電話の向こうから耳をつんざくような声が飛んできた。
「…その声は…。確か谷さんか？」
耳の痛みに耐えながら答える匠。
電話の相手は愛媛県の常套中学校吹奏楽部で泰徳と同じバスパートの谷　未来だった。
「はい！先輩、大変なんです！」
未来は慌てふためき、今にも泣き出しそうな声でまくし立てる。
「どうした？」
「泰徳が、泰徳がぁー！」
それを聞き匠の顔色が変わった。
「泰徳？泰徳がどうした！」
「行方不明なんです！」
「なんだって！？…詳しく話してくれるか？」
匠は泣きながら話す未来を諭しながら詳しいことを聞き出した。

泰徳の様子がおかしかったのは先月からららしい。
高校入試が終わり、学校が開放感に包まれているのも関わらず泰徳の表情は暗く、未来や美奈が話しかけても我ここにあらずといった様子だったらしい。
「一番最後に会ったのはいつだ？」
「今日の午前１０時過ぎです」
「どこで？」
「三津駅で…」
「様子は？」

「今までで一番暗い顔でした。だから声掛けられなくって…」
「そうか…。…なあ、今日何かあったか？」
「…何も思いつかな…あ！」
一瞬否定しかけた未来だったが、何か思い出したのか声をあげた。
「どうした？」
「…今日公立高校の合格発表…」
「…まさか」
「…もしかして泰徳…。ど、どうしよう」
最悪の展開が脳内で浮かぶ。
「と、とにかく警察に…」

ピンポーン！

玄関のチャイムが鳴る。
「…客だ。悪いけど一旦切るぞ。すぐにつなぎなおすから」
「はい」
そう言って電話を切ると、匠は玄関に向かった。
「どちら様……泰徳！？」
玄関には泰徳が立っていた。
「お前！愛媛でどんだけ心配かけてるか…どうした？」
匠は激しかけたが、泰徳の表情を見てその怒りは鎮まる。
「…匠」
泰徳の瞳にはうっすらと涙が浮かんでいたのだった…。

「…そうか」
泰徳の話を聞いて、匠は頷いた。
やはり失踪の理由は受験の失敗だった。苦手な社会が足を引っ張ったのが原因らしい。
「…」
「…」

沈黙が続く。匠にはどのように声をかけていいか分からなかったのだ。

ピンポーン〜

チャイムがまた鳴った。

「はい」

泰徳を待たせて玄関に出る。

「遅れて悪いな。ちょっと出がけにオフクロにつかまって…。どうした？」

先斗が玄関に立っていた。しかし匠の様子を見てなにかを察したらしい。

「…ちょっとな」

「出直したほうがいいか？」

「…いや、上がって話一緒に聞いてくれ」

「話？」

「…泰徳来てるんだ」

先斗は頷くと靴を脱いで匠の部屋に向かった。

「…そうか」

先斗も泰徳の話を聞いて、頷く。

「…俺どうしたらいいんですかね…」

「先に進むしかないだろ」

「…え？」

はっきりと答えた先斗の顔を思わず見る先斗。

「確かにここでは躓いてしまったかもしれない。でもここで止まったままではどうしようもないだろ？」

先斗の言葉は厳しくも、不思議と暖かかった。

（あ…。そういえば…）

先斗も第一志望の高校に落ちて桜田中央に来ていたことを匠は思

い出した。
　そのせいか泰徳もいつになく素直な態度で先斗の話を聞いていた。
「それに、第二志望の高校だからこその出会いがあると思うんだ。もし俺が彩稜に行ってたら少なくとも匠にも、泰徳君にも出会えてなかったわけだし」
「…」
「だから前向いていこう」
「…先輩」
　泰徳の目から涙がこぼれる。
「うわぁあぁぁぁ…」
　そしてそのまま泰徳は泣き崩れてしまったのだった。

「さすが先斗だな」
　一時間後。落ち着いた泰徳を駅まで送った後、先斗と匠は匠の部屋で紅茶を飲んでいた。
「なんか去年の俺見てるみたいでさ。なんかほっとけなかった。ま、ああでも考えないとやってけないからな～」
「じゃあ今彩稜に編入できるなら行くか？」
　意地悪な質問をぶつける匠。
「行かないさ」
　ずぱっと言い切る先斗。
「確かに桜央は第二希望だったけど、今となってはもうそんなの関係ない。それに」
「それに？」
「桜央（ここ）だからこそ頑張れる気がするんだよな。なんか」
「…そっか。じゃあさっそく数学頑張ろうか」
「え？今からやるのか？」
「もちろん。ここだから頑張れるんだろ？」
「…分かった」
　二人は紅茶を飲み干すと、数学のテキストを開き、問題とにらめ

っこするのだった。

１２６話　開放感

３月６日（木）。

今日は島根県の公立高校の入試日だ。

そのため学校内には立ち入り禁止。もちろん練習もできない。

「終わりです」

しかし先斗は試験監督として受験の手伝いをするために校内にいた。しかもアルバイト扱いだから給料も入る。

（新しい漫画買うかな～）

先斗はお金の入った封筒をかばんに入れると、笑顔で校門を出た。

「…なんでこんなことに」

先斗は封筒を見てため息をついた。

「さすが先輩。太っ腹ですね」

「先兄ありがとう～」

「ファミレス久々だ～。島にはないんだよな」

「うまいっす」

それぞれ貴弘、海斗、耕一、良樹。

校門を出たところで先斗は４人につかまってしまっていた。

そしてそのままファミレスへ。

さすが男四人。たらふく食べるため、さっきもらった封筒は一気に空っぽになってしまった。

「…で、四人ともできたか？」

４人の目の前の皿が空っぽになったころ、先斗は試験の出来を聞いた。

「はい」

「なんとか」

「多分大丈夫」

「大方」
四人とも笑顔で答える。
「そうか。そういえば貴弘。まだ卒コンのＯＢステージの曲決まってないって聞いてたけど決まったか？」
桜田第一中学校の卒業コンサート、通称卒コンは３月３０日（日）に行われる。ＯＢやＯＧである先斗、唯、庄吾はもちろん、桜央のメンバーも鑑賞にくる予定だ。
「あ、はい。この２曲です」
そう言ってかばんから楽譜を取り出す貴弘。どうやら本来の目的はこれらしい。
「『吹奏楽の為の序曲』と、『ジェラート・コン・カフェ』か…」
楽譜を見て呟く先斗。
「練習が２３日と２７日と２９日なんでできるだけ出てくださいと先生が言ってました」
「分かった。で、合同の曲は？」
「あ、合同はこっちです」
そう言ってまた楽譜を取り出す。
「『ゲールフォース』？フリューゲルホルンは誰がやるんだ？」
「未来先輩にお願いしようかと。序曲のソロは庄吾先輩なんで」
「そうか。まあ南は来れないだろうしな…」
先斗は頷いてみせる。
先斗たちの代のトランペットは三人だった。庄吾と、桜田東に行った生瀬（なませ）　未来（みき）、そして県外の高校に行った南（みなみ）　雫（しずく）の三人だ。
腕前は未来が飛び抜けて上手く、庄吾と雫がどっこいどっこいといった感じだったが、先斗から見るとここ一年で庄吾は飛躍的に上手くなった。
ほかのメンバーはどうしているだろう。先斗は卒コンを楽しみにしていた。
「じゃあお前らも明日から練習か？」

「はい。久々なんで楽しみっす」
良樹が答える。
「頑張れよ。最後の総締めだしな」
「「はい！」」
返事を返す貴弘と良樹の顔は笑顔だった。
（…ま、いっか）
その表情を見て、先斗はおごってよかったなと思い直すのだった。

１２７話　助言

３月１０日（月）。

学年末試験の返却も終わり、校内に穏やかな雰囲気が戻ってきた。１人を除いて……。

「どうしよう……」

英語の答案用紙を目の前にして頭を抱えている男がいる。そう、庄吾である。

彼が英語を苦手としているのは周知の事実だがそれでも赤点は取らずに済んでいた。

しかし今回の学年末テストは１２月から２月分と範囲が広く、対策が追いつかなかった。

「２４点……」

そう。とうとう英語Ｗで赤点を取ってしまったのだ。英語Ｒは５７点と彼にしては大健闘だったのだが……。

「……とりあえず練習行くか」

庄吾は肩を落としつつ、部室へ向かった。

「ちょっと。庄吾そこもうちょっと音張ってよ。ソロでしょ」

唯が文句を言う。

放課後。先斗と唯と庄吾は卒業コンサートの練習をしていた。

現在練習しているのは『吹奏楽の為の序曲』。２０００年の課題曲？である。

この曲の中間部にトランペットソロがあり、そこは庄吾に任されていた。

「通信簿が心配か？」

先斗がズバリとその不安要素を当てる。
「あ～。確かに欠点だったしねぇ……」
唯もそれに乗っかる。
「……進級できなかったらどうしよう」
庄吾の声のトーンがいつもと違う。いつものように返してくると思ったがその声は暗い。
「ち、ちょっと庄吾？」
「ご、ごめん。泣くなって……」
庄吾の目から涙があふれ始めた。それを見て2人は慌ててなだめるのだった。

「庄吾は一夜漬けの癖を抜かないといけないな」
数分後。庄吾が落ち着いた後、先斗と唯は話を聞いていた。
普段は勉強をあまりしない庄吾。好きな教科である社会系科目は満点を叩き出すのだが、後は平均くらいで英語は壊滅的だ。

「ああ……」
「あ、そうだ。塾行けば？」
「来月から行く予定。英語と数学で週４」
「そうか……」
「でもあたしたちも考えていかないといけないよね……」
唯もため息をついた。

来月から二年生。そろそろ進路も少しずつ考えていかないといけない時期だ。三人は進学希望なのでさらに大変になるだろう。

「ま、頑張ろうぜ」
「……うん」
庄吾はなんとか頷いて、また楽器を構えるのだった。

その晩。
庄吾は自分のブログを更新した。
自分がどうしたらいいか分からなかったので文章にして人に見てもらおうと思ったのだ。
ちなみに彼のＨＮ（ハンドルネーム）は爆音ペッターだ。

＝＝＝

その後、先斗に言われたとおり自主学習をしてみるものの、なにしろ英語はチンプンカンプン。３０分も続かない。
「はぁ……。ん？」
携帯のサブディスプレイが光っていた。
「誰からだ？」
メールを開く。

＝＝＝

庄吾はＵＲＬからコメントページを開く。
庄吾が使っているブログのサイトでは記事にコメントが付くとメールで送ってくれるのだ。

＝＝＝

入道雲　２００８－０３－１０　２２：１９：５５　＜＜このコメントに返信
ーーー

「目標？」
『俺は正直まだあんまり将来の夢とか見えてないんだけどさ、翔には小学校の音楽の教師になりたいって夢があったんだ』
「音楽教師ってなるのかなり難しいんじゃ……」
『ああ。しかも翔はピアノも高三の頭まで習ってなかった』
「え！？」
庄吾は耳を疑った。庄吾の友達の中には将来音楽にかかわる仕事に就きたいから音大に行きたいという者がいる。彼は既にピアノを習っていて、先生にも付いていると言う。
『しかも数学？Ｂは一応取ってたってレベルだからかなり大変だったと思う』
「じゃあなんで……」
『だから目標さ。翔は「小学校の段階からなるべく多くの子供たちに、音楽に慣れ親しんでもらいたい」っていっつも言ってた。その目標があったから多分頑張れたんだと思う』
「……そうなんですか」
『庄吾はなんか夢ある？』
「……社会が好きだからそれを生かせる仕事に就きたいとは思ってますけど…」
『じゃあそれを膨らませてけばいいんじゃないかな。まだ一年生だろ？時間はたっぷりあるんだからさ』
「……ですね。そうですよね」
庄吾は頷いて見せた。なんだか肩の荷がちょっと下りた気がした。
『あ、言い忘れてたけど翔、島根大だから』
「え！？なんでまた……」
庄吾は驚いた。神奈川からわざわざ島根にくるメリットが分からなかったからだ。
『島根って今市町村合併や団塊の定年で先生が足りなくなってきてるんだろ？』
「あ、はい」

『翔が言うには「どうせやったら必要とされてるとこで教師したい！」だってさ』
「すごいですね。その……翔先輩」
『俺も感心したよ。しかも朝倉さん……あ、翔の彼女なんだけど、彼女も私立クラスだったのに島根大の法文受かっちゃうし』
「……」
庄吾は驚きすぎてもう何も言えなかった。
『そうだ。俺から翔に庄吾のアドレス送っとくよ。島根で知り合いほとんどいないって言ってたから仲良くしてやってくれ』
「あ、分かりました」

『で、苦手教科の克服についてだけど……』
ずれた話を戻す拓真。
「あ、はい」
『翔いわく一番いいのは彼女と勉強する事らしいぞ』
「はい？」
思わず間抜けな声を出す。
『可愛い彼女いるんだろ？』
「……はい」
『じゃあ、彼女と勉強するんだな。教えあったりできるし』
からかうように言う拓真。
「先輩はそんな相手いないんですか？」
『さあな。それじゃ、大学からきた課題やるから。じゃあな』
「あ、ちょっと……」
さらっと庄吾の追及をかわして、拓真は電話を切った。

「目標かぁ……」
庄吾はベッドに腰掛けて将来について考えていた。
「思いつかないや。ま、とりあえず……」
庄吾は少し顔をほころばせる。

「美香に英語教えてもらうか。いつなら空いてるかな……」
そしてそのまま美香にメールを打つのだった。

１２７話　助言（後書き）

今回は奏～ｋａｎａｄｅ～から本堂　拓真くんに登場してもらいました。
奏～ｋａｎａｄｅ～とのコラボはまだまだ続きますのでご期待ください。

ちなみに途中で出てきたブログの描写ですがＡｍ○ｂａブログ参考にしてます笑

１２８話　気持ちを高めて

３月１７日（月）。

いよいよ本番が３日後に迫り、吹奏楽部は慌ただしい日々を送っている。

今日も合奏が延長され、加奈子を送り届けて匠が家に戻ったのは午後９時過ぎだった。

「おかえり。今日も大変だったわね」

母親の美里（みさと）がキッチンから出てくる。

「本番前だから」

「そう。やっぱり高校は中学より本格的なのね～」

美里はのんきに言う。

「まあね」

匠は母親ののほほんとした雰囲気が少し苦手だったので軽く返すだけにしておいた。

「ごはん食べる？」

「加奈子と食ってきたからいらない」

「……そう」

美里は悲しげに返すと、キッチンに戻って行く。

「……悪いことしたかな」

おそらくもう準備をしていたのだろう。キッチンからはいいにおいがしてくる。匠は少しばつが悪そうな顔をして自室に入った。

「ん？」

パソコンを見ると、メールが３通届いていた。

一通は業者メール。すぐにゴミ箱にポイして二通目を開く。

「あ、泰徳からだ。携帯に送ってくれたらいいのに……」

＝＝＝

＝＝＝

なったんだもん。すごいことよ」
「……そうかな」
顔を赤らめる美香。
「ソロあるんでしょ？お父さんと聞きに行くからね」
「うん！」
美香は満面の笑顔で答えた。
「じゃ、お風呂入りなさいね。お父さん、気を使ってずっと待ってるんだから」
「は～い」
美香はフルートを片付けると、防音室を出るのだった。

その頃、唯はさゆりに電話をしていた。
『そっか～。桜田市も２０日が市の演奏会なんだ』
「うん。さゆ姉もでしょ」
『うん』
さゆりの住む七海市でも２０日に市の定期演奏会が行われるらしい。
『翔先輩、引越しのために一度島根行くから来れないんだって～』
「え？そうなんだ？」
唯は驚く。
『うん。まあ一回帰ってくるからまだ会えるんだけど……』
「そうなんだ～」
『先輩、１２月も忙しくて来れなかったから聞いてほしかったのに～』
さゆりは残念そうな声でつぶやく。
「そっか……」
『でも、先輩有言実行しちゃったよね。本当に２人で島根大学合格しちゃったんだから』
「かっこいいな～。さゆ姉はどうするの？　来月から受験生でしょ

？」
『キャ～！　それ言わないで！　先輩みたいに頭良くないからヤバいのよ。でもあたしもあいつと一緒に北海道行くって決めたから頑張らないと……』
「あはは！頑張って～」
『ひっど～い！　来年同じこと言ってあげるからね。ま、お互い頑張ろう！じゃ、切るね』
「うん！　バイバイ」
唯は電話を切った。
「さて、音源聞いたら寝よ～っと」
そう言って唯は『百年祭』のＣＤを入れて再生した。

それぞれ方法は違うものの、メンバーたちは本番に向けて気持ちを高めるのだった。

１２８話　気持ちを高めて（後書き）

※１　詳しくは『ブラス魂』シリーズをお読みください。

７０，０００アクセスを突破しました。

皆様のおかげです。ありがとうございます！

１２９話　知り合い大集結

３月２０日（木・祝）。

今日はとうとう桜田市定期演奏会の日だ。

桜田中央高校の本番は午後５時１５分から。本番の日は大抵ギリギリまで練習をしてから出るのだが、今回は出番が遅いため午前は観賞、午後一で音出しをして本番に挑むことになっていた。

「次が桜田一中でしょ？」

唯が先斗に聞く。

部員たちは桜田市民ホールの大ホールで演奏を鑑賞している。桜田一中は午前の部のトリ。部員たちはこの演奏を聞き終わったら移動することになっていた。

「ああ。確か課題曲やるって言ってたな」

「へえ……。どれだろ。あ、入ってきた！」

ステージを見ると、桜田一中のメンバーが入場する様子が見える。秀吾や浩之、舞の姿も見えた。

アナウンスが流れる。

「プログラム１８番。桜田市立第一中学校。曲目は『マーチ「晴天の風」』、『コパカバーナ』です」

舞台が明るくなってメンバーの姿がはっきり見える。部員は現在２年生２５名、１年生１９名の４４名だ。あの事件の影響でやはり少し退部者が出たのだろう。先斗たちが唯一直接接した２年生のメンバーが欠けているのを見ると少し寂しくなる。

産休から復帰した庄野先生が指揮台に立つ。

軽やかな指揮から『マーチ「晴天の風」』が始まった。

１６分音符を含んだ前奏。最初はトランペットとクラリネットでそれがサックスとホルンに受けつがれる。
ユーフォとチューバの下降系の動きを合図にクラリネットとアルトサックスの旋律が始まった。
『マーチ「晴天の風」』は糸谷（いとたに）　良（りょう）さん作曲で、２００８年度の吹奏楽コンクール課題曲のひとつである。
タイトルに含まれている「晴天」、「風」の単語から推測されるようにこの曲のメロディーはとても爽やかである。作曲当時、作者が高校生であったことも関係しているのだろう。
第一マーチが終わるとクラリネットとアルトサックス、ファゴットとテナーサックスとユーフォがそれぞれ掛け合う。そして金管が鳴り響いた。
ユーフォとチューバの下降音とともに冒頭の旋律が今度はトランペットが加わって演奏される。

しかし今度は伴奏が一気に薄くなる。なんとチューバが休みなのだ。木管低音（※１）のみが頭打ちを担当するためバランスが取りづらいが無理がない程度で木低が聞こえてきてバランス良く仕上がっていた。
伴奏にチューバが加わり、金管が３２分音符を吹いて曲の前半が終わった。
そこにすかさずパーカッションソリが加わる。スネアドラムが堅く鳴り、バスドラムがしっかりとそれを支える。そしてそれにシンバルが華やかさを加えた。
ソリが終わると転調して一瞬盛り上がったかと思うと一気に静かになり、アルサクとユーフォ、ファゴットのメロディーが始まった。ユーフォは一年生が１人だけだが、木管の音をしっかり包み込んで吹きあげる。

「……すげぇ」

「……うん」
先斗たちＯＢＯＧは後輩たちの急激な上達に驚いていた。
去年の夏の演奏から比べると確実にレベルが上昇している。しかもまだ初春なのだ。それなのにこのクオリティまで持ち上げている。
３人がポカンとしているうちに演奏は終了してしまっていた。
「ここで休憩に入ります。プログラムは午後１時１５分から再開いたします……」
アナウンスが流れて客たちが出口から出始める。
しかし３人は茫然として立ち上がれずにいた。
「こりゃ卒コン、期待できそうだ……」
「……うん」
「おい。移動するぞ」
匠がそんな３人を呼ぶ。気がつくと他のメンバーたちはもう退出してしまっている。
「あ、うん！」
３人はあわてて立ち上がりその後を追うのだった。

「あ～！午前の部終わってしまってるやないか！」
ホールの入口に出てくると、少し前の方から突然関西弁の叫び声が聞こえてきた。
「あれ？この声どこかで……」
匠が少し首をかしげる。まだ遠いので相手の姿は見えない。
「だから一個前の電車乗ろうって言ったじゃない！神奈川と違ってこっちは便数少ないんだから！」
それに標準語の女性の声が聞こえてくる。
「俺のせいって言いたいんか！？」
「そんなこと言ってないじゃない！」
「言ってる！」

どうやらカップルの喧嘩のようだ。
「あれ？　この声どこかで聞いたことあるような……」
先斗が首をかしげる。
「あたしもそう思う。どこでだっけ……」
「う～ん……」
「あれ？　匠もか？」
「ああ。愛媛で聞いたことあるんだよな……」
４人とも首をかしげたその時だ。そのカップルの姿が見えた。ふたりともオシャレでまるでモデルのようだ。
ふと男と先斗の視点があう。
「「あ！」」
「佐野さん！？」
「西掛くん！？」
そしてお互いを指差すのだった。

「あ～よかった。俺ら桜央の演奏午前だと思っとってん。だから聞き逃したと思って焦ったわ」
「だから泰徳君にちゃんと聞こうっていったじゃない」
男が胸を撫で下ろし、女はその胸をひじで軽くつつく。
４人とさっきのカップルは桜田中央高校の音楽室で話していた。その輪には面識のある優樹や和志、美香に茜、さらには慶太も加わっている。

カップルの男性の方は佐野（さの）　翔（かける）、女性の方は朝倉（あさくら）　陽乃（ひなの）。２人とも神奈川県の七海高校の出身だ。
２人は吹奏楽部に所属しており、翔はアルトサックス、陽乃はトランペットを担当していた。
彼らの高校はかなりの強豪校であり、創部３年にして東関東大会に進出するという輝かしい功績を残している。

彼らと先斗たちの出会いは去年の夏のことになる。
島根大学のオープンキャンパスの帰り、迷子になり、さらには熱中症になってしまった翔を優樹と和志が見つけて先斗の家に運んだのである。
翔の熱中症は軽く、すぐに回復したのだが、それで新幹線を逃してしまい、宿のない翔たちは先斗と唯の家にそれぞれお世話になったのだ。

「でもちょうど先斗くんたちに会えてよかった。あのときのお礼しないといけないからね」
「え？　ってことは先輩達もしかして……」
唯が二人に聞く。
「おかげさまで無事に2人とも島根大学に合格しました！」

その言葉で部室が一気に沸く。
「マジッすか！？」
「おめでとうございます！」
「よかった～！！」
「ありがとう！」
陽乃たちも嬉しそうな表情を見せた。

「盛り上がってるのはいいけどさ…」
そこに楽器庫から楽器を持ってきていた先斗が口をはさむ。
「早く音出ししないと搬出の時間になっちまうぞ」
「え？あ、ホントだ！！急がなきゃ！」
そこで唯たちは時間を思いだしたように慌てて楽器庫に駆け込む。
「……すみません。あんなんで」
先斗が頭をかいて、ポカンとしている二人に謝る。
「構わんで。陽乃なんてもっと大騒ぎやったし」

「ちょっと？」
「悪い悪い。それじゃあ邪魔にならんように会場に先行ってるわ。じゃあ」
「はい！」
その返事を聞いて、２人は笑顔で音楽室から出て行った。

「やべえ……」
楽器搬入、音出し、チューニングを終えて桜田中央高校のメンバーたちは舞台裏まで来ていた。舞台では桜田東高校が演奏をしている。なんと今回桜田中央高校は大トリなのだ。
「匠が緊張するなんて珍しいな」
先斗が不思議そうに匠を見る。
「さすがにあんなに知り合いいるとな…」
この時点でこの演奏会に来る知り合いは泰徳、未来、美奈、悠輔、翔、陽乃の６人。緊張しないと言ったらウソになってしまう。さらに大トリだという事が彼の緊張を高めていた。冷や汗が流れ、手は震えてしまっている。

「だったら俺はどうなるよ」
そう言って先斗は軽く笑って見せた。
「あの客席の中に軽く５０人は知り合いいるよ。気張らないで楽にいこうぜ」
「……ああ」
「ほら、カウント始めるぞ」
そうやっていつもの儀式が始まる。
「1、2、3……」
（あれ……）
不思議とだんだん気分が楽になっていく。普段はなんとなく付き合ってやっていたが今日はなんだか効いてる気がした。

「２８、２９、３０！」
手の震えはいつの間にか止まり、適度な緊張感と本番前の高揚感が残る。
「大丈夫だろ？」
「…ん」
笑顔で聞く先斗に何気ない表情で返す匠。

「桜田中央高校さん、よろしくお願いします」
「行くよ」
役員の声に、唯が先導してメンバー達は入場した。
大分舞台慣れしてきたのか、入場もそつなくこなす。
譜面台の高さを整えて、先斗は会場を見つめた。
（よし）

「プログラム３８番。桜田中央高校。曲目は福島　弘和作曲、『百年祭』です」
気合いを入れ直した所でアナウンスが流れた。
京が指揮台に上がり、茜を見つめる。
茜が頷くと、京は頷き返して指揮棒を降ろした。

１２９話　知り合い大集結（後書き）

今回はにっくん♪さん箸の『奏～ｋａｎａｄｅ～』から、
佐野　翔くん、
朝倉　陽乃さんに登場していただきました。

今後も２人は出演していただく予定なのでご期待ください。

１３０話　『百年祭』

今回桜田中央高校が演奏する『百年祭』は２００５年に奈良県立城内高校のために作曲された曲だ。
城内高校はその年…ちょうど開校百年目に閉校が決まっており、残った三年生の部員達のためにこの曲は作られた。
初演の時には副題に「～１０人の奏者のために～」と付いており、実際に１０人で演奏されたという。しかもチューバとパーカッションはいなかったらしい。
この曲を初めて聞いた時、先斗の脳裏には桜田西高校のことが浮かんだ。閉校した学校の跡地でこの曲を練習する……。なぜか胸が痛くなった。

この曲はクラリネットのソロから始まる。
京が指揮をおろした瞬間、茜のクラリネットの音色が会場に広がった。
暖かくやわらかく、楽器を始めて一年以内とは思えないほどの音色だ。
桜田東高校の後とあって会場は立ち見が出るほどの満席。２４００以上の目が彼女に注がれる。
それに美香のフルートが絡まる。それぞれが主張し合いつつもそれぞれの音は潰さない。
掛け合いが一瞬途切れると、アルトサックスがしっとりと加わり三重奏を奏でた。
しばらくアルトサックスが主導してアンサンブルが続く。それにさらにバリトンサックスが加わった。
「中野ちゃん言ってたとおり中島さん上手いな」

翔がコソコソと陽乃に囁く。
「そうだね。翔もうかうかできないんじゃない？」
「……そうやな」
そう返すと、翔はまた前を見つめた。

トランペットが主旋律に変わる。
もともと柔らかい音色を出すのが得意な理穂が中心となってしっとりと歌いあげる。その艶やかな音色に観客の視線が向く。
そこでようやくトロンボーンが加わり、金管アンサンブルになる。
さらに木管が入り、前半部で一番盛り上がる部分がやってきた。
サックスとトランペット、フルートとクラリネットがメロディーを歌いあげ、低音がどっしりと鳴る。不思議な響きが会場に響く。
テンポが上がりスネアドラムとホルンが八分音符を刻み始めた。
刻みの上でトランペットがスピード感のある旋律を吹く。ここは縦の線を合わせるのに苦労したが綺麗にまとまってきている。
それが頂点に達した瞬間、トゥッティのリズム。そこから木管ののびのびとした旋律が会場に広がっていった。

「なんでこんな時に間違えるのよ……」
その頃泰徳は未来、美奈、悠輔を連れて会場の外にいた。
「……すまん」
なんと、泰徳たちはバスを間違えてしまい、午後のほとんどの団体を聞くことができなかったのだ。
さすがの泰徳も女子二人の睨みを受け、非を認めて謝る。
「仕方ないよ。とりあえずモニターから見れるからそれで我慢しよう？」
悠輔が二人を止めてモニターを指差す。
市の定期演奏会では安全上の問題で入場制限を行うため、入れなかった人のためにホール内の演奏をリアルタイムでモニターに流す

のだ。
ちょうど画面には17人の姿が映っている。
「へえ……。コントラバスの子ってアメリカ人なんだ……」
未来がアマンダを見てつぶやく。
「あ、ホルンカッコイイ……」
ちょうど聞こえてきたホルンとアルサクのソリに悠輔が目を輝かせる。
「……」
2人がいろいろ言っている間にも泰徳と美奈はじっと画面を見つめて演奏に集中している。
「やっぱ集中するとこうなっちゃうんですよね」
未来が苦笑いして悠輔に告げる。
「さすが師匠だ。すごい集中力……。俺も見習わなくちゃ」
「そうですね。あたしたちも静かに聞きましょう」
そうして2人も演奏に集中し始めるのだった。

いろいろな楽器がメロディーを受け渡し合い、曲は進んでいく。
トランペットのファンファーレの後、最初のメロディーにシロフォンが加わった。
今回は優樹がシロフォンを担当している。結構細かい譜面ではあるが、優樹は打ち損ねることなく叩ききった。
雰囲気が変わり、アルトサックスが主導してメロディーを奏でる。ひかりが奏でるサスペンデットシンバルの音が後ろからクレッシェンドを掛けて鳴り響く。
だんだんとリズムが複雑になっていき、さまざまな楽器が絡み合っていく。
ここは8分の5拍子と6分の7拍子が交互に含まれている部分だ。京も指揮の練習にかなり苦労した。合奏でもここを重点的に練習したのは言うまでもない。

盛り上がりが最高潮に達すると、シロフォンが八分音符を刻む。和志のティンパニがおなかに響くような音で周りを圧倒させる。ホルンとトロンボーンが主旋律を力強く奏で、全員が刻みに入った。

リタルダントとデクレッシェンドがかかり、だんだん静かになっていく。

最後に一本残ったのは美香のフルートだった。

そして今度は弥生がそれを追いかける。

冒頭とは全く逆の掛け合いだ。

そこにトランペットのやわらかな旋律が加わる。陽乃はトランペットをじっと見つめていた。

木管のしっとりとしたメロディーが始まる。

作曲者の福島　弘和氏はここの部分について、

「もう少しで終わってしまう、１００年の時の流れ（自分の事に置き換えて、ひとつの物事）」を噛み締めながら演奏してほしい、と述べている。

先斗たちもミーティングでここについてゆっくり考えてみたことがあった。

先斗や京は桜田西高校のことを思い浮かべたし、弥生は中学の合唱部の最後の大会について、優樹は最後の野球の大会について考えた。

物事には始まりと終わりがある。だからこの部活にもいつか終わりが来るのだろう。

唯はそう考えて少し切なくなってしまっていた。

音楽はゆったりと終わりに近づいていく。三回目のフルートソロの後、唯の短いソロが入る。

（終わりたくないな……）

その瞬間、唯の目から涙がこぼれた。

トランペットの堂々としたメロディーで曲は最後のロングトーンに入る。ティンパニのロールがクレッシェンドをかけて、曲は終了した。
会場全体から拍手が飛んでくる。その拍手を聞いて唯は感極まってしまい、目から涙があふれた。

照明が消えて会場が暗くなったので、部員たちは舞台脇にはける。
「ゆ～い！」
奈津美が笑いながら唯の肩を抱く。
「ナイスソロ！」
「ありがと！」
唯は笑顔で返す。
暗くなった瞬間に涙をぬぐったからその涙は誰にも気づかれることはなかった。

「……小編成なのにえらいすごい団体やったな～」
会場の後ろの方で腕組みをしながら聞いていた男性がそっと呟く。
「こりゃ４月が楽しみやな」
そう言って男は会場から出て行った。

「お疲れさ～ん！」
翔が笑顔で声を掛けてくる。
桜田中央高校に部員たちが戻ると、翔、陽乃、悠輔、泰徳、美奈、未来が出迎えてくれた。
「いい演奏やったで。ソロもイケてたし」
「「ありがとうございます！」」
唯、弥生、茜、美香は笑顔でお礼を言った。
「あたしは一年生の時の定期演奏会思いだしたな～」
陽乃が感慨深そうに呟く。

「あの時は１０人で演奏したんですよね？」
悠輔が尊敬のまなざしで翔たちを見つめる。
「え！すごいですね、先輩！」
女子たちが騒ぎ出す。
そしてそこからおしゃべり大会が始まった。

「あの、西村先生」
女子たちがおしゃべりをしている横で、翔は京に声をかけていた。
「なんだい？」
「あの……」
翔はどう切り出したらいいかわからなかったので少し言葉に詰まる。
「……俺も話があったんだ。ひとつ頼みがあるんだが」
それを見て、京は口を開く。
「なんですか？」
「うちの高校のサックスのコーチをやってもらえないか？」
「え！？」
思いもしなかった言葉に驚く翔。
なにしろ翔と京が会うのは初めてであるし、先斗たちと交わした約束を京が知っているとは考えにくかい。
「君のことは東（あずま）　恭一（きょういち）先輩から聞いていたんだ」
「……東先生が？」
意外なところに出てきた恩師の名前に翔はさらに驚く。

「東先輩と俺は同じ大学でね。先輩はかなり上だけど大学の定期演奏会とかで会う機会も何回かあったんだ。先輩も君のサックスの腕をほめていた。それを見込んでお願いしたいんだ」
それを聞いて、翔は、京が恭一のことを信頼しているんだなと感

じた。
そして、京とこのバンドを支えて行きたいと思えた。
「……分かりました。お受けします！」
「ありがとう！」
京は笑顔で返した。
「じゃあ、詳しい話は後でまたしよう。これからミーティングをしないといけないからな。はいはい！おしゃべりしてないで集まれ！ミーティングするぞ！」
京が部員たちを集める。
（懐かしいな……）
翔は集合する部員達の姿を見て、七海高校での活動を思い出していた。

１３１話　新しい季節

４月７日（月）。
２００８年度に入って一週間。桜田中央高校では今日から新学期が始まる。
午前中は始業式で午後に入学式が行われるため、結構慌ただしい一日になりそうだ。
「今年はクラス分けどうなるかな…？」
先斗と唯と庄吾はいつものとおり三人で登校している。
「さあな。まあ俺は別の組だろうな…」
先斗はそう返した。
三人のうち、理系なのは先斗だけなのだ。
「ま、部活は一緒だから登下校はあまり関係ないけどな」
「そうだね。あれ？庄吾今日は静かだね…庄吾？」
唯が庄吾の方を向くと、庄吾はかなり深刻そうな顔をしている。
「そっとしておいてやれよ。坂根と同じ組になれるか不安なんだろ」
「ああ、なるほど…」
そう言って、二人はクスクスとその様子をみて笑うのだった。

校内に入ると既に多くの生徒が中庭に集まっていた。
「あ、もう掲示されてる！」
三人はあわてて掲示板に駆け寄った。
まず、Ａ組。文系のハイクラスだ。
庄吾と唯は真剣な眼差しで掲示板を見つめる。

Ａ組

黒田　匠
中島　唯

進藤　慶太

「あ！あった！」
唯が嬉しそうに呟く。
学年二位の匠はもちろん、コツコツ型の慶太もハイクラスだ。
「やっぱりな…」
その横で庄吾は肩を落としていた。社会でなんとか英語をカバーできればと考えていたが無理だったようだ。

先斗は理系の方のクラス発表を見ていた。理系は二クラスしかないので、名前を見つけるのは容易かった。

東　茜
田中　拓也
田中　龍也
西掛　先斗

「お、先斗。組一緒じゃん」
名前を見つけた瞬間、拓也と龍也が嬉しそうに声を掛けてくる。
「ああ。よろしく」
先斗は笑顔で返事を返した。
茜も知り合いがいたようで向こうの方で楽しそうに話している。
ちなみに庄吾と美香がB組、奈津美とひかりとアマンダがC組、和志と優樹がD組、理系は弥生と加奈子がF組だ。
加奈子は匠とクラスが別れたからだろう。少し寂しい顔をしている。
一方、庄吾は彼女と同じ組になったのでさっそく友達にからかわれていた。
「こら！もうすぐチャイムが鳴るから教室に入りなさい！」
牛島先生の怒号が飛ぶ。

それを聞いて生徒たちは慌ててそれぞれの教室に向かうのだった。
「あらぁ～！　素敵じゃない！」
女性陣の黄色い声が飛ぶ。
その頃、西掛家では海斗と耕一が入学式に行く準備をしていた。
今日は島から祖母の早苗と耕一の母親の愛海も出てきている。
「やっぱり背が高いと詰め襟が映えるわね～」
早苗が二人を見て笑顔になる。
海斗はちょっと背が伸びて１７９センチ、耕一も１７５センチとだいぶ長身だ。先斗も一応背は標準以上なのだがこの二人の横だと遠近法でどうしても小さく見えてしまう。
「親バカだよな…」
「バババカも入ってるぜ？」
注目されている二人はさすがに呆れているのか、こそこそとこんな話をしている。
「なんか言った？」
ちらっと聞こえたのか、小百合がギロっと二人を睨む。
「な、なんでもない！じゃあ俺たち先行くね！」
二人は貴弘と良樹と一緒に行くことにしていたのだ。
「あら、もうそんな時間？お母さんたちは後から行くからね。遅れないでよ！」
「分かってるって！」
小百合が二人に声をかける。
「「行って来ます！」」
海斗と耕一は二人で先に家を飛び出した。

「おわっと！？」
しかし先に飛び出した海斗がいきなり男性に衝突してしまう。
「ごめんなさい。怪我ないですか？」
海斗はすぐに謝る。

「大丈夫やで。そっちこそ大丈夫か？」
相手の男性はぜんぜん気にしていないようでニコニコとした笑顔で返してくれる。
「あ、はい」
「もしかして新入生か？」
「はい」
「そうか～。俺もなんや」
「え？」
男性の服は完全に私服だ。しかもかなりかっこいい。
「大学生やけどな」
「ああ…。なるほど」
「翔～！」
その時、後ろから女性の声が聞こえてきた。
「お待たせ！あれ？その子達どうしたの？」
その女性もかなりかわいい。こんなカップルは反則だ、と海斗はつい思ってしまった。
「ああ。ちょっとぶつかってもうてな」
「ドジなんだから。気をつけないと」
「はいはい。つくし野川の土手を転がり落ちてきたやつよりよっぽど気をつけとるわい」
「なんですって！？」
「ほらほら、落ち着かんかい。新高校生がびっくりしてるで？」
「え？あ…」
その時やっと彼女は二人のことを思い出したのか、顔を赤くしてうつむく。
「それじゃあ、俺たちはこれで…。すみませんでした」
改めて翔に謝る海斗。
「気にせんでええよ。頑張ってな」
「「はい！」」
そう言って海斗と耕一は貴弘たちとの待ち合わせ場所に走ってい

った。

「懐かしいわね」

「ああ。でもまだ三年前やで？」

陽乃の呟きに答える翔。

二人は４日に島根大学に入学し、晴れて大学生になったのだ。

「三年前だからよ。…あたしたちも頑張らなくちゃね」

「そやな。さて。そろそろ行こか。新入生ガイダンス始まってまう」

「あ、ホントだ。行こうか」

「ああ」

そう言うと、二人は自然に手を繋いで歩き始める。

形は違うものの、それぞれに新しい季節が訪れていた。

１３１話　新しい季節（後書き）

ここから２００８年度編です。
新一年生も登場します。
これからもよろしくお願いします。

１３２話　一目見たら…

桜田中央駅に降りると、駅には真新しい制服に身を包んだ新一年生がたくさんいた。
「すっごい人…」
木山（きやま）　里奈（りな）はおもわずそう呟く。
今日から里奈は桜田中央高校の一年生なのだ。
「里奈～！」
「あ、麻里ちゃん！おっはよ～！」
後ろから走ってきたのは親友の石川（いしかわ）　麻里（まり）だ。
「おはよう！今日から高校生だね！」
「うん！楽しみだね！」
そう言って満面の笑顔で答える麻里。その笑顔はとてもまぶしい。
里奈は自分が男だったら惚れてしまうだろうなと考えていた。
「じゃ、行こうか」
「うん！」
２人は歩きだす。
しかしその後ろから誰かがついてきていることなど彼女たちは知る由がなかった。
林（はやし）　哲次（てつじ）は桜田中央駅に着くといきなりため息をついた。
「なんで第一志望落ちちゃったんだろ…」
もちろん理由は自分でも分かっている。勉強不足だ。
中学時代はずっとエレキギターにはまっていた。そして勉強がおざなりになってしまった。
そのエレキギターも勉強の邪魔だと母親に隠されてしまい、余計やる気を失くした。
本当は桐ヶ丘市内の高校で友達とバンドを組む予定だったのに、こんな遠くの学校じゃ組むことは不可能だろう。

だから哲次は落ち込んでいた。
その時だ。
「里奈〜！」
女子のかわいらしい声が聞こえてくる。
顔を上げると、そこにはとてもかわいい女の子がいた。
「！」
その顔を見た瞬間、頭の中が真っ白になる。
胸がドキドキしている。これが一目惚れというものなのだろうか。
哲次はその場から動けなくなってしまった。
しかしその時、彼女は友達と歩きだしてしまう。
（…あ！）
制服をみると、自分が通う桜田中央高校のものだ。だからついていっても不審には思われないだろう。
「…よし」
哲次は頷くと、彼女たちの後ろをついて行った。

「里奈はやっぱり吹奏楽続けるの？」
麻里が里奈に聞く。
２人は高校への道をゆっくりと話しながら歩いていた。時間に余裕を見て出たからゆっくり歩いても十分間に合う。
「もちろん。とっても素敵な先輩がいるしね」
「それって、吹奏楽の集いの時楽譜を探してくれた先輩？」
「うん！」
「そんなに素敵ならあたしも見てみたいな〜」
「今日見られると思うよ。フルートの二年生は先輩一人だけだし」
「そうなんだ〜。そんなに素敵な人いるならあたしも吹奏楽部入ろうかな？」
「あ、それいいね！入りなよ。明日見学行くし一緒に行こ！」
「うん！」

２人はそう言って笑い合った。

（吹奏楽か…）

２人の後ろをこそこそ歩いていた哲次はその言葉を心の中で復唱していた。

桐ヶ丘一中にも吹奏楽部はあったが、活動はそんなに活発ではなかった。そのため哲次には馴染みがなかったのだ。

「お～い！哲次！」

「うわ！」

後ろから肩を叩かれて飛び上がる哲次。

「どうしたんだよ？」

不審そうに哲次を見たのは、唯一同じ中学校から来た新木（あらき）　一（はじめ）だった。一は柔道部で力も強い。

中学時代はそんなに交流が多くはなかったが、一は人懐っこい性格なので哲次にも結構話しやすく、ここ一カ月でだいぶ仲良くなった。

「そんな馬鹿力で肩叩いたら痛いだろうが！」

「あ～悪い悪い」

「全く…」

「で、どっち見てたんだよ」

急に小声で聞く一。

「…え？」

思わぬ言葉に哲次は目を丸くした。

「あんな危ない目で見てたら分かるっつ～の」

「…右の子」

観念して哲次はそう答えた。

「なるほど…。お前が好きそうな子だな」

一はとても楽しそうに頷く。

哲次は一のこういう所が少し苦手だった。…なぜか妙に勘がいいのだ。

「…悪いか？」
「別に？」
ニヤニヤしながら一は答える。からかわれているのが哲次にも分かった。
「…もういいよ！俺先に行く！」
そこで限界になったのだろうか。そう言って哲次は顔を真っ赤にして走り出す。
「おい、待てよ！」
それを一は追いかけた。

女子2人を男子2人は追い抜いていく。
「なんなんだろ？あの男子2人。まだ時間早いよね？」
「うん…」
キョトンとする2人。
「ま、いっか。あたし達も早めに行っちゃおうか。クラス発表もあるし」
「うん！」
そう言って2人も走り出すのだった。

１３３話　思い渦巻く入学式

午後１時５５分。
吹奏楽部員たちはチューニングを終えて、スタンバイに入っていた。体育館の中にはもう保護者や来賓も着席していて、間もなく１年生が入場する。
「１年生って何人だっけ？」
加奈子が隣に座っている理穂に聞く。
「２８０人よ」
「あ、一クラス増えたのね」
「うん」
「おい、そろそろ入ってくるんだから静かにしろよ」
前にいた匠が振り返って２人に注意する。
「あ、ごめん…」
２人はばつの悪そうな表情をして、すぐに前を向くのだった。

「一（はじめ）の野郎…」
哲次はイライラしながら前で麻里と話をしている一を睨んでいた。
なんの偶然か、麻里、一、里奈、哲次は同じ組になったが、苗字では新木のアと、石川のイで一と麻里が隣どうし、哲次は林のハだから後ろでそれを見ているという状況である。
一が一瞬こっちを向いた。
またニヤニヤしていた…。どうやらわざと麻里と仲良くしているようだ。
「はぁ…」
見ていてイライラしかしないので哲次は拗ねて下を向いていた。
高校生活はもう期待していない。第一志望にも受からず、一目惚れした女子はほかの男子と仲良くしている…。
「あ、あのぉ…」

その時、後ろから声が掛かる。
「あ？なんだよ」
イラついていた哲次はその相手にガンを飛ばした。
「ご、ごめんなさい！でも前が進んでるんで…」
その相手は少しテンパッた様子で前を指差す。
「あ、悪い！」
実際にマーチが流れ出し、列が進み始めていたので哲次は相手に謝ると慌てて歩き出した。

体育館に新入生が入場してくる。
今回吹奏楽部が演奏する『アルセナール』は一般的なマーチより少しテンポが遅く壮厳な雰囲気を醸し出しているため、式典によくマッチする。
もちろん吹き方も大切だ。トリオの木管のメロディーはしっとりと、金管主体の部分は力強く。
今回の演奏は新入生へのアピールにもなるため、部員たちは特に気合いを入れて演奏をしていた。
一旦曲が終わるとすぐにパーカッションのドラムマーチが入る。
和志のシンバルとひかりのスネア、そして優樹のバスドラムが絶妙に絡み合い、曲間をつなぐ。
そのドラムマーチを聞いて、哲次は思わずそっちを見てしまう。
（すげぇ…）
今まで弾いていたエレキギターやバンドでの曲とは別のかっこよさがある。
（よし…）
哲次はある決意を固めつつ、席に着いた。

里奈もその演奏を聞きながら入場していた。
（あ、美香先輩だ～！）
美香の姿が見えた。里奈は少し勇気を出して美香に手を振ってみ

る。
美香も気づいたらしく、笑顔でそれに答えた。
（やった…きゃあ！？）
それを見てテンションが上がる里奈だったが、そっちに気を取られていたら足がもつれてひっくり返りそうになる。
「おっと」
しかしすぐに横にいた男子が手を掴み、コケることは避けることができた。
「あ、ありがとう」
「気をつけろよ」
「うん…」
里奈は顔を赤くしながら入場を続ける。
そしてなんとか無事に全員が入場して、入学式は進んでいくのだった。

１３４話　援軍

「疲れたぁ…」
唯が肩を回しながらそうつぶやく。
入学式終了後、吹奏楽部員たちは片づけを済ませて第二音楽室に戻っていた。
今日は始業式での演奏、入学式での入場退場演奏と、演奏時間が長かったためやっと肩の力が抜けたのだろう。
「だな。でも本番は明日からだから頑張らないとな…」
先斗がそう言って唯をなだめる。
明日は部活動紹介があり、さらに勧誘作戦を始動させる予定だ。
今日はミーティングをしたら解散することになっている。

「ミーティング始めるぞ～」
そう言って京が第二音楽室に入ってきた。その後ろから静香も入ってくる。
「あれ？」
ひかりは思わず声を上げた。
その後ろから男性が一人入ってきたからだ。年頃は３０代後半、愛嬌のある顔をした親しみやすそうな人だ。さらに、
「あ、佐野さんだ」
庄吾も声を上げる。
その後ろには翔もいる。
部員たちは戸惑いながら席に着いた。

「じゃ、ミーティング始めます。まず入学式お疲れさまでした」
「「お疲れ様でした～」」
「明日からも部活動紹介や勧誘など、忙しくなりますが体調を崩さないように留保して活動してください。で、今日は大事な話があっ

てミーティングを開かせてもらいました」
京は話を続ける。教師生活2年目に入り、ようやく話すのにも慣れてきたようだ。
「まず一つ目。今年からクラス数が増加して、教職員の数が増えたため、部活動の副顧問の人数も2人に増えることになりました。なので梶原先生に加えて沢木先生も吹奏楽部の副顧問となります」
そこでさっきの男性が前に出てきた。
「柳紅水産高校から赴任してきました、沢木（さわき）　正志（まさし）です。担当は生物、2年E組の担任してます。この中にも何人かE組おるようやな。とにかくよろしく」
関西弁の混じった話し口で話す正志。
「先生は彼女居いるんですか～？」
ひかりから質問が飛ぶ。かなりベタな質問だ。
「そうやな～…。おらんな」
「へぇ…」
女子たちはつまらなそうに息をつく。
「嫁さんならおるけどな」
そう言ってポケットから写真を取り出す。
「あ、見せてくだ～い！」
「あたしもあたしも！」
「うわぁ！？」
しかしその瞬間、女子たちがそれに飛びついたのでさっと写真をポケットにしまい直した。
「ほらほら、落ち着け。話はまだあるんだから」
そう言って京が女子を座らせる。
正志は濃い女子たちを平然と座らせることのできる京の姿をみて驚いていた。
「で、二つ目」
落ち着いたところで京は話を続けた。
「サックスパートのメンバーにはもう話してあるんだが、そこに立

っている佐野（さの）　翔（かける）くんにうちの高校のサックスパートのコーチをしてもらうことになった。彼は島根大学の教育学部の音楽教育専攻だから腕は確かだぞ」
「西村先生。買い被りすぎですよ」
翔は顔を赤くして京の言葉を否定する。
「そんなことはないさ。実際にこの間聞かせてもらったがなかなかのものだったよ。じゃあ佐野くん、挨拶を頼む」
「は、はい」
翔はあわてて前に出る。
「え～っと、今度サックスのコーチやらせてもらうことになりました、佐野　翔です。なんの偶然か分からんのですが、沢木先生と同じく俺も大阪出身です。よろしくお願いします！」
「「よろしくお願いします！」」
部員達から大きな返事が返ってくる。
翔は笑顔を浮かべ、深々と礼をすると自分の場所に戻った。
「よし、最後だ。5月の3日なんだが、隣の桐が丘市で自由演奏会があるんだ」
「自由演奏会ってなんですか？」
和志が反応する。
「自由演奏会っていうのは、年齢、楽器歴、演奏レベルに関係なく自由に演奏に参加できる演奏会なんだ。事前に申し込みは必要だが、楽譜は当日配られる」
「え？じゃあほぼ初見じゃないですか！？」
「それがミソだ。それでも意外とまとまるもんだから不思議なんだ。それで話を戻すが、もしよかったらその演奏会に参加してみないか？」
「一年生も参加するんですか？」
加奈子が手を挙げて聞く。
「もちろんだ。申し込みは二週間くらい前まで受け付けているから十分に間に合う。先生たちも参加するし、様々な団体から参加して

くるから楽器仲間が増えるいい機会だと思うぞ」
「面白そうじゃん！」
庄吾が立ち上がる。
部員たちも興味を持っているようだ。
「結構みんな乗り気みたいやな。もちろん俺も参加するで」
正志も乗り気でいつの間にか持っていたトランペットを持ち上げる。
「じゃあ、全員参加ってことでいいか？」
京が最後の確認をする。
「「はい！」」
そしてそれに答えるように全員の返事が綺麗に教室に響くのだった。

「自由演奏会か～。楽しみだね」
帰り道。唯と先斗は一緒に帰っていた。
「そうだな。でもまず一年生を入れないと…」
「あ、そうだね…。…でももう一年経ったんだね」
唯がふと息をついてそう呟く。
部活を創立してもう一年が経つ。こう考えるとあっという間の1年間だった。
「…来年もこうやって活動出来てたらいいね」
「…だな」
唯の家の前に着く。
「それじゃ」
「ああ」
先斗は家のほうに歩き始めた。

「先斗！」
しばらく進んだ先で唯が先斗を呼ぶ。
「明日から勧誘頑張ろうね！」

「おう！」
先斗は前を向いたまま手を上げる。
「…おし！」
明日からの勧誘に気合いを入れつつ、先斗は家路についた。

１３４話　援軍（後書き）

今回はＨａｒｍｏｎｙ　Ａ　Ｄｅｃａｄｅ　Ａｇｏから、成長した沢木　正志くんに登場していただきました。彼も翔くんや陽乃さんのようにレギュラー出演していただく予定です。

１３５話　部活動紹介

４月８日（火）。
今日は部活紹介の日だ。
入学式の翌日にやるのはいささか急ぎすぎではないかと思うが運動部は二ヶ月後に総体を控えており、一年生をメンバーに入れないと試合に出られない部もある。
そのためこのような日程となった。ちなみに仮入部期間は今週一杯。来週の月曜日にはもう部集会が行われる。

「楽しみだな～」
唯は昼ご飯を食べながらニコニコとした表情を浮かべる。
第二音楽室には先斗、唯、ひかり、奈津美、慶太の姿があった。
今回の部活紹介では各部５人までしかアピールに参加できないのだ。
部活紹介は５限目に行われるため、５人は公認欠席をとって準備に臨んでいた。
「よし、運搬しよう」
「うん！」
昼ご飯を食べてすぐに動き出す５人。
なんと吹奏楽部はくじ引きの結果、発表の順番が１番になってしまっていた。
しかし５人はぜんぜんそれをマイナスとは思ってはいなかった。
ひかりにいたっては早めに運搬ができると喜んでいたくらいだ。
「しかし、編成がな…」
慶太とドラムを運びながら先斗が呟く。
「ま、大丈夫だろ。一応全部吹奏楽で使う楽器なんだから」
「…だな。頑張るか」
「ああ」
そう言って２人は打楽器をどんどん運びこんでいくのだった。

1時15分。第一体育館に新入生が入ってきた。全員まだ入学して2日目のため、少しよそよそしげだ。
「あれ？」
貴弘はステージ上を見て不審そうな声を上げる。
「どうした～？」
それに良樹が反応する。2人は別のクラスなのだが、ちょうど並びが隣どうしだったので話せているのだ。
「いや、ステージ上がさびしいなっておもってさ」
そう言ってステージを指差す。
ステージ上にはピアノとドラムのみが据えられている。しかも椅子はない。
「先輩達何を演奏するんだろ…」
「う～ん…」

ブー！

2人が首をかしげているとブザーが鳴り、照明が暗くなった。
放送委員長の安西（あんざい）　和子（かずこ）がスポットライトに照らされる。
「これから部活動紹介を始めます。では早速最初の団体に移ります。吹奏楽部の皆さん、よろしくお願いします」
和子を照らしていたスポットライトが消えて、会場が暗くなる。会場がザワザワしだした。
「1，2、3！」
しかしすぐにひかりの声とドラムスティックを叩く音が会場に響き、サックス三本の響きが会場に広がった。
その瞬間、会場のライトがすべてついた。
「うわっ！まぶし…」
貴弘が前を向くと、ステージ上ではサックス3人によるアンサンブルが繰り広げられていた。

「『Ｗｉｎｄｉｎｇ　Ｒｏａｄ』だ…」
「コブクロ×絢香だっけ？」
後ろの女子が目を輝かせている。
冒頭のアンサンブルが終わるとひかりのドラムがソロを叩き、先斗がピアノで間奏を弾き始める。
その姿に男子からも女子からも歓声が上がった。どうやらつかみはバッチリのようだ。
間奏が終わると、慶太が旋律を吹き始める。
サックスの３人はそれぞれの歌手の動きを譜面からコピーしていた。
唯が小淵さん、奈津美が絢香さん、慶太が黒田さんの動きだ。
春休みずっと練習していただけあってそう簡単にリズムは狂わない。
一瞬静かになって先斗のピアノのみが流れる。しかしすぐにサックスが加わる。ここからは完全にアドリブだ。サックス３人は思い思いのフレーズを吹く。しかしそれが不協和音を起こすことなく、絡み合うのだから不思議だ。
そしてピアノとドラムが完全に消え、またしっとりとしたメロディー。リタルダントをかけて、『Ｗｉｎｄｉｎｇ　Ｒｏａｄ』は幕を閉じた。

「かっこいい～！」
「すげえ！」
拍手とともに歓声が飛んでくる。
その拍手が弱まると唯は前に出て話し始めた。
「みなさん、こんにちは～！吹奏楽部です！一年生のみなさん、入学おめでとうございます！これから三年間、高校生活バリバリ楽しんでください！　さて、今回は５人までしか部活紹介に参加できないということで、吹奏楽体系でなくサックスアンサンブル＋ピアノとドラムという編成で『Ｗｉｎｄｉｎｇ　Ｒｏａｄ』を演奏しまし

たが、みなさんどうでしたか？」
また拍手が鳴る。
「ありがとうございます！」
唯は嬉しそうにお礼を言う。
「私たち吹奏楽部は現在１７人で第二音楽室で活動しています。昨年設立されたばかりですが、吹奏楽コンクール、市の定期演奏会、チャリティーコンサート、アンサンブルコンテストなど様々な活動をしています。吹奏楽部って楽器吹けないと入れないと思われがちですが問題ありません。部員のうち半分以上が高校から吹奏楽を始めました。この中にも初心者がいます」
そう唯が言うと、奈津美と慶大、ひかりが手をあげた。
それを聞いて生徒たちはざわめく。
「なので初心者、経験者を問わず部員は大募集中です！興味がある人は第二音楽室に来るか、昇降口で勧誘してる吹奏楽部員に声をかけてください！練習教室に案内します！そろそろ時間みたいなので吹奏楽部の紹介は終わらせていただきます。ありがとうございました！」
唯が深々と礼をすると、会場は今までで一番大きな拍手に包まれた。
それを聞くと、５人は満ち足りた表情をして搬出作業を始めるのだった。

１３６話　作戦実行

放課後。吹奏楽部員たちはＳＨＲ（ショートホームルーム）が終わるや否やすぐに音楽室に集まっていた。

「全員いるな？」

匠が改めて出欠を確認する。

普段、出欠確認は部長の唯の仕事なのだが今日は匠が行っている。

なぜかというと匠が勧誘部長だからだ。

匠の出身である松方中学校は各学年３クラス前後の小さな中学校だった。その割に部活動の数が多く、新入生獲得は至難の業。吹奏楽部は比較的人気のある部だったがそれでも部員数は三学年で２０人程度にとどまっていた。

しかし匠が入部してから…つまり浅見先生が顧問となってからは部員も増えた。部活の成績が良くなったことも理由の一つだが、それは浅見先生に教わったノウハウのおかげでもあった。

「じゃあもう一回確認するぞ。Ａ班。リストは持ってるか？」

慶太、奈津美、優樹、ひかり、茜がそれぞれの担当場所のリストを取り出す。

このリストには楽器経験のある新入生の生徒の名前と出身校、担当楽器が書かれている。

定期演奏会や経験者の中学時代の経験をもとに作られ、拓也が一生懸命まとめたものだ。

「これをもとにまずは経験者をあたってくれ。じゃあ次、Ｂ班」

金管のうち庄吾以外の４人と拓也が反応する。

「金管の４人は中庭で演奏して一年生の気を引いてくれ。俺と拓也で音楽室に案内するから」

「了解」

「で、C班」
美香、茜、アマンダ、和志は匠を見る。
「4人は楽器体験の準備を頼む。部長と副部長は来た見学者に部活の概要を教えてあげてくれ」
「分かった」
「じゃ、行動開始！行くぞ！」
「オー！」
掛け声をあげて部員たちは音楽室を飛び出していった。

【A班】
慶太と奈津美は1－Bの教室を訪れていた。
「失礼しま～す」
奈津美は大きな声で教室に入る。
「あ、サックスの人だ！」
しかし女生徒がいきなり大声をあげて2人を指差す。
「え？」
その声を聞いて周りの女子達が2人のもとに駆け寄ってきた。
「部活紹介のかっこよかったです！」
「本当に初心者なんですか！？」
そして2人に詰め寄ってくる。
「え、ちょ、ちょっと！」
予想外の展開に奈津美と慶太は慌てる。
「えっと、あ、そうだ！加藤（かとう）　葵（あおい）さんと福島（ふくしま）　利明（としあき）くんっている！？」
「あ、あたしが加藤葵で～す！」
駆け寄ってきた女子のうちの一人が元気に手をあげる。
「俺ですけど…」
そしてちょっと離れた所から男子生徒が小さく手を挙げた。
「ああ、いてくれてよかった。よかったら吹奏楽部の見学来ない？」
「はい！というか今から行くところだったんですよ！」

葵はすぐに快諾する。
「あ、お、俺も行きます」
その様子に気後れしつつも利明も返事をした。
「じゃ、行こうか」
奈津美は嬉しそうに2人を音楽室に連れていくのだった。

【B班】
中庭では理穂、加奈子、龍也、先斗の四人が一年生の帰る前で演奏をしていた。
曲目はポップスを中心に選曲している。ちなみにこの譜面は泰徳に編曲してもらったものだ。

「あのぉ…」
しばらく演奏しているとある一人の男子が緊張した面持ちで近づいてきた。
「お、もしかして見学希望？」
それに拓也は笑顔で対応する。
「は、はい！あ、でも初心者なんですけど」
「大丈夫だよ。俺も初心者だけどなんとかやれてるから。あ、クラリネットセクションの田中　拓也っていいます。君は？」
「あ、土江（つちえ）　柾（まさき）っていいます。中学校時代は吹奏楽部なかったんで興味あってきました」
「そっか。じゃあ、部室に行こう。ついてきて」
「はい！」
柾は嬉しそうに拓也の後ろをついて行った。

「…なんで俺には言いに来ないんだろ…」
匠は少し落ち込んだ様子でそう呟く。
さっきから3人ほどが興味を持ってくれて部室まで案内しているが、新入生はなぜかずっと拓也のもとへ話を聞きに来るのだ。

「う～ん…表情硬いからじゃないか？」
龍也がアドバイスする。。
「そうか…。じゃあこうか？」
そう言って匠は思い切り笑顔を作ってみた。
「気持ち悪い」
しかし理穂がズバッとそれを切り捨てる。
「…気持ち悪いか」
匠はその後しばらく落ち込んだままだった。

【C班】
その頃第二音楽室には新入生たちが見学に来ていた。
「じゃあ、改めて吹奏楽部の説明をさせてもらいます」
その見学者たちの前で唯は話をしていた。
「私たちは吹奏楽部は現在１７人で活動しています。創部二年目ですが、吹奏楽コンクールやアンサンブルコンテスト、市の定期演奏会にチャリティーコンサートなど精力的な活動をしています。うちの部のモットーは来るもの拒まずで途中入部者も多いです。実際にここにいる部員のうち3人は途中入部です」
それを聞いて一年生は驚いた様子を見せた。
「現在全パート募集していますが、パートの人数によってはコンバート…つまりパート移動をしてもらう場合もあるのでそれは注意しておいてください。では、これから楽器体験に移ります。木管、金管、打楽器。好きなところに行ってください」
唯が指示をすると、見学者たちは思い思いの場所に広がっていった。

「おっ、大分多いな…」
第二音楽室に戻ってきた先斗が嬉しそうに呟く。
「うん！なんか部活紹介での演奏聞いて、って子が多いみたい」
「…なんか嬉しいな」

先斗はそう言ってはにかむ。
さっき中庭で演奏していた時も何人かの新入生が声をかけてくれたのだ。どうやらあの演奏は大きなインパクトを彼らに与えていたらしい。

「あのぁ…」
その時、1人の女生徒が2人の方に近付いてきた。
「私コントラバス希望なんですがどこに行けば…」
「コントラバス！待ってたよ！」
唯は嬉しそうにその女生徒の手を握る。
「どこの中学校？いつからやってるの？名前は？」
「え、え…」
さっきに落ち着いた話しぶりからは想像ができない唯のハイテンションぶりに、女生徒は慌てている。
「落ち着けよ」
そう言って先斗が間に割って入った。
「あ、わ、私、東郷中学校出身の柳田（やなぎだ）　ひとみと言います。コントラバスは中学校からやってます…」
ひとみはなんとか落ち着いて自己紹介する。
「経験者なんだね。俺はバスセクションのトップでチューバ担当の西掛　先斗と言います。コントラバスも用意してあるよ。弾きに来たんだよね？」
「は、はい！」
「よし！じゃあこっち来て」
「はい！」
ひとみは嬉しそうに先斗についていく。
「…順調だね！」
その様子をみて、唯は嬉しそうに呟くのだった。

137話　不満

４月２１日（木）。

部集会から３日が過ぎ、各部がそれぞれ一年生を入れた活動を始めている。

吹奏楽部も例外でない。

積極的な勧誘の結果、なんと３２人もの一年生が入部してくれたのだ。

メンバーは次の通りだ。

☆ピッコロ
・糸川（いとがわ）　剛（つよし）

☆フルート
・木山（きやま）　里奈（りな）
・増田（ますだ）　愛子（あいこ）

☆オーボエ
・浦田（うらた）　駿介（しゅんすけ）

☆ファゴット
・小野（おの）　ゆかり

☆E♭クラリネット
・相川（あいかわ）　加奈（かな）

☆B♭クラリネット
・日野（ひの）　詩織（しおり）
・横山（よこやま）　なずな

・新木(あらき) 一(はじめ)
・田口(たぐち) 梓(あずさ)
・三宅(みやけ) 美羽(みう)

☆バスクラリネット
・佐田(さだ) 成美(なるみ)

☆アルトサックス
・加藤(かとう) 葵(あおい)
・小林(こばやし) 清一郎(せいいちろう)

☆テナーサックス
・福島(ふくしま) 利明(としあき)

☆トランペット
・黒松(くろまつ) 耕一(こういち)
・若林(わかばやし) 舞(まい)
・安井(やすい) 美咲(みさき)

☆ホルン
・駒沢(こまざわ) 千秋(ちあき)
・羽山(はやま) 潤(じゅん)
・宮崎(みやざき) 功(こう)

☆トロンボーン
・桂木(かつらぎ) 雪乃(ゆきの)
・土江(つちえ) 柾(まさき)
・金田(かねだ) 良樹(よしき)

☆ユーフォニウム
・神田（かんだ）　竜一（りゅういち）

☆チューバ
・大橋（おおばし）　貴弘（たかひろ）
・斉藤（さいとう）　譲（じょう）

☆コントラバス
・柳田（やなぎだ）　ひとみ

☆パーカッション
・石川（いしかわ）　麻里（まり）
・宇野（うの）　泰子（やすこ）
・小沢（おざわ）　悟（さとる）
・林（はやし）　哲次（てつじ）

各パート順調に人数が増え、今まで奏者がいなかったオーボエとファゴット、コントラバスも一年生が入った。

初心者もたくさん入部してくれた。

例えばクラリネット。荒木　一はなんと中学時代柔道部だったらしく、身体がとてもがっちりしている。

また、田口　あずさは以前はトランペットを演奏していたが、高校では木管をやりたいと自らクラリネットを志望した。

アルトサックスの小林　清一郎、トロンボーンの土江　柾、パーカッションの石川　麻里は部活動紹介の演奏をみて入部を決めたらしい。

よく入部理由が分からないのが同じくパーカッションの林　哲次。しかしまじめに練習をしているから文句はないだろう。

すべてが順調に見えたが、問題のあるパートがあった。

「基礎練習やるぞ～！」
龍也が後輩たちに声をかける。
「……はい」
宮崎　功は渋々椅子をパートのメンバーのほうに向けた。

そう。ホルンである。
今年度、桜田中央高校吹奏楽部は４９人の大編成となったが、ホルンは当初龍也をいれても３人だけだった。
大編成の場合ホルンは４人いないと和音が組めないため、ほかのパートからひとりだけホルンにコンバートしなくてはならなかったのだ。
そして、コンバートされたのが功だった。

「それじゃあ、下のＦから、上のＦまで、８拍吹いて４拍吐くで」
龍也がメトロノームのねじを巻きながら指示を出す。
「「はい！」」
「……はい」
「じゃ、やるぞ。１、２」
龍也の合図で４人は一斉に音を出した。
功も楽器を構えてなんとか音を当てるが、貧弱な自分の音に顔をしかめる。
ほかの二人は元々ホルン担当だから音もしっかりしているしピッチも合う。一方の功は、まだホルンを初めて三日なので音を当てるのがやっとだ。
「宮崎はとりあえず８拍しっかり伸ばせるように。ほかの二人はアタック時とリリース時の音程にもう少し気を使ってくれ」
「「はい！」」
「……はい」
龍也の注意が入るが、功はあまりやる気になれずにいた。

そして休憩時間。
「宮崎。トイレ行かない？」
「……ああ」
同級生の羽山　潤が声をかけてきたので功はついていくことにした。
「ホルン慣れたか？」
「……ぼちぼち」
「まあ管が違って大変だけど頑張ろうぜ」
潤はのんきそうな表情だ。
（……ホルンなんてやる気になれるかよ）
功はいまだにコンバートに納得していなかった。功はトランペットを続けたかったのだ。
トランペット希望の一年生は４人いたのだが、功以外の３人はＭｙトランペットを持っていた。そのため、功がコンバートの対象者になってしまったのだ。
「俺伴奏好きなんだよな～。裏打ちとかなんかマーチを支配してるみたいでさ～」
潤がいろいろ語るが何も耳に入らない。
「……」
功は潤がトイレに入った瞬間、走り出した。
「お、おい！　宮崎！？」
潤は慌てて追いかけるが、すぐに見失ってしまった。

「はあ……」
功が我に返ると、新校舎まで来ていた。
練習から逃げ出してしまった。今戻ったら理由を聞かれるだろう。
「どうしよう……」
その時だ。

パーン！

上のほうからトランペットの音が聞こえてきた。

「……誰だろ」

功はその音にひかれるように屋上への階段を上る。

そしてそっとドアを開けた。

誰かが山のほうに向かってトランペットを吹いているのが功の目に映る。トランペットが小さく見える長身の持ち主だ。

「……三上先輩？」

「お、宮崎じゃん」

音の出し主は庄吾だった。

１３８話　向かい合って

「どうしたんだ？　ホルン、パート練習中だろ？」
いつものように明るく庄吾は話しかけてきた。
「えっと……。あ、先輩はどうしてここで？」
功は一瞬口ごもりかけたが、なんとか話題を変えようとする。
「音を遠くに飛ばすために晴れた日はいつもここで個人練習やるんだ。結構気持ちいいぞ」
「そうなんですか……」
屋上からは商店街や駅が見える。そしてその後ろには大きく山がそびえて見えた。目標物がたくさん見えるから音を遠くまで飛ばす練習にはもってこいの環境だろう。
「……なにかあったのか？」
「え？」
視線を戻すと、庄吾は普段見せない真剣そうな顔をしていた。
「……トランペットが恋しくて」
それを見て功は本音を漏らした。想いが溢れだして止まらない。
「……Ｍｙ楽器ないからってコンバートなんて理不尽すぎる。俺だってトランペット吹きたい！　なんで俺なんですか……ペット続けたい！！　あ、すみません……」
そこで功は我に返り、恥ずかしさのあまり顔を伏せた。
庄吾にこれを言っても仕方ない。庄吾だって苦しんでコンバートを功に告げたのだ。それは功自身が一番よく分かっていた。
「……似てるな」
「え？」
顔を上げると、庄吾が懐かしそうな顔をして功を見ていた。
「お前の顔、中学の頃の俺に似てる」
「中学の時の先輩？」
庄吾は屋上の金網に寄りかかる。

「俺、昔はトロンボーン吹きだったんだよ」
「……え！？」
思わぬ発言に功は庄吾の顔をまじまじと見つめた。
「小学校の金管バンドで俺はずっとトロンボーンを吹いていたんだ。もちろん中学に入ってもトロンボーンを吹きたかった。……でも実際はトロンボーン希望者が多くてじゃんけん。俺は負けちまった」
「……それでトランペットに？」
「ああ」
そう言って振り向く庄吾。
「マウスピースのサイズも違うし、スライドからピストンに移ったから最初は思うように吹けなくてイラついた。でもな」
「でも？」
「ある先輩がこう言ってくれたんだ。『アンタがトランペット担当になったんじゃない。トランペットがアンタを選んだんだ』って」
「……え？」
「今考えると俺単純だったよな～。その言葉真に受けて必死で練習して、今に至るわけだし」
「……それだけでトロンボーンを諦められたんですか？」
信じられないともいいたげな顔つきで問いかける功。
「いや？　しばらくはやっぱりボーンが恋しかったな」
「じゃあなんで今もペット吹いてるんですか？　高校入ってからボーン再開してもよかったのに……」
「目標ができたからだ」
詰め寄る功に庄吾ははっきりと返した。
「同じパートにとても上手いやつがいた。そいつにいつもソロをかっさらわれていって悔しかった。だから俺はトランペットを極めてやろうと思ったんだ。今となってはもうハマりきって戻ろうとは思えないな」
「……」
「……ってこんなことといっても納得できないよな」

黙り込んだままの功を見て、庄吾は頭をかく。
「……はい。どうして俺だったんですか？　……やっぱり楽器持ってないから？」
少し泣きそうな声で功は尋ねた。
「確かにそれもあった。でもな、お前ならどこでもがんばっていけそうに思えたのが一番の理由だ」
「……」
「ごめんな。トランペット吹くために入部してくれたのにホルンに回しちゃって」
「……いえ。正直に言ってもらえたんで、少しすっきりしました」
そう答える功の顔はさっきより晴れ晴れとしていた。
「……そっか」
「……とりあえず」
そこで間を空ける功。
「とりあえず？」
「とりあえずしばらくホルンに目を向けてみようかと思います。もしかしたらホルンが俺選んでくれたのかも知れないですから」
そしてにっこりと笑って見せた。
「……そうか。じゃあ、下戻るか。ホルンの連中も心配しているだろうから」
「はい！」
二人で階段を下りると、そこにちょうど龍也が走ってきた。
「宮崎！」
「……先輩」
「心配したんだぞ！？　お前が急にいなくなったって潤が言い出して三人で探してたんだからな」
「……すみません」
「龍也。今回だけは許してやってくれないか？　俺にも原因あったから」
「いえ、俺が悪いんです」

そこで庄吾の言葉を断ち切る功。
「俺がちゃんとホルンと向き合えてなかったんです。だから逃げ出しちゃったんです。だから……」
「もういいよ」
しかし龍也がそれをすぐに止めた。
「パー練の続きやるぞ。時間まだあるからな」
そう言って歩き出す龍也。
「……はい！」
「……頑張れよ」
龍也の後ろを追いかける功に庄吾は昔の自分を重ねるのだった。

139話　ソプラノorアルト

「え！？　私がアルトクラ吹くんですか！？」
茜が珍しく素っ頓狂な声を上げる。
「ああ。クラリネットの人数も予想以上に多かったしな。アルトクラを足しても大丈夫だろう」
京は冷静にそう返す。
ホルンセクションでのトラブルが解決したころ、クラリネットセクションでも問題が発生していた。
クラリネットセクションは現在E♭クラリネット1名、B♭クラリネット8名、バスクラリネット1名で構成されている。初心者が2名いるが、人数としては十分だ。
大編成のバンドの中にはB♭クラリネットとバスクラリネットの間を埋めるためにアルトクラリネットを編成に含めるバンドもおり、京もそれに習おうとしているのだ。
「……でもなんで私なんですか？」
茜は少し落ち着いてからそう尋ねた。
茜はクラリネットセクションのトップだ。しかし京は茜をアルトクラリネットに推薦したのだ。
「もともと今年から二年生の誰かにアルトクラリネットを任せようと考えていたんだ。二年生の3人の中で一番音程感があるのがお前だったからな。だからお前を推薦したいんだが……駄目か？」
「……一日考えさせてください」
「分かった」
茜の返事を聞くと、京は教室を出て行った。
「……」
「アルトクラリネットか……」
拓也も少し困惑した表情だ。
茜たちとしては初心者もいるため各パート2人ずつで、それに初

心者の2人を加えるという形をしばらくは取るつもりだったのだが、アルトクラリネットを入れるとその人数比が崩れてしまうのだ。
「……あ、そうだ」
そう言って茜は携帯電話を取り出すと、メールを打ち始めた。
「メールか？」
「うん、ちょっとね。あ、返事来た。あ～、あっちもまだ練習中か。うん、夜にかけるね……と」
（……誰に打ってんだろ？）
拓也はメールを打つ茜の姿を不思議そうに見つめていた。

その晩、茜は自分の部屋で電話を掛けていた。
「あ、小五郎ちゃん？」
「ちょっと～。そのあだ名で呼ばないでよ」
電話の先から少し不機嫌な声が聞こえてくる。
「あ、ごめんごめん。あまり好きじゃないんだね、そのあだ名」
「……別に嫌いじゃないけどね」
電話の相手……。毛利（もうり）　菘（すずな）は少し笑ってそう答えた。

電話相手の毛利　菘は神奈川県の高校二年生だ。茜と同じく吹奏楽部所属で、アルトクラリネットを吹いている。彼女と茜が出会ったのは中三の夏、東京でのことだった。
「そういえば今年も夏フェス行くでしょ？」
菘が思い出したように聞いてくる。
「うん、もちろん！　志帆さんかっこいいよね～。この間カラオケで歌ったんだけど難しすぎて途中で友達に手伝ってもらっちゃった」
2人が出会ったのは東京で行われた夏フェスでだった。
会場を待つ列でちょうど前後に並んでおり、さらに同じアーティストが好きということで意気投合したのだ。
昨年はお互い忙しく行けなかったが、今年は2人で参戦する予定だ。

「え？　茜もカラオケ行くんだ」
「ん？　何か問題でも？」
「ガラじゃないな～って思って」
「ひっど～い！」
「アハハ！！　冗談よ。で、どうしたの？　一年生が全く入らなかったとか？」
「ううん。３２人」
「……へ？」
　菘はきょとんとしたようすで声を発する。
「……あ、ああ。一年生が１５人入って３２人ね！　良かったじゃない。大編成出られるし！」
「ううん。一年生３２人、二年生１７人の計４９人よ」
「……へ？　えええええ！？！？」
「そんなに叫ばなくても……」
「驚くわよ！　うちだってそんなに入らなかったのに……」
「うん。あたしもびっくりした。でもね、うちの市内で男子が通いやすい普通高校ってうちの高校ぐらいらしいのよ。中堅高ってでもいうのかな。だから男子が相当集まったみたい。……実は男子１５人も入ったのよ。クラにも一人初心者の子が入ったわ」
「へぇ……。ラッキーだったのね」
「まあね。ただ問題もいくつか起きてるの」
「問題？　一年生が希望パートに入れなくて逃げ出しちゃったりとか？」
　冗談めかして菘が返す。
「それもあった」
「え！？　本当にあったんだ」
「うん。あ、これナイショだったんだ」
　功の脱走のことはホルンセクションの４人と庄吾、そしてちょうど功が走っていくのを目撃した茜しか知らなかったのだ。
「あ～あ」

「まあ菘ちゃんなら誰にも言わないよね？　私も佐野先輩への思いは誰にも話して……」
「キャ～！！　だからそれは言わないでよ！　佐野先輩そっちにいるんだから！」
「らしいね～。うちの高校のサックスのコーチしてるから」
「ええ！？」
菘はまた驚いた声を上げる。今日何回驚いたかそろそろわからなくなってくるくらいだ。
「……ちょっと詳しい話聞かせてよ」
「うん、いいよ」

十分後。一通り菘は聞きたいことを聞き終える。
「……いいな～。朝倉先輩ともまだまだラブラブか～」
「あれ？　あきらめてないんだ？」
「……ううん。朝倉先輩と佐野先輩ならきっと幸せになるだろうから。私は一回二人の邪魔しちゃったから……。そういえば話ずれまくったね。茜どうしたの？　困ってることあるってメールで言ってたけど……」
思い出したように菘は話を元に戻す。
「うん……。実は先生にアルトクラリネットを吹いてくれないかって言われちゃって……」
「アルトクラ？　あたしと一緒じゃん！　ああ、でどうするか困ってるってことね。いいんじゃない？　アルトクラって楽しいよ」
意外とあっさり答える菘。
「でも……。ソロとかぜんぜんないんだよね？」
「まあね。橋渡しの役割だからまずないわ。でもおいしい動きを吹くことができるし、Ｅｓ管（＊１）だから楽譜がないときはアルトサックスの譜面渡されることもあるのよ」
「へぇ……。でもあたしトップだから歌い方とか揃えないといけないのにアルトクラだけ別の動きだったら困らない？」

「そうね……。でも他にも二年生いるんでしょ？　トップが全部責任負わなくてもいいんじゃないかな。それにアルトクラに選ばれるってことは相当音感あるってことよ？　アルトクラって音程とりにくいんだから。まあオーボエやファゴットとかにもそれは言えるんだけど……」
「うん……」
「大丈夫！　茜ならやってけるって！　私が保証したげる！」
「……うん！　ありがと！」
「どういたしまして！　それじゃあ夏フェスの日程わかったら連絡するね。それじゃあまた！」
「うん！　おやすみ～」
茜は受話器をそっとおいた。

翌日。茜は楽器庫の棚から少し大きなケースを取り出し、ケースを開いた。
「……これがアルトクラか」
クラリネットより大きく、バスクラより少し小さい楽器を見つめる。
「……よろしく！」
そして笑顔でそう呟くのだった。

１３９話　ソプラノｏｒアルト（後書き）

＊１

管楽器には同じ基本構造を持った異なる管長の楽器が存在し、それらは同じ指使いで違う高さの音を出すことができます。それらは演奏法も近似しているため、ひとりの奏者が異なる管長の楽器を演奏することができ、この場合、音の高さが楽器によって違っても、同じ指使いには同じ音符をあてるほうが、奏者の負担を軽減できます。このため、楽譜をそれぞれの楽器の指使いに固定し、必要があれば楽譜を書くときに高さを調整（移調）して書き表すようにされたのです。（ｗｉｋｉｐｅｄｉａより）

今回は「奏～ｋａｎａｄｅ～」からアルトクラリネットの毛利　菘さんに登場いただきました。

コラムＪ　２００８年度桜田中央高校吹奏楽部部員名簿

２００８年度吹奏楽部部員名簿表

◎部長
●副部長
△金管、木管リーダー
▲学生指揮
○トップ

（学年・出身中学）

□フルート＆ダブルリードセクション

☆ピッコロ
・糸川（いとがわ）　剛（つよし）　（１）
　弓掛中学校出身。中学からずっとピッコロを吹いてきた。寡黙な性格だが楽器に対する思いは熱い。アンサンブル等ではフルートを吹く。

☆フルート
○坂根（さかね）　美香（みか）　（２）
　桜田第四中学校出身。中学時は文芸部。自分を変えたいという思いから吹奏楽部に入部。現にこの一年間で性格はだいぶ外交的になった様子。普段はおとなしいがいざという時の行動力は目を見張るものがある。庄吾と交際中。
・木山（きやま）　里奈（りな）　（１）

桜田第三中学校出身。小学校から吹奏楽部に所属していて、フルートは7年目。
演奏時以外はドジっ子でよく剛に呆れられている。

・増田（ますだ）　愛子（あいこ）　（1）
弓掛中学校出身。小柄でかわいらしい顔立ちをしている。
中学二年生のときに京都から桜田市に引っ越してきて、フルートはそれから始めた。
それまではコントラバスを担当。

☆オーボエ
・浦田（うらた）　駿介（しゅんすけ）　（1）
佐倉中学校出身。オーボエは中学生の時から。ゆったりとしたソロを吹かせたら彼の右に出る者はいない。理系教科が大の苦手であるが、なぜか欠点はとらない。

☆ファゴット
・小野（おの）　ゆかり　（1）
神奈川県横浜市立虹の森中学校出身。活発な性格で、物事をズバッと決められるので男前な性格とも言われる。唯一揺らいだのは中学の楽器決めでトランペットから音に惚れたファゴットに希望を変えたとき。

□クラリネットセクション
☆E♭クラリネット
・相川（あいかわ）　加奈（かな）　（1）
桜田第一中学校出身。中学校の時一時退部はしたものの、貴弘の

説得で部に復帰。E♭クラリネットは中2から担当。

☆B♭クラリネット

△有吉(ありよし)　弥生(やよい)　（2・中原）

中原中学校出身。方向音痴であり、中学時代から通っている塾の中でも迷子になったことがある。9つ下の妹がいる。中学時は合唱部でクラリネットは高校から始めたが、初心者ながら表現力が高いため木管リーダーの役職に就いている。

・田中(たなか)　拓也(たくや)　（2）

桜田第二中学校出身。田中三兄弟の末っ子。心配症であるため、本番前にはイメージトレーニングを欠かさない。パソコンの扱いが上手く、検索能力と情報処理能力はピカイチ。

・日野(ひの)　詩織(しおり)　（1）

桜田東中学校出身。クラリネットは中学から吹いている。穏やかな性格で場の雰囲気を和ませる。

・横山(よこやま)　なずな　（1）

中原中学校出身。クラリネットは小学5年生から。引っ込み思案な性格で、中学校ではクラリネットが学年で一人だけだったので大人数に圧倒されている。

・新木(あらき)　一(はじめ)　（1）

桐ヶ丘第一中学校出身。クラリネットは初心者で中学時代は柔道部。がっしりとした体格の割に繊細な演奏をする。他人に関する勘は鋭いが、自分に関することには鈍い。

・田口(たぐち)　梓(あずさ)　（1）

桜田北中学校出身。小学校の金管バンドではトランペットを吹いていて理穂の後輩だった。高校では新たな楽器に挑戦しようとクラリネットを選択した。アクティブなタイプで、思い立ったら一直線。

・三宅（みやけ）　美羽（みう）（1）

新潟県新潟市立北新潟中学校出身。クラリネットは中学生の時から吹いている。軽やかな旋律が好きで、技巧的な動きが得意だが、ゆったりと歌う動きは少し苦手。

☆アルトクラリネット

○東（あずま）　茜（あかね）（2）

桜田北中学校出身。クラリネットは高校から。中学時代は生徒会に所属していたが、同じくアルトクラリネットを吹いている友人からの勧めで吹奏楽部に入部を決める。頭がよく、実は校内成績一位をずっとキープしている。

☆バスクラリネット

・佐田（さだ）　成美（なるみ）（1）

梅ヶ丘第一中学校出身。バスクラは中学から。すらっと背が高く、バスクラがよく似合っている。

□サックスセクション

☆アルトサックス

◎中島（なかじま）　唯（ゆい）（2）

桜田第一中学校出身。吹奏楽部の部長。目上の人にはきちんと接し、面倒見もいい。ただし、テンションが上がりすぎると手がつけられなくなってしまうのが玉に傷。おしゃべり大好き。スイーツ大好き。先斗とは幼馴染で、クラスが幼稚園から12年間一緒だったが先斗が理系に行ったことでクラスが離れた。

・加藤（かとう）　葵（あおい）　（1）
桜田第三中学校出身。先斗の母親と彼女の母親は喫茶店の共同経営者であるため先斗とは面識がある。早いパッセージになるほど燃えるらしく、真っ黒な楽譜でも臆しない。母親の遺伝子からかおしゃべりが大好きで、唯とも初対面から喋りまくっていた。

・小林（こばやし）　清一郎（せいいちろう）　（1）
海浜中学校出身。アルトサックスは初心者。中学時代は卓球部。熱い漢（おとこ）で、情熱的な曲になるとテンションが上がりまくる。

☆テナーサックス
○吉岡（よしおか）　奈津美（なつみ）　（2）
中原中学校出身。中学時はバトミントン部。テナーサックスは高校から。兄の影響で吹奏楽を始める。持ち前の明るい性格で大変なことも吹き飛ばしてしまう。

・福島（ふくしま）　利明（としあき）　（1）
梅ヶ丘第二中学校出身。中学が小編成でサックスが彼だけだったためソプラノからバリトンまでいろいろなサックスを中学時代は持ち替えていた。そのため慶太がエレキベースを弾く時はバリサクを吹く。気が弱く、濃いサックスセクションにも翻弄されている。

☆バリトンサックス
・進藤（しんどう）　慶太（けいた）　（2）
桜田南中学校出身。バリトンサックスは高校からで、中学時代はバスケットボール部。エレキベースを演奏することができる。濃いサックスセクションのストッパー役であり、まさに裏から支えてい

る。バスケは足の故障からやめたと言っていたが…？

□トランペットセクション

●三上（みかみ）　庄吾（しょうご）　（2）

桜田第一中学校出身。トランペットは中学生からで、小学校の時はトロンボーンを吹いていた。吹奏楽部の副部長だが、あまり活躍する場面もないため自分はこれでいいのかと悩むことも。ハイトーンを得意とする。美香と交際中。意外とデータを収集するのが得意。

○今井（いまい）　里穂（りほ）　（2）

桜田北中学校出身。小学校時に金管バンドでトランペットを経験。柔らかな音を出すためフリューゲルホルンなどの持ち替えは彼女が担当する。人と打ち解けるのが得意。

・黒松（くろまつ）　耕一（こういち）　（1）

後島中学校出身。トランペットは小学4年生から。先斗のいとこで、実家は離島のため先斗の家から桜田中央高校に通う。ずっとソロで吹いてきたためポップスなどが得意。

・若林（わかばやし）　舞（まい）　（1）

桜田第一中学校出身。中学校からトランペットは担当。上級生にもしっかり自分の意見を言うことができる強い女の子。

・安井（やすい）　美咲（みさき）　（1）

桜田第三中学校出身。トランペットは小学5年生から。屋外で吹くことが好きで、マーチングも大好き。楽器だけでなく、歌う事も大好きで、ついつい曲のフレーズを歌ってしまう。そのためか音程はトランペットセクションの中で一番正確。

□ホルンセクション

○田中（たなか）　龍也（りゅうや）　（２）

桜田第二中学校出身。ホルンは中学から。三つ子の真ん中だが、三人の中で一番しっかりしている。冷静で客観的に物事を見ることができるがたまに冷たいと感じられる場合もある。

・駒沢（こまざわ）　千秋（ちあき）　（１）

梅ヶ丘第一中学校出身。物事をオブラートに包まずにずばりと言うため、相手を傷つけてしまうことも。ホルンは中学から。低音域がしっかり鳴らせるため４ｔｈを担当することが多い。

・宮崎（みやざき）　功（こう）　（１）

弓掛中学校出身。元はトランペット奏者だったが編成の都合上ホルンに回った。それに不満を抱いていた時期もあるがだんだんホルンの音に惚れていく。機会があるとトランペットを持ち替えることもある。

集中力は高く、自分の世界に入るとなかなか戻ってこない。

・羽山（はやま）　潤（じゅん）　（１）

桜田第二中学校出身。小学四年生からずっとホルン一筋。鈍感で天然ボケが入っているが、ホルンの腕前はピカイチで、合奏時やマーチング練習の時は表情どころか性格までガラッと変わる。

□トロンボーンセクション

○倉橋（くらはし）　加奈子（かなこ）　（２）

桜田北中学校出身。高校からトロンボーンを始めた。中学時はバレー部。豪快な性格で誰とも分け隔てなく話せる。匠と交際中。

・桂木（かつらぎ）　雪乃（ゆきの）　（1）
桜田第二中学校出身。中学校からトロンボーンを担当。小柄ながらしっかりとした音を出し、高音もしっかり当ててくる。

・土江（つちえ）　柾（まさき）　（1）
海浜中学校出身。中学校に吹奏楽部がなかったため、トロンボーンは高校から。楽器の手入れは誰よりも丁寧に行う。

・金田（かねだ）　良樹（よしき）（1）
桜田第一中学校出身。トロンボーンは中学校からでバストロを担当。おとなしそうな雰囲気だが吹くときはバリバリ吹き鳴らして度胆をぬかせる。

□バスセクション

☆ユーフォニウム
△黒田（くろだ）　匠（たくみ）（2）
愛媛県松山市立松方中学校出身。中学時代はユーフォニウムとトロンボーン、パーカッションを担当していた。入部当初は無口だったが最近はだいぶしゃべるように。愛媛にライバルがいる。加奈子と交際中。普段はコンタクトをしているが、物事に集中したいときなどはメガネをかけている。

・神田（かんだ）　竜一（りゅういち）　（1）
桜田第四中学校出身。端正な顔立ちをしているためクールなキャラかと思えば、実は熱血タイプである。ユーフォニウムは中学2年の時テナーサックスから移ってからだが実力は高く、匠も一目置くほど。

☆チューバ

▲西掛（にしかけ）　先斗（さきと）　（2・桜田一）

桜田第一中学校出身。目立つことをあまり好まない性格。音感が鋭く、学生指揮者に推薦された。ピアノが弾ける。唯とは幼馴染である。

・大橋（おおばし）　貴弘（たかひろ）　（1・桜田一）

桜田第一中学校出身。チューバは中学校から。中学時代は部長を務め、崩壊しかけた部を再興した。普段は意外とボケキャラでパート内の雰囲気をよくするムードメーカーでもある。

・斉藤（さいとう）　譲（じょう）　（1）

桐ヶ丘第二中学校出身。チューバは初心者。部内に同じ中学からきたメンバーがいないので彼の過去を知る者はいない。

☆コントラバス

・アマンダ・スミス　（2）

カナダ出身。祖母が日本人であるため、日本語は流暢に話すことができる。現在は留学生として唯の家に滞在。明るい性格で、自然と周りを元気付ける。

・柳田（やなぎだ）　ひとみ　（1）

佐倉中学校出身。中学からコントラバスを担当。マーチングでは打楽器を担当する。自分にあまり自信を持っておらず、自分の意見を口に出すのが苦手。

□パーカッションセクション

○田中（たなか）　ひかり　（2・桜田二）

桜田第二中学校出身。三つ子のいちばん上でしっかり者。ストイックな性格で演奏面にも妥協しない。中学時代はバンドを組んでドラムを担当していた。

・竹原（たけはら）　優樹（ゆうき）　（2・桜田三）

桜田第三中学校出身。中学時代は野球部にいたが、野球応援での吹奏楽部の演奏に興味を持ち入部を決意。鍵盤楽器とティンパニが得意。ポジティブな性格で落ち込んでもすぐ浮き上がってくる。

・渡辺（わたなべ）　和志（かずし）　（2・桜田三）

桜田第三中学校出身。中学時代は合唱部だったが、桜田中央高校では女声合唱しかやっていないため、入部を諦めていた。優樹が文化祭で演奏する姿を見て入部を決意。

・石川（いしかわ）　麻里（まり）　（1）

桜田第三中学校出身。打楽器は初心者。笑顔がかわいらしい女の子で話し方もおっとりした感じ。フルートの里奈とは親友。

・宇野（うの）　泰子（やすこ）　（1）

桜田第四中学校出身。打楽器は小学校の金管バンドから。鍵盤楽器が大得意で、シロフォンは県のソロコンの中学打楽器部門で一位をとるほどの腕前を持っている。メガネ女子。

・小沢（おざわ）　悟（さとる）　（1）

佐倉中学校出身。打楽器は中学校から。マーチングが大好きで、特にクォートの扱いが上手。

・林（はやし）　哲次（てつじ）　（1）

桐ヶ丘第一中学校出身。中学校では帰宅部でずっと家でエレキギターを弾いていたが、とある理由で吹奏楽部に入部。エレキギター

を弾いていたためかリズムキープが得意。

コラムＪ　２００８年度桜田中央高校吹奏楽部部員名簿（後書き）

他の登場人物は次のコラムで紹介します。

１４０話　どれにする？

４月２８日（月）。
吹奏楽部員たちは音楽室に集まっていた。今からミーティングが始まるのだ。
「今日のミーティングってなんなんですか～？」
クラリネットの日野（ひの）　詩織（しおり）が弥生に聞いている。
「あたしも知らないのよ。部長なら知ってるかも。ねえ、唯～！今日のミーティングの議題何～！？」
弥生は音楽室に入ってきた唯に問いかける。
「ああ、あのね……」
「ミーティング始めるぞ～！」
そこに京がいつものように入ってきた。手にはＣＤと大量の楽譜の入った紙袋を抱えている。
「先生～！　それなんですか？」
麻里がそれを見て聞く。
「これか？　まあまず話を聞いてもらおう。部長、挨拶」
「あ、はい！　起立！」
改まったように指示を促す京を不審に思いつつ、唯は号令をかけた。

「一年生はそろそろ部活に慣れてきたころかな。二年生は人数の多さに慣れた頃だと思う」
それを聞いて二年生から笑い声が上がる。
「嬉しい笑いだな。さて。今部員は４９人だ。つまり今年は大編成の部に出ることができるという事だな」
それを聞いて部員たちの大半が表情を変えるが、初心者の部員は状況をつかめていないようだ。
「……すまん、先走りすぎたな」

それを見て京は頭をかく。そして吹奏楽コンクールについて説明し始めた。（※1）

「……というわけだ。分かったか？」

「は～い！！」

麻里が元気な返事を返す。

「よし。それでさっき説明したように今年は高校Ａの部、つまり大編成の部に出る。だから課題曲と自由曲、合わせて2曲を演奏することになるんだ。課題曲はもう昨年度のうちに決まっていて、課題曲？の『ブライアンの休日』を演奏することになっている。それで今から決めるのは自由曲だ。とりあえず5曲に絞ってきたから今から聞いてもらう」

京は黒板に曲名を書きあげた。

？マゼランの未知なる大陸への挑戦／樽屋　雅徳
？海の男たちの歌／ロバート・Ｗ・スミス
？梁塵秘抄（りょうじんひしょう）～熊野古道の幻想／福島　弘和
？吹奏楽のための交響詩「ぐるりよざ」より3．祭り／伊藤　康英
？吹奏楽のための神話（天岩屋戸の物語による）／大栗　裕

「邦人作品多いな……」

その曲目を見て龍也がつぶやく。

実は『海の男たちの歌』以外は全部日本人が作った作品なのだ。

「じゃあ流すぞ」

そう言って京はＣＤラジカセにＣＤを挿入し、再生ボタンを押した。

「……難しそうだな。全部」

五曲を聞き終わった後、先斗は苦笑いしてそうこぼす。

『マゼランの未知なる大陸への挑戦』は緩急が激しいし、『海の男たちの歌』は木管だけでなく金管にも連符だらけ。『梁塵秘抄』

はフレーズのとり方に苦労しそうだし、『ぐるりよざ』は激しい。そして『神話』は変拍子に不協和音だらけだ。
問題はそれだけではない。ソロの問題もある。『マゼラン』はフルートとトランペット、ピアノのソロが、『海の男たちの歌』にはトランペットとホルンのソリ、オーボエ、ユーフォニウムのソロが、『梁塵秘抄』にはクラリネットとファゴットのソリとフルートのソロが、『神話』にはフルートとクラリネットのソロがあった。
穴となるパートはないものの、初心者が比較的多い桜田中央高校なのでソロパートの選出も一倍気を使うのだ。
「それじゃあ今から投票します。配った紙に曲の番号を書いて回してください」
唯の指示のもと、紙が前に回される。
「では開票します。『ぐるりよざ』1票、『梁塵秘抄』1票……」
開票が始まった。庄吾が読み上げ、唯が正の字を書いていく。

「接戦だな……」
開票作業も終わりに近づいた現在、『梁塵秘抄』が15票、『海の男たちの歌』が14票と、大接戦だ。『ぐるりよざ』と『マゼラン』も5票ずつ入っているが、追いつきそうにはない。
「……『梁塵秘抄』、『海男』、『海男』。以上です」
「……同票だ」
なんと『梁塵秘抄』と『海の男たちの歌』が18票で同票だったのだ。
「先生。どうしますか？」
「そうだな…。とりあえず両方練習してみて、合いそうだと思ったものを自由曲とすることにしよう。じゃあ楽譜配るからトップ取りに来てくれ」
「「はい！」」
そして楽譜が配られる。先斗の所にはピアノの譜面も回ってきた。どうやらピアノの担当は先斗で決まりらしい。

「それじゃあ今日の残りの時間でパート決めと譜読みをしてくれ。解散」
京の指示で部員たちはそれぞれの練習教室に戻って行った。

１４０話　どれにする？（後書き）

※１　詳しくはコラムＦをご覧ください。

１４１話　パート割り

「それじゃあパート割り決めま～す！」
パートリーダーの理穂がトランペットセクションのメンバーを呼ぶ。
全員がそろったところで理穂は配られた楽譜を鞄から取り出す。
先ほど配られた課題曲自由曲だけではなく、５月中旬にある老人ホームへの慰問演奏会と、６月中旬の幼稚園での演奏会の楽譜もあるのだ。
曲目は以下の通りだ。

吹奏楽コンクール演奏曲候補
・ブライアンの休日
・海の男たちの歌
・梁塵秘抄（りょうじんひしょう）～熊野古道の幻想

老人ホーム演奏会
・ブライアンの休日
・森の音楽隊～語りつき楽器紹介
・わらべうたつづり
・ジャパニーズ・グラフィティ？「時代劇絵巻」
・ドリフずっこけ大集合！！

幼稚園演奏会
・勇気１００％　Ｂｒａｓｓ　Ｒｏｃｋ
・森の音楽隊～語りつき楽器紹介
・「となりのトトロ」セレクション
・わらべうたつづり

「結構多いですね……」
舞が楽譜を目の前にして呟く。
「まあ演奏会が二つ重なるのは初めてだしな……」
今までは本番までにもある程度時間の余裕があり、練習もしっかりできたが、今回の老人ホームでの演奏会まではひと月ないのだ。
「とりあえずパート割りをしよう。勝手だけど課題曲自由曲は俺が割り振ったから発表するな」
「「は、はい！」」
庄吾のいきなりの宣言にびっくりする一年生。
庄吾はそれを気にせずに発表していく。
「じゃあまず『ブライアン』。１ｓｔが耕一と俺、２ｎｄが舞、３ｒｄが理穂と美咲な。次に自由曲。二曲とも１ｓｔが美咲と理穂、２ｍｄが俺、３ｒｄが耕一と舞。これで頼む」
「え！？」
耕一と美咲が驚いた声を上げる。
てっきり一年生は２ｎｄと３ｒｄだけかと思っていたからだ。
一方、舞は納得がいった表情で座っていた。
その後もパート割をしていったが、耕一は『森の音楽隊』と『となりのトトロ』が、舞は『わらべうた』と『ドリフ』、『勇気１００％』が、美咲は『ジャパグラ』と『ドリフ』が１ｓｔだった。
「それじゃあ残りは個人練習ね。１８時４５分から音楽室で終礼だから。じゃあ解散」
理穂がそう言うと舞はすぐに個人練習を始める。
「……俺達もやるか」
「うん……」
そして耕一と美咲も戸惑いながらもそれに習うのだった。

「なんで俺が……」
耕一と美咲が楽器庫に帰ると、クラリネットの一が唖然とした表情で譜面を見つめていた。
「おい、一。どうしたんだ？」
「これ見てくれよ…」
そう言って渡されたのは『海の男たちの歌』の譜面だった。
「……１ｓｔ！？」
そう。一が持っていたのは１ｓｔの譜面だったのだ。
「な、なんで？」
「知らん……」
「俺もだよ……」
そう言ってアルトサックスの清一郎が話の輪に入ってきた。
「俺も両方１ｓｔ。というかもらった曲全部……」
「初心者に１ｓｔって…。先輩達何考えてるんだよ……」
「まさか先輩たち１ｓｔ吹く実力がないとか……？」
「何を話してるの？」
そこに潤と功が会話に加わってきた。
「なんか渡される譜面がな……」
そう言って各々譜面を見せる４人。

「なんだ。俺達も似たもんだぞ？」
潤は譜面を取り出して同じように見せてみせる。
なんと課題曲自由曲ともに潤は１ｓｔ、功も３ｒｄだ。
ホルンは大抵１ｓｔ、３ｒｄ、２ｎｄ、４ｔｈの順に音が高いから２人は上吹きになる。
「で、でもなんでそんなに平然としてられるんだ？」
「え？　なんで焦る必要があるんだよ？」
「だって下級生に上吹かせるのって…」
「まあ俺も抵抗あったけど、先輩が俺には上でしっかり鳴らしてほしいって言われてさ……。コンクールはなるべく得意な部分で補い

あった方がいいんじゃないかってことでこうなった。先輩は下の音がはっきり出て綺麗だし。功はトランペットやってたからか高音は比較的出るから３ｒｄになったみたい」
　言葉を続ける潤。
「それにペットは全部１ｓｔ吹いたら後半厳しいだろ？　後、一と清一郎は完全に初心者だから１ｓｔなんだと思うよ」
「……どういう事だ？」
　困惑気味の２人。
「１ｓｔってメロディーラインが多くてハモリは比較的少ないだろ？　だから音がとりやすいから耳を鍛えるために１ｓｔになったんじゃないの？　アルサクは中島先輩居るし、クラリネットは２人ずつぐらい各パートにいるからそんなに支障はないだろ」
「……なるほど」
　確かにトランペット経験者である梓は３ｒｄの譜面を渡されていた。
「お、羽山鋭いじゃん」
「「！？」」
　突然の声に６人が振り向くと、そこには庄吾が立っていた。
「先輩……」
「実はな、一年生が入ってくる前にパート決めでトラブルがあったんだよ。だからパートの決め方は佐野さんや朝倉さん、先生と相談して決めたんだ」
「そうだったんですか……」
　耕一、美咲、一、清一郎はおもわず目を伏せる。
　そうとは知らずにさっきは吹けないんじゃないかとかかなり失礼な発言をしてしまったからだ。
　おそらく舞もこのことを分かっていたから黙って練習していたのだろう。
「ま、俺達もそんなに引っ張っていけるレベルではないから、手助けよろしくな」

庄吾は気にしていないといった感じで軽く声を掛けた。
「それより終礼始まるぞ。早く来い！」
「は、はい！」
それを聞いて６人はあわてて音楽室にかけていくのだった。

１４２話　再会

５月４日（日・祝）。

今日は自由演奏会の開催日だ。

自由演奏会とは、全国各地の楽器演奏家が開催出来る、吹奏楽主体の演奏会のことである。

自由演奏会は楽器を所有していても諸事情で演奏する機会がない人や、楽団に所属していてもより多くの演奏家と交流して視野を広げたい人などを対象に、場所・楽譜を提供することによって演奏機会を作り、親睦を深めることを目的として行われる。ゆえに参加者個々の演奏実績や経験・技量などは一切問われないのがウリだ。（※１）

会場は桐ヶ丘市の市民会館の大多目的室だ。参加者は４００人の予定だが、当日参加する人もいるからもう少し人数は増えるらしい。

今日は部員だけではなく、京、静香、正志、純也、翔、陽乃の６人も演奏に参加する。

京は期間は違うものの、トランペット、クラリネット、バスクラリネット、ファゴットと、４種類の楽器の経験者であるため、どれを演奏するか迷ったが今回は一番経験が長く、Ｍｙ楽器を持っているファゴットで出ることにした。

「フンフフ～ン！」

陽乃は鼻歌を歌いつつ、笑顔を浮かべていた。

「朝倉先輩、ご機嫌ですね」

唯がそれを見つつ、翔に話しかける。

積み下ろしが終わり、部員たちはそれぞれのパートでまとまって開場を待っている。アルトサックスのメンバーと翔は市民会館入り口右手の木の下にいた。

「今日はあいつの親友や俺たちの部活の同期も来るからな～。そりゃ楽しみやろ」
「そうなんですか？」
「ああ。大阪と兵庫から来るんや。ゴールデンウィークだから今日は陽乃の家に泊まるらしい」
「先輩はご一緒しないんですか？」
「女同士で話がしたいんやってさ。俺は寂しく学部の友達と飯や」
翔はそう言って笑って見せた。
「へぇ……。あ、そろそろ開場するみたいですね」
そう言われて翔が前を向くと、係員らしき人がドアを開いていた。
「ホンマや。じゃあ行こうか」
「はい。葵ちゃ～ん！　清一郎くん！　行くよ～！」
「はい！」
駆けてきたのは葵と清一郎。
葵は小学校からアルトサックスを吹いている経験者で、清一郎は高校からの初心者だ。
この2人に唯を加えた3人が桜田中央高校吹奏楽部のアルトサックスのメンバーである。
「アルトサックスの方はこちらで受付をお願いします。楽譜は１ｓｔと２ｎｄがありますが、バランスがあるためパートは先着順とさせていただいています。楽譜は終了後に回収しますのでなくさないようにしてください……」
受付の女性が説明をする中、４人は楽譜を見始めた。

ところでアルトサックスの3人はぜんぜん違うように見えて一つだけ共通点がある。
「あ、情熱大陸だ！」
「これ、ペットとフルートがおいしいバージョンね。でもノリノリだから大好き！」
「こっちは……ああ！アルメニアンダンスパート1がある！」

「これも大好きです！」
「え？　この曲って有名なんですか？」
「もちろんよ！　途中でアルサクのソロもあるのよぉ～！」
「マジっすか～！？」
そう、３人ともテンションの上限がないのである……。
この光景をはじめて見た翔は唖然とするばかりだ。
「あ、あのぁ……」
それを打ち破るように受付の女性が声をかける。
「とりあえず先に決めていただけますか？　後もありますので……」
「「は、はい……」」
４人は少し小さくなりながら楽譜を選んだ。

「あ！」
一方、トランペットのメンバーは受付を済ませて会場の中に入っていた。トランペットの席は会場の右側、ホルンの後ろに位置している。
「ど、どうしたんですか。朝倉先輩」
理穂がいきなり叫んだ陽乃を見てたずねる。
「雪ちゃん！　由美ちゃん！」
しかし陽乃には理穂の問いかけが聞こえなかったらしく、少しはなれた所にいる二人の女性のほうに駆け出していった。
「陽ちゃ～ん！　元気だった！？」
雪ちゃんと呼ばれたほうの女性が満面の笑顔で陽乃の肩を叩く。
「相変わらず元気だね～」
そして由美ちゃんと呼ばれた女性はニコニコとしている。
「朝倉先輩！」
「あ、理穂ちゃん。どうしたの？」
後ろから走ってきた理穂に笑顔で返す陽乃。
「どうしたのじゃないですよ！　いきなり走って行っちゃうし！」
「ああ。ごめんごめん」

「もう、陽ちゃんぜんぜん変わらないね」
「そうそう」
それを見て2人は少し苦笑いをした。
「紹介が遅れたわね。私は永井（ながい）　雪子（ゆきこ）。兵庫の大学でホルン吹いてます。陽ちゃんとは同じ部で演奏してたの。途中で転校したんだけどね。よろしく！」
「あたしは宮部（みやべ）　由美子（ゆみこ）。大阪の大学で吹奏楽してます。よろしくね！」
「由美ちゃん、楽器は？」
「あ、言うの忘れてた。フルートやってま～す」
「由美ちゃんも相変わらずだね～」
（……仲良さそうだな）
理穂はおしゃべりに興ずる3人の姿をほほえましく見つめるのだった。

「なんでお前らがおるんや……」
その頃、正志もある人物たちと再会していた。
「なんでって、吹奏楽の行事に参加しない手はないやろ」
「そうやそうや。柏原先輩の言うとおりやで」
「あたしが丸山先輩誘ったらみんな来ちゃったんですよ～」
「ちょうどゴールデンウィークだし、子供たちが親戚のところに行ったから時間ができましたしね」
「私も丸山先輩に誘われて来ちゃいました」
正志の問いに答える5人。
最初のセリフから順に、柏原（かしわら）　孝雄（たかお）、島岡（しまおか）　揚子（ようこ）、先斗の母親である西掛　小百合（旧姓　黒松　小百合）、菊池　美香子（旧姓　丸谷　美香子）、生駒（いこま）　敦美（あつみ）だ。5人とも正志の出身高校である、大阪府立今高高等学校のトランペットパートのメンバーである。
「……まあええわ。小路（こじ）と南川（みなみかわ）は？」
「2人とも仕事が急がしくて来れないんやって。それにしても……」

「……なんや？」
孝雄が妙な笑みを浮かべたので正志は少し眉をひそめる。
「お前が教師か～。……いじられ過ぎて『謎の棒使い』にジョブチェンジするなよ？（※2）」
「なるか！」
そんなふうに突っ込みつつも、当時と変わらないメンバーに正志は高校時代を思い出していた。

１４２話　再会（後書き）

※１　ｗｉｋｉｐｅｄｉａより。
※２　詳しくはチキンライスさん著の『Ｈａｒｍｏｎｙ　Ａ　Ｄｅｃａｄｅ　Ａｇｏ』をご覧ください。

約一ヶ月半ぶりの投稿となります。遅れてすみませんでした。
今回は『奏～ｋａｎａｄｅ～』から永井　雪子さんと宮部　由美子さん、Ｈａｒｍｏｎｙ　Ａ　Ｄｅｃａｄｅ　Ａｇｏから、柏原　孝雄さん、島岡　揚子さん、丸谷　美香子、生駒　敦美さんに登場していただきました。６人には次話以降にも登場していただきますのでご期待ください。

コラムＫ　登場人物紹介（２００８年度編）（前書き）

桜田中央高校吹奏楽部の部員以外の登場人物を紹介します。…膨大なため、ちまちま追加しますので、こいついないぞ！ってのがあったらメッセージでお知らせください。

コラムK　登場人物紹介（２００８年度編）

※１７８話現在

【桜田中央高校】

・西村（にしむら）　京（たかし）　（２３）

桜田中央高校吹奏楽部顧問。１－Ｄ副担任。教師生活二年目で、担当教科は公民だが地理の免許も持っているため、今年からは地理も担当。教師になってまだ年数が浅いためこれでいいのかと悩むことも。中学時代にトランペット、高校時代にバスクラリネットとＢ♭クラリネット、大学ではファゴットとホルンを担当していた。

・梶原（かじわら）　静香（しずか）　（４７）

桜田中央高校吹奏楽部副顧問。２－Ｃ担任。担当教科は化学。前任校の桜田東高校では弱小高だった東高を３年で全国大会に導いた。桜田中央高校では学年主任で多忙なため、吹奏楽部のサポートに回っている。本人もフルートを学生時代から演奏している。

・沢木（さわき）　正志（まさし）　（３６）

桜田中央高校吹奏楽部副顧問。２－Ｅ担任。担当教科は生物。前任校の柳紅水産高校には吹奏楽部がなかったため、吹奏楽部とかかわるのは大学時代以来。出身は大阪。高校時代からの付き合いの妻がいる。トランペット奏者。

・杉原（すぎはら）　純也（じゅんや）　（２３）

桜田中央高校弦楽部顧問。担当教科は現代文。２－Ｂ副担任。吹奏楽経験者で高校時代は打楽器を担当していた。

吹奏楽部にも時折顔を出して打楽器を見てくれる。

・朝倉（あさくら）　智子（ともこ）　（３３）
桜田中央高校合唱部顧問。おっちょこちょいだが、生徒からの受けはよい。１－Ｇ担任。

・仲里（なかざと）　紗香（さえか）　（２６）
桜田中央高校卓球部顧問。高校時代にオーボエを経験している。２－Ｆ副担任。

・倉田（くらた）　康平（こうへい）　（１７）
桜田中央高校２－Ａ所属。桜田北中学校出身。弦楽部でチェロを担当。匠と仲が良い。

・佐野（さの）　遼（りょう）　（１７）
桜田中央高校２－Ｆ所属。桜田第二中学校出身。剣道部主将。匠の友達。１つ下に弟がいて、今年桜田中央高校に入った。

・有田（ありた）　正行（まさゆき）（１７）
桜田中央高校２－Ａ所属。桜田第二中学校出身。弦楽部部長。担当はヴァイオリン。田中３兄弟とは中学からの仲。

【桜田商業高校】

・朝田（あさだ）　悠莉（ゆうり）　（１７）
桜田商業高校２年。吹奏楽部でチューバを担当。桜田第一中学校出身。先斗とは同期である。

・安斎（あんざい）　美晴（みはる）　（１７）
桜田商業高校２年。吹奏楽部でチューバを担当。３ヶ月間だけ弦楽部でコントラバスを弾いていたことがある。

・村田（むらた）　大貴（たいき）　（１６）

桜田商業高校1年。吹奏楽部でチューバを担当。中学時代はソフトテニス部で、見た目は完全運動部。中学時代の譲のことを少し知っているが、今の譲とイメージが一致しないのか、本人だとは気づいていない。

【桜田農林高校】

・村松（むらまつ）　ゆかり　（18）

桜田農林高校2年。吹奏楽部で打楽器を担当。副部長としてだけでなく、彼女としても隆利を支えている。

・吉岡（よしおか）　隆利（たかとし）　（18）

桜田農林高校3年。吹奏楽部の部長で、テナーサックスを担当している。鬼の部長といわれているが、妹である奈津美には弱い。ゆかりと付き合っている。

・内田（うちだ）　海里（かいり）　（17）

桜田農林高校2年。吹奏楽部で打楽器を担当。優樹たちとは友達で、よくゲーム談義をしている。

・坂本（さかもと）　春香（はるか）　（17）

桜田農林高校2年。吹奏楽部でトランペットを担当しているが、元ホルン吹きであるため、ホルンと持ち替えをすることも多い。

【桜田工業高校】

・高田（たかだ）　瑞希（みずき）　（18）

桜田工業高校3年。吹奏楽部で打楽器を担当。ゆかりとはいいコンビ。

・小泉（こいずみ）　修也（しゅうや）　（17）

桜田工業高校吹奏楽部でアルトサックスを担当。負けず嫌いで、

合同演奏のときから何かと唯をライバル視している。

・津田（つだ）　悠斗（ゆうと）　（１７）

桜田工業高校２年。吹奏楽部でバリトンサックスを担当。ほかにジャズバンドで演奏もしている。理穂の彼氏。

・相田（あいだ）　なずな　（１８）

桜田工業高校３年。吹奏楽部部長でトランペットを担当。桜田一中ＯＢで中学時代は庄吾たちをビシビシ指導していた。それは後輩の徹にも適用されているようである……。

・小森（こもり）　徹（てつ）　（１７）

桜田工業高校２年。吹奏楽部でトランペットを担当。なずなの指導の賜物で、現在では初心者だったとは思えないほどの実力の持ち主となっている。

【湯釜高等学校】

霧崎（きりざき）　翔吾（しょうご）　（１７）

湯釜高等学校２年。吹奏楽部でホルンを担当。２００７年度のコンクールの際に泊った旅館、霧崎旅館の一人息子。龍也や庄吾とはメールを交わす仲。彼女がいて、一緒にチャリティーコンサートにもやってきた。

【松方中学校関係者】

・斉藤（さいとう）　澪（みお）　（１７）

愛媛県松山市立松方中学校出身。現在愛媛県立斎木高校２年。吹奏楽部でフルートを担当している。成績優秀でピアノも弾ける。

・松原（まつばら）　祐二（ゆうじ）　（１７）

愛媛県松山市立松方中学校出身。現在愛媛県立斎木高校２年。吹奏楽部でトランペットを担当。中学時代は部長であり、匠の親友で

もあった。現在でも連絡を取り合っている。

・中崎（なかさき）　愛子（あいこ）　（１７）

愛媛県松山市立松方中学校出身。現在愛媛県立斎木高校２年。吹奏楽部でパーカッションを担当。鍵盤楽器、特にシロフォンの腕は確かで、泰徳も認めるほど。

・長瀬（ながせ）　正二（しょうじ）　（１６）

愛媛県松山市立松方中学校出身。現在は親の転勤で広島県に転校している。松方中学校時代は部長だった。

【部員家族】

・西掛（にしかけ）　小百合（さゆり）（３８）

先斗の母親。吹奏楽経験があり、トランペットは高校時代から吹いていた。先斗の出産後しばらく吹奏楽からは離れていたが、今年から一般楽団の「奏ウインドオーケストラ」に入団。トランペットを再開した。岡山の専門学校に通っているときに拓郎と出会い、結婚。大阪出身なのだが関西弁はなぜか出ない。喫茶店「鐘の音」の経営者の一人。マシンガントークが得意だが、最近先斗がそれをかわすのが上手くなってしまったので少しさびしく感じている。

・西掛（にしかけ）　拓郎（たくろう）　（４７）

先斗の父親。出身は島根県。岡山の会社で働いていたが、その時小百合と出会い結婚。転職を機に、島根に引越し、家を買う。現在は食品会社の製品開発部部長。桜田西高校出身なので、母校が閉校したことをさびしく思っていたが。その後身となる桜田中央高校に息子たちが通っていることに不思議な縁を感じている。

・西掛（にしかけ）　海斗（かいと）　（１６）

先斗の弟。桜田中央高校１－Ｄ所属。中学時代は合唱部に所属していたが、高校では新しく創部された軽音部に入部。４人組のバンドでボーカルを担当。身長が先斗より高いので、よく海斗が兄と間違えられる。

【その他】

【常套中学校関係者】

・竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）　（１６）

愛媛県松山市常套中学校出身。現在は私立賽彌（さいび）高校の１年生。セミプロとしてチューバを演奏しており、吹奏楽部には現在所属していない。先斗たちとは親交があり、匠は彼をライバル視している。プロに移行するというううわさもある。

・浜口（はまぐち）　愛（まな）　（１６）

愛媛県松山市立常套中学校出身。現在は愛媛県立松山南高校１年。アルトサックスを演奏していた。入部当時は部内１の問題時だったが、だんだんと練習熱心になっていった。

【虹西高校関係者】

・鈴木（すずき）　悠輔（ゆうすけ）　（１７）

愛媛県松山市立明台中学校出身。現在、神奈川県横浜市立虹西高校の２年生。吹奏楽部でチューバを吹いている。中学時代から匠と親交があり、メールをする仲。

【七海高校関係者】

・佐野（さの）　翔（かける）　（１９）

島根大学教育学部音楽教育専攻。神奈川県七海市立七海高等学校出身。アルトサックスを主に吹くが、ソプラノサックスに持ち替えることも。実はバリトンサックスも吹けたりする。桜田中央高校の

サックスセクションのコーチ。
ニュースで桜田市の教員不足を知り、島根県で教員になることを決意。そのために島根大学に来た。
陽乃とは高校時代から交際しており、高校では校内公認カップルとして有名だった。市の吹奏楽団、『奏ウインドオーケストラ』に所属している。

・朝倉　陽乃　（１９）
島根大学法文学部社会文化学科所属。神奈川県七海市立七海高等学校出身。トランペット奏者。
翔とは高校時代から交際している。本当は私立の大学を受験する予定だったが翔の決意を知り、自分も島根大学を目指すことにし、見事後期試験で合格。現在は翔とともに、市の吹奏楽団、『奏ウインドオーケストラ』に所属している。

・本堂　拓真　（１９）
庄吾とネットでの交流がある中央大学の一年生。翔たちと同じく神奈川県七海市立七海高校出身のチューバ奏者。庄吾とは顔を直接合わせたことはない。

・

・毛利　菘　（１７）
神奈川県七海市立七海高校２年。吹奏楽部でアルトクラリネットを担当している。茜とは中学三年生のときの夏フェスで知り合った。実は茜に吹奏楽部を薦めたのは彼女。

・中野　さゆり　（１８）
神奈川県七海市立七海高校３年。吹奏楽部でアルトサックスを担

当している。唯とはいとこ同士であるが、彼女のほうがひとつ年上のため、唯は彼女をさゆ姉と呼ぶ。

１４３話　無口な彼

正午。
バスセクションの匠、竜一、先斗、貴弘、譲、アマンダ、ひとみは昼食をとっていた。

（ど、どうしよう。会話が続かない……）
ひとみはおろおろしながらおにぎりを食べる。
１年生のうち、竜一と譲はクールっぽくて話しかけづらいし、貴弘は先斗とアマンダとで話をしているからこれはこれで話しかけづらい。
（よ、よし、とりあえず譲くんに話しかけてみよう！）
ひとみは心を落ち着かせると、隣に座っている譲に話しかけた。
「ねえ、斉藤くんって中学時代はなにやってたの？」
「別に。帰宅部」
「そ、そう……」
一言で会話を切られてしまい、落ち込むひとみ。
「ヒトミ！　一緒に食べヨ！　こっちおいで！」
そこでアマンダが呼んでくれたため、ひとみはほっとしてアマンダのほうに向かうのだった。

「でもなんで斉藤はあんなに無口なのかな……」
貴弘がサンドイッチをつまみつつ、呟く。
「まだ入部してひと月足らずだろ？　話せなくても仕方ないさ」
先斗が返す。
「そうですけど……。斉藤が部内で誰かと話しているところ見たことないですよ」
「ああ、確かに」
ひとみがそれに乗っかる。

「斉藤ってどこ出身だっけ？」
「確か……。桐が丘二中だったはず」
「桐二か……。たしか結構荒れてるとこだよな」
貴弘は思い出したように呟いた。
桐が丘二中は市内にある中学校、いや、東部地区の中学校で一番荒れていると言われている中学校だ。いじめによる不登校や、授業崩壊などが多発しており、転校者が続出しているという。
「もしかして虐めとかで人間関係にトラウマあるとか？」
「でもそうだったらわざわざ吹奏楽部入らなくない？」
「とにかく！」
話を膨らます2人を先斗が止める。
「俺たちができるのは話しやすい環境を作ることぐらいだよ。さ、そろそろ合奏だから歯磨きに行くぞ」
「は～い……」
2人は返事をして、水道に向かうのだった。

「みなさん、こんにちは～！」
「「こんにちは～！」」
会場に元気な声が響く。
「今から自由演奏会ｉｎ桐ヶ丘市民会館を開催させていただきます！　今回の司会は私、松原（まつばら）　みゆきでお送りします」
本日の自由演奏会は、地元のケーブルテレビで放送される予定だ。そのため、テレビカメラも入っている。
会場の前方には演奏者用のパイプ椅子が設置されており、後ろの方には客席がある。そちらにも人はそこそこ入っている。
演奏者も小学生から大人まで様々だ。
「な、なんだか緊張する……音間違えたらどうしよう……」
麻里が落ち着きのない様子で呟く。
麻里は打楽器初心者であるにもかかわらず、バランスの問題でグロッケンを担当することになってしまったのだ。

グロッケンは特に音が目立つため、叩き間違えるとすぐに分かってしまう。
「石川。大丈夫か？」
優樹がそれを見かねて麻里に近づく。
「今回はコンクールとかじゃないからもっとリラックスして大丈夫だよ。間違えてもいいから今回は鍵盤の叩き方だけ意識してみな。ほら、深呼吸」
「は、はい……」
麻里は、グロッケンのマレットを持ちながら、ゆっくり深呼吸をした。

「それでは、1曲目。この曲は今年度の全日本吹奏楽コンクールの課題曲の一つとなっています。『ブライアンの休日』です。ブライアンと言えば外国の方に居そうな名前ですが、ここでのブライアンとは架空の人物の名前です。みなさんもそれぞれのブライアンを想像してお楽しみください……」
そう言ってみゆきは舞台袖にはける。
（よし……）
指揮者の方を見て、麻里は最初の音の準備をした。

１４４話　少し先の未来

「あっという間だったなぁ～」
一時間半の演奏会のプログラムはあっというまに終了し、自由演奏会は無事に幕を閉じた。
桜央のメンバーたちは市民会館前に再び戻ってきていた。
「あんなに大人数で演奏するの初めてだったから緊張したぁ……」
なずなは力が抜けたようで、木陰でぼーっとしている。
「な～ずな！」
そこに詩織が近づいて肩を組む。
「うわぁ！？」
「なに驚いてんのよ。ほら、点呼かかるからいこ？」
「うん！」
なずなは嬉しそうに詩織について行った。
「なんかなずなちゃん、最近楽しそうだね」
唯がふたりの様子をみて呟く。
「なずなちゃん、中学の時は学年でクラリネット１人だけだったらしいからね。あんなに大所帯だから最初は緊張してたけど最近は馴染んできてるよ」
「そっか。ならよかった」
「清一郎くんはどう？　アルト初心者らしいけど」
「佐野さんにも基礎見てもらってるし、ちょっとずつ伸びてきてる。最近は課題曲も練習してもらってるんだ」
「課題曲か～。一くんと梓ちゃんにもそろそろ練習してもらってもいいかな……。音も安定してきたし」
「２人なら大丈夫じゃない？　今日も結構吹けてたでしょ？」
「うん。あたしもびっくりした」
「お～い。そこの２年生」
そこで先斗が声をかける。

「1年生は全員集合完了してるぞ。早くしろ」
「あ、ごめ～ん！」
そう言って2人は顔を赤くして列に並んだ。
2人が並ぶと、すぐに京が話し始める。
「全員そろったようだな。それじゃあこれからの流れを説明します。糸川、浦田、クラの田中、進藤、黒松、羽山、金田、黒田、大橋、竹原、渡辺、小沢は積み下ろしのために先に学校に戻ってくれ。残りの部員はここで解散するから、気をつけて帰るように。5日、6日の部活だが、点検作業で校舎内に入ることができないから休みとします。それじゃ、解散」
解散がかかると、部員たちはそれぞれ別の方向にバラけていった。
「お～い、西掛くんと三上くん」
「あ、佐野さん」
先斗と庄吾が帰ろうとしていると、翔がふたりに声を掛けた。
「今から飯行かへんか？　おごるで」
「でもいいんですか？　朝倉さん待たせてるんじゃ……」
「あいつはあいつで宮部とかと飯行ってるわ。学科の奴に君たちの話をしたら一回会ってみたいと言うてな。……やっぱ迷惑かな？」
「いえ。ちょうど今から食べて帰ろうかと思ってたとこなんで大丈夫です」
「そか。じゃあ行こう」
2人は翔の後ろについて行った。

「ここなんやけど大丈夫かな？」
翔の案内で着いたのは居酒屋と定食屋が一緒になった店だった。
「あ、はい」
3人は中に入る。
「いらっしゃい。お客様、3名様ですか？」
店員が笑顔で近づいてきた。
「いや、先に2人来てるはずなんやけど……」

「お～い、佐野。こっちやこっち！」
少し奥の方で、翔と同じ年くらいの男性が手を振った。
「そんなでかい声出さんでも十分聞こえるわ！　しかももう出来上がってんのか？」
笑いながら翔はその男性の方に近づいて行った。
「さ、西掛くんと三上くん、座って座って」
「は、はい」
先斗たちは少し緊張して席に着いた。
「佐野、その子たちがこないだ言ってた？」
もう一人の男性が先斗たちの方を見る。
「ああ、そうやで」
「そっか～。あ、俺、島大の総合理工学科の尾崎（おざき）　達也（たつや）。今はテニスサークル入ってる」
「そいでこっちが飲んだくれの松田や」
「誰が飲んだくれや！　……島根大学医学部医学科の松田（まつだ）　純一（じゅんいち）だ。軽音部でドラムやってる。出身は佐野と一緒で大阪や」
「い、医学部……」
先斗は思わず驚いた声を出してしまう。
「なんや？　そんなに意外か？」
「そりゃ、そうだろ。こんな飲んだくれが医者のタマゴなんて誰が思うか」
達也が茶々を入れる。
「……あの」
庄吾が少し言いづらそうにビールジョッキを持つ純一に声をかける。
「なんや？」
「未成年なのにお酒はまずいのでは……？」
そこで一瞬全体が鎮まる。
「アハハハハ！」
しかしすぐに大学生3人は笑い始めた。

「そりゃ、そう思うのが自然だよな。大丈夫、純一はハタチだから」
「え？」
「つまり、一浪したってことや」
「へえ……でも佐野さんたち普通にタメ口……」
「同級生なのになに遠慮することがあるんや。俺はそんなん気にせんわ」
純一はそう言って笑って見せた。
「さ、好きなもの頼んでいいぞ。全部松田がおごるから」
「おい、ちょっと待てよ！」
（大学かぁ……）
そうやって言いあう3人を見て、先斗は再来年のことを考え始めていた。

「そういえば、なんで今日先斗夕飯外で食って帰ることになってたんだ？」
翔たちと別れた後、庄吾が思い出したように先斗に聞く。
「ああ、今日母さんも父さんも帰り遅いから」
「へえ。でも先斗の母さんが夜に家空けるのは珍しいな」
先斗がそう答えると、庄吾は少し意外そうな声をした。
「なんか高校時代のトランペットパートの同窓会なんだってさ」
「へえ……」

「ハクシュン！」
小百合がくしゃみをする。
「なんや？　誰かが噂してるんちゃうか？」
孝雄がビールジョッキを片手に笑ってみせる。
「たぶん、主人ですよ。今夜は夕飯作らないって言ったら悲しい目してましたから」
「あ！　のろけてる～！」
敦美はクスクスと笑いながら小百合を指差した。

「まったく、結婚して15年以上経つのになんでそんなにラブラブなのかしらね。羨ましいわ」
美香子はワイングラスを片手に微笑む。
「そやそや。あたしも幸せになりた〜い！」
日本酒の入ったグラスを掲げて叫ぶ楊子。
「お前はいつでも楽しそうやないか」
「ホント。どんなに時間が経っても小百合ちゃんは小百合ちゃんだし、楊子ちゃんは楊子ちゃん……。変わらないわね」
「先輩？」
「あら、ちょっと酔っちゃったかしらね。あ、沢木先輩、遅いですよ」
店の入り口を見ると、そこには正志が立っていた。
「すまん。なかなか仕事が終わらなくってな」
「そうか。お疲れさん。とりあえず全員そろったからもう一回乾杯だな。ほれ、ビール」
「ああ」
グラスを受け取る正志。
「それでは、今高吹奏楽部トランペットパートの再会を祝って〜」
「「乾杯！」」
そう言って6人はグラスをぶつけ合うのだった。

１４５話　疑惑

５月７日（水）。
「おっはよ～！　……あれ？」
梓がいつものように遅刻ギリギリで１－Ｄの教室に駆け込むと、クラスの雰囲気がいつもと違っていた。
「あ、梓！」
クラスメイトの町田（まちだ）　美砂（みさ）が駆け寄ってくる。
「ねえ、斎藤君今日見た！？」
「え？　斎藤君？」
意外な名前に驚く梓。
「今日は見ていないけど……。なにかあったの？」
梓がそう発した瞬間、クラスが一気に静まった。
「え？　な、なに？」
慌てる梓に、美砂は静かにこう告げた。
「……斎藤君が酔っぱらい怪我させたって噂が出てるのよ」

朝礼の時間になっても担任は入ってこなかった。そして校内放送で１限は自習だと告げられた。
「……」
周りがいろいろ騒ぐ中、梓は空いている譲と美羽の席をずっと見つめていた。

放課後。第二音楽室に梓が入ると、１年生はほとんどの部員がそろっていた。２年生は今日校外研修のため、今日は部活には来なくてよいことになっている。
同じクラリネットの詩織が梓に気づく。
普段なら楽器を組みたてながらおしゃべりを始めるところだが、今日の部内の空気は今までになく重たかった。

譲の話は1日で学年中に広まったらしい。
詳しいことを聞きたかったが、担任はそのことについて何も教えてくれなかった。
「そういえば……」
哲次が思い出したように呟く。
「え？　なになに？」
それに音楽室にいた全員が反応する。
「自由演奏会の日、俺と一と斎藤と……あと今日来てないけど三宅か。４人は桐ヶ丘だからそのまま現地解散しただろ？　その夜、塾の帰りに斎藤が金髪のやつらと一緒にいたの見たんだよ」
「金髪の？　男か？」
「ああ。３、４人はいたな。俺怖かったからそのまま行っちゃったけど」
「……そういえばさ、今日桐二出身の奴からこんな噂聞いたんだけどさ……」
今度は功が話し始める。
「斎藤って中学の時は相当悪かったらしいよ」
「……悪かったって？」
「だから不良だったってこと。普通に髪とか派手な色に染めてたらしいよ」
「でも今は見た感じまともよね？　なんでそんなことしたんだろ」
「中身はまともじゃないんじゃないの？」
ホルンの千秋が吐き捨てるようにつぶやいた。
「いわゆる昔の血が騒いだとか？　昔の仲間と会ったからじゃないの？」
「おい、言いすぎじゃねえか？」
貴弘が少し怒った顔で千秋に詰め寄る。
「あたしは思ったこと言っただけよ。なにか問題でもある？」
「なに！？」

２人は睨みあう。部員たちは何も言えずに展開を見守っていた。
「おい、楽器の音が聞こえないぞ。練習してるのか？」
そこに先斗が入ってくる。
「先輩。今日校外研修じゃ……」
「ああ。でも斉藤の指導しないといけないからな。ほら、斉藤。楽器出して教室行くぞ」
「……斎藤」
そしてその後ろには譲と美羽が立っていた。
譲の左頬にはガーゼが当てられており、それに血がにじんでいた。
「よくのうのうと来れたもんね」
千秋が軽蔑した表情で譲を睨みつける。
「聞いたわよ。あんた中学ん時は不良だったんだって？」
「……」
「そうなのね。しかも酔っぱらい怪我させたってどういうつもりよ。もし部活停止とかになったらどうするのよ！」
「……」
「ちょっと、なんか言いなさいよ！」
そう言って千秋が詰め寄る。
「駒ちゃん、違うの！」
「……すべて事実だ。それだけ聞けば十分か？」
美羽が間に入ろうとした瞬間、譲がはっきりとそう発する。
そして、そのまま音楽室を出て行ってしまった。
「斎藤！？」
「……」
先斗がそれを追いかけるのを一年生はただ見つめることしかできなかった。
「や、やっぱりホントだったんだ……」
２人が立ち去った後、一がぽつりと呟く。
「……この部これからどうなるんだろ」

「……ねえ、美羽ちゃん」
全員が茫然としている中、梓が思い出したように美羽に声をかける。
「さっき、違うって言ってたよね？　もしかして、美羽ちゃんも昨日斎藤くんと一緒にいたの？」
「うん……」
「なにがあったか話してくれる？」
「……分かった」
美羽は頷くと、昨晩起きた出来事をぽつりぽつりと話し始めた。

１４６話　知りたい

「あ～あ。小テストミスっちゃった……」
６日の夜、美羽は塾を少し遅めに出た。
普段は友達３人で帰るのだが、美羽は今日英語と数学の小テスト両方で合格点に達しなかったので、居残りで追試を受けていたのだ。
「今夜のドラマ楽しみだなぁ……」
美羽は歩きながらその晩放送されるドラマのことを考えていた。
「ってもう５５分！？」
ふと携帯を開いてみると、もうドラマが始まる５分前だった。
録画を今日は忘れてしまったから急いで帰らないといけない。
「……近道していこっと」
そして美羽は普段と違う路地に入った。
「……ちょっと怖いな……」
そこは居酒屋などがある路地で、酔っぱらいなども多い。
「……早く抜けちゃおう」
美羽は少し小走りで路地を抜けようとした。
「イテッ」
しかし、１人の男性に肩がぶつかってしまった。
「あ。ごめんなさい」
「あ？　姉ちゃんわざとだろ」
美羽はすぐに謝ったが、相手は酔っぱらい。しかもかなり酔っている様子で、美羽に因縁をつけてきた。
「ち、違います！」
「嘘ついてんじゃねえ！」
酔っぱらいは美羽の手を引っ張ってきた。
「た、助けて！」
周りに助けを求めようとしたが、田舎の桐ヶ丘市。１０時くらいになると人通りも減ってその通りにはほとんど人がいない。

「い～から、こっち来い！」
「や、やめてください！」
美羽は抵抗するが、酔っぱらいは男性。到底力はかなわなかった。

「やめろよ」
その瞬間、路地に声が響く。
「さ、斎藤くん」
そこに現れたのは譲だった。
「お前なんだよ」
酔っぱらいは譲を睨みつける。
「いいからそいつ離せよ」
「なに？　お前に関係ないだろうが……。あ！」
注意が譲に向いた瞬間、美羽はさっと男の手を振り払い逃げ出した。
「待ちやがれ！　このアマ！」
それに逆上した男は、美羽を殴ろうとした。
「きゃあ！」
とっさにすぐに譲がその間に入る。
「どけ！」
そして男は譲の左頬を鞄で殴った。
「……」
しかし譲はよろけることなく、また殴って来ようとした男を突き飛ばした。
「うわぁ！」
跳ね飛ばされた男は近くの店の入り口にぶつかり、ガラスが割れる。
店からけたたましく警報音が鳴った。
（……夢じゃないよね）
ドラマのような状況に、美羽は少し脳が麻痺したのではないかと思いながら、その場に立っていることしかできなかった。

「……じゃあ、怪我をさせたのは不可抗力……？」
「というか正当防衛じゃない？」
茫然としている千秋の呟きに詩織が返す。
正当防衛は刑法３６条１項に規定されており、急迫不正の侵害に対して自己または他人の権利を防衛するためにやむを得ずした行為は、たとえそれが通常ならば犯罪として罰せられる行為であっても、罰せられないというものだ。
今回の場合、譲は殴られて、また暴行を受ける危険があった。そのためそれを避けるために酔っぱらいを突き飛ばしたのは罪に問われないだろう。
「防犯ベルが鳴ったから警備会社とかいろいろなとこを巻き込んじゃって……。さっきまで２人で事情聴取受けてたんだよ。だから先生も何も言えなかったんだと思う」
「……謝ってくる」
千秋はさっと、立ち上がり教室を出て行った。
「……あたしたちはどうしよう」
詩織が少し困ったように貴弘のほうを見る。
「練習しよう」
貴弘はそう言うとチューバのケースのほうに向かった。
「ねえ、バッシー。譲くん心配じゃないの？」
「あいつはきっと戻ってくる」
そう自信を持って言う貴弘の姿に、詩織は何も言葉を返すことができなかった。

「斎藤！」
屋上まで追いかけて、先斗はようやく譲に追いついた。
「なんで正直に言わなかったんだよ？」
先斗は昨日の事件のことは桐ヶ丘に住んでいる友達から聞いて既

に知っていた。そのため、譲には大変だったなとねぎらいの言葉はかけたものの、責めることはしなかったのだ。
「言ってもどうせ変わりませんから」
譲は俯いたままそう答えた。
「何が？」
「周りの態度です」
「態度？」
「俺が元不良だってバレちゃいましたからね。どうせみんな今までと違う目で見るに決まっています」
「……じゃあなんでわざわざ部活に入ったんだ？　吹奏楽部なんて、一番人とかかわるのが多い部活だろ？　一番バレるリスク高いぞ」
「……分からないです。でも」
「でも？」
「入学式での演奏聴いてたら、この中に入りたいって気持ちが溢れてきて、気付いたら入部届けを出しちゃってたんですよ」
「え……？」
思っていたより純粋な言葉に先斗は少し驚いたが、こう続ける。
「でも、バレること覚悟はしてたんだろ？　なら続けるしかねえよ。そんなんでやめるんじゃどっちにしろ部活を続けていけるわけがない」
「……」
「まあ、どっちにしても俺はお前にチューバを教える。やる気があるなら教室に来い」
先斗はそう言って教室に戻って行った。
「……」
譲はしばらく屋上の柵に寄りかかってどうするか考えていた。
「……斎藤くん」
「何の用だよ」
そこにやってきたのは千秋だった。

「……謝りに来たの」
「なんで」
「……短絡的に考えてひどいこと言っちゃったから。……ごめんなさい」
「いいよ。慣れてるから」
「慣れてるって……」
千秋は譲の横に座った。
「中学時代にひどいことなんていろいろ言われたよ。だから気にしてない」
「……あんたもう少し自分大事にしなさいよ」
その声がさっきと違ったので、譲は千秋のほうを向いて驚いた。
「……！？　なんでお前が泣いてるんだよ」
「分からない……」
「……まったく」
そこで譲はハンカチを取り出して千秋の涙を拭くのだった。

「……あんた、意外と紳士ね」
「そうか？」
少し落ち着いたところで千秋はそう言った。
「そういえば、林があんたが金髪の奴と会ってるのを見たって言ってたけどあいつらは？」
「4日のことだよな？　昔つるんでた連中。偶然会って戻ってこないかって言われた」
「……それで？」
「断ったよ。そしたらあいつらキレて殴られそうになった」
「え……？　そんなんでこれから大丈夫なの？　桐ヶ丘の街おちおち歩くこともできないんじゃ……」
「大丈夫。一応カタはつけてきたから」
「……そっか」
どのようにつけたかは聞くのが怖いので、千秋はそれ以上聞かな

いことにした。
「ホントはあんた、いい奴なんじゃないの？」
「……さあな」
「……とりあえず、あたしはもう少しあんたを知りたくなったわ」
「え……？」
譲は思わず、千秋のほうを向く。
「べ、別に変な意味じゃないんだからね！　とにかくこのままあんたをやめさせるのは嫌なの！　いいから、下戻るわよ！」
「……了解」
真っ赤な顔をしながら、ずんずんと階段を降りていく千秋を、譲は少し微笑みながら追いかけるのだった。

１４７話　海男ＶＳ梁塵秘抄

５月１１日（日）。
今日は本番一週間前のため、一日練習だ。
午前中は老人ホームでの演奏会曲を合奏し、午後からの練習で自由曲の選曲をすることになっている。
「そういやみんなは自由曲どっちがいいんだ？」
貴弘が１年生に聞く。
昼休み。バスセクションはこの間と同じように昼食を取っていた。
「俺は『梁塵秘抄（りょうじんひしょう）』かなぁ……。和って感じでかっこいいし」
「私は『海男』（※１）。中間部大好きだし」
「あ、俺も俺も！　中間部のユーフォソロからのオーボエソロへのつなぎ神がかってるよな～」
この間と変わったのはパート内の雰囲気だ。
あの事件の後、譲は前より少し雰囲気が柔らかくなった。パート練習の休憩時間などでも貴弘たちと話すようになったのだ。
「リューは相変わらず語るなぁ！」
そしていつの間にか４人はお互いあだ名や名前で呼び合うようになっていた。

「一年生大分仲良くなったネ」
パックのレモンティーを飲みつつ、アマンダが微笑む。
「そうだな」
匠は四人の方を見つめる。まだ新体制が始まって一カ月しかたたないのにもう四人はすっかり仲良くなっている。
去年の自分を考えると、この頃はまだよそよそしかった気がした。
「表現力とコミュニケーション……か」
「え？」
匠の呟きに先斗が反応する。

「あ、いや。前に泰徳が言ってたんだよ。吹奏楽をやる上で大事なのは表現力とコミュニケーションだって」
「泰徳くんが？」
「ああ。コミュニケーション取っておけばお互いに意見言いあったりしやすいからって。……去年の俺らはもっとよそよそしかったよな」
「まあな」
先斗も去年の今頃のことを思い返していたのだろう。少し苦笑いをして返す。
「いいじゃない」
そこでアマンダが笑顔で言った。
「今はナカヨシなんだもん。モーマンタイだよ」
「ってなんでそこで中国語？」
「確かに」
三人はお互いに笑いあった。
「バスパートのみなさ～ん」
そこでドアが開き、唯が顔を出す。
「そろそろ午後の合奏の時間だよ～」
「え？」
時計を見ると、合奏開始１０分前だった。
「やべ！」
「早く戻らなきゃ！」
バスパートのメンバーはあわてて合奏の準備を始めるのだった。

「それじゃあ今から二曲を通してみて、コンクール曲をどっちにするかの投票を行います」
１時。バスパートもなんとか合奏に間に合い、コンクール曲の選曲が始まった。
「投票の対象は部員４９人と、先生、梶原先生、沢木先生、佐野くんの５３人だ。一票でも多ければそっちの曲にするからな。じゃあ、

『海の男たちの歌』から」
「はい！」
部員たちは返事をすると、すぐに『海男』（※1）の楽譜を開いた。

指揮棒が降りると、麻里が小豆のはいった笊を揺らす。波の音の再現だ。
そこで庄吾と潤がソリを吹く。
だんだんと盛り上がって行き、豪快にパーカッションがリズムを奏で、ホルンとユーフォニアムが対旋律を鳴らした。
テンポが上がり、クラリネットのメロディーが始まった。
いろいろな楽器が複雑な動きを奏でる中で、低音楽器も3連符が満載の旋律を吹いていたりする。
それが落ち着くと、現れてくるのが匠のソロだ。
朗々と匠が歌う中に、悟のクラベスが響く。
そしてそのソロは駿介のオーボエソロへとつながっていった。
ここはドソロ。先斗のピアノが入るまでは彼の音だけしかないのだ。
そのソロが終わるとまた匠のソロ。しかし今度はゆっくりと消えていく。
そこに突然現れるのがホルンソリ。4人はしっかりと鳴らす。
テンポが上がり、クラリネットの旋律がまた現れるが今度はトロンボーンが前に出てくる。
そして最初の強奏が響き、曲は終わりを告げた。

次に梁塵秘抄（りょうじんひしょう）。
木管のメロディーの下でトムトムが激しく鳴る。
それが落ち着くと、弥生とファゴットのゆかりのソリが始まった。
その下ではコントラバスの2人がD（レ）の音をしっかりと、しかし目立たないように弾いていた。

フルートソロが過ぎ、だんだんと盛り上がって行き、打楽器は大忙しだ。
一旦落ち着くが、また激しくなり、最後の四打で曲は終わった。

「それじゃあ開票します」
唯と庄吾が前に立って開票作業を行う。
練習をしていく中で気づいたこともあったのだろう。今回も大分票が割れている。
「梁塵秘抄、海男、海男、海男。以上です」
部員たちの分の開票が終わった。現在『梁塵秘抄』が２５票、『海の男たちの歌』が２４票だ。部員たちは一斉に京たちの方を向いた。
「そうだな。先生としては『海の男たちの歌』を推したいと思う。最初は『梁塵秘抄』がいいと思っていたが、木管が意外とさらえていたしな。ソロが多いからそこを生かせるだろう」
「私も同じよ。『海男』はみんなのいいところを生かせる曲だと思うわ」
「私は課題曲の『ブライアンの休日』で金管の負担が大きいから自由曲は木管主体の『梁塵秘抄』のがいいかと……」
それぞれ京、静香、正志が意見を言う。結果はまた同点。翔の意見で自由曲が決まる。
「……俺は『海の男たちの歌』がいいと思います。確かに金管は少しきついかもしれませんが、金管は経験者も多いですから、吹ききれます。それに中間部のソロは上手く演奏できたらかなりのプラスになると思います」
「それじゃあ、自由曲は『海の男たちの歌』ってことでいいでしょうか？」
「「はい！」」
唯が最終確認をすると、部室内には大きな返事と拍手が響いたのだった。

１４８話　突然のオファー

５月１９日（月）。
「あ～、疲れた……」
「今日は西村先生熱入ってたなぁ……」
先斗と耕一は練習を終えて帰るところだ。
老人ホームでの演奏会も一昨日無事終了し、今は六月の幼稚園での演奏会と、コンクールに向けた合奏が始まっている。
「あ、先兄」
「お、海斗」
東桜田駅前で海斗と会う。バンド仲間と一緒のようだ。
海斗は結局合唱部には入らず、今年創立された軽音部に入部した。現在は４人組バンドのボーカルとして練習を頑張っている。
「あ、海斗のお兄さん、こんばんは」
バンドのリーダーでギター担当の巻（まき）　浩二（こうじ）が先斗に挨拶する。
「あ、浩二。練習順調か？」
先斗と浩二は中学が一緒なので結構楽に話せる。
「はい。９月の文化祭の選曲もう始めてるんですよ。よかったら聞きに来てくださいね」
「ああ」
今年度から総体との兼ね合いも考えて文化祭は９月に体育祭と一緒に行われることとなった。文化祭が３日間、体育祭が４日目と、かなり長い祭りとなりそうだ。
「それじゃあまた明日」
「ああ。じゃあな」
しばらく話して、浩二と別れる。
「ただいま～」
「ええ！？　岡村さんが入院したぁ！？」

帰宅してドアを開けた瞬間、小百合の声が玄関に響いた。
「な、なんだ……？」
先斗が電話のほうを見ると、小百合が慌てた様子でメモを取っていた。
「え、手術するの？　それで今週末の定演に出れないと……。どうしよう、チューバは岡村さんと団長しかいないのに……。誰か代理立てた方が……。そうだ！」
小百合が受話器を置いて、先斗のほうを向く。
「あ、３人ともおかえり。先斗、今週末ってなにか用事ある？」
「え？　部活で母さん達の団体の定演を見に行く予定だけど……」
小百合は最近市民楽団に所属し始めた。高校時代の部活の先輩に会ったことでまた楽器をやりたいという思いが強くなったらしい。
「そう。……ねえ」
次の瞬間、小百合はとんでもないことを言いだした。
「うちの定演出てくれない！？」

「いやぁ、悪いね。岡村さんが盲腸になっちゃってね。急だけどよろしく頼むよ」
「は、はい」
翌日。先斗は小百合と一緒に『奏ウインドオーケストラ』の練習場所である公民館に来ていた。
桜田市内には今まで一般バンドが桜田東高校のＯＢバンドしかなかったのだが、この団体が昨年の４月に創設されたため、小百合のように他県から引っ越してきた人にも演奏の機会ができた。
小百合は今年の１月から、翔と陽乃は４月からこの楽団に所属している。
創立当時は人数不足、特にトランペットがいないことに困っていたようだが、小百合と陽乃が入ったことで楽曲の幅が広がったらしい。

「あ、団長の大西（おおにし）　智彦（ともひこ）です。俺もチューバ吹いてます。西掛さんから君のことは聞いてるよ。チューバはどれくらい吹いているのかな？」
「中学からなんで今年で5年目です」
「そうか。初見とか結構行ける？」
「あ、はい」
智彦は３０代後半くらいの穏やかな顔をした人だ。一昨年桜田市に引っ越してきた際に一般バンドがないことを知り、楽団の創立を決意したらしい。
「大西さん。そんなに嬉しそうにしてたら岡村さんいじけちゃいますよ」
そう言って笑うのは副団長の宮根（みやね）　真由子（まゆこ）。彼女はオーボエを吹いている。
「岡村さんはこんぐらいじゃいじけないさ。昨日見舞いに行って西掛くんのこと話したら逆に喜んでたぞ？　あ、それで今回の楽曲がこれ。合奏は明後日なんだけど大丈夫かな？」
先斗はプログラムを見せてもらった。

1部　クラシックステージ
・ウィナーズ～吹奏楽のための行進曲／諏訪雅彦作曲
・エアロダイナミクス／　D．Rギリングハム作曲
・吹奏楽のための抒情的「祭」／伊藤康英作曲
・ルーマニア民族舞曲／ベラ・バルトーク作曲・後藤洋編曲

2部　ポップスステージ
・ホール・ニュー・ワールド
・アニメメドレー　久石譲作品集
・ジェラート・コン・カフェ
・ジャパニーズ・グラフィティ？

「あ、それで、アンコールでこの2曲をやるからよろしく」
そう言って、智彦は2枚の楽譜を渡してきた。
「……マジッすか」
おもわず先斗は声に出してしまった。
「あら、あんたこっちは去年やったし、こっちも中学の文化祭でやったでしょ？　大丈夫よ」
「……頑張るよ」
小百合の言葉に先斗はちょっとため息をつくのだった。

１４９話　それぞれの場所で

土曜日。
午前中に先斗は小百合と一緒に桜田市民ホールに来ていた。
今回は楽団の楽器を借りるため、先斗の所持品はマウスピースと楽譜のみだ。
演奏会は午後１時半開場、２時に開演となっている。
「それにしても……。先斗、あんた譜読み早いわねぇ……」
小百合が感心するように呟く。
「そう？」
先斗はなんともないように返すが、確かに譜読みの速度は大分早い。なにしろ１０曲を５日で仕上げたのだ。
「ま、とりあえず母さんは復帰初試合だろ？　頑張ってよ」
「分かってるわよ。でも陽乃ちゃんに一部の１ｓｔ全部頼んじゃったけどよかったのかしら……」
小百合は少し申し訳なさそうに言う。
奏ウインドオーケストラのトランペット奏者は４人。
そのうち、去年楽団が設立されてから吹奏楽を始めた奏者が１人、小百合のようにブランクのある奏者が２人。そのため、今回は陽乃が１ｓｔを多く担当することになったのだ。
「朝倉先輩なら大丈夫だよ。それより母さんはアンコール心配しときなよ。そのために前半温存してるんだから」
先斗はそう言って楽屋口から中に入っていく。
「……分かったわよ」
最近口でもあまり負けなくなってきた先斗を見て、小百合は少し寂しく感じるのだった。
「それじゃあ、ゲネプロも終わったし、本番３０分前までは休憩とします」

指揮者で桜田北中学校の教員である、富永（とみなが）　順平（じゅんぺい）が満足そうに指揮棒を降ろした。
順平は前任校の桜田四中を中国大会に導いた人物である。しかし今回の転任で吹奏楽部のない桜田北中学校に勤務することになったため、指揮を振る場所がなくなっていた。
それを知った智彦がスカウトしたのである。

先斗は楽器を降ろし、ほっと息をついた。今から昼ご飯だ。先斗はコンビニかどこかで買ってすまそうと思っていた。
「西掛くん。飯行こか！」
翔と陽乃が先斗を呼ぶ。
「あ、はい！」
先斗は2人のほうに近づく。
本番前なので3人ともスーツ姿。
先斗はスーツを持っていなかったので今回は父親のスーツを借りている。正直不格好だ。
一方、翔と陽乃はきっちりとスーツを着こなしていた。
「佐野さんってなに着てもちゃんと着こなしますね……」
「そうか？　……いこか」
翔は軽く流すと、歩き始める。
「翔、照れてる」
陽乃はそれを見て笑いながらその後ろについていく。
（やっぱこのカップル似合うなぁ……）
先斗は2人を見て、しみじみそう思った。
「西掛く～ん！」
足が止まってしまっていたのだろうか。翔たちが振り向いて先斗を呼ぶ。
「あ、はい！」
先斗は頭を軽く振って2人の元に歩いて行くのだった。

「それにしても、先斗にオファーとはね」
唯が呟く。
その頃、桜田中央高校の音楽室には唯や奈津美、慶太や利明などサックスパートのメンバーが集まっていた。今日は午後1時に桜田市民ホールに集合なのだが、サックスパートはパート練習のために午前中から集まっていたのだ。
「まあ、急だしね。身内ぐらいしか頼めないよ。西掛くんも大変ね」
そう言って奈津美が笑う。
「でも先斗めちゃくちゃいきいきしてたよ。先斗は忙しい方が好きみたい」
「そうなんだ？　なら夏はもっと楽しそうにしてるかもね」
「そうだね……。あれ？　慶太くんは？」
ふと見回すと、慶太の姿がない。
「どこ行ったんだろ？　ねえ、利明くん。慶太くん知らない？」
「え？　さっき出て行きましたよ」
「そう……。トイレかな？」
「あ、俺もちょっとトイレ……」
そう言って清一郎は部屋を出た。

「なあ、慶太」
（あれ？）
トイレからの帰り道、清一郎は慶太を呼ぶ声を聞いて立ち止まる。
「あ、慶太先輩……」
近くの窓から体育館に続く通路を見ると、運動部の男子2人と慶太が立っていた。
しかし清一郎には声がかけられなかった。
あまり聞きたくないことを聞いてしまったからだった……。

１４９話　それぞれの場所で（後書き）

なんと、１００，０００アクセスを突破しました！
ありがとうございます！

１５０話　仲間がいるから

午後１時。桜田中央高校の吹奏楽部員たちは桜田市民ホールに集まっていた。
「それじゃあ、今からチケットをセクションリーダーに渡すから、それを受け取ったら中に入って演奏を聞いてくれ」
京はそう言ってチケットを唯に渡す。
「はい、奈津美」
「ありがとう」
そして唯は各セクションにチケットを渡していく。
サックスのセクションリーダーの奈津美は、そのチケットをセクションのメンバーに配った。
「はい、葵ちゃん」
「ありがとうございます」
「利明くん」
「ありがとうございます！」
「はい、慶太くん」
「ども……」
「清一郎くんも」
「あざっす……」
「あれ？　２人元気ないね。どうしたの？」
「いや、別に……」
「なんでもないです……」
そういう２人に、奈津美はそれ以上何も聞くことができない。
「……行くか」
「……はい」
慶太と清一郎はそのまま中に入っていってしまう。
「あ、待ってよ！」
そしてその後ろを残りのメンバーはあわてて追いかけた。

トランペットパートのメンバーもホールの中に入る。
「やっぱここは広いな……」
里穂は去年初めてここで演奏したときのことを思い出していた。
当時はホールの大きさに圧倒されていた気がする。
「先輩。プログラムもらってきましたよ」
耕一が里穂にプログラムを手渡してきた。
「ありがとう」
里穂はそっとプログラムを開く。

>i12345―1743<

「結構急いで作ったみたいですね」
耕一はメンバー紹介を見て笑った。
先斗の名前がテープで張り直されていたのだ。
「まあ、先斗くんが出演するの決まったの5日前だし、慌ただしかったんでしょ」
そう言って名前を見ていくと、里穂は結構知った苗字が多いことに気付いた。
「あれ？　小森ってもしかして……」
「俺の姉ちゃんだよ」
そう言って現れたのは桜田工業高校の小森　徹だった。
「わぁ、徹！　久々じゃん！」
庄吾が嬉しそうな声を上げる。
「お、庄吾。相変わらずでっけえな！」

「うるせえよ。じゃあ今日は姉さんの舞台見に来たんだ」
「いや。先輩たちがメインかな」
「先輩？」
「ああ。うちの瑞樹先輩と、農林の村松先輩がこの楽団入ってるんだ」
「そうなんだ……」
「うん、あ、海里！　こっち来いよ！　庄吾たちいるぞ！」
「え？　マジ？」
その声に呼ばれて、桜田農林高校の内田　海里がやってくる。
「海里！」
「よ。庄吾に今井さん。１年たくさん入ったか？」
「ああ。工業と農林はどうだ？」
「工業は１０人。ペットにも１年生入ったんだ～！」
「農林は９人。なんとかチューバとパーカスに１年入ったけど先輩抜けたら大分ヤバそう……」
徹と海里がそれぞれ答える。
「で、中央は何人なんだよ？　トランペットに新入生が３人いるってことは、２０人くらいは入ったんだろ？」
トランペットパートのメンツを見て、徹は聞く。
「ああ。３２人」
「「へ？」」
２人が一瞬でフリーズする。
「……１、２年でだよね？」
「いや、１、２年では４９人だな」
「「えええええ！？」」
それを聞いて２人は叫んだ。
「徹、うるさいよ！」

ペチン！

その後ろからなずなが現れ、叫んでいた徹の頭をはたく。
「姐御！」
庄吾は嬉しそうになずなに声をかける。
「あ、庄吾！　1年たくさん入ってよかったね。副部長として頑張りなさいよ？」
「はい！」
笑顔でそういうなずなに、庄吾ははっきりと返事を返した。
「そろそろ始まるから入るよ！　徹、おいで！」
なずなはそういって徹を連れて行く。
（怖えぇ……）
そしてその場にいる全員がその様子を見てそう思ったのだった。

そのころ、舞台裏で先斗たちは待機していた。
「佐野さん、落ち着いてますね」
翔を見て羨ましそうにしている先斗。
普段はしっかり練習をしてから乗る舞台。しかし今回は5日しか練習していないため、まだ不安要素が残っている。小百合には強がってみたが、やはり今回は怖い。
「翔は小4からずーっとサックス一筋だからね。さすがに舞台慣れしてるのよ」
そういう陽乃も結構リラックスした表情だ。
「そういえば朝倉さんは高校から吹奏楽を始めたんですよね？　初めとか緊張しました？」
「したした。2回ほど過呼吸になっちゃったくらい」
「え？」
普段明るい陽乃からは考えられない展開に、先斗は驚く。
「じゃあ、なんで今はそんなに落ち着いていられるんですか？」
「そうだね～。ステージの上に仲間がいるからかな」
「……仲間」
「うん。横には小針さんも西掛さんも大地くんもいるし、翔も前の

方にいる。だから安心して吹けるんだよ」
「……」
そこで先斗は普段の演奏会を思い浮かべてみた。
周りにはバスパートの匠、竜一、貴弘、譲、アマンダ、ひとみがいて、前には木管低音のゆかり、慶太、成美がいる。そしてその前には唯がいる。
だから安心して演奏できる。
「確かに今回は回りに普段の仲間はいないけどさ。今回は私たちを仲間だと思って吹いてくれたらうれしいな」
そう言って陽乃はにっこりと笑って見せた。
「開演のベル鳴るぞ！　入場の準備してくれ！」
智彦がメンバーたちに告げる。
先斗は智彦の後ろに並んだ。
「大丈夫か？」
智彦は少し心配そうに尋ねる。
さっきまでの様子を見ていたのだろうか。
「はい。大丈夫です！」
それに先斗ははっきりと返事を返すのだった。

１５１話　年を重ねて

「それにしても、初めての定期演奏会か」
龍也はふと呟いた。

午後１時２５分。
開演まであと５分。部員たちは着席を完了して、それぞれ演奏会の開始を待っていた。
「どうしたの？　珍しく感慨深そうだけど」
隣にいた拓也が尋ねる。
「いや、桜央でも定演やりたいなって思ってさ」
「あ～。確かに人数的にもできそうですね」
その反対隣りにいたピッコロ担当の糸川（いとがわ）　剛（つよし）も賛同する。
「たぶん１年生の中にも定演やりたいって子はたくさんいると思いますよ」
その前にいた駿介が振り向いて答える。
「だってさ！　副部長、どう思う？」
拓也の声に龍也が後ろを振り向くと、そこには庄吾を初めとする、トランペットのメンバーが座っていた。
「もちろんやりたい。だから今回は俺、これを持って来たんだ」
そう言って、庄吾はＡ５サイズのミニノートと、ペンを見せた。
そこには今まで行った演奏会だけではなく、島根県内で行われたさまざまな演奏会の流れ、楽曲、奏者の人数などが書かれていた。
「流れと楽曲は分かるけど、奏者の人数はなんでメモってるんだ？」
「まあ、いろいろ考えがあるんだよ。そろそろデータの収集もできてきたし、そろそろみんなの意見も聞いてみたいから、月曜のミーティングで話すよ」
「楽しみにしてる」
意味深な言い方に、龍也はニヤリと笑った。

その時、ブザーが鳴り、客席が暗くなった。
「お、始まるぞ！」
５人はすぐに前を向いた。

演奏者たちが入場する。
薄暗い中、指揮者が指揮台に立った。
（……暗いまま演奏するのか？）
龍也は不審に思いつつも舞台を見つめる。
指揮者が指揮棒を降ろした。

その瞬間、スポットライトに陽乃が照らされ、艶やかなソロを吹き始めたのだ。
（おお〜！！）
トランペットセクションの５人、特に庄吾はそれを見て途端にテンションをあげる。
その次に照らされたのは真由子のオーボエ。
そこから木管の旋律が始まると、ライトが少しだけ明るくなった。
まだ薄暗い中で演奏が続いていく。
木管の柔らかな旋律の間を陽乃のトランペットの音色がこだまする。
トロンボーンが響いた瞬間、ライトが一気に点灯した。
ステージが明るくなり、トロンボーンのベルがキラリと光る。
そのトロンボーンが細かい旋律を吹きこなすと、トロンボーンセクションの４人は驚いた表情でそれを見つめた。
そこでテンポが上がり、ホルンがメロディーに回る。
そのメロディーはトランペット、トロンボーンに順々に受け継がれていく。
そして様々な動きが絡まりあい、頂点に達したと思った瞬間、テンポが落ち、金管が和音を決める。
リタルダントがかかり、緩やかに再現部に突入した。

陽乃がソロを吹くと、再びメロディーが流れだすが、今度は途中で真由子のソロに変わり、曲は最後へと向かっていく。
ティンパニが一発入り、金管の細かいパッセージ。
低音とティンパニによって、『ウィナーズ～吹奏楽のための行進曲』は幕を閉じた。

「……すげえ」
庄吾は素直に彼らの演奏に感動していた。確かに中高校生の若々しさはないが、年を重ねたことによる深さがその演奏にはあった。
「あ、メモ……」
庄吾はふと、ノートの存在を思い出し、せっせとノートに演奏会の様子を綴った。

演奏会は滞りなく進んでいく。
演奏は一部のラスト、『ルーマニア民族舞曲』に移った。
「この曲ってクラリネットアンサンブルにもあったよね？」
なずなが詩織に尋ねる。
「うん。あたしも中2の時演奏したよ」
そんなことを話しているうちに、演奏が始まった。
この曲は、バルトーク・ベラによって作曲され、6つの部分から構成されている。
初めはピアノ曲として作曲され、後にバルトーク本人によって小管弦楽用に編曲された。

低音の荘厳な和音と、ミュートトランペットの音色が鳴り響く。
クラリネットの低音域のメロディーが始まる。途中からフルートとミュートトランペットが加わり、また低音の和音が響く。
今度はオーボエとフルートのメロディ。途中からオーボエのみが旋律を担当する。
この楽団のオーボエは真由子を入れて2人。

オーボエはギネスで認定されるほど演奏するのが難しい楽器と言われており、音程をとるのが難しい。　しかし2人はまるで1本の楽器から音が発せられているかのように錯覚するほどピッタリと音を合わせてきていた。

雰囲気が変わる。クラリネットとバスクラリネットがオクターブ違いで旋律を吹く。

二回目はそれにトランペット、フルート、ピッコロ、グロッケンが加わり、旋律は静かに終わった。

さらに雰囲気は妖しく変わっていく。

トロンボーンとトランペットの和音の上でオーボエが装飾音符が多用された旋律を奏でる。

まさに「妖しい」という言葉が似合う。

そしてそれにバスーンがオクターブ下で加わり、妖しさはどんどん増していく。

フルートとバスーンのソリ。

一瞬の間の後にビブラフォンとホルンが鳴り響き、ピッコロが入り、すぐに消えた。

トロンボーンの和音が響いた。そこに現れるのはテナーサックスのソロ。奈津美と利明はそれをじっと見つめた。

ゆかりのサッシンとともに曲は盛り上がっていく。木管中心の旋律の裏で瑞樹のチャイムが荘厳に響いた。それが落ち着くと、最後にピッコロのソロが囁くように奏でられた。

急にテンポが上がり、木管の細かい旋律が始まる。

二回目は中低音がそのメロディーを担当した。

またメロディーが木管に戻り、トランペットが合いの手を入れる。

タンバリンが加わると曲はさらに強烈になっていく。

ゆかりがタンバリンに持ち替えて裏打ちを刻む。
トロンボーンがグリッサンドを含んだ旋律を奏でた。

曲はフィナーレに向かう。
金管が打ち込みをしてロングトーンに入った。木管が上向系の連符を吹きあげ、それに加わる。
最後にバスドラムが一発鳴った。

「……すごい」
なずなと詩織は拍手をするのも忘れて舞台を見つめていた。
一昨年、自分が演奏したのとは全く違うレベルの演奏。
一般団体のレベルの高さを改めて認識させられた。
「あたしたちもあのレベルの演奏できるようになりたいな」
「……頑張らなくちゃね」
「うん」
2人はそう思いながら、2部の開演を待つのだった。

１５２話　情熱の列車

２部も順調に進み、プログラム最後の曲の、『ジャパニーズ・グラフィティ？？』を残すのみとなった。
これまでの三曲も見事に成功し、会場のテンションは上がり始めている。

「あ～、楽しみだな！」
「庄吾、さっきからずっと言ってる」
テンションがあがっている庄吾の横で里穂は少しあきれた様子だ。
「い～から、聞いてみろよ。本気でヤバいから」
「はいはい」
そういって、里穂は前を向いた。

真由子が前に立ち、アナウンスを入れる。
「とうとうプログラム最後の曲となってしまいました。２部、最後の曲は『ジャパニーズ・グラフィティ？？「刑事ドラマ・テーマ集」』です。この曲はメドレーとなっており、「太陽にほえろ！」メインテーマ、「Ｇメン'７５」のテーマ、「はぐれ刑事純情派」メインタイトル、「西部警察ＰａｒｔＩＩ」からワンダフル・ガイズと、刑事ドラマ好きの方にはたまらない楽曲が満載となっています。ソリストたちもこの曲はかなりがんばって練習しておりましたので、ご期待ください」
真由子は礼をして自席に戻った。

前奏からトランペットの高音。陽乃はほぼずっとファーストを吹いているはずなのにバテが見られない。
それが静まるとオーボエとフルートが繋ぎを吹き、ドラムのフィルインとともにテンポが上がった。

シロフォンと木管の刻みから『「太陽にほえろ！」メインテーマ』が始まった。
前奏が終わると、翔がさっと立ち上がりソロを吹き始める。
（佐野先輩かっこいい！）
アルトサックスの３人は翔をじっと見つめた。
（……ちょっと、恥ずかしいな）
翔もその視線に気づいたが、気にせずにソロに集中する。
二回目は木管のメロディーに変わるが、途中からまた翔のソロ。
この部分はアルトサックスの独壇場といってもいいだろう。
さらにボンゴとカウベルがソロに華を添えている。
冒頭のシロフォンが帰ってくる。翔がアドリブソロを入れ始めると、３人はあまりの凄さに口をポカンと開けてしまっていた。
続いて、『「Ｇメン'７５」のテーマ』に入る。
中低音がひたすら刻みを吹く上で、木管楽器がメロディーを奏でる。
そこに出てきたのはトランペットのソロ。
（あれ？）
耕一がトランペットの方を見ると、なんとソロを吹いているのは中学生くらいの男の子だった。
そんなに音が高いわけではないが、しっかりフレーズを考えて吹かないと棒吹きになってしまうこの部分。しかし彼は渋い音色を響かせていた。
（すげぇ……）
そんな彼に、耕一は心から感心していた。
一方、バスパートのメンバーはその裏で流れるユーフォニウムのパッセージに聞き惚れていた。
トランペットのソロを邪魔せず、しかし存在感のある対旋律だ。
ドラムが入り、テンポが上がる。木管がまたメロディーを奏で、直管楽器のバッキングが入る。

その頃から、庄吾が急にニコニコしはじめた。
「どうしたのよ？」
あまりにも気になり、里穂が庄吾に小声で尋ねる。
「い～から、聞いてりゃわかる」
しかし庄吾はそれだけ言って、ステージをまた見つめた。
ステージの上では、真由子のソロが始まっている。
しっとりと吹く裏で、ユーフォニウムの対旋律が綺麗に響く。
急に木管の上向系の連符が飛び込んできた。
次の瞬間、トランペットセクションだけでなく、金管のメンバー全員が口をポカンと開いた。
陽乃が立ち上がり、高音のソロをかましたのだ。
最高音はＨｉｇｈＦ。庄吾がなんとか音として出せるレベルの音だ。
しかし陽乃はその音をリラックスして出していた。
ソロが終わると、拍手がいっせいに鳴り響く。
陽乃は嬉しそうに礼をして席に着いた。
そしてそのまま、「西部警察ＰａｒｔＩＩ」の『ワンダフル・ガイズ』に移る。
木管の旋律の裏で金管の激しいバッキングが鳴り響き、続いてトランペットのメロディー。
今度はフルートの男性が立ち上がり、軽やかなソロを吹き始めた。
すると今度は木管のメンバーがそれにみとれている。
トランペットの高音の旋律。もう最後の曲だからか、陽乃は気にせず、豪快に吹き切る。
その場にいる全員が圧倒されている中、曲は終わった。

一瞬の沈黙。

しかし次の瞬間、会場から割れんばかりの拍手が鳴り響いた。
「アンコール！　アンコール！」

そしてコールが会場に広がっていく。
順平はにこりと笑って、奏者たちに指示を出した。

スネアドラムとグロッケン、そしてチャイムが鳴り響く。
続いてオーボエとフルートの掛け合いが始まる。
さらに木管やトランペットが加わり、かなり混在した状態になった。時折、中低音が入る。
しかし、各パートがそれぞれ聞こえてくるため、なぜか心地よい。
不思議な雰囲気を保ったまま、曲は中間部に入った。
そこに入ってきたのはサックスセクション。少し妖しげな旋律を吹きこなす。
冒頭の打楽器アンサンブルが戻ってくる。
そして最後は唐突に終わった。
会場はまた拍手に包まれる。

次の瞬間。
ステージのライトが急に消えた。
「え？」
唯が思わず声を出す。
不意にスポットライトが翔を照らす。
翔はステージ前方に歩き出し、深く息を吸うと、そっと音を奏で始めた。
いつの間に持ち替えたのか、その手にはソプラノサックスが握られている。
そして翔の後ろでサックスセクションの3人がソロを支えた。
スポットライトが今度は打楽器に向いた。
ハイハットとシェーカーがリズムを刻み始める。そこでティンバレスが堅い音のソロを叩く。
そこに木管の伴奏が加わるとだんだん雰囲気が情熱的になっていき、それとともにライトが明るくなっていく。

ドラムのリムショットがさらにそれを加速させ、気づけば会場の全員が手拍子をし始めていた。
ドラムのフィルイン。『情熱大陸』の始まりだ。
トランペットが勢いよく会場に音を飛ばす。
それに木管は負けじとついてくるため、雰囲気はまさに真夏。勢いは止まらない。
二回旋律が繰り返されると、今度は小百合が前に出てきた。
そして艶やかなソロを吹き始めたのだ。
ブランクはあるとはいえ、トランペット歴１５年以上の小百合。実はパートのメンバーの中で一番経験は長い。
庄吾は小百合の音を、真剣な顔で聞いている。
小百合がトランペットをやっていたことは知っていたが、その音色を聞くのは始めてだった。
ひき続いてフルートソロ。
今度はフルートの男性が立ちあがり、しっとりとソロを聴かせる。
（あれ……？）
貴弘はその人の顔を見て、首をかしげる。
会ったことがないはずなのに見覚えがあったのだ。

そんなことを考えているうちに曲は終わりへ向かっていく。
トランペットが高音でメロディーを奏でる中でフルートがアドリブソロを入れていく。
そしてアツイまま、『情熱大陸』は終わりを迎えたのだった。

１５２話　情熱の列車（後書き）

今回のタイトルは、アンコール曲の『列車で行こう』と、『情熱大陸』を合わせてみました。

153話　飲みましょう！

「カンパ～イ！」
本番が無事に終了し、『奏ウインドオーケストラ』のメンバーは近くの居酒屋に集合していた。
「お疲れさん！　西掛くんやっぱり毎日吹いているだけあるね～。すごく上手だった！」
智彦が少し顔を赤くしながら先斗に話しかけてくる。
「いえ、そんな」
「まあ、飲んで飲んで！　明日は休みだし！」
「団長！　西掛くん高校生です！」
真由子がジョッキを先斗に差し出した智彦に注意した。
「ごめんね。団長普段は穏やかなんだけど飲むとリミッターぶっ飛んじゃうのよ」
「へぇ……」
先斗はオレンジジュースを飲みつつ、相槌を返した。

飲み会も進み、だんだんといくつかのグループに別れて話し始める。
先斗は陽乃と大地と話をしていた。
大地は中学三年生。吹奏楽部には入っていないがこの団体が創立された時からトランペットを始めたそうだ。
一方、翔はサックスのメンバーの方で楽しそうに話していた。

「そういえば、西掛くんは卒業したらどうするつもりなの？」
陽乃が先斗に話題を振る。
「とりあえず大学には行きたいなあとは思ってますけど……」
「へえ……。唯ちゃんは？」
「あいつは外国語……英語だけじゃなくていろいろな国の言語や文

化を学びたい、いろいろな価値観を持った人と話がしたいって言ってました。将来は国際系の仕事がしたいらしいです」
「へぇ～。しっかりした考え持ってるね。あたしが高二の時は全然方向性決まってなかったからなぁ……」
陽乃は昔を思い出すかのように遠い目をした。
「朝倉さん」
陽乃に先斗が声をかけた。
「ん？　なに？」
「朝倉さんっていつ自分の進路決めました？」
「そうだなぁ……。３年になったあたりで、翔の志望校聞いて、それから現実的になっていったかな。でも一昨年の今頃はあまり考えてなかったかも」
「……そうですか」
最近、先斗は本当に理系に進んでよかったのか迷っていた。
理系クラスでは数学の授業が週９時間になった。さらに、化学と生物の授業も始まった。
しかし、先斗は化学が苦手だった。
理科総合Ａの時ですら、化学分野はだいぶボロボロだったのだ。もちろん化学になってから余計に分からなくなり、今回の中間テストは４７点と、赤点に近い結果だった。
得意だった数学も？Ｂに入ってから微妙になった。特にベクトルはまだ平面ベクトルなのにお手上げな状況だ。
「でも私はみんながすごいと思うな」
「どうしてですか？」
「私たちの学校は先輩がいるからいろいろアドバイスもらったりできたんだけど、桜央は西掛くんたちが一期生な訳だから全部自分で考えないといけなかったんでしょう？　でもみんな自分で文理選択したんだもん。尊敬しちゃうな」
陽乃はそう言って微笑む。
「ああぁ！」

いきなり、智彦が叫んだ。
「どうしたんです？　団長？」
真由子が尋ねる。
「…ＳＹＭＰＨＯＮＩＣのＯが足りない…」
そう言ってパンフレットの一部分を指差す智彦。
先斗はそっとパンフレットを覗き込んでみた。
確かにＨとＮの間のＯがなく、ＳＹＭＰＨＮＩＣになってしまっている。

サッと場が静まる。

「ワハハハハハ！」
しかし次の瞬間、爆発したかのような笑いが店に響いた。
「団長！　いまさらですか！」
そういう真由子も笑っている。
「まあ、俺たちのバンドらしくていいだろ。しかしこんなとこで抜けるとはなあ！」
「確かに！」
大笑いして言い合う大人たちを見て、先斗も思わず笑ってしまう。
「よし、もう一回乾杯だ！」
そんな変なテンションのまま、智彦は翔にジョッキを渡し、乾杯する。
「ああ！」
そしてその勢いのまま、翔はジョッキを空けてしまった。
その様子を見て陽乃は声を上げる。
「ど、どうしたんですか？」
その声に先斗は思わず陽乃のほうを見た。
しかし次の瞬間、翔の顔が真っ赤になる。
「飲ませちゃった……」

そして翔はその場にパッタリ倒れてしまった。

「全く！　いくら大学生とはいえ翔くんは未成年なんですよ！　もしこれで翔くんに何かあったらどうするんですか！」

真由子が智彦に説教する中、陽乃と先斗と大地は翔の看病をしていた。

「佐野さんってお酒弱いんですね……」

「うん。高校の時、うちにご飯食べに来たんだけど、その時急いで食べすぎてむせちゃったのね。それで目の前にあったお父さんのビールをお茶と間違えて飲んで真っ赤になって倒れちゃったの。それくらい弱いわ」

「……なるほど」

「で、どうしようか。翔くんを送って行かなくちゃいけない……。陽乃ちゃん。アパートはここからどれくらい？」

説教から解放された智彦が陽乃に尋ねる。

「歩いて２０分くらいです」

「なら車のほうがいいな……。この中で車出せる人いる？」

「あ、俺飲んでないんで行きます」

そう言って手を挙げたのはフルートの倉田（くらた）　正一（しょういち）だった。

正一も島根大学の教育学部の３年生で翔の先輩でもある。

「１人じゃ運ぶの大変だから……。陽乃ちゃんともう一人誰か付いてきてくれますか？」

「あ、じゃあ俺行きます」

先斗が手を挙げた。

「よし。じゃあ西掛さん。先斗くん借りていきます。帰りは送りますから」

「分かったわ。気をつけて」

小百合は酒に強いのでしっかりと返事を返す。

「じゃあ、行こうか」

「はい」

正一はそう言って翔を背負うと、陽乃と先斗を連れて居酒屋を出て行った。

１５４話　目標の喪失

正一は翔の住むアパートの前に車を停めた。
翔のアパートは桜田中央駅から少し離れた学生街にあった。学生街ということもあり、アパートの近くにも飲み会の喧騒が聞こえてくる。
「よいしょっと……」
正一は翔を背負って階段を登っていく。先斗と陽乃もその後をついて行った。

「陽乃ちゃん。翔くんの部屋何号室だい？」
「あ、２０７です」
そう言って、鞄から鍵を取り出す陽乃。
「え？　まさか同棲してるんですか？」
先斗が少し慌てた様子で尋ねると、
「違う違う。合い鍵持ってるのよ。翔、掃除苦手だからたまに見に行かないとグチャグチャなんだもん」
と言って笑ってみせた。

ドアを開ける。
「あー！　またゴミ捨ててない……」
入り口のゴミ袋を見て呟く陽乃。
翔の部屋は６畳のフローリングにキッチンがついた１Ｋ。まだ引っ越してきて１カ月ほどなので部屋にはベットと勉強机に本棚、そしてパソコンくらいしかない。
勉強机には２枚の写真が飾られている。
１枚は高校のサックスセクションのメンバー、もう１枚は同期で撮った写真のようだ。陽乃と翔の他にも、この間の自由演奏会で会った雪子や由美子も写っている。

「陽乃ちゃん、まるで翔くんのお母さんみたいだな」
苦笑いしながら正一は翔をベットに横たえた。
翔の顔色は大分戻ってきていた。これなら明日には元に戻っているだろう。
「服はそのままでいいか。陽乃ちゃん、明日の朝様子見にきてあげてくれるか？」
「あ、はい。もちろんです」
「じゃあ帰ろうか。陽乃ちゃんは近くか？」
「あ、はい。だからひとりで大丈夫です」
「よし。じゃあ西掛くんは送っていくよ」
「あ、はい」
先斗は正一の車に乗り込んだ。

「介抱手慣れてましたね」
車が走り出してしばらくしてから先斗は正一に話しかけた。
「ああ。俺一応大学のサークルの幹事やってるからさ。どうしても後輩の面倒見なくちゃいけなくなるわけよ。佐野くんはあまり強くないみたいだし、今度から目をかけてあげないとな」
「へえ……」
高校とは全く違う世界の話に先斗はただただ唖然とするばかりだ。
「うちの団体はどうだったかい？」
「一人一人の技術が高くて驚きました。一般団体って週1くらいしか練習できないから技術をキープするくらいしかできないって聞いてましたから……」
「俺の場合は個人練習が大学でできるからね。でも他の人たちもいろいろなところで個人練習の場は設けてると思うよ。特に島根は田舎だから吹けるところは多いし」
「確かに」
そう言って先斗は少し笑った。

「うちの妹もよく外にチューバ持ち出して吹いてたもんだ」
それを聞いて、先斗は正一の名字を思いだした。
「倉田さん。もしかして妹さんの名前って紗枝さんですか？」
「え？　どうして……。もしかして先斗くん一中出身かい？」
「はい。紗枝先輩の２つ下です」
「やっぱりな。紗枝が前話してくれたよ。後輩の上達が早いって」
「ホントですか？」
「ああ」
それを聞いて先斗は中学時代を思い出していた。
３年生の時はいろいろゴタゴタがあったが、１，２年生の時の部活は楽しかった。
倉田（くらた）　紗枝（さえ）は先斗の中学時代のチューバの先輩だ。
紗枝は優しく、根気強く指導をしてくれた。
だから先斗もそれに習って貴弘や譲の指導をしている。
「紗枝先輩元気ですか？　いま大学１年生ですよね」
「……ああ。今は九州の私大に行ってる」
「高校は音科でしたよね。じゃあ音大ですか？」
「……いや。今は経済学部に行ってる。別のサークルに入って楽器はやってない」
「え……」

沈黙が続く。
しばらくしてから正一はポツリポツリと話し始めた。
「あいつな、伸び悩んでいたんだ。３年の時には定演のメイン曲のソロを後輩に取られてしまって、すごく落ち込んでた」
「……」
「大学が決まってから楽器続けないのかって聞いてみたんだが、そしたらもうチューバは卒業ってあいつは言ったよ」
「……」

それから先斗は家に着くまで何もしゃべらなかった。

先斗の家の前まで着く。

「……ありがとうございました」

「いや。翔くん運ぶの手伝ってくれてありがとうな。もし良かったらまた一緒に演奏しような」

「……機会があったら」

正一はそう言うが、先斗は今はそれを考える気持ちになれなかったのでそう返しておいた。

「それじゃあ、またな」

正一の車が走っていくのを、先斗はじっと見えなくなるまで見つめていた。

１５５話　突然の提出

５月２６日（月）。
今日はミーティングだ。
葵と舞は部室に向かって歩いていた。

「今日の議題何かな？　庄吾先輩から重大発表があるって噂だけど」
「たぶん、定演のことだと思うよ。一昨日の演奏会前にちらっと話してくれたし」
「ホント！？　定演やるならあたしもっと練習頑張っちゃう！」
「あたしも～！」
そんなことを話しつつ、部室に着く。舞はドアを開けようとする。
「……そんな」

しかし、弥生の深刻そうな声が聞こえたため、ドアに手をかけた状態で動きを止めた。
「……どうしたの？」
「静かに」
葵が心配そうに尋ねるが、舞はそれを止め、ドアにそっと耳を当てた。葵は戸の少し開いたすきまから中を覗き込む。
中には先斗と匠、唯と弥生がいた。

「……今日西村先生に提出されたらしいわ」
「でも教室じゃぜんぜんそんなそぶり見せなかったんでしょ！？」
唯に詰め寄る弥生。
「いつもより元気がないとは思ったけど……」
「匠くんは？」
「すまん、気づかなかった……」
そう言って悔しそうな顔をする匠。

「でも水臭いよ！　あたしたちになにも言ってくれないなんて……」
「……とにかく今日のミーティングは中止だな。こんな状態で定演の話をしたって盛り上がる訳がない」
先斗が弥生の言葉をさえぎり、淡々と告げる。
「でもこのことはどう説明する？」
「……少なくともサックスセクションのメンバーには伝えないといけないな。バリサクが抜けるのはかなり大きいし」
「葵！？」
それを聞いた瞬間、葵はドアを大きな音を立てて開けて中に駆け込む。

「葵ちゃん……」
「舞……」
唯たちが驚く中、葵はそのまま先斗に詰め寄る。
「バリサクが抜けるってどういうことですか！？　慶太先輩に何かあったんですか！？」
「……言っちゃっていいか？」
唯に確認を取る先斗。
「……うん」
それを聞くと、先斗は一つ息をつく。そして、
「慶太が休部届を出したんだよ」
「……そんな」
そう淡々と告げた。

ミーティングの時間となり部員たちは第二音楽室に集まる。
普段は部長の唯と副部長の庄吾が前に出て連絡をするのだが、今日は庄吾がいなかった。
部員たちはそれを見て少し戸惑っている。
「……今日のミーティングは中止とします」

唯がそう告げると、場がざわめく。
その時、千秋が手をピンとあげた。
「駒沢さん。なんですか？」
「進藤先輩が休部届出したってホントですか？」
その瞬間、ざわめきが一気に広がる。
「静かに！」
唯が大声で叫ぶが、逆にざわめきは大きくなっていく。

「静かにしろ！」
優樹が少しドスのきいた声で叫ぶと、場は鎮まった。
「……駒沢。続き」
「……事実なんですか」
「……そうよ」
唯がそう言うと、全員が俯いた。

しばらく沈黙が続く。
「……指示出すね。今日はミーティングがなくなったので個人練習とパート練習に当ててください。じゃあ解散」
しかし誰も動き出さない。
「……解散」
唯がもう一度言うと、部員たちはゆっくりと動き始めた。

サックスセクションのメンバーも練習教室に移動した。
唯は京のところに行っているためいない。
「……」
「……」
全員が楽器を出さずに黙り込んでいる。
「……まさか慶太先輩が休部するなんて」
そんな中で葵がポツリとつぶやいた。

「あたしも全然気付かなかった。……清一郎くん」
「……なんですか？」
「土曜日元気がなかったのってもしかしてこのこと関係ある？」
奈津美の問いかけに清一郎の肩がビクンと揺れた。
「……やっぱりね。話してくれる？」
「……はい」
そう言って清一郎は土曜日のことを話し始めた。

一方、庄吾は桜田中央高校の近くの公園で人を待っていた。
桜田中央高校の校門は一つ。そのため桜央生はこの公園の前の道を必ず通ることになる。
しばらく人の流れを眺めていた庄吾。
しかし、ある瞬間に立ちあがり、視線の先の人物を静かに追いかけた。
そして後ろから肩を叩く。
「慶太」
「……庄吾」
「ちょっと付き合え」
冷たい声で慶太に言う庄吾。
「部活は？」
「いいから付き合え」
「……分かった」
庄吾の剣幕に観念したのか、慶太は頷くと庄吾の後ろをついていった。

156話　2つの場所

土曜日。
パート練習が休憩に入ると、慶太は無意識に体育館に足を運んでいた。
体育館の中ではバスケットボール部が練習をしている。
その様子をチラッと見ながら、慶太は深くため息をついた。

吹奏楽部に入って1年が過ぎたが、やっぱりバスケへの未練は取り除けなかった。
今もバスケの試合がテレビで放送されるときは録画してでも見るし、バスケの雑誌も買っている。筋トレも故障個所に負担がかからないように続けていた。
それだけバスケへの未練は大きかったのだ。
今までは故障のせいで無理だと諦めることができていた。しかし……。

「あれ？　慶太じゃん」
ふと顔をあげると、そこには同じ中学校出身の大川（おおかわ）　孝之（たかゆき）と小畑（こばた）隆（たかし）が立っていた。
2人とも小中と一緒にバスケをやってきたメンバーだ。
しかし高校に入ってから、慶太は意識的に2人を避けるようになってしまっていた。
「……よう」
慶太は気まずそうに軽く手を挙げる。
「吹奏楽部はどうだ？」
「……ボチボチだな」

しばらくたわいのない話を続けたが、突然耐えられなくなったよ

うに隆が言葉を漏らす。
「……なあ、やっぱり戻って……」
「やめろよ」
しかし隆の言葉を孝之が遮った。
「足に故障残ってて満足なプレーできないんじゃ慶太もフラストレーション溜まるだけだ。……悪かったな、慶太」
確かに今までは故障があった。しかし……。
「……あのな」
これ以上黙ってはいられず、慶太は意を決して話し始めた。

水曜日。慶太は整形外科を訪れた。
中学時代の故障個所の経過を見るためだ。
すべての検査が終わり、慶太は長椅子に座って、検査結果を待っていた。
激しいプレーができなくなってから2年。日常生活に支障はないがやっぱりバスケができないのはきつい。
「進藤さ～ん、進藤　慶太さ～ん」
看護師に名前を呼ばれ、慶太は診察室の中に入る。
医者が慶太に検査結果を告げた……。

「……完治した？　確か完全に治るまでもっとかかるって……」
慶太が話している途中で隆が思わず口を挟んだ。
「……ああ。若いから治癒が早かったらしくて、もう運動しても問題ないらしい……」
「じゃあ、戻ってこいよ！　リハビリもしてたんだろ？」
それを聞いて、隆は嬉しそうに慶太を誘う。
「ああ……。でも吹奏楽部が……」
「……5年間一緒にやってきた俺たちよりお前はたった1年間の付き合いの吹奏楽部選ぶのか？」

煮え切らない態度の慶太に耐えきれなくなったのか、突然、孝之が口を開いた。その目は真剣だ。
「……」
その問いかけに慶太は俯く。
「……考えさせてくれ」
そう言うと慶太はそのまま、新校舎の方に走って行った。

新校舎に入る。
「……慶太先輩」
慶太が声のする方を見ると、階段の上に清一郎が立っていた。その顔は暗く、泣きそうに見える。
「……どこから聞いてた」
それを見て、慶太は見られていたことに気付いた。
「……最初から全部」
「誰にも言うなよ」
「でも！」
「頼むから！」
真剣な慶太の表情を見て、清一郎は黙って頷くことしかできなかった。

「……そっか」
話を聞き終わり、庄吾はそう呟く。
庄吾は慶太の家に来ていた。
慶太の家はマンションの６階。小学校時代に何回も来たことがある。
慶太の両親は共働きのため家には誰もいなかった。
沈黙が続く。

「で、お前はどうしたいんだ？」
さっきまでとうって変わって優しく尋ねる庄吾。
しかし、それを聞いた瞬間、慶太はいきなり大粒の涙を流しはじめた。
「お、おい。どうしたんだよ」
慌ててハンカチを渡す庄吾。
「……どうしたらいいか…全く分からないんだよ。バスケは大好きだし、やれるならやりたい。でもそしたら吹奏楽部裏切ることになるし……。でもそっちを取ると孝之たち裏切ることにもなるし……」
「……」
2年生の部員の中で慶太は積極的に吹奏楽部に入った訳ではない唯一の部員だった。バスケをやりたいけどやることができない。きっと今までいろいろ葛藤しながら部活に参加してきたのだろう。
そう思うと、慶太を責める気持ちは薄れていく。
庄吾は慶太が落ち着くまで、背中をさすり続けるのだった。

「……みっともないところ見せてごめんな」
15分後、慶太は鼻をすすりながら謝る。
「いいさ。気にすんな。……とりあえずさ、ゆっくり結論出せよ。俺はどっち選んだとしてもお前を軽蔑したりとかはしないからさ。それはみんなも一緒だと俺は信じてる」
「……ああ」
そう聞いて、慶太はやっと少し微笑んだ。
「ただし！」
しかし、庄吾の声に顔を引き締める。
「ちゃんと明日、2年生とサックスセクションのメンバーに事情を説明しにくること！　……なにも相談してくれなかったってみんな悲しんでたんだからな」
「……了解」
慶太は神妙な顔をして頷いた。

マンションの入り口まで庄吾を送り出す。
（……ありがとう。庄吾）
庄吾の後ろ姿に慶太はそう心の中で呟いた。
「気にすんな。俺とお前の仲だろ」
「……お前、人の心の中でも読めるのかよ」
「さあな。それじゃあ、また明日な」
驚いた顔をする慶太にそう笑いかけて、庄吾は家路に着いたのだった。

コラムM　第2回座談会

作者（以下作）「はい、こんにちは～！　ＳＡＫＵＲＡ　ＷＩＮＤＳ番外編、第二回座談会が始まりま～す」

先斗（以下先）「あの……」

作「なんだい、先斗くん」

先「座談会はコンクール後にやるとか言ってなかった？」

作「……気にしない気にしない」

唯「どうせ、話に詰まったから息抜きに書こうとか考えてるんでしょ？」

作「ギクッ！」

庄吾（以下庄）「図星だな」

作「いいんだよ！　……ストックも作らないといけないし、これで間を……」

先「ストック？」

作「おっと！　登場人物の君たちには関係ないことだよ。それに修正作業もあるし……」

唯「修正作業？」

作「ギクギクギク！」

唯「……まあいいわ。ところで今日は椅子が多いわね」

作「あ、ちなみにこの話は桜田中央高校第二音楽室で行っています。うん、ゲストさん来るしね」

先「ゲスト？」

作「うん、ゲスト。まず一組目。どうぞ～」

庄「あ、佐野さんと朝倉さんだ」

翔「どうも～！　『奏～Ｋａｎａｄｅ～』からお邪魔してます、佐野　翔と！」

陽乃（以下陽）「朝倉　陽乃で～す！」

作「いらっしゃいませ！　ささ、座ってください！」

陽「ありがとうございます！」

庄「他作品からゲスト呼んじゃったよ、この人……」

作「いいのいいの。作者のにっくん♪さんから２００８年以降の彼らを託されたから」

先「え？　マジ？　……にっくん♪さ～ん。この人に任せちゃって大丈夫なんですか～？」

作「大丈夫だっての。結構考えて書いてるんだよ？　二人出すときは」

唯「まあ、しばらく様子見ね……」

先「で、お二人に何を聞くんだ？」

翔「いや、俺らから作者さんに質問することになってるんや。じゃ、俺から。なんであんなに一年生を増やしたんや？書くの大変やろ？」

唯「ああ、確かに。あたしたちとしては人数増えて嬉しいけど表現力に乏しい作者には大変なんじゃないの？」

作「え～っと、最初は1、2年生で35人前後にする予定だったんですよ。でも小説を書いている途中で、高校の部活動で体験したことを反映させて書きたいという考えが出てきたため、人数を増やしました」

唯「その書きたいことって？」

作「それ言ったらつまらないでしょ？　だからしばらく…と言っても来年度になるけど……。とにかく待っていてください。大編成バンドならではの悩みを描いていきたいと考えていますので……」

先「今のはヒントか？」

作「うん。ま、気長に待っていてください」

翔「おっしゃ。分かった」

作「よし、じゃあ次は朝倉さんですね」

陽「あ、そうだ。あたしたち島根大学に進学したのになんで島根大学の吹奏楽部じゃなくて一般団体に所属することになってるの？」

作「これもきちんとした理由があります。作者は島根県出身だから島根大学に通ってる同級生や先輩がいっぱいいます、また、島根大学の吹奏楽部に君たち二人を入れると、実際の島根大学吹奏楽部が演奏した曲目とか定期演奏会とかを考慮しなくてはならなくなって、いろいろややこしくなってしまう。だから一般バンド所属って扱いにしました」

陽「なるほど……」

先「リアルが絡むととややこしいな……」

作「俺にもリアルがあるからね。ちゃんと線引きしとかないと困るし」

陽「確か作者さんは先斗くんたちと同い年なんだよね？」

作「あ、はい。そうです」

先「だから二人には敬語なのか…」

作「うん。リアル（２０１０年）だったら二人は大学三年生だし」

翔「別に気にせんでええのに……」

作「まあこちらの気持ちですから。そういえば今から練習があるんじゃないんですか？」

陽「え？　……あ、もうこんな時間！？　翔！　そろそろ行かないと団長さんに怒られちゃうよ！」

翔「ホンマや！　それじゃあ俺らそろそろ行くな！　じゃ！」

唯「え？　……行っちゃった」

作「まあ、大学生は意外と忙しいからね……」

唯「作者は暇してんじゃないの？」

作「う～ん。理系よりは暇かな。でも部活は週４回あるし、勉強難しいし、レポートあるし。思ってたよりは忙しいね。夏休みは部活で楽器吹きまくりだったけどそれで正直終わっちゃったからなぁ～。定期演奏会もあるから忙しくてまた書けなくなるかも」

唯「ふ～ん」

作「それじゃあ次のゲストです。『ブラス魂♪』より、竹林（たけばやし）　泰徳（やすのり）くん、谷（たに）　未来（みき）さん、中井（なかい）　美奈（みな）さんです。ん？」

匠「そして俺もついでに……」

作「匠？　今個人練習の時間だろ？」

泰徳（以下泰）「ど～せ出番がほしいんだろ？」

未来（以下未）「最近うちの作者が出してくれないもんね」

美菜（以下美）「まあいいんじゃないの？」

作「……とりあえず座ってもらっていいかい？」

先「あれ？　急にタメ語になった」

作「彼らは俺より1個下だしね。それに泰徳くん敬語使わないから俺もそれでいっかと」

泰「ひっど。俺でも敬語使うぜ？」

匠「へぇ～。俺とはじめて会った時はあんなケンカ腰だったのにな」

泰「匠はいいんだよ、匠は」

匠「そりゃひどいぜ。加奈子なんて後で泰徳くん怖かった～っておびえてたんだからな。ほら、謝れよ」

加奈子（以下加）「匠、別にいいって……」

匠「いいから！」

美「黒田先輩、なんか加奈子さんを前以上に大事にしてませんか？」

唯「ああ、付き合い始めたからね」

匠「おい、中島。余計なこと言うなよ！」

泰「へぇ～。そうなんだ。じゃあさっそく松方中の奴らに……」

匠「やめてくれ～！　というかお前なんで携帯持ってんだよ！？設定では持ってないはずだろ！？」

泰「ああ、仕事用に買ったんだよ。さて。メルアドを交換しているユーフォの……」

匠「おい！？」

作「あ～。泰徳くんドSの眼をしてる……」

加「……いいからほっといて進めましょ」

作「あれ？加奈子なんか顔が赤……」

加「いーから！」

作「は、はい。じゃあ美菜さんから質問よろしく」

美「あ、はい。桜田中央高校のモデルってあるんですか？」

作「そうだね。名前は県内にできた新設校から浮かんだけど、新校舎は俺が通っていた中学校を少し参考にしてるくらいだね。確か常套中学校はGT．ｓｐｉｒａｌさんの母校がモデルなんだよね」

未「そうらしいわよ。というかコンクール曲はそのまんまよ。SAKURA　WINDSは作者の高校時代と曲目一緒なの？」

作「ぜんぜん違う。うちの高校のコンクール曲は現代曲が多かったよ。拍子も難しいし、どうしたらいいか困ったよ」

未「やっぱり高校はもっと難しい曲多いんだ……」

美「というか未来は今ので質問終わりね」

未「……ホントだ。ま、いっか。じゃあ最後泰徳の番ね。泰徳〜！」

泰「あ、俺の番か。じゃあ……」

未「あ、またドSの眼……」

泰「加奈子さんに匠がどう告白したのか教えてください！」

作「あれ？　恋愛ネタ苦手なはずの泰徳くんから意外な質問が来たな」

匠「俺は告ってねえよ？」

泰「え？　そうなのか。じゃあ加奈子さんから告られたんだ」

加「……」

匠「か、加奈子？」

泰「これじゃあ加奈子さんかわいそうだし質問変えようか……」

作「いえ。出た質問は回答させてもらいます」

泰「……この人鬼や」

作「どうせこのシーンはどっかで書こうかと思ってたからね。都合がいいんだよ。じゃあ……」

ドカッ！

作「うぎゃ！？」

加「さて、泰徳くん。他の質問してくれる？」

泰「あれ、どうしてだろう。作者の後ろからいきなりバレーボールがものすごいスピードで飛んできてぶつかっちゃったなぁ……」

加「そうね」

匠「というか、加奈子が飛ばし……」

ドカッ！

匠「ギャ！？」

泰「た、匠！」

加「さ、泰徳くん質問よろしく」

泰「は、はい！　ど、どうして作者さんはこの話を２００７年から始めたんですか？　うちの作者が時制ずれててコラボが大変だって言ってたんですけど」

先「っても作者ぶっ倒れてるからなぁ……。俺が予想で答えるな。俺たちと作者は時制的には同じ年齢なんだよ。その年の課題曲も演奏してるから描写が楽なんだろ」

泰「なるほど。うちの作者も中学校3年間のこと書いてるようなもんだからな」

加「以上、『ブラス魂♪』から竹林　泰徳くん、谷　未来さん、中井　美奈さんでした～」

美「え？　もう終わり？」

泰「美奈、逆らわずに帰ったほうがいいかもしれない。加奈子さんが怖い」

加「ん？　なにか言った？」

泰「なんでもありません！　よし、帰るぞ！」

未「あ、泰徳待ってよ！」

美「じゃあ、さよなら～！　あ、匠先輩も連れて行かないと！」

先「あ、匠が引きずられていく……。というか作者が気絶しちゃったから今日は終わりかな？」

唯「もう2人来る予定だったんだけどね。まあ神奈川と大阪は少し遠いから夏休みにでも来てもらおうか」

庄「じゃ、今日はこれでってことで」

全員「さようなら～！」

作者「さ、さようなら～」

唯「あ、生き返った」

加「じゃ、またバレーボールで沈めとく？」

作「や、やめてえ……」

157話　What is that !?

5月29日（木）。

慶太が休部届けを出してから3日が過ぎた。

火曜日に慶太が事情を説明に来たことで吹奏楽部も少しずつ平穏を取り戻し、コンクールに向けて練習を始めていた。

「う～ん……」

第二音楽室では打楽器セクションのメンバーが頭を悩ませていた。

今回、桜田中央高校吹奏楽部が自由曲として演奏する『海の男たちの歌』には、様々な打楽器が登場する。

「これなんだろ……」

メンバーたちを悩ませているのが特殊楽器だ。

現在よく分からないのが、

「Ｂｏｗｅｄ　Ｖｉｂｅｓ」、「Ｍａｒｃｈｉｎｇ　Ｂｌｏｃｋ」、「Ｂｏｗｅｄ　Ｇｏｎｇ」、「Ｂｏｗｅｄ　Ｃｈｉｎａ　Ｂｏｙ　Ｃｙｍｂａｌ」の４つだ。

「ｂｏｗってことは弓で弾くんですかね？」

哲次が苦笑いしつつ、呟く。

「Ｍａｒｃｈｉｎｇ　Ｂｌｏｃｋってことはマーチング関係あるのか？　確か悟マーチングやってたよな？」

「マーチングでそんなの使ったことないですよ」

優樹がたずねるが、悟は否定した。

自由曲決めの際は省いていたが、自由曲に正式決定したため、この楽器も入れる必要があるだろう。

「とりあえず、ネットで検索してみようか」

そこでひかりが提案する。

「そうだな。拓也呼ぶ？」

「いや、あたしたちだけで今回は頑張ろうよ。クラも初心者いるから指導大変だろうし」
「じゃ、先生にパソコン教室の鍵借りに行こうか」
「「は～い！」」
ひかりを先頭に打楽器セクションのメンバーは職員室に向かった。

「よし、起動」
パソコン教室に入り、7人は2つに分かれて検索を始めた。
男子4人はＹａｈｏｏ！　ＪＡＰＡＮのサイトを開くと、まず「Ｍａｒｃｈｉｎｇ　Ｂｌｏｃｋ」と打ち込んでみた。
しかし１４，６００，０００件も出てきてしまった。
「どうします？」
「上から順に見ていくとか」
「練習時間終わっちゃうよ」
「検索ワード追加してみます？」
そう言って哲次は「Ｍａｒｃｈｉｎｇ　Ｂｌｏｃｋ」の後ろに、「海の男たちの歌」と追加してみた。
「あ、出た！」
すると、ＳＮＳサイトの質問コーナーが出てきた。
そこの高校でも海の男たちの歌をやるらしく、「Ｍａｒｃｈｉｎｇ　Ｂｌｏｃｋ」とはなにか分からず困っていたようだ。
「木の枠に縦横に紐を張り、そこに木の棒を通して木の床に落とす……か。こりゃ作らないといけないんじゃ……」
「マジッすか……」
「作りましょうよ。うちに角材ありますから」
苦笑いする3人に対して悟は乗り気な様子だ。
「角材あるの？」
「はい。うちの父ちゃん、大工ですから」
「マジ？」
「じゃあ、土曜日部活休みだし悟のうち遊びに行くついでに作るか

！」
「そうっすね。悟んち行ってみたいし」
「じゃ、検索再開だ！」
最初は渋っていた哲次もそれに乗ったので、４人は再び検索を再開するのだった。

一方、女子３人は弦楽部の部室を訪れていた。
どうやら「Ｂｏｗｅｄ」とは弓で弾くと言う意味らしいので、弦楽部に弓を借りようという意見になったのだ。
「失礼しま～す！」
弦楽部が練習している教室に入ると、有田（ありた）　正行（まさゆき）がそれを出迎えた。
正行とひかりは中学校が一緒で、拓也と龍也とも面識がある。
「よ、ひかり。一年生引き連れてどうしたんだよ」
いつものように軽く声をかけてくる正行。
「弓貸して」
「え？」
いきなりのひかりの言葉にポカンとする正行。
「先輩、それじゃあ分からないですって……」
そう言って泰子は詳しく事情を説明した。

ネットで調べたところによると、サッシンやチャイナシンバルの縁を弓で下から上へ擦り上げることでシャーンという感じの金属音が出るらしい。
ビブラフォンの方も同じ原理で音を出すようだ。
「なるほどな。でもそれならコンバスの弓でも大丈夫なんじゃないか？」
「ネットで調べたらバイオリンやチェロの弓の方が長いからそっちの方がいいらしくて……」

「そうか。じゃあ、古い弓持ってけよ。ちょうど2本ほどいらないのがあるから」
「ありがと」
ひかりはバイオリンとチェロの弓を受け取ると、音楽室に戻った。

「さてと。とりあえずやってみようか」
音楽室に戻ると、ひかりはさっそく弓をビブラフォンに当てて、下から上に引き抜いた。
「あれ？」
しかし音が出ない。
何回か繰り返しても全く鳴る様子がないのだ。
「やっぱ、古い弓だからかなぁ……？」

「それ、松脂（まつやに）塗ってないんジャナイ？」
声に振り向くと、そこにはアマンダがいた。
「アマンダ。練習は？」
「もうそろそろ今日はオシマイね。もう15分くらいでミーティングだし。それにひかりさっき弓持ってったから返してもらわなキャ」
「いっけない。ごめ～ん！」
そう言ってひかりは机の上に置いておいた弓をアマンダに渡した。
「それで松脂って何？」
「これネ」
アマンダはポケットからケースを取り出し、ふたをあけた。
そこには黒く鈍く光る個体が入っていた。
「これが、松脂？」
「ウン。これを弓に塗って……擦る！」
アマンダはバイオリンの弓を受け取って、松脂を塗ると、ビブラフォンの音板の縁をさっと擦った。
シャーン！

不思議な金属音が鳴った。
その余韻は長く、なかなか消えない。
「すっご〜い……」
「あ、そうだ。松脂使った後はよく楽器に着いたの拭き取ってネ。ビブラフォンやサッシン錆びちゃうカラ。後、弓もちゃんと緩めないと弾力無くなっちゃうから注意ネ」
「了解。ありがとね。アマンダ」
「ううん。あたしこの曲大好きだからドントウォーリーね」
アマンダはそう言って、笑った。

１５８話　寄って合わせて

６月３日（火）。
サックスセクションではパート練習が行われていた。
「それじゃあ、ロングトーンからやります。下のＢ♭から上のＢ♭まで、８拍２拍の半音階で上がってください」
「「はい！」」
パートリーダーである奈津美が指示を出す。
去年の練習では唯が仕切っていたのだが、部長職と重なるのは大変だということでパートリーダーが奈津美になってからは奈津美が練習を仕切っている。
２カ月が過ぎ、指示をする姿も様になってきたようだ。
ちなみに８拍２拍とは８拍吹いて２拍吸うという意味である。

「１、２」
奈津美のカウントとともに、５本の音が教室に響く。
しかし後半になると、音が少し不安定になってきた。
最後の音に至ってはアタックがずれてしまっている。
「お疲れ様。まずアタックとリリースはしっかりそろえて。あと、息の吸い方が一人一人バラバラだから……。うん、唯の吸い方に揃えてみようか」
「はい！」
「じゃ、もう一回」
清一郎は唯の吸い方を見て、それに合わせて深く息を吸う。

キイイイ！

しかし、息の入れ方が悪かったのか、耳障りな音が教室に響いた。
リードミスである。

「ストップ」
それを見て、奈津美が全体を止めた。
「すみません……」
清一郎がすまなそうな顔をして謝る。
「最初は仕方ないよ。とりあえず力みすぎてるから力を抜いて。上半身には必要以上に力入れる必要はないから、リラックスして吹いてみて」
「はい」

その後も時々止められながらもなんとか基礎練習が終わった。
「じゃあ、『ブライアンの休日』やるよ」
５人は楽譜を広げた。
アルトサックスは唯と清一郎が１ｓｔ、葵が２ｎｄだ。
「それじゃあ、頭からＡまでね」
メトロノームが１３８にセットされる。
「１、２」
奈津美の合図で５人は冒頭のメロディーを吹き始めた。この部分は５人が全く同じ動きをしているので、ずれるとよく分かる。
頭の音は合ったが１６分音符が入ると走ってしまうのか、清一郎が飛び出した。
それで焦ったのか、２回目は遅くなる。
最後のリズムもタンギングのタイミングが合わず、ずれてしまった。
「う～ん。テンポ落としてやってみようか」
そう言って、奈津美はメトロノームを１００まで落とした。
清一郎はドキドキしながら楽器を構える。
今度は縦は合ったが、清一郎の音程がひん上がった。
「ストップ！」
奈津美は思わず大声で止めてしまった。
「……すみません」

清一郎は俯く。
「そうだなぁ……。唯、ちょっと個人指導してもらっていい？」
「いいけど……。それよりアルトとテナーで分かれてやらない？そっちの方があわせやすいと思うから」
「わかった。じゃあ、利明君こっちでやるよ」
「はい」
その様子を見て、清一郎は申し訳ない気持ちで胸が痛かった。

練習終了後、なんとなく部室に残っていた清一郎が周りを見てみると、残っているメンバーは初心者である、一、柾、譲、麻里、哲次だった。
「パート練習どうだった……？」
「ぜんぜん指回んないや……」
「まだ演奏させてもらえるならいいじゃん……。パーカスなんか課題曲は人数余っちゃうから演奏できないんだぜ？」

『ブライアンの休日』はパーカッションが5人いればできる曲なので、楽譜どおりに割り振ったら2人余ってしまうのだ。『海の男たちの歌』はむしろ7人でも足りないのでアマンダが手伝っている部分もある。

「……仕方ないよ。一年目なんだから」
「そうか……な」
柾も頷いたが、譲だけは違った。
「でも出るなら頑張らないといけないよな」
「……」
「前、先輩から聞いた話なんだけどさ……」
そう言って譲は話し始めた。
「匠先輩の知り合いに竹林って人がいるんだ。年は俺らと同じだけど、もうセミプロのチューバ奏者として活躍していて、課題曲のC

Dの録音にも参加したらしい」
「セミプロか……。じゃあチューバ始めたのもだいぶ早かったんだろうな。佐野先輩も小4からサックスはじめたって言っていたし」
清一郎がつぶやく。しかし、次の言葉を聞いて清一郎だけでなく、その場にいる全員が驚愕した。
「いや、中1からしい。そしてセミプロの話が来たのは中1の終わりだ」
「え！？」
「……1年もしないうちに？」
「でもその人の例はかなり特殊だろ？　ただの天才じゃん」
「確かに才能もあるかもしれない。でも匠先輩が言うにはその人は部内でも一番努力してたらしい」
「……」
「それ聞いて、俺もがんばろうって思えたんだ」
「ねえ」
麻里が口を開く。
「今から6人で合わせない？」
「え？」
「それぞれで意見出し合って、みんなで早く上手くなりたいじゃない」
そう言って麻里は笑う。
「……頑張ろうか」
「だな！」
6人は頷くと、それぞれ楽器を出すために部室へと駆けていく。
「……こりゃ、先輩としては喜ぶべきことだな」
「帰りは遅くなるけどな」
そう言ってそっとドアの影から覗き込んでいるのは先斗と庄吾だった。
ちょうど今日の鍵閉めが二人の番だったのだ。

「ま、待ってやろうぜ。せっかく自主的に練習しようとしてるんだから」
「だな」
「ところで……」
先斗は少し声のトーンを落とす。
「慶太の様子どうだ？」
「やっぱり葛藤してるみたいだ。……まあ、まだ１０日くらいしか経ってないし、もう少し待ってやろうぜ」
「ああ……」

その頃、慶太は自宅のカレンダーを見つめていた。
「……来週か」
そう呟いて見る１０日の予定には「球技大会」と書かれていた……。

１５９話　運命の日

６月１０日（火）。
先斗はいつもと同じ時間に家を出た。
「おはよ～」
「おはようさん。行くか」
唯もいつもの場所に出てきていて、すぐに二人は歩き出した。
「今日、頑張ろうね」
「ああ」
しかし服装は二人とも体操服。そう、今日は球技大会の日なのだ。
今日行われる種目は、男子がサッカーとバレーボール、女子がソフトボールと卓球、そして両方でバスケットボールが行われる。
「慶太、バスケで出るんだって？」
「うん……。男子でバスケの経験者少ないからって」
「そうか……。大丈夫かな」
「あたしもちょっと心配だな……」
そこで東桜田駅に着く。
すぐに庄吾がやってきた。
「おはよ。あれ？　どうしたんだよ。元気ないな」
先斗たちの様子を見て首をかしげる庄吾。
「うん……。慶太くんバスケで出るって聞いた？」
「ああ。人数少ないんだろ？」
「うん」
「それがどうかしたのか？」
「庄吾心配じゃないの？」
「なにが？」
「これでバスケの方に慶太くんが行っちゃったらって思うと……。怖いの」
「……まあそれもありえるかもな」

「……庄吾はそれでもいいの？」
「俺は慶太の考えを尊重したい。もともと吹奏楽にあいつを誘ったのは俺なんだ。もしあのままあいつが帰宅部でいたら今あいつがこんなに悩むこともなかったわけだし……」
「……でも」
「とりあえず、俺らはまず自分の競技をがんばろうぜ」
「……ああ」
先斗と唯はあまり納得がいかない様子だったが、前を向いて歩き始めた。

「……はぁ」
庄吾は深くため息をつく。
２人には言わなかったのだが、慶太は今日結論を出す、と言っていた。
庄吾自身も慶太の意見を尊重したいとは思っているが、コンクール前の今バリトンサックスが抜けるのは痛い。
しかし、それ以前に、慶太が部活からいなくなるという事は考えたくなかった。
「庄吾！　電車出ちまうぞ！」
「ああ！　今行く！」
不安な思いを抱えつつも、庄吾は２人の後を追いかけた。

午前９時。開会式が終わり、生徒がそれぞれの会場へと向かいだす。
「先斗！　最初の試合どことだ？」
クラスメイトの奥田（おくだ）　雄二（ゆうじ）が尋ねる。
彼と先斗、拓也はバレーボールに出ることになっていた。ちなみに龍也はサッカー、茜は卓球だ。
「１－Ｅだ」
桜田中央高校の球技大会は全学年対抗戦だ。１３のクラスを４つ

のリーグに分け、午前中に総当たり試合を行い、各リーグ1位のクラスが決勝トーナメントに出場することになる。
１－Ｅには、貴弘、ボーンの雪乃、清一郎、バスクラの成美が在籍しており、貴弘がバレーボールに出ることになっている。
「って、第１試合からじゃん。早く行こうぜ」
先斗たちは会場に急いだ。

会場の体育館に着くと、既に相手チームは揃っていた。
「先斗先輩、遅いっすよ～！」
コートの向こうで貴弘が手を振っている。
「第１試合、２－Ｅ対１－Ｄの試合をはじめます」
両チームともにラインに並んだところで、審判の体育委員が指示を出した。
「「よろしくお願いします！」」
そう言って、お互いが配置につく。
先斗はバックセンターだ。
笛が鳴る。
バックライトの雄二のトスで試合が始まった。

「悔しいな……」
昼休み、先斗たちは得点表を見ながら肩を落としていた。
総当たり戦の結果、１－Ｅには勝ち、２－Ｃには負け、１－Ａには勝った。
しかし、２－Ｃも同じく2勝1敗だったため、得点差で２－Ｃが決勝リーグに出ることになったのだ。

「先斗」
そこに唯がやってきた。
「お、唯。どうした？」

「バスケの決勝の当たり見た？」
「いや、見てない」
バスケは一回に２試合ずつ行われているので、午前中に準決勝まで終わっているのだ。
「決勝、うちと２－Ｆだって」
「２－Ｆ？　なんか問題でもあるのか？」
「あのバスケ部の２人も２－Ｆなのよ」
「……」
先斗はそれを聞いて、おもわず黙り込んでしまった。

１６０話　答えを出した

１時２５分。
慶太はバスケのメンバー５人と集合場所に集まっていた。
「しかし、俺らが決勝に残るなんてな……」
メンバーのうち、山根（やまね）　伊織（いおり）が苦笑している。
「確かにな……」
匠も同じように笑う。
なにしろ、２－Ａの男子にはバスケの経験者が慶太しかいなかったのだ。伊織自身も卓球部に所属しているし、匠は運動神経はいいものの少し背丈が小さい（この前の身体測定で１７２．８ｃｍ）し、吹奏楽部だ。他の２人も他の部に所属している。
「頼りにしてるぞ、キャプテン」
「……ああ」
慶太はそう言って笑いかける伊織に短く返した。

そして試合が始まった。相手チームの２－Ｆはもちろん孝之と隆が参加している。
慶太は少しやりづらく感じつつも、チームをリードしていく。
しかし、相手チームは現役バスケ部が２人いる。そのため、だんだんとディフェンスの隙が付かれてゴールが決まる。
慶太もなんとかシュートを決めていくが、点差はだんだん広がっていった。
第３ピリオドが終わった時点で、得点は２２－３２。２－Ｆが優勢といった状況だ。
最後のインターバルに入った。
「慶太。ちょっと」
匠が慶太に声をかけ、他のメンバーがいないところに連れ出す。
「……なんだ」

「やりづらいんだろ？」
「……ああ」
ストレートに聞く匠に慶太は思わず本音を漏らした。
「気持ちが中途半端になってんのかも知れない。……なんか楽しめないんだ」
「……演奏会と一緒と思うんだ」
「え？」
「演奏会で１００％の力出せないと後悔するし、楽しめないだろ？
それと一緒だと考えるといい」
「……」
「今は、余計なこと考えずに試合に集中してくれ」
「分かった」
慶太は大きく頷く。
試合再開の笛が鳴った。

そこから慶太のプレーが変わった。
「匠、こっちだ！」
さっきより、プレー中に声が出るようになったのだ。
それを見て、相手チームは少し戸惑った様子を見せる。
「伊織！　こっち！」
逆に、チームメイトはそれに習うかのように声を発した。

だんだんと試合の流れが変わっていく。
得点差も８点、６点、４点と縮まっていく。
残り１分で３６－３８。あと１シュートで追いつく。
しかし、伊織から隆がボールを奪い、ゴール下に駆けていきシュートを打った。
「慶太！」
ボールはバックボードに当たり、弾かれる。
慶太はそれを孝之と奪い合う。

残り5秒。
慶太は無理やりボールを取り、ドリブルで攻めあがり、センターラインから思い切りボールを放った。
試合終了のブザーが鳴る。
ボールは弧を描いて、ゴールに向かって飛んでいく。
そして、ボールは吸い込まれるようにゴールに飛び込んだのだった。

「……やったあああぁぁ！！！」
応援に来ていた２－Ａ全員が沸く。
今のゴールは3ポイントショットだったため、３９－３８となり、２－Ａが逆転優勝となったのだ。
「慶太！」
バスケのメンバー４人が唖然として立っている慶太に駆け寄ってくる。
「……決まったんだよな」
「ああ！　3ポイント！　俺らの勝ちだ！」
「……おっしゃあああああぁぁ！！」
そう言われた瞬間、慶太は思いっきり両手を振り上げながらそう叫んだ。

「今日までに決める約束だったよな」
午後４時半。
球技大会の全種目が終わった。
サッカーが２－Ｄ、バレーが１－Ｃ、男子バスケが２－Ａ、女子バスケが１－Ａ、卓球が２－Ｅ、ソフトボールが１－Ｇの優勝だった。
慶太は孝之と隆とともに、片付けの終わった体育館にいた。
今日は体育館を使う部はどこも休みなのか、体育館には誰もいな

い。
孝之の言葉に慶太は頷く。
「で、バスケと吹奏楽、お前はどっちを取るんだ？」
隆の問いに、慶太は少し息を吸ってからはっきりと答えた。
「俺は吹奏楽部に戻る」
「なんでだよ！？　今日あんなに動けてただろ！？」
隆は悲しい目をしながら叫ぶ。
「確かにバスケはやりたい。でもそのためにあいつらを犠牲にするわけにはいかないんだ」
そう言う慶太の脳裏には2年生やサックスセクションのメンバーの顔が浮かんでいた。
「それにバリサクをもっと吹きたい。中途半端で終わるのはやっぱり嫌なんだ」
「……そうか」
孝之は残念そうにそう返して、目を伏せた。
「……俺は認めねえ、認めねえからな！」
そう言って、隆は体育館から飛び出していく。
「「隆！」」
慶太と孝之が声をかけたが、隆は止まらず走っていってしまった。
「……後で俺から話、しとくよ」
「悪いな」
「気にすんな。……吹奏楽部、頑張れよ」
「ああ」
そう言って頷くと、慶太は体育館を出て、ゆっくりと吹奏楽部の部室に向かって歩いていくのだった。

１６０話　答えを出した（後書き）

作者はバスケのことは体育レベルでしか分かりません。
なにか間違いがあったら教えてください。

１６１話　純粋な彼ら

６月１４日（土）。

今日はこのメンバーになってから2回目の訪問演奏会の日だ。

桜央吹奏楽部は、人数は４９人と標準的になったものの、創部２年目ということもありまだまだ認知度は低い。

そのため、京は部の認知度を上げることに加え、本番慣れするという目的で今年度は訪問演奏を増やすことにしたのだ。

今日の演奏先である桜田第二幼稚園は東桜田駅の近くにある園児数２００人の幼稚園だ。先斗や唯も昔通っていたので、２人にはなんとなく見覚えがあり、懐かしく感じている。

メンバーたちは運搬を終え、控え室に移っていた。

「幼稚園児かぁ……」

良樹がトロンボーンを組み立てながら呟く。

「どうした？」

拓也が少し沈んだ様子の良樹を見て声をかける。

「俺、弟いるんですけど……最近第一次反抗期って言うんですか？

最近あまり言うこと聞いてくれなくなっちゃって。同じくらいの年だからちょっと不安だなって思っちゃうんですよ」

「そうか。まあ、幼稚園児相手だし気楽にやればいいんじゃないか？　音聞いたら子供たちも楽しんでくれるよ」

「それは甘いな」

そこで匠が口を挟んできた。

「え？」

「子供は純粋だ。だから一旦興味をなくしたらすぐに他のものに目移りしだすし、気が抜けた演奏もすぐに分かってしまう。しかも１人が飽きるとすぐにそれは伝染しちゃうんだ。だから飽きさせないようにしないといけない」

「……なるほど」
「そのために今回しっかり練習してきたんだろ？　頑張ろうぜ」
「ああ！」
「はい！」

「あ～あ、また匠が蘊蓄(うんちく)たれてる」
ちょうどその様子を見ていた加奈子は少し呆れた様子だ。
「ま、正しいからなにも反論はできないけどね。とにかく、頑張ろう」
「うん！」
そう言う唯に加奈子は笑顔で答えるのだった。

時間になったので、部員たちは演奏会場に移動した。
今回の演奏会は幼稚園の大遊戯室で行われる。ステージはそんなに高くないため、園児の姿がよく見える。
（あ……）
良樹はその中に弟の和樹(かずき)の姿を見つけた。
ちょうど保育士の手を煩わせているようだ。
（……まったく）
良樹は少し顔を赤くしながら席についた。

「みんな～！　今日は桜田中央高校の吹奏楽部のお兄さんお姉さんが演奏しに来てくれましたよ～！」
準備ができた頃、若い女性保育士が園児たちに呼びかけた。
「じゃあ、そろそろ準備ができたみたいだからここからはこのお姉さんにお話してもらうね。それじゃあ、よろしくお願いします」
そう言って、保育士はマイクを茜に渡した。
「桜田第二幼稚園のみなさ～ん！　こ～んに～ちは！」
「「こんにちは！」」
「桜田中央高校吹奏楽部です。今日はみんなの知ってる曲や、楽し

い曲をいっぱい演奏するから楽しみにしててね～！」
「「は～い！」」

「茜先輩って子供の扱い上手ですね……」
清一郎は司会を進める茜を見て唖然とした表情。
「そりゃ、妹と弟がいるからね。まあ、あたしも妹いるけどああは行かないよ」
奈津美がそう言ってほほ笑む。
茜が席に戻ると、京が指揮台に上がった。
指揮棒が降りると、木管楽器中心の優しい響きがホールに響き渡った。
幻想的な雰囲気の中、ドラムが鳴り、金管のベルトーンが加わる。
そして木管が連符で駆け上がり、調が変わった。

「忍たまだ！」
一気に雰囲気が変わったところで、園児たちも何の曲か分かり始めたようだ。
１曲目に演奏するのは、アニメ「忍たま乱太郎」のオープニングテーマ曲である『勇気１００％』だ。
しかも、今回演奏するのはそれをアレンジした『勇気１００％Ｂｒａｓｓ　Ｒｏｃｋ』だ。

金管のバッキングで、サックスとクラリネットのメロディに入る。
そこで予想外の出来事が起きた。
なんと、園児たちが歌詞を元気に歌いだしたのだ。
思わず部員たちの顔が緩む。
２回目からはトランペットもそれに加わった。
Ｂメロ直前、一気に伴奏が静まる。
そこで拓也がさっと立ちあがり、渋いソロを響かせた。
トランペットの駆け上がりで一気に演奏のボルテージは上がって

いき、金管の元気な音で一気にサビへと突き進んでいく。
それの勢いを殺さないように、しかし演奏が突っ走っていかないようにコントロールしているのは先斗たち低音群と打楽器だ。復帰した慶太もエレキベースに回っている。
サビは金管とサックスがメロディーを吹き、木管が対旋律を奏でている。
和志のタンバリンもいいアクセントとなり、演奏を支えた。
間奏ではトランペットとトロンボーンが立ち上がり、その音を園児たちに飛ばす。
園児たちがそっちを見ている間に、唯が前方に出てくる。
そして園児たちの真ん前でその音を響かせた。
園児たちは突然聞こえてきたその音に驚いた表情を見せたが、それはすぐにキラキラとした表情に変わる。
ソロを吹き終わった唯は笑顔で席に戻った。
そのまま、もう１度サビを繰り返し、『勇気１００％　Ｂｒａｓｓ　Ｒｏｃｋ』は終わりを告げた。

「すごぉい！」
園児の１人が、目をキラキラさせ、手を叩きながら立ち上がる。
「え？」
良樹は思わず声をあげた。
なんと、それは弟である和樹だったからだ。周りの園児も少し遅れて拍手をする。
（まったく……）
良樹は少し顔を赤くしながらも、和樹に笑顔を向けるのだった。

１６２話　どれが好き？

演奏会は順調に続いていく。
２曲目の『わらべうたつづり』が終わり、今度は茜に加えて哲次が前に立った。
「今度はみんなに楽器の紹介をしていきま～す！　吹奏楽ではたくさんの種類の楽器を使うんだよ。誰か楽器の名前知ってる子いるかな？」
「「ハイハイハイハイ！」」
そう茜が聞いた瞬間、子供たち全員が元気よく手を挙げる。
「みんなすっごいね～！　じゃあ、一番前の女の子。知ってる楽器はどれかな？」
「これ！　アルトサックス！」
そう言って唯が持っている楽器を指差した。
「すご～い！　大正解！　だれかおうちの人で吹いている人いるのかな？」
「パパが吹いてる～」
茜は楽しそうに司会を進めて行く。

（俺、ちゃんとできるかな……）
そんな中、哲次は司会原稿を見ながら少し緊張していた。
今回、哲次は楽器の説明を曲間にすることになっている。

指揮が上がり、『森の音楽隊～語りつき楽器紹介』の演奏が始まった。
初めは全員での演奏。『森のくまさん』の曲に乗ってメロディーが奏でられていく。
間奏に入り、フルートのメンバー４人が前に出てきた。
（え～い、開き直っちまえ！）

哲次は腹を決めると、息を大きく吸った。
「まず、木管楽器から紹介していきます！　初めに紹介するのはフルートとピッコロです！　ピッコロは吹奏楽の楽器の中で一番高い音が出ます！　フルートは金属でできていて鳥の鳴き声のような音がします！　どちらも細かい動きが得意です！　では、どうぞ！」
それを聞いて、京は指示を出す。

この曲では楽器の説明の時間を作るために、楽譜には「Ｘ　Ｔｉｍｅ」と書いてある。
つまり指揮者の指示があるまではそのフレーズを吹き続けなくてはならないのだ。

４人はテンポに合わせて足踏みをしながら軽やかな音色を奏でる。
ワンフレーズ吹き終わると、４人はその足取りのまま席に戻った。

それと入れ替わりにクラリネットが出てきた。
「次に紹介するのはクラリネットです！　クラリネットにはたくさんの種類があります！　私たちは現在エスクラリネット、ベークラリネット、アルトクラリネット、バスクラリネットの４種類を使っています！　では、クラリネットの皆さんどうぞ！」
今度は拍子が３拍子になり、ワルツ風になる。クラリネットのメンバーは左右に揺れながら、優雅に旋律を奏でた。

「次にオーボエです。特徴的な音がします」
哲二がそう言うと、前に出てきていた駿介はさらっとチャルメラのメロディーを奏でる。
それは保育士たちの笑いを誘った。
「それではどうぞ！」
その瞬間、伴奏が短調に変わる。駿介はさっきとまったく違った表情でその旋律を奏でた。

「次にファゴットです。この楽器は別名バスーンとも言います。見た目はこのようにキーがたくさんあってちょっとゴツいですが、とっても素敵な音が出せます。それではどうぞ！」
ゆかりはそっと前に出ると、艶やかな音色を奏でる。
ファゴットと言うと、滑稽な音色と評されることが多いのだが、実は「天からの声」とベートーベンが言ったほど、魅力的な音を出せる楽器でもあるのだ。

「次にサクソフォンです！こちらもいくつかの種類がありますが、私たちは主にソプラノサックス、アルトサックス、テナーサックス、バリトンサックスの４種類を使っています！では、どうぞ！」
そこでサックスの６人が前に出て、しっとりとした旋律を奏で始めた。葵と清一郎のアルトサックスの主旋律にテナーサックスのハモリ。さらにその裏で、慶太がアルペジオ風の伴奏を吹く。
そのしっかりした音を聴いて、部員たちは慶太が帰ってきたことを実感していた。
さらにその上で唯がソプラノサックスで対旋律を奏でると、園児たちもその音に夢中になり身動きひとつしなくなった。

そして紹介は金管に移る。
「次は金管楽器に移ります！　はじめにトロンボーンです。トロンボーンはスライドという部分を伸ばしたり縮めたりして音を変えます」
そういうと、加奈子たちは前に出てスライドを交互に前後させて見せる。
「それではどうぞ！」
トロンボーンのアレンジは西部劇風。スライドを目いっぱい生かしたアレンジとなっているため、４人はなるべくスライドの動きをオーバーに園児に見せるように意識して演奏した。

「次にホルンです。この楽器はベルが後ろに向いていて、見た目としてはカタツムリのようにも見えます」
そこで龍也と潤はベルを園児に向けて『カタツムリ』の歌の最初の部分をハモって吹いた。
園児たちも保育士もそれにおおウケだ。
龍也と潤はそれを見てしてやったりといった顔。
実はこの二人は中学のときからいつもこうやってウケを取っていたのだ。
「それではどうぞ！」
次のアレンジはタンゴ風。４人でハモリながら楽しげに吹いてみせる。

「次にユーフォニウムです。男性の声に一番近い音が出せる楽器です。ソロにメロディーに伴奏、なんでもお手のもの！　それではどうぞ！」
匠と竜一は前に出る。
次のアレンジはなんと演歌風。コブシの聞いた音に、園長らしき人が息を呑んでいる。
ティンパニが激しく鳴ると、歌いこみはさらに激しくなる。
そして、最後はアドリブを入れて吹き上げたのだった。

「続いて、チューバと唯一の弦楽器であるコントラバスです。この楽器たちはバンドの縁の下の力持ち。彼らなしには演奏は成り立ちません。昼寝をしているような『森のくまさん』をどうぞ！」
５人は前に出て、ゆったりとした旋律を吹き始める。
それと一緒に５人以外のメンバーが次々と眠り始めた。
もちろんこれは演出の一つで寝たふりだ。
唯一起きていたフルートの美香と里奈がそっと対旋律を奏でる。
そして、５人はベルや楽器をステージのほうに向け、思いっきり

最後の音を鳴らしてメンバーを起こすのだった。

ティンパニの激しいロール。

トランペットの5人が立ち上がり、楽器を銃のように構えた。

「続いてトランペットです。金管の花形ともいえる楽器で、金管の中で一番高い音が出ます。それではどうぞ！」

次のアレンジはジャズ風。低音も八分音符の伴奏をノリノリで吹いている。

「最後に、打楽器です。打楽器には数えきれないほどの種類があります。今回は台所用品を使って演奏したいと思います！　ではどうぞ！」

そう言うと、哲次は足もとに置いていたお玉とボウルを手に持つ。

泰子のシロフォンと優樹のグロッケンが旋律を奏でる中、悟がボウルをすりこぎで叩き始める。哲次もお玉でボウルを叩き始めた。

テンポが上がると、ひかりが瓶を箸で叩き、麻里は泡だて器でパッドを叩く。

そのリズムが絡み合い、なんとも言えない響きが生まれた。

そこに和志のスネアドラムのロール。全員がまた楽器を構えた。

哲次はマイクを持ち直す。

「これで吹奏楽で使うすべての楽器を紹介しました。これらの楽器で奏でられる吹奏楽の響きをお楽しみください！」

そして、全員での『森のくまさん』の演奏が始まった。

（あれ？）

最初とまったく同じ演奏なのだが、さっきと園児の視線の方向が違うことに哲次は気づいた。

さっきはきょろきょろしている子も多かったのだが、今度はそれぞれの楽器の方を見ているのだ。

トランペットの方を見ている子もいれば、打楽器のバチの動きを見ている子もいる。
それぞれの楽器に興味を持ってもらえたようだ。
（……よし、最後の曲も頑張ろう！）
哲次がそう決意を固める中、曲はエンディングを迎えるのだった。

１６３話　次の舞台へ

「みんな、お気に入りの楽器は見つけられたかな？」
「見つかった～！」
「ホルンがすき～」
「あたしはフルート～！」
曲が終わり、マイクを持った茜が笑顔でたずねると、子供たちは口々に楽器の名前を言っていく。
「実は次の曲で最後なんだ。でも、一生懸命演奏するから聴いていてね」
「は～い！」
一番初めに返事をしたのは和樹だった。家では全く見せない素直な様子に良樹も舌を巻いている。
「それでは聴いてください、『「となりのトトロ」～コンサート・バンドのためのセレクション』です。今日はありがとう！」
そう言った瞬間、京が指揮棒を降ろした。

和志のウインドチャイムが涼やかな音色を立てる。
そこに現れたのは美香のフルートソロだった。
木管とトランペットがそれに続く。和志のウインドチャイムがそれに色を加える。
伸ばしで一旦曲が静止した。
そこにファゴットの装飾音が入った伴奏。一気に雰囲気が変わり、子供たちも目を輝かせる。
『さんぽ』の始まりだ。
子供たちもきっと歌の時間などで歌っているのだろう。旋律の部分を元気に歌いだす子供たち。
京はそれを背中で聞きながら、ご機嫌な様子で指揮を振った。

低音の3つの音が、『五月の村』へと曲を誘う。
最初はクラリネットのソリ。それにフルートとグロッケンが色を添えた。トランペットも楽しげに音を鳴らす。
金管のキメのリズムで旋律が厚くなった。
子供たちも楽しげに体を揺らしている。
冒頭の低音の音で、オーボエとフルートのソリが入り、『五月の村』が終わった。

『すすわたり』の冒頭はパーカスソロ。
泰子がシロフォンでメロディーを叩き、優樹がグロッケンで追いかける。和志のティンパニと哲次のカバサがそれを支えた。
特にカバサは『すすわたり』の間でずっと鳴らし続けるため、テンポキープが重要だ。
初心者の哲次にはそれが難しいかと思われたが、妙にテンポキープが上手いため、一回も合奏で注意されることはなかった。
（ギターやっててよかった……）
哲次は改めてそう思いつつ、カバサを鳴らすのだった。
キメのリズムが鳴り、管楽器が加わる。
ファゴットが滑稽な音色で下を支え、その上でフルートやクラリネットが旋律を奏でる。
またティンパニが鳴り、唐突に音が消えた。

ひかりがウインドチャイムを鳴らし、悟のサスペンドシンバルも加わる。
優樹がそっと『風のとおり道』の冒頭を叩き始めると、その音色に子供たちは釘付けになる。
麻里のビブラフォンの伴奏が加わると雰囲気はさらに幻想的になった
そこで匠が立ち上がり、優しいソロを吹き始めた。

翔はその様子を脇のほうで見守りながら、二年前の文化祭のことを思い出していた。
（そういえば、あのソロも『風のとおり道』やったな……）
そして、同級生である水谷（みずたに）　春樹（はるき）のことを思い出していたのである。
翔がふと陽乃の方を向くと、陽乃も同じように翔のほうを見ていた。
「春やん、元気かな」
「きっと元気よ。絵美ちゃんもね。……会いたいな」
「夏休みにまた会えるさ」
寂しそうにしている陽乃に翔はそう言って笑いかけた。
「うん」
陽乃は頷くと、翔の肩に寄りかかり、そっと目を閉じて続く庄吾のソロを聞くのだった。

曲の雰囲気が変わる。
今までが静だったとすると、ここの雰囲気は動。タンバリンが静かに、しかししっかりと鳴り、それに乗ってホルンが旋律を奏でた。
主題が帰ってくる。
トランペットの主旋律にホルンの対旋律。途中からクラリネットのパッセージも加わり、華やかになる。
だんだんデクレッシェンドがかかっていく。

音が消えた瞬間、バスクラの成美が『ねこバス』のパッセージを吹いた。
掛け合うように高音木管が『風のとおり道』の旋律の断片を奏でる。
それが繰り返されると、奈津美が短いソロを吹き、トロンボーンがなだれ込んで『ねこバス』に入った。
中低音の伴奏に、クラリネットの旋律。ひかりのハイハットがテ

ンポを支えている。
その旋律はトランペットに引き継がれ、どんどん曲が進んでいく。
サックスのグリッサンドの入ったメロディーが通り過ぎると、また最初の旋律が繰り返された。
フルートがかわいらしく次の曲へ導くパッセージを吹く。

そこでホルンとサックスのメンバーが立ち上がる。
映画のエンディングテーマである『となりのトトロ』の始まりだ。
ピッコロとフルートがかわいらしいパッセージを奏で、旋律もトランペットとクラリネットに変わる。
ホルンとサックスは対旋律を吹く。かなりおいしいフレーズだ。
そのふたつの旋律が絡み合い、だんだんと曲は高揚していく。
キメのリズムでサビに入った。
子供たちも映画の映像を思い出しているのか、かなりはしゃいだ様子だ。
テンポが落ち、トランペットとトロンボーンのパッセージから、壮大な雰囲気に変わる。
そして、その雰囲気のまま曲は終わった。

「あ〜、楽しかった！」
唯がそう言って笑う。
搬出が終わり、学校に戻ってきた部員達はそれぞれ楽器の片づけをしていた。
「それにしても慶太くんよく3日で吹けたね」
驚いた様子でそう声をかける奈津美。
「庄吾のおかげだよ」
「庄吾先輩の？」
葵は意外な名前にきょとんと顔をした。
「ああ。あいつ、音源とスコアうちに持ってきてくれてさ。譜読み

だけはできてたから」
「そうだったんだ……」
「でも、帰ってきてくれてよかったな」
翔が嬉しそうに唯の肩を叩く。
「はい！」
「佐野先輩……。ご心配おかけしました」
「ええって。それよりもコンクールまであと一ヶ月ちょいや。頑張ろうな！」
「「はい！」」
サックスセクションの６人は元気に返事を返すのだった。

１６４話　きっと、見ていてくれる

６月２１日（土）。
今日は期末テスト前最後の練習だ。そのため、課題曲と自由曲を最初から最後まで通すことになっている。
「あれ？　先輩。譲は？」
練習開始の９時を過ぎても譲が来ないので、貴弘は先斗に尋ねた。
「ああ。今日は休み」
「テスト前、最後の練習なのに……」
少し不満そうにそう呟く貴弘。
「仕方ないさ。……墓参りなんだってさ」
そこで先斗の表情が少し曇る。
「墓参り？」
「ああ。親父さんとオフクロさんの」
「え……？」
それを聞いて、貴弘は動きを止めた。
「譲の両親、２人とも亡くなられてるんだよ」
「……」
「……俺も通しが終わったら早退するから後、頼むな」
「……はい」
貴弘は少し神妙な顔をして頷いた。

その頃、譲は兄弟とともに両親の墓のある桜田霊園にやってきていた。
「父さん、母さん。最近来れなくてごめん」
譲は手を合わせながら、墓の中に眠っている両親に話しかけた。

譲の両親は譲が中学２年生の時、事故で亡くなった。
当時、一番上の兄の高人（たかと）は大学２年、二番目の兄の和也（かずや）は高校２

年、妹の一葉(かずは)は小学5年生だった。
親戚にバラバラに預けられるという話を聞いたり、思春期に差し掛かっていたことも会い絡まり、譲はだんだんと荒んでいった。
突然髪を金髪に染めたり、夜間徘徊をしたりもしたし、警察に補導されそうになったことも何回もある。
しかし、高人の強い願いで元の家で4人だけで暮らすことができるようになり、高人や和也が譲を何度も諌めたことによってだんだんそれは落ち着いて行った。

「2人とも驚けよ。譲、吹奏楽部に入ったんだぜ？　あの音楽になんの興味も持たなかった譲がだぞ？」
和也は明るくお墓に向かって話しかける。
「和兄だって軽音でギター弾いてるだろ？それと一緒だ」
「俺は元々音楽好きなんだよ。ほら、いいからお前は水汲んでこいよ。俺らは墓周りの草むしりしてるから」
「……分かったよ」
譲は水汲み場の方に歩いて行った。

水汲み場に着くと、そこには1人の少女が立っていた。
「こんにちは」
住職の娘さんかと思い、譲は挨拶した。
「……こんにちは」
しかし、彼女は少し戸惑っているようだ。
「お墓参りですか？」
「うん。幼馴染みのね」
「……そうですか」
少し気まずそうな表情をする譲に、彼女はこう尋ねた。
「あたし、大橋(おおはし)　美津(みつ)。あなたは？」
「……斎藤(さいとう)　譲(じょう)です」
「斎藤……。ねえ、もしかして吹奏楽部でチューバ吹いてたりする

？」
「え！？」
いきなりの問いに驚く譲。
「やっぱり。大橋　貴弘って知ってるでしょ？　あたし、彼のいとこなのよ。チューバに同期ができたってめちゃ喜んでたからもしかしてって思って」
「なるほど……」
「それで今日はお墓参り？　って霊園で聞くのも変よね。ちょっと座ろうか」
そう言って、美津は近くのベンチに譲を誘った。

「ご両親の……」
譲の話を聞いて、俯く美津。
「……二人とも即死だったらしいです」
「そっか……」
沈黙が続く。
授業中に突然呼び出されて告げられた両親の死。
頭ではなんとか納得させたが、２年経った今でもまだ受け入れきれてはいない。
「でも、まだどこかにいるような気がして……。時々胸が痛くなるんです」

「……きっとどこかで見てくれてると思うよ」
俯く譲にそう美津は声をかけた。
「……え？」
「あいつね、最後にそう言ってくれたから……」
そう言って美津は微笑む。
「……美津さんって強いんですね」
「あいつと約束させられたからね」
「約束……？」

「あいつがいなくなっても、あたしらしくいるって。泣いてばかりいるのはあたしらしくないから泣くなって。……勝手なこと言われちゃったけど最後の約束だからさ。無視するわけにもいかないでしょ？」
「……」

もし、両親の最後の瞬間に会えていたら、2人はなんと言ってくれただろうか。
譲はそっと目を閉じて考えてみた。

（4人で仲良く笑って暮らしてね）

「……！」
母親の声が聞こえた気がして、ハッと周りを見渡す。
「どうしたの？」
「……母さんの声が聞こえた気がして」
「……ほら。やっぱり見ててくれてるでしょ？」
「……かもしれませんね」
微笑む美津に、譲はそっと笑いかけた。

「譲！　いつまで水汲みに行ってるんだよ！」
高人の声がする。
「それじゃあ俺、行きますね。……ありがとうございました」
「ううん。また、どこかで」
そう言って去っていく譲の背中はさっきよりなんだか大きく見えた。

美津はそう譲を見送ると、幼馴染の墓の前までゆっくりと歩いた。
「もうあれから1年経つんだね」
お墓の前でしゃがみこんでそう語りかけるように呟く美津。

「あたし、約束守ってるよ？　なるべく明るく暮らすようにしてるし、サックスも頑張ってる。青南の練習、きついけど辞めちゃったらあんた怒るもんね」
しかし、そこで声のトーンが少し下がる。
「でもね、あんたのこと、だんだん忘れていっちゃうのが悲しいの。……声が聞きたい、……いつものツッコミが懐かしい。……寂しいよぉ」
そこで、美津は耐え切れずに涙を一粒こぼした。

「ミ～ッ！」

突然響いた懐かしい声に振り向くと、そこには唯が立っていた。後ろで先斗が手に花を持っている。
「唯……、先斗君……」
「水臭いじゃない。あたしたちも一緒に行きたかったのにさ」
そう言って、頬を膨らます唯。
「まあ、そう言うなよ。美津もあいつとゆっくり話したかったんだろ？」
「……2人とも全く変わってないね」
「そうか？」
「そうだよ」
美津は前と変わらない2人を見て目を細めた。
「でも思ったより元気そうでよかった」
「あいつと約束したからね」
「え？」
「ああ、こっちの話」
美津はごまかすように少し2人から離れ、空を見上げた。
「……あいつ、見てくれてるかな」
（お前は1人じゃないんだから泣くなよ。先斗や唯もいるし、大丈

夫だろ？）

最期の言葉を思い出して、美津はまた流れ出した涙を袖で拭う。

（待っててね。いつかそっちに行ったら文句たっくさん聞いてもらうんだから）

美津はそう心で呟くと、笑顔を浮かべて先斗たちの方に戻っていくのだった。

１６４話　きっと、見ていてくれる（後書き）

美津はＪｕｍｐ　ｉｎｔｏ…の主人公です。
よかったらそちらも読んでみてください。今月中にあちらも更新しますので…汗

１６５話　文武両道

６月２３日（月）。

今週末に控えたテストに向けて吹奏楽部はテスト休みに入っているのだが、部室や第二音楽室には部員たちが続々と集まっていた。

「唯先輩。ここの構文はどう訳せばいいんですか？」

葵がワークのある部分を指差して尋ねる。

「ん？　ああ、ここはＩｔが仮主語になっているから……」

そう、彼らはテスト勉強をしているのだ。

桜田中央高校では今年から夏休みが短縮されることになった。

７月１８日（金）までは普通授業を行い、翌週の７月２２日（水）から７月３１日（木）までは午前中授業を行うことになっている。

運動部も文化部も大会を控えている部が多いため、不満満々だ。

しかも、今回の期末テストで欠点を取ってしまった生徒は午後に補習授業を受けなくてはならない。

全員がコンクールメンバーであるため、補習が入ってしまうと合奏に支障が出てしまう。

そのため、部員たちは協力し合うことにしたのだ。

２年生が先生役となって１年生に、唯が英語、奈津美が現代文、美香が古典、庄吾が現代社会と世界史Ａ、龍也が数学、拓也が理科総合を教え、学年１位と２位である茜と匠が全体を回って教えることになった。

残りの２年生も分かる範囲でパートの後輩に分からないところを教えたり、お互いに聞きあったりしている。

先斗は数学Ｂの課題を拓也に聞きながらなんとか進めていた。

「ふう、やっと終わった」

「早いな」
拓也が息をついた先斗を見て呟く。
「先生がいいからな」
「そりゃ光栄だ」
そう言ってニヤッと笑う拓也。
「じゃ、今度は俺に地理B教えてくれよ」
「了解」
そう言って2人は地理Bの教科書を取り出すのだった。

午後5時。
「ありがとうございました～」
一年生はぞろぞろと音楽室から出ていく。
そんな中、残った二年生たちはそれぞれの勉強を始めている。
文系理系に関係なく、今年は去年よりテストが難しくなっているのだ。
文系でも進学志望者、就職志望者関係なく、数学?Bまでを今年度のうちにすべて済ませておくことになっているし、理系は3学期から数学?を学び始めることになっているため、授業のペースも昨年よりかなり早い。
なので2年生は特に数学に力を入れて勉強していた。

「お～い、差しいれ買ってきたで」
「あ。佐野さん！」
そこに、大学の授業を終えた翔と陽乃がやってきた。
その手には袋いっぱいのお菓子だ。
「ありがとうございます！」
女子たちは目を輝かせてお礼を言う。
「あ、佐野さん、この問題教えてください！」
「俺も、これ分からなくて……」
一方、男子たちは問題集を手に翔に駆け寄ってくる。

「ちょ、落ち着け落ち着け！　俺数学あかんねんから！」
翔はあわててそれを止める。
なにしろ、男子が持ってきた問題は数学Ｂの範囲であるベクトル。
数学？Ａですら苦手である翔には荷が重たい。
「はいはい、数学はあたしが聞くからこっち持ってきてね～」
陽乃はそんな翔を見かねて、助け船を出した。
「佐野サン、国語教えてもらってイイですか？」
アマンダが不安げな顔でやってくる。
アマンダは日本語が堪能であるため、２年生と同じテストを受けることになっている。
そのため、現代文がかなり不安なようだ。
「ああ、ええで。どんどん聴き！」
現代文が得意な翔は自信満々で胸を叩いて見せた。

午後６時半。一通り勉強を終えた部員たちは翔の持ってきたお菓子をつまんで雑談をしていた。
「でも、定期演奏会の話題、うやむやになっちゃったけどどうする？」
唯が庄吾に尋ねる。
「そうだなぁ……。テスト明けにはコンクールに集中しないといけないからなぁ……」
「そもそも定演やるのにはお金かかるよな。まずホール借りるからホールの使用料だろ？　もしピアノやチェレスタとか使うんならそれのレンタル料、さらにプログラムも作るから……。うわ、先生に聞いてみないと分からないけど１００万円以上はかかるんじゃないか？」
「うげ……」
拓也の発言に思わず慶太が声を上げる。
「こりゃ、部費と学校から出る予算じゃとても足りないぞ……」
現在の吹奏楽部の部費は月に１，０００円。一年分をすべて定期

演奏会のために使うとしても５８８，０００円しか集まらない。
「なら、地域の人に協賛金をお願いしてみるとか？」
「あ～、俺らも高校時代やったな」
茜の言葉に翔は懐かしそうに呟く。
「まあ、やるとしたらコンクール明けだな。まずしっかりコンクールで結果残さないと。結果良かったら学校も予算増やしてくれるかもしれないし」
「そうだね。今年度中にできるといいなぁ……」
唯がそっと呟く。
「なら、まずはテストを頑張って片付けようか。ここで欠点取ったらコンクールどころじゃなくなるし」
「は～い」
陽乃の言葉に、全員は苦笑いしながら教科書をまた広げるのだった。

１６６話　ちょっと息抜き

７月７日（月）。
期末テストも無事に全員がパスし（庄吾をはじめとする数人はギリギリだったが）、吹奏楽部は１ヶ月後に控えたコンクールに向けて練習に励んでいた。
来週末にはプレコンクールともいわれる吹奏楽の集いがあるため、特に２年生はかなり気合を入れていた。
「清一郎くん！　そこアーティキレーション違う！」
「あ、はい！」
サックスパートでも奈津美の声が響いている。

自由曲である『海の男たちの歌』はかなり連符が多い曲であるため、初心者の清一郎には指を追いつかせるのがやっとだ。
そのため、アーティキレーションを間違えてしまう事が多く、それが最近の奈津美の悩みのタネだった。

「奈津美。テンポ落としてみようか」
唯が何度も同じテンポでやっていた奈津美を見かねて、メトロノームの錘を一気に８４まであげる。
京の指定したテンポの半分だ。
「清一郎くん、２５小節目からやってみて」
「は、はい！」
ゆっくりと３連符のパッセージを奏でる清一郎。さっき間違えた部分もなんとか通過して、フルートが加わってくる部分まで吹き切った。
「ＯＫ、じゃあテンポあげるよ～」
そう言って、次は８８に錘を合わせる。
「ちょっと、唯。そんなのんびりやってたら……」

「奈津美。急がば回れだよ」
焦る奈津美に、唯はきっぱりと言う。
「でも……」
「確かにコンクールまでは一ヶ月しかないけど、じっくりと合わせるところを合わせていくのが一番いい方法なんだよ。だから頑張ろう？」
「うん……」
奈津美は不服げにしながらも頷いた。

その様子を偶然通りかかった京が見ていた。
（……こりゃ一旦息抜きした方がいいかもな）
そう思い、頷くと京の足は楽譜の置いてある部室へと向かっていた。

そして合奏の時間になる。
先斗の指示で基礎合奏を終えたところで、京が入ってくる。
「「こんにちは！」」
京に大きな声で挨拶をする部員たち。
「こんにちは。じゃあ、早速課題曲から……と言いたいところなんだが」
普段と違う流れに戸惑う部員たち。
「浦田。今日は何の日かわかるか？」
一番近くにいた駿介に尋ねる京。
「え？　七夕ですけど……」
「そう。だから今日は課題曲自由曲はちょっとお休みしてこの曲をやる」
そう言って京が配りだしたのは『Ｔｈｅ　Ｓｅｖｅｎｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ』だった。
酒井（さかい）　格（いたる）氏が作曲したこの曲は吹奏楽曲としてはかなり有名な部

類に入り、タイトルの日本語訳である「7月7日」から発想される『たなばた』という愛称で親しまれている。

「今から30分譜読みをしたら合わせるぞ。そうだ、ソロとソリはできる限り全部一年生が担当すること」

「ええ！？」

京の思わぬ発言に全員が声を上げる。

なにしろ、この曲には、フルート、オーボエ、アルトサックス、トランペット、トロンボーン、ユーフォニウム、チューバ、ティンパニ、グロッケンにソロがあるのだ。

ソリもいくつかあり、特にユーフォニウムとアルトサックスのソリは、酒井　格氏が高校時代のユーフォニウムの同級生とアルトサックスの後輩を思い浮かべて書いたという事で有名である。

「はいはい！　早くセクションで話し合ってパートを決めて譜読みする！」

京の声で、部員たちはセクションごとに集まり。パートを決め始めた。

25分後。部員たちはまた合奏体型になって座っていた。

そんな中で清一郎は不安そうにしていた。パート割りの関係で、清一郎がソロを吹くことになってしまったからだ。

「清一郎くん」

「は、はい！」

右隣に座っている唯が話しかけてもおっかなびっくりしている。

「も～。今日はコンクールじゃないんだからリラックスして吹こうよ」

「はい……」

「音楽って音を楽しむって書くんだからさ。楽しまないとつまらないよ？　こんな楽しいソロなかなかないんだから」

「そうそう」

さらにその隣から葵が話に加わる。
「もしかして吹くのが嫌なの？　ならあたしがそのソロもらっちゃうよ～」
「や、やだよ！　俺だって吹きたいし！」
「なら、そんなビクビクしてないでしゃんとする！」
「分かってるっての！」
清一郎は顔をパンパンと叩くと、もう一度譜面を見つめる。
「これなら大丈夫そうね」
「はい」
その様子を見て、唯と葵はほっとした表情を見せるのだった。

コラムM　ドイツ音名

「なんでこんな時期にコラムを書くんだろう。あの人は」
呆れた表情の庄吾。
「仕方ないだろ。だっていろいろ専門用語とか書いてるし、解説しないと吹奏楽経験者はともかく、吹奏楽を知らない人にはチンプンカンプンなんだから」
そう答える里穂。
「そうなの？」
「そうだよ。じゃあ、まず音名から解説していこうか」
「音名？」
「そう。作者もFとかAとか使ってるだろ？　まあ、分かりやすくしたいからFとか書いているけど」
「なんでわざわざピアノの、ってつけるの？」
「それはな、吹奏楽の楽器の多くは移調楽器だからだよ」
「移調楽器？」
「あ～、そこからか……」
頭を抱える庄吾。
「移調楽器ってのはな、ある楽器で楽譜に従って出した音の高さが、ピアノなどにおけるその楽譜の音と異なる高さの音に一致するような楽器のことなんだ。まあ、簡単にいえば、その楽器のドが、ピアノで言う違う音だったりするってこと」
「なるほど……」
「それで、FとかAって言う読み方をするのがドイツ音名って言うんだ。これを表にまとめるとこうなる」
そう言って庄吾が広げた表を見て、里穂はちょっと首をかしげる。
「……ねえ、読み方が分からない人もいるんじゃない？」
「あ～……よし、今から書く！」
そう言って庄吾はびっしりと表に書き込んだ。

>i16472—1743<

「これならしっかり分かるね！」
「ああ。読み方なんだけどピアノの白い鍵盤の部分の音……C（ツェー）とかD（デー）のことなんだけど、それにシャープならisを、フラットならesを後ろにつけるんだ」
「ってことは、C♯ならCis（チス）ね」
「そうそう。まあ、普通は簡単にするためにC♯とか、A♭って感じで書くけどな」
「あれ？　でもHの半音下はBになってるよ？」
「ああ。そこは例外。だからそこだけは覚えておかないといけない。まあB＝B♭（ベー）はよく使うからな。覚えられるだろ」
「へぇ……」
「ついでに楽器もまとめておいたぞ（※）」
＝＝＝

・Esクラリネット
・アルトクラリネット
・アルトサックス
・バリトンサックス
・コルネット
・チューバ

基準の音がC(ツェー)の楽器
・ピッコロ
・フルート
・オーボエ
・バスーン
・トランペット
・コルネット
・チューバ

基準の音がF(エフ)の楽器
・イングリッシュホルン
・Fホルン
・チューバ

基準の音がA(アー)の楽器
・Aクラリネット

「かなり被っている楽器があるけど？」
「楽器によってはいろいろ管の長さの種類があるんだよ。例えばトランペットはC管とB♭管を主に使うんだけど、中にはE♭管とかD管とかもある」

「へえ……」
「たしか第二楽器庫にあったはずだ。見るか？」
「うん！」
里穂が頷き、２人は楽器庫に入っていくのだった。

コラムM　ドイツ音名（後書き）

※1
　楽器の基準調については、ＹＡＭＡＨＡのサイトで販売している楽器を基準として書いています。なので、楽器の中にはＧ管など、吹奏楽ではまず使わない調の楽器もあったりします。

１６７話　七夕の音色

京がいつもよりゆったりと指揮台に上がる。
最近合奏中に見せていた厳しい表情とは全く違う、柔らかな表情だ。
そして、そっと指揮棒を上げた。
悟のスネアドラムのリムショットと同時に、トランペットとトロンボーンのロングトーンが鳴り響く。
金管中低音楽器のメロディがゆっくりと流れ、フェルマータで一瞬動きが止まると、すぐにテンポが上がり、前楽器がフォルテで吹き鳴らした。
悟のスネアに乗って木管楽器とトランペットのメロディー。
雰囲気が少し変わり、哲次のタンバリンが８分音符を刻む。
そしてトランペット、トロンボーンに引き続いて一瞬だけのチューバソロ。担当するのは譲だ。上のＦ（エフ）は初心者である譲には少々厳しい音だったが、今回はなぜかすんなりと当てることができた。
木管のメロディが流れ、続いてトロンボーンがハモリ、フルートが同じ音形を吹く。そしてまたトロンボーンといった風に旋律が順繰りで奏でられていく。
トランペットのメロディーにホルンやユーフォニウムの対旋律が響き、オーボエの旋律。フルートの伸ばしで一旦曲が停止した。
清一郎は深く息を吸う。
ここからはサックスアンサンブルだ。吹くのは清一郎と葵、利明、慶太と、一年生中心のメンバー。
（好きに吹いていいぞ）
京は清一郎にそう口パクで言いながら指揮を止めた。
（……おし！）
清一郎はぱっと立ち上がると、ソロを奏で始めた。

素朴な音色。
そう表現すればいいだろうか。まだヴィブラートもかけられない清一郎だが、その音は4月とは比べ物にならないほど太くなり、音質も暖かいものになってきていた。
そこにユーフォニウムのソロが加わり、ソリになる。担当するのは竜一だ。
元々テナーサックス担当だった竜一はサックスの特性をよく理解していたため、上手く2つの音が絡み合う。
それをそっと支えるのは貴弘だ。
この部分はこの三人の世界だ。
ソリの雰囲気を引き継いだまま、他の楽器が加わる。
一旦盛り上がるがまた静かになり、トランペットのソロ。担当は耕一だ。
小4から中2までずっとソロで吹いていたため、彼の音色は遠くまでしっかりと飛んでいく。
それに続くのは里奈のソロだ。さすが7年目とあって音も綺麗で太い。
（綺麗……）
フルートの美香と愛子はその音に聞き惚れている。
さらにホルンソリ。4人の音色がしっかりと響く。
最初はホルンを嫌がっていた功だが、横で吹いている潤や龍也の音色を目指して頑張って吹いている。
中間部の一番盛り上がる部分に差し掛かった。
サスペンドシンバルのクレッシェンドで木管楽器とトランペットが旋律を奏で、ホルンが勇ましく対旋律を奏でる。
スネアドラムとサッシン、ティンパニ、バスドラが一気にロールのクレッシェンドを掛けると、音楽はゆっくりと静まっていく。
泰子のグロッケンがそっと響く。
そして、駿介のオーボエソロで中間部は幕を閉じた。

哲次のティンパニと悟のスネア、麻里のバスドラ、泰子のシンバルがテンポを一気にあげる。
そこから八分音符がどんどん連なっていく。３０分の譜読みだったのでこのあたりは縦が甘かったりするのだが、今日は京も何も言わない。
クラリネットのソリに引き続いてフルートピッコロのソリ。
この曲は全体的にフルートが難しいのだが、たまたま剛と里奈がこの曲をやったことがあったので止まらずに音楽は進んでいく。
そしてキメのリズムで冒頭の旋律が戻ってきた。
ところが、今度はすぐに曲調が変わる。
アルヴァマー序曲そっくりなメロディーが流れ、続いて中間部のサックスソリのメロディーが聞こえてきた。
木管が下降系の音階を吹き、不安げな雰囲気になる。
しかし、そこでウッドブロックが鳴り響くと、まるで雨雲の隙間から現れた月のような美しいユーフォニウムの音色が響いてきた。
竜一の音色だ。
さっきのソリは清一郎が主役だったからそれを立てていたが、今度のソロは彼だけのものだ。
なので、竜一は自分が出せる一番柔らかい音色でその旋律をのびのびと歌いきった。
その後ろを剛が流れ星のように軽やかな連符で駆け抜けていく。
トロンボーンのソロを雪乃が軽やかに吹きこなし、トランペットソロを美咲が吹ききった。
壮大なトランペットのメロディに木管の連符。
スネアが引っ張って曲は前に前にと進んでいく。
一瞬、８分の６となり、哲次のティンパニソロ。
全員が同じ音を吹いて、曲は終わった。

「ただいま～」
「あ、清一郎兄ちゃんお帰り～！」

「お、なに作ってるんだ？」
「七夕のかざり～！」
練習を終えて清一郎が家に帰ると、縁側で小学1年生の弟の清二（せいじ）と5歳の妹の理沙子（りさこ）が七夕かざりを作っていた。
「お兄ちゃんも願い事書こうよ～」
「そうだな～……」
清一郎はしばらく考え込んでいたが、ニコッと笑うと短冊を手に取り、さらっと書く。
「なんて書いたの？」
「読んでみ」
「……金…。全然読めな～い！」
一年生の清二には漢字はまだ難しいようだ。
笑って庭に立てられた笹にくくりつけると、清一郎は自室に上がっていった。

鞄からCDを取り出し、再生する。
そして窓を開けた。
「あ、すっげえ綺麗……」
今日の空は快晴。桜田市街から遠く離れた郊外の山の中にある清一郎の家からは天の川がよく見える。
CDプレーヤーから流れる『Ｔｈｅ　Ｓｅｖｅｎｔｈ　Ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｊｕｌｙ』を聞きながら、清一郎は空を見上げる。
その星空の下に吊るされた短冊には、『絶対金賞！』の文字が揺れていた。

１６８話　不安要素

７月１７日（木）。

練習を終えて、匠は家に戻っていた。

机に向かって部活動の予定表を広げる。

―――――――――――――――――――――

７月１９日（土）　吹奏楽の集い一日目出演（桜田市民会館大ホール）

７月２０日（日）　体育館練習

７月２７日（日）　坂口先生レッスン（桜田市民会館大ホール）

７月３１日（木）　終業式

８月　３日（日）　吹奏楽コンクール島根県大会（大田市民会館）

―――――――――――――――――――――

コンクールまであと１６日。そろそろ詰めの時期に入る。明後日はプレコンクールとも言われる吹奏楽の集いの日だ。

しかしまだまだ課題と言える部分は多い。

そのため今週は分奏と合奏を中心に練習が組まれていた。

～♪

不意に匠の携帯から『ブライアンの休日』が流れる。電話の着信音だ。

ちなみにメールの受信は『海の男たちの歌』にしている。

ディスプレイを見ると泰徳だったのですぐに電話に出た。

「もしもし？」

「あ、匠か？」

「俺の携帯にかけているんだから俺に決まってるだろ」
「あ、そうか」
そう言っていきなり笑いあう2人。
第一志望校に落ちて落ち込んでいた泰徳もすっかり元気を取り戻したようで、元気な声が電話から響く。
「どうした？　お前から電話なんて珍しいな」
「いや、なんか今ちょっと暇だったから電話してみた。最近どうよ？　もうすぐコンクールだろ？」
「そうだなぁ……。部内がちょっとピリピリしちゃってるんだよな」
「あ～、この時期はよくあるよな」
泰徳も電話の先で頷く。

コンクールまで3週間を切り、部はコンクールに向かって一直線だ。
ソリストである駿介や理穂、潤はもちろん、パートリーダーの弥生や奈津美たちも最近はせわしない様子だ。
「でもそれは仕方ないんじゃないか？」
「でもこんなことがあったらちょっと心配になるんだよな……」
そう言って匠は昨日のことを話し始めた。

忘れ物をしたので、匠は楽器庫に向かって歩いていた。
「なんでできないのよ！」
するとサックスがパート練習をしている教室から奈津美の怒声が聞こえてきたのだ。
驚いて匠が中に飛び込むと、清一郎がうなだれて立っており、その横で唯が奈津美をなだめていた。
「どうしたんだよ？」
「あ、匠……」
匠が声をかけると、それを見ていた慶太が状況を説明した。

サックスセクションは『海の男たちの歌』を重点的に練習していたのだが、毎回清一郎が同じ連符で引っかかるというのだ。
それが毎日のように続いていたため、奈津美のイライラが限界に達してしまったらしい。

「なるほどな……」
泰徳が頷く。
「でもあの曲の連符、初心者には結構厳しいんじゃないか？」
「俺もそう思う」
「それならその吉岡さんが今回は悪いだろ。まあ確かにコンクールだからその連符を完璧に吹けないと評価は下がるけど、初心者なら先輩がそこをカバーしてやらないといけないだろ」
「だよな」
「その一年生やめたりしないといいけどな……」
「ああ……」
匠が心配しているのもそこだった。
文化部の中では練習量が多く、人間関係も複雑になりやすい吹奏楽部であるため、大抵の部では少なからず退部者が出てしまう。
松方中学校では匠の在籍した3年間で退部者が出たことはなかったが、泰徳の出身校の常套中学校ではパーカッションの1年生がコンクール前に全員やめてしまったりしていた。

「まあ、気にかけておいたほうがいいかもな」
「そうだな……」
「それじゃ、また。コンクール頑張れよ」
「ああ」
匠は電話を切った。
（こんなんでコンクール大丈夫かな……）
そう心配する匠をしり目に、コンクールまでの時間は刻一刻と迫

ってくるのだった。

１６９話　音が出ない！？

７月１９日（土）。
今日は桜田市吹奏楽の集いの日だ。
桜田中央高校の出番は午後２時２５分から。そのため、午前中に合奏を軽くし、昼ご飯を早く食べて会場に向かう事になっていた。
プレコンクールということもあって、部員たちも気合いを入れて調整をしていた。
「サックスさ～ん。リードはちゃんと予備まで用意しておいてや！」
「はい！」
翔がサックスのメンバーに声をかける。
「でも佐野さん、すみません。大学はそろそろテストなのに……」
唯は申し訳なさそうな顔をして翔に話しかけた。

大学は2学期制なので7月の下旬から8月の頭にかけてテストが集中する。
実際、翔も水曜日にフランス語、木曜日に教職概論のテストが控えていた。
「ええって。　ただ、今日終わったら金曜日まで来れへんから６人でしっかり合わせといてや？」
「はい！」
唯たちとは裏腹に、清一郎は少し元気なく返事を返した。

コンクールが近付くにつれてうまく吹けない自分に嫌気がさしてきている。
特にパート練習でひっかかると奈津美に手厳しく怒られる。
それが嫌で必死に練習するのだが、やはり唯や葵には遠く及ばない。

（やめちゃおうかな……）
無意識のうちにその考えが頭に浮かぶ。
「……こんなときになに考えてんだよ、俺！？」
しかしすぐにハッとして頭を振ると、清一郎は楽器庫に向かって少し急いだ調子で歩き始めた。

「じゃあ、サックス、チューニングＢ♭」
午後１時１５分。会場に到着し、部員たちはチューニング室でチューニングをしていた。

今回の吹奏楽の集いはコンクール通りに時間設定がされている。
管弦チューニングを２８分間、リハーサルを１３分間行い、本番の１５分前には舞台袖に移動するのだ。
そのため、どれだけ楽器のピッチが変わってしまうかなどを予想してチューニングをしなくてはならない。

「清一郎くん、ちょっと高めにしておいて」
「は、はい！」
奈津美の指示で管を少し戻す清一郎。
特にこのようなホールで演奏する際には冷房で管体が冷えてしまうため、チューニングを高めに取っておくとちょうどいい場合が多いのだ。
「入ったらすぐに椅子をうちの合奏体系に直して課題曲からやるからな」
「「はい！」」
京が指示を出し、部員たちはチューニング室を出た。

「桜田中央高校さん、どうぞ」
会場係の女子高生がリハーサル室のドアを開ける。
部員たちはすぐに椅子の数を揃え始めた。

といってもコンクールの楽器編成は結構似ているからすぐに済む。
「ペット5つ、ホルン4つ、ボーン4つ、ユーフォ2つ、チューバ……チューバ1つ足りない！」
「あ、はい！」
先斗の声に、清一郎は椅子を持って振り向く。

ガン！

「「あ！」」
しかし次の瞬間、清一郎のアルトサックスが奈津美の渡そうとしていた椅子にぶつかった。
「大丈夫！？」
すぐに血相をかかえて楽器の状態を見る奈津美。
「ちょっと音出してみて」
そう言われて清一郎はチューニングB♭から音階を下っていく。
「……あれ」
しかし、下のB♭から下の音が出ない。いくら息を入れてもうんともすんとも言わないのだ。
「どうしたんや？」
翔も駆け寄ってきた。
「清一郎くんのアルトが椅子にぶつかってしまって……下の音が出ないんですよ」
奈津美が泣きそうな声で翔に告げる。
「なに！？」
焦って管体をチェックする翔。
「見た目はへこんだりしてへん……。でも下の音が出ない……。あ！」
思いついたかのように翔は下の方のキーを重点的にチェックしだした。
「ここか！」

翔はあるキーを指差す。
「ここのバネ、なくなってる」
そう言って翔は足元を探し始めた。
それを見てサックスのメンバーも探し始める。

サックスはトーンホールという音孔をキー装置で塞いだり開いたりして音を変える。バネはそのキーの開閉に利用されているのだ。
「あった！」
慶太が高く手を挙げる。その手にはバネが握られていた。
「よっしゃ。清ちゃん楽器貸して」
そう言って翔はあっという間に楽器のバネを元に戻す。
「吹いてみ」
清一郎は恐る恐る音階を下がっていく。今度はちゃんと最低音まで音が鳴った。
「よかった……」
清一郎はようやく安堵の表情を浮かべた。
「まあ今回はすぐ直ったし、楽器に影響がなかったからええけど、下手したら今日吹けなかったんやで？　気をつけんとあかんよ？」
それを見て、翔はほっとしつつも注意する。
「はい……」
清一郎と奈津美はうなだれて返事をした。

「終わりです」
そこでリハーサルの終わりを告げる会場係の声がリハーサル室に響く。
「しまった！」
サックスパートのメンバーが真っ青になる。
その雰囲気は部員たちに広がり、リハーサル室内は騒然となった。
「落ち着け！」
しかし、京の大声でざわめきはすぐに止む。

「普段通り吹けば大丈夫だ。しっかり練習してきたんだからそれを出せばいい。いいな？」
「はい！」
部員たちは大きな声で返事を返した。
（……大丈夫かな？）
しかし、サックスセクションのメンバーのひきつった顔を見ている翔にはそれが空元気のように聞こえて仕方なかったのだった……。

１７０話　緊張と覚悟

リハーサル室を出て、舞台裏に着く。
「げ、東もブライアンかよ……」
舞台から聞えてくる音を聞くや否や、庄吾が嫌そうな顔をした。

舞台裏では前の学校の演奏が聞こえるため、もし課題曲などが被っていると緊張が増す場合があるのだ。
しかも前の学校は県代表常連の桜田東高校。
課題曲もしっかりと仕上げてきているし、自由曲の『トゥーランドット』も繊細な演奏。
メンバーの緊張はさらに高まってしまう。

「桜田中央高校さん、どうぞ」
ステージ係のスタッフがメンバーを誘導する。
メンバーたちは硬い表情のまま、ステージへと上がって行った。
打楽器の搬入も完了し、ステージのライトがつく。
「プログラム２２番。桜田中央高等学校。課題曲？に続きまして、自由曲、ロバート・Ｗ・スミス作曲、海の男たちの歌。指揮は西村京です」
京はお辞儀をして、指揮台に上がった。
（表情が硬いな……）
それに不安を抱きつつ、京は勢いよく指揮棒を降ろした。
一発目はトランペットとトロンボーン以外の楽器のＢ♭の和音。
しかし、いつもより音に迫力がない。木管は音に張りがないし、金管は覇気がないのだ。
そのまま第一マーチに入るが、主役であるトランペットの音があまり飛んでこない。
結局課題曲はパッとしないまま終わってしまった。

自由曲もソロはそこそこだったものの、トゥッティに勢いがなく、こちらも特に印象に残らない演奏となってしまった。
拍手もそれに見合ったくらいの大きさ。部員たちは少し暗い顔をして、退場していった。

「……」
午後４時半。京と翔は第二音楽準備室である紙を睨みつけていた。
「先生。これ、どうしましょうか……」
翔も少し表情が暗い。
「講評だからな……。去年も見せたから今年も見せないわけには行かないし……」
「でもこれ見せたら大分ショック受けますよ？」
「だよなあ……」
２人は改めて講評用紙を見つめた。

＝＝＝

えます。

・中村　かおり
課題曲　Ｃ　自由曲　Ｂ

ソロはしっかりと表現できていてよかったと思います。ただ、バンドは全体的にただ楽譜をさらっているだけになっている印象がありました。表現面をもっと豊かにしましょう。

・松原　剛一郎
課題曲　Ｄ　自由曲　Ｃ

音色が全体的に暗く、曲調に合っていない。連符もボソボソしていてはっきり聞こえない。自由曲Ｏｂｏｅソロは Ｇｏｏｄ。

・山根　康平
課題曲　Ｃ　自由曲　Ｃ

低音の安定感はある。しかし、それだけの印象。なにか訴えかけるものがほしい。

＝＝＝

ふたりがため息をついていると、そこに唯が入ってきた。
「先生。積み下ろし終わりました」
「あ、ああ。分かった。ミーティングやるから音楽室に全員集合してくれ」
「はい」
「先生、とりあえず部長には見せていいんじゃないですか？」
翔が京にそう告げる。
「……だな。中島。ちょっとこっち来てくれ」
京は手招きをして唯を呼びよせ、講評用紙を見せた。

「……やっぱり」
そう言う唯の顔は少し暗かったが、落ち込んでいるようには見えなかった。
「落ち込んではないようだな？」
少し意外そうに京が尋ねる。
「今日はいつもの演奏が全然できませんでしたから……。緊張で息が吸えなくなって、楽器に息が入らなくて、楽器が鳴らなくて、それに焦ってさらに緊張して……。負の連鎖でした」
「そうか」
冷静に自分たちの演奏を分析した唯を京は少し驚いた目で見ていた。
「先生？」
唯は不思議そうに京を見つめる。
「いや、なんでもない。中島はこれを部員に見せていいと思うか？」
「あたしはいいと思います。どんな結果でも向き合わないとこの先に進めませんから」
「……そうか。じゃあ、これ、５５部職員室でコピーして持ってきてくれ」
きっぱりと答える唯に京は頷くと、講評用紙を手渡す。
「分かりました」

唯はそう言って準備室を出て行った。

「先生、よかったんですか？」

翔は部員たちの待つ第二音楽室に向かう京に思わず声をかける。

「生徒が覚悟してるんだ。俺が弱気でどうする」

（……やっぱ先生やな）

その姿に恭一の影を見た気がして、翔は笑顔で京の後ろをついて行くのだった。

１７１話　衝撃

７月２０日（日）。

コンクールまであと２週間と迫ったこの日。吹奏楽部のメンバーは体育館に楽器を運搬していた。

今日は運動部が大会等で学校にいないため、体育館で練習できることになったのだ。

「次、バスドラ！」

積み込み隊長の優樹が今日も指示を出して楽器を音楽室から体育館に運ぶ。

昨日の講評を見て、メンバーたちは一旦ショックを受けたようだが、なんとか持ち直したようだ。

「ちょっと、拓也くん！　休んでないで次運んでよ！」

奈津美が少しイラついた様子で拓也に行動を促す。

「今、３往復で運んでばててんだよ！　水くらい飲ませてくれ！」

つっけんどんに拓也は返事を返した。

「……なんか先輩たち今日怖くない？」

「……う、うん」

麻里と里奈は楽器を運びながら少しおびえている。

しかし、２年生の一部は昨日の結果に焦ってしまっているようで、普段あまりない険悪なムードが漂っている。

本番まであと２週間。去年は夏休みに入っているためコンクール１週間前まで午前練習、１週間前からは１日練習という日程を組むことができたのだが、今年は７月３１日まで授業があるのだ。学校によっては昨日から夏休みというところもあるのでここで練習時間に差ができてしまう。

そのため、1分でも早く合奏ができるようにと、部員たちは運搬を急いでいた。

「次、シロフォン！」

階段下でも楽器は運ばれていた。

龍也、先斗、駿介の3人でシロフォンを持ち、階段を下りていく。

その横をひとみと美香が楽器をとりに戻るために通り過ぎる。

（……あれ？）

その時、ひとみは不意に頭痛を感じ、階段の途中で足を止めた。

最近よく頭痛が起きる。

本番が近いことへの焦りからよく眠れないことの影響だろうか。

「痛……」

しかし今日の痛みはいつもよりきつい。ひとみの身体がぐらりと揺れた。

「ひとみちゃん！！」

それに気づいた美香がひとみの手をつかもうとするが一瞬間に合わない。

美香の声に反応して先斗が顔を上げると、ひとみが階段の上の段から落ちてきた。

「！」

先斗は思わずシロフォンから手を離し、とっさにひとみと踊り場の間に身体を入れた。

「うわ！？」

急に先斗が外れたのでシロフォンを持っていたメンバーにも被害が来る。

龍也が上を持ち、先斗と駿介が下を持っていたため、必然的に負担が大きいのは駿介だ。

駿介も楽器を掴み直そうとしたがバランスを崩し、残り5段ほどの階段から落ちる。
とっさに受け身をとる駿介。なんとか頭は打たずに済んだ。
「駿介！」
ほっとした瞬間、龍也の叫び声。
「！」

ドン……。

龍也一人でシロフォンを支えられるはずがなく、シロフォンは落下し、駿介の左腕に襲いかかった。

ゴン！

それから一拍遅れてひとみと先斗が踊り場に転落した。
先斗はひとみの下敷きになり、頭を打つ。
「先斗！」
ちょうどその真下の階段を上がってきていた唯が状況に気づいて駆け上がってくる。
「……」
しかし先斗は反応しない。いや、反応したくても声が出ないのだ。
「さ、先斗！？」
唯が慌てて近づき揺さぶろうとする。

「動かしたらダメ！」

その瞬間、美香が叫んだ。
唯の動きが止まる。
「脳出血してるかもしれない！　早く先生呼んできて！」
「う、うん！」

唯が駆けだす。
「駿介！」
龍也の叫び声。
「……」
先斗の左では駿介が左手を押さえて呻いていた。龍也がそれに駆け寄る。
右ではひとみが震えながら座りこんでいる。
（俺らどうなるんだろ……）
そんなことを考えているうちに先斗の意識は薄れていった。

「先斗！」
ハッと目が覚める。
「よかったぁ……」
気がつくと唯が先斗を覗き込んでいた。その目には涙が浮かんでいる。
「……ここは？」
「病院よ。先斗、階段から落ちて頭打ったんだよ。覚えてないの？」
部屋の中には西日が差しこんでいる。どうやらもう夕方のようだ。
「……そっか」
少し頭痛は残っているが、そんなにだるくはない。
「具合はどう？」
「ちょっと頭痛いぐらいだな」

「よかった……。美香ちゃんがすぐに先生呼んでくれたの。もしあそこであたしが頭揺さぶってたら危なかったって。今先生来るからね」
「ああ」
そこでようやく唯の笑顔が戻ったので、先斗はほっと息をついた。
しばらくして病室に３０代後半くらいの男性医師が入ってきた。
「西掛……先斗くんだね。具合はどうだい？」
「少し頭が痛いくらいです」
「そうか。ＣＴで検査してみたが、どうやら脳震盪を起こしたようだ」
「そうですか……」
そう聞いて先斗はほっとした。漫画や小説などで脳震盪を起こすシーンはいくつもある。これならそんなに問題なく退院できそうだ。
「先生。いつ退院できますか？」
「そうだな。とりあえず一週間は安静にしておいてもらいたい」
「……え？」
それを聞いて2人は言葉を失くす。
「先生、なんでそんなに！？　ただの脳震盪ですよね！？」
「脳震盪をなめてはいけない」
しかしすぐに医師は厳しい口調で先斗をたしなめた。
「脳震盪で一番怖いのがセカンド・インパクト・シンドロームなんだ」
「セカンド・インパクト・シンドローム？」
「一度目の脳震盪から脳が完全回復してない状態でもう一度脳震盪を起こすと、一度の脳震盪でダメージを負っている脳細胞が回復してないところにさらにダメージが加わる。ここまではわかるかな？」
「はい」
「そうなると脳に取り返しのつかないダメージが加わってしまう。それがセカンド・インパクト・シンドロームだ」

「もしそれにかかるとどうなるんですか？」
「重篤な状態に陥る。致死率は５割を超える」
「……そんな」
「安静にしていれば大丈夫だよ。とりあえず今夜は入院してもらって、明日以降は自宅療養してもらえばいい」
「はい……」
「それじゃあ、後でまた来るから」
そう言って医師は病室を出て行った。
「……」
「……」
病室に沈黙が訪れる。
「……駿介どうなった？」
先に口を開いたのは先斗だった。
それに、唯は少しためらいつつ答えた。
「……左腕の骨にひびが入ってた」
「！　じゃあ……」
「コンクールは……まず、出られないって」
「……そんな」
それからまた沈黙が続く。

「……もう面会時間終わりだから帰るね」
雰囲気に耐えられなくなったのか、唯はさっと立ちあがり病室を飛び出していく。
「唯！」
先斗が呼びとめても唯の足は止まらなかった……。

「はぁ、はぁ、はぁ……」
階段を一気に駆け下り、表に出る。
実は唯は先斗に話していないことがもうひとつあった。
「今、先斗にこれ見せたら絶対……耐えられないよ……」

そう言って涙をぬぐう唯の手には退部届けが握られていた……。

172話　心の整理1

7月21日（月）。
今日は午後から今後どうするかのミーティングを行うことになっている。
しかし、午前中なのに音楽準備室には清一郎、ひとみ、唯の姿があった。
「ねえ、もう一度考え直してもらえないかな？」
「……」
「……」
唯が話しかけるが、2人は返事を返さない。
「……はぁ」
唯は深くため息をつく。

昨日、先斗が転落する直前に清一郎から、そして今朝になってひとみからと、立て続けに退部届を出された。
もちろん唯としては、はいそうですかと受理するわけにもいかないので、こうやって呼び出して話を聞こうとしているのだ。
しかし2人が口を開いてくれないため、唯は困り果てていた。

「ちょっと失礼するな～」
すると、そこに翔が入ってきた。
「佐野さん！？　確かテストで金曜まで来れないって……」
「いやな？　清ちゃんの楽器、バネは戻したけど不調あったら悪いからメンテせなあかんと思って。さ、清ちゃん、いこか～！」
「え、ちょっと、佐野さん！？」
唯が慌てている間に、翔は清一郎を連れて準備室を出て行ってしまった。

「清ちゃんの楽器どれやっけ？」
「……これです」
楽器庫に着いて、翔は清一郎の楽器を取りだした。
「ちょっと吹いてみてええか？」
「……はい」
翔は自分の楽器ケースからリードを取り出すと、軽く湿らせてマウスピースに装着する。
そして、ストラップに楽器をつけると大きく息を吸い、音階を駆け上がった。
「うん、異常はないみたいやな」
「すごい……」
その音色に改めて驚く清一郎。
翔の音色は教えてもらうたびに聞いているのだが、このように静かな場所で2人きりで聞くのははじめてだったのだ。
「なんか照れるな。ただ音階駆け上がっただけやん……。そや。なんか聞きたい曲あるか？」
「え？」
いきなりの質問に戸惑う清一郎。
「まあ、とっさに聞かれても困るか。なら俺の好きな曲吹いてええか？」
「はい」
「それじゃあ、聞いてください。『追憶のテーマ』」
そう言って翔は深く息を吸うと、ゆったりとした旋律を奏で始めた。
ビブラートが甘くかけられ、高音から低音までしっかりとコントロールされている。
しかし、それ以上にそれを奏でる翔の表情が楽しげなのに清一郎は気づいた。
自分が演奏している時、こんな表情ができているだろうか。
そう考えたとき、清一郎の目から熱いものが溢れてきた。

それに翔は気づいていたが、気づかないふりをして最後まで吹き続ける。
そして、吹き終わるとそっと清一郎にハンカチを渡した。
「ありがとうございます……」
清一郎はそっと涙を拭いた。

清一郎が落ち着いたと思った頃、翔はそっと問いかける。
「なぁ、なんで部活辞めようと思ったん？」
「……知ってたんですか？」
「知らんかったら今日学校に来てへんわ。昨日西村先生から電話かかってきたんや。来てくれへんかって」
「先生が……」
しばらく沈黙が続く。
しかし、翔は焦って聞きだそうとはしなかった。
清一郎の表情が今日準備室にいた時と少しだけ違ったからだ。

「……俺、部活いていいんですかね」
不意に清一郎が口を開く。
「どうしてそう思ったん？」
「だって、指は全然回らないし、音程ずれるし、昨日なんか俺のせいでリハーサル時間なくなっちゃうし……。俺さえいなきゃ奈津美先輩も怒らなくて済むし、練習も上手くいくんじゃないかなって思っちゃって……」
「何言ってんねん」
しかし、翔はそれを軽く笑い飛ばした。
「3ヶ月やそこらで上手く吹かれたら俺ら真っ青やって。それに清ちゃん、自分では気づいてないかもしれないけどすごい成長率なんやで？」
「そうなんですか？」
「ああ。課題曲って楽器を始めて1～2年の生徒にも演奏できるよ

うな曲って規定があるんやけど、それでも今年の課題曲、特にブライアンは難しいんや」
そう翔が言うのも本当だった。

『ブライアンの休日』は符点８分音符＋１６分音符という通称タッカのリズムが多く、テンポが前に転びやすいのだ。さらにアルトの１ｓｔは高音が多く、音程が取りづらいし、装飾音符も多い。

「でも、最近は全然テンポ転ばんくなったし、上のレやミも締めつけずに出せてる。清ちゃんのいいところはそこやな」
「え？」
「妙な癖がつかずにまっすぐ素直に育ってるとこや！」
そう翔が言って、一瞬間が空いてから清一郎の顔が真っ赤になる。
「何真っ赤になっとるん」
「……いや、そうストレートに褒められるの初めてだったんで……」
「そか。ほな、奈津美先輩にも褒められるようにもっと練習せんとな？」
「はい！」
そう言って翔から楽器を受け取ると、自分のマウスピースにリードをつけて音出しを始める清一郎。

「あ、忘れてた」
それをニコニコと見ていた翔だったが、あることを思い出してまた声をかける。
「清ちゃん！」
「なんですか！？」
「その前にこれ、どうするか決めて！」
そう言って退部届を返す。
しかし、この時点で清一郎の次の行動は読めていた。
「はい！」

清一郎はそれを受け取ると、両手でビリっと2つに破き、ポケットに入れた。
そしてまた楽器を吹き始める。
（いろんな意味で単純……いやいや、まっすぐやな～。清ちゃん）
そんなことを考えつつ、翔はそっと楽器庫を出て行くのだった。

173話　心の整理2

同じ頃、唯とひとみは2人で話を始めていた。
「ねえ、なんでやめようと思ったのか聞いてもいいかな？」
「……駿ちゃんと先斗先輩に申し訳なくって」
そう言って、ひとみは鼻をすする。
さっきからずっとひとみは泣いていた。
2人きりになった瞬間、涙を流し始めたのである。
「駿ちゃん？　浦田くんのこと？」
「はい……」
それを聞いて、唯は大体ひとみの言いたいことが分かった気がした。

今回の事故はひとみがバランスを崩したことから始まった。
だから2人がけがをしたのは自分のせいだ、とひとみは言いたいのだろう。
「中ちゃん、ちょっと」
そこに、翔が戻ってきた。
「は、はい。ひとみちゃん、ちょっと待っててね」
そう言って唯は準備室を出て行った。

ひとみはうつむいて、昨日のことを考えていた。
自分がちゃんと美香の手を掴んでいれば、それでなくても手すりを掴んでいれば。
そうすれば先斗が自分をかばって頭を打つこともなかったし、駿介が怪我をすることもなかったのだ。

ドアの開く音が聞こえた。
ひとみは唯が帰って来たと思って顔をあげた。

「……駿ちゃん」
そこに立っていたのは駿介とアマンダだった。
駿介の左手は三角巾で吊られている。
「どういうことだ」
駿介の顔には怒りが浮かんでいる。
「コンクール出ないって言っただけじゃなく退部届け出したって聞いたぞ。本当なのか？」
淡々と尋ねる駿介。その目はいつもと全く違う、厳しいものだ。
「だって！　あたしのせいで駿ちゃんコンクール出られなくなったのにあたしがのうのうと出ることなんてできるわけないじゃない！」
思わず立ち上がり言いかえすひとみ。
普段はおとなしいひとみだが、幼馴染みの駿介にはいろいろ言えることもあるのだろう。
「それで逃げ出すのか！？」
それを聞いて、駿介も声を荒げた。
「逃げ出したくもなるわよ！　ソリスト2人も怪我させてしまったんだもの！」
「それは卑怯でしかねえよ！　現実に向き合えよ！」
「卑怯……？」
その次の瞬間、ひとみの目に涙がまた浮かぶ。
「卑怯でもいいよ……。駿ちゃんの音がない海男なんて……海男じゃないもん！」
「ここまで言っても分かんねえのか！？　俺も同じようにお前の音がない演奏が嫌なんだよ！」
そこまで言い切った瞬間、ひとみの動きが止まった。
「……」
「俺の怪我は遅くても来月の中旬には治る。先斗先輩も一週間ぐらいで復帰できる。でもお前がここで辞めちゃったら俺らの音は二度と作り上げることはできないんだよ！」
「……」

「頼む。俺たちが演奏に復帰できるまで待っててくれないか？」
「……うん」
そう言って、ひとみは涙をぬぐった。
「この2人すごいネ。お互い大切に思い合ってる」
戻ってきた翔と共に、その光景を見ていたアマンダは呟く。
「そうやな」
そう返しつつ、翔は唯のことを考えていた。

「奈津美」
同じ頃、唯は学校前の公園に来ていた。
ミーティングの前にどうしても話しておきたくて、奈津美を呼び出したのだ。
「どうしたの？　部活までまだ2時間あるのに」
いつもより少し憂いがあるが、笑顔を唯に向けてくる奈津美。
「ちょっと話、しておきたいなって思って」
「なら、慶太くんも呼ばないとだめじゃない？　サックスの2年3人で話そうよ。あたし呼ぶから！」
サックスセクションのことについてかと思ったのか、奈津美が携帯を取り出す。
「奈津美と話しておきたかったの」
「……あたしと？」
それを聞いて、奈津美は少し意外そうな顔をした。
「奈津美、最近部活楽しい？」
「……うん」
少し間が空いて答えが返ってくる。
「あたしには正直そう見えないんだ」
「……」
「コンクール近いから？」
「……正しいのか分からなくなっちゃって」

「……何が？」
「パート練習のやり方」
「……パー練？」
「うん」
そう言って、奈津美はブランコに腰かけた。
唯もその隣に座る。
「コンクール出るなら完璧にしなくちゃいけない、って思って最近厳しめにパート練習してきた。細かい連符も正確にできるように、音程もぴったり合わせないと、歌い方も……って。でもなんかから回っちゃってるのかなぁって最近思うんだよね」
「たとえば？」
「清一郎くんが最近あたし見ておびえてる気がするし、葵ちゃんや利明くんもなにか言いたいことがありそうな時でも言ってくれない。なんか一年生と壁ができちゃってる気がするんだ」
「そっか……」
「やっぱり、最近のあたし、怖いのかな」
「……まあ、優しくはないかもね」
「……」
ずばりと言われて、奈津美は少し肩を落とす。
「確かにコンクール出るなら締めるところは締めないといけないけど、奈津美、最近はパー練の休憩のときもずっとピリピリしているでしょ？　あれはよくないと思う」
「え？」
意外な指摘に驚く奈津美。
「無意識かもしれないけどね。そういう先輩のイライラって後輩によく分かるものなんだよ。だから後輩も奈津美に話しづらいんだと思う」
「……じゃあ、あたしが壁作っちゃってたんだ」
「そうとも言えるかもね」
「……じゃあ、あたしはどうしたらいいのかな？」

「奈津美らしく仕切ればいいんじゃないの？」
「……あたしらしく？」
「完璧求めるのも大切だけど、どうせやるなら真剣に、でも楽しくやりたいじゃない。だから普段の奈津美と、厳しい奈津美を上手く使い分ければそれで十分だと思うよ」
「うん、分かった……あれ？　その言い方だとあたし二重人格みたいじゃない！？」
「いや、実際怖い時はメチャクチャ怖いもん」
「ひっど～い！」
そう言って笑い合う2人。
（後は、先斗だけか……）
奈津美の笑顔がいつものものに戻ったことに安堵しつつも、唯は先斗のことを心配するのだった。

１７４話　心の整理３

午前１０時半。先斗は退院の準備を終えて、病室に座っていた。
もうすぐ担当の医師が来て今後の通院について説明があることになっていた。
「……田口と舞がいるから大丈夫か」
先斗は自由曲のピアノのことを考えていた。

先斗は医師から今週いっぱいは楽器を吹いてはいけないと言われている。
医師の許可が出るのが早くて日曜日。遅くて月曜日。
それから練習に参加したとしても5日しか時間はないし、音のバランスを崩しかねない。そのため、先斗は今年のコンクールに出ることを諦めようと思っていたのだ。
チューバは中学から一緒で信頼がおける貴弘に、ぐんぐん力をつけてきている譲がいるし、低音全体で考えてもバスクラ1、バリサク1、バスーン1、バストロ1、コントラバス2と、十分な編成だから先斗が1人抜けても支障はなさそうだ。
ピアノも先斗以外に梓と舞が演奏できるし、トランペットもクラリネットも人数が足りないわけではないから大丈夫だろう。
その考えは今朝の時点で唯に電話で伝えていて、先斗自身が今日のミーティングで話すつもりだった。

ガラッ！

ドアが開く。おそらく担当の医師だろう。
先斗はそっと顔をあげた。
「……庄吾？」
そこには庄吾が仁王立ちしていた。その顔は堅い。

「……来い」
そして先斗の腕を掴む。その力は強く、痛いくらいだった。
「来いって、今から医者から話聞くことに……」
「話はつけてある」
そう言って、庄吾は先斗を病室から連れ出した。

「で、なんだよ。こんなとこまで連れ出して」
2人は病院の屋上に来ていた。
まだ午前中のため少し涼しいが日差しは強く、干されたシーツに日光が反射して眩しい。
「唯から全部話は聞いた」
「そうか」
「……お前本気なのか？」
「ああ。5日前に戻ってもバランス崩すだけだと思うから」
「……出ろ」
それを聞いて、庄吾は携帯電話を取り出した。
どうやら通話中になっているようだ。
「お前病院内なのに携帯使っちゃ……」
「だから屋上に来たんだろうが。いいから出ろ」
そう言われて、先斗は電話に出た。
「もしもし？」
「あ、西掛先輩ですか」
「……泰徳くんか？」
電話に出たのはなんと愛媛にいる泰徳だった。
「なんで……」
「なんで？　随分とのんきな人ですね。正直幻滅しました」
「……」
「何で黙ってるんですか？　……はぁ。尊敬して損しましたよ」
「……尊敬？」
「はい。実は俺、先輩のピアノの腕を尊敬していたんですよ。でも

それは間違いだったみたいで」
「尊敬ってそんな大げさな…。俺なんかよりずっと上手い人はプロにたくさんいるだろ？」
「確かにそうです。でも、プロとアマチュア比べてどうするんですか？」
「それは……」
「西掛先輩は謙虚です。だからこそ比べてしまうのかもしれない。でも……」
「……？」
「西掛先輩には『譜読みの速さ』という武器がある」
「譜読みの速さ？」
「１２月にピアノ伴奏してもらったあの曲、覚えてますか？」
「『大きな古時計変奏曲』か？」
「はい。あれ、俺インテンポで弾くのにかなりかかったんですよ？なのに先輩はたった１５分でインテンポ、いや、それ以上に持ってきた」
「……」
「相当のキャリアがあってこそのあの技術です。だからこそ俺は西掛先輩を尊敬した」
「……」
「それに、ここで先輩が抜けることが一番バンドのバランス崩すって分かってます？」

「え？」
「え？って……。そんなんでよく学指揮クビになりませんでしたね？　俺なら殴ってますよ」
「……」
「よく考えてください。これまでずっと先輩が低音の中核だったんです。後輩たち、いや、低音全体が先輩の音に少なからずついてきているんです。もしかして気づいてませんでした？」

「……」
「低音は合奏の核。その中の核の役割をしているのが、西掛先輩。あなたです」
「……」
「核の中の核が抜けたら、それこそ合奏は成り立たなくなる。それを分かっての上なら退部したって俺は何も言いませんし、言えません。先輩の判断ですから。でも、なんで俺がわざわざ電話したか……分かります？」
「……」
先斗は答えることができなかった。
「なんで黙ってんだ？　分かんねえのか？　……分からないよなぁ？　てか分かってないからこんなことするんだよなぁ！？」
泰徳の口調が変わる。
「俺よりもキャリアがある人間が、合奏の上での低音の重要性を俺より分かってなかったからだよ！　自分がどれだけ恥ずかしいことしてるか分かってんのか！！」
泰徳の言葉に先斗はハッとなった。自分がそんなに高く買われていたとは思ってもみなかったからだ。そして、浅はかな考えをしていた自分が恥ずかしくなった。
「あの１５分の意地、また見せてくださいよ」
「……ああ」
先斗はなんとかそう声を発した。

「「おっしゃあああああ！！」」

その次の瞬間、干されたシーツの陰から貴弘と譲が飛び出してきた。
「バッシー、斎藤……」
先斗は２人の姿を見て、驚いた顔をする。
「よかったっす！　先輩いないと低音不安でしょうがないですもん

！」
貴弘は顔をくしゃくしゃにして喜んでいる。
「そうですよ。ただでさえ自由曲で抜けちゃうのに課題曲までいないなんて考えられませんから！」
普段感情をあまり見せない譲も嬉しそうな顔をしていた。

「……なあ、庄吾」
「なんだ？」
「頼られることって……こんなに嬉しいことなんだな」
「今頃気づいたか？」
「……ああ」
そう言って涙を流す先斗を、庄吾は優しいまなざしで見つめていた。

175話　そして、また

そして午後。
第二音楽室は吹奏楽部員が誰一人と欠けることなく揃っていた。
もちろん清一郎とひとみ、先斗の姿もある。
「……では、これからミーティングを始めます」
京が前に立つ。
「まず、残念なお知らせから。オーボエの浦田が左腕にひびが入る怪我をしてしまったからコンクールに出られなくなってしまった。後、チューバの西掛がドクターストップで今週いっぱい楽器を吹くことができない」
部員たちに動揺が広がった。
「今後のことについてだが……」
それが収まるのを待って、京は話を続ける。
「まず、運搬。打楽器の運搬は慎重に安全に行うこと。特にマリンバやシロフォン、ビブラフォン、チャイムなどの大型鍵盤楽器とティンパニの運搬には気をつけること。今回はまだシロフォンだったから軽かったけどマリンバなどの重い楽器だったらもっとひどいことになっていたかもしれない」
「はい」
部員たちは神妙な顔で返事を返した。
「コンクールについてだけど、浦田もコンクールは絶対出場してほしいと言っているから県大会には予定通り出る。ただし中間部のソロは誰かに吹き替えてもらわないといけない。だから急だがオーディションをする」
その発言に部員の顔色が変わった。
「対象はフルートとB♭クラリネット、アルトサックスのメンバー。浦田のソロの部分を吹いてもらう。」
「はい」

「じゃあ、解散」
その声で、部員たちは楽器を出すために部室に向かった。
楽器を吹くことができない先斗と駿介は2人その場に残る。
「……先輩、大丈夫でした？」
「ああ……。駿介」
「なんですか？」
「俺のせいで怪我させてしまってすまない」
そう言って先斗は頭を下げた。
ひとみを助けるためとはいえ、シロフォンの転落の原因は先斗が抜けたことだ。恨まれてしまっていても仕方ないと先斗は思っていた。
「頭上げてくださいよ。もし、先輩と逆の位置にいたら絶対俺が先輩と同じことしてましたから」
そこで駿介は言葉をいったん切る。
「ひとみを助けてくれてありがとうございます」
そして、深々と頭を下げた。
「なあ、もしかして駿介、柳田と……」
「……分かります？」
「ああ。今気づいた」
「……あ～あ。今まで隠してたのに」
「いいんじゃないか？　でも一年生にも部内カップルがいたかぁ……」
「……からかわないでくださいよ」
顔を少し赤らめる駿介。
「悪い」
そう言って、先斗と駿介は笑い合うのだった。

一方、音楽準備室ではオーディションが始まっていた。
「失礼しました」
クラリネットの一番最後の対象者である一が音楽室を出て行った

ところで、京はふっと息をつく。
「来年はコンクールメンバーもオーディションすることになるんだよなぁ……」
そしてポツリとそう呟いた。
現在桜田中央高校の部員数は４９名だ。大編成の部の定員は５０名（※１）のため、今年の時点でメンバーはギリギリ。来年度はほぼ確実にオーディションをすることになるだろう。
「気が重いけど……。やるしかないよな」
「失礼します」
そこでノックの音がして、葵が入ってくる。
「よし、じゃあさっそく聞かせてもらおうか」
京は気を引き締め直し、その音を聞くのだった。

練習が終わり、先斗と唯は帰路についていた。
「まさかあたしとはね……」
唯が呟く。
「いいんじゃないか？　お前ゆったりとしたソロ得意だし」
それに先斗がフォローを入れる。
オーディションの結果、唯がソロを担当することになったのだ。
ピアノの担当も引き続き先斗がやることになったので２人のデュエットということになる。
「……先斗。一番最初の本番覚えてる？」
「ああ。『ＳＡＫＵＲＡ』だろ？」
「うん。あの時も一緒にソリやったよね」
「あれからもう１年以上経つんだな」
「……早いね。あの時は１３人だったのに気づいたらもうあんなにいっぱい仲間がいる……。すごいよね」
「だな。この調子だとあっという間に引退まで行ってしまいそうだ」
その言葉に、唯の顔が少し暗くなる。
「引退かぁ……。よく考えたらこのコンクールが最後になる可能性

もあるんだよね……」
「かもな」
桜田市内の高校の中には2年生のうちに引退してしまう吹奏楽部もある。特に進学校である桜田東高校は１２月の定期演奏会で引退とかなり早い。
「コンクール終わったら2年生で話し合わないと……」
「ただ、その前にコンクールだ。……絶対金賞取ろうな」
「うん！」
唯は笑顔で頷く。
そして2人は家に向かってゆっくりと歩き始めた。

１７５話　そして、また（後書き）

※１
２００８年の時点では高校大編成の部の定員は５０名です。２００９年から５５人になります。

１７６話　変化

「よし、これならもう楽器を吹いても大丈夫だよ」
「本当ですか！？」
医師の言葉に嬉しそうに反応する先斗。
「ああ。運動もしていい。体育も出ていいよ」
「ありがとうございます！」

７月２７日（日）。
先斗は医師に楽器演奏の許可をもらうために桜田市民病院を訪れていた。
言われていた通りおとなしくしていたため（部活には顔を出していたが）、セカンド・インパクト・シンドロームも起こすことなく、無事に回復したようだ。
先斗は笑顔で病院を出た。
「さてと……」
ふと時計を見る先斗。
もう１２時を回っている。
「やべ」
そう呟くと、先斗は走り出した。
桜田中央駅にたどり着くとすぐに駐輪場に止めておいた自転車に飛び乗り、桜田市民ホールに向かって走らせ始める。
桜田市民ホールまでの約３キロの道のりを必死に飛ばす先斗。
汗もかいているが、そんなことは気にしていられない。
そして１５分後。桜田市民ホールにたどり着いた先斗は裏口からホール内に駆け込んだ。
「先斗！　遅いぞ！」
ちょうどエントランスに出てきていた庄吾が先斗に気づく。
「悪い！　病院が混んでた！」

「で、診断は？」
「楽器吹いていいってさ！」
「よし！　楽器舞台裏にあるから出して楽屋で音出ししてこい！　チューニング３０分後に始まるから！」
「了解！」
先斗はドアをそっと開けて、舞台裏に入った。
舞台では桜田商業高校が通し練習をしていた。ちょうど課題曲の中間部に入ったところだ。
ちらっと見てみるとチューバは悠莉と美晴の他に男子が１人。
少し慣れない手つきでチューバを持っているのでどうやら初心者のようだ。
桜田商業高校の課題曲は？の『天馬の道～吹奏楽のために』。
先斗としてはこれが演奏したかったのだが、打楽器の量が半端なく多く、去年の曲決めの時に人数的に厳しいだろうということでボツになった。
まあ、打楽器の１年生が４人も入るとは想定外だったので仕方ないと言えば仕方ないが、先斗はちょっとそれが残念であった。
桜田商業高校は例年通り木管低音とコントラバスが充実している上に、チューバも今年は３人いるので低音がどっしりしている。『天馬の道』は低音が目立つ部分も多いので現在の編成にはぴったりの曲だ。
再現部に入り、低音の刻みの上で木管が歌いだす。
その音色を聞きながら、先斗はそっと自分の楽器ケースに近づく。
そして楽器ケースに触れた瞬間、課題曲が終わった。
何人かの足音が聞こえて、また静まる。
自由曲が始まるようだ。
吹奏楽の集いではタイミングが合わなくて桜田商業の演奏が聴けなかったので先斗は桜田商業の自由曲を知らなかった。そのせいか、つい耳がそっちに向く。
ティンパニの強打から木管楽器のパッセージが始まる。

（早い！？）
テンポの速さに驚く先斗。さらに聞いているとそのパッセージは8分の7拍子のようだ。
それがおさまると低音楽器のメロディ。チャイムが鳴り響き、いったん木管のパッセージをはさみ、今度は低音の主題が掛け合いとなってサックス、トランペットに受け継がれる。
その勢いのまま演奏は進むが、急にロングトーンに入る。
そしてゆったりとした木管のメロディが奏でられ始めた。
「……『ゴッドスピード！』だな」
そこに匠がやってきた。
「……だな」
先斗も曲を知っていたので頷いた。

この曲はチューバを含む金管中低音楽器がよく目立つ。
木管の桜商（サクショウ）と言われていた桜田商業には異例の選曲と言えるかもしれない。

「悠莉すっげえ鳴らしてる……」
中学の時からは考えられないほどの悠莉の音量に、先斗はおもわず息をついてしまった。
「……今年は同じ舞台に立つんだよな」
「だな」
「……頑張らなきゃ」
先斗は拳を握りしめてそう呟いた。

（ちょっと変わった……かな）
匠は先斗の様子を見てそう感じた。
泰徳に渇を入れられてから、先斗は少し前向きになった気がする。
以前の先斗ならレベルの高い演奏を聞くと不安げな表情をしていたのだが、今回はそれがないのだ。

「先斗。そろそろ音出ししないと間に合わないぞ」
演奏を聴く先斗にそっとそう声をかけ、匠は舞台裏から出ていった。

177話　ホール練

午後2時。
部員たちはチューニングを終え、スタンバイしていた。
今からレッスンが始まるのだ。
客席にはホール練習を終えた桜田商業高校の生徒が座っている。
彼らの楽器は舞台裏にあるため、桜田中央高校のホール練習の時間が終わらないと彼らは積み込みができないのだ。

不意に客席の脇のドアが開き、京とともに坂口　成美先生が入ってきた。
成美は桜田西高校出身のクラリネット奏者だ。昨年も合奏指導を1度してもらったことがある。
「こんにちは！」
部員たちは成美を見ると、揃って挨拶をした。
「こんにちは！　相変わらずこのバンドは挨拶がいいね。いいこといいこと！」
笑顔でそう言うと、成美は京の方を向く。
「それじゃあ、一回聞かせてください」
そう言って、成美は客席の真ん中のあたりに座る。ちょうど審査員が座るあたりだ。
「はい」
京も少し緊張した様子で指揮台に立ち、そっと指揮を降ろした。

通しが終わり、今度は成美が指揮台に立った。
「じゃあ、まず気になったところから言っていくわね」
成美は指示を出し始める。
「まず、課題曲の一番最初。高音木管は装飾音符があるけどあくまでも装飾は装飾だから音の重心は8分音符に持ってきて。じゃない

と金管に合わない」
「はい！」
「トランペットとトロンボーン。ベルの高さにもっと気を使って。ちょっと下げすぎだからメロディのところで音が飛んでこないわ」
「はい！」
「後、バスドラは全体的にもう少し出して」
「はい！」
「トリオは最初の４小節とその後のコントラスト大事にして。ホルンはちょっとだけ出しめ、後はもう少し押さえて。Ｅからはホルンもう少し落としていい。もう少しクラの色が欲しいかな」
「はい！」
どんどんと成美の指示が飛んでいく。その指示はどちらかというと音のバランスに関することが多かった。
ホール練習では音楽室と違って音の飛びまでよく分かるため、最終的な音のバランスなどもここで取ることになるのだ。
「そこからのトライアングル。ティンパニからの持ち替え、せわしないから誰か他の人がやった方がいいかもしれない。そうだな、そこの男の子やってみて」
「え？　は、はい」
そう指示されたのは哲次。
哲次は慌ててトライアングルを構える。
「一回トリオから！」
「「はい！」」
哲次はじっと指揮を見つめると、出番に備えてトライアングルを掲げた。
涼やかな音色が会場に響き渡る。哲次はテンポキープが得意なのでずれることなく演奏が進んでいく。そしてＦに入ったところで成美は指揮を止めた。
「うん。これなら大丈夫ね。ここのトライアングル、頼むわね」
「は、はい！」

哲次は嬉しそうに返事をした。
「じゃあ、もう一度最初から！」
「「はい！」」
成美の声に、部員たちは元気に返事を返し、楽器を構えた。

「ふう……」
レッスンが終わり、楽器を片付けたところで先斗はふっと息をついた。
「先〜斗」
そこに悠莉がやってきた。
横には美晴ともう一人のチューバの男子がいる。
「お、悠莉」
「桜央めっちゃくちゃ人数増えてない？」
開口一番そうつっこむ悠莉。
「それ言われるのも飽きたな。桜商も人数増えたろ？」
「3学年で50人だもん。例年とほぼ変わらないよ。でも全員出られることになってよかった。後1人多かったらオーディションだったもん」
「うちも結構ギリギリだったな。あ、そう言えばチューバ後輩入ったんだな」
先斗は悠莉たちと一緒にいる男子を見る。
「うん。あ、村田くん。あたしの中学の同期だった西掛くんだよ」
「桐ヶ丘第三中学出身の村田（むらた）　大貴（たいき）です。高校からチューバ始めました！　よろしくお願いします！」
大貴は見た目は完璧に運動部、といった感じだ。実際中学時代はソフトテニス部だったらしい。
「桜田中央高校の西掛　先斗です。中学からチューバ吹いてます。よろしく」
先斗は笑顔で自己紹介をした。
「あ、そうだ。こっちも後輩紹介しとくよ。バッシー！　斎藤！

ちょっと来てくれ！」
その声を聞いて貴弘と譲が近づいてくる。
「なんすか？　あ、悠莉先輩！」
「バッシー、久しぶり！」
悠莉はそう言って貴弘に笑いかける。
「村田くん、彼は中学であたしの一個下の後輩だった大橋　貴弘くん。通称バッシー」
「通称って……」
貴弘が苦笑いする。
「あれ？　そっちはチューバ２人入ってるじゃない！　いいな～」
悠莉は譲の方を見てそうこぼす。
「そっちは同じ学年に２人いるからいいだろ？　ほら、斎藤自己紹介」
「あ、はい……。斎藤　譲です。高校からチューバ始めました。よろしくお願いします」
「あ、村田くんと一緒だね……。村田くん？」
悠莉が大貴の方を向くと、大貴は不思議そうな顔をして考え込んでいた。
「どうしたの？」
「いえ、たぶん人違いなんで」
「人違い？」
「はい。昔聴いた話なんですけど不良の中でめちゃくちゃ喧嘩が強い奴がいて、そいつと斉藤くんの名前が一緒だっただけです。でもそいつが吹奏楽やるわけないですしね……」
「……だな。そういえば今年自由曲大変そうだな」
心の中で苦笑いしつつ先斗は気にしていない様子で話題を変えるのだった。
「ふう……」
積み込みのために悠莉たちが立ち去ると、譲は力が抜けたのかそ

の場に座り込む。
「有名人だな」
「うっせえ」
そう言って貴弘がからかうと、譲はジロっと貴弘を睨みつけた。
譲の一重で切れ長の目で睨まれるとかなり怖い。
「おお怖。で、なにやったんだよ？」
「……絡まれてそいつを振り払ったら１０人くらい仕返しにきたから全員張っ倒しただけだ。まあ、それから絡まれることなくなったけど」
「……十分強いよ」
そう言って貴弘はあきれる。
「ま、すっかり見た目も変わったから今は分からないみたいだけど」
「ふ～ん。ま、いいや。とりあえずコンクール頑張ろうぜ」
「ああ」
譲は何気なく返しつつ、貴弘に感謝していた。
この話を聞いたら大抵みんな自分から離れて行ってしまった。
ただ、貴弘は全く気にしないで接してくれている。
「バッシー、斎藤！　積み込みの順番来た！」
先斗が舞台裏から呼ぶ。
「はい！　譲、行くか」
「ああ！」
譲は返事を返すと、貴弘とともに先斗の方へ駆けて行くのだった。

１７８話　見えてきた先

８月２日（土）。
コンクール前の一週間はあっという間に過ぎ、明日はいよいよコンクール本番だ。
コンクールの会場である大田市民会館は島根県のほぼ中央に位置する大田市にある。
桜田市からは車で約１時間。今回の桜田中央高校の本番は午後２時４０分で演奏順も１２番目なので去年よりかなり時間に余裕がある。
そのため、部員たちは午前中にさっと音出しと合奏をして、昼前に大田市民会館に向かうことにしていた。

「よし、これでいいだろう。今日はこれで終わり。明日に備えてゆっくり今日は休んでくれ」
京はそう言って、指揮棒を降ろした。
「起立！」
「「ありがとうございました！」」
唯の掛け声で部員たちはさっと立ちあがり、挨拶をする。
京は笑顔で指揮台を降りた。
「ミーティング始めます」
京と入れ替わりに唯が前に立ち、指示を出し始めた。
「まず、明日の流れから確認します。予定表を出してください」
唯の声に部員たちは各々プリントを取り出す。
「明日の朝は午前８時に集合して、各自音出し。８時４５分からパートチューニングを済ませて、９時から１時間西村先生に合奏をしてもらいます。合奏が終わったらすぐに楽器を片付けて積み込みの準備。１０時半にはトラックが到着するので管楽器の人は早めに自分の楽器を片付けて打楽器を手伝ってあげてください。管楽器でバ

スの中に持ち込む楽器はピッコロ、フルート、オーボエ、エスクラ、ベークラです。それ以外はトラックに積むので積み込み場所に持って行っておいてください。１１時にはバスに乗って、大田市民会館には１２時に到着予定です。楽器を降ろして展示室に置いたら、出場者リボンを配るので、それをつけて会場に入って鑑賞をしてください。湯釜高校の演奏が終わったら管楽器の人はすぐに楽器を準備して集合場所に移動します。そこからチューニング、リハーサルと続いて、中ホールで待機します。そして本番です。本番が終わったら上手から外に出て、写真撮影に移ります。打楽器の人はさっと搬出を済ませてなるべく早く写真撮影場所に移動してください。その後、楽器を速やかに片付けて積み込みが終わったらまた鑑賞です。午後６時５分から表彰式で、終わったらバスに乗って学校に戻って積み下ろしをして、解散です。長い１日になるので、ベストな状態で本番を迎えられるように今日はしっかり休んでおいてください」

「「はい」」

「それじゃあ、明日は頑張りましょう！」

「「はい！」」

「起立！　お疲れさまでした！」

「「お疲れさまでした～！」」

合奏が終わると、部員たちはそれぞれクールダウンを済ませて楽器を片付け始める。

先斗も管の水抜きを済ませると、かばんからオイルやクロスを取り出して手入れを始めた。

「２人ともちゃんとロータリーの手入れしておいてくれよ」

「「はい！」」

先斗が貴弘と譲に声をかける。

桜田中央高校にはチューバが６本ある。今の人数から考えるとかなり恵まれた本数だ。前身の桜田西高校にはよっぽど予算があったのだろう。

そのうちロータリー式のチューバは3本。3人ともロータリー式を利用している。
「コンクール終わったら水通ししないとな」
「ですね」
先斗の言葉に貴弘が答える。
「去年は1人で10本手入れしたからな、今年は楽だ」
「10本!? なんでそんなにあるんっすか……」
あきれた様子でつぶやく貴弘。
「西村先生にマーチングチューバも手入れしろって言われたからな……」
「……ご愁傷様です。そう言えば桜央ってマーチングやらないんですか?」
「そうだなぁ……。経験者もそこそこいるし人数的にも問題ないからできるんじゃないか? 西村先生も中高マーチングやってるから指導してもらえるだろうし」

現在桜田市周辺では桜田第一中学校、桜田第三中学校、佐倉中学校がマーチングコンテストに出ている。
「ですね。ただみんなが乗り気になってくれるかどうかが問題ですけど……」
マーチングは楽器を持ったまま歩いたり、パフォーマンスをしたりするので、体力的に少しきついのだ。
「ま、コンクール終わったらミーティングで提案してみる。コンクール終わったら話し合うことたくさんあるなぁ……。定期演奏会の話に、チャリティコンサートの曲目、文化祭の曲目、マーコン出るんだったらそれのコンテを誰かに書いてもらわないといけないし。あ、俺らの引退の時期の話し合いもしなくちゃ……」
「……引退ですか?」
最後の言葉に貴弘の声のトーンが下がる。
「ああ。もしかしたら2年生はこれでコンクール最後になるかもし

れない」
「……」
それを聞いて貴弘は暗い表情になった。
「まだ、決まったことじゃないからそんなに深刻になるなよ。少なくとも今年はずっといるからさ」
「はい……」
貴弘はそう返事しつつ、少し上の空なまま楽器を片付けた。

「バッシー！　帰ろうぜ」
耕一と良樹が貴弘を呼ぶ。
「ああ」
貴弘は2人と一緒に音楽室を出た。
「昼飯食ってかないか？」
今日は午前練習のため、まだ時間は１２時半。
「いいな。じゃあ、ファミレスでも寄ってく？」
「だな」
そう言って、３人は近くにあるファミレスに向かって歩き始めた。

179話　今は先へ

ファミレスに着くと、3人はさっそくメニューを広げて料理を注文し、ドリンクバーを片手に雑談を始める。
「いよいよ明日か～。もうあれから1年経つんだな」
良樹が感慨深そうに呟く。
「ああ。去年は……。立て直すのに精一杯だったな」
苦い顔をして貴弘は返した。
「……去年なんかあったの？」
耕一が不思議そうに尋ねる。
「……ああ、マッツンは中学違うから知らないよね」
そこで良樹はちらっと貴弘の方を向く。
貴弘が頷いたので良樹は続けた。
「実はうちの中学の吹部、一昨年部活崩壊しちゃったんだよ……」

「……大変だったんだな」
一昨年のことを良樹が話し終えると、耕一はそう呟いた。
「まあ、新年度にはなんとか部員は戻ってきたんだけどな。ただ夏のコンクールは結果が芳しくなかった」
「……そっか」
「……話変えるか。そう言えば2年生の先輩、コンクール終わったら引退の時期決めるらしいよ」
「大学受験あるもんなぁ……。庄吾先輩も今度大学見学行くって言ってたし、先輩達考え始めてるんだ」
感心した様子で呟く耕一。
「え？　そうなの？」
「うん。中央大学に行くって。まあ、人に会うためってのもあるみたいだけど」
「へえ……。そういや加奈子先輩もお盆帰省するついでに愛媛の大

学見てくるって行ってたな」
「……なんかさびしくなってきちゃうな」
貴弘はため息をつき、先斗と悠莉が引退したときのことを思い出していた。
２人が引退して初めての合奏。普段のとおり４つ椅子を用意して、後輩の真由と一緒に苦笑いをしたことを今でも覚えている。
「もし桜田東くらいの引退の早さだったら……。あと４ヶ月？」
「……短すぎるよ」
「うん……」

「ちょっと、あんたたち本番前日になんてしけた顔してるのよ」
突然の声に３人が振り向くと、そこには千秋と舞が立っていた。
「お前ら、どうしたんだよ」
「どうしたもこうしたもないわよ。あたしと駒ちゃんでお昼ご飯食べにここ入ったらあんたら三人がしけた顔してるんだもん。このままほっといたらそれが気になってご飯がまずくなるじゃない」
「……先輩たちの引退の話してたんだよ」
「そう。それで？」
「それでって……」
「そんな先の話ししても仕方ないじゃない。しかもコンクールの前の日に」
「先って言ってももしかしたら今年いっぱいで先輩いなくなるかもしれないんだぞ？」
「今年一杯？　それでも４ヶ月あるじゃない」
「……」
男子達は何も言えずに黙りこむ。
「確かにいつか先輩が引退する時は来るわ。でもそれはいつかはまだ分からないでしょ？　なら今はそれを気にするよりどうやって本番に備えるかを考えた方がよっぽど有益よ」
「……駒沢」

貴弘が千秋に声をかける。
「なによ」
「意外とお前しゃべるんだな」
「そこ気にする！？」
呆れた顔で千秋が叫ぶ。
「でも、ありがとう。一回これは忘れて、コンクールに集中する」
「……それでいいのよ」
千秋は少し拍子抜けした様子だったが微笑む。
「ほら、あんたたち詰めなさいよ」
「え？　お前らもここで食うの？」
「コンクールの話するなら5人の方がいいでしょ！　いいから詰める！」
「はいはい……」
そう言って男子達は荷物をどかして場所を空けた。

その晩、唯とアマンダは明日の荷物を準備すると早めに床に着いた。
「ねえ、アマンダ。いつみんなに言うの？」
ベッドに寝転がって、唯がアマンダに声をかけた。
「コンクール終わったらすぐ。……でも早く言った方がいいよネ？伸ばし延ばしにしたからギリギリになっちゃった……」
「仕方ないよ。みんな動揺させたらいけないからね。……ひとみちゃん、ショック受けるかな」
「モーマンタイだよ。ひとみはそんなヤワな子じゃないから」
「……だね」
自信一杯で答えるアマンダに、唯は笑顔で返す。
「じゃあそろそろ寝ようか」
「うん。……ユイ」
「なに？」

「明日は頑張ろうネ」
「うん！　おやすみ」
「オヤスミ……」
２人は秘密を抱えつつ、眠りに着くのだった。

１８０話　パズル

８月３日（日）。
今日はいよいよコンクール当日だ。

「おはよう！」
午前７時５０分。
唯がアマンダと一緒に第二音楽室に入ってきた。
「おはようさん。よく眠れたみたいだな」
先斗が唯の様子を見て、そう声をかける。
「うん。昨日は１０時に寝ちゃったからね。すっきり起きれたよ」
「そうか。なら今日はばっちりだな」
「うん！　じゃ、音出ししてくるね！」
「ああ」
唯を見送ると、先斗はマウスピースをケースから取り出し、音出しを始めた。

先斗が全体チューニングと基礎合奏を終えると、第二音楽室に京と翔が入ってきた。
「「おはようございます！」」
部員たちはそれを見て挨拶する。
「おはよう。西掛、基礎合奏済んでるか？」
「はい」
「よし。じゃあ、今から一回だけ通す。ここで通したらもうリハーサル室でも通しはしないからな」
「「はい！」」
これは昨日から言われていたことだったので部員たちもとくに動揺せず返事を返す。

「じゃあ、入場からやるから一回全員外に出て。打楽器は搬入練習できないけど練習はしてあるよな？」
「はい！」
セクションリーダーであるひかりが頷いたのを確認すると、部員たちはさっと音楽室の外に出た。
「全員すぐに本番の隊列になって」
唯の指示で全員が並び直す。
「桜田中央高校さん、どうぞ」
京の声で部員たちはさっと音楽室に入ると、本番通り譜面台の高さと椅子の位置を揃える。
そして京は指揮台の横に立ち、
「プログラム１２番、島根県立桜田中央高等学校、課題曲？に続きまして、自由曲、ロバート・Ｗ・スミス作曲、海の男たちの歌。指揮は西村　京です……」
と、呟くと指揮台に立ち、課題曲と自由曲を通した。

「佐野くん。時間大丈夫だったか？」
指揮を降ろすと、京はストップウォッチを持っていた翔に時間を尋ねる。
「はい。１１分４０秒なんで大丈夫だと思います」
「よし。じゃあ、合奏これで終わり」
「「え！？」」
部員たちの目が点になった。
さすがに一回通しただけで終わるとは思ってもみなかったからだ。
「な、なんでですか？」
奈津美が思わず尋ねる。
「もしこの後通しやって、ミスをしたらそれを引きずってしまうだろう？　だからだ」
「……なるほど」

「じゃあ、各自クールダウンして、楽器の積み込みの準備をすること。部長」
「は、はい！　起立！」
「ありがとうございました！」
「「ありがとうございました！」」
部員たちは今までで一番大きな声であいさつをした。

部員たちは自分の楽器を片付けると、次々に積み込み場所である新館玄関まで運んでいく。
柾もトロンボーンをケースにしまうと走って部室を出ようとした。
「走るな！」
しかし、すぐに拓也に止められる。
「え？」
「走ると楽器ケースに振動が加わってバランス崩れたりするし、転んで楽器壊れたり怪我したら元も子もない。だから走らないで」
「はい。すみません……」
「分かったらいいから。ほら、打楽器もあるから楽器持って行って」
「はい！」
柾は頷くとトロンボーンのケースを二つ抱えて部室を出て行く。
（あ、もしかして……）
その様子を見ていた唯の頭にある考えが浮かんだ。

「西村先生、運搬の時間をゆっくりとるために合奏短くしたんじゃ……」
「そうかもな」
その声に唯が振り向くとそこには先斗の姿があった。
「３０分で全部下に降ろそうとしたら焦るからな。これなら２０分くらい時間に余裕があるからゆったり降ろせる」
「確かに……」

「さっさとアルト下に降ろしとけよ？　結構早めに積むって優樹が言ってたから」
「うん！」
唯は返事を返すと、アルトサックスのケースを持って部室を出た。

新館玄関では既にトラックが到着して積み込みが始まっていた。
今回は自由曲で使う楽器がとても多い。ティンパニ5台を筆頭に、ビブラフォン、チャイム、マリンバ、バスドラ、銅鑼などの大物打楽器、さらには特殊楽器のコントラバスクラリネットまである。海の男たちの歌にはアルトクラのパートがなかったのでこれは茜が吹くことになっている。
積み込み隊長である優樹はいろいろ考えて、楽器を入れる指示を出す。
「まず、ティンパニを右奥に入れて、左奥にビブラフォンとマリンバ！」
「はい！」
部員たちはそれを聞いて行動を始めた。
「ティンパニ上げて！」
「林！　突っ立ってないでマリンバ手伝え！」
マリンバの所から貴弘の声が飛ぶ。
「あ、ごめん！」
マリンバは鍵盤楽器の中で一番重く、楽器によっては１００キロを超える。
桜田中央高校のマリンバは5オクターブの大型のものだから特に重いのだ。
そのため、解体して移動先で組み立てた方が楽なのだが、今回は組み立てる場所がないのでそのまま載せている。
5人がかりでトラックの荷台に乗せ、シロフォンの下にグロッケンや管楽器のケースを入れたりしつつ、なんとか楽器を詰めて行く。

指示を出している優樹にはその作業がまるで難しいパズルを解いているように感じられた。

「……さて。大ボスだ」

汗をぬぐって、優樹が呟く。

管楽器も大体詰め終え、残ったのはチャイム。これがなかなか厄介ものだ。

楽器の背丈も高いし、楽器も重いのだ。

トラックにリフトが付いていたらそのまま上げられるのでいいのだが、今回チャーターしたトラックには付いていない。人力で持ち上げるしかないため、これは6人がかりだ。

「せーの！」

パーカッション男子4人が楽器を持ち上げ、それを先斗と龍也が支える。

そして全ての楽器がなんとかトラックの中におさまり、トラックは出発した。

積み込みが終わり、優樹と和志は荷物を取りに部室に戻ってきた。

「こう考えると去年は楽器少なかったよなぁ……」

がらんとした部室を見て、優樹がしみじみと呟く。

「ティンパニもチャイムも借りたからな。そもそも去年はトラック使ってないし」

「あ、そうだったな」

去年は部員数も少なかったため、管楽器はもちろん、スネアドラムやシンバルなどの打楽器も全部バスに積んでいったのだ。

「そういえば先斗のチューバがバスの入り口に引っかかって大変だったよな。先斗チューバごと転がりそうになったもん」

「そうだった、そうだった！　俺と和志で後ろから押してやっと入ったもんな～」

「悪かったな。引っかかって」
振り向くと、先斗が少し苦笑いして立っていた。
「盛り上がってるのはいいけどそろそろバスが出るから早く乗ってくれ」
「あ、すぐ行く！」
２人は荷物を持つと、急いで部室を出て行く。
「やれやれ……」
先斗はため息をつくと、忘れ物がないかチェックし、部室の鍵を閉めるのだった。

１８１話　再び訪れる場所

先斗がバスに乗り込むと、点呼をしてバスは出発した。
「あれ？　佐野さんは？」
慶太が翔の姿がないことに気付き、周りを見渡す。
「あ、佐野さんは電車で行くって」
前に座っていた奈津美が答える。
「なんで？」
「さあ……。島根の景色見たいとか？」
「このタイミングで？」
「だよなあ……」
２人は首をかしげた。

「悪いなぁ。わざわざ付き合ってもらって」
「あたりまえじゃない。翔１人で行動したらどこ行っちゃうか分からないもの」
「なに！？」
「冗談よ。でもＪＲ、あまり本数ないんだね」
「確かに１時間２本はちょっと少ないな」
その頃、翔と陽乃は電車でＪＲ出雲市駅まで来ていた。
ただ、次の大田市行きの列車は１時間後。そのため、２人はいったん改札を出ていた。
「バス、まだ酔うの？」
「短時間なら大丈夫になったんやけど、１時間は無理……」
翔はバス酔いがひどく、長時間バスに乗ると気分が悪くなってしまう。
これで本番前の部員に迷惑をかけたら悪いと考え、２人は京に頼んで電車で行くことにしたのだ。

「もう1年以上前になるんだね」
「そうやなあ」
実は2人が出雲市を訪れるのは初めてではない。去年の6月に修学旅行で出雲市にも1泊していた。

2人は北口から駅舎の外に出た。
北口は南口に比べると建物が少なく、駐車場が多い。
2人はホテルの1階のパン屋に入り、飲み物を飲んで時間をつぶした。

「あ。あれなんやろ？」
コーヒーを飲み終えた翔が何かを指差す。
指差す先にはからくり時計があった。
「あ、トランペット持ってる！」
からくり時計のうちの一体がトランペットを持っているのに陽乃が気づく。
「行ってみようか？」
「うん！」
2人は店を出てからくり時計に近づいて行った。

真ん中の時計の下のケースの中には指揮棒を持った人形が、その周囲の8つの柱の上にはトランペット，トロンボーン，ホルン，テューバ・クラリネット，フルート，サクソフォーン、そして打楽器を持った人形たちがいた。
「かわいい～！」
楽器を持った人形たちは古代衣装を着ていてかわいらしい。陽乃のテンションが一気に上がる。
「ホンマやな～。あれ？　これ演奏できるんちゃうか？」
柱には楽器の絵が描かれていて、そこにそれぞれ8つのボタンが付いていた。

翔が試しにボタンを押してみると、ミの音が鳴った。
「うわぁ。すご～い！」
陽乃もトランペットの所に行って、音を鳴らす。
ドレミファソラシドの８つの音が鳴るようで、気づけば陽乃は『マーチ「ブルースカイ」』のメロディを奏でていた。
「お前、それ好きやなぁ」
翔がそれを聞いて笑う。
「だって、今までで一番長く練習した曲だもん。絶対今でもソラで吹けるよ」
「まあ、それは俺もやけどな……。あれ？」

気づくと、人形が動き始めていた。
そして、中央の人形の指揮で演奏をし始めたのだ。
「うわぁ！　すっご～い！」
陽乃がテンションを上げて叫ぶ。
「なんか、俺らみたいやな」
「え？」
しみじみとした翔の呟きに陽乃が反応する。
「いや、トランペットにトロンボーン，ホルン，テューバ・クラリネット，フルート，サックスにパーカッション。後ユーフォニウムあったら完全に俺らの代やな～って。あ、春やんは指揮してるってことにすればいいか！」
「それでもフルートが足りないって」
陽乃もそう言って笑いながら、去年の修学旅行のことを思い出す。
桜田中央高校の近くでサックスの音を聞いたこと（これは唯の音色だった）。後輩へのお土産をワリカンで買ったこと。後輩たちの出迎えの曲に感動して涙を流したこと……。
陽乃は思い出に浸りながら人形たちの演奏を聴いた。
「あ！　もう電車出てまう！」

演奏が終わって、ふと時計を見た翔が叫ぶ。
「いけない！　これ乗れなかったらまた一時間待ち！」
「急ぐで！」
２人は走って駅舎に飛び込んだ。

大田市駅に着いて１０分ほど歩くと、大田市民会館が見えてくる。
玄関の横には「第５０回島根県吹奏楽コンクール」と書かれた看板があった。
「佐野さ～ん！　こっちです！」
そして、その横で先斗が待っていた。
「ああ！　今行く！」
翔は笑顔で先斗の方に歩いて行くのだった。

１８１話　再び訪れる場所（後書き）

地元ネタ満載ですみません（笑）
翔くんと陽乃さんが行ったパン屋さんも、からくり時計も実在します。出雲市駅にお越しの際はぜひ行ってみてください。

１８２話　ライバルの音色

積み下ろしを終え、部員たちはプログラムと出場者リボンを受け取ると、各々ホールの中に入っていく。

予定より少し早く出たので、昼休憩後１番目の学校から聞くことができそうだ。

先斗と庄吾は席に着くとプログラムを開く。

５，　１２：２５　　島根県立柳紅水産高等学校（４６名）

指揮　倉橋　良太

課題曲？

森の贈り物

酒井　格

６，　１２：４０　　島根県立桐ヶ丘北高等学校（４８名）

指揮　中森　智恵

課題曲？

アルメニアンダンス・パート１

Ａ．リード

７，１２：５５　島根県立湯釜高等学校（３４名）

指揮　真庭　浩二

課題曲？

イーストコーストの風景より　?，?
N．ヘス

「湯釜って結構人数少ないんだな」
「西部は人口減ってるからな」
人数を見て、2人は呟く。
最初の2団体を聞いて、次は翔吾が所属する湯釜高校だ。
翔吾はホルン吹きの高校2年生であり、去年先斗たちがコンクールの際に止まった霧崎旅館の一人息子でもある。

舞台の椅子がいくつか取り払われ、打楽器が次々と搬入される。
課題曲?の『天馬の道～吹奏楽のために～』は、とにかく大量の打楽器を使用する。そのため、配置も大変なようだ。
部員たちが入ってくる。翔吾の姿も見えた。

「あれ?」
しかし、翔吾はホルンと、何かの打楽器を自分の座席に置くと、そのままティンパニの前についたのだ。
2人が驚いているうちにアナウンスが鳴る。
「プログラム7番。島根県立湯釜高等学校。課題曲?に続きまして、自由曲、ナイジェル・ヘス作曲、イーストコーストの風景より、?、?。指揮は馬庭　浩二です」
指揮棒が上がり、『天馬の道～吹奏楽のために～』が始まった。
冒頭は、木管の音色。トランペットと打楽器で曲の始まりが示される。
低音のメロディが入り、トランペットの張った音色が響く。トラ

ンペットはたった3人なのだが、音はしっかりと聞こえてくる。
テンポが上がり、クラリネットのメロディ。低音もメロディチックな動きをしている。スネアの装飾音符がついた刻みはまるで天馬がゆっくりと歩いているようだ。
トランペットが主旋律に回り、木管が細かい動きを始める。裏で鳴るクラベスがアクセントになり、曲に色を添えた。
曲の雰囲気が変わる。木管の旋律にホルンやテナーサックス、ユーフォニウムの別の旋律が絡まり、シロフォンとスネアの十六分音符に導かれて低音が加わる。
決めのリズムと共に、ホルンとサックスが吼える。
低音の2拍3連（※1）と木管のトリルが妖しい雰囲気を醸し出す。さらにテンポがだんだん早くなっていく。天馬が走り出す。

パン！

ウィップ（※2）の音色で曲が3拍子になり、低音、ティンパニ、バスドラとトロンボーン、ホルン、スネアドラムの刻みが始まった。
クラリネットとアルトサックスの細かいメロディ。その合間を高音木管とミュートをつけたトランペットが風のように通り抜けて行く。
シロフォンと木管の細かいパッセージで今度は中低音のメロディーに変わる。音域が低くなるにしたがって、細かい音色がモゴモゴしやすくなるのだが、ホルンもユーフォもはっきりと、しかしなめらかな旋律を奏でている。
だんだん高音楽器も加わり、音が細かくなっていく。しかし、サッシンのクレッシェンドが頂点に達した瞬間、低音以外の楽器がスカーンと音を伸ばした。会場いっぱいに響きが広がる。
それに2人が驚いていると、今度は翔吾がティンパニソロを叩き始めた。

細かいリズムなのだが、全くずれることなく曲は進んでいく。
そして、ベルトーン（※3）でテンポが落ち、クラリネットが物悲しい旋律を奏で始めた。
途中からアルトサックスが加わり、さらにテナーとユーフォの対旋律が柔らかく響く。
それが静まるとフルートのソロ。その音色がそっと響き渡ると、まただんだん全体の音量が上がっていく。
クラリネットのメロディが木管とトランペットで奏され、アルトサックスのソロで中間部は終わった。
再現部に入り、天馬はだんだん終りへ向けて駆けていく。
金管がベルアップをして、3つの和音を荘厳に奏でる。そこで天馬は一瞬脚を止めるが、テンポが戻ると、そのまま飛び去ってしまう。
シロフォンの駆け上がりで曲は終わった。

翔吾はさっとティンパニからホルンの位置に戻る。
それを指揮者が確認すると、すぐに指揮棒が降りた。

ホルンの柔らかな和音に乗って、フルートのソロが始まる。本来はオーボエソロなのだが湯釜高校にはオーボエ奏者がいないため、代わりにフルートにしたようだ。
それはすぐにトランペットのソロに変わった。柔らかな音色が楽器からあふれてくる。
2楽章のキャッツキルズはスローテンポで山の風景をイメージした楽章だ。
（……カットしているな）
庄吾はこの曲が好きなのでそれは一発で分かった。
トランペットのソロが終わるとすぐに楽章の最後のほうに飛んだのだ。

吹奏楽コンクールでは課題曲・自由曲の2曲を12分以内で演奏しなくてはならないという規定があり、これを過ぎると審査対象から外され、失格ということになってしまう。
桜田中央高校が演奏する『海の男たちの歌』も8分ほどの長さがあるため、もし課題曲が？の『セリオーソ』か、？の『天馬の道～吹奏楽のための～』だったらタイムオーバーでカットをすることになっていたかもしれない。

ホルンが勇ましくメロディを奏で、それがいったん静まって、クレッシェンドで2楽章が終わった。

バン！

と思った瞬間、すぐに指揮が振り下ろされ、3楽章のニューヨークが始まる。
さっきとは打って変わってテンションアゲアゲで曲は進んでいく。
トランペットが旋律を奏で、そこにサックスが飛び込んできた。
この楽章はニューヨークの喧騒を描いたものなのだ。
コントラバスのピッチカートに乗って木管と打楽器が楽しげにリズムを刻む。
トムを打楽器奏者が楽しげに叩き、金管が旋律を吹き鳴らす。
クラリネットのグリッサンドも決まり、そのままのテンションで曲は進んでいくかと思われたが、柔らかなホルンのメロディーで雰囲気がガラッと変わる。それはトランペットに引き継がれた。
冒頭の喧騒が一瞬蘇るが、変拍子に移り、打楽器が忙しく動く。
ホイッスルが鳴るとホルンのメロディがまた顔を出すが、また打楽器が激しく鳴った。
喧騒は続くが最高潮に達した瞬間、全楽器が静まり、一瞬だけ静かなニューヨークが描かれる。

ファァーン！

しかし、その静寂はサイレンの音色でかき消され、今までで一番騒がしくなる。

この部分は実際の手回しサイレンを使用しているため、迫力は満点。

それを回している翔吾もしたり顔だ。

その雰囲気のまま盛り上がり切って、曲は終わった。

大きな拍手が鳴る中、先斗と庄吾は楽器の準備をするためにホールを出る。

「……」

「どうした？」

「いや、なんでもない」

静かな庄吾に先斗は少しため息をつくと、こう言葉をかけた。

「弱気になるなよ。俺らは俺らなんだから」

「……まさか、それを先斗から言われるとはな」

その言葉を聞いて、庄吾は少し苦笑いしてそう返す。

「なに！？」

「いや、冗談！　……だよな。集いの二の舞になってちゃだめだよな」

庄吾は自分に言い聞かせるようにそう呟く。

「行こうか」

「ああ」

２人は楽器置き場へと少し急ぎ足で向かうのだった。

１８２話　ライバルの音色（後書き）

※１　２拍を３等分する長さの音符。

※２　文字通り、鞭のような音を出す打楽器。

※３　和音を別々の楽器で一音ずつ吹いて、鐘の音のようにとはっきりしたアタックと美しい余韻を残すように鳴らすこと。

１８３話　俺たちの音色

「よし。じゃあ次、サックス」
「はい！」
１時４５分。部員たちはチューニング室でチューニングを行っていた。
軽く音出しをしてパートチューニングをした後、京の指示で木管から合わせて行く。
時間があまりないからパートごとでだ。
「次ペット」
「はい！」
今日はコンディションが比較的いいようで、大抵止まることなくチューニングは進んでいく。
全員でB♭、F、C、A、B♭の音を取ったところでチューニングの終わりの合図が出る。
部員たちはさっとチューニング室を出ると、階段を降りリハーサル室に向かった。

リハーサル室に入ると、部員たちはすぐに楽器を準備し、京の指示を待つ。
「じゃあブライアンの最初の音」
「はい！」
京がさっと指揮を上げる。
指揮が降りると一発目の音がリハーサル室にザン！　と響いた。
木管の装飾音符もタイミングはしっかり合わせてきている。
「よし、じゃあ次トリオのトゥッティ」
このようにキメの部分を確認して、リハーサルは進む。
「時間です」

全てのキメの音を確認した所で役員の女子生徒の声が会場に響いた。

「じゃあ、移動します。あ、チューナーは佐野さんに預けてください！」

移動する直前、唯が思い出したようにそう部員たちに声をかける。

チューナーがポケットの中に入ったままだとポケットの中で物に当たって音が鳴ってしまう場合がある。

めったにないことだが、少しでも不安要素を取り除くという意味でも今回からは専用の袋を設けてそこにチューナーを入れることにしたのだ。

翔は部員たちが袋にチューナーを入れるたびに、１人１人声をかける。

ちょうど清一郎が一番最後になった。

「清ちゃん、リラックスな」

「はい！」

いつもの笑顔で清一郎が答えたので、翔は一安心して、リハーサル室を出る。

「さてと……」

翔が着いていけるのはここまでだ。

翔はチューナー袋を持つと、楽器置き場に向かってゆっくりと歩きだすのだった。

部員たちが中ホールに着くと、そこには打楽器の部員たちがいた。

大田市民会館はステージ袖にあまり余裕がないため、打楽器を中ホールに入れておくことになっているのだ。

先斗が中ホールに入ると、ちょうど前の桜田商業高校が入場する

ところだった。
悠莉、美晴、大貴の姿が見える。
悠莉がちらっとこっちを向く。
（頑張れよ）
（先斗もね）
お互い口パクで言葉を交わし、悠莉はステージへと上がって行った。

「……」
部員たちがそれぞれの時間を過ごす中、譲はモニターを見ながら、なぜか座りこんでいた。
「譲。どうした？」
貴弘が譲に声をかける。
「いや、緊張してるわけじゃないんだが、なんか膝が震えててな……」
「それが、緊張っつうんだよ」
少しあきれた様子で貴弘がため息をつくと、譲の前にしゃがみこむ。
「この４ヶ月間のこと、ゆっくり思い出してみな。もう不安要素なんてないだろ？」
「……」
譲はゆっくりと記憶を蘇らせる。

入学式でチューバの音色に惚れたこと、過去がばれても、部活のメンバーは受け入れてくれたこと、自由曲の連符ができなくて貴弘やひとみ、竜一に練習に付き合ってもらったこと、先斗の復活を貴弘と喜んだこと……。
「……」
そして、自分に居場所ができたこと。

あの日から、ずっと1人だった。
つるむ奴はいても、自分の思いをぶつけられる奴はいなかった。
場所もなかった。

でも今は居場所がある。そこには仲間がいる。
入学式であの音にふれてから、世界は広がって行った。
そして、今も……。

「おい、譲？」
譲の目に流れるものを見て、貴弘は慌てる。
「……大丈夫だ」
譲は、それをぬぐって立ち上がると、ニカっと笑って見せた。
今までにない笑顔だった。

「桜田中央高校さん、どうぞ」
役員の女性の指示が出て、部員たちは入場を始める。

アマンダが先頭で、ひとみ、先斗、貴弘、譲、そして雛段最上段、良樹、柾、加奈子、雪乃、庄吾、耕一、舞、美咲、里穂。下段に下がり、竜一、匠、潤、龍也、功、千秋。
木管は成美、慶太、ゆかり、利明、奈津美、茜。一列前に唯、清一郎、葵、なずな、梓、拓也、美羽、詩織、一、弥生、加奈。
そして最前列の愛子、里奈、美香、剛。
その後ろを打楽器が追う。

セッティングが終わり、ひかりがスネアドラム、優樹がティンパニ、和志がクラッシュシンバル、悟がバスドラム、泰子がシロフォンの前に立つ。
哲二もトライアングルが置いてあるスタンドの前に立っている。

マーチの途中で奏者を変える必要はないため、麻里は課題曲の間ずっと用意された椅子に座っていることになる。
しかし、それを麻里はマイナスには考えていなかった。
一緒に演奏することはできないが、課題曲自由曲含めた１２分間を全員で共有することができる。それだけで麻里は嬉しかったからだ。

（あ、いた）
ひとみはセッティングを終えるとすぐに客席を見渡し、駿介を見つけた。
駿介は審査員席の少し下の方の席にいた。横には翔と陽乃もいる。
（駿ちゃん。……聴いていてね）
そう心の中で呟くと、ひとみは指揮台の方を向いた。

京が入ってくる。ライトが点った。
「プログラム１２番。島根県立桜田中央高等学校。課題曲？に続きまして、自由曲、ロバート・Ｗ・スミス作曲、『海の男たちの歌』。指揮は西村　京です」
京は深々とお辞儀をして指揮台に立つと、指揮棒を上げて周りを見る。
全員が指揮を見ていることを確認すると、京は頷き、指揮棒を振り上げて降ろした。

１８４話　『Ｓｏｎｇｓ　ｏｆ　Ｓａｉｌｏｒ　ａｎｄ　Ｓｅａ』

京の指揮棒が勢いよく降りると、トランペットとトロンボーンを除くすべての楽器が音を発した。

その勢いに乗って、トランペットとトロンボーンが勢いよくファンファーレを奏でる。

それと掛け合うように聞こえてくるのはサックス、ホルン、ユーフォのライン。そのバランスも絶妙に決まり、第１マーチが始まった。

それを支えるのは悟のバスドラと低音の表打ちと、ホルンとスネアの裏打ちだ。

バスドラと低音は遠いのだが、低音のメンバーは片目で悟を、もう一つの目で京を見てテンポを合わせる。

第１マーチはトランペットの弾むようなメロディと、木管とユーフォのレガートのメロディが交互に出てくる。

トランペットのメロディにはクラリネットも加わっており、旋律に彩りを加えた。

符点８分音符と１６分音符という前に転んでいきやすいリズムなのだが、伴奏群がしっかりしているため転ぶことなく演奏は進む。

高音木管が加わり、第１マーチが終わった。

雰囲気が変わり、トランペット、ホルン、サックスのメロディ。それを追いかけるのは中低音楽器だ。

（音変わったなあ……）

吹奏楽の集いの時よりも、音が積極的になっていると翔は感じていた。

アウフタクト（※１）の食い付きもいいし、ここを見せたいというラインがしっかり現れてきているのだ。

冒頭のファンファーレが蘇り、また第１マーチ。今度はトロンボーンの対旋律が入り、メロディにシロフォンが加わる。

泰子は正確に、しかしリズミカルに旋律を奏でる。
最後にはトロンボーンも旋律に加わり、全員のトゥッティでトリオに突入した。
それがさっと消えるとホルンの柔らかな和音が響き、新たな旋律が始まる。

前半とは違って、ゆったりと流れるような旋律。これを担当するのはクラリネットとアルトサックスとテナーサックス、そしてホルンだ。
ホルンは2本ともハモリなので、ここは音の相性がいい龍也と潤が担当した。
さすが中学校で2年間コンビを組んできただけあって、音が綺麗に混ざり合っている。

トライアングルを叩く哲次の目はとても真剣だ。
一週間前に担当することになったトライアングル。ここはメロディを邪魔しない程度に目立てと言われたのだが、初心者の哲二にはいささか厳しい要求だった。
だが2年生の粘り強い指導と、必死の練習でなんとか今日はいいバランスで叩けている。

フルートとオーボエが加わり、旋律が厚くなる。
そこに現れたのはトロンボーンだ。スライドを軽やかに動かして対旋律を奏でる。セクション練習でしっかり合わせたので4人の音はまっすぐ会場へと飛んで行った。
トランペットはそこで裏打ちをしていたのだが、さっとミュートを外し、股に挟むとメロディーに加わった。
その間、たった2小節。その早技に、普段トランペットの動きが見えない駿介は驚くばかりだ。

トランペットとトロンボーンが勇ましい音色を奏でて雰囲気が変わる。
低音の降下音に、木管とホルンの上昇音。ここは中低音の降下音が続くが、スネアがそれをちゃんと引っ張っているので遅れることはない。そして、リタルダントがかかった。
トリオのメロディに今度はトランペットも加わり元気よく奏でられる。
トロンボーンの対旋律もさっきより明るい音色で聞こえてきた。

（……もうすぐ）
ひかりは冷静にスネアを叩きながらもだんだんと気分が高揚していくのを感じていた。
（……よし！）
そして、やってきたのはパーカスのキメどころ。
ひかりのスネアがアクセントを含んだ１６分音符を刻み、悟がバスドラを力いっぱい鳴らす。そして和志のクラッシュシンバルが輝かしく鳴った。
（決まった……！）
３人は上手く行ったことでテンションが上がったが、それを引きずって最後まで行くととんでもないことになるので、さっと気持ちを切り替えて伴奏に戻った。

曲の終わりが近づいてくる。
全員が伸ばしを吹く中、低音とティンパニ、バスドラ、スネアのズンと腹に響くような音が近づいてくる。
トランペットのファンファーレが鳴り響き、中低音が音階を下る。
木管とシロフォンが駆けあがる。そして全員の音がバンと響いて、課題曲は終わった。

移動するメンバーがいるので京はいったん指揮を降ろす。

茜はアルトクラをスタンドに置き、コントラバスクラリネットを構えた。
（まさか、あたしがこれ吹くなんてね）
昨年、神奈川にいる友達もこの楽器をコンクールで使ったと聞いた時には驚いたものだ。
先斗がピアノの前に座り、全員が静止したところで京は再び指揮棒をあげた。

自由曲の『海の男たちの歌』。
部員たちは曲のイメージを統一するためにそれぞれの場面にストーリーを付けると言った方法を取った。
部員全員に曲を聞いて浮かんだイメージを書いてもらい、それを文学少女の美香と茜がまとめたのだ。
部員たちのファイルにはそのストーリーが挟み込まれていた。

舞台向かって右にいるアマンダと左にいる麻里、そして中央にいる拓也がオーシャンドラム（※2）を鳴らす。
夜明けの海。だんだんと海岸が明るくなっていく中、船乗りたちは出港に向けて準備を始める。
そこに現れたのは里穂と龍也のソリ。
里穂は柔らかい音を出すのが得意なので2人の音は綺麗に混ざり合っていく。

チューバ、コントラバス、コントラバスクラが静かにB♭の音を伸ばす。フルートがソリを際立たせる。
シップベルと呼ばれる打楽器を和志が鳴らした。そろそろ出港だ。
クレッシェンドがかかり、全員のトゥッティ。優樹がティンパニを激しく叩く。ホルンとユーフォが吼えた。
夜明けと共に船が出港する。
サスペンドシンバルのクレッシェンドを合図にテンポが上がり、

トロンボーンが刻みを吹き始める。
“Ｓｅａ　Ｓｈａｎｔｙ”の始まりだ。

この曲には場面ごとに副題がついており、最初の“Ｓｅａ　Ｓｈａｎｔｙ”とは、「船歌」という意味だ。
悟のトムトムに乗って、クラリネットが波を想像させるメロディを奏でる。
途中からフルートとピッコロがまた違った動きを吹き、船は前に前にと進んでいった。
木管が下降形の連符を奏でると、怪しい雰囲気になる。
波が荒くなった。フルートのトリルがさらに波を煽る。
トランペットが高音のパッセージを吹き、最後にＨｉｇｈＢ♭を鳴らすと、またトロンボーンの刻みが戻ってくる。
船乗りたちはなんとか持ち直してまた船を進めた。
最初のクラリネットの旋律が、ミュートトランペットとサックス、ユーフォニウムに受け継がれて繰り返される。
唯や葵と一緒に清一郎も楽しそうにその旋律を奏でているのを見て、翔は胸をなで下ろした。

それが終わると、中低音の旋律に移る。
しかし、この部分は低音殺しと言われている。
ユーフォニウムはもちろん、なんとトロンボーンや木管低音、チューバにまで連符があるのだ。初心者の柾や譲はついていくのがやっとなのだが、上手くスライドやロータリーを動かしている。
その裏で悟と哲次が鎖を引き上げて落とす。
襲いかかってきた大波に船員たちが立ち向かっていく。
そのまま音階を下りきり、哲二が銅鑼を鳴らすと、だんだんデクレシェンドがかかって音が静まっていった。

アマンダ達がオーシャンドラムをまた鳴らし、“Ｗｈａｌｅ　Ｓ

ｏｎｇ”と呼ばれる部分に入った。
「鯨の歌」と呼ばれるこの部分は、“Ｓｅａ　Ｓｈａｎｔｙ”と違って、終始静かな雰囲気だ。
ここからは特殊奏法だらけ。
まずひかりがビブラフォンをバイオリンの弓で擦る。次に哲二も銅鑼とサスペンドシンバルを順に弓で擦る。そして優樹がスーパーボールでティンパニの打面を、悟がバスドラの打面を擦った。
その音は余韻を持った不思議な音で、まるで鯨たちが会話し合っているようだ。

低音楽器が静かに音を伸ばす上で匠のソロが始まる。
ここは夜、少年が鯨の歌に耳を澄ませているイメージ。
匠の暖かく、でも神秘さを含んだ音色はこのソロにぴったりだった。
悟のクラベスと鯨の声が波の合間に聞こえる。
波は打ち寄せて、離れて行った。

（……来る）
唯はすっと息を吸うと、匠の音を引き継ぐように柔らかなソロを吹き始めた。
全員の音が消え、唯の音だけが残る。
一週間で仕上げたとは思えないほどの音色が会場に広がっていく。
それまで忙しく動いていた審査員の腕が止まる。
そこに先斗がそっと色を加えた。

２人だけの世界。２人はお互いが見えない位置にいるのだが、相手がどんな表情をしているのかも不思議に分かった。
そこにクラリネットとビブラフォンが加わるが、あくまで主役は２人。
２人の音色は観客の心にそっと染み込んでいった。

波の音とともに匠のソロが戻ってくるが、今度はそっと消えて行く。
クラベスの音が残った。

ホルンの目が覚めるようなソリ。
４人の勇ましい音は反響板に跳ね返って、会場に飛んでいく。
悟と哲次が鎖を叩きつけ、優樹がティンパニを激しく鳴らす。麻里も小さな体で思いっきりバスドラを叩く。
低音が７連符を駆け降りる。リタルダントがかかり、また『Ｓｅａ　Ｓｈａｎｔｙ』の冒頭のリズムが刻まれ始める。
しかし、今度はトロンボーンが主役だ。
なんとここの楽想記号はａｇｇｒｅｓｓｉｖｅ！
おとなしく見えるが実は一番音が太い良樹を筆頭に、トロンボーン４人は攻撃的にソリを吹き鳴らす。

ここの副題は“Ｒａｃｉｎｇ　ｔｈｅ　Ｙａｎｋｅｅ　Ｃｌｉｐｐｅｒ”。直訳すると、「ヤンキークリッパーの競走」だ。
アメリカの外洋高速帆船、「クリッパー」がこのタイトルの由来であり、このクリッパーは航行時間の記録を次々と塗り換えたことから、他の国々からは「ヤンキーの快速船」と呼ばれていたらしい。

さらにホルンの旋律が加わるが、そのホルンの勢いがすさまじい。
楽想記号はＦｕｒｉｏｕｓ。「猛烈に」という意味なので、ホルンの４人はトロンボーンに負けない音量で吼えた。
木管の下降形の連符でまた一瞬静かになるが、クレッシェンドで冒頭のトゥッティが蘇る。

「船はまた、出港する。今度はどこまで行くのだろうか」

部員たちが考えたストーリーはそこで終わっていた。
またテンポが上がり、金管が最後の力を振り絞って吼える。
木管の半音階のスケールと金管の上昇音。
最後のB♭の和音で曲は終わりを告げた。

盛大に拍手が鳴る中、京は部員たちを立たせ、深々とお辞儀をする。
照明が消えて、打楽器の搬出が始まった。
部員たちは素早く外に出た。

「……眩し！」
外に出た途端、先斗はそう言って目を細める。
午前中は曇っていた空が、快晴に変わっていた。
「先斗！」
唯が後ろから駆けてくる。
「……上手くいった……よね？」
「……ああ」
「成功したよね？」
「ああ！」
「やった！」
「おっしゃあ！！」
２人はハイタッチをかます。

ここまで来るのにいろいろなことがあった。
辛いことも、悲しいことも、苦しいことも。
でも、この達成感が全ていい思い出に変えてくれた。

「よし、行こう！」
「うん！」
２人は笑顔を浮かべたまま、写真撮影に向かった。

１８４話　『Ｓｏｎｇｓ　ｏｆ　Ｓａｉｌｏｒ　ａｎｄ　Ｓｅａ』（後書き）

※１　あるフレーズが、小節の最初からではなく、その前の小節の途中から開始すること。弱起。

※２　波の音を出すことができる擬音打楽器。

“Ｓｏｎｇｓ　ｏｆ　Ｓａｉｌｏｒ　ａｎｄ　Ｓｅａ”は、『海の男たちの歌』の英題です。

１８５話　２つ目の色

午後６時５分。
最後の団体の演奏が終わり、現在は結果発表待ちの状態だ。
学校ごと座るように指示があったので、部員たちは固まって座っていた。
緊張を紛らわすためか、それぞれおしゃべりに花を咲かせている。

「……やっぱ、何回出ても緊張しちゃうよね」
弥生が美羽に話しかける。
「そうですね……。でも島根県っていきなり県大会なんですね」
「え？　新潟は違うの？」
拓也も会話に加わってきた。
「はい。私の中学校は中学Ｂ編成……。島根で言う小編成の部に出てたんですけど、全部で１００団体くらいあったので、地区大会で３分の１くらいに絞ってから県大会でした」
「へえ……」
「うちも地区大会ありましたよ～」
ゆかりも振り向く。
ゆかりは神奈川県出身だ。
「あたしの中学校は大編成でしたけど、７つの地区に分かれてて、県大会には各支部４～５団体くらいずつ推薦されてました」
「やっぱり県によって違うんだなぁ……」

ブーッ！

拓也が呟いた瞬間、ホールのブザーが鳴った。「キャーッ！」と女子の声がホール内に響く。
「来た！」

緞帳が開き、舞台の上に審査員、大会役員と２２校の部長が見えた。
「いよいよか……」
拓也は最初から手を合わせて祈るようなしぐさを見せる。

スピーカーから女性のアナウンスが聞こえた。
「これから、第４９回全日本吹奏楽コンクール島根県大会、高等学校Ａの部の成績発表と表彰、および第４９回全日本吹奏楽コンクール中国大会への推薦団体の発表をはじめます。表彰は大会実行委員長、池田（いけだ）　元康（もとやす）が行います」
大会実行委員長が、マイクの前に立ち、講評を述べる。
しかし、緊張のためか部員たちの耳には何一つそれは入ってこなかった。

「それでは成績発表、および表彰に移ります。賞は、金賞、銀賞、銅賞がありますが、金賞と銀賞が聞き取りにくいため、金賞の場合は、『ゴールド、金賞』と呼ばせていただきます」
（いよいよだ……）
拓也の心臓はバクバク言い始めていた。
一校目の部長が実行委員長の前に立つ。
「プログラム１番、島根県立桐ヶ丘南高等学校。銀賞」
小さく拍手が起こる。部長が賞状を受け取った。
「プログラム２番、青南高等学校。ゴールド、金賞！」
最初の金賞は支部大会常連の青南高校だった。
常連の風格というのだろうか、金賞と聞いても全く騒ぐ様子はなかった。

どんどん発表が続く。
「プログラム６番、島根県立桐ヶ丘北高等学校。銅賞」
次は、翔吾の所属する湯釜高校だ。

「プログラム7番、島根県立湯釜高等学校。ゴールド、金賞！」
「キャァァァ！」
翔吾たちの喜びの声が飛んだ。
彩稜高校に続き、これで金賞は3つ目だ。

順番が近づいてくるにつれて、部員たちの緊張は高まっていく。
「プログラム11番。島根県立桜田商業高等学校。ゴールド、金賞！」
そして、前の桜田商業も呼ばれた。
ここまでで金賞は4団体のみ。なかなか審査が厳しいようだ。
部員の多くが緊張で震えている中、先斗は冷静に壇上の唯の姿を見ていた。

唯も落ち着いて見えた。
（……いい演奏をすれば、結果はついてくる）
唯が一歩前に出て実行委員長の前に立つ。

（あ……）
美香は隣にいる庄吾の手が震えているのに気付く。
「大丈夫」
美香は庄吾にだけ聞こえるような小さな声でそう囁くと、庄吾の右手をそっと握った。
庄吾はハッとした表情をしたが、美香の顔を見ると少し微笑み、その手を握り返す。
（自分たちのやってきたことを信じる）
そう決めていたのに、弱さが出てしまった。
頭を少し振ると、庄吾はじっと前を見つめる。

「プログラム12番。島根県立桜田中央高等学校」
（来い……！）

「ゴールド、金賞！」

「おっしゃあああああああああ！」

まず、立ちあがって叫んだのはなんと匠だった。

それに一瞬遅れて全員が歓声を上げる。

（信じてよかった……！）

去年の悔しさが、嬉しさとなってこぼれだして来ていた。

「やったネ！」

それを見て、アマンダがハンカチを差し出す。

「センキュ！」

先斗はそれを受け取り、涙をふく。

そして、笑顔になった。

発表が続いていく。

「プログラム２２番。桜田東高等学校。ゴールド、金賞！」

そして、最後の団体の成績発表が終わった。

「それでは、引き続いて第４９回全日本吹奏楽コンクール中国大会への推薦団体の発表に移ります」

役員の声に、部員たちの顔は再び引き締まる。

「推薦団体数は例年通り４団体とさせていただきます」

今回、金賞を受賞したのは、青南高校、彩稜高校、湯釜高校、桜田商業高校、桜田中央高校、稲村高校、杉浦北高校、桜田東高校の８校。倍率は２倍だ。

「それではプログラム順に発表します」

一瞬の間。

「プログラム４番、彩稜高等学校！」

「キャアアアアア！」

歓声が再び沸く。推薦状が部長に渡された。
声が静まるのを待って、役員が口を開く。
「プログラム7番、湯釜高等学校！」
「おっしゃあああ！！」
一瞬間が空いて、声が沸いた。
代表に選ばれるとは思っていなかったのだろう。部員たちは全員が嬉し泣きをしていた。
「プログラム11番、桜田商業高等学校！」
「やったぁあああ！！」
女子の声が響いた。悠莉たちが喜んでいる姿が先斗にも見えた。
残りは1枠。
「プログラム」
空気が張り詰める。
「22番、桜田東高等学校！」
「やったあぁぁ！！！」
桜田東高校のメンバーが喜ぶ姿を見て、先斗たちは肩を落としていた。
目標の金賞は取れた。
しかし、代表に選ばれなかったことが悔しかったのだ。
「……県の壁は厚いな」
ホールの外に出て、匠はぽつりと呟いた。
匠の出身中学は、匠が中学3年生の時にはじめて大編成の部に出た。
結果はダメ金。しかも代表次点だった。
「……」

匠は少し俯いて目を抑える。
しかし、すぐにいつもの表情に戻すと、集合場所に向かって歩き始めた。

「あ……」
外に出る。
唯は、美津が先輩らしき女生徒を慰めているのを見つけた。
美津が所属する青南高校は１０年連続支部大会に出ていた。しかし、今年でその記録は破れることになってしまったのだ。
「先輩、泣かないでくださいよ……」
そう言う美津の顔も涙でグチャグチャになっている。
「美津……。絶対来年は……全国……行ってね！」
「……はい！」
そこからは言葉にならないようで、２人とも泣き崩れていた。

「……」
唯はその姿を見ると、何かを決意した表情をして集合場所へと戻って行くのだった。

１８６話　バスの中で

帰りのバスの中は、去年より騒がしかった。
代表から外れたとはいえ、大編成初出場で県大会金賞はかなりの快挙といえる。
なので、部員たちはそれを素直に喜んでいた。

「みんな落ち込んでなくてよかった」
先斗と唯は隣に座っていた。
「唯。講評用紙回ってきたぞ」
「あ、見せて見せて」
２人は前から回ってきた講評用紙を広げる。
「あ、すごい。彩稜高校満点だ」
唯が得点の書いてある用紙を見て驚いた声を出す。

吹奏楽コンクールの審査は7人の審査員が演奏を聴いて、表現面と技術面で課題曲、自由曲にそれぞれ評価をつける。
評価方法はＡ、Ｂ、Ｃ、Ｄ、Ｅの５段階評価なので、審査員１人当たりの持ち点は２０点だ。
そして、７人のうち、一番いい評価をつけた審査員と、一番悪い評価をつけた審査員の点をカットしたものがその団体の得点となる。つまり、満点は１００点だ。
これは、上下カット方式と呼ばれている。

彩稜高校はＢがひとつあるだけで後はすべてＡ評価。上下カットを適用すると１００点満点ということだ。
「あれ？　青南と湯釜得点一緒だ」
唯が呟く。
４位の湯釜高校も５位の青南高校も９１点で同点だったのだ。同

点の場合、審査員によって投票が行われて代表が決まる。
桜田中央高校はその次の６位で８８点。あと４点で代表だったかもしれないと考えると先斗は悔しかった。

「あ～、俺ダメだな」
先斗はついそうぼやいてしまった。
「どうして？」
それに唯が反応した。
「金賞取れてうれしいって気持ちよりも代表になれなくて悔しいって気持ちが勝っちゃってるんだよな。なんか結果に貪欲すぎるっていうか……」
言っているうちに自分で情けなくなってくる。
「あ、悪い。こんな時にこんな話ししても困るよな。素直に喜ばないといけな……」

「それでいいんじゃない？」
先斗に唯はそう語りかけた。
「え？」
「それって、裏を返せば向上心あるってことだし。……それにあたしたちにはもうあと一回しかコンクールはないんだよ」
「……唯？」
唯の表情が曇ったのを見て、先斗が心配そうに声をかける。
「実はさっきね、会場から出るとき……」
唯は美津とその先輩のことを話した。

「青南、今年は県大会で終わりってことは引退なんだよな……」
「うん……。それ聞いたら、あたしたちも最大で後一年しか活動できないんだよなぁ……って思っちゃって」
「……」
気づけば高校生活ももうすぐ折り返し地点に差し掛かる。受験の

ことも考え始めなくてはならない時期に入っていた。
唯は外国語系の学部のある大学に入りたいと考えており、既にいくつかパンフレットを取り寄せたりしている。部活の夏休みには大学見学に行きたいとも考えていた。

「なら、後悔しないようにせんとな」
それを聞いて振り向いたのは翔だった。
「佐野さん……」
「七海は11月引退やったんやけど、俺らは受験も吹奏楽も精一杯頑張ったつもり。だから後悔はしてないよ。まあ中途半端になるんやったら早く引退した方がいいかもしれんけど、桜央のみんなは大丈夫やと思ってるよ」
「……」
唯はそれを頷いて聞いていたが、先斗はそれを聞いて顔を伏せた。

先斗は理系教科の成績が落ちたことを気にしていた。
特に得意だったはずの数学は9から5まで落ちた（※1）のだ。
小百合と拓郎は勉強面にはそんなにうるさくないのだが、今回はさすがに心配されたらしく、夏休み明けから塾に行くように言われ、先斗もそれにNOとは言えなかった。

（……まあ、塾行けばなんとかなるか）
先斗はそう考えて自分を奮い立たせる。
そして話しこんでいる唯と翔の会話を聞かないように、イヤホンをつけて曲を流すと目を閉じた。

学校に着いて、積み下ろしをし、第二音楽室に集合する。
真夏とはいえ、もう午後8時を回っているので、外は真っ暗だ。
「コンクールお疲れ様。まず、金賞おめでとう！」
「ありがとうございます！」

京の言葉に全員が笑顔で答える。
「この嬉しさを次への力と変えて、頑張っていこう！　俺から言えることはそれだけだ。じゃあ、部長。連絡頼む」
「はい。明日はミーティングです。午前１０時にここに集合してください。他に連絡ある人……。それじゃあ、挨拶して解散します。起立！」
返事がないことを確認して、唯は合図を出す。
「ありがとうございました～」
「ありがとうございました！」
４９人の声が、音楽室に響く。
こうして、２度目のコンクールは終わったのだった。

１８６話　バスの中で（後書き）

※１　１０段階評価を想定しています。

１８７話　新たなステージへ

８月４日（月）。
コンクールが終わり、今日はミーティング。
議題は以下の５つだ。

・定期演奏会について
・マーチングコンテストについて
・合宿について
・文化祭について
・オープンキャンパスについて

定期演奏会という言葉が黒板に書かれた瞬間、部員たちの目が輝く。
それを見て、唯は笑顔で口を開いた。
「じゃあ、最初に。みんな薄々は知っていたと思うけど、第一回定期演奏会の開催が決定しました！」
唯の言葉に、「おっしゃあ！」、「やったぁ！」といった声が飛んだ。
それが収まるのを待って、唯は詳細を話し始める。

会場は桜田市民ホールを使用するということになった。
現在、京がホールの空きを確認している段階だが、３月中旬から下旬に開催する予定で、ホールの空いている日が分かり次第、構成などの細かいことを決めて行くことになった。
「次にマーチングコンテスト出場について話し合います。この中でマーチングコンテストを知らないって人いる？」
唯が聞くと、初心者だけでなく、経験者も数人手を挙げた。

「まあ、島根県はマーチングそんなに盛んじゃないからねぇ……」
唯が少し苦笑する。
島根県内でマーチングコンテストに参加している団体は中学校と高校、それぞれ5団体ほど（※1）。
中学校は先斗たちの出身中の桜田一中と、美咲の出身中の桜田三中、剛の出身校である弓掛中が出ている。

「マーチング自体知らない人？」
そう聞くと、柾、麻里、哲二が少し恥ずかしげに手を挙げる。
「じゃあマーチングについて説明するね。マーチングって言うのは、簡単に言うと楽器を演奏しながらパフォーマンスをすること……かな」
「実際に見てもらった方が早いじゃないか？」
先斗が口を挟む。
「うん。じゃあＤＶＤ用意してもらっていい？」
「ああ」
あらかじめ用意していたのだろう。先斗は鞄から『第１８回全日本マーチングコンテスト中国大会』と書かれたケースを出すと、中身をＤＶＤプレーヤーに入れた。
「今から流すのが２００５年……、あたしたちが中学生の時のマーチングコンテストの映像です」
唯は再生ボタンを押した。

スクリーンに映像が映る。
どこかの体育館のようだ。
演奏者たちが楽器を抱えて入場してくる。
最初の隊形に並び終えると、アナウンスが入った。
『プログラム４番。島根県代表、桜田市立第一中学校。ドラムメジャーは三上　庄吾です』

「え！？」
部員の多くが驚く。

しかし、画面に映ったのは紛れもなく庄吾。
「1、2、3、4！」
庄吾が手を高く掲げて合図を出す。
すると、奏者たちは動きながら演奏を始めた。
しばらくすると、隊形が4列になり、外周を行進し始める。
一周して、中心に小さくまとまったかと思うと、それが拡大していく。
部員たちはそれを食い入るように見つめる。
画面がアップになり、マーチングチューバを抱えた先斗や貴弘の姿も見える。

曲が終わりに近づいた。
全員が一瞬静止し、最後の伸ばしを吹く。
すると庄吾はバトンを真上へと放り投げた。
その次の瞬間、全員が素早く動き始めて、他の隊形を作る。
そして、庄吾がバトンをキャッチした瞬間、隊形が完成し、最後の音が鳴った。

「すっげえ……」
耕一が思わずため息をつく。

「……マーチングコンテストっていつですか？」
千秋が少し不安そうに尋ねた。
「県大会が9月20日、中国大会が10月12日よ。中国大会は今年は鳥取県民体育館であるわ」
「じゃあ、1ヶ月半しかないわけですよね？　今から練習始めても

間に合うんですか？」
９月にはオープンキャンパスと文化祭もあるし、１０月の終わりにはチャリティーコンサートもある。
それらの練習を考えると、少しオーボーキャパな気もしないでもない。

「それは大丈夫だと思う」
それに庄吾が手を挙げて答える。
「俺たちが本格的に練習をはじめたのはコンクールの中国大会が終わってからなんだ。４月からマーチングの基礎練習はしていたけど、それを夏休みの間に済ませられたら十分間に合う。それと平行して文化祭の練習もしてたし」
「指導者は？」
駿介が右手を上げて尋ねる。
「副顧問の梶原先生が桜田東高校でマーチング指導をしていたし、佐野さんも中高マーチングをやっているから練習は見てもらえるわ」
茜が答えた。
「なら、問題はないですね……」
「それにマーチングの経験は定期演奏会にも生かせると思うんだ。座奏だけではできないことを表現できるし、得るものは多いと思う」
「……」
音楽室が静まる。
全員、考えこんでいるようだ。

「やりましょうよ」
沈黙を破ったのは貴弘だった。
「バッシー……」
「確かに忙しいかもしれないですけど、いろいろ挑戦できるチャンスじゃないですか。……それにこのメンバーでマーチング出れるのは今年だけですよ？」

それを聞いて、部員たちはしんみりとした雰囲気になる。

マーチングコンテストの全国大会は１１月中旬から下旬。センター試験まで２ヶ月を切っているのでこの時期には現２年生は引退しているだろう。

「まあ、引退についての話し合いもこの後やるんだけど……。現実的に考えて２年生がマーコンに出られるのは今年が最後ね」

「あの……」

「美香ちゃん？」

「……わがままに聞こえるかもしれないけど、私はこのメンバーでマーチングがやりたいです」

美香が自分の思いをそっと吐きだした。

「ここでマーチングやること諦めたらもう高校でマーチングやる機会はないわけだから……。一回きりのチャンスは無駄にしたくない」

「美香ちゃん……」

パチパチ……。

剛が拍手をしていた。

それはフルートセクションに、そして全体に広がる。

「……じゃあ、マーチングコンテストに出ることにしてもいいですか？」

「はい！」

全員の大きな返事を聞いて、貴弘と美香は顔を見合わせる。

そして、笑顔を浮かべた。

話し合いは続き、最後のオープンキャンパスについても話し終わった。

「じゃあ、これでミーティングを終わりま……」

「チョット、待って！」
唯がミーティングを終わろうとした瞬間、アマンダが手を挙げる。
「みんなに言わないといけないコトがあるの。実は……」
アマンダは一瞬言葉に詰まったが、一瞬目を閉じて心を落ち着かせると、言葉を続けた。

１８７話　新たなステージへ（後書き）

（※）実際の島根県大会の出場数は中学校が１団体、高校が４～５団体と、減少傾向にあります。

１８８話　残された時間

午後。
先斗と匠は音楽室の窓から外をボーっと眺めていた。
アマンダの告白にショックを受けた部員も多く、２年生の話し合いはまた日を改めて、ということになったため、音楽室に残っているのは２人だけだ。
「先斗」
「なんだ？」
「知ってたのか？」
つい、問い詰めるような口調になっていることに気付いたが、匠はそのまま先斗に尋ねる。
「……俺も昨日始めて聞いた。コンクールまでは、って思ってたみたいだ」
「……そうか」
それを聞いて匠はまた口を閉じた。

「実は、カナダに帰るコトになったの……」
アマンダは、そう部員たちに告げた。
「え……」
「い、いつ！？」
奈津美が素っ頓狂な声をあげて尋ねる。
「……明後日」
「そんな……」
急すぎる展開に、部員たちは言葉を失った。
アマンダは留学生なので、留学期間が終わったら帰国しなくては

ならない。
そのことを、部員たちは忘れていた。
それほど、アマンダが自然に部活に馴染んでいたのだ。
「本当は、もっと早く言わないといけなかったんだけど……。コンクール前にみんなを動揺させたらだめだと思って……。ごめんなさい」
そう言う、アマンダの瞳には涙が浮かんでいた。
それを見て、誰も彼女を責めることはできなかった。

「アマンダ、帰っちゃうのか……」
窓枠に肘をついて、匠はため息をついた。
「アマンダ、なんだかんだでムードメーカーだったよな」
「うん……」
男子が多いバスパートの中で、清涼剤的役割だったアマンダ。彼女がいないバスパートは2人には想像できなかった。
「でも、一番心配なのは柳田だな……」
「ああ……」
それは2人とも同意見だったようで、2人は同時にため息をつくのだった。

同じ頃、ひとみと駿介は公園のベンチに座っていた。
駿介は涙を流すひとみの横で、ただそれを見守っている。
子供たちも暑くて遊びに来ないようで、公園には2人きりだけだった。
「……使うか？」
駿介がハンカチを渡す。

「ごめんね……」
ひとみは目を真っ赤にしながら、それを受け取った。
「気にすんな。……俺はいつまでも付き合ってやるからさ」
駿介もそう言って、ひとみの頭をポンポンとなでる。
「うわぁぁぁん……」
駿介の優しい言葉に、ひとみはとうとう大声で泣き出してしまう。
駿介はひとみをそっと抱き締めると、その背中をずっとさすっていた。

「……落ち着いたか？」
「うん……」
15分後。ひとみは駿介のハンカチで涙を拭くと、少し笑顔を見せる。
「……一番苦しいのはアマンダ先輩だもんね。しっかりしないと……。ねえ、駿ちゃん」
「なんだ？」
「頼んでたもの、買っておいてくれた？」
「あれか？　ああ。今持ってる」
「それ、今もらっていい？　お金は後で渡すから」
「別にかまわないけど……。いきなりどうした？」
「ちょっとね。……まだ2日あるからなんとかなるよね」
ひとみは小さくそう呟くと、携帯電話を取り出し、どこかに電話をかけだした。

「先斗、携帯鳴ってるぞ」
音楽室内から聞こえるバイブ音に、匠が反応する。
「俺のか？」
「ああ。俺の携帯はポケットに入ってるし」
「これは……。電話か。誰だろう？」

先斗はそう言って携帯電話を手に取る。
「……柳田？」
先斗は不思議そうな顔をして、電話に出た。
「もしもし？」
「あ、先輩ですか？　柳田です！」
「どうした？」
「ちょっとお願いがありまして……」
ひとみはそう言って、話し始めた。

１８９話　二つの涙

８月５日（水）。

「忘れ物はない？」

「ウン……」

アマンダは、唯と一緒に家を出た。

昨日も部活はあったのだが、アマンダは帰国の準備があって参加することはできなかった。

唯の話だと、文化祭とオープンスクールの曲決めをしていたらしい。

唯の母親の車に乗って学校に向かう。

最後のあいさつをするためだ。

「文化祭はどんな感じになりそう？」

アマンダが唯に尋ねる。

「ステージ演奏が３０分もらえることになったから、４～５曲構成ってことになったよ」

「そっか。……出たかったなぁ」

「……撮影して送るよ」

「……アリガト」

しんみりしたところで学校に着いた。

「それじゃあ、１２時半には出てきてね」

唯の母親の言葉を背に、２人は校舎内に入って行く。

二階の階段を上がると、音楽室の扉が見えた。

「あれ？　今日、練習は？」

楽器の音が聞こえてこないことに気付き、アマンダが不思議そうな顔をする。

「文化祭の楽譜の話し合いが終わってないんだと思うよ。あたし様子見てくるね」
「うん」
そう言って、唯が中に入っていった。

「ユイ、遅いな……」
5分が経ったが唯は戻ってこない。
手持無沙汰になったアマンダは楽器庫に入り、その風景をしっかり目に焼き付けていた。
もしかしたらもう2度とここに来ることはないかもしれないのだ。

「あれ？　アマンダ。どうしたの？　みんな中にいるんじゃないの？」
アマンダが感傷に浸っていると、陽乃が楽器庫に入ってきた。
「唯がチョット待っててって。でもなかなか戻ってこないの」
「そっか。なら、一緒に入ろうよ」
「うん」
そう言って、アマンダはドアを開けた。

その瞬間、音楽室の中から優しい音が流れ始めた。
「え？」
アマンダの目に2年生16人が演奏をしている姿が映る。
「ひとみちゃん……」
そして、指揮を振っているのはひとみだった。

「明後日、演奏をさせてくれませんか……？」
あの日、ひとみは先斗にそう懇願した。
残された時間は後2日。
無茶であるとは分かっていたが、ひとみにはそれぐらいしか思い

つかなかったのだ。
「……今から学校来れるか？」
ひとみの話を聞いていた先斗がそう返す。
「え？」
「楽譜とか準備しないといけないからな。柳田、楽譜係だろ」
「じゃあ……」
「やろう」
「……はい！」
ひとみは返事を返すと、駿介と一緒に学校に走った。

「これ、スキマスイッチの……」
「『奏』だね」
アマンダの言葉を陽乃が引き取る。
「うん……」

『奏』はアマンダが日本の歌の中で一番好きな曲だ。その話を先斗達は聞いていたのでこの曲をセレクトしたのだ。
この曲は大編成で小編成の方が綺麗に聞こえると判断したので、2年生だけで演奏し、ひとみが指揮を振ることになった。

しかし、ここで問題がひとつ起きた。
桜田中央高校は新設校で、前身の桜田西高校も閉校したのが２００１年の3月。
『奏』の発売は２００４年だったため、楽譜が学校にはなかったのだ。
だが、先斗が悠莉や美津に聞いてみたところ、桜田商業高校に楽譜がたまたまあったため、自転車を走らせて翌日には楽譜を用意することができた。
曲は全員知っていたため、なんとか上手く完成させることができ

ている。

アルトクラとテナー、ユーフォのメロディ。
それをトランペットが引き継ぐ。
暖かな音色をアマンダは目を閉じながら聞いていた。

2番に入った時だ。
不意に、楽器以外の音がアマンダの耳に聞こえた。
アマンダが目を開けると、いつの間にか1年生たちが前に出て、2年生の演奏をバックに歌い始めたのだ。
実際に歌に乗せることで、歌詞の一語一語が心に響いてくる。
アマンダの胸はいっぱいになった。
陽乃は、感動のあまり目を潤ませている。

ラストのサビ。
トランペットを中心にメロディーを奏で、ホルンが裏で対旋律を奏でる。
ひとみは笑顔で指揮を振り切った。
そして指揮台から降りると、深々と礼をする。
「……グッジョブ！　ひとみ！」
アマンダは笑顔でそう声をかけた。

「先輩」
ひとみ、先斗、匠、竜一、貴弘、譲が前に出る。
そして、ひとみがアマンダに包みを手渡した。
「開けていい？」
「はい」
アマンダが包みを開くと、中にはバスセクション7人で撮った写真、寄せ書き、そして1枚のCDが入っていた。

「このＣＤは？」
「コンクールの音源です」
「え……？」
それを聞いてアマンダは驚いた表情をする。

吹奏楽コンクールの演奏のＣＤはコンクールが終わってしばらくしてから発売される。そのため、手に入れられないとアマンダは思っていたのだ。
「どうやって手に入れたの？　まだＣＤ発売されていないんじゃ……」
「実は、即売（そくばい）ＣＤって言って、録音してすぐに５枚だけ発売されるＣＤがあるんです。それで駿ちゃんが……」
「そうなんだ……。駿介アリガトね」
「いえ！　最後の１枚だったんで焦りました」
そう言って駿介ははにかんだ。

「みんな、ありがとう……」
そう言って、アマンダは１人ずつ抱きしめる。

まず、先斗。
同じ動きを演奏することも多く、セクションリーダーの彼とはたくさん意見を戦わせた。

続いて匠。
無口な彼だが、演奏には熱く、いろいろ学ぶことができた。

１年生に移って、貴弘。
１年生の中でひとみの次に絡んで来てくれた。不安だった気持ちをぬぐい去ってくれた。

竜一。
クールなのかな？　と思っていたら意外と面白い子だった。曲へのこだわりが強く、匠とバトルを繰り広げていたのを覚えている。
譲。
このパート唯一の初心者。でも練習に熱心で、あっという間に戦力になってくれた。

そして、ひとみ。
アマンダは笑顔でひとみを抱きしめた。
「……」
「ひとみ……？」
アマンダはひとみの顔を見て驚いた。
なんと、ひとみは大粒の涙を流していたのだ。
「ごめんなさい……泣かないって……決めてたのに」
ひとみは嗚咽を漏らしてそう言葉を発する。
「ゴメンネ……。もっと早く言えばよかったね……」
アマンダは優しくひとみの髪をなでる。
ひとみの涙はしばらく止まることがなかった。

「アマンダ、そろそろ……」
唯の声に時計を見ると、出発の時間が迫っていた。
「ウン……」
それを聞いて、ひとみはアマンダからそっと離れる。
ずっと一緒にいたいが、このままだとアマンダが困るだけ、そう思ったからだ。
ひとみは涙をぬぐうと、アマンダに笑顔を見せる。
それを見て、アマンダは少し安心したのか、全員の方を向いて話し始めた。
「みんな、今まで本当にありがとう。短い間だったけど、一緒に演

奏できて、コンクール出られて、一緒に笑えて、本当に嬉しかった。
……また会おうね！」
そう言って、ゆっくりと出口に向かうアマンダ。
「先輩、またいつか一緒に演奏しましょうね！」
「うん！」
ひとみの声に笑顔で答えると、アマンダは唯と一緒に空港に向かった。

空港に着くと、もうすぐ搭乗手続きが始まる時間だった。
「アマンダ。そろそろ入っていた方がいいよ」
「うん……」
唯の声に、アマンダは少し沈んだ表情を見せつつも頷く。

搭乗口に向かう2人。
「またメールするからね」
「……」
「アマンダ？」
黙り込んでしまったアマンダに、唯は不思議そうな表情をする。
「……帰りたくないよ」
「え？」
「まだみんなと演奏したい……！　もっとみんなと一緒にいたいよ……！」
アマンダはそう言って、ポロッと涙を流した。
「アマンダ……」
唯は、さっきアマンダがしたように、アマンダの頭をそっとなでた。
「永遠の別れってわけじゃないんだから。また会えるよ」
「うん……。ユイ」
「なに？」

「アタシ卒業したら絶対日本の大学受験する！」
「うん」
「それでまた……みんなに会いに来るから！」
「うん！」
「だから、また一緒に演奏してね！」
「うん！」
最後には2人とも泣き顔になっていた。

「それじゃあ、またね！」
「うん！　またね！」
アマンダは目を真っ赤にしながらも、笑顔で手を振って搭乗口に入って行った。

「あ、飛行機雲」
帰り道、ひとみがふと空を見上げると、飛行機雲が空に白い線を引いていた。
「アマンダ先輩、あれに乗ってるのかな？」
「かもな」
駿介もそう返す。
「不安か？」
「ちょっとね」
アマンダがいなくなったので、今日からコントラバスはひとみひとりだけ。
駿介はそれを心配してくれたのだろう。
「でも、あたし頑張る。今度会った時に先輩がびっくりするぐらい上手くなっていたいから」
「！」
それを聞いて、駿介はおもわず足を止めた。
「あれ？　どうしたの？」

「いや、なんでもない」
そう返すが、駿介の目には、ひとみが少し頼もしくなったように見えていた。
「へんな駿ちゃん」
「……それならまずはマーチング練習、頑張りますか！」
少し恥ずかしくなって、駿介は思わずそう叫ぶ。
「うん！」
それに答えるひとみの笑顔は、とても眩しかった。

１９０話　はじめの第一歩

８月８日（金）。

部員たちは第二体育館下のピロティーに集まっていた。

今からマーチングの練習が始まるのだ。

部員たちのうち、マーチングの経験者は３分の１ほど。

具体的に名前を挙げると、里奈、駿介、ゆかり、加奈、成美、唯、葵、庄吾、舞、美咲、潤、良樹、先斗、貴弘、ひとみ、悟の１６人だ。

「それじゃあ、今からマーチングの基礎練習始めます」

前に、マーチングリーダーとなった舞が立つ。

「よろしくお願いします！」

全員の声がピロティーに響いた。

２年生のうち、マーチング経験者は先斗、唯、庄吾の３人。しかし、３人は既にそれぞれ学生指揮者、部長、副部長の役職に就いているため、来年以降のことも考えて１年生からマーチングリーダーを出した方がいいだろうということになった。

その結果、中学でもマーチングリーダーをやっていたことから舞が選出されたのだ。

さらに、各セクションにマーチングの指導を担当する、マーチングトップを作ることになり、それぞれ下のようになっている。

フルート＆オーボエ：浦田　駿介
クラリネット：相川　加奈
サックス＆バスーン：小野　ゆかり
トランペット：安井　美咲
ホルン：羽山　潤

トロンボーン：金田　良樹
バス：大橋　貴弘
パーカッション：小沢　悟

「まずは、基本姿勢とマークタイムを重点的にやってください」
「はい！」
マーチングトップは指示を受けると、各セクションに戻っていく。
さすがに舞１人で４８人を見ることはできないので、まず舞がマーチングトップに指示を出し、マーチングトップが各セクションの練習を見ることにしたのだ。

マークタイムを簡単に言うと足踏みである。
しかし、上半身は基本姿勢を保ったまま下半身だけ動かさなくてはならないため、初心者は体が左右に動いてしまうことが多い。
「拓也先輩。上半身ふらついてます！　もう少し、お尻に力入れてください！」
「う、うん！」
加奈の声に、マークタイムをしながら拓也は返事を返す。
「一くんカクカクしすぎ！　もっと滑らかに！」
「は、はい！」
いくら日陰でやっているとはいえ真夏であるため、部員たちの顔からは汗が流れ落ちている。
まだ練習を開始して2日目なので基礎動作を中心にやっているが、今日は別の動作の練習も始めることになっていた。

「はい！　それじゃあ、今日はフォワードマーチを練習します！
手引きの４ページを見てください」
「はい！」

部員たちは、マーチングトップによって作成されたマーチングの手引を開く。

マーチングは楽器を構えたままパフォーマンスをするのだが、そのパフォーマンスの全てがまず歩くことから始まると言ってもいい。

マーチングは基本的に拍に合わせて動くので、歩き方が揃っていないと見栄えがよくないのだ。

バスセクションでは、貴弘を中心にフォワードマーチの練習が始まっていた。

「それじゃあ、最初に5人でやってください」

「はい！」

貴弘の指示で先斗たちはコーンの横に並ぶ。

部員達が練習している周りには、5メートル間隔でコーンが置いてある。

マーチングは5メートルを8歩で歩くことを基本とされていて、実際にマーチングコンテストの会場でも5メートル間隔でラインが引かれている。

「1、2、3、4」

貴弘がスティックでテンポを刻む中、5人は歩き始める。

しかし、2歩ほど行ったところで列が崩れ始めた。

まず、譲が少し後ろにずれ、竜一が前に出る。

それに焦った匠は竜一と一緒に前に出てしまい、譲も歩幅を広げたので最終的に一番前に出てしまう。

先斗とひとみがぴったり8歩で止まった時には、残りの3人は相当前まで進んでしまっていた。

それを見て、匠たちはバツの悪い顔をしている。

「はい。それじゃあ次に先斗先輩と柳田だけで」
「はい」
先斗とひとみは2人で並ぶ。
カウントとともに、2人は歩き出す。2人はズレることなく8歩歩ききった。
「ありがとうございます。見てて思ったことを……。竜一から言ってってください」
「え？　え～っと……。一定の歩幅で歩けてた？」
「うん。じゃあ匠先輩」
「足の着くタイミングが揃っていたのと……視線が前を向いていた。行く先を意識しているのが分かった」
「はい。最後、譲」
「……匠先輩が言ってたのと近いけど、俺達より視野が広く取られている気がした。あと上半身のブレがなかった」
「はい。ありがとうございます。見ているところは全員見ているので、次はそれを意識してやってみてください」
「はい！」
そして、5人はまた並び直して練習を続けるのだった。

１９１話　初見合奏

午後。
部員達は音楽室に集まって合奏の準備をしていた。
午後の合奏ではマーチングと文化祭の曲を初見合奏することになっていた。
ちなみに現在決定している曲は、
・ナヴァル・ブルー
・リトルマーメード・メドレー
・ディープ・パープル・メドレー
の3曲だ。
「よし、じゃあ、まず『ナヴァル・ブルー』から。全く音がなくならない限り全部通すからな～」
「はい！」
部員達は楽器を構える。

この曲はマーチングでやるので、マーチング楽器を使って合奏することになった。
先斗たちはマーチングチューバを担いでいるし、シロフォンを担当する泰子はマーチングシロフォンを肩からかけている。
さらに、マーチングではコントラバスを使用するのは困難なので、ひとみがマーチンググロッケンを担いでいる。中学時代も打楽器でやっていたので慣れているようだ。
他の打楽器もマーチング用を使うことになるのだが、まだマーチング用の楽譜ができていないので今日は座奏用の楽器だ。
京が指揮を降ろすと、トロンボーンとユーフォのファンファーレに、低音木管のトリルとスネア。

途中からサックスとトランペット、ホルンも加わり、木管の連符で最高頂に達する。
そして、高音木管のトリルとクラリネットの連符。
全体的に臨時記号が多く、まだ練習を開始して日が浅いので連符が消えてしまうことがある。
ホルンの高音の旋律。
少し苦しげだが、なんとか音は当てている。
裏の打ち込みが少しずれたが、なんとか崩壊はせず進む。
続いてトロンボーンの旋律が始まる。良樹が中心となって太い音をしっかり飛ばしてくる。
しかし裏の伴奏が合わない。
ここのチューバは下のB♭より下の音での伴奏なので発音が遅くなりがちなのだ。
さらにマーチングチューバは普段と運指が異なる音があるため、初心者の譲は所々音を間違えてしまった。
トランペットの旋律の裏にホルンの対旋律が加わった。

（……高い）
功は顔を真っ赤にしながら旋律を奏でている。

この曲はマーチなのだが、全体的にホルンが目立ってくる。
高音が得意な潤はすんなり音を当てているのだが、ホルンを始めて半年経たない功にはかなり厳しいものがある。
そして、後半になるとバテてプスプスと音を外してしまっていた。

「よし。お疲れ様」
京がスコアを見ながらパートごとに指示を出す。

「まずフルートとクラリネット。確かにこの連符難しいけど、もうちょっと食いついて欲しいな」

「はい……」
「低音……特にチューバ。音低いからズレがち。もっと粒揃えて」
「はい！」
「クラリネット。中間部歌いやすいメロディーだから分からなくもないがズレるな。揃えて」
「はい」
どんどん指示が飛んでいく。

「よし、それじゃあこれは個人とパート練習でしっかりやっておいてくれ。特にこれは暗譜だからな。少なくとも今月中には曲を仕上げてしまいたいからよろしく」
「はい！」
暗譜とは譜面を全て覚えてしまうことだ。
マーチングは動いて演奏するから楽譜を見て演奏することはできないし、たとえ座奏だとしても立奏やパフォーマンスをするときは楽譜を覚えておいた方がいいのだ。

「それじゃ、これで合奏は終わり」
「ありがとうございました！」
合奏が終わると、部員たちはそれぞれの行動に移る。
楽器を片付けながらおしゃべりを楽しむ者、合奏で指摘されたところをさらい直すもの、先輩や京に助言を求める者など、行動は様々だ。

「ねえ、美香ちゃん。明日のお祭り行く？」
弥生が前で楽器を片付けている声をかける。
「うん。そのつもり」

桜田中央高校の近くの商店街を中心に、明日夏祭りが行われる。

今回で１０回目となるので、例年より少々派手に行われることになっていて、部員たちも楽しみにしていた。
「三上くんと？」
「うん」
美香は少し顔を赤らめて答える。
庄吾と一緒に出かけるのは期末テスト前が最後だったから本当に久しぶりだ。
「そういえばさ、美香ちゃんと三上くんってどこまでいってるの？」
「へ！？」
少し赤かった美香の顔が一気に真っ赤になった。

１９２話　恋の花火（前）

「ええ！？」
部室に翔の声が響く。
「佐野さん、声が大きいっすよ！」
庄吾が顔を真っ赤にしながら叫ぶ。
「ほらほら、そんな声出したら余計に目立つで」
カッカと笑いながら翔は庄吾の肩を叩いた。
「は、はい……」
「で、ホンマにキスしたことないんか？」
「はい……」
庄吾は少しうなだれてそう返した。

美香と付き合い始めてもうすぐ1年。
しかし、なかなか進展することがないままここまで来てしまった。
庄吾はそれに焦って翔に相談したのだ。

「それで明日の祭りは行くんか？」
「はい」
「2人で？」
「……先斗と中島と匠と倉橋も来ます」
「そうか～……。人数多いな」
「ですよね……」
「どうするかなぁ……。そや」
「なんですか？」
「俺らも行ってええか？」
「え？」
「二人きりになれるように協力したるわ」
「……お願いします」

庄吾は顔を真っ赤にして頭を下げるのだった。

翌日。部活が午前練習中だったので美香は一旦家に帰って、浴衣を着てくることにしていた。
「お母さ～ん。帯締めて！」
「はいは～い」
母親の真由が帯を持ってやってくる。

「おなか苦しくない？」
「うん」
鏡の前で着付けをしてもらう美香。
「浴衣なんて小学校以来ね」
「そうだっけ？」
「うん。あなた中学校の時はお祭りすら行かなかったもの。彼と一緒に行くの？」
「……うん」
真由は庄吾と美香が付き合っていることを知っていた。幸い2人のことは応援してくれているようで、庄吾が遊びに来ると歓迎してくれる。
「お父さんがさみしがってたわよ。最近かまってあげてないでしょ」
「え、そう？」
「うん。昨日晩酌しながらしみじみ言ってたわ」
「そっか……」
「まあ、今度甘えてあげなさい」
「うん！」
「え～っと、うん。これでいいかしら？」
真由の声に美香は顔を上げて自分の姿を見る。
「うん、大丈夫。お母さん、ありがとう！」
「楽しんでらっしゃい。終電までには帰るのよ。迎えに行くの大変

だから」
美香の家の門限は午後９時だ。
しかし、今日はお祭りということで終電まで延ばしてもらっている。
まあ、終電といっても１１時までなのだが。
「うん！　それじゃあ、いってきます！」
「いってらっしゃい」
美香は笑顔で家を出た。

「あ、美香ちゃん、こっちこっち～！」
唯が手を振る。
桜田中央駅周辺は既に祭りに向かう人たちで華やいでいた。
「遅くなってごめんね」
既に美香以外の５人のメンバーは来ていた。
浴衣を着ているのは美香と唯。加奈子は普段の私服だ。
「ううん。あたしたちも今来たところだから」
「これで全員だよね。それじゃ行こうか。ねえ、庄……」
「あ、佐野さんたちも来るってさ」
「え、そうなんだ」
庄吾の言葉に驚く美香。
そしてそのまま浴衣について聞くタイミングを逃してしまった。

「お待たせ～！」
「あ、来た」
翔の声に振り返る６人。
「すまんなぁ。コイツが着付けにてまどっとったから」
しかしその言葉は６人の耳に入っていなかった。

「陽乃さん、キレイ……」
陽乃も浴衣を着てきていた。しかし、美香たちと違って、色っぽく見える。
少しアップにして簪(かんざし)を付けた髪もとても美しく、大人の女性と言った感じだ。
唯と加奈子は陽乃の姿に感激して目をキラキラさせているし、男子はポカンと口を空けている。
近くを歩いている男性たちもチラチラと陽乃の姿を見ているのが美香に見えた。

「去年着た奴なんだけどね。お母さんに頼んで送ってもらったんだ。それで簪は翔が選んでくれたの」
「そ、そうなんですか。似合ってますよ」
庄吾の顔が少し赤くなっているのに美香は気づいた。
(私の浴衣はなんにも言ってくれなかったのに……)
そう思う美香にも陽乃の浴衣姿はとても眩しく映っていた。

(あれくらい綺麗に着こなせたらいいのに……)
まるでファッション雑誌から飛び出してきたような陽乃の姿を見て、美香はため息をつくのだった。

１９３話　恋の花火（中）

商店街につるされた、街灯代わりの提灯がまぶしい。
８人は桜田中央高校近くの商店街にある出店をぶらついていた。
この商店街では毎年この日はコンビニ以外の店はすべて休業し、出店を出しているのだ。
「加奈子。何か食べるか？」
「う、うん」
匠の声に、加奈子は少し嬉しそうな顔をして出店のほうに歩いていく。

（……よ、よし）
それを見て、庄吾も意を決して美香に声をかける。
「み、美香。リンゴ飴あるぞ。食うか？」
「……いらない」
しかし、美香はついちょっとそっけない態度をとってしまう。
やはりさっきのことをひきずってしまっているようだ。
「そ、そっか」
それを見て、庄吾は肩を落とす。
（やっぱ、怒ってるか……）
そして少しノロノロと先斗たちの後ろをついて行くのだった。

商店街の真ん中のあたりに来ると、食べ物だけでなく的当てやくじ引き、金魚すくいの出店が目立ってきた。
「先斗、射的あるよ」
「お、行ってみるか」
唯の声に先斗は一緒に出店に近づく。

「あ、またミスったぁ！」
「おっちゃん、もう一回！」
「兄ちゃんたち、やってくれるのは嬉しいけどお金大丈夫かい？」
しかし、そこには先客の姿。
「いると思った」
そう言って笑う唯たちの前には和志と拓也がいた。
何回もやっているようで、彼らの前にはいくつかの景品が置かれている。それを見て出店のおじさんも苦笑いしていた。
「いちゃ悪いか？」
「そうは言ってないって」
唯がそういう中、先斗はふと何か違和感を感じた。
「あれ？　優樹は？」

そう、優樹がいないのである。
優樹、和志、拓也の3人は吹奏楽部のゲーマー3人衆とも言われており、よく3人でゲーセンにいる姿が目撃されている。
実際、今もこの会話をしながら拓也は景品を撃ち抜いたりしていた。

「ああ。あいつなら……」
「おおっと〜！」
拓也が口を開きかけるが、和志がそれを止める。
「え、どうしたんだよ？」
「いや〜」
いきなり声をあげた和志に眉をひそめる先斗。

「あ、優樹だ」
その時、和志の少し向こうの方に優樹の姿が見えたので、唯は手を振って声をかけようとした。
「竹原く〜……」

しかし、唯の声はすぐに消えた。
その横に里奈の姿があったからである。
「え、もしかして……」
「あ～あ、ばれちまったか」
そう唯が呟くと、和志は額に手をついて軽くため息をついた。

「木山がな、コンクールの直後に告ってきたんだとさ。中学からずっと見ていましたって」
さすがに出店のおじさんの顔が曇ってきたので、４人は商店街の中央にあるコンビニの前に場所を移していた。
「あぁ、里奈ちゃんと和志くんたちって中学一緒だったもんね」
「それを俺らがちょうど目撃しちまったんだ。木山が真っ赤な顔して『部活のみんなには言わないでください！』って言ってきたから一応黙ってたんだが……。まあ隣の誰かさんはすっかり忘れて口滑らせかけたけどな」
「悪かったって。でも木山も人にああ言っておいて普通に２人で歩いてるんだよな～。まったく調子がいいっていうかなんていうか……」

「青春やなぁ……」
「なにオッサンみたいなこと言ってるのよ」
そう言って話している４人を、翔と陽乃は微笑ましそうに見ていた。
「なんか絵美ちゃんたち思い出すね」
「あ～、そういえば春やんたちも最初は隠しとったな～。そして一番奥手なカップルやった」
そう言って翔がカッカと笑う。
「でも絵美ちゃんが一番自分の気持ちにストレートだった気がするよ。合宿先で水谷くんひっぱたいちゃったじゃない」

「そうやったそうやった。そういやお前には殴られたことあってもひっぱたかれたことはないな」
思い出すように呟く翔。
「そうだっけ？」

「……」
「……」
そう言ってクスクス笑う2人の横で、庄吾と美香は静かに座っていた。
さっきから会話が続かない2人。
（浴衣ほめるタイミング逃しちまったなぁ……。美香怒ってるだろうな……）
（庄吾くん、あたしより陽乃さんみたいなタイプな子が好きなのかな……）
それぞれが相手に遠慮して、なかなか言葉を発することができないでいた。
（もう限界だ……！）
沈黙に耐え切れなくなったのは美香だった。
さっと立ち上がると、祭りの会場とは別の方向に向かって駆け出してしまったのだ。
「美香！？」
「美香ちゃん！？」
「坂根さん！？」
庄吾、陽乃、翔の順に名前を呼ぶが、美香は振り返ることなく高校の方へと消えていった。

「！」
庄吾は一瞬唖然としていたが、すぐに真剣な顔になってそのあとを追いかけていく。

「三上くん！」
「ストップ！」
それを陽乃も追いかけようとしたが、翔が止める。
「え？」
「あいつに任せとき」
「でも……」
「あの2人はお互いもっと素直になることが必要なんや」
「……うん」
陽乃は翔の言葉に頷くと、2人が駆けていった方向を見つめるのだった。

１９４話　恋の花火（後）

「美香！　待てよ！」
商店街を抜けたところで、庄吾は美香を見つけてそれを追いかける。
しかし、美香は振り向くことなく、高校の前の道を右に曲がっていく。
（確かあっちって……）
庄吾は進む先に何があるかを思い出し、美香が向かった道とは別の道を急いで走り抜けた。

美香は神社の石段を駆け上がり、ほぼ頂上まで来たところで足を止めた。
後ろから庄吾が追いかけてくる様子もない。
「……私なにやってるんだろう」
冷静になったところで、美香は自分のした行動の幼さに気づいた。
庄吾はいろいろ気を使ってくれていたのに、自分はそれを跳ね除けて、さらにはそこから逃げ出してしまったのだ。
そう呟くと、美香は石段に腰掛けて街の方を見つめる。
空には花火が打ち上がり始めていた。
今年は十回目なので去年よりも豪華になっているらしいが、今の美香には関係ないことだった。
「嫌われても……当然だよね……」
花火がだんだんとにじんで見えてくる。
美香は顔を伏せた。

「嫌って……ないぞ」
「庄吾……くん？」
声に驚いて振り向くと、そこには庄吾が立っていた。

相当の距離を走ったのだろう。大きく息をついている。
「どうして……？」
「神社に行く道はもう一個あるんだよ。あっちから追いかけたらなんとか追いつけるかなって思って」
「……本当に嫌ってない？」
「あれくらいで嫌いになるほど俺が冷たい男に見えるか？」
「……」
美香は涙顔でただ首を横に振った。
「ごめんな。さびしい思いさせちゃったよな」
「し、庄吾くんのせいじゃないよ。私がワガママなだけで……」
悲しげな庄吾の声に、美香は慌てて口を開く。

「そんなことない」
しかし、庄吾が美香の言葉をさえぎった。
「……逆に俺は美香にはもっとワガママになってもらいたい」
「……え？」
意外な言葉に美香は口をポカンと開けた。
「美香はさ、いっつも俺を助けてくれる。でも、俺はもっと美香に頼られたいんだ。……俺だけには弱いところ見せてほしい。俺も頼れる男になれるように頑張るからさ」
「庄吾くん……」
そう言って、いたずらっぽく笑う庄吾の姿を見て、美香もちょっと笑顔になった。

「ねえ」
しばらく2人で石段に座って花火を見つめていたが、ふと美香が庄吾の方を振り向く。
そのいたずらっぽい笑顔に庄吾は一瞬ドキっとする。
「な、なんだ？」
「じゃあ、今ワガママ言ってもいい？」

「いいよ」
「……キスして」
一瞬の間が空いて、美香が囁く。
「……うん」
その言葉に真っ赤になりつつも、庄吾は立ちあがった。
石段を二段ほど降りて、美香と向かい合う。
「どうして降りるの？」
「こうしたら俺とちょうどいい高さになるだろ？」
「そうだね」
そして、２人は見つめあうとそっと唇を重ねた。

「ねえ」
２人は離れてもまだ見つめ合っていたが、美香が不意に口を開く。
「チョコバナナ食べたでしょ？」
「え？　なんで分かったんだ？」
「チョコレートの香りがした」
そう言ってクスッと笑う美香。
「そうか？　……かっこつかないよな。俺、こんなとこで」
そう言って頭をかく庄吾。
「ううん。私は庄吾くんのそんなところが好きなんだよ」
「……美香」
そして、
「ありがとな」
静かに美香を抱きしめるのだった。

「もう夏休み３分の１終わっちゃったね」
「だな」
石段をゆっくり降りながら２人は今後の予定について話していた。
今日は８月９日。明日お盆前の最後の練習をしたら、部活は一週

間休みだ。
学校は8月28日から再開なのでそろそろ宿題等も気にしておかないといけない。
「でもその前に合宿と旅行があるな」
「もう！　大学見学でしょ」
そう言って笑う美香。

今年の合宿は8月20日から22日までの2泊3日で行うことになっており、宿泊先は梅ヶ崎町の民宿。その旅館の前には梅ヶ崎一中があり、体育館をマーチング練習のために借りることになっている。
さらにお盆休みに、美香と庄吾は中央大学を見学に行くために東京に行くことにしていた。
出発は8月11日。出雲空港から羽田空港まで飛行機で行き、そこで拓真と合流、午後に中央大学を見学することにしていた。さらに、拓真の所属している吹奏楽団や、東京、そして地元の神奈川を案内してもらうことになっている。

「あと、もうすぐ一周年だな」
「え？」
「俺らだよ。24日で一年だ」
「……もうそんなに経つんだね」
また静かになる2人。しかし、今度は嫌な沈黙ではなかった。
「なあ」
「なに？」
「24日、どこか出かけようか」
「ほんと？」
「ああ。美香の好きなところ連れて行ってやる……。あれ？」
携帯が不意に震える。着信だ。
「先斗からだ……。もしもし？」

『もしもし？　じゃねえよ！　お前今どこにいるんだよ！』
「ああ、悪い悪い。今高校の前だ」
『坂根とは合流できたのか？』
「ああ。大丈夫。今から戻るから」
コンビニの前で合流するという話になって、電話を切る。
「それじゃあ、戻ろうか」
「うん」
そう言って歩き出す２人。

「庄吾くん」
「ん？」
美香に呼びかけられて振り返る庄吾。
暖かい感触が唇に伝わる。
「……」
ポカンと立っている庄吾。
なんと、美香の方から唇を重ねていたのだ。
普段は身長差のため不可能なのだが、今２人がいるのは坂の途中なので可能になっている。
「２４日、楽しみにしているね」
そう言ってクスッと笑う美香。
「あ、ああ」
「じゃ、行こう！　みんな待ってるし」
「あ。ああ」
美香はフリーズしている庄吾の手を引いて、コンビニまで歩き始めるのだった。

１９５話　一路、東京へ

８月１１日（月）。

「あ、富士山が見えるわ」

茜の呟きに反応して唯が窓の方を見ると、雲の下に富士山の姿が見えた。

「ホントだ！　ちょっと、先斗カメラカメラ！」

「おい、機内なんだから落ち着け！」

先斗は唯のテンションの上がりように呆れつつも、それを諌める。

「相変わらずだね、２人は……」

「ですね」

その横で美香とゆかりはクスクスと笑っている。

庄吾は朝が早かったからか、美香の隣でウトウトと船を漕いでいた。

午前８時。

先斗、唯、美香、庄吾、茜、ゆかり、翔、陽乃の８人は羽田空港に向かう飛行機の中にいた。

話は７月の半ばに戻る。

「この飛行機に乗って、東京まで行って、そこからモノレールに乗って……」

昼休み、庄吾と美香はコンピュータルームに行って旅行の計画を立てていた。

当日は庄吾のブログ仲間で、中央大学に通っている本堂　拓真に羽田空港まで迎えに来てもらう予定だが、大学の吹奏楽団はその週末にコンクールを控えているため、忙しくて迎えに来られない可能

性があるのだ。
桜田中央高校は昼休みの時間帯と放課後に、コンピュータが使用できる。
もちろんインターネットにはフィルタリングがかかっているため、ある程度の接続の制限はあるが、旅行の計画を立てるのには支障はない。

「しっかし、東京って交通網すっごいなぁ……」
路線図を見ながら息をつく庄吾。
何しろ桜田市には私鉄の桜田線とＪＲの山陰本線しか通っていないのだ。そのため乗り換えなどがとても複雑に感じてしまう。

「あれ、三上くんに美香ちゃん。なにやってるの？」
後ろからの声に振り向くと、そこには弥生と加奈子がいた。
２人の手には紙パックのジュース。どうやら学食からの帰りのようだ。
「コンクール終わったら大学見学行くことにしてるからルート検索。でも路線多くてよく分からないんだよ」
「なら、茜に聞いてみたら？」
「え？　東に？」
弥生の意外な提案に声をあげる庄吾。
「うん。茜のお兄さん、今東京の大学に行ってるから。茜も何回か東京行ったことあるらしいし」
「そっか。それなら聞いてみるかな」
庄吾は納得したようにそう頷くのだった。

放課後。
「え、小野ちゃんも神奈川出身やったん！？」
部室に庄吾たちが着くと、ゆかりと翔、陽乃が部室の入り口で会

話を弾ませていた。
「はい。あたしは横浜市でしたけど。でも七海高校の話は虹西行った先輩からよく聞かせてもらってました」
「虹西高校！？　うわぁ、すっごい偶然！」
「それに東関東大会、あたし聞きにいったんですよ！　あの『教会のステンドグラス』、絶対代表だって思ってました」
「うっわぁ。めっちゃ嬉しい！　ありがとう！」
「こ、こんにちは」
そこでおずおずと声をかける庄吾。
「お、三上くん。おはようさん！」
「もう夕方っすよ？　どうしたんですか？　そんなに盛り上がって」
「ああ。小野ちゃんな、神奈川の出身やったんよ！」
「あれ？　知らなかったんですか？」
「え、みんな知っとったん！？」
周りの表情を見て驚く翔。
「そりゃ、４ヶ月近くいるんですから」
「まあ、そうやな……。そう言えば小野ちゃん、お盆は神奈川に帰ったりするん？」
「あ、はい。おばあちゃんの家にあたしだけ行くことになってます。お父さんもお母さんも今年は転勤してきたばかりで仕事忙しいからって……」
「なら、俺らと途中まで行かへんか？　俺らも同じ時期に神奈川帰るんやけど」
「あ、ならお願いできますか？　お母さんもあたしひとりじゃ心配だって言ってましたんで」
「あのぉ……」
そこで、庄吾がまた口を挟む。
「三上くん、どしたん？」
「俺たちもそれ同行させていただけませんか？」
「え？」

庄吾は事情を話し始めた。

「そういうことなら大歓迎やで。拓あんに俺も会いたいし」

翔は笑顔で承諾してくれた。

「ありがとうございます！」

「あのぉ……」

そこに先斗、唯、茜も近づいてきた。

「え？　３人そろってどうしたん？」

「実は……」

「え、３人も東京や神奈川行くん！？」

３人の話を聞いて驚く翔。

実は先斗と唯、茜もお盆に関東に行くことになっていたのだ。

唯は神奈川に住む親戚の中野さゆりに会うために、先斗は青山学院大学を見学するために、そして茜は親友の毛利　菘と夏フェスに参戦するためだ。

そして、それぞれ旅の目的は違うものの、目的地が近いということで８人で同じ飛行機に乗っていくことになった。

「しっかし、こんな大人数で里帰りすることになるとは思わんかったわ」

飛行機の機内。先斗たちからは少し離れたシートで、翔と陽乃は配られた飲み物を飲みながらくつろいでいた。

「でも大人数の方が楽しいからええか」

「ふふっ。翔らしいね」

陽乃はそれを聞いてクスリと笑う。

「でも兵庫に先に行かなくてよかったの？　お墓参りとかあるんじゃないの？」

心配するように尋ねる陽乃。
「ああ、それは帰り。なにしろ小百合さんに西掛君たち頼まれちゃったからな」
初めは先斗の母親である小百合が同行する予定になっていたのだが、翔たちが一緒なら心強い、と小百合に６人のことを頼まれたのだ。
「それに母さんも一緒に兵庫来るって言ってたし、大中のじいちゃんとばあちゃんにもゆっくり会えるから帰りのほうがいいんや」
「……そっか」
「悪いな。帰りは１人で帰らせることになるけど」
「え？　あたし、新幹線の切符、大阪までしか買ってないよ？」
「え！？」
陽乃の言葉に驚く翔。
「言ったでしょ？　翔のすべてを受け入れるって。（※１）……だからあたしも大中のご家族にご挨拶させて」
「……」
「ダメ？」
「……ありがとな。陽乃」
「ううん」
柔らかい表情を見せる翔に陽乃は笑顔で返事を返した。
『皆様にご案内いたします。この飛行機は後１０分程で東京国際空港に着陸いたします。シートベルトをしっかりとお締め下さい……』
そこでアナウンスが聞こえてきた。
「あ、そろそろ到着やな」
「うん。シートベルト閉めなきゃね」
（早くみんなに会いたいなぁ～）
陽乃は期待に胸を膨らませながら、窓の外を見つめるのだった。

１９５話　一路、東京へ（後書き）

※１　詳しくは奏～ｋａｎａｄｅ～の１９７話をお読みください。

１９６話　出会い、再会

「うわぁ……。広い」
ロビーに出た瞬間、先斗は思わずため息をついた。
羽田空港の第一ターミナルではまだ朝の９時だというのに、たくさんの人たちがひしめきあっている。
広さも出雲空港とは比べ物にならないほどだ。
「さすが東京って感じだな……」
「ああ……」
庄吾もただただ頷くばかり。
「あ、そうだ。拓真先輩から着いたら連絡くれって言われてたんだった」
ふと思い出したように、携帯の電源を入れる庄吾。
すると、すぐにバイブが鳴る。
「あ、拓真先輩からだ」
庄吾は携帯を耳に当てる。
「もしもし？」
『あ、庄吾？　無事着いたか？』
「あ、はい。先輩、今どこですか？」
『今、到着ゲートに着いたところだ』
「え？」
「こっちだ」
庄吾が振り返ると、そこには茶髪で背の高い男性が携帯電話を耳に当てて立っていた。
「た、拓真先輩！」
「直接会うのは……初めてだよな。庄吾」
「は、はい。ずっと会いたかったんですよ！　定演もほんとは行きたかったんですけど期末テストで行けなくて……」

「お～い。そこ。２人で話しとらんでさっさとこっち来んかい」
２人で会話を始めようとする拓真と庄吾に、翔はあきれた様子で声をかけた。
「ああ、悪い悪い」
拓真は頭をかくと、翔たちの方に歩いていくのだった。

「ってことで、本堂　拓真です。今、中央大学の文学部に所属しています。高校からチューバやってて、今も吹いてます……ってこんな感じでいいか？」
翔に促されて自己紹介をする拓真。
「ああ。十分十分。あ、拓あんも高校時代は副部長やったんやで。三上くんは知っとるやろうけど」
拓真は庄吾よりも少々背は低いものの、十分長身と言える身長である。だいたい慶太くらいの身長だろうか。

「しっかし、拓あん髪の毛、茶色くなったなぁ～」
翔が感心したようにつぶやく。

高校時代は真っ黒だった拓真の髪は自然な茶色に染まっており、服装も少し高校生のときと変わってる。
おそらく同期の男子４人の中で一番雰囲気が変わったのではないだろうか。

「染められるの大学のうちだしな。でも俺はまだかわいいもんだ。新歓の時期に赤や緑の奴とか見かけたし」
「マジで？」
「マジマジ。軽音とかは髪型奇抜な奴多いよ。でもいい奴多いから普通に絡むけどな」
「ふーん」

「でも翔はともかく、朝倉さんもカラーしてないんだな。朝倉さんならカラーしても似合いそうなのに」
拓真は陽乃の髪を見て呟く。
陽乃は薄く化粧をするようになったものの、あまり高校時代とあまり変わらない。むしろ高校時代より落ち着いてみえるくらいだ。
「翔が嫌がるからね～。一回カラーしてみよっかなって言っただけで不機嫌になったし」
「あ、あれは陽乃は今の自然な髪色の方がいいと思ったからやって！」
「あ～あ、照れてる照れてる」
「あのぉ……」
そこで、美香が3人に声をかける。
「ああ、悪い悪い！　確か坂根さんだったな。庄吾から話は聞いてるよ。2人とも中央大学受けるつもりなんだって？」
「はい」
2人は頷く。

美香は拓真と同じく文学部の国文学専攻を、庄吾はまだ迷っているが、社会系の学科を受験する予定だ。
「まだお盆前だし、キャンパスも開いてる。もし大学の中を見たいなら今日だな」
「お願いしてもいいですか？」
「ああ。今日練習休みだしな。そのつもりで俺も来たし」
「よろしくお願いします！」
2人は笑顔で答えた。

「じゃあ翔。残りの4人は神奈川行くんだろ？　案内頼むな」
モノレールに乗って浜松町に着いた。
ここから乗る電車が違うので2組に分かれることになる。

中央大学に行く庄吾と美香と拓真、そして残りの先斗、唯、茜、ゆかり、翔、陽乃である。
「分かった！　で、明日は８時だよな？」
「ああ。七海駅の改札出たところに集合な」
同窓会をすることになっているので、時間と場所の確認をする２人。
「了解！　それじゃあ！」
そう言って２組はそれぞれの改札へと向かっていくのだった。

１９６話　出会い、再会（後書き）

なんと１５０，０００アクセスを達成いたしました！　皆さまのおかげです！　これからも更新は亀ですが頑張って更新していきますのでよろしくお願いします！

197話　バスパートの人々

先斗たちは山手線で品川まで行くと、京浜東北線に乗り換えた。
「小野ちゃんは横浜まで行くんやよな？」
「はい」

ゆかりの出身中学校の虹の森中学校は横浜駅からさらに1駅行った先にある東神奈川駅が最寄り駅だ。七海高校に行くにはその手前の川崎駅から南武線で登戸駅に行き、さらに小田急線で七海駅に出る必要があった。

「でもすみません。本当は小田急線乗ればそのまま七海まで行けたんですよね？」
確かに山手線で新宿まで行って小田急線に乗れば七海駅には直接行ける。
しかし翔たちはゆかりを送り届けるために、遠回りして行くことにしたのだ。
それを気にして、ゆかりはすまなそうな顔を翔に向けた。
「気にせんでええよ。俺らもあの子らに会いたいと思っとったし」
翔はそんなことは気にしてもいないと言った顔でそう返した。それは陽乃も同じようで、柔らかな表情を浮かべている。
「先輩、あの子たちって？」
唯が尋ねる。
「ああ、横浜にな、虹西高校っていう高校があるんやけど、俺ら、そこの吹奏楽部のバスパートの子たちとちょっと親交あるんやよ」
「その中の、バスーンの先輩……。藤本（ふじもと）　律（りつ）先輩はあたしの中学時代の吹奏楽部の先輩なんですよ」
ゆかりが言葉を続けた。
「じゃあ、中学時代も一緒にバスーン演奏してたんだ」

「いえ。律先輩、中学時代はトランペットやってました」
「ええ！？」
それを聞いて先斗たちは驚く。

なにしろ、バスーンはダブルリード楽器で、リップリードとも言われる金管楽器から移るのはかなり難しい。
特にバスーンは低音楽器。息のスピードも大きく異なるし、特に低音域では息の消費量が半端ないのだ。

「その先輩ってもしかして宮崎みたいに編成の関係でコンバートされたのか？」
ひとつの可能性を思い浮かべて尋ねる先斗。
「いえ。自分からバスーン希望したらしいですよ」
「……変わってるなぁ」
「まあそうですね」
そう言って苦笑いするゆかり。しかしすぐに言葉を続ける。
「でも、とってもいい先輩です」

「ハクション！」
東神奈川駅前。ある少年がくしゃみをした。
「律、大丈夫？」
それを見て隣にいた女子が心配そうな表情を見せる。
「大丈夫だ……」
「どうせ布団蹴飛ばして腹出して寝ちまったとかだろ？　明日県大会なんだからしっかり体調整えとけよ」
そう言って笑うのは切れ長の目をした少年だ。
「律はアンタと違ってそんなドジじゃないわよ。信二」
それを聞いて、ライトブラウンの髪の元気そうな女子が茶々を入れた。

「なに！？」
「まあまあ。２人とも落ち着いてよ。そろそろ律の後輩来るんでしょ？　笑顔で出迎えてあげなきゃ～」
それを止めるのは大柄な優しげな少年だ。
「……そうだな」
それを聞いて、信二と呼ばれた少年は再びベンチに腰掛けた。

彼らの名前はそれぞれ、
藤本（ふじもと）　律（りつ）、
相原（あいはら）　真琴（まこと）、
永瀬（ながせ）　信二（しんじ）、
浜田（はまだ）　望実（のぞみ）、
鈴木（すずき）　悠輔（ゆうすけ）。

彼らは横浜市立虹西高校の吹奏楽部に所属しており、望実がユーフォニウム、信二と悠輔がチューバ、真琴がコントラバス、そして律がバスーンを担当している。５人ともバスパートだ。

「……でも、ゆかりちゃんと会うのも久々だね。元気かな？」
真琴がつぶやく。
明日県大会を控えているのだが、体調管理のため、練習は午前中で終わり。なのでゆかりを５人で出迎えようということになったのだ。
「そうだね～。最後に会ってから……５ヶ月くらいだね」
「もうそんなに経つんだな。律は連絡取ってんの？」
「ああ。まだまだバスーンのこと分からないことだらけだからな。楽器のこととか教えてくれて助かってる」
「え、それだけなの？」
望実が尋ねる。
「……え？」

「だからぁ！　部活のこととか、学校のこととか、聞いたりしないの！？」
「オレからは聞かないな。ゆかりはいろいろ書いてくるけど」
「え？　律は近況報告しないの？」
思わず真琴も口を挟む。
「……聞いてもつまらないだけだろ？」
しかし、律はそうサラッと返し、ペットボトルのお茶を口に含んだ。
「……律らしいね」
そう言って苦笑いする真琴。
残りの3人も同じく呆れているようだ。
「……なんだよ？」
「アンタらしいって思っただけよ……」
望実はそう言ってため息をつくのだった。

「……あ。ゆかりからメールだ。次の列車で来るってさ。佐野さんたちも一緒に来るらしい」
「ホント！？」
それを聞いてテンションを上げる望実。

以前はアルトサックスを演奏していた望実にとっては翔はある意味憧れの存在なのだ。
「ああ。今、佐野さんがレッスンに行ってる高校の吹部の子達も一緒に来てるらしい。チューバの奴もいるってさ」
「おっ！　マジか！？」
それを聞いて信二も少し表情を緩める。
「楽しみだね～」
「うん！」
悠輔の言葉に、４人は大きく頷くのだった。

１９８話　東神奈川駅にて

「先パーイ！」
南神奈川駅の改札を出て、すぐに律の姿を見つけたゆかりは、５人の方に駆けて行った。
「ゆかりちゃん！」
望実は同時にそれに気付き、手を振る。
「おかえり！　元気だった？」
「はい！」
「島根どうだ？」
信二も話に加わってくる。
「はい、あっちでも頑張ってますよ。コンクールも終わりました」
その様子を見ていた真琴は、ふと律の方を向く。
なんとなくタイミングを逃してしまったようで、会話に加わるに加われない状態のようだ。
「ねえ、望実、信二」
それを見た真琴は２人に声をかける。
「なに？」
「まずは律とゆっくり話させてあげようよ」
「あ……」
そこでようやく気付いて、律の方を向く２人。
「ごめん。あたしたちちょっとはしゃぎすぎちゃって……」
「いや、大丈夫だ。ゆかり」
律はそっとゆかりの方に近づく。
「おかえり」
「はい！」
そして、普段はあまり見せない笑顔をゆかりに向けるのだった。
「佐野さんもお久しぶりです！」

望実が翔に話しかける。
「久しぶり！　うちの定演以来……やったっけな？　元気か？」
「はい！　佐野さん、まだアルトやってるんですよね？」
「もちろん！　大学の吹部やなくて一般団体やけどな。陽乃も同じ団体で吹いとるよ」
「そうなんですかぁ～！」
「で、これからどうするんだ？　まあ、小野さんも来たことだし、とりあえず場所移そうぜ」
信二が口を挟む。
「そうだね～」
悠輔もそれに賛同する。
「あ、俺らは今から七海の方に行くからここで……」
「え、そうなんですか……」
翔がすまなそうな顔をすると、真琴は少し悲しそうな顔をする。
「明日でもいいんじゃないかな？」
しかし、そこで陽乃がそう促す。
「え？」
「どうせ明日県大会を聞きに行くんだから、それでもさゆりちゃんたちは許してくれると思うよ。それに今日最後のコンクール合奏だから邪魔かもしれないし」
「そうやな……。よし、明日にしとくか」
「俺もバスパートの子達と話したいですしね」
先斗もそれに賛同すると、一歩前に出る。
「島根県の桜田中央高校の吹奏楽部でチューバ吹いてます、西掛先斗です。よろしくお願いします」
そして、自己紹介をした。
「次、私ね。桜田中央高校吹奏楽部でアルトクラリネットを担当しています、東　茜です。よろしくお願いします」
流れで自然に自己紹介を済ませる茜。
「あ、ちょっと！　えっと、吹奏楽部部長やってます、中島　唯で

す！　担当楽器はアルトサックスです！　よろしく～！」
　それを見て、慌てて唯はそれに続いた。
「アハハ！　それじゃあ、こっちも！　虹西高校でユーフォニウム吹いてます！　浜田　望実です！　実は中学時代はアルトサックス吹いてました～！　よろしくお願いしま～す！」
　それを見て笑顔になる望実。
「それじゃ、俺も。チューバ吹いてます、永瀬　信二です。よろしく」
「短っ！」
「うるせえよ。いいから次行こうぜ。楽器的に悠輔行けよ」
　望実の突っ込みを軽くかわして、信二は悠輔にバトンを渡す。
「了解～。同じくチューバ担当の鈴木　悠輔です。中学からずっとチューバ吹いてます。実は桜田中央の黒田君とは知り合いです。よろしく～」
「え、そうなんだ！？　あ、コントラバス担当の相原　真琴です。吹奏楽自体は高校からです。よろしくお願いします」
「えっと……。虹西高校吹奏楽部でファゴット担当してます、藤本律です。中学はゆかりと同じく虹の森中学校、当時の担当はトランペットでした。よろしく」
　そして、真琴、最後に律と言葉をつなげた。
「よろしく！　でもそっちはバスーンもバスパートに入れるんだな。なんか珍しいな」
「そうかな？　うちは人数の関係でそうなってるんだけど……。そっちは？」
　先斗の言葉に意外そうにする真琴。それに唯が答える。
「うちはフルートオーボエと一緒だよ」
「へぇ～！」
「どうやら、先斗くんたち、藤本くんたちと仲良くなれそうやな」
「ですね」

そして、その様子を見ながら翔と陽乃、ゆかりは笑い合うのだった。

１９８話　東神奈川駅にて（後書き）

一ヶ月くらい空いてしまいました汗
いろいろ忙しかったもので…。
今月はもう一話更新できればいいかなと思ってます。頑張ります汗

１９９話　封筒の山

ちょうどその頃、桜田中央高校の第二音楽室では、京が数十通の大判封筒を取り出して思案していた。

今後の演奏会の楽曲を考えているのだ。

もちろん、今年度末に控えている定期演奏会の選曲も考えなくてはならないのだが、それは部員たちと一緒に選曲していくため、マーチングコンテスト後に、と考えていた。

１０月までにある本番は９月６日（土）のオープンキャンパスでの演奏、９月９日（火）から１２日（金）まで行われる文化祭と体育祭、９月２０日（土）に行われるマーチングコンテスト県大会、９月２８日（日）の秋祭りに続いて、１０月１２日（日）のマーチングコンテスト中国大会（出られたらだが）、１０月２６日（日）の桜田市のチャリティーコンサートと、秋は本番が目白押しだ。しかし、そのうち決まっているのは、

オープンキャンパス

・

・

・リトルマーメード・メドレー

文化祭

・

・青春ライン

・ＧＩＦＴ

・

・ディープ・パープル・メドレー

体育祭―（マーチング披露）
・ナヴァル・ブルー
・歌劇トゥーランドットより
秋祭り
・
・
・銀河鉄道９９９
・
桜田市チャリティーコンサート
・ナヴァル・ブルー
・
・「千と千尋の神隠し」ハイライト
・

と、穴抜け状態。
オープンキャンパスは昨年のようにポップス２曲構成とも考えたが、今年は昨年と違って体育館で発表ということになったので、ポップス２曲と吹奏楽オリジナル１曲と考えている。ただ、マーチングなども考えて、レベルを考えた選曲をしなくてはならない。
文化祭は、１年生と２年生に一曲ずつＪ－ＰＯＰを選曲してもらい、後の３曲は京が担当することになったが１曲しか決まっていない。
秋祭りも１曲は少し難しい曲を入れたいが、そうするとチャリティーコンサートの選曲に迷ってしまう。
さらに、今年は合同演奏の楽曲も回り番で京が決めなくてはならないのだ。
「さて、どうするか……」

「失礼しま～す……」
すると、そこに、音楽教師の朝倉　智子が入ってきた。
「あれ、朝倉先生、どうされましたか？」
「いえ、ちょっと相談がありまして」
「相談？」
「ええ、実は合唱部の中で、吹奏楽部とコラボがしたいって言う話が出てきてるんです」
「え！？」
京は思わず口を開けてしまった。
「吹奏楽部に東さんっていますよね？」
「ああ、２－Ｅの東ですよね？」
「ええ。うちの部活の戸隠（とがくれ）さん、東さんと仲がいいらしいんです。それでそんな話になったらしくて。もしよかったらコラボレーションしてみませんか？」
「私は大歓迎ですよ。ぜひやりましょう！」
京は笑顔で頷いた。
「ありがとうございます！　確か、吹奏楽と合唱のための曲っていくつか編曲されていますよね。なにかいい曲ありますか？」
「そうですねぇ……」
京は楽譜のリストを見ながら、少し考える。
「ああ、これはどうです？　合唱つきですから」
「いいかもしれませんね。あ、でもこれ、混声３部です……」
混声３部合唱とは普通、女声がソプラノとアルトの２パート、男声が１パートの合唱形態のことで、中学校などでよく使われる。
桜田中央高校の合唱部は女声合唱であるため、男声パートがないのである。
「そうですね……。あ、そうだ」
京がポンと手を叩く。
「朝倉先生、合唱部は今何人いますか？」
「え？　１年生が１２人と、２年生が１８人で合わせて３０人です

けど……」
「じゃあこういうのはどうでしょうか……」
京はにこりと笑って智子に案を話すのだった……。

「クシュン！」
「東さん、大丈夫？」
茜がくしゃみをしたのを見て、真琴が心配そうな表情で尋ねる。
「うん、大丈夫。あ、呼び方、茜でいいよ」
「え、いいの？」
「うん」
「じゃあ、私も真琴って呼んで」
「了解！」
「それにしても今日はくしゃみする人多いなあ～。　誰かが噂してるんじゃない？」
それを見ていた悠輔が笑う。
「ヘクショイ！」
その横で、先斗がくしゃみをした。
「アハハ！　当たってるかもね！」
望実が大笑いしながらそれに同意する。
「かもね。律たちそろそろ着いた頃かな？」
真琴がふと呟く。
「さあな。俺も一回母校に顔出してくっかな？　もしかしたら先輩に会えるかもしんねえし」
「そういえば中学校卒業してから一年以上経つね。先生元気かな？」
「あたしも後輩会いたいなぁ～」
律とゆかりを除いたメンバーたちはそれぞれの中学時代に思いを馳せるのだった。
「着いた……」

律が呟く。
「先輩はいつぶりですか？」
ゆかりは校舎の方を見ながら尋ねる。
「……そうだな。定演のチケット売りに来た時ぶりか？」
「最近じゃないですか」
ゆかりがクスクス笑う。
「行くぞ」
「あ、ちょっと待ってくださいよ～！」
それに少し顔を赤くしながら、律はゆっくりと母校である虹の森中学校に入っていくのだった。

２００話　虹の森中学校

午後１２時半。

律とゆかりは虹の森中学校の中に入っていく。

昼休憩の時間なのだろうか。校庭には運動部員の姿はなく、校庭は静かだ。

来客用入り口で入校手続きを済ませると、２人は職員室に向かう。

校内は校庭と違って少し賑やかだった。校内の至る所から生徒たちの話し声が聞こえてくる。

おそらく部活がある生徒たちが昼ごはんを食べているのだろう。

「失礼します。……あ、涼しい」

職員室のドアを開けた途端涼しい風が流れ込んできた。

ゆかりは思わず表情を緩める。

「今年クーラーの工事でもしたんだろうな」

律も少しちょっとほっとした顔をしていた。なにしろ、今日の気温は３４度。今まで外を歩いてきたので体が火照ってしまっていたのだ。

夏休みなので、職員室の中も人はまばらだ。

「あ、来た！　ふたりとも、こっちいらっしゃい！」

職員室の少し奥の方から声がした。

「ナツ先生～！」

ゆかりは吹奏楽部顧問の中村（なかむら）　千夏（ちなつ）に駆け寄っていった。

千夏は虹の森中学校に転任してから４年目の先生だ。彼女が赴任してきてから虹の森中学校はマーチングコンテストにも参加することになり、今では東関東大会にも出るほどのレベルになっている。

コンクールも明後日が県大会ということで、部員達も練習に励ん

でいるようだ。
「ゆかりちゃん、久しぶりね～！　島根はどう？」
「頑張ってますよ～！　吹奏楽部にも入りましたし！」
「まだファゴットやってる？」
「はい！　あ、マーチングもやることになってるんですよ！　あたし、多分打楽器ですけど」
「そう！　律くんも元気そうね～。最近調子はどう？　ファゴット慣れたかしら？」
「……ぼちぼちです」
「その返事も相変わらずね！　あ、今日は3時までパート練習だからトランペットとローウッドはそれぞれの教室行ってね。場所変わってないから」
「はい！　じゃあ先輩行きましょうか」
「ああ」
「あ、ゆかりちゃん」
出て行こうとするゆかりに千夏が声をかける。、
「ちょっと話があるんだけどいい？」
「あ、はい。じゃあ先輩、ペットの部屋行っててください」
「分かった」
律は返事を返すと、職員室を出て行った。

「お、やってるやってる」
３－Ａの教室の前に来ると、トランペットの音が聞こえてきた。どうやら今は個人練習の時間のようだ。
律はドアを開けた。その音で全員が振り返る。
「律先輩！　こんにちは！」
「こ、こんにちは！」
中に入るなり、声をかけてきたのは2人いる3年生の片割れ、黒崎（くろさき）　美里（みさと）だった。

後ろで束ねた長い髪が特徴の活発な女子であり、コンクールでは２ｒｄを担当している。
その後ろにいるのは２年生３人と１年生２人。１年生は全員男子で、２年生は全員女子と、ちょっとアンバランスな感じだ。
律とは直接関係がないため、少し緊張した様子で挨拶をしてくる。

「久々。あれ？　健介は？」
律はもう１人の３年生である岡村（おかむら）　健介（けんすけ）の姿を探す。
「ああ、健介ならいつもの所で練習してますよ。パート練習２時からなんでそれまでは戻ってこないと思います」
「そっか。じゃあ、一回そっち行ってくる」
「は～い！　でも早めに帰ってきてくださいね！　いろいろお話聞きたいですから！」
そう言って美里に送り出されると、律は３階の廊下へと向かった。

廊下から窓側の扉をそっと開けてテラスに出た。
少し向こうに見覚えのある後ろ姿が見える。集中しているのか、律が近づいていっても気づく様子はない。
（これは……）
しかし、聞き覚えのある旋律に律は足を止めた。
聞こえてきたのは『交響的詩曲　「走れメロス」』だった。
この曲は２年前、律たちが中学三年生だったときに自由曲候補に挙がった曲であり、演奏会で一度演奏したこともある。
ＩＰｏｄを聞きながら演奏していたようで、すぐ近くまで来ても気づく様子はない。
そしてそのままフリューゲルホルンに持ち替えて、しっとりとしたソロに差し掛かった。
「あ！」
しかし、その音はプスっと外れる。
「あ～あ、うまくいかねえなぁ……」

イヤホンを外しながらため息をつく健介。
「健介。確かにフリューゲルは高音出づらいけど、もっと息のスピード考えろ」
「え？　あ、り、律先輩！？」
思わぬ律の登場に、健介は驚いておもわず楽器を落としそうになるのだった。

２００話　虹の森中学校（後書き）

更新が大変遅れてすみませんでした。
いよいよ２００話の大台に達しました。これからもがんばりますので、よろしくお願いします！

２０１話　イメージを持って

「先輩、お久しぶりっす」
「確か……ゆかりたちの卒コン以来だな。この間チケット売りに来た時はお前ら修学旅行だったし、サマコンはお前高熱出してぶっ倒れてたし」
健介は楽器をスタンドに置くと、改めて律の方を向いた。

律が健介と会うのは実に半年ぶりとなる。
中学生の半年は長い。
以前会った時はまだかろうじて律の方が背が高かったのだが、今の健介は律の身長を追い抜いており、既に１７０センチ近くになっている。
声変りも終わったようで、少し低い落ち着いた声へと変わっていた。
変わらないのはワックスでツンツンに立てた髪の毛ぐらいだろうか。
「そうなりますね。まあ、俺らは虹西の定演聞きに行ったんで先輩見てますけど」
「え、お前来てたのか」
「俺だけじゃないですよ。吹奏楽部総出で聞きに行かせてもらいました」
「そうか……。調子どうだ？」
「よくはないっすね……。地区大会もギリギリ抜けたんで頑張らないと……」
そう言って、健介は拳を握りしめる。

地区大会ではフリューゲルのソロで音がかすれ、一瞬消えてしまった。

なんとか持ち直して残りはきちんと吹けたのだが、やはり悔しさは消えない。

「あ～、全く……」

律はため息をつくと、健介の後ろに回りこみ、肩を掴む。

「え？」

「ほら、肩に力入りすぎだ。もっと力抜け」

「は、はい……」

「このフリューゲルの部分はもっとリラックスして吹かないとな。ちょっと貸してみろ」

「え、でも先輩トランペット最近吹いてないんじゃ……」

「サマコンのOBステージで吹いて以来だな」

そう答えると、律は鞄からフリューゲルホルン用のマウスピースを取り出し、軽くバズィングすると楽器に装着した。

「息は柔らかく、全く別の楽器だからイメージ自体も変えないといけない」

そう言って、チューニングB♭の音を伸ばす。

やはり久々なため少しぎこちないが、暖かな音が飛んでいく。

「柔らかい……」

「お前、ちょっと力みすぎだったんだよ。上はDだからそこまで気を張らなくてもお前ならできる」

「は、はい！」

「後は……。イメージだな。走れメロスってお前もう授業でやったよな？」

「確か中二の時にやりました」

「ここはメロスの妹の婚礼のシーンだから、幸せに溢れてる。でもメロスは翌日の日没には殺されてしまう運命にある」

「……なんか複雑ですね。でもやってみます」

健介は楽器を受け取ると、そっと構える。

メロスの妹の婚礼の場面。妹の結婚式のために3日だけという約束で村に戻ってきたメロス。
メロスはどんな気持ちで妹の結婚式を迎えたのだろうか。
フリューゲルソロ前のピッコロソロがメロスの妹だとすると、自分のソロはメロス。
健介はメロスになった気持ちで音を奏で始めた。

「そういうことだったんだ……」
様子を見に来ていた美里は後ろからそれを聞いていた。
健介の音色はどちらかというとパワフルな音なので、このようなソロは今まで美里が吹いていたのだが、なぜか今回は健介に回されていた。
その理由がやっと分かった気がした。
妹の幸せを願うメロスの姿が、美里には見えたのだ。

「健介」
ソロを吹き終わった健介に、美里は声をかけた。
「え、美里？」
「さっすがじゃん。最初からそう吹きなさいよ。あたし、ずっと横でそれ吹きたいなぁって思ってたんだからね？」
「ご、ごめん」
「謝ってどうすんのよ」
そう言って笑う美里はある決意を胸に秘めていた。
(高校でも続けて、絶対健介より上手くなるんだから)

「先輩。後輩たちが待ってますから教室行きましょ！　ほら、健介もそろそろ戻らないとパート練習の時間になっちゃうよ！」
「あ、ああ」
律は美里に背中を押されながら、後輩たちの待つ３－Ａの教室へと戻っていった。

その頃、ゆかりは職員室を出て、ローウッドパートの練習教室である２－Ｂへと歩いていた。
ローウッドパートはバリトンサックス、バスクラリネット、ファゴットの３つの楽器が一緒になっているパートである。

「失礼しま～す！」
２－Ｂに入ると、５人の後輩の姿が見えた。
「あ、ゆかり先輩！」
一番最初に振りかえったのはバリトンサックス３年の小林（こばやし）　隆吾（りゅうご）。
「え？」
それに反応するのがバスクラリネット３年の小見川（おみがわ）　裕子（ゆうこ）。
「こ、こんにちは！」
ちょっと緊張した様子で挨拶したのはバリトンサックスを持った女子。おそらく１年生だろう。
「ゆかりセンパ～イ！　こんにちは！　ほら、知里。ゆかり先輩来たよ～！」
そう言って、教室の奥でモジモジしている女子を呼んでいるのは、バスクラリネット２年の宮内（みやうち）　光（ひかる）だ。

きっと、ファゴットをきちんとスタンドに置いていて出遅れてしまったのだろう。
彼女の元に、ゆかりは笑顔で近づいていく。
「知里ちゃん、久しぶり。元気だった？」
「は、はい！」
飯田（いいだ）　知里（ちさと）は嬉しそうな表情を浮かべて返事を返すのだった。

２０２話　先輩と後輩

「隆吾くん、一年生は彼女１人？」
ゆかりはパートリーダーでもある隆吾に尋ねる。
「あ、はい。黒崎だけですよ」
「い、１－Ｃの黒崎（くろさき）　歩美（あゆみ）です！　バリトンサックスは今年からはじめました。よろしくお願いしましゅ！」
ゆかりがバリサクを持った女子のほうを見ると、歩美は少し硬くなりながらも自己紹介をする。しかし最後で噛んでしまったので顔を真っ赤にした。
「歩美ちゃんね。黒崎ってことは……」
ゆかりは少しほほえましい気持ちになりつつも軽くそれをスルーする。
「ああ、美里の妹ですよ」
「そうなんだ。よろしくね」
「は、はい！」
歩美は嬉しそうに返事を返した。

「先輩」
しばらく歩美と隆吾、裕子と４人でおしゃべりに花を咲かせていると光がゆかりを呼んだ。
「どうしたの？」
「知里の話聞いてあげてもらえませんか？　知里、最近元気がなくって」
「うん。ナツ先生からも聞いてる」

「知里ちゃんとちょっとゆっくり話をしてあげてくれないかな？」

「え？」
職員室で千夏はゆかりにそう切り出した。
「最近なんだか元気がないのよ。どうしたの？　って聞いてみても、大丈夫ですとしか言ってくれないし。３年生も原因が分からないって言うし……」
「でもあたしにも話してくれないかもしれませんよ？」
「楽器関連のことだったらあなたが一番信頼できるだろうから話してくれるかもしれない。私はラッパ吹きだから金管のことはなんとかなるけど、木管についてはまだまだ勉強中なのよ。こんなことを頼むのもおかしいかもしれないけど、頼めないかしら？」
「分かりました。聞いてみますね」
千夏の真剣な表情を見て、ゆかりは頷くのだった。

ゆかりは隣の教室で知里と２人で話をすることにした。
「知里ちゃん、最近どう？」
「……別に変わったことはないです」
「そう。でもなんだか最近元気がないらしいじゃない？　なにか楽器でおかしいことでもあった？」
「……」
知里は下を向いて黙り込む。
ゆかりはあせらず、横で待った。
知里はおとなしく、なかなか自分の思ったことを言い出せない性格だということを短くない付き合いの中で知っていたからだ。
「……です」
５分ほど経って、知里がか細い声で何かを呟いた。
「ん？」
ゆかりは穏やかに聞き返す。
「下の音がうまく出せなくなっちゃったんです……」

「いつから？」
「コンクール終わったころから……」
「ちょっと楽器持ってきてもらっていい？」
「あ、はい……」
知里は楽器を教室から持ってくる。

ゆかりはまず楽器を疑った。
木管楽器は複雑な構造をしており、トーンホールと呼ばれる穴をふさぐ為のタンポが少しずれているだけで変な音が出たり、音が出なくなったりするのだ。
ファゴットの場合、特に低音域が出づらくなる原因の一つとしてタンポの劣化が挙げられる。
「ちょっと吹いていいかな？」
「はい」
ゆかりはカバンからストラップとリードケースを取り出す。
リードを少しくわえて湿らせると、楽器につけて、まずチューニングのB♭を出した。真夏なので少しピッチは高いが、調節をすれば何とかなるレベルだ。
そこから高音に上がり、ダブルｈｉｇｈＢ♭まで上がると、今度は下の音域へ下がっていく。
下のＦからさらに下って最低音のＬｏｗＢ♭まで降りたがとりあえず楽器に問題はなさそうだ。
「じゃあ、知里ちゃん吹いてみて。そうね。真ん中のＦから下がっていって。ＬｏｗＦまででとりあえずいいわ」
「は、はい」
知里は楽器をゆかりから受け取ると、息を吸って音を出し始めた。
「スト～ップ！」
ゆかりはしばらくその音を聞いていたが、真ん中のＣの音まで聞くと、そう叫ぶ。
「え？」

ゆかりの声に知里は思わず吹くのをやめた。
「どうしてそんなに力んで吹くの？　それに発音ももっと丁寧にできてたよね？」
「チューバやバリサクに消されちゃうから大きい音で吹こうと思って……」
「なるほどね……。あのね、知里ちゃん。力んで吹いたら逆効果なのよ」
「そうなんですか？」
「力むと息を吸う量が減って、吐く量も減るから音量が下がるの。さらに音の響きがなくなるから薄っぺらいベターッとした音しか出なくなるのよ。低音が出ないのもそのせい。低音は息のスピードを上げすぎないで、太い息を意識して出すの」
「なるほど……」
「それにダブルリードは音の頭に特徴があるから、発音が汚くなったらバンドに悪い影響しか与えないわ」
「じゃあどうしたら音量が出るんですか？」
「それ以前に、ファゴットは音量を求めすぎちゃダメ。強奏部分でバリサクやトロンボーンに音量で勝つのは楽器の構造的に不可能なんだから、対抗するくらいなら音質とかにもう少し意識をした方がいいわ。もちろんか細すぎたらダメだけど、知里ちゃんは息の量は去年より増えてきているからそこはクリアできてる。ここからは息の使い方ね」
「はい……」
落ち込む知里を見て、ゆかりは少し息をつくとこう切り出した。
「ごめんね。ほったらかしにしちゃって。あたしが島根なんかに行ってなかったらもっと見てあげられてたのにね」

虹の森中学校は3学年で60人前後とそこそこ大きい編成の学校ではあるものの、それでも特殊楽器のオーボエとコントラバスは学年に1人。ファゴットに至っては2年に1人しか担当する生徒がい

ない。
　そのため、ファゴットを担当する生徒は2年生の間は1人になってしまう。
　今までは引退した3年生が高校生になってからも時折顔を出して指導するという感じになっていたのだが、ゆかりが島根に行ってしまい、さらにその上のＯＢも高校3年生。受験勉強で忙しくなって来られないことから、知里は独学でやるしかない状況になっていたのだ。
「そんな！　ゆかり先輩のせいじゃないです！」
　知里は慌ててゆかりの言葉を否定した。それを見てゆかりは微笑む。
「ありがとう。これから帰って来た時は見てあげるようにするね。あ、そうだ」
　ふと思い出したようにゆかりは言葉を漏らす。
「なんですか？」
「知里ちゃん、ケータイ持ってる？」
「あ、はい。学校には持って来れないので家にありますけど……」
「そっか。じゃあ……」
　ゆかりはメモ帳を取り出して一枚破ると、さらさらっとアドレスと携帯番号を書き写す。
「これ、あたしのアドレスと携帯番号ね。なにか聞きたいことあったらいつでもメールして」
「はい！」
　知里は嬉しそうにそれを受け取った。
「よし、じゃあまだ合奏まで時間あるみたいだから低音の練習しようか」
「はい！」
　２人は去年のようにしばらく練習を続けるのだった。

２０３話　ここはどこ？

「ここどこだよ……」
「分からない……」
夕方５時を回り、夕焼けが見え始めている。
そんな中、先斗と唯は途方に暮れていた。

事の発端は２時間前にさかのぼる。
「じゃあ、ここでしばらく自由行動にしよか～」
虹西高校のメンバーと別れ、七海駅に回って荷物を今日泊まるホテルで預かってもらうと、先斗と唯、茜と翔、陽乃は新宿駅まで戻ってきていた。
そこで翔がいきなりそう言いだしたのである。
「そうね。先斗くんたちも見たいところあるでしょ？」
それに陽乃も賛同する。
「あ、はい。ちょっと原宿とか行ってみたいなぁって思ってます」
「そか。じゃあ、山手線乗って原宿駅で降りて坂下っていったらええよ。結構いろいろ店あるからな」
「はい！　アズはどうする？」
唯が茜に尋ねる。
「う～ん……。あたしは楽器店とか本屋に行きたいな。東京ならいろいろ揃ってそうだし」
「そうやな。じゃあ、俺と陽乃とで東ちゃん案内するから、先斗くんと中ちゃんは２人で原宿行ってきたらええよ。今３時やから、そうやな……。７時に新宿駅に集合ってことでどう？」
「ＯＫです。そこから七海までどれくらいですか？」
「３０分くらいで行けるかな。なら七海駅に７時半にしとこうか。新宿駅広いから迷いそうやし」
「は～い！」

唯は元気に返事をした。

「どうせなら新宿集合にしておけばよかったな。最悪山手線乗れば一周してでも着いたし」

「それ以前に駅がどこか分からないじゃない……」

そう。2人は道に迷ってしまったのだ。

原宿駅までは順調に来ることができたのだが、店をのぞいて回っていたら駅からかなり離れてしまい、戻れなくなっていた。

翔たちに助けを求めようと思ったが、先斗の携帯電話は電池が切れてしまっており、唯に至っては七海のホテルに預けた鞄の中に入れっぱなし。

先斗も唯も東京に何回か来たことがあるものの、普段は保護者が一緒にいて単独行動をするという経験はなかった。

「とりあえず駅を探そう。地下鉄でもどっかの駅に行ったらなんとか帰れるだろ」

「そうね……」

幸いお金は余分に持ってきている。

2人は駅を探して、原宿をさまようのだった。

「美里。そろそろ帰ろうぜ」

川崎（かわさき）　慎也（しんや）はショッピングモールから出ると、彼女である田中（たなか）美里（みさと）にそう切り出した。

「え～。まだ5時半じゃない。小学生じゃないんだからまだいいじゃない」

それに美里は少し不機嫌そうな表情をする。

「お前、今夜大谷さんとかと会うんだろ？　だからデートは6時までね～って言ってただろうが」

「あ、そうだ！　サキティ達と会う約束してたんだ！」

「忘れてたのかよ……」
男の方はあきれた様子だ。
「ま、まあ、今月はいろいろ忙しいから仕方ないじゃない。今日はサキティと陽ちゃんとエミリンとで女子会やるでしょ～。明日はナナコウに後輩たちの顔見に行って、夜は同窓会でしょ～。明後日は楽団の練習で、明々後日は……」
「ああ、もういいから！　全く……。ん？」
「どうしたの？」
「いや、あそこにいるカップル、なんか修学旅行生っぽいなあって思って」
その視線の先には1組の男女がいた。高校生くらいだろうか。
「え？　今お盆だよ？　修学旅行生なんているわけないじゃん。それに修学旅行生が路地からなんて出てこないでしょ」
「まあ、そうなんだけど……。なんか雰囲気が少し田舎っぽいって言うか……」
「田舎っぽい？」
「ああ。なんかキョロキョロしまくってる」
美里が2人の方を見ると、確かにキョロキョロしている。しかし、物珍しくてキョロキョロしている様子ではなさそうだ。
「……ねえ、あれって道に迷っているんじゃないの？」
「え？」
「この辺って結構道入り組んでるから……」
「そうかもな。ちょっと話しかけてみるか？」
「うん」
2人は先斗たちの方に近づいて行くのだった。

２０３話　ここはどこ？（後書き）

今回から、奏～ｋａｎａｄｅ～の、
川崎　慎也くん、田中　美里さんにコラボキャラとして登場してもらいます！
未来の２人を書くということで難しそうですが、頑張ります！

２０４話　遭遇

「あ、もうすぐ６時だよ……」
唯が腕時計を見て、呟く。
「どうするかな……」
先斗は途方に暮れた様子で街を見渡す。
８月なのでまだ暗くはならないが、通行人はスーツを着たサラリーマンが目立つようになってきている。

「君たち、もしかして迷ってる？」
「え？」
声に２人が振り返ると、そこには１組のカップルがいた。
男性の方は拓真と少し色が違った茶髪で、背も先斗より一回り高い。少しクールな雰囲気で、少々怖い印象を先斗は持った。
女性の方は唯と先斗の中間ぐらいの背の高さ。女性としては背の高い部類に入るだろう。髪色は男性より少し明るめであり、活発な印象だ。

「は、はい……」
女性の方に声をかけられ、唯は少し緊張しながらも返事を返す。
「どこに行きたいんだ？」
続いては男性が話しかけてきた。
「な、七海です」
それを聞いて、男性は少し表情を緩めた。
「なんだ、俺らと同郷じゃねえか」
「そうね。なら都合がいいんじゃない？」

「……この人たちどうしたんだろ？」
「わからない……。でもなんだか少し危ないかも……」

２人が勝手に話を進めるので、先斗たちは困惑している。
「ねえ、君たち。七海行きたいなら一緒に行かない？　あたしたち、七海市出身だから駅まで一緒に行ってあげるよ」

「え……」
それを聞いて、先斗と唯はさらに困惑する。
初対面の相手と一緒に行動をするのはためらわれたし、さらにここは見知らぬ町。この場合は誰でもついていくことをためらうだろう。

（まあそうだよなぁ……）
慎也は２人の様子を見て軽く苦笑いをする。
美里にまかせてみたが、どうやら上手くいかなかったようだ。

「あ、ちょっとごめんね」
気まずい空気が流れる中、美里の携帯が鳴る。着メロは高校時代に演奏したことがある『マーチ「ブルースカイ」』だ。
それを聞いて先斗たちの表情が少し柔らかくなった。
（もしかしてこいつらも吹奏楽やってんのかな……）
慎也はふとそんなことを考える。

慎也と美里は高校時代吹奏楽部に所属していた。慎也はトロンボーンを、美里はパーカッションを担当しており、今も大学等で吹奏楽を続けている。
「あ、陽ちゃん？　今どこ？　あたし今原宿にいて今から七海に戻るつもりなんだけど……」
（陽ちゃん……？）
聞き覚えのある名前に唯は少し反応する。
「うん、え？　佐野くんがレッスン行ってる学校の子と連絡が取れ

なくなってる？　その子たちどこに行くって言ってたの？　原宿……」
「あの！」
そう呟いた瞬間、先斗は思わず美里に声をかける。
「え？」
「もしかして電話している相手って朝倉　陽乃さんですか？」
「え？　う、うん」
「連絡が取れなくなっているっていうの、あたしたちです！」
唯もそれに続く。
「え、ほんとに！？」
美里は驚いた表情でそう叫んだ。
「え、そこに先斗くんたちいるの！？」
電話の向こうで陽乃も驚いている。
「ミサッチ、代わってもらっていい？」
「うん！　はい！」
美里は先斗に電話を代わる。
「あ、もしもし。西掛です」
「先斗くん！？　無事でよかったぁ……」
陽乃の声を聞いて、先斗はようやくほっとした表情を見せるのだった。

４人は明治神宮前駅から東京メトロに乗った。ここから代々木上原まで行き、小田急線に乗れば七海駅までたどり着くことができる。
「ご迷惑かけてすみません……」
先斗と唯は申し訳なさそうな表情をして２人に頭を下げる。
「いいよ。無事だったんだから。そういえば２人ともなんの楽器やってるの？」
「俺はチューバやってます」

「あたしはアルトサックスです」
「そうなんだ～。2人とも高校から？」
「いえ、中学からです」
「なら俺らより楽器経験長いわけか。俺も中学からやっとけばよかったな……」
「あたしは高校からでよかったけどね。ハンドボールも楽しかったし」
「佐野さんと同級生ってことは……東関東大会出たんですよね？」
「うん」
「すごい……」
「いや、すごいのは翔だよ」
「え？」
慎也の言葉にふと声を漏らす先斗。
「翔いなかったら俺がトロンボーン吹いてることはなかったわけだし、今頃美里とも会ってなかっただろうからな」
「そうそう。吹奏楽部創ったのは佐野くんだからね。ホント感謝してるんだ」
そう言って話す2人の姿を見て、先斗は2人が本当に翔を信頼しているのだなと感じていた。

「七海～。七海～」
「あ、着いた。降りよう」
「はい！」
先斗と唯は立ち上がり、慎也たちとともに改札に向かうのだった。

２０５話　それぞれの夜

午後８時半。先斗と庄吾はホテルに無事に到着した。
唯は親戚であるさゆりの家に行き、美香もそれに同行、茜は東京で一人暮らしをしている兄の家に、ゆかりは祖父母の家に泊まることになっているのでそれぞれ別行動だ。

「あ～、疲れた」
部屋に入ったとたん、先斗はベッドにダイブした。
「そりゃ歩き回っただろうからな」
笑いながら庄吾もその隣のベッドに体をうずめる。

「まったく……。迷子になるなんて小学生かよ」
「まあ正直焦った……」
庄吾の言葉にさすがに先斗も反論ができないのだろう。少ししおらしくしている。
「で、中央大はどうだったんだよ？」
「ああ。校舎がめちゃくちゃきれいでさ、学食も高校とは比べ物にならないくらいだった」
「お前は相変わらず食うこと優先だな……」
先斗は苦笑いする。
「仕方ないだろ。もう大学も夏休み入る直前だから学生ぜんぜんいないし、授業に潜り込むのも無理そうだったからさ」
「なら仕方ないか」
「でも学務とかにいって資料はもらってきた」
そう言って、鞄から資料を取り出す。その中にはシラバスもあり、授業内容も分かるようだ。
「お、赤本みっけ」
「ああ。なんか無料でくれた。私立は太っ腹だよな～」

「だな。で、吹奏楽部はどうだった？」
「ああ。すごかった。コンクール曲聞かせてもらったけど、やっぱ大学ってすごいな。音圧や技術がまったく違った」
「だろうな」
そう言って笑いながら、先斗はお茶を入れるために立ち上がる。
「なあ、先斗」
「なんだ？」
ケトルに水を入れながら先斗は聞き返す。
「俺、美香と一緒に中央大目指そうと思う」
「え？」
先斗は動きを止めた。

「私、庄吾くんと中央大学目指そうと思ってる」
「え？」
美香の言葉を聞いて、唯とさゆりは驚いた表情を見せた。
さゆりの部屋で唯と美香、さゆりは話をしていた。
さゆりは明日県大会を控えているので、初め、唯はホテルに泊まるつもりだったのだが、さゆりがぜひにと誘ったのだ。
「み、美香ちゃん？」
「唯。ちょっと落ち着いて。ねぇ、美香ちゃん。なんでそう思ったのか教えてもらっていい？」
「はい」
美香はひとつ息を吐くと、口を開いた。

「しかし、美香ちゃんそこまで考えていたとはね……」
唯は思わずそう呟いていた。
美香がお風呂に入っているので、部屋には唯とさゆりの2人きりだ。

「でも、あたしも美香ちゃんの気持ちわかるな」
「え？　なんで？」
さゆりの言葉に、唯は思わず顔をさゆりの方に向ける。
「朝倉先輩みたいにあたしも洋くん支えたいと思ってるから。美香ちゃんも朝倉先輩見てそんな気持ちが強くなったんじゃないかな？」
唯はさゆりの机の上にある赤本を見た。北海道立農業大学校。さゆりの彼氏である富岡（とみおか）　洋之（ひろゆき）の志望校だ。
神奈川から北海道までは８００キロ以上距離が離れているため、必然的に一人暮らしをすることになる。
「さゆ姉」
「なに？」
「ほんとに北海道行くの？」
「うん」
さゆりは間髪入れずにそう答えた。
「まあ、まずは受からないといけないんだけどね。洋くん数学苦手で、あたし国語苦手だから教えあってるんだ。どちらかだけ落ちたらいやだしね。まあ両方落ちてもきついけど」
「そっか……。遠距離って大変だもんね」
「うん。でも唯も大変だよね」
「え？　どういうこと？」
さゆりの言葉に唯は聞き返す。
「いや、島根県ってさ、大学２つしかないじゃない？　県外に出る人多いんじゃないの？」
「うん……」
島根県には島根大学と島根県立大学の２つしか大学はない。なので、進学を希望する生徒の多くは県外の大学を受験するのが現状だ。
「先斗くんはどうなの？」
「とりあえず理系に進んだんだけど、最近ちょっと成績下がって悩んでるみたい……。夏休み明けから塾行くって言ってたけど」
「そっか……」

「あたしもそろそろ考えないといけないんだけどね。方向性ぐらいしか決まってなくて……」
「語学系だっけ？」
「うん。英語だけじゃなくていろいろな国の言語や文化を勉強したい」
「いい目標じゃない。去年の今頃はあたしそんなこと考えてなかったよ？」
「そう？　でもそういう方向性の学部がいっぱいあるから、志望校がなかなか定まらなくて……」
「それはまだ1年以上あるんだからゆっくり考えたらいいんじゃないかな？」
「…うん」
唯は少し表情を緩めて頷いた。

一方、茜は兄のアパートで夕食を作っていた。
「陸兄ちゃん、自炊してないでしょ？」
「え？」
茜は風呂から上がってきた兄の陸斗（りくと）に声をかけた。

陸斗は現在大学三年生。理系で卒業後は大学院に行くつもりのようだ。
「冷蔵庫には酎ハイとかしかないし、三角コーナーはないし、炊飯器は線抜いたまま…あー、このソース賞味期限すぎてるじゃない！？」
「え？　ソースって賞味期限あんの？」
「野菜とかからできてるんから当たり前でしょ？　本当に理系なの？」
「はいはい、すみません」
「もう！　はい、できたから座って座って」

そう言って茜は料理を並べていく。
「お、美味そう」
メニューは豚肉のピカタ、野菜炒め、味噌汁にご飯だ。
「簡単にすませちゃったけど」
「十分十分。いただきまーす！」
陸斗は箸を取ると、豚肉のピカタから手をつけはじめた。

「しっかし、お前料理うまくなったなあ」
「お母さんパート出てるからね。その時は夕飯とかあたしが作るのよ。おばあちゃん最近ずっと立ってるのがきついみたいだから」
「そっか。そういえばお前大学どうするんだ？」
「理系の大学行きたいと思ってるんだけど理系だとお金がね……」
私立の場合、理系の学科だと授業料が数百万単位になることがある。医学部などに行けば尚更だ。国公立でも文系より教科書代などがかさむ。
「まあ、俺も私立行っちまったし、まだ下に祐子（ゆうこ）と貴史（たかし）いるしな」
「あたしが大学行って院まで行ったらお父さん困るだろうしなあ……」
「……まあ、お前は考えすぎだよ」
「え？」
陸斗の言葉に茜は顔を上げる。
「確かに大学行くのはお金かかるけどさ、俺とか祐子とか貴史のことは考えなくていいよ」
「でも…」
「母さんも言ってたぞ。茜はしっかりしてるけどワガママもたまには聞きたいって」
「え？」
「それに、おまえの頭あれば多分奨学金とか学費免除とか狙える。俺も院は国立目指す。だから心配するな」

「陸兄ちゃん……」
「まあ、俺が言うことじゃないけどな」
「確かにね」
「おい…」
茜の言葉に陸斗は表情をしかめる。
「お風呂入ってこよっと」
茜は立ち上がり、ドアの方に歩き始める。
「あ、陸兄ちゃん」
ドアを開ける前に振り返る茜。
「ん？」
「ありがとう。あたし頑張るよ」
「おう」
陸人は少し赤くなった顔を隠しながら返事を返すのだった。

ホテル。寝息を立てている庄吾とは裏腹に、先斗は寝つけずにいた。
（俺はなにになりたいんだろう…）
先斗は寝返りを打ちながらそんなことを考えていた。
しかし、その考えはまとまらないまま、夜は更けていくのだった。

２０６話　集結！

翌日、先斗たちは吹奏楽コンクール神奈川県大会の会場である、神奈川県民ホールを訪れていた。
「しっかし、大人数が集まったもんやな」
翔は少し苦笑いして呟く。
「なに言ってんの。みんな応援したいから来てるんだよ？」
そう言って陽乃がたしなめる。
「とは言っても１０人越えは多いって」
なにしろ、今回のメンバーは先斗、唯、茜、庄吾、美香、ゆかりの桜田中央高校のメンバーに加えて、翔、陽乃、美里、慎也。５月の自由演奏会で顔を合わせたことのある、宮部（みやべ）由美子（ゆみこ）、永井（ながい）雪（ゆき）子（こ）。そして翔たちの同期であるフルートの大谷（おおたに）沙希（さき）、クラリネットの橋本（はしもと）絵美（えみ）、ユーフォニウムの水谷（みずたに）春樹（はるき）。
さらには翔たちの一つ上の先輩であるクラリネットの豊田（とよた）めぐみ、トランペットの岡崎（おかざき）安和（あんな）もいる。
拓真はチューバの先輩で現在音大に通っている三河（みかわ）岳彦（たけひこ）とともに七海高校のメンバーのサポートをしているためここにはいない。

「でも夏樹や綾音ちゃん、緊張してないといいなあ……」
陽乃は心配そうな表情を浮かべる。
夏樹は陽乃の弟でアルトサックスを、綾音は翔の妹でトランペットを吹いている。
２人とも楽器は高校から（夏樹は少し違うが）始めたが、今年はコンクールメンバー入りしたらしい。
「夏樹くんなら大丈夫やって。俺も綾音心配やったけど、今朝結構しっかりした表情しとったから」
翔はそう言って陽乃をなだめた。
「うん……。でも今年は人数増えたね」

陽乃は気を取り直して、話題を変えた。
今年度も例年ほどの新入部員を迎えたため、七海高校吹奏楽部のメンバーは７０名を超え、全校生徒１２００人超の七海高校の中でも大規模な部活となっている。
「そうやな。今年はＢ編成でも出たらしいで」
「ホント？」
「ああ。Ｂ編成も県大会まで来て、金賞取ったらしい。代表は逃したらしいけどな」
「そうなんだ……」
「お～い。開場したみたいだから入るよ～」
美里の声に、集まったメンバーは入り口のほうに向けて歩き始めるのだった。

ホールの中に入ると、コンクール独特の少し緊張した空気が流れていた。
会場の端々で楽器を出す学生の姿が見られる。
「今年も会場ここなんだね～」
「というより、中学校Ａ部門と高校Ａ部門は毎年ここなのよね。だからこのホール来るといっつもドキドキしちゃう」
由美子と沙希がそのような話をしているのを聞きながら、先斗はプログラムを広げる。
「七海高校は１１番目か……」
「曲は？」
その呟きを聞いて、唯がプログラムを覗き込んだ。
「ブライアンと、リバーダンスだな」
「リバーダンスか～。ソプラノソロあるほうかな？」
「この編曲はフリューゲルホルンのソロがあるほうだな」
庄吾が反対側から覗き込んで、そう返した。
「お前ら、自分の見ろよ……」

ブー！

「あ、開会式始まる！」

ブザーが鳴り、緞帳の前に役員が立ったので唯と庄吾は自分の席に着く。

その様子を見て、先斗は少しため息をついた。

開会式も終わり、緞帳が開いていくと、既に待機している演奏者たちが見えた。

その顔には少し緊張が浮かんでいる。

朝一演奏はその日の演奏の基準となるので、いい評価がつきづらい。そのプレッシャーもあるのだろう。

（そう言えば去年は一番手だったなぁ～。すっごく緊張したっけ……）

絵美は去年のことを思い出して少し微笑む。

七海高校は昨年、朝一演奏だったにも関わらず、県大会を抜けている。そのため、この団体にも希望はあるのだ。

（頑張れ……）

関係ない団体なのだが、絵美は思わず心の中で応援してしまっていた。

「プログラム1番。川崎地区代表。川崎市立戸倉高等学校吹奏楽部。課題曲2、自由曲、バレエ音楽「青銅の騎士」より……」

アナウンスが入り、一校目の演奏が始まった。

午前中の演奏が進んでいく。

そして、七海高校の順番がやってきた。

先斗と唯、ゆかりは昨年の秋に行われた定期演奏会に行ったため、

演奏を聞いたことがあったが、後の3人は直接聞くのは初めてだ。
「プログラム11番。川崎地区代表。七海市立七海高等学校吹奏楽部。課題曲1、自由曲、ビル・ウィーラン作曲、リバーダンス。指揮は東（あずま）　恭一（きょういち）です」
ステージのライトがともり、顧問であり、指揮者である恭一が指揮台に立った。
（後輩たち、どんな風に曲を仕上げてきたかな）
陽乃は期待に胸を躍らせつつ、演奏の開始を待つのだった。

207話　目標

「すごかったなぁ……」
ホテル。
先斗と庄吾はベッドに腰かけながら、コンクールを思い返していた。

七海高校の演奏は圧巻だった。
このような感覚は桜田東高校の演奏を聴いた時以来だ。
課題曲は桜田中央と同じだったが、縦もしっかりあっているし、音質も単一ではなく使い分けられていた。特筆するのは自由曲。フリューゲルホルンのソロは陽乃の後輩で、３年生の松尾（まつお）　勇（いさむ）が担当していたが、暖かい音色で会場をいきなりアイルランドの世界へと誘い込んでいた。
それに続くクラリネットアンサンブルも雰囲気を壊さないように音を奏でる。
暖かな雰囲気が続いていく。金管が和音を奏でた。
突然ファゴットのアルペジオが響いた。
そしてハイハットシンバルが響き、ソプラノサックスのソロが始まった。
担当するのはさゆりだ。後ろでミュートトランペットも鳴っている。
フルートのソリが入り、音楽が盛り上がっていく。
そこにテナードラムのソロ。
テンポが上がっていく。
ソプラノサックスのソロが再び入り、木管の連符が始まった。木管中心の音楽が続いていく。
パーカッションが先導し、さらにテンポが上がる。

連符にトランペットとユーフォニウムが加わり、音が厚くなる。
途中からトランペットは別の動きを始めるがその音が高い。
ＨｉＡ，ＨｉＣが連続して出てくるが、１ｓｔを吹いている勇と２年生の藤崎（ふじさき）　流（りゅう）はそれほど力まずに出しているように見える。
特に勇は課題曲でも１ｓｔを担当していたのにも関わらず、音に疲れが見えなかった。きっと上手くバランスをとっていたのだろう。
そして勢いを保ったまま、最後のＨｉＤで曲は終わりを迎えた。

「やっぱ、佐野さんの高校上手いんだなぁ……」
ベッドに倒れこんで、先斗はため息をついた。
七海高校は金賞を受賞し、東関東大会へ出場を決めたのだ。二年連続の快挙に、今年は全国大会に行ってくれるのではないかという期待も大きいらしい。
「編成的にもかなり整ってたな。人数多いから削っているってのもあるだろうけど」
「俺ら、来年勝ちぬけるのかなぁ……」
先斗はつい弱気になる。
「まあ、それは今から次第じゃないか？」
「ん？」
庄吾の言葉にベッドから起き上がる先斗。
「後１年、どれだけバンドを大きくできるか、技術上げられるか、それは分からないけどさ、これからの頑張り次第でどこまででもレベルアップは可能だと思う。その例が七海高校だろ？」
それを聞いて、先斗はハッとした。
七海高校吹奏楽部は４年前に創部された部活だ。一度廃部されているので、正しくは４年前に復活したと言える。
１年目は部員数も僅か１０名で、コンクールにも出なかったが、２年目には３５名まで増えて、地区大会で金賞を、３年目は６０名まで部員を増やし、東関東大会で金賞を獲得するまでになったのだ。

「俺らだって、最初は3人だったんだぜ？　それが１３人、１６人、１７人、４８人って増えてったんだ。負けてねえよ」
「……そうだな」
先斗は微笑み返すと、ぐっと伸びをしてベッドから起き上がる。
「まずはマーチングに向けて頑張るか！　よし、柔軟して寝よう」
「だな。明日は観光だよな」
「楽しみだ～！」
先斗と庄吾は笑いあうのだった。

「カンパ～イ！」
そのころ、唯と美香、茜、菘、さゆり、そして、アルトサックスの鈴木（すずき）麻綾（まあや）、テナーサックスの西嶋（にしじま）はるかは、さゆりの家に集まっていた。
今年も無事に県大会を突破できたので、お祝いをしているのだ。
「でも、県大会抜けれてよかった～！　課題曲始めるの去年より遅かったからちょっと不安だったんだ～」
「そうそう、東先生ブライアンとセリオーソでずっと迷ってたもんね」
「え、いつ決めたんですか？」
はるかとさゆりの話に唯が。
「最終的に決まったのは中間テストの前だから5月ね」
「あたしたちも自由曲はそれくらいでしたよ」
「そうなんだ」

「でも、よかった」
半時間くらい過ぎて、ふと麻綾が呟いた。
「え、なにが？」
さゆりがそれに応じる。

「サユリンよ」
「え、あたし？」
「うん。サユリンが去年辞めなくてよかったなってふと思ったの」
「……うん」

さゆりは去年、コンクールに出ていない。コンクールの出場定員が５０人なのに対し、当時の部員数は５６名。さゆりの担当しているアルトサックスは４人いたが、バランスの関係で３人に絞ることになったため、オーディションを行ったのだ。
「もちろん、今年もオーディションはやったけど、今年はＢ編成もあったからコンクール曲は練習してたでしょ？　でも去年は違ったじゃない。それに……２年生でオーディション落ちたのはさゆりだけだったし」
「そうだったね」
「……あたし」
そこで唯が急に口を開いた。
「唯？」
「あたし、さゆ姉からオーディション落ちたって電話で聞いたとき、ずっと不安だった。さゆ姉がこのまま部活辞めちゃったら、楽器やめちゃったらどうしようって思ってた」
「唯……」

唯がアルトサックスを始めたのは中学１年生からだ。
しかし、唯は中学校に入る直前までは吹奏楽部に入ることすら考えていなかった。
それは春休みのことだ。唯は神奈川のさゆりの家を訪れた。
「唯、いらっしゃい！」

「さゆりお姉ちゃん！」
この頃はまださゆりをさゆりお姉ちゃんと呼んでいた。
唯はさゆりの部屋に入り、クッションに腰掛けた。
「さゆりお姉ちゃんに会うのも久しぶりだね」
「そうね。でも唯も中学生になるのか～。唯も忙しくなってもっと来れなくなるかもね」
「え～。寂しいからそんなこと言わないでよ～！」
「ごめんごめん！」
「もう……。あれ、さゆりお姉ちゃん。あれ何？」
机の上にある、小さな箱を指差す唯。
「ああ、あれ？　リードっていうの。アルトサックスって楽器吹くのに使うのよ」
「アルトサックス？」
「うん。今あたしが部活で吹いている楽器よ。あ、そうだ。ちょっと待ってて！」
そう言って、さゆりは階下へと降りていく。
そして、戻ってきたときには何かのケースを抱えていた。
「なにこれ？」
「これがアルトサックスよ。あたしのじゃなくて学校のなんだけどね。ちょっと待ってね」
さゆりはケースから金色に輝く楽器を取り出す。そして、リードを湿らせてマウスピースに装着すると、ストラップをつけて楽器を構え、息を吹き込んだ。
「わぁ、すっご～い！」
楽器から流れる音に歓声を上げる唯。
唯の小学校には金管バンドしかないため、木管楽器の音を聞くのは新鮮だったのだ。
「あたしはまだまだヘタっぴなんだけどね。そうだ。唯も吹いてみる？」

「え、いいの？」
「うん！」

「あの時、さゆ姉にアルトサックス吹かせてもらわなかったらきっと吹奏楽部にも入ってなかった。それにさゆ姉はあたしの目標だったんだ。だから、さゆ姉が楽器やめなくてよかった……。さゆ姉」
「なに？」
さゆりは穏やかな声で返す。
「楽器、続けていてくれてありがとう。あたしももっと頑張るよ」
「……うん！」
２人は微笑みあった。

「ちょっと～。あたしたち蚊帳の外じゃないの」
そこではるかが２人にツッコミを入れる。
「ああ、ごめんごめん！」
「じゃあ、もう一回乾杯しようか」
はるかはそう言って、グラスに飲み物を注いだ。
「なにに対してよ」
麻綾が笑ってたずねる。
「う～ん……。２人の出会いに？」
「アハハ！　なにそれ！　恋人とかみたいじゃない」
全員がつい笑ってしまう。

しかし、美香はちょっと違った視点でそれを見ていた。
唯がアルトサックスを吹いていなかったら、桜田中央高校吹奏楽部は創部しなかったかもしれない。そして、自分がフルートを吹くこともなかっただろう。
そう考えると、美香はさゆりに感謝しきりだった。

「い～の！　はい、みんなグラス持つ！」
笑いつつも唯たちはグラスを掲げた。
「2人の出会いにカンパ～イ！」
「カンパ～イ！」
7人の掛け声が部屋中に響いた。

２０８話　昔の仲間

８月１３日（水）。
先斗たちが神奈川や東京で各々の時間を過ごしている頃、加奈子と匠は地元である愛媛県に里帰りしていた。
加奈子は母親の兄夫婦の家に、匠は祖父母の家に泊まっているが、二軒は近いので行き来することは可能だ。

匠は出身校である松方中学校を訪れていた。
「失礼します……」
職員室のドアを開けると、一昨年と変わらない場所に吹奏楽顧問の浅見（あさみ）　麻衣（まい）はいた。
「あら、黒田くんじゃない。どうしたの？」
「１年半ぶりなのにさらっと声かけてきますね……」
「あら、そういえばそうだったわね。それで、島根はどうなの？まだ吹奏楽続けて……るわよね。黒田くんだし」
「俺だからってどういうことです？　まあ続けてますけど」
「確か……学校できてまだ２年目よね？　吹奏楽部も人数少ないんじゃないかしら？」
「いえ、一年生がたくさん入ってくれたんで今は４８人で活動してます。コンクールも県大会で金賞いただいて、今はマーチングに向けての練習に移ってます」
「そう！　活発に活動しているのね」
「はい。松方も今年は１年生一杯入ったらしいですね」
「うん。今年は１７人。３年生も転校生が１人入ったから今は４３人で活動してるわ。楽器が足りないから大変」
そう言って笑う麻衣。
「バリチューはどうですか？」

「うん。ユーフォとチューバが2人ずつにコントラバスが1人いるわ」
「本当に多くなりましたね。俺らの時は持ち替えだらけだったのに」
「今も持ち替えは大変よ？　去年の三年生が引退してからはパーカッションが足りなかったから結構た管から人を動員してたし。まあ、黒田くんみたいに管楽器の持ち替えをすることはなくなったかな。ごめんね。あの頃は結構無茶させてたみたいで……」
「いえ。そのおかげで高校でも助かる場面がいくつかありましたから。トロンボーンの初心者の子を教えることもありましたし、アンサンブルは打楽器で出ました」
「そう。ならよかった。あ、今日は当時のメンバー大体来てるわよ」
「誰か来れなかったんですか？」
「うん。倉橋くんが高校の部活の合宿が今日までらしくて。でも夜の同窓会は出るって言ってたらしいわ」
今日は松方中学校の同窓会の日だ。本来の同窓会は夜の7時からなのだが、吹奏楽部だけで同窓会をしようということで、麻衣に頼んで音楽室を使わせてもらうことになった。
ちなみに加奈子も小学校の同窓会があり、隣のホテルで行われるらしい。
「ならよかった。じゃ、俺音楽室行きますね」
「うん。あたしも後で行くからね」
「はい」
匠は職員室を出て、階段を登っていく。
そして音楽室のドアを開けた。
「失礼しま～す」
「遅～い！」
入ってきた途端に　副部長でパーカッションだった中崎（なかさき）　愛子（あいこ）が声をかけてきた。
「悪い悪い。遠いから時間かかったんだよ」
「お前一昨日から実家泊まってただろ」

トランペット吹きで部長だった松原（まつばら）　祐二（ゆうじ）がそれにつっこみを入れた。
「うるせえよ」
笑いながら匠は祐二の肩を叩く。
「相変わらず2人仲いいわね。連絡取りあってたの？」
フルート吹きの斉藤（さいとう）　澪（みお）が微笑みながら2人を見つめる。
「ああ。ちょくちょくメールしてた。会うのは卒業以来だけど」
「そうなんだ～」
クラリネット担当だった、坂口（さかぐち）　尚美（なおみ）がふんわりとした感じでそう返した。
「でも、全員そろうの久々よね」
「いや、俊之来てないだろ」
ガラッ！
匠がそうつっこんだ時、音楽室のドアが開き、大柄の男子……パーカッションの倉橋（くらはし）　俊之（としゆき）が飛び込んできた。
「悪い！　合宿のバス降りてすぐに来たんだけど、自転車パンクしちゃって！」
「まあ、これで全員そろったからいいんじゃねえか？　お菓子用意したから食べようぜ」
バリトンサックスの筧（かけい）　耕一（こういち）（現在はコントラバスを弾いている）がそう言って、ポテトチップスの袋を開けた。
「よし、じゃあ、ジュースもついでついで」
クラリネット担当の小浦（こうら）　達也（たつや）がペットボトルを取り出す。
「お前ら準備早すぎ！」
「まあ、いいからいいから」
そう言ってポッキーの袋も開ける耕一。
「もう！　開けるペース早い！　まだ乾杯もしてないでしょ？」
テナーサックスの倉田（くらた）　彩音（あやね）が笑いながらコップを全員に回した。
「それじゃ、乾杯するか」
祐二はコップにファンタグレープを注ぐ。

「俊之、炭酸苦手だろ？　ほれ」
「ああ、サンキュ」
耕一が俊之にオレンジ色の飲み物が入ったコップを渡した。
「それじゃ、吹奏楽部第２４期生の再会を祝って～」
「カンパ～イ！」
祐二の音頭で９人はコップをぶつけて、そのままコップの中身を飲み干した。
しかし、次の瞬間、俊之がむせた。
「ゲホッ！　おい、耕一！　お前ファンタオレンジ注いだだろ！」
「あ、バレた？」
「当たり前だろ！」
「というか、見た時点で気付けよ」
相変わらずの風景。
耕一と達也と俊之のトリオは健在のようだ。
それを見て、匠は懐かしい気持ちになるのだった。

２０９話　それぞれの道

「しかし、斎木は今年も県１位抜けだったよな。すごいよ」
しばらくして、それぞれの近況を話しだす９人。

澪、祐二、愛子は斎木高校に進んだ。
斎木高校は吹奏楽で有名で、泰徳の母校である常套中学校とジョイントコンサートをしている。今年は３人ともコンクールメンバーに選ばれ、自由曲の『アルメニアンダンスＰａｒｔ１』で重要な動きを担当した。

「いや、今村も演奏すごかったぜ。達也、『役人』のソロ上手かったし」
「まさか俺に回ってくるとは思わなかったから手汗ヤバかったわ……」
達也は今村高校に進んだ。
今村高校は進学校でもあるため、部活は１、２年生主体で行われている。
今年は自由曲に『中国の不思議な役人』を選択し、県大会を突破。支部大会に向けて練習をしているそうだ。

「俊之はマーチングやってんだろ？　筋肉ついたよな～」
「ああ。パーカッションの運搬大変だし、筋トレも結構したからな」
俊之はマーチングで有名な川之内高校に進学。今日の合宿も来月のマーチングコンテストのための合宿だったらしい。
担当はマーチングマルチタム。２年前と違って体格もガッシリしてきた。

「匠はどうなんだ？」

「え？　ああ。今創部２年目で部員は５０人くらい。県大会はＡ編でダメ金だったけど、マーチングの練習も始めてる」
「お、お前もマーチングやるのか。どうせなら一緒にやりたかったなぁ～。でもなんで耕一吹奏楽続けなかったんだよ？」
俊之が耕一にツッコむ。
「仕方ねえだろ？　吹奏楽部ない高校行っちまったんだから」

耕一は、斎木高校を受けたが、見事に落ちた。
第２希望の高校は吹奏楽部がないため、ジャズバンド部に入部。現在はウッドベースを担当している。ただ時々はサックスも吹かせてもらうようだ。
「まあ、俺は別路線で楽しむさ。でもコンクールでコンバスやってなかったらウッドベース弾いてなかったから、可能性広げられたって点はよかったよ」
「あたしも経験は生かせているのよね。曲に乗りやすいって言うか……」
尚美も耕一と同じ高校に進学。チアリーディング部に所属して頑張っている。
「でもそう考えると彩音は意外だったわ。結構違う方面進んだもんね」
「表現するって面では一緒じゃないかな？　でも楽しくやってるよ」
彩音は近くの女子校に進学。演劇部に入部した。秋の文化祭では準主役級の役を演じるらしい。
「しっかし、それぞれの道に進んでんだな～」
祐二がしみじみと呟く。
匠はふと目を閉じた。

『そこのパッセージ、クラリネットバラバラ！　もう一回！』
『大編成出たいです』
『管楽コンテストっていうのあるんですけど、挑戦してみませんか

？』
『はい。じゃあ？に決定！』
『もう今日で部活終わりなんだね……』
様々な思い出が匠の脳裏を駆け廻る。
（もう２年前なんだな……）
１人だけ愛媛を離れていたからかもしれない。
匠には他の８人が遠くに見えた気がしていた。

「それじゃあ、また夜にね～！」
尚美が手を振って帰っていく。
９人は中学校を出て、一旦それぞれの家へと向かっていた。
だんだんとメンバーが減っていき、最後に残ったのは祐二と匠。
これは中学時代と一緒だ。
「お前とこうやって歩くのも久々だな」
「そうだな」
ゆっくりと歩き続ける２人。
「でも、お前も頑張ってるみたいでよかった」
「え？」
「いや、だって、２年目でコンクール大編成に出て、金賞取っちまったんだろ？　すごい快挙だと思うぞ」
「そうか？」
「そうだよ。それに俺らじゃできない経験やってるんだ。お前、やっぱすごいと思う」
「……」
Ｔ字路に差し掛かる。
「それじゃあ後で」
「ああ」
祐二は歩き出した。

（でもやっぱり、俺、お前と一緒に演奏してたかったよ……）
だんだん遠くなっていく祐二の背中を見ながら、匠はずっとその場でたたずんでいた。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n4859e/

SAKURA WINDS

2011年12月13日02時02分発行